特教研
Ｂ－３３２

聴覚障害教育における教科指導等の充実に資する教材活用に関する調査

（平成29年度）

調査報告書

令和2年1月

独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

平成 29 年度（経年調査）
聴覚障害教育における教科指導等の充実に資する教材活用に関する研究
調査報告書目次

はじめに
研究の目的、調査対象、調査方法、調査対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第１章　特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する現状調査（調査１）
調査の概要
調査目的　調査対象　調査時期　調査内容　・・・・　5

第１節　国語科
第１項　基本情報　・・・・　7
第２項　結果　・・・・　10
第３項　「国語科」のまとめと考察　・・・・　41
第２節　算数・数学科
第１項　基本情報　・・・・　43
第２項　結果　・・・・　46
第３項　「算数・数学科」のまとめと考察　・・・・　72
第３節－１　外国語活動
第１項　基本情報　・・・・　76
第２項　結果　・・・・　77
第３項　「外国語活動」のまとめと考察　・・・・　87
第３節－２　英語科
第１項　基本情報　・・・・　90
第２項　結果　・・・・　91
第３項　「英語科」のまとめと考察　・・・・・119
第４節　自立活動
第１項　基本情報　・・・・・122
第２項　結果　・・・・・125
第３項　「自立活動」のまとめと考察　・・・・・149

第２章　特別支援学校(聴覚障害)におけるコミュニケーションと言語に関する
　　実態調査（調査２）
調査の目的、調査対象、調査方法、調査時期　・・・・155
第１節　基本情報
第１項　調査票回答数及び回収率　・・・・156
第２項　在籍幼児児童生徒数　・・・・156
第３項　各部の学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳数
・・・・156
第４項　教職員数及び聴覚障害職員数　・・・・157
第５項　「基本情報」のまとめと考察　・・・・158
第２節　調査Ａ　コミュニケーションの実態に関する調査
第１項　コミュニケーション手段の選択や使用　・・・・159
第２項　コミュニケーション手段の選択する際、重視していること　・・・・159
第３項　コミュニケーション手段の選択に関わる課題　・・・・160
第４項　学部内でのコミュニケーション手段の使用状況　・・・・161
第５項　「コミュニケーション手段の選択・使用」のまとめと考察　・・・・161
第３節　調査Ｂ　言語及びコミュニケーションの評価に関する調査
第１項　コミュニケーションの状況を把握するための評価　・・・・163
第２項　コミュニケーションの評価の必要性や課題　・・・・166
第３項　「コミュニケーションの状況を把握するための評価」のまとめと考察
・・173
第４項　日本語の言語力の状況を把握するための評価　・・・・174
第５項　日本語の評価の必要性や課題　・・・・174
第６項　「日本語の言語力の状況を把握するための評価」のまとめと考察・・・183
第７項　手話の言語力の状況を把握するための評価　・・・・183
第８項　手話の評価の必要性や課題　・・・・184
第９項　「手話の言語力の状況を把握するための評価」のまとめと考察・・・・191
第１０項　教師の手話力向上のための評価の概要　・・・・191
第１１項「教師の手話力向上のための評価の概要」のまとめと考察　・・・・・195

おわりに　・・・・197

資料
資料１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用
に関する現状調査（調査１）についての 24 年度と 29 年度の比較
・・・・201
資料２：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと
言語に関する実態調査（調査２）についての 24 年度と
29 年度の比較　・・・・385
資料３：平成 29 年度調査票１並びに調査票２　・・・・445

はじめに

聴覚障害教育は、今日まで現場の実践を通して培ってきた言語指導法を生かし、子どもの保有する聴覚を活用しつつ視覚情報を適切に用いる等の配慮の下に、教育を実施してきた。

現在、特別支援学校（聴覚障害）では、教科指導において、どのように学力向上に結び付けていくかが課題視され、これに関する実践研究がなされている。教科指導をより効果的に進め、学力の向上を図るためには、教材の果たす役割が極めて重要である。

これまで聴覚障害教育においては明治時代より多くの教材が使用され、指導の充実のために努力を重ねてきた経緯がある。しかし、多様な教材をどのように活用するとよいかについては、引き続き、実践や研究を積み上げ教育効果を高めていく必要がある。

近年は、ICT の進歩に伴い、タブレット PC 等が授業において利用され始め、特別支援学校（聴覚障害）においても実践研究が行われている。また、特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションにおいて、手話がより活用されるようになってきた。

このような状況を背景として、特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部から高等部におけるコミュニケーションの実態や教材活用・さらには評価の現状を明らかにし、学部における教材の選択や活用の在り方等を検討するための資料を提供することが重要と考え、5 年ごとの経年調査研究を継続している。本報告書では平成 29 年度の調査結果を報告するが、資料として、平成 24 年度と 29 年度の調査結果を併記した表を掲載する。

本報告書を実践に生かし、より一層の教育の充実を図っていただくことを期待する。

１．研究の目的

以下の２つの調査研究を実施する。

調査１：特別支援学校（聴覚障害）に設置するの幼稚部における話し合い活動、小学部から高等部の教科指導等における教材活用の実態を調査し、学部や教科毎の現状と課題を明らかにする。

調査２：コミュニケーションの実態に関する調査（調査 A）

特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段の選択、教師と幼児児童生徒、幼児児童生徒間でのコミュニケーション手段の種類について、コミュニケーションに関する実態を知る。

言語及びコミュニケーションの評価法に関する調査（調査 B）

特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションの実態、日本語に関する評価法、手話に関する評価法の使用状況を知る。

２．調査対象

調査１：全国の特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部から高等部に所属する教職経験年数５年以上の教員

調査２：全国の特別支援学校（聴覚障害）の学部主事もしくは主任

３．調査方法

郵送によるアンケート調査（悉皆調査）

調査１と調査２は同封し、送付した。

４．研究体制

平成 29 年度

原田公人（研究代表）、定岡孝治、山本晃、新谷洋介（国立特別支援教育総合研究所）

平成 30 年度～令和元年度

山本晃（研究代表）、横倉久、宇野宏之祐（国立特別支援教育総合研究所）

第１章　特別支援学校（聴覚障害）における
コミュニケーション手段と教材活用に関する現状調査
（調査 1）

第１章　特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する現状調査（調査１）

調査の概要

第１項　調査目的

特別支援学校（聴覚障害）に設置するの幼稚部における話し合い活動、小学部から高等部の教科指導等における教材活用の実態を調査し、学部や教科毎の現状と課題を明らかにする。

第２項　調査対象、調査時期

調査対象：平成 29 年度全国特別支援学校実態調査:特別支援学校（聴覚障害）の部（全国特別支援学校長会）に掲載されている全国の特別支援学校（聴覚障害）の本校及び分校の計 95 校の幼稚部から高等部に所属する教職経験年数５年以上の教員

記述内容は、平成 29 年 5 月 1 日現在の各学校・学部の実態とした。

調査時期：平成 29 年 8 月～平成 29 年 10 月

（調査１と調査２は同封した。）

第３項　調査内容

調査は、幼稚部の話し合い活動と小学部・中学部・高等部本科の教科指導等（国語科、算数・数学科、外国語活動・英語科、自立活動）に関する質問用紙から構成した。

調査対象の教科等の選定に当たっては、特別支援学校(聴覚障害)において、教育現場の課題意識が高い教科･領域であると捉えられていることを重視した。

「国語科」は、言語そのものを広範に取り扱う教科であり、特別支援学校(聴覚障害)においては、課題意識が最も高いと判断した。

「算数・数学科」は、文章題を読み解く際に、言語理解や論理的思考を要する教科であり、これに関する教材について、研究者や現場の教師が議論を積み重ねてきた経過があることから選定した。

「外国語活動・英語科」は、ともに言語を扱う教科･領域であるが、特に、外国語活動については、小学部でも本格実施になり、教材活用についての情報が多くないため、喫緊の課題として現段階での実態を明らかにする必要があることから選定した。なお、「英語科」については、「外国語活動」で使用されている教材との差異を検討する必要性があると判断し、選定した。

「自立活動」は、「国語科」と同様、全学部を通して重要視されてきた経緯があり、コミュニケーション手段との関連からも実態を把握する必要があると判断し、選定した。

「幼稚部の話し合い活動」は、幼稚部教育において、広く定着している活動であり、教材について総合的に扱われている可能性が高いと考え、選定した。

質問内容は、記入者の教職経験年数や所属等の基本情報、教育課程、指導人数、担当する教科等で用いるコミュニケーション手段、教科等で活用する教材や機器の有無・活用頻度・加工の状況、自作教材の活用状況等とした。

また、小学部以上については、学習評価で用いる教材と活用状況、電子黒板の有無と活用状

況等に関する質問項目を加えた。なお、本調査では、教科等で用いるコミュニケーション手段について、実際の授業場面を想定し、下記の説明を加えた。

聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書
や絵を描くのも含む。）
キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの

※ 「手話付きスピーチ」については、発話を主とすることから、補聴器や人工内耳による聴覚活用も含まれると考える。

第 4 項　回答数

幼稚部は各校 1 部、小学部以上は教科等毎に各 2 部送付した。回答数については、教科等別に記している。また、回答数のうち、経験年数や教育課程等の基礎情報に関する未記入の物を除いた調査票を調査の対象とした。

95 校から回答を得、回収率は 100%であった。

第 1 節　国語科

本節では、小学部から高等部までの各学部の国語科指導担当教員 2 名を対象として、教職経験、国語科に関する教材の有無、活用頻度、活用状況、自作教材、授業で活用する機器、学習評価で用いる教材の活用頻度と自作教材、あると良い教材等について尋ね、得られた結果から現状と課題を考察した。

第 1 項　基本情報

1-1　回答数

表 1-1 に、本調査に対して調査対象とした有効回答数を学部毎に示した。

表 1-1　回答数

	小学部	中学部	高等部
有効回答数	155	120	99

※　有効回答…総回答数から教職、聾学校、学部経験年数が未記入のもの、複式学級担当、担当教育課程未記入のもの等を省いた。

1-2　教職・特別支援学校（聴覚障害）・学部経験年数

【小学部】

表 1-2-1 に、記入者の教職経験年数、特別支援学校（聴覚障害）経験年数、小学部経験年数を示した。なお、全ての経験年数に、これまで勤務した学校での経験年数を含むものとしている。本調査の記入者のうち、最も多い割合を占めた教職年数は、21 年以上で 36.2%を占めた。

一方、最も多い割合を占めた特別支援学校（聴覚障害）経験年数は、0～3 年未満で 24.8%であった。小学部経験年数も 0～3 年未満が最も多く 30.6%であった。教職経験年数が長いが、特別支援学校（聴覚障害）や小学部の経験年数が短い状況が示された。

表 1-2-1　教職・特別支援学校（聴覚障害）・小学部経験年数　N=155（数値は%）

経験年数	0～3 未満	3～6 未満	6～9 未満	9～12 未満	12～15 未満	15～18 未満	18～21 未満	21 以上
教職	13.4	9.4	8.7	6.7	10.1	7.4	8.1	36.2
聾学校	24.8	20.1	10.1	14.8	11.4	6.0	3.4	9.4
小学部	30.6	19.7	15.0	10.9	10.9	3.4	0.7	8.8

【中学部】

表 1-2-2 に、記入者の教職経験年数、特別支援学校（聴覚障害）経験年数、中学部経験年数を示した。最も多い割合を占めた教職年数は、21 年以上で 43.6%を占めた。一方、最も多い割合を占めた特別支援学校（聴覚障害）経験年数は、0～3 年未満で 30.8%であった。中学部経験年数も 0～3 年未満が最も多く 39.2%であった。小学部同様、教職経験年数が長いが、聾学校や中学部の経験年数が短い状況が示された。

表 1-2-2　教職・特別支援学校（聴覚障害）・中学部経験年数　N=120（数値は%）

経験年数	0～3未満	3～6未満	6～9未満	9～12未満	12～15未満	15～18未満	18～21未満	21以上
教職	8.5	6.8	10.3	6.0	7.7	7.7	9.4	43.6
聾学校	30.8	22.2	10.3	7.7	9.4	3.4	6.8	9.4
中学部	39.2	24.2	18.3	6.7	4.2	2.5	3.3	1.7

【高等部】

表 1-2-3 に、記入者の教職経験年数、特別支援学校（聴覚障害）経験年数、高等部経験年数を示した。最も多い割合を占めた教職年数は、21 年以上で 53. 4%を占めた。一方、最も多い割合を占めた聾学校経験年数は、0～3 年未満で 28.2%であった。高等部経験年数も 0～3 年未満が最も多く 29.3%であった。小学部、中学部同様、教職経験年数が長いが、聾学校や高等部の経験年数が短い状況が示された。

表 1-2-3　教職・特別支援学校（聴覚障害）・高等部経験年数　N=99（数値は%）

経験年数	0～3未満	3～6未満	6～9未満	9～12未満	12～15未満	15～18未満	18～21未満	21以上
教職	7.8	12.6	3.9	2.9	7.8	4.9	6.8	53.4
聾学校	28.2	24.3	8.7	6.8	11.7	3.9	4.9	11.7
高等部	29.3	21.2	14.1	13.1	9.1	5.1	4.0	4.0

1-3　記入者の担当（所属）

表 1-3 に、記入者の担当（所属）を学部別に示した。いずれの学部も学級担任の割合が最も多く、小学部は 88.9%、中学部は 52.2%、高等部は 57.3%であった。

表 1-3　担当（所属）　小学部 N＝155、中学部 N=120、高等部 N=99（数値は%）

	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
小学部	88.9	6.3	0.0	4.9	0.0
中学部	52.2	21.2	5.3	13.3	8.0
高等部	57.3	20.8	10.4	10.4	1.0

※　その他の回答…他学部所属

1-4　記入者が主に担当する学年

表 1-4 に、記入者が国語科の指導で主に担当する学年を学部別に示した。記入者が学級担任の場合は受け持ち学級の学年を、学級担任以外は国語科の指導で一番多い指導人数の学年を回答するよう求めた。

表 1-4　担当学年（いつも授業をしている学年）

小学部 N＝155、中学部 N=120、高等部 N=99（数値は%）

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	重複
小学部	22.6	20.0	17.4	12.3	10.3	8.4	9.7
中学部	45.0	50.8	54.2	-	-	-	29.2
高等部	48.5	50.5	45.5	-	-	-	24.2

1-5　記入者が担当する学習グループ（学級）の児童生徒数

表 1-5 に、記入者が国語科の指導で担当する学習グループ（学級）の児童生徒数を示した。小学部では、1 名が最も多く 32.9%であった。中学部では、3 名が最も多く 22.3%であった。高等部では、3 名が最も多く 24.2%であった。

表 1-5　学習グループ（学級）の児童生徒数

小学部 N＝140、中学部 N=112、高等部 N=99（数値は%）

	1 名	2 名	3 名	4 名	5 名	6 名	7 名	8 名以上
小学部	32.9	22.9	11.4	15.0	8.6	7.9	1.4	0.0
中学部	13.4	19.6	22.3	17.9	13.4	9.8	2.7	0.9
高等部	12.1	14.1	24.2	15.2	23.2	5.1	3.0	1.0

1-6　国語科の教育課程

表 1-6 に、記入者が担当する学習グループ（学級）の国語科の教育課程を示した。いずれの学部も準ずる教育課程が最も多く、小学部で 79.2%、中学部で 77.2%、高等部で 85.0%であった。

表 1-6　国語科の教育課程　小学部 N＝155、中学部 N=120、高等部 N=99（数値は%）

	準ずる	下学年適用	知的代替	自立主
小学部	79.2	13.0	6.5	1.3
中学部	77.2	14.2	8.7	-
高等部	85.0	3.7	11.2	-

第２項　結果

(1) 国語科で使用しているコミュニケーション手段

表 1-7 に、記入者が授業の際に使用しているコミュニケーション手段（複数回答）を示した。最も多い割合で使用されているのは、手話付きスピーチで小学部で 87.1%、中学部で 87.5%、高等部で 94.9%であった。

また、使用割合の傾向を見ると、学部が上がるにつれ使用割合が増えるのは、手話付きスピーチであった。学部が上がるにつれ使用割合が減るのはキュードスピーチであった。その他のコミュニケーション手段として挙げられたものは、音韻サイン、口話サイン、独自のサイン、身振り、絵カード、写真、実物提示、ＰＣ、ＴＶなど情報機器、絵を描いて伝えるであった。

表 1-7　使用コミュニケーション手段

小学部 N＝155、中学部 N=120、高等部 N=99（複数回答・数値は%）

	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
小学部	60.0	87.1	8.4	38.7	10.3	70.3	22.6
中学部	55.0	87.5	14.2	50.0	4.2	67.5	10.0
高等部	60.6	94.9	6.1	45.5	0.0	73.7	5.1

(2) 教科書等の教材の活用

1)教科書等の教材の有無と活用状況（活用頻度、加工）

教科書等の教材の有無と活用について、25 の教材を示し、それぞれの教材に対して、「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを１つ選択することを求めた。

なお、表中、各項目についての有効回答を示したため、回答総数（N）が一定ではない。

【小学部】

表 1-8-1 に、小学部国語科の授業で活用する教科書等で、「よく使う」と「時々使う」教材とその教材の有無を示した。全体の 70%以上が「よく使う」「時々使う」と回答した教材は、検定教科書、“市販のワークブック、漢字ドリル”、日本語指導用教材、“国語辞典、漢和辞典”、手話辞典、ことば絵じてん、図鑑、絵本、写真、動画、カレンダー、絵日記、インターネット上の Web 情報であった。

また、教師が「手を加えて活用」したり「自作して活用」したりしている割合が全体の 20%以上のものは、検定教科書、聾学校用教科書、“ 市販のワークブック、漢字ドリル”、日本語指導用教材、写真、動画、カレンダー、絵日記、新聞、“ 広告・チラシ・ポスター”、インターネット上の Web 情報であった。

また、「よく使う」「時々使う」回答数が、「学校にある」回答数を上回った教材は、“市販のワークブック、漢字ドリル”、日本語指導用教材、写真、動画、カレンダー、絵日記であった。活用すると多く回答された市販のワークブックや日本語指導用教材、写真、動画、カレンダーは、学校にない場合、担当者個人の物で対応している現状が考えられる。

表 1-8-1　教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）　（数値は%）

	教材の有無				活用の頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	な い	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 検定教科書	142	100.0	0.0	0.0	148	89.2	4.7	6.1	146	69.2	24.7	1.4	4.8
2 聾学校用教科書	142	89.4	3.5	7.0	140	12.1	48.6	39.3	126	34.1	29.4	0.8	35.7
3 文部科学省著作本	139	66.9	4.3	28.8	132	3.8	6.1	90.2	114	5.3	3.5	1.8	89.5
4 附則の９条本	131	48.9	12.2	38.9	118	2.5	10.2	87.3	108	5.6	7.4	0.9	86.1
5 電子教科書	138	29.7	0.0	70.3	113	10.6	13.3	76.1	110	20.9	2.7	0.0	76.4
6 市販のワークブック、漢字ドリル	140	75.0	25.0	0.0	144	84.7	13.9	1.4	141	75.9	22.0	0.7	1.4
7 日本語指導用教材（教科書、問題集）	134	48.5	29.1	22.4	128	23.4	50.8	25.8	123	35.0	36.6	3.3	25.2
8 国語辞典、漢和辞典(紙媒体)	139	95.7	4.3	0.0	146	39.7	42.5	17.8	137	77.4	5.1	0.7	16.8
9 電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	134	6.7	26.1	67.2	120	1.7	10.8	87.5	108	12.0	1.9	0.9	85.2
10 手話辞典（紙媒体、電子媒体）	139	89.9	8.6	1.4	145	33.1	46.2	20.7	132	68.2	12.1	0.8	18.9
11 ことば絵じてん	141	91.5	7.1	1.4	145	44.8	40.7	14.5	135	80.0	7.4	0.7	11.9
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	138	99.3	0.7	0.0	145	36.6	55.2	8.3	141	83.7	9.2	0.7	6.4
13 絵本（行事、物語、説明等）	141	97.2	2.8	0.0	146	32.2	61.6	6.2	142	80.3	14.1	0.0	5.6
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	138	91.3	1.4	7.2	144	7.6	38.9	53.5	128	46.9	3.9	0.8	48.4
15 写真（人物、場所、活動場面等）	141	75.2	22.0	2.8	145	62.8	32.4	4.8	142	43.0	36.6	16.2	4.2
16 動画(ビデオカメラで撮影したもの)	140	67.1	17.9	15.0	141	17.7	52.5	29.8	134	39.6	23.9	10.4	26.1
17 カレンダー	140	81.4	17.9	0.7	143	58.0	37.1	4.9	137	59.1	32.1	5.1	3.6
18 絵日記(スケッチブックの記録等も)	139	60.4	37.4	2.2	142	68.3	24.6	7.0	137	56.9	25.5	10.2	7.3
19 新聞	142	90.1	4.9	4.9	142	14.8	52.1	33.1	136	34.6	33.1	1.5	30.9
20 広告、チラシ、ポスター	138	85.5	10.9	3.6	142	4.2	44.4	51.4	130	32.3	19.2	1.5	46.9
21 雑誌(幼児･児童向け、その他)	134	41.0	15.7	43.3	130	2.3	26.2	71.5	121	21.5	8.3	0.8	69.4
22 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	137	59.9	8.8	31.4	131	3.1	34.4	62.6	123	34.1	4.9	0.8	60.2
23 手話･字幕付きＤＶＤ	138	56.5	8.0	35.5	130	0.0	26.9	73.1	123	28.5	0.8	1.6	69.1
24 インターネット上のWeb 情報	137	85.4	5.8	8.8	143	28.0	50.3	21.7	136	40.4	36.8	2.2	20.6
25 タブレット PC におけるアプリケーション	138	76.1	7.2	16.7	141	7.8	33.3	58.9	128	35.2	8.6	0.8	55.5

【中学部】

表 1-8-2 に、中学部国語科の授業で活用する教科書等で、「よく使う」と「時々使う」教材とその有無を示した。全体の 70%以上が「よく使う」「時々使う」と回答した教材は、検定教科書、”“市販のワークブック、漢字ドリル”、“国語辞典、漢和辞典”、手話辞典、写真、新聞、インターネット上の Web 情報であった。

表 1-8-2　教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）　（数値は%）

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				
		N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1	検定教科書	114	97.4	1.8	0.9	117	88.9	4.3	6.8	112	67.9	26.8	0.0	5.4
2	聾学校用教科書	111	84.7	6.3	9.0	110	3.6	38.2	58.2	104	20.2	22.1	1.9	55.8
3	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆）	105	70.5	2.9	26.7	103	3.9	25.2	70.9	100	9.0	20.0	1.0	70.0
4	附則の９条本（旧１０７条本）	100	44.0	3.0	53.0	93	2.2	19.4	78.5	90	10.0	8.9	2.2	78.9
5	電子教科書（検定教科書対応）	104	25.0	0.0	75.0	92	9.8	9.8	80.4	90	17.8	2.2	0.0	80.0
6	市販のワークブック、漢字ドリル	111	70.3	27.9	1.8	114	65.8	31.6	2.6	112	65.2	30.4	2.7	1.8
7	日本語指導用教材（教科書、問題集）	106	36.8	23.6	39.6	101	9.9	34.7	55.4	96	25.0	19.8	3.1	52.1
8	国語辞典、漢和辞典（紙媒体）	112	95.5	4.5	0.0	116	53.4	41.4	5.2	115	93.0	2.6	0.0	4.3
9	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	110	3.6	33.6	62.7	102	11.8	19.6	68.6	98	31.6	1.0	0.0	67.3
10	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	113	90.3	7.1	2.7	113	25.7	47.8	26.5	109	67.9	6.4	0.9	24.8
11	ことば絵じてん	111	86.5	4.5	9.0	108	6.5	33.3	60.2	101	32.7	9.9	0.0	57.4
12	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	110	96.4	0.9	2.7	111	4.5	44.1	51.4	105	46.7	6.7	0.0	46.7
13	絵本（行事、物語、説明等）	111	96.4	0.9	2.7	112	3.6	41.1	55.4	103	37.9	8.7	1.0	52.4
14	紙芝居（行事、物語、説明等）	109	80.7	0.9	18.3	110	1.8	11.8	86.4	101	12.9	3.0	0.0	84.2
15	写真（人物、場所、活動場面等）	109	73.4	11.0	15.6	109	25.7	49.5	24.8	104	26.0	38.5	9.6	26.0
16	動画（ビデオカメラで撮影したもの）	109	67.0	9.2	23.9	106	9.4	44.3	46.2	103	24.3	23.3	6.8	45.6
17	カレンダー	113	95.6	3.5	0.9	110	20.0	32.7	47.3	104	47.1	8.7	0.0	44.2
18	日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	109	54.1	0.9	45.0	103	2.9	9.7	87.4	97	10.3	4.1	2.1	83.5
19	新聞	111	88.3	5.4	6.3	112	17.0	55.4	27.7	110	28.2	43.6	0.9	27.3
20	広告、チラシ、ポスター	111	75.7	11.7	12.6	112	1.8	33.9	64.3	104	17.3	18.3	1.9	62.5
21	雑誌（幼児・児童向け、その他）	107	51.4	15.9	32.7	105	1.9	25.7	72.4	100	15.0	15.0	1.0	69.0
22	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	109	67.9	10.1	22.0	110	2.7	38.2	59.1	107	30.8	7.5	1.9	59.8
23	手話・字幕付きＤＶＤ	106	66.0	6.6	27.4	108	1.9	33.3	64.8	106	29.2	4.7	0.9	65.1
24	インターネット上のWeb情報	111	85.6	7.2	7.2	112	21.4	62.5	16.1	107	39.3	43.9	0.9	15.9
25	タブレットPCにおけるｱﾌﾟﾘｹｰｼｮﾝ	108	78.7	5.6	15.7	109	9.2	34.9	56.0	103	38.8	5.8	1.0	54.4

教師が「手を加えて活用」したり「自作して活用」したりしている割合が全体の 20%以上のものは、検定教科書、聾学校用教科書、文部科学省著作教科書、“市販のワークブック、漢字ドリル”、日本語指導用教材、写真、動画、新聞、“広告、チラシ、ポスター”、インターネット上の Web 情報であった。

また、「よく使う」「時々使う」回答数が、「学校にある」回答数を上回った教材は、”市販の

ワークブック、漢字ドリル”、日本語指導用教材、写真であった。いずれの教材も「活用する」と多く回答された教材であり、学校にない場合、担当者個人の物で対応している現状が考えられる。

【高等部】

表 1-8-3 に、高等部国語科の授業で活用する教科書等で、「よく使う」と「時々使う」教材とその有無を示した。全体の 70%以上が「よく使う」「時々使う」と回答した教材は、検定教科書、“市販のワークブック、漢字ドリル”、“国語辞典、漢和辞典”、手話辞典、写真、新聞、インターネット上の Web 情報であった。

表 1-8-3　教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）　（数値は%）

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				
		N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1	検定教科書	99	97.0	0.0	3.0	101	92.1	3.0	5.0	97	75.3	18.6	3.1	3.1
2	聾学校用教科書（中学部言語、小学部用）	84	65.5	0.0	34.5	78	0.0	16.7	83.3	69	8.7	10.1	0.0	81.2
3	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆国語☆☆☆☆）	87	65.5	2.3	32.2	75	1.3	9.3	89.3	66	4.5	7.6	0.0	87.9
4	附則の９条本（旧１０７条本）	83	53.0	4.8	42.2	77	3.9	15.6	80.5	68	1.5	14.7	2.9	80.9
5	電子教科書（検定教科書対応）	90	30.0	0.0	70.0	67	6.0	16.4	77.6	64	18.8	4.7	0.0	76.6
6	市販のワークブック、漢字ドリル	96	76.0	21.9	2.1	101	41.6	52.5	5.9	99	59.6	33.3	4.0	3.0
7	日本語指導用教材（教科書、問題集）	90	48.9	15.6	35.6	82	12.2	43.9	43.9	76	30.3	25.0	1.3	43.4
8	国語辞典、漢和辞典（紙媒体）	97	90.7	7.2	2.1	100	57.0	39.0	4.0	95	93.7	2.1	0.0	4.2
9	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	95	5.3	55.8	38.9	83	32.5	32.5	34.9	80	66.3	1.3	0.0	32.5
10	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	97	84.5	11.3	4.1	99	25.3	49.5	25.3	89	83.1	0.0	0.0	16.9
11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	97	88.7	8.2	3.1	97	1.0	59.8	39.2	83	59.0	9.6	0.0	31.3
12	写真（人物、場所、活動場面等）	89	64.0	22.5	13.5	89	13.5	65.2	21.3	79	43.0	30.4	8.9	17.7
13	動画（ビデオカメラで撮影したもの）	90	50.0	20.0	30.0	86	1.2	44.2	54.7	69	26.1	18.8	7.2	47.8
14	カレンダー	96	87.5	9.4	3.1	96	8.3	49.0	42.7	82	58.5	9.8	0.0	31.7
15	掛け図	92	44.6	0.0	55.4	82	0.0	13.4	86.6	66	13.6	3.0	0.0	83.3
16	新聞	99	91.9	4.0	4.0	99	22.2	59.6	18.2	89	39.3	46.1	1.1	13.5
17	広告、チラシ、ポスター	93	80.6	5.4	14.0	91	2.2	35.2	62.6	78	24.4	17.9	0.0	57.7
18	雑誌	91	52.7	14.3	33.0	85	0.0	37.6	62.4	70	22.9	17.1	1.4	58.6
19	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	90	58.9	18.9	22.2	87	0.0	44.8	55.2	73	35.6	13.7	0.0	50.7
20	手話・字幕付きＤＶＤ	90	66.7	4.4	28.9	87	1.1	40.2	58.6	72	38.9	9.7	0.0	51.4
21	インターネット上の Web 情報	97	82.5	11.3	6.2	100	22.0	65.0	13.0	92	40.2	44.6	3.3	12.0
22	タブレット PC におけるアプリケーション	91	72.5	9.9	17.6	93	10.8	36.6	52.7	76	44.7	6.6	0.0	48.7

教師が「手を加えて活用」したり「自作して活用」したりしている割合が全体の 20%以上のものは、検定教科書、“市販のワークブック、漢字ドリル”、日本語指導用教材、写真、動画、新聞、インターネット上の Web 情報であった。

また、「よく使う」「時々使う」回答数が、「学校にある」回答数を上回った教材は、“市販のワークブック、漢字ドリル”、 日本語指導用教材、“国語辞典、漢和辞典”、電子辞書、写真、

インターネット上の Web 情報であった。いずれの教材も「活用する」と多く回答された教材であり、学校にない場合、担当者個人の物で対応している現状が考えられる。特に、電子辞書については、中学部、高等部での保有が 6%に満たず、「よく使う」「時々使う」の回答数と大きな開きが見られた。

2)その他の教材や自作教材

その他の教材や自作教材について、記述による回答を求めた。記述内容は、「教材名（品名）」、「場面や活用方法」とした。回答の内容に基づき、教材の使途別に分類し、学部毎に表に示した。教材名（品名）と用例（内容、活用場面、活用方法）等を表にした。

【小学部】

61 の回答が得られた。表 1-8-4 に、教材の使途、教材名（品名）、用例等を示した。

表 1-8-4　小学部国語科で活用する教科書等の自作教材等　　N=61　(　)内は回答数

A　使途		B　教材名（品名）	C　用例等
教科書の内容に関する教材(12)		手話 DVD	・朝の会時に、手話で歌を歌っている。
		本文や挿絵の拡大版	・教科書対応掛図で挿絵を大きく見せている。 ・黒板に貼り、音読したり内容読解に使用。 ・児童がわからない言葉や言い回し等を拡大コピーに書きこみながら確認する。また内容の読みとり、読解にも活用する。（3） ・電子教科書でそのまま出すと読みとりがむずかしいため一文ずつ分かち書きでディスプレイに出す。（2）
		パワーポイントで作成した教材	・教科書からダウンロードし、絵や写真をつけ加え、内容を分かりやすくして提示する。
		リライト教材文	・漢字に変換した方が読みやすい子のために。 ・音読練習のために。
		電子絵本	・絵本を取り込んだものにリライトした文をつける。
教科書の内容理解を促すための教材（3）	文章の内容理解	紙芝居	・教科書の物語の単元の第 1 時に、挿絵を厚紙にコピーした紙芝居の読み聞かせを行う。（個別の授業のときのみ）
		ペープサート	・文章の登場人物の関係や心情をつかむために、主人公など、直接手にして動かしながら心情や物語の展開をつかんでいる。
		物語の絵本や図鑑	・挿絵をカラーコピーして提示する。

語彙／漢字の理解と定着	言葉プリント	・難語句の意味を確認する。 ・イラストも入れ、視覚的にわかりやすくしている。。 ・単元ごとにねらいに対応したプリントを作っている。 ・単元ごとに覚えてほしい言葉や内容の理解度を測るための語句の抜き出しなど。 ・ことばの視写 ・イラストの下に単語を答えるようにしたプリント。実態に合わせて、枠の数をかえたり、イラストを変える。 ・テストの代わりに使用。意味調べ。
	漢字プリント	・漢字練習や読み取りに使う。 ・画数、読み方、その漢字を使った言葉や文を書かせている。
	漢字の学習	・身近な漢字について、１画目は赤、２画目は青、３画目は緑、４画目は黄と決めて色で分けている。その漢字のイメージのイラストも入れてイメージしやすくしている。（4
	言葉カード	・画用紙の表に言葉、裏にその意味を書いて掲示し、毎時間確認する。その場合、意味を見せて言葉を言わせることから始め、慣れてきたら言葉を見せて、意味を言わせる。 ・その時間に理解させたい言葉や新出語彙などをその場で書く。児童によってイラストをつけたり、口形図や手話の絵を加える。
	難語句教材	・定着するようにする。
	言葉絵カード	・言葉の意味や状況を確認する場面で使う。言葉の意味にあたる絵や写真を、言葉と一緒に載せたり、言葉を使った文を載せたりする。
	単語カード（絵カード）	・表にイラスト、裏に言葉や意味を載せたもの。 ・難語句の意味や絵・手話などが記入してある。難語句の学習や教材文の学習の中で活用する。 ・イメージ化を図るため（ことばの定着のため）
	漢字カード	・既習の漢字の読みを確認する場面で使う。授業の導入で 10 問程度実施する。漢字（表）を見せ、読み（裏）を確認する。

	音読カード	・家庭での音読の励みと、取り組みを自己評価できるために活用している。
	言葉の練習帳 （スケッチブック使用）	・教科書に出てくる言葉の読みや意味、使い方を書き、それをページの一部をカットして、開くと答えが書いてあるクイズ形式のもの。
	動詞の活用表 （各学年学部で作成）	・教科書に出てくる動詞のリストをもとに、活用について学習させ、チェックしている。
読解	ワークシート	・読み取ったことを簡単に分かりやすくまとめる。 ・教科書の内容に沿って、自作プリントを作成し、まとめとして使う。 ・教材文をコピーして、さらに、問題や吹き出し等を書き加えて、ワークにしたもの。教材とノートを一体化したもの。 ・時系列に５Ｗ１Ｈを質問して、あらすじを理解させたりするのに利用している。 ・毎時間プリントを本人の実態やねらいに合うように作成して使用。 ・課題の解き方や考え方を理解させるために構造化したもの。さらに、児童が繰り返し練習できるように自作したドリル。 ・授業や宿題で活用し、ことばの定着を図っている。
発展や補助のための教材（2）	作文集、読書感想文集、新聞や感想文の書き方の本	・作文や読書感想文の「構成」「書き出しの工夫」等、モデルになるような作品を取り上げ、良さを見つけたり、真似して書いたりする。
	言葉の一覧表（接続詞、気持ちを表すことば等）	・作文等を書く時に、児童が参考にしながら書く。普段は教室に掲示している。
国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材(13)	パワーポイント	・何かの手順や予定については写真、動画を用いて説明をしている。
	作文メモノート	・初め、中、終わりを意識させる。
	ことばノート（言葉集めノート）	・学習（生活）の中で出会ったことばを書き残すノート。（2）
	物語文	・文章理解
	絵日記・日記	・日記の構成を意識できるようなはじめ、中、終わりに分けた用紙。
	手作りカルタ	・下位→上位の単語の把握や語彙を広げ、慣用句や物語のあらすじをつかませるために、自作したもの。

お絵かきトレーニング	・文章を読んでその内容を絵にしたり、その反対に絵を見て文章を作らせたりしている。
漫画本（コミック）	・ふき出しの中（セリフ）を想像して書く。
自作の写真・ことばカード	・語彙の学習に活用している。いろいろな店の外観写真と店名とをカードにして、店名は「食品店」「スーパー」などで色別にして活用している。
文法学習教材	・動作語やそれを使った文作りの課題として使用。
動詞活用表	・言葉の活用などを活用表及びフラッシュカード等で確認する。
教科やドリルの日文語の文（章）に手話のイラストをつけたプリント	・入学後、平仮名を習得した児童の読みの学習・文意の理解のために使用している。手話も家族内限定のものであるため、一般的な手話の習得も兼ねている。

その他の教材や自作教材に関する記述から、国語科指導における教材の使途が４つ分類された。まず、「教科書の内容に関する教材」である。これには、教科書の本文や挿絵そのものを拡大したり、パワーポイントで提示したりする教材など、教科書本文の内容には手を加え、提示の仕方を変える教材と、手話 DVD やリライト文など本文を変換し、内容理解を促す教材とが見られた。

次に、「教科書の内容理解を促すための教材」については、一番多くの回答を得た。内容理解の視点として、「文章の内容理解」「語彙や漢字の理解と定着」「読解」が挙げられた。文章の内容理解については、紙芝居、ペープサート、物語の絵本や図鑑など、視覚的な手掛かりを通して、文章の意味理解を促す意図が見られた。語彙や漢字の理解と定着については、言葉プリント、漢字プリント、漢字の学習、言葉カード、難語句教材、言葉絵カード、単語カード等が見られた。読解については、授業の流れに沿ったワークシートを自作し活用する記述が多く見られた。

次に、「発展や補助のための教材」として、作文集、読書感想文集、新聞や感想文の書き方の本を活用している記述が見られた。また、言葉の一覧表を教室に掲示し、作文等を書く際の手掛かりとしている記述も見られた。そして、「国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材」については、パワーポイント、作文メモノート、ことばノート（言葉集めノート）、物語文、絵日記・日記、手作りカルタ、お絵かきトレーニング、漫画本（コミック）、自作の写真・ことばカード、文法学習教材、動詞活用表、教科やドリルの日文語の文（章）に手話のイラストをつけたプリントという記述が見られた。

【中学部】

62 の回答が得られた。表 1-8-5 に、教材の使途、教材名（品名）、用例等を示した。

表 1-8-5　中学部国語科で活用する教科書等の自作教材等　　N=62　(　)内は回答数

A　使途		B　教材名(品名)	C　用例等
教科書の内容に関する教材(11)		本文の拡大版	・教科書の本文をコピーして黒板に貼る。学習グループの生徒全員で同じ文章を見て音読や読み取りをするときに使っている。(3)
			・すべての授業において国語の教科書本文をＰＣ→プロジェクタ→ホワイトボードに提示し、説明や生徒の発言を盛り込みながらまとめられるようにしている。
		パワーポイント資料	・適宜、解説のためのイラストや写真、言葉の説明を挿入したものを投影して、一緒に読む(3)
			・全員で本文を読むため、手話をしながら音読するために必要。（教科書の本文をパワーポイントに黒地に白字で作成）
			・作者についての説明、新出語句の説明で使用する。
		リライト教材文	・文学作品においては実態に応じたグループ編成に合わせて、リライトして使用している
			・教科書の単元によって理解が難しいと判断したもの、例えば「握手」（光村）のような教材文をリライト教材とする。
教科書の内容理解を促すための教材（16）	文章の内容理解	イラスト	・物語の一部分や文章の内容を説明するときに絵を描いて視覚的にわかるようにしている。
		語彙カード	・言葉と意味を書いたものを、教室内に掲示して見える化する。
	語彙や漢字の理解と定着	語彙プリント	・教科書の小説・論説などの文章に出てくる、漢字の読み（誤答しやすいもの）、語句の意味を、自分で調べさせ、 学習内容を定着させる。
		漢字プリント	・学習の初めの小テスト
		漢字カード	・新しく学習した漢字を 10 ㎝×10 ㎝のカードに音・訓を書く。それを使って、単元ごとに漢字ビンゴゲームを行い、漢字に興味を持ち、覚えるようにしている。
		敬語分類カード	・敬語の学習の際に使用
		品詞カード	・文法の単元で使用
		活用表	・文法の単元で使用

読解	ワークシート	・読み取りの授業に関しては、５Ｗ１Ｈを問う問題を作成したり、段落相互の関係を問う問題を作成したりして、手がかりを見つけやすくしている。 ・視覚的（視力）に配慮を要する生徒のために、図地を反転させている。 ・読み取りの手助けになるようワークシートを作成して活用している。 ・授業で学習した内容が定着しているか確認のため宿題として出している。 ・ワークシートを作成し、書画カメラで提示している。 ・古文本文と現代語訳、漢文の場合は書き下し文も、表にして書き入れられるようにしている。 ・学習で押さえたいことを書き込んでいけるよう、また、流れが分かるように構成したワークシートを使い、時間の短縮と内容の定着を図る。 ・読書感想文の構成シートとして作成したり、教科書の教材を読み取り、整理するためのプリント教材。
発展や補助のための教材（13）	読書感想文入選作品集、作文集等	・作文や読書感想文の「構成」「書き出しの工夫」等、モデルになるような作品を取り上げ、良さを見つけたり、真似して書いたりする。 ・発表会を行い、感想カードで感想や意見を交換し合う。 ・他者の文章や感性に触れる副教材として活用している。 ・構成のモデル、心情表現のモデルとして鑑賞させたり、形を真似させて練習したりする。 ・優秀作品を取り上げて、どこが上手なのか解説する。 ・毎月テーマ、形式を示し、作らせている。作品を発表させたり、優良な作品に着目させている。 ・題材の取り上げ方、構成、言葉の選び方について、良さを見つけて、自作の中に取り入れて書いたりする。 ・構成を真似て書かせる。多様な考え方があることを知らせる。 ・作文の書き方を学ぶため。 ・挨拶文の例、構成等を載せたプリントを参考に手紙を書く。 ・作文の目的や注意点、書く手順、構成例を学ぶため。 ・いろいろな詩に親しむことを目的とする。 ・「書き出しの工夫」を参考にするため
国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材(22)	作文プリント	・150 字～250 字程度の文章が書けるプリント。設題に沿って、色々なことを考え、文を作る練習をする。その都度添削し、直した部分を再度書けるように作ってい

	る。
作文構想メモシート	・自分で書きたいことを整理するために、シートの流れに沿って組立てを行うもの。
漢字プリント	・それぞれの漢字検定受験級に合わせプリントを作成。
言葉を言葉で説明する文例集	・朝の会でトピックス的に扱ったものを文にし、掲示している。 例　通院とは、病院に行くことです。
ドリル問題	・漢字・故事成語・慣用句など ・長期休業中や、授業中の時間調整のために使用している。
読解問題（上位者対象）	・モンゴメリの短編などをわかりやすく一部書き直し、読解問題を作成している。 ・カテゴリー分類、語彙力向上のための資料として活用している。
もののなまえ絵じてん	・必要なページをコピーして配布して説明するか、写真を撮りＰＣに取り込んで映して説明する。
学習マンガ	・そのマンガの面白い所は何なのか、自分の言葉で文章で表す練習をしている。
４コマまんが集	・ブックトークなどで使っている。 生徒が持ち寄り、問題提起をして、みんなでディベートをする時に使う。 （例「いのちの花」等）→「犬猫の命と人間の命とで差が生じるのはなぜ？」など
市販の本	・語彙力向上のため、課題として使用。 （全国聴覚障害教職員協議会発行：みるみる日本語） ・多読のために実物投影機で写し、問いに答えさせる(2) ・漢字の学習。 ・内容に関わる問題を作成し、読後の感想などを書かせている。
漢字パズル	・語彙の拡充、社会事象への関心を高める。
新聞記事を活用したワークシート（活動）	・天声人語を用いて、書き写しや意味調べを行っている。 ・コラムを読んで、５Ｗ１Ｈでまとめたり、教師からの発問に答えながら要点をまとめるシート ・同様の出来事の記事を並べて比較検討を行う。
文法学習教材	・文法を中心に、重点項目に特化したプリントを作成している。 ・文法の自作プリント ・文法をわかりやすく伝えるためにパワーポイントで作成している。 ・主に文法で、聾学校の生徒が苦手とする分野のプリン

トを作成しており、活用している。

小学部と同様に４つに分類された「教科書の内容に関する教材」は、小学部と同様、提示の仕方を変える教材やリライト文のように表現方法を変えて分かりやすくする教材とが挙げられていた。

次に、「教科書の内容理解を促すための教材」について、読解については、古典を含め、教師が自作ワークシートを作成し、文章の内容の理解を促したり、生徒がノートに書く量を調整したりする等、効率的な学習を進めるための工夫も見られた。

そして、「発展や補助のための教材」では、作品集等を読ませることにより、良い作品の題材の構成、表現の仕方、言葉の使い方等を参考とする活用方法が挙げられていた。

さらに、「国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材」では、書く、読む、文法、語彙といった内容が取り上げられており、小学部と共通した傾向であった。さらに中学部では、四コマまんがや新聞記事等を教材として取り上げ、書く・読む等の言語活動を総合的に扱う活用の記述も複数見られた。

【高等部】

53 の回答が得られた。表 1-8-6 に、教材の使途、教材名、用例等を示した。

表 1-8-6　高等部国語科で活用する教科書等の自作教材等　　N=53　(　)内は回答数

A　使途		B　教材名（品名）	C　用例等
教科書の内容に関する教材(4)		本文の拡大版	・教科書と併用して、大型テレビに拡大した文章にわかりやすく注釈を付けることもある。
		パワーポイント資料	・教科書の本文提示や本文内容の語句の理解のための資料提示として扱う。 ・インターネット上やＴＶ番組などから使えそうな写真、動画を使用している。 ・補助教材として視覚的な情報を持たせるため提示している。
教科書の内容理解を促すための教材(12)	文章の内容理解	百人一首、いろはかるた	・百人一首大会の実施、ことわざの学習で活用。
		語彙カード	・慣用句やことわざ等語彙の拡充のため。 ・語彙の指導で反復練習する。
	語彙／漢字の理解と定着	語彙プリント	・外国から転入した生徒に対して、日本の教材をそのまま使えないので、自作している。 ・生徒の実態や必要な状況に応じ、自主教材を作成し、使用している。
		漢字ノート	・読めない漢字や使い方のわからない熟語を使った例文をノートに書き、語句調べと文の読

		みの課題を毎朝提出させるようにしている。
	漢字プリント	・導入や単元の意味調べ、漢字のまとめとして作っている。
	写真などの視覚教材	・単語など具体物と一致して覚えられるよう工夫している。 ・物の名前を手話、指文字、音声で表しながら覚える学習で、先生、友達、好きな物をカードにして提示している。
	敬語の冊子	・自作の敬語の使用法に関する冊子。年度末に集中的にまとめ的に実施。特に卒業学年には７～８時間をかける。
	読解　ワークシート	・自己理解等に関するものや国語表現の単元で補助教材として使用。 ・実態に合ったものを作成して使用。
発展や補助のための教材（９）	読書感想文入選作品集、作文集等	・教科書の題材の発展教材として提示する。 ・能力に応じて文に興味を持たせるため、自作の小説を使い、自分でも表現できることを伝える。 ・教科書の教材の筆者、作者の文章を抜粋して、発展教材として用いる。 ・短歌の創作の際、入選作品を鑑賞し、参考にさせている。(現代学生百人一首(東洋大学)) ・作文指導を行う際に補助教材として使用している。（小論文・作文、模範文例等）
	指導書にある関連した文章	・単元の最後に紹介する。
	ＮＨＫ　ｆｏｒ　ｓｃｈｏｏｌ（ＮＨＫ動画サイト）	・単元の補助教材として使用する。小・中学生中心向きではあるが、生徒の実態に応じて活用している。字幕もあり活用しやすい。
	手紙の書き方（郵便局が配布）	・単元の補助教材として使用。発展教材としてワークブックと同じように使用している。
	助詞抜き物語（自作）	・自作の短編物語の助詞を全て（　）にしたものを作成し、宿題としてさせている。
国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材(28)	絵本	・生徒の実態に合わせて、内容についての設問を作成している。
	作文や面接	・その時に応じた文章作成や面接の準備に向けた教材。
	市販の問題集（大学入試小論文、評論問題集、就職試験問題）下学年の問題集など	・長期休業中や授業の５～１０分間で使用、文が長すぎず短すぎず生徒の理解度に合って指導できる。（下学年の問題集）

	・生徒の実態に合わせて、発展教材として使用している。（漢字検定過去問集、読字力検定過去問集）
	・進学に向けた補助教材として使用（入試問題集、参考書、文法問題集）
慣用句の学習	・学習課題として取り組み、慣用句の意味理解と用法の理解として扱う。
学習マンガ	・単元の補助教材として活用している。話の流れを掴みやすい。（特に古文）
市販の本	・単元の発展教材として取り上げる。(2)
	・全文書きとり、ルビ（宿題）。教科書に抜粋として載っていた作品を発展として。（随筆の新書）
	・生徒の実態に応じ、興味を持って読めそうなものは教材として扱う。
	・教科書の題材を扱った後、発展や比較のための教材として提示（短編小説、エッセイ）
	・単元の補助教材又は発展教材として取り上げる。（小説、エッセイ、随筆等）
	・単元の補助教材として使う。又、表現の指導に使う。（小説、詩集）
	・単元の導入や発展として使う。 もしくは､本単元の理解を促すための補助教材として使用。（単行本、雑誌）
	・語彙力をつけるために、授業の初めに解説をしたり、生徒たちが例文を考えたりして使用している。（マンガもついている言葉の本、単語、ことわざ、慣用句）
	・読みとりの力をつけるために、生徒の興味に合わせて、大人の文としては平易な表現や短い題材のものを使用している（短編小説、エッセイ）
	・単元の補助教材又は発展教材として取り上げる。生徒の実態から、教科書の題材が難しすぎる場合、同様の内容・程度で補助教材として平易な表現や短い題材を使用する。或いは、教科書の題材を扱った後、発展教材として提示する。
	・百人一首カルタ大会を毎年高等部で開催している。30 首ずつで行なっているが、興味を

	持たせ、内容を理解するための補助教材として活用。 （文庫本『こんなに面白かった「百人一首」』） ・自習時の課題や進路の取組が近づいた時期に、出題例を挙げて、意欲を高めるために使用している。 （単行本ＳＰＩ問題集より）
図形	・図形を見て、それを言葉だけで他の人に伝えていく活動、生徒の語彙力を正確に把握でき、どこがわからないかわかり、すぐに指導することができる。
新聞記事	・修学旅行等行事に関する内容や時事問題を扱う際、卒業後に向けて、必要な部分を使用する。 ・重複学級の国語科で使用。難語句の意味など参考につけ、1枚のプリントにしたもの。（新聞記事を活用したワークシート） ・新聞のコラムを切り取って貼り、視写をし、語句について調べたり、自分の感想や意見を書く。 ・ワークシートを作成し、朝の短時間活動や調べ学習の補助教材として。弁論や小論文のスモールステップとして。 ・時事問題について知るための補助教材として使用。 ・文章の構成や展開を確かめ、内容を読み取るための教材を作成し、用いている。また意見文を述べるため、考えるための題材として用いている。
文法学習教材	・古典の文法について、問題集をそのまま使用するのが難しいため、説明を加えた形で教材を作成している。

小学部や中学部と同様、４つに分類された「教科書の内容に関する教材」として、教科書の本文の拡大提示や、本文内容の語句や本文と関連する資料提示としてパワーポイントが使われている。

次に、「教科書の内容理解を促すための教材」として敬語や百人一首、ことわざの学習などが挙げられると同時に、生徒の実態に合わせ、小学部から活用されているような写真や語彙カード等の教材も活用されている。

そして、「発展や補助のための教材」は、ＮＨＫ　ｆｏｒ　ｓｃｈｏｏｌ（ＮＨＫ動画サイトの活用、また、大学入試や就職試験を念頭に置いた小論文を取り上げ、活用している例が挙げられた。

さらに、「国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材」では、単元の導入、補助、発展として市販の本を活用している点が顕著であった。この市販の本の活用は、他のどの学部よりも多かった。また、新聞記事のコラムの活用等も特徴として見られた。

3)機器等（発表・表示用）の活用

ア　機器等の有無と活用状況（活用頻度、加工）

国語科の授業における機器等の有無と活用について、20 の機器等を示し、それぞれの機器等に対して、「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを 1 つ選択することを求めた。

【小学部】

表 1-9-1 に、小学部国語科の授業で活用する機器等についての結果を示す。

表 1-9-1　機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）　（数値は%）

	機器等の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 黒板（短冊黒板、小黒板）	149	98.0	0.0	2.0	147	91.8	6.1	2.0	139	92.1	5.8	0.0	2.2
2 発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	147	53.1	29.3	17.7	138	32.6	42.0	25.4	130	60.0	13.1	3.1	23.8
3 漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	147	68.7	23.8	7.5	141	40.4	48.9	10.6	135	58.5	15.6	17.0	8.9
4 指文字表・指文字カード	144	72.9	18.1	9.0	142	7.7	33.1	59.2	132	35.6	5.3	3.0	56.1
5 手話表（簡単な手話表現の絵）	146	46.6	17.8	35.6	132	8.3	36.4	55.3	122	32.0	11.5	1.6	54.9
6 電子黒板	147	55.8	0.0	44.2	130	13.1	7.7	79.2	120	16.7	3.3	1.7	78.3
7 ＯＨＰ	145	59.3	0.0	40.7	127	0.8	6.3	92.9	117	6.8	1.7	0.0	91.5
8 パソコン、プロジェクター	148	98.6	0.7	0.7	146	41.8	39.7	18.5	139	66.2	13.7	3.6	16.5
9 地上デジタル対応テレビ	148	85.8	0.0	14.2	143	11.2	28.0	60.8	127	36.2	3.9	0.0	59.8
10 ＤＶＤプレーヤー	141	94.3	0.7	5.0	141	10.6	34.0	55.3	124	44.4	5.6	0.8	49.2
11 ＣＤプレーヤー等機器	141	95.0	1.4	3.5	142	14.8	34.5	50.7	128	47.7	4.7	0.8	46.9
12 実物投影機	138	89.9	0.7	9.4	141	15.6	25.5	58.9	128	35.2	3.9	3.1	57.8
13 デジタルカメラ	139	90.6	9.4	0.0	145	42.8	42.8	14.5	135	77.0	10.4	0.0	12.6
14 デジタルビデオカメラ	140	97.1	2.1	0.7	144	13.2	50.0	36.8	132	61.4	6.8	0.0	31.8

15 集団補聴器（FM、赤外線、ループ）	138	89.9	0.0	10.1	139	44.6	8.6	46.8	131	54.2	1.5	0.0	44.3
16 個人用ＦM等システム	136	48.5	16.9	34.6	130	33.8	7.7	58.5	124	44.4	0.0	0.0	55.6
17 音声記号図、調音部位図	138	87.0	2.2	10.9	138	5.1	30.4	64.5	122	27.0	7.4	0.8	64.8
18 母音図（口形図や絵）	136	84.6	6.6	8.8	138	9.4	40.6	50.0	127	37.0	10.2	3.1	49.6
19 キューサイン表（発音サインも含む）	137	42.3	5.8	51.8	129	5.4	10.1	84.5	123	11.4	2.4	3.3	82.9
20 タブレットPC	140	85.7	5.0	9.3	142	21.8	37.3	40.8	133	54.9	6.8	0.8	37.6

上記の機器等のうち、教師が「手を加えて活用」、または「自作して活用」している割合が全体の 20%以上のものは、漢字表・漢字カード（カタカナ・ローマ字表も含む）であった。

また、「よく使う」または「時々使う」回答数が、「学校にある」回答数を上回った教材は、発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）と漢字表・漢字カード（カタカナ・ローマ字表も含む）であった。

【中学部】

表 1-9-2 に、中学部国語科の授業で活用する機器等についての結果を示す。

表 1-9-2　機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）　（数値は%）

	機器等の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 黒板（短冊黒板、小黒板）	116	93.1	0.0	6.9	116	78.4	9.5	12.1	109	85.3	4.6	0.0	10.1
2 発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）	114	60.5	19.3	20.2	112	19.6	37.5	42.9	101	52.5	5.0	2.0	40.6
3 漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	111	44.1	14.4	41.4	107	7.5	18.7	73.8	99	19.2	6.1	3.0	71.7
4 指文字表・指文字カード	115	70.4	9.6	20.0	112	2.7	17.0	80.4	105	18.1	1.9	1.9	78.1
5 手話表（簡単な手話表現の絵）	114	57.9	7.0	35.1	108	1.9	20.4	77.8	103	18.4	3.9	1.0	76.7
6 黒板	111	55.0	0.0	45.0	105	13.3	6.7	80.0	101	19.8	3.0	0.0	77.2
7 ＯＨＰ	110	64.5	0.0	35.5	108	1.9	11.1	87.0	101	11.9	2.0	1.0	85.1
8 パソコン、プロジェクター	116	98.3	0.9	0.9	118	43.2	49.2	7.6	116	68.1	19.8	4.3	7.8
9 地上デジタル対応テレビ	114	86.0	0.0	14.0	112	9.8	32.1	58.0	102	40.2	3.9	0.0	55.9
10 ＤＶＤプレーヤー	114	93.9	0.9	5.3	116	3.4	27.6	69.0	105	32.4	1.9	0.0	65.7
11ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	112	94.6	1.8	3.6	113	6.2	20.4	73.5	101	27.7	5.0	0.0	67.3
12 実物投影機	109	87.2	0.0	12.8	112	17.0	29.5	53.6	103	41.7	5.8	1.0	51.5

13 デジタルカメラ	113	95.6	3.5	0.9	116	25.9	43.1	31.0	106	51.9	16.0	0.0	32.1
14 デジタルビデオカメラ	113	97.3	0.9	1.8	115	12.2	32.2	55.7	103	35.9	6.8	0.0	57.3
15 集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	112	88.4	1.8	9.8	115	39.1	6.1	54.8	103	45.6	2.9	0.0	51.5
16 個人用ＦＭ等システム	111	58.6	10.8	30.6	112	25.0	15.2	59.8	102	40.2	2.0	0.0	57.8
17 音声記号図、調音部位図	107	68.2	0.0	31.8	109	0.9	8.3	90.8	99	9.1	0.0	2.0	88.9
18 母音図（口形を表した図や絵）	109	74.3	1.8	23.9	111	1.8	10.8	87.4	99	11.1	1.0	2.0	85.9
19 キューサイン表（発音サインも含む）	107	44.9	3.7	51.4	106	0.0	3.8	96.2	99	4.0	1.0	2.0	92.9
20 タブレット PC	112	84.8	4.5	10.7	112	16.1	39.3	44.6	105	40.0	16.2	1.0	42.9

上記機器のうち、「教師が手を加えて活用」したり、または「自作して活用」したりしている割合が全体の 20%以上のものは、“パソコン、プロジェクター”であった。また、「よく使う」「時々使う」回答数が、「学校にある」回答数を上回った教材は、中学部の回答では見られなかった。

【高等部】

表 1-9-3 に、高等部国語科の授業で活用する機器等についての結果を示す。

表 1-9-3　機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）　（数値は%）

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
黒板（短冊黒板、小黒板）	103	93.2	1.0	5.8	85.1	3.2
発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）	99	56.6	18.2	25.3	57.8	2.5
漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	98	36.7	8.2	55.1	14.1	7.7
指文字表・指文字カード	100	55.0	9.0	36.0	14.0	1.4
手話表（簡単な手話表現の絵）	97	47.4	3.1	49.5	9.9	0.0
電子黒板	101	51.5	0.0	48.5	26.7	2.7
ＯＨＰ	96	54.2	0.0	45.8	18.8	7.7
パソコン、プロジェクター(タブレット PC は除く)	103	98.1	0.0	1.9	93.1	19.1
地上デジタル対応テレビ	98	78.6	0.0	21.4	32.6	2.6
ＤＶＤプレーヤー	98	94.9	0.0	5.1	47.9	2.5
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	97	92.8	0.0	7.2	27.1	0.0
実物投影機	95	86.3	0.0	13.7	50.5	7.9
デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ	98	96.9	1.0	2.0	68.8	9.6
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	96	84.4	1.0	14.6	41.9	1.3
個人用ＦＭ等システム	96	51.0	12.5	36.5	31.0	1.4
音声記号図、調音部位図	93	55.9	1.1	43.0	8.3	1.5

母音図（口形を表した図や絵）	95	60.0	2.1	37.9	9.2	1.4
キューサイン表（発音サインも含む）	91	36.3	0.0	63.7	1.3	0.0
タブレット PC	98	89.8	5.1	5.1	66.0	7.1

上記の機器等のうち、教師が「手を加えて活用」したり、または「自作して活用」している割合が全体の 20%以上のものはなかった。また、「よく使う」「時々使う」回答数が、「学校にある」回答数を上回った教材は、発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）であった。

4)学習評価で活用している教材

ア　学習評価で活用している教材の有無と活用状況

国語科の学習評価における市販のテスト（単元別、漢字、言語事項<言語力の評価に関するもの>）について、「いつも活用している・時々活用している・活用していない」のうち 1 つ当てはまるものの回答を求めた。表 1-10-1 に、学部毎の活用状況を示した。

表 1-10-1　市販テストの活用状況　（数値は%）

	いつも活用	時々活用	活用していない
小学部(N=144)	68.1	17.4	14.6
中学部(N=114)	24.6	36.8	38.6
高等部(N=95)	13.7	51.6	34.7

小学部では、「いつも活用」が一番多く、回答数全体の 68.1%であった。中学部では、「活用していない」が最も多く 38.6%であった。高等部では、「時々活用」が最も多く 51.6%であった。いつも活用している割合は、小学部から高等部へと学部が上がるにつれ減少していた。

イ　その他の教材や自作教材

学習評価に係るその他の教材や自作教材について、記述による回答を求めた。記述内容は、「教材名（品名）」「場面や活用方法」とした。回答の内容に基づき、よく活用するその他の教材や自作教材を対象とし、活用場面による分類を行い、小学部における回答数と内容を表 1-10-2 に示した。

表 1-10-2　小学部で活用する評価用教材等　　N＝64

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	55	自作テストやプリント（単元、本時の学習内容の確認、漢字や語句の確認）(44)、 市販の漢字テスト(３) 市販の国語ドリル（漢字や語句の復習や内容の読み取り）、市販のプリント（授業のまとめ）（2）、市販の問題集、ネット上に掲載されているプリント(2)、教科用図書の指導書付録の単元テスト 音読カードや視写カード
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	8	動詞や形容詞の活用表、自作漢字プリント(4) 自作のテスト(3)

学年のまとめ 全体的な傾向の把握	1	標準学力検査 CRT（教研式）

小学部では、64 の回答を得た。単元や本時の学習評価として、市販のテストの他、自作テストやプリントも作成されていることが示された。また、単元や本時の枠を超えた自作テストや自作漢字プリントの活用も挙げられた。

中学部の結果を表 1-10-3 に示す。

表 1-10-3　中学部で活用する評価用教材等　　N＝39

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	35	漢字テスト(5)、漢字練習プリント、自作テスト（本時、単元、定期テスト）(11)、自作ワーク（本時、宿題、自習）（4）、ビデオ映像(タブレット PC)を用いたビデオ映像を含め)(11)、市販のワークブック問題集、ノート、百人一首
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	4	全校漢字テスト、感想文、自作プリント、自作テスト
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	0	

中学部では、単元や本時の学習評価として自作テストが多く活用されていた。また、ビデオ録画記録を活用して、生徒自身にも自分の発表の評価をさせたり、教師の評価にしたりする記述が多く見られた。使用機器もタブレットＰＣを使用するケースが多く挙げられていた（表 1-10-3）。

高等部の結果を 1-10-4 に示す。

表 1-10-4　高等部で活用する評価用教材等　　N＝79

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	68	自作テスト（本時、単元、定期テスト）(54)、 漢字テスト(7)、自作プリント（復習、問題集、本時のまとめワークシート）(5)、教科書の指導書付録の CD、教科書の指導書のワークシート、教科書準拠ワークブック
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	11	漢字テスト（4）、自作テスト（能力に合わせて作成、文法の確認、単語の確認、習熟度の確認）(3) 問題作成ソフト、市販の問題集(3)
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	0	

高等部では 79 の回答を得た。中学部以上に、本時用、単元用、定期テスト用の多くの自作テストが作成されていた。また、教科書の指導書についている CD やワークシートの活用も記載されていた（表 1-10-4）。

5)あると良い教材

国語科の授業や学習評価をするために、「このような教材があると良い。」と思われる教材について「教材名（品名）」「場面や活用方法」に関する自由記述を求めた。回答の内容に基づき、教材の種類別に分類し、教材名・内容、活用場面や方法について、小学部は表 1-11-1、中学部は表 1-11-2、高等部は表 1-11-3 に示した。

【小学部】

表 1-11-1　あると良い教材（自由記述：小学部）　　N=76

教材の種類	教材名・内容	活用場面や方法
手話 DVD（６）	教科書対応、専門的な知識を持つ表現者による手話 DVD	・教科書の本文をろう者が手話で読んで表現している映像を読み取り、内容を掴ませる。 ・語句の理解が国語辞典では難しい際に使用する。 ・教師がまず確認して正しい手話で授業を行うために使用する。 ・特に物語文などは、読み取りの手助けとして活用したい。
	日本手話 ver. の DVD	・説明文や物語の文章を日本手話に変換した DVD があれば、さらに興味を掴めるから ・手話表現が分かり、習得しやすくするため。
教科書本文と挿絵の電子データ（10）	電子データ（拡大、加工可能な物）	・パソコンに取り込み、プロジェクターに投影できる。 ・吹き出しを書き込んだり、コピーして活用したい。（教科書の挿絵の拡大バージョン。） ・読み取りの際にプリントし、書き込みをする。 ・教材文の文字のフォントや配置を児童が見やすい形に加工して使用するため。又、他のデータも入れて、よりわかりやすい文章にした教科書にするため。 ・高学年の授業では、教科書を実物投影機で大型テレビに映し、画面に書き込みをする方法もとっているが、低学年では、この方法よりも、模造紙に書き込む方法の方が良い。そのため、模造紙に手書き

		をしたり、パソコンにデータ入力して印刷したりする方法で教材を作成しているので、加工できるデータがあれば、効率的に教材の準備ができる。
	デジタル教科書	・本文の写真を拡大したり、本文を示したりしたい時に使用したい ・板書をそのまま保存し、復習等で使用できる。 ・教科書だけでは読めないことがほとんどなので自力で読んでいくためのヒント（写真等）がたくさん入ったデジタル教科書がほしい。
	電子黒板	・低学年は動画が入ると、興味をもちやすく、印象に残るので、静止画よりは動画の方がありがたい。（例）ビーバーの大工事（２年国語下東京書籍）→ビーバーの巣づくりをしている様子がおさめられた動画など
	教科書の文章を黒板等に簡単に映し出せる機械。	・教科書の文章を模造紙に写すのは大変なので、簡単に文章を映し出せて、書き込めるような機器があると良いと思います。
教科書の補助教材（13）	教科書に対応した大きな掛け図（挿絵）	・物語教材の内容理解の手がかりとする。
	重要語句と意味一覧表（単元毎）	・単元に入る前に、難語句の理解の際に活用する。
	教科書に出てくる語句を子どもに分かりやすく解説している教材。(図・写真が多いもの)	・難解な語句だけでなく、時代背景や状況把握に参考になるような言葉の解説がわかりやすく書いてあるものがあると予習や復習に活用できる。
	説明文の内容に関わる基本知識に関する DVD（字幕付き）や物語文（高学年）のアニメ DVD（字幕付き）	・読み取りに入る前に、土台として基礎知識を得たり、全体のストーリーを把握したりする。（一般的な教材として販売されているが字幕がついていないため使えない。）
	物語や説明文の内容そのままのアニメーションや動画	・視覚的に大まかな内容を掴んだ上で、国語的な内容を深められるようにするため。
	教科書教材の動画	・文章のイメージを掴みやすくするため。
	物語の場面の絵の並び替えテスト	・物語の単元のまとめの時に、物語の内容

		を理解できているかの確認に使いたい。
	教科書に合った手話表現ＤＶＤや教科書の内容に沿ったワーク（市販より語彙についての内容が多いもの）	・読みとった後、手話で内容を確認するため。 ・指導後に定着度を見るために使う。
	聾学校用のワークシート（検定教科書）	・聞こえにくいことで押さえるポイントは市販のものでは、押さえどころが違うと感じる。内容読解の確認で、市販のものに加えて使用する。自作だったり、板書で行っているが、全国で共有できるものがあると良い。 ・聞こえにくい子どもたちへの押さえどころを押さえたワークシートを自作してはいるが、共有できるものがあるとありがたいと思う。伝承もできる。 ・教科書で学習した文法が活用できるか確かめられるように。
	国語の単元ごとの語彙表のようなもの	・児童が自分が分からない言葉があった際に活用できるようにする。
辞書に関するもの(3)	イラスト等を使い、視覚的に意味を捉えやすくした国語辞典	・意味調べで使う。市販のものでは全く使えない児童がいる。
	イラストや写真等があり、類語がたくさん載っている小学生向けの辞典	・言葉を増やすため。初めて知る語彙の定着の手がかりとして、知っている似た言葉（意味）の語彙から広がっていけるのではないか。イラストや写真が多い方が、視覚的に捉えやすい。
	ことばの絵辞典が電子化されたもの	・児童が知らない言葉を電子書籍上でカラーイラストや写真で、すぐに出せると便利だと思う。扱う言葉も小学生用レベルの言葉も含まれると良いかと思う。（インターネットで一つ一つ検索するのではなく、1つのものにまとめられていて、辞書のように、その1つのもまとめられたものを調べると、すぐ授業で活用できる。）
評価に関するもの(2)	副詞の一覧と評価のためのプリント	・文法の理解のために活用する。文に合わせた活用の仕方を児童が確かめられるように活用したい。
	動詞、形容詞の形の分類表（発達	・品詞の分類が児童にも分かり、発達年齢

	分類表付）	に合わせて、覚えるべき言葉が表になっている。
文法事項の指導に関するもの（22）	文法の獲得等をねらった文と絵のカード・プリント	・「やり」「もらい文」、自動詞・他動詞、文末表現などと関連させたものがあると良い。日常会話の丁寧なやりとりだけでは獲得・定着が難しい子ども用に。
	児童にも分かりやすい動詞や形容詞の活用表＋形容動詞の活用表	・活用した形を児童が確かめられるようにする。（例）「さむいでした」というふうに書く児童が多い。「さむ（かっ）た」とはならない。「心配（な）とき」とはならず「心配のとき」と間違う。
	動詞の活用プリント	・「れる」「られる」「やりもらい」等、子が苦手とする活用を確認する。
	助詞の種類と意味が書いてある表	・読み書き全般に活用する。作文、短文づくりの際、見てわかるようなもの。
	助詞の練習プリント集	・難易度別の助詞練習プリント。個の実態に応じて使えるもの。
	助詞の使い方の理解を深める教材（ドリル、活用表、例文表）	・教室掲示できるものや、児童が手元で使えるようなサイズのものなど、あったら良い。（助詞の使い方表） ・日記指導や自分の言ったことや書いたことの間違いがないか確かめられるようにする。また、そのための練習ドリルがあるとよい。 ・日々のやり取りの際に活用する。視覚的に正誤を確認できるようにする。
	動詞・形容詞等の活用表	・教室掲示できるものや、児童が手元で使えるようなサイズのものなど、あったら良い。 ・読み書き全般に活用する。いくつかの基本の活用が見てわかるようなもの。 ・文法テストや読み書きの際に活用する。言語力の育成のための教材として使用する。 ・文法テストや読み書きの際に活用する。授業で取り扱った動詞や形容詞について、活用ができるかどうかを児童が確かめられるようにする。(2)
	低学年から使用できる文法テスト	・文法テストを利用することで、児童がどこにつまずいているのか（文法上）客観

		的に捉えやすい
	文法的な内容を系統的に学習できる問題集	・聴覚障害児の特性に合ったもの(絵が多く、スモールステップになっているなど）自立活動で学習する他、宿題などで自分で学んでいけるようにする。
	日本語教育を活用した教材	・日本語の文法を視覚的に分かりやすく学べる教材。
	日本語文法を段階的に学べるワークシート	・5W1H の基本文型、受動文、使役文といった聾学校の自立で扱うような日本語文法の教材があると良い。主に自作し、利用しているが、初めての聾学校に就任した教師は文法の何から手をつけてよいかわからず苦労している様子があるので。
	構文図	・一文を読み取る練習として使う。
	日本語文法を系統立てて指導できる補助教本、確認テスト	・自立活動の指導の際、活用する。継続して、段階を追って指導をする参考としたい。学習の後、確認評価を行いたい。
	文法指導段階表	・小学部のうちに、身につけておくべき文法を、段階的にもれなく指導する。
	助詞の運用で意味が変わることが分かる絵カード又は動画ソフト	・「ＡがＢを追いかける」「ＡをＢが追いかける」を実際に表したものがあると自分の助詞の使い方の正誤を子供がわかりやすく把握できる。ゲーム形式にもなると気軽に使いやすい。
	使役、受身のイラスト表、練習問題	・動詞の理解はできるが、場面での使い分けが苦手な子がいるので、練習できるようにする。
語彙指導に関するもの（19）	新しく使われるようになった言葉の単語集	・新聞やニュース等でよく取り上げられるようになった言葉などの意味を確認するために使いたい。 ・授業場面だけでなく、日常会話に繋げていきたい。
	イラストつきの単語表、カード	・言葉の学習に使用する。
	イラストつきの漢字カード（各学年）	・漢字の学習に使用する。
	動詞、形容詞、心情を表す言葉の絵とことばのカード（絵と文字）	・作文、日記の指導で、児童が自分で使って書けるようにする。
	分類、整理された性格を表す言葉、擬音語、擬態語、品詞別などの表と練習問題集	・作文指導で活用する。

気持ちを表す言葉、言い回しの表	・日記指導で活用したい。
接続詞のプリントや表	・接続詞の使い方がすぐ分かるようなプリントや表。
オトマトペが表現された動画集	・「のそのそ」歩いている動物など、擬声語、擬態語で表現されたものが映像で見られるものがあるとよいかと思う。（インターネットで一つ一つ検索するのではなく、１つのものにまとめられていて、すぐ授業で活用できるもの。利便性のあるもの。）
小学校入学前に覚えたいことば集	・教科書に入る前の部分での必要な力がどんなものか具体的に知りたい。
漢字練習プリント	・漢字の苦手な子どもに対して活用できるプリント。
学年で習う漢字表と手話	・漢字と手話を一緒に覚えられるようにする。漢字の意味も覚えやすい。
まちがいやすい言葉を集めたもの	・似たような言葉を集めて、はっきりちがいが分かるようなものがあると良い。
抽象的な言葉を手話で表したもの	・形のないものを理解するのが難しい児童に役立つ。
手話と日本語が裏表日本語なっているようなカード	・手話と日本語の両方を理解するためのもの。手話で表現できるが日本語で書けないときに確認できるもの。
言葉の獲得順の目安	・獲得していくべき言葉は、たくさんあるが目安があれば参考にしたい。
語彙段階表	・生活年齢に合わせて（1～12 歳くらいまで）必要な語彙が一覧表になったものがあると、それを目安に指導を行ったり、生活で活用したりしていく。
聾学校用「ことばのべんきょう」に対応した教材	・ワークシートのようなプリントで、自立活動で活用できるもの。
電子化された手話、指文字、絵カードの拡充。	・手話なども電子データとして活用しやすい状態になっているものはごくわずかで、必要な手話はフォトショップなど使用して合成した絵を作っている。より多くのデータがあると良い。
学年別の手話の本	・幼児教育を受けずに就学した児童で手話の語彙も少ないため、手話も含めたことばの学習をしているのですぐに使える、学年別の手話のイラスト辞典があるとよい。

その他（1）	県外の聾学校とスカイプ等で討議ができるシステム	・一人学級のため、意見交換等ができず、いつも困っている。児童の考えを深めたり、　広げたりするためにも、実際の子どもが書いた意見文などが読めるようにする。もしくは、リアルタイムで話すことができるようにする。

小学部では､76 の回答を得た｡このうち､文法事項の指導に関する教材が一番多く挙げられ、次に、語彙指導が挙げられた。文法事項の内容として、動詞の活用、助詞の使い方が多く挙げられた。語彙指導の内容としては、カードやことば集等を用いて語彙理解を促すものが挙げられた。

【中学部】

表 1-11-2　あると良い教材（自由記述：中学部）　　N=51

教材の種類	教材名・内容	活用場面と方法
手話・字幕付きDVD（5）	手話 DVD（検定教科書対応） 字幕付き・手話付き DVD（朗読、古典作品、国語科に関連する映像番組や作品等）	・文学作品の鑑賞で有効活用する。手話表現の習得に役立てる。 ・人物、場面、感情、助詞など、文に合う手話表現方法を見せるため。 ・古典作品を扱ったＤＶＤはあるのだが、字幕があると、聴覚障害のある生徒にも使いやすい。 ・アニメや映像で話の流れを掴ませ、本文を読み進めていく。作品の成立時代の暮らしや調度品、風習等を、映像によって学習する。 ・授業で手話表現の仕方を確認する。または参考にする。
教科書に関連するもの（13）	電子教科書（現行の物、改良への要望）	・ページ指定がしやすく、時間短縮になり説明などに時間を使えるので ・指導者の口元を見ながら、教科書も見られる。 ・視覚的な支援がしやすく、効率的・効果的に授業を勧められる。
	電子黒板	・実物投影機では、教科書(中学)の本文を十分な大きさで表示することが難しい。本文全体が写せる教材があると便利。 ・文章を画面に映しながら書き込んで説明する。
	教科書本文、教科書に掲載される文章や写真等全ての電子データ	・授業のテキストを読む導入で使いたい。 ・視覚的補助教材として、日々の授業で使用する。 ・授業の時に視覚的に活用する為
	教科書本文ルビ付き	・本文に書き加えができたり、文字のポイント数を変えたりできるもの

	教科の内容に応じた手話の本	・重要語句を手話を含めて確認しながら学習を進める。
	実態把握シート	・教科書の次の単元に進む前にどのくらい習得しているかを事前に把握するシート。シートの結果から、単元の目標を設定する。
教科書とは別の教材（読解指導）（4）	古文などの映像（ビデオ教材）《ルビ付字幕がついたもの》	・市販のものでよい映像、よい内容のものがあっても字幕なしでは理解（聞き取り）が難しい。ルビがないと難解なことばも多いので、ルビ付字幕がついたものが良い。
	文学史についてのビデオ教材《ルビ付字幕がついたもの》	・便覧などよりも、視覚的に簡潔にまとまったもの。ルビ付字幕付のもの。 ・電子データになっていて、１つのテーマあたり５～１０分なら、古文や俳句・短歌、いわゆる名作の導入としても最適。
	教科書に出てくる物の写真やイラスト集	・視覚支援として
	電子教科書のような受験対策問題集	・中学部の電子教科書が非常に便利なので、高等部生の授業の時に、同じような体裁でセンター対策など指導できたらよいと思う。
教科書の補助教材（1）	それぞれの教材を日本手話に翻訳した動画、「竹取物語」や「走れメロス」等	・先にイメージを掴んで、ディベートをさせたい時にあると良い。最後に日本語に戻って、日本語の精読をさせる、というような教材の時に手話のビデオがあると良い。
辞書に関するもの（1）	国語便覧の電子版	・古文、漢文、言語事項など、大きく拡大して提示する。
評価に関するもの（10）	問題集やテストの電子データ版	・生徒の実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習を進める。 ・１人１人の間違いやすいところを対策できる。 ・授業の演習で使う。生徒の実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習を進める。また、アプリのように生徒が自分で問題を解き、自分の学習状況を確認できるとよい。 ・授業の演習で使う。生徒の実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習を進める。また、アプリのように生徒が自分で問題を解き自分の学習状況を確認できるとよい。 ・授業作りの業務軽減のため。 ・授業の演習で使う。実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習を進める。(2)

		・生徒の実態や学習内容に合わせ、問題を編集して活用する。
	音声＋文字＋手話＋指文字のテスト	・授業の評価の一部に使いたい。
	助詞の定着度を調べるためのテスト	・助詞の定着度について客観的に知ることができる。
文法事項の指導に関するもの（3）	文法の教材	・言葉で説明することが難しい文法（主に単語、助詞、助動詞など）を視覚的に理解することができるような教材。
	作文のドリル	・テーマごとに書ける作文のノートなど
	文法（教科書本文や日常会話でつかう助詞、活用する語など）問題集	・授業の演習や導入時間、宿題などで取り組む。
語彙指導に関するもの（6）	小学校低学年程度の難易度の言葉の問題集	・言葉の意味から、簡単な熟語や言葉を当てはめていく問題集。市販の『言葉力１１００』のよりも簡単なものがあれば良い。
	小学校低学年程度の難易度の言葉の教材。	・言葉の意味から、漢字や言葉をあてはめる問題集。『言葉力 1100』では、難しい生徒もいる。
	敬語の使い方についての創作劇ＤＶＤ	・敬語を教える際に、場面ごとに教えたい。
	漢字を手話で表現するソフトウェア	・漢字をタッチすると意味を手話で表現してくれるソフトウェアがあると良い。
	クイズ形式の問題集	・漢字、四字熟語などの知識についての問題でおもしろい絵入りなどで必須単語などがあったら良い。
	観点別作成問題	・観点別の語彙の問題。
その他（8）	教科書の拡大本文が簡単に写し出せて書き込んだりできるもの	・授業で一斉に本文を見たり、注目させたりするために提示する。 拡大本文コピーはそれだけで作業時間が膨大
	実物投影機	・集団で、授業課題や、内容を確認し、共通理解を図る。また個に合った学習を進める。
	タブレット型ワーク	・ドリルをするように、空き時間を利用して問題になじむような学習を行う。
	教材書を拡大できる物	・学校に実物投影機はあるが、それぞれの教室に備え付けの物があると良い。
	各教室毎に設置されたプロジェクター、スクリーン等	・ホワイトボードにプリント類を映し、そのままボードで記入する。
	タブレット PC	・でてきた単元の実物を写真で見るとイメージしやすい。

	生徒一人一人のタブレットとそれが記録できるもの	・授業の演習や学習の積み重ね（記録）に使いたい。生徒自身が自分の成長が認識できる。
	インターネットのフル活用	・教育委員会によって閲覧禁止になっているサイトが多すぎて使いづらい。

中学部では、51 の回答を得た。教科に関連する教材が一番多く挙げられた。次いで、評価に関連するものが挙げられた。教科書に関連する教材として多く挙げられたのは、電子教科書、電子黒板であった。

評価の内容として一番多く挙げられたのは、問題集やテストの電子データであった。生徒の実態に応じた目標と評価を行うため、電子データを基にテストを自作するとの記述が多かった。

【高等部】

表 1-11-3　あると良い教材（自由記述：高等部）　　N=27

教材の種類	教材名・内容	活用場面や方法
手話・字幕付きDVD（1）	教科書対応手話 DVD	・文学作品などの手話または字幕付のＤＶＤ 単元のまとめや導入として使用する。
教科書本文と挿絵の電子データ（7）	デジタル教科書	・通常の授業の中で
	電子黒板とそれに対応した教科書のデータ	・教科書を拡大提示して、難語句や重要な部分の印付けを指示したりするのに、電子黒板が利用できれば良い。 ・国語の授業で使用。 ・授業で活用 ・電子黒板を毎時使用しているが、現在は、プレゼンソフトで自作している。教材文や、写真、絵などを表示している。
	本文に関する写真や動画	・読解を支援するものとして
	聾学校用教科書の高校生用教科書（絵や写真なども一般の教科書より多い方がよい）	・中学部用の聾学校用教科書を終えてしまうと、教科書として適当なものが見つからなかった。中学校の教科書では文法、古典など、自立に向けての段階の教科書としては適当ではないように思う。
教科書の補助教材（8）	教科書の問題集の電子データ	・テストによる評価がしやすく、課題学習としても本校生に合ったように作り変えることができるため。
	同一教材におけるリライト文	・教科書の文章を、生徒の読解力レベルに合わせてリライトされたもの。
	日常会話や簡単なメール文のやりとりの例文集	・コミュニケーションの誤解が起きやすい場面を取り上げて、健聴者と、ろう者の考え方の違いがわかるような内容のものでロールプレイをする。
	ドリル学習用の教材	・家庭学習で使用
	ワークシート	・語句や文法などの聾学校の生徒のつまずきやすいところをスモールステップで学び直しができる高校生向けの教材。自学→評価テストなど生徒の実態や目標に合わせて継続し

		て取り組む。
	実物見本（例）公家や武士の装束、建物の模型など	・使い方や配置を立体的に見せる。
	生徒の意見集のようなもの（データでアップされていくような）	・１人学級のため（少人数）意見が広がりにくく限定的になりやすい。同世代の生徒が同じ単元を学習して、どのような意見を持ったかを知ることができるものがあると良い。
	実態把握とリンクした教材	・例えば、文法の比較文につまずきがあるので、この指導をしたら伸びるといった指導書や教材があると良い。
文法事項の指導に関するもの（2）	市販テストの電子データ	・生徒に必要な問題のみ選択したり、ふりがなをつけて作成できるため。
	・文法の教材	・文章作りに役立つような教材があれば良い。
読解（1）	短編集	・長文読解が苦手な生徒が多いので、８００字程度の短編集があると、補助教材として、あるいは主教材に使える。
語彙指導に関するもの（5）	大判のカルタ（漢字、ことわざなど）	・板書の代わりとして使用する。低学年の生徒や小さな文字を読むのが苦手な生徒などの指導に使う。
	・敬語を使えるようになるためのＤＶＤあるいは、脚本のようなの。	・敬語を使う具体的な場面を寸劇等で表現したＤＶＤを使って、どのように言えばいいのかを考えさせるような学習に使いたい。
	覚えておきたい、日本語表現（言葉）がまとめてある本。（高等部生徒用）	・日々の学習の積み重ねの中で、使用させ、力をつけさせる教材が合ったらよい。
	古典の動詞等活用表	・高１で古典の動詞の活用を覚える際に活用したい。（水性ペンで書きこみ、消せるように）
	国語総合、国語表現、国語現代文	・助詞の使用、敬語の学習用教材（特に副助詞の練習教材）
その他（3）	実物投影機	・書籍の一部は、スキャナー→ＰＣ→プロジェクターという３段の手間が必要だが、実物投影機なら、それ一台あればスキャンすら必要ない。
	プロジェクターやタブレットＰＣ等	・書いたものを拡大したり、他の生徒とその場で共通が図れるとよい。
	（ホワイト）マグネットボード（軽量）で細長い形状のもの	・予め本文を書き込んでおいたり、生徒の考えを発表させたりするのに使う。記述したものの並べ変えなどに使う。

高等部では、27 の回答を得た。最も多く挙げられたのは、教科書の補助教材。次いで、教科書本文と挿絵の電子データであった。教科書の補助教材については、教科書の問題集の電子データ、同一教材におけるリライト文、日常会話や簡単なメール文のやりとりの例文集、ドリル

学習用の教材ワークシート等が挙げられた。教科書本文と挿絵の電子データについては、デジタル教科書や電子黒板とそれに対応した教科書データ等が挙げられた。

また、聾学校用教科書の高校生用教科書を希望する記述も見られた。文法事項に関するものとして、市販テストの電子データ等の記述もあった。

語彙指導に関するものとしては、大型の漢字やことわざのカルタ、敬語を使えるようにするための DVD や脚本等が挙げられた。

第３項　「国語科」のまとめと考察

小学部から高等部まで、有効回答 374 名の回答であった。まず、基本情報として、記入者の教師・聾学校・学部それぞれの経験年数は、いずれの学部においても、教職経験年数が 21 年以上の教員が 36.2%～53.4%を占めていた。その一方、 聾学校経験年数が 3 年未満の教員が 24.8%～30.8%、6 年未満であれば 44.9%～53.0%と約半数を占めている。また、学部の経験年数については、3 年 未満だと 29.3%～39.2%、6 年未満では 50.3%～63.4%と半数以上を占めてい る。国語科の指導において、聴覚障害による学習上の困難さを教師が理解し、適切な実態把握と目標設定に基づき、指導内容を精選し、効率的授業を進めていくためには、国語科と聴覚障害の双方の研修が必要である。校内での授業研究や研修を通しての専門性の継承・発展のための研修体制の強化が今後も課題と考えられる。

次に、国語科で使用されるコミュニケーション手段について、どの学部ともに手話付きスピーチが 87%以上を占めていることに加え、指文字も 67.5%から 73.7%の使用となっている。板書を含む筆談も同様に 38.7%から 50.0%を占めており、国語科においては、多様なコミュニケーションを用いながら、日本語の文字での伝達や確認、定着が重視されていることが伺えた。

教科書等の教材で、比較的活用が多い物は、全ての学部に共通して検定教科書、市販のワークブックや漢字ドリル、国語辞典、漢和辞典（紙媒体）であった。国語科の教材文の意味理解のため、映像等の教材を活用しながら、徐々に言葉で言葉や文の意味を理解する方略に移行した指導が行われていることが伺えた。また、学校に保有されていないが、活用されている教材として、小学部・中学部・高等部とも電子辞書が挙げられた。今後、必要な教材としての検討が必要と思われる。

自作教材について、教科書の内容提示に関する教材、教科書の内容理解を促すための教材、国語科に関連した言語活動や言語事項に関する教材、発展や補助のための教材が挙げられ、聴覚障害による学習の困難さへの対応を意図した教材活用が伺えた。さらに、書くこと、読むことを取り上げた教材も多く活用されていた。一方で、日本語の文法や語彙指導を意図した教材も多く活用され、日本語の獲得と定着を意図した教材活用も多くなされていると考えられる。また、中学部以降、教材の現代文のバリエーションが増え、古典も登場することから、参考となる映像や動画、資料等の充実が求められていることも推察された。

提示や発表のための機器等で、比較的活用が多い物は、全ての学部に共通してパソコンとプロジェクター、デジタルカメラ、タブレット PC,黒板や発表板であった。写真や動画のデジタル化、パワーポイント資料の活用など、教材のデジタル化がさらに進むことをふまえた機器等の整備がさらに必要だと思われる。

学習評価として、市販テストの活用は、学部が上がるにつれ、使用の割合は減少していた。どの学部においても、授業のワークシート、宿題、テストと生徒の実態に応じて自作している

回答が多かった。

あると良い教材について、電子化された教材を望む回答が多かった。小学部では、写真、動画、絵等の電子データ、中学部では問題集やドリルの電子データ、 教科書の電子版等が挙げられたが、いずれも、児童生徒の実態に応じて、加工して活用したいとの記述が多かった。どのような教材であれ、実際に指導する児童生徒の実態に応じて、担当者が手を加えて活用することから、手を加えるための素材が電子化されることへの期待が高いことが伺えた。特に高等部では、字幕・手話付き DVD への期待が多かった。映像教材は多くあるものの、字幕が十分でないことから活用に制限があり、字幕付き教材が充実することが期待される。

第２節　算数・数学科

本節では、小学部から高等部までの各学部の教員２名を対象にして、教職経験、指導グループ人数、算数・数学の授業でのコミュニケーション手段、算数・数学に関する教材の有無、活用頻度、活用状況、自作教材、あると良い教材等について尋ね、得られた結果から現状と課題を考察した。

第１項　基本情報　（算数：小学部、数学：中学部・高等部）

2-1　回答数

表 2-1 に、本調査に対して調査対象とした有効回答数を学部毎に示した。

表 2-1　回答数

	小学部	中学部	高等部
有効回答数	144	116	102

※　有効回答…総回答数から教職、聾学校、学部経験年数が未記入のもの、複式学級担当、担当教育課程未記入のもの等を省いた。

2-2　教職・特別支援学校（聴覚障害）・学部経験年数

（１）教職経験年数（算数・数学回答者）

表 2-1-1 に、算数・数学担当の回答者の教職経験年数を示した。各学部共に教職経験年数 21 年以上の回答が多く、小学部は 34.0%、中学部は 32.8%、高等部は 35.3%であった。

表 2-1-1　教職経験年数　小学部（N=144）・中学部（N=116）・高等部（N=102）（数値は%）

経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	21 以上
小学部	17.4	11.8	9.7	9.7	3.5	6.9	6.9	34.0
中学部	19.0	10.3	12.1	7.8	6.9	5.2	6.0	32.8
高等部	12.7	9.8	8.8	10.8	7.8	9.8	4.9	35.3

（２）特別支援学校（聴覚障害）経験年数

表 2-2-1 に、算数・数学担当の回答者の特別支援学校（聴覚障害）経験年数を示した。各学部共に、聾学校経験年数 0~3 年の回答が多く、小学部は、32.9%、中学部は、42.2%、高等部は、34.0%であった。

表 2-2-1　特別支援学校（聴覚障害）経験年数

小学部（N=146）・中学部（N=116）・高等部（N=103）（数値は%）

経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	21 以上
小学部	32.9	21.2	13.0	9.6	6.2	7.5	2.1	7.5
中学部	42.2	18.1	11.2	6.9	9.5	4.3	2.6	5.2
高等部	34.0	23.3	13.6	4.9	9.7	3.9	6.8	3.9

（3）所属学部経験年数

表 2-3-1 に、算数・数学回答者の所属学部経験年数を示した。各学部共に、学部経験年数 0~3 年の回答が多く、小学部は、34.3%、中学部は、44.6%、高等部は、36.3%であった。

表 2-3-1　学部経験年数　小学部（N=143）・中学部（N=112）・高等部（N=102）（数値は%）

経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	21 以上
小学部	34.3	23.1	13.3	9.8	3.5	6.3	2.1	7.7
中学部	44.6	18.8	17.9	6.3	6.3	1.8	2.7	1.8
高等部	36.3	23.5	12.7	7.8	3.9	2.9	6.9	5.9

（4）担当

表 2-4-1 に、算数・数学回答者の担当を示した。各学部共に学級担任からの回答が多かった。小学部で算数を担当する回答者の 79.7%が学級担任であった。中学部で数学を担当する回答者の 47.7%が学級担任であった。高等部の数学を担当する回答者の 41.4%が学級担任であった。

表 2-4-1　担当（所属）　小学部（N=138）・中学部（N=111）・高等部（N=99）（数値は%）

	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
小学部	79.7	6.5	0.7	13.0	0.0
中学部	47.7	27.0	0.9	16.2	8.1
高等部	41.4	26.3	14.1	14.1	4.0

（5）指導している学年（算数・数学　回答者）

表 2-5-1 に、算数・数学の回答者が指導している学年を示した。全ての学年及び重複障害学級から回答が得られた。

表 2-5-1　担当学年

小学部（1～6　N=146）・中学部（1～3　N=116）・高等部（1～3　N=103）（数値は%・複数回答）

	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年	重複
小学部	13.6	25.7	15.7	26.4	14.3	14.3	5.7
中学部	53.4	48.3	50.0	-	-	-	19.8
高等部	55.3	50.5	43.7	-	-	-	25.2

（6）指導グループ人数

表 2-6-1 に、算数、数学回答者が、指導グループの人数をグラフに示した。各学部において多く回答した指導グループの人数は、小学部では、1 人の指導グループであり、回答者が 44 名であった。中学部では 3 人の指導グループであり、回答者が 25 名であった。高等部では 2 人の指導グループであり、回答者が 22 名であった。

表 2-6-1　指導グループ人数

小学部（N=143）・中学部（N=115）・高等部（N=102）（数値は人）

学部	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
小学部	44	39	25	12	12	9	2	0	0	0	0
中学部	20	19	25	23	17	9	1	1	0	0	0
高等部	9	22	21	17	18	11	2	1	0	0	1

（7）教育課程

表 2-7-1 に、算数・数学担当者から得られた小学部（算数）、中学部（数学）、高等部（数学）の教育課程の集計結果を示した。各学部共に、準ずる教育課程の回答が多く、小学部は 99.3%、中学部は 96.6%、高等部は 89.3%であった。

表 2-7-1　学部別教育課程

小学部（N=146）・中学部（N=116）・高等部（N=103）（数値は%・複数回答）

	準ずる教育	下学年適用	知的代替	自立活動主
小学部	99.3	22.1	20.7	2.9
中学部	96.6	20.7	25.0	3.4
高等部	89.3	17.5	36.9	3.9

第２項　結果

（１）コミュニケーション手段の状況

表 2-8-1 に、算数・数学担当者から得られたコミュニケーション手段の状況を示した。各学部共に、手話付きスピーチの回答が多かった。手話付きスピーチは小学部では 86.4%、中学部では 84.5%、高等部では 88.3%であった。指文字は小学部では 63.6%、中学部では 59.5%、高等部では 60.2%であった。聴覚口話は、小学部で 67.1%、中学部で 56.9%、高等部では 58.3%であった。

筆談は、学年が上がるにつれて回答が多くなり、キュードスピーチは、学年が上がるにつれて回答が少なくなっていた。

表 2-8-1　コミュニケーション手段　小学部（N=146）・中学部（N=116）・高等部（N=103）（数値は%・複数回答）

	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
小学部	67.1	86.4	9.3	31.4	6.4	63.6	19.3
中学部	56.9	84.5	18.1	37.9	3.4	59.5	4.3
高等部	58.3	88.3	10.7	47.6	1.0	60.2	4.9

（２）コミュニケーション手段の組織の方針

表 2-8-2 に､算数･数学担当者から得られたコミュニケーション手段の組織の方針を示した。各学部共に､「②学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、コミュニケーション手段を用いている。」の回答が多く、小学部は 55.3%、中学部は 50.9%、高等部は 49.0%であった。

表 2-8-2　コミュニケーション手段の組織の方針

小学部（N=141）・中学部（N=114）・高等部（N=102）（数値は%・複数回答）

	①	②	③	④
小学部	19.9	55.3	24.1	0.7
中学部	15.8	50.9	33.3	0.0
高等部	12.7	49.0	38.2	0.0

①学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

②学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、コミュニケーション手段を用いている。

③学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、コミュニケーション手段を用いている。

④その他

（3）算数の授業の学習評価で活用している教材の有無と活用（市販のテスト）

表 2-8-3 に、算数・数学担当者から得られた算数の授業の学習評価で活用している教材の活用（市販のテスト）を示した。小学部では、「いつも活用している」が多く 77.1%であった。中学部、高等部では、「時々、活用している」、「活用していない」が、「いつも活用している」に比べ多い回答があった。

表 2-8-3　算数の授業の学習評価で活用している教材の活用

小学部（N=144）・中学部（N=111）・高等部（N=100）（数値は%・複数回答）

	いつも 活用している	時々、 活用している	活用していない
小学部	77.1	7.6	15.3
中学部	18.9	37.8	43.2
高等部	7.0	40.0	53.0

（4）教材の有無と活用（算数・数学）

学校で所有していると考えられる 20～23 の教材を設問で提示し、「学校にある」、「学校にないが個人のものがある」、「ない」の 3 観点で小学部、中学部、高等部の学部ごとに集計しグラフ化した（図 2-9-1、図 2-9-2、図 2-9-3）。

小学部でよく使う教材は、検定教科書（92.2%）、市販のワークブック（78.6%）、日記・絵日記（42.0%）、カレンダー（36.7%）、写真（36.6%）、であった。時々使う教材としては、図鑑（49.6%）、手話辞典（48.9%）、インターネット上の Web 情報（42.6%）、写真（41.8%）であった。

中学部でよく使う教材は、検定教科書（91.2%）、市販のワークブック（55.2%）であった。時々使う教材としては、インターネット上の Web 情報（64.1%）、手話辞典（57.3%）、アプリケーション（46.3%）であった。

表 2-9-1　教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）

小学部	教材の有無			活用の頻度			活用の状況			
	学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1よく使う	2時々使う	3使わない	1そのまま活用している	2手を加えて活用している	3自作したものを活用している	4使わない
1 検定教科書	99.3	0.0	0.7	92.2	2.1	5.7	68.6	25.5	0.7	5.1
2 文部科学省著作教科書	70.0	1.5	28.5	3.3	8.9	87.8	3.6	9.1	4.5	82.7
3 附則の9条本	46.2	5.9	47.9	3.6	8.1	88.3	9.4	2.8	0.9	86.8
4 電子教科書（検定教科書対応）	32.3	0.0	67.7	15.5	6.4	78.2	19.3	0.9	0.0	79.8
5 市販のワークブック、計算ドリル等	70.1	28.5	1.5	78.6	17.9	3.6	72.2	23.3	0.8	3.8
6 国語辞典・漢和辞典（紙媒体）	89.7	8.1	2.2	29.0	32.6	38.4	60.8	4.8	0.8	33.6
7 電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	6.8	22.7	70.5	1.8	6.3	92.0	10.5	0.0	0.0	89.5
8 手話辞典（紙媒体、電子媒体）	89.1	8.8	2.2	24.1	48.9	27.0	71.3	4.9	0.8	23.0
9 ことば絵じてん	95.6	3.0	1.5	25.7	38.2	36.0	61.4	7.9	0.0	30.7
10 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	97.8	0.7	1.5	18.2	49.6	32.1	63.1	10.7	0.8	25.4
11 絵本（生活、行事、説明等）	97.0	1.5	1.5	21.9	38.7	39.4	60.3	6.6	0.8	32.2
12 紙芝居（生活、行事、説明等）	88.1	2.2	9.6	5.2	19.4	75.4	26.3	4.4	0.9	68.4
13 写真（人物、場所、活動場面等）	79.9	12.7	7.5	36.6	41.8	21.6	29.2	44.2	10.0	16.7
14 動画（ビデオカメラで撮影したもの）	61.7	11.3	27.1	11.7	35.9	52.3	31.3	16.5	3.5	48.7
15 カレンダー	80.7	17.0	2.2	36.7	38.1	25.2	38.1	38.9	4.0	19.0
16 日記・絵日記	61.4	28.0	10.6	42.0	17.6	40.5	40.7	12.7	11.0	35.6
17 新聞	88.2	4.4	7.4	8.7	33.3	58.0	27.5	20.0	1.7	50.8
18 広告、チラシ、ポスター	83.6	3.0	13.4	2.3	35.3	62.4	22.2	21.4	0.0	56.4
19 雑誌（幼児・児童向け、その他）	50.0	8.2	41.8	3.3	17.9	78.9	17.4	6.4	0.0	76.1
20 DVD（テレビ番組、解説等）	59.3	4.4	36.3	3.9	24.2	71.9	23.9	7.7	0.9	67.5
21 手話・字幕付きDVD	54.9	5.3	39.8	3.2	18.3	78.6	23.7	0.9	0.0	75.4
22 インターネット上のWeb情報	85.1	9.0	6.0	23.5	42.6	33.8	39.0	28.5	1.6	30.9
23 アプリケーション	71.6	5.2	23.1	13.2	25.6	61.2	35.0	7.7	0.9	56.4

表 2-9-2　教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）

中学部	教材の有無			活用の頻度			活用の状況			
	学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1よく使う	2時々使う	3使わない	1そのまま活用している	2手を加えて活用している	3自作したものを活用している	4使わない
1 検定教科書	98.2	0.0	1.8	91.2	4.4	4.4	59.3	33.6	3.5	3.5
2 文部科学省著作教科書	56.0	3.0	41.0	4.6	13.8	81.6	7.6	7.6	7.6	77.2
3 附則の9条本	31.6	7.4	61.1	0.0	9.0	91.0	1.4	5.5	1.4	91.8
4 電子教科書（検定教科書対応）	27.8	0.0	72.2	20.0	7.1	72.9	20.7	7.3	0.0	72.0
5 市販のワークブック、計算ドリル等	66.0	27.4	6.6	55.2	34.3	10.5	59.2	26.2	5.8	8.7
6 国語辞典・漢和辞典（紙媒体）	90.1	5.0	5.0	1.0	38.8	60.2	42.5	1.1	0.0	56.3
7 電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	9.5	26.3	64.2	0.0	13.9	86.1	14.7	0.0	0.0	85.3
8 手話辞典（紙媒体、電子媒体）	87.3	9.8	2.9	12.6	57.3	30.1	65.6	6.3	0.0	28.1
9 ことば絵じてん	68.7	5.1	26.3	1.1	13.2	85.7	15.0	2.5	0.0	82.5
10 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	87.1	0.0	12.9	0.0	15.5	84.5	14.1	3.5	0.0	82.4
11 絵本（生活、行事、説明等）	83.2	1.0	15.8	1.1	12.6	86.3	11.0	4.9	0.0	84.1
12 紙芝居（生活、行事、説明等）	70.0	1.0	29.0	0.0	7.9	92.1	9.3	1.3	0.0	89.3
13 写真（人物、場所、活動場面等）	72.7	8.1	19.2	13.4	35.1	51.5	21.2	21.2	11.8	45.9
14 動画（ビデオカメラで撮影したもの）	63.3	6.1	30.6	6.5	36.6	57.0	26.2	11.9	9.5	52.4
15 カレンダー	88.2	5.9	5.9	9.8	38.2	52.0	38.9	10.0	4.4	46.7
16 日記・絵日記	32.6	10.5	56.8	4.9	11.1	84.0	7.0	4.2	5.6	83.1
17 新聞	87.1	1.0	11.9	3.1	35.7	61.2	24.4	17.4	0.0	58.1
18 広告、チラシ、ポスター	80.0	2.0	18.0	0.0	27.1	72.9	19.3	10.8	0.0	69.9
19 雑誌（幼児・児童向け、その他）	55.2	3.1	41.7	1.2	13.1	85.7	10.5	5.3	0.0	84.2
20 DVD（テレビ番組、解説等）	61.1	10.5	28.4	1.2	31.8	67.1	33.3	2.7	0.0	64.0
21 手話・字幕付きDVD	64.9	7.2	27.8	1.1	27.2	71.7	27.5	3.8	0.0	68.8
22 インターネット上のWeb情報	86.1	5.0	8.9	12.6	64.1	23.3	42.7	34.4	1.0	21.9
23 アプリケーション	76.0	3.0	21.0	6.3	46.3	47.4	42.7	11.2	1.1	44.9

表 2-9-3　教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）

高等部	教材の有無			活用の頻度			活用の状況			
	学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1よく使う	2時々使う	3使わない	1そのまま活用している	2手を加えて活用している	3自作したものを活用している	4使わない
1　検定教科書	96.0	0.0	4.0	87.4	6.8	5.8	61.0	32.0	2.0	5.0
2　文部科学省著作教科書	59.6	0.0	40.4	2.5	14.8	82.7	3.9	14.3	0.0	81.8
3　附則の9条本（旧107条本）	46.2	1.1	52.7	6.7	9.3	84.0	3.9	11.8	2.6	81.6
4　電子教科書（検定教科書対応）	37.0	1.1	62.0	9.0	15.4	75.6	17.8	9.6	0.0	72.6
5　市販の問題集	76.3	20.6	3.1	46.8	45.7	7.4	51.1	38.6	5.7	4.5
6　数学辞典・漢和辞典（紙媒体）	37.2	14.9	47.9	2.4	15.5	82.1	14.3	2.6	0.0	83.1
7　電子辞書（数学辞典、漢和辞典）	4.3	17.0	78.7	1.4	8.1	90.5	4.1	0.0	0.0	95.9
8　手話辞典（紙媒体、電子媒体）	89.7	7.2	3.1	16.2	61.6	22.2	75.8	5.5	0.0	18.7
9　図鑑（生活、生き物、乗り物等）	76.0	2.1	21.9	0.0	15.6	84.4	11.5	5.1	2.6	80.8
10　写真（人物、場所、活動場面等）	63.2	6.3	30.5	6.8	22.7	70.5	10.3	16.7	3.8	69.2
11　動画（ビデオカメラで撮影したもの）	48.9	6.4	44.7	2.4	10.8	86.7	6.6	6.6	2.6	84.2
12　カレンダー	83.8	7.1	9.1	11.6	28.4	60.0	25.0	13.1	4.8	57.1
13　絵日記	29.0	8.6	62.4	1.3	7.5	91.3	5.3	5.3	0.0	89.5
14　新聞	86.3	2.1	11.6	4.2	17.9	77.9	13.8	10.0	0.0	76.3
15　広告、チラシ、ポスター	75.3	3.2	21.5	3.3	21.7	75.0	16.3	12.5	0.0	71.3
16　雑誌（幼児・生徒向け、その他）	57.4	4.3	38.3	3.4	10.3	86.2	5.1	9.0	0.0	85.9
17　DVD（テレビ番組、解説等）	59.6	7.4	33.0	0.0	15.4	84.6	12.2	4.9	0.0	82.9
18　手話・字幕付きDVD	52.7	6.5	40.9	0.0	15.6	84.4	12.7	5.1	0.0	82.3
19　インターネット上のWeb情報	86.7	4.1	9.2	18.9	49.5	31.6	23.5	42.4	3.5	30.6
20　アプリケーション	72.2	6.2	21.6	15.1	36.6	48.4	34.1	19.5	2.4	43.9

高等部でよく使う教材は、検定教科書（87.4%）、市販の問題集（46.8%）であった。時々使う教材としては、手話辞典（61.6%）、インターネット上の Web 情報（49.5%）、市販の問題集（45.7%）であった。

小学部、中学部、高等部における教材活用では、どの学部も教科書とワークブックや問題集が主要な教材として使用されている。また、小学部では、写真や絵日記、カレンダーなど具体物を使用しての授業が行われている傾向があった。そのほか、算数・数学の担当者として、教科書やワークブック以外に、国語辞典、手話辞典が使用されているところに教科指導における言語指導やコミュニケーションへの対応があることが推察された。

1)授業で活用する機器

算数・数学の授業で活用する機器として 26 の機器を設問で提示し、機器があるか・よく使う・時々使う、の 3 観点で小学部、中学部、高等部の学部ごとに集計しグラフ化した（図 3-10-1、図 3-10-2、図 3-10-3）

小学部の授業でよく使われる機器は、黒板（88.7%）、模造紙・画用紙（47.1%）、集団補聴器（39.1%）であった。中学部の授業でよく使われる機器は、黒板（85.7%）、パソコン（40.2%）集団補聴器（36.9%）であった。

高等部の授業でよく使われる機器は、黒板（92.0%）、パソコン（32.4%）であった。

表 2-10-1　小学部　授業で活用する機器

小学部	機器の有無			活用の頻度			活用の状況			
	学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1よく使う	2時々使う	3使わない	1そのまま活用している	2手を加えて活用している	3自作したものを活用している	4使わない
1　黒板	100.0	0.0	0.0	88.7	7.7	3.5	92.5	3.0	0.8	3.8
2　発表板	59.6	24.8	15.6	31.3	44.0	24.6	63.3	10.9	0.8	25.0
3　模造紙、画用紙	96.4	3.6	0.0	47.1	47.1	5.8	49.2	39.1	7.0	4.7
4　かけ算九九表	68.1	22.7	9.2	21.5	25.9	52.6	31.9	13.4	8.4	46.2
5　かずの表（幼児・低学年用）	65.2	18.8	15.9	16.7	24.2	59.1	24.4	11.4	10.6	53.7
6　指文字表（数字の表現等）	69.3	10.7	20.0	11.5	20.0	68.5	25.2	7.6	3.4	63.9
7　手話表（簡単な手話表現の絵）	58.3	10.8	30.9	9.4	18.8	71.9	21.7	10.4	1.7	66.1
8　数字カード（絵カードも含む）	79.9	13.7	6.5	25.6	36.1	38.3	38.7	14.5	13.7	33.1
9　模型・おもちゃ（時計、お金等）	87.0	9.4	3.6	30.4	48.9	20.7	65.0	14.6	4.1	16.3
10　電子黒板	55.4	0.0	44.6	9.4	12.6	78.0	14.7	5.2	0.9	79.3
11　OHP	56.9	0.0	43.1	0.8	3.9	95.3	5.2	0.9	0.0	93.9
12　パソコン（タブレットPCを除く）	99.3	0.7	0.0	30.0	35.7	34.3	49.6	12.4	5.4	32.6
13　プロジェクター	97.1	0.7	2.2	13.0	21.7	65.2	34.4	2.4	0.0	63.2
14　地上デジタル対応テレビ	83.1	0.0	16.9	12.7	21.6	65.7	30.0	3.3	0.0	66.7
15　DVDプレーヤー	88.3	0.7	10.9	4.5	18.8	76.7	22.3	1.7	0.8	75.2
16　CDプレーヤー等オーディオ機器	93.4	2.2	4.4	8.3	21.1	70.7	27.9	1.6	0.8	69.7
17　実物投影機	89.5	1.5	9.0	8.1	24.3	67.6	32.0	0.8	0.0	67.2
18　デジタルカメラ	92.6	6.6	0.7	28.3	33.3	38.4	54.8	8.7	0.8	35.7
19　デジタルビデオカメラ	96.4	2.2	1.5	11.9	26.7	61.5	37.4	2.4	0.0	60.2
20　集団補聴器	87.5	2.2	10.3	39.1	7.5	53.4	48.4	0.0	0.0	51.6
21　個人用FM等システム	51.1	18.3	30.5	30.1	12.0	57.9	40.3	0.0	0.0	59.7
22　電卓（電子卓上計算機）	60.6	32.1	7.3	6.7	40.3	53.0	45.2	0.0	0.0	54.8
23　音声記号図、調音部位図	75.0	3.8	21.2	3.9	18.6	77.5	17.2	1.7	0.9	80.2
24　母音図（口形を表した図や絵）	78.5	7.4	14.1	4.5	24.2	71.2	18.5	4.2	3.4	73.9
25　キューサイン表	42.7	6.1	51.1	0.0	9.2	90.8	6.3	1.8	0.9	91.0
26　タブレットPC	81.6	3.7	14.7	18.7	26.1	55.2	38.7	4.0	0.8	56.5

表 2-10-2　中学部　授業で活用する機器

中学部	機器の有無			活用の頻度			活用の状況			
	学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1よく使う	2時々使う	3使わない	1そのまま活用している	2手を加えて活用している	3自作したものを活用している	4使わない
1　黒板	100.0	0.0	0.0	85.7	13.4	0.9	94.6	1.8	1.8	1.8
2　発表板	58.5	23.6	17.9	15.5	39.8	44.7	54.7	5.3	0.0	40.0
3　模造紙、画用紙	97.2	0.0	2.8	13.9	60.2	25.9	31.3	36.4	10.1	22.2
4　かけ算九九表	53.0	20.0	27.0	0.0	18.8	81.3	15.5	7.1	3.6	73.8
5　かずの表（幼児・低学年用）	58.9	5.3	35.8	0.0	8.9	91.1	9.1	2.6	0.0	88.3
6　指文字表（数字の表現等）	68.7	7.1	24.2	0.0	15.4	84.6	16.9	1.3	0.0	81.8
7　手話表（簡単な手話表現の絵）	62.6	8.1	29.3	1.1	16.3	82.6	17.9	3.8	0.0	78.2
8　数字カード（絵カードも含む）	58.2	16.3	25.5	1.1	23.9	75.0	11.5	9.0	10.3	69.2
9　模型・おもちゃ（時計、お金等）	72.8	20.4	6.8	6.1	47.5	46.5	44.2	11.6	4.7	39.5
10　電子黒板	61.5	0.0	38.5	14.4	15.5	70.1	31.1	2.2	0.0	66.7
11　OHP	59.8	0.0	40.2	2.1	7.2	90.7	13.6	0.0	0.0	86.4
12　パソコン（タブレットPCを除く）	100.0	0.0	0.0	40.2	47.3	12.5	68.9	8.5	8.5	14.2
13　プロジェクター	98.0	2.0	0.0	25.2	42.1	32.7	63.8	3.2	2.1	30.9
14　地上デジタル対応テレビ	87.8	0.0	12.2	17.3	14.4	68.3	32.6	0.0	1.1	66.3
15　DVDプレーヤー	96.9	0.0	3.1	4.9	24.3	70.9	25.9	4.7	0.0	69.4
16　CDプレーヤー等オーディオ機器	93.9	1.0	5.1	5.9	11.8	82.4	17.6	2.4	0.0	80.0
17　実物投影機	79.4	1.0	19.6	13.1	24.2	62.6	34.9	4.7	0.0	60.5
18　デジタルカメラ	96.0	3.0	1.0	15.2	32.4	52.4	42.7	10.1	0.0	47.2
19　デジタルビデオカメラ	98.0	1.0	1.0	6.8	25.2	68.0	33.7	3.4	0.0	62.9
20　集団補聴器	88.1	0.0	11.9	36.9	10.7	52.4	46.9	1.0	0.0	52.1
21　個人用FM等システム	53.8	11.8	34.4	25.6	14.4	60.0	37.8	1.2	0.0	61.0
22　電卓（電子卓上計算機）	63.0	32.0	5.0	9.6	69.2	21.2	79.2	2.1	0.0	18.8
23　音声記号図、調音部位図	58.7	0.0	41.3	4.5	2.3	93.2	7.6	1.3	0.0	91.1
24　母音図（口形を表した図や絵）	64.5	1.1	34.4	4.5	4.5	91.0	10.1	1.3	0.0	88.6
25　キューサイン表	39.8	0.0	60.2	2.3	1.1	96.6	6.4	1.3	0.0	92.3
26　タブレットPC	84.8	1.0	14.1	14.3	39.8	45.9	47.8	5.4	2.2	44.6

表 2-10-3　高等部　授業で活用する機器

高等部	機器の有無			活用の頻度			活用の状況			
	学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1よく使う	2時々使う	3使わない	1そのまま活用している	2手を加えて活用している	3自作したものを活用している	4使わない
1　黒板	99.0	0.0	1.0	92.0	7.0	1.0	96.9	2.1	0.0	1.0
2　発表板	56.1	15.3	28.6	10.2	46.6	43.2	55.4	4.8	0.0	39.8
3　模造紙、画用紙	98.0	1.0	1.0	8.9	65.3	25.7	33.0	29.7	17.6	19.8
4　かけ算九九表	57.9	6.3	35.8	1.2	6.0	92.9	7.8	1.3	1.3	89.6
5　かずの表（幼児・低学年用）	52.2	2.2	45.7	0.0	2.5	97.5	4.1	0.0	0.0	95.9
6　指文字表（数字の表現等）	59.4	4.2	36.5	1.2	7.3	91.5	7.9	0.0	0.0	92.1
7　手話表（簡単な手話表現の絵）	52.1	4.3	43.6	0.0	8.3	91.7	6.6	2.6	1.3	89.5
8　数字カード（絵カードも含む）	58.1	7.5	34.4	2.4	20.0	77.6	11.8	5.3	9.2	73.7
9　模型・おもちゃ（時計、お金等）	75.3	12.9	11.8	6.7	41.1	52.2	39.5	8.6	4.9	46.9
10　電子黒板	64.6	1.0	34.4	4.4	18.7	76.9	22.0	3.7	0.0	74.4
11　OHP	61.1	0.0	38.9	2.5	2.5	95.1	6.6	0.0	0.0	93.4
12　パソコン（タブレットPCを除く）	99.0	1.0	0.0	32.4	45.1	22.5	56.5	15.2	8.7	19.6
13　プロジェクター	98.0	0.0	2.0	19.2	30.3	50.5	43.7	5.7	1.1	49.4
14　地上デジタル対応テレビ	90.6	0.0	9.4	11.3	26.8	61.9	38.8	1.2	2.4	57.6
15　DVDプレーヤー	97.9	0.0	2.1	3.0	22.2	74.7	23.3	3.5	1.2	72.1
16　CDプレーヤー等オーディオ機器	92.8	2.1	5.2	3.0	13.1	83.8	17.6	2.4	0.0	80.0
17　実物投影機	89.6	0.0	10.4	8.3	20.8	70.8	25.9	2.4	2.4	69.4
18　デジタルカメラ	95.9	2.1	2.1	5.1	33.3	61.6	34.9	8.1	0.0	57.0
19　集団補聴器	85.3	1.1	13.7	22.2	14.4	63.3	31.4	2.3	0.0	66.3
20　個人用FM等システム	55.7	9.1	35.2	11.0	7.3	81.7	17.9	1.3	0.0	80.8
21　電卓（電子卓上計算機）	79.6	16.3	4.1	11.1	60.6	28.3	69.6	3.3	0.0	27.2
22　音声記号図、調音部位図	44.3	0.0	55.7	0.0	0.0	100.0	2.7	0.0	0.0	97.3
23　母音図（口形を表した図や絵）	48.9	0.0	51.1	0.0	1.3	98.8	2.7	0.0	0.0	97.3
24　キューサイン表	27.0	1.1	71.9	0.0	0.0	100.0	1.4	0.0	0.0	98.6
25　タブレットPC	85.6	3.1	11.3	15.6	42.7	41.7	49.4	7.1	4.7	38.8

2)自作教材（算数・数学）

算数・数学における自作教材について自由記述による回答を求めたところ 199（小 100、中 47、高 52）件の回答を得た。記述内容を①使用用途、②教材例、③活用内容に分類し、さらに使用用途については、「教科書の内容の視覚的情報保障の充実」、「教科書の内容理解を促す教材」、「算数・数学に関連する言語活動や言語事項に関する教材」、「学習内容の定着、発展のための教材」の４カテゴリーに分け整理をした。

また、「教科書の内容理解を促すための教材」については、「授業全体に関わるもの」と「特定の単元」の２つのカテゴリーに分けた。表 2-11-1 に、結果を示した。

表 2-11-1　自作教材（回答 199：小 100、中 47、高 52）

使用用途	教材例	活用内容
教科書の内容の視覚的情報保障の充実(35) (小 14) (中 12) (高 9)	拡大図	・Ａ４模造紙大に拡大できるため、教科書を拡大して児童と一緒に問題を解いたり、説明する。(小) ・教科書等に描かれた図形を拡大して示し、問題の解き方を一緒に考える。(小)
	カード又は図	・問題文の提示で活用する。 日常生活や社会生活でなじみのある数学的事象を絵や図にしておく。問題文を提示する際、情景図を添え、生徒がイメージしやすくする。(高)
	穴うめＰＤＦ	・黒板の内容をＰＤＦで作成し、プロジェクターで黒板に写す。穴うめの部分を作り、既習内容や、前後の式から生徒に思考させて答えさせる（高）
	提示用模造紙	・ポイントをかいて提示し、黒板の目につくところに貼る。(中)
	言葉カード（大）	・計算や問題を解く手順を学習する場面で使う。復習や確認の場面でも使う。 学習のポイントを押さえる時に使う。(小)
	文字カード	・問題文の提示場面 算数の用語の押さえ（小）
	式の意味カード	・式をイメージしやすいようにイラストも加えて提示する。(小)
	教科書をデータ化している板書データ、プレゼンテーションデータ、教材ビデオ	・プロジェクター表示する。(高) ・あらかじめタブレットで板書計画をし、応じて、プレゼンテーションソフトやビデオを織り交ぜ、生徒の理解を促す。(中)
	教科書紙面の画像（テレビやｉｐａｄ）	・問題の意味の説明や解き方を話し合う際に、その部分を拡大強調して見せる。(小)
	パワーポイント	・動きをイメージできるようにする。(小) ・問題文の提示や、数直線や量などの考え方などに使う。(小) ・問題文を画像とともに提示し、内容をイメージしやすくする。アニメーションをつけ、算数的事象を視覚的に捉えられるようにする。(小) ・視覚情報を補うために板書と併用して使用する。(小) ・問題の提示、数直線の提示、問題文をイラストで表し動かすことでイメージを持たせ

る等、様々な場面で使っている。（小）
・算数の計算の方法をわかりやすく図示するために使う（小）
・動きがある物などは、プレゼンソフトのアニメーションを活用している。（小）
・問題文の提示場面、１文ずつ提示したいとき、絵を入れたいとき増減が分かりやすいように、アニメーションを作成し、実態差に対応するようにしている（小）
・図やイラストに動きを加えたいときにつかう（中）
・ストーリーで興味を持たせ、文章問題の苦手意識を軽減したり、楽しく取り組ませたりすることが目的。（中）
・関数や図形の単元の時に自作したものを使用する。板書に時間がかかるため、パワーポイントで出すことにしている。（中）
・１つのスライドの情報を極限まで減らして、扱いやすく加工し、利用している。（中）
・数えるものを動かして分かりやすく説明したい時に活用する。（中）
・文章題の提示（文章＋イラスト）ポイントのまとめ。（中）
・数学の問題提示に使用、もんたメソッドで解答を開くように使う。（中）
・問題文の提示や、学習内容の説明のため作成する。（中）
・課題のイメージ化の補助（視覚的支援として）（中）
・例、数学Ⅱの三角関数、動径など図形に動きを加えたいとき。（高）
・確率の授業で問題文をイメージで図示して、生徒の理解を促す。（高）
・授業中の説明文・授業の流れを掲載（高）
・導入やまとめなどをスムーズに行うために、活用する。（高）
・既習の重点事項をまとめたものをいつでも提示できるようにしている。
問題文（今日の学習）の提示。
これまでの学習の違う点を全体で共有している。（高）

	電子黒板提示用教材	・専用アプリケーションを用いて、その授業で必要な視覚情報の提示や、情報共有のためのツールとして活用している。(中)
	重要な式や性質を書き、裏に磁石を貼った掲示物	・重要な式や性質を覚えたり、復習したりするときに使い、視覚を活用して、生徒の理解に役立てる。(高)
教科書の内容理解を促すための教材(120) (小 70) (中 20) (高 30)	学習カード 絵カード	・内容理解のためのカード（小） ・りんごやブロックなど、１つ１つのもの、１０のかたまりのものを用意し、黒板で操作しながら児童・教員ともに説明しやすいようにしている。(小) ・問題文の提示場面 イメージや理解を促す場面（小） ・文だけでなく、具体的にわかるように絵カード等にしておく。(小) ・イメージをしやすいよう具体物を絵にして提示する（小） ・問題文の視覚化に使う。 操作して増える、減るのイメージを持ちやすくするために使う。 数量の関係の視覚化に使う。(小) ・単元の最初の導入として、教科書に沿った絵など提示し、イメージしやすくする。 （小） ・問題文の提示や、他の意見を提示する際に使い、視覚的に分かりやすくする。(小) ・問題文の提示場面で使う。学校や日常生活で馴染みのある算数的事象を絵カードにしておく。問題文を提示する際、情景図として添え、イメージしやすくする。 （小）（４）
	絵カード、問題文の紙	・問題文等の提示（小）
	絵カード（お金、１Ｌ、１ｄＬマス）など	・立式した後、絵カードを操作させて数のイメージを作る。１Ｌ、１ｄＬマスは、実物を使用した後、(イメージ定着後)、計算時に使用した。(小)
	もしくは教科書からコピーした絵カード	・問題の提示で使用する。 教科書に載っている絵や図を拡大したもの、あるいは自作したものを黒板に掲示し、具体的操作を行いながらイメージしやすくする。(小)

果物（お菓子）の模型	・算数の導入等で提示する時に使用。 児童の興味、感心を引き出す。 児童も教師も使用。（小）
絵カードや教具	・問題文の提示の際、生徒が具体的にイメージできるように、身近で興味、関心が高いものを題材に取り入れる。教具は生徒が自力で操作できるようなものに改良したりする。（高）
単位や道具等を絵つきでまとめたもの	・教室内に掲示し、日常生活の中で目にふれるようにする。（小）
写真カード	・先生、子どもの顔写真、教室場所のシンボル、校外学習先等ラミネート加工して、授業で使用する。（小）
提示物	・教科書の説明や図だけでは足りないと思う所を補う。 図や大切な所の強調など（小）
重要な式や性質を書き、裏に磁石を貼った掲示物	・重要な式や性質を覚えたり、復習したりするときに使い、視覚を活用して、生徒の理解に役立てる。（中）
教室掲示物	・大切な公式などをまとめてけいじする。問題をとくときに、子どもが振り返ってヒントにすることがある。（小）
問題解決のため必要な図や数値線など（全体提示用）	・問題文の提示場面～問題解決へと導くやりとりの場面で使う。（小） ・集合数や順序数のイメージをもち易くして、大きな数の学習を行っている。（小）
絵	・説明する際に、できるだけ具体物に近い状況で考える場面で活用している。（高）
数字カード	・実物とマッチングして数の意味を知らせる。（小）
取り表位	・大きな数や小数の学習の際に、位を意識できるように使う。（小）
数字カード	・１～１０の数、数量、指文字を一覧表にまとめた。数を数える時に活用している。（小）
１００、１０、１のカード	・操作しながら数の構成を位をイメージできるようにする。 筆算の仕方のイメージをもたせる。（小）
１の位１０の位カード	・１の位と１０の位が分かるように操作しながら学習するためのカード（小）
位取り板、黒板用、児童個人用	・一億をこえる数を読んだり、書いたりする

	時に用いる。４ケタに分ける概念を養う。（小）
位取り表や数直線などの視覚教材	・ホワイトボードに貼って見せたり、児童が動かしてみたり考えたりする時に使う。児童のイメージをふくらませ、思考の手助けとする。(小)
位取り表	・大きい数や小数のしくみの指導の場面で○がいくつで□の考え方を各自記入して確かめる（小）
数カード（漢字、数字)	・数字と読み方が書いてあり、裏面に漢数字が書いてある。(小)
数カード	・数の提示や、指文字の練習場面で使う。ドットのあり、なし、大きさなどを、児童によって指導者が選んで使っている。(小)
公式カードや要点カード	・重要な公式や繰り返し出て来る公式や要点などをカードにまとめ、振り返りの際などに提示する。容易に提示できることで生徒の知識の定着に繋がる。(高)
公式カード	・毎回復習等で使用している。(高)
プリント、掲示教材	・教科書の問題を提示する際、習熟のためのドリルを行う際、スキャナーして編集、作成したものを使用する（小）
プリント	・単元のねらいにあったプリント（小） ・(小) ・例題、練習、教科書の確認で使用している。（高）
学習プリント	・学習内容の整理や定着のためのドリル、復習などに使う（小）
問題プリント（掲示用拡大プリント含む)	・学習した内容の確認・復習（小）
教科書の内容でリライトしたプリント	・生徒がノートをとる時間を少なくし、できるだけ、前を見て考える時間を確保するために利用（高）
授業プリント	・問題文の提示・図や絵を含めて提示する練習問題（高） ・問題文を分かりやすく提示（図や表など）（高）
学習プリント	・スモールステップで学習を進めるために使用している（高）
説明プリント、計算プリント	・□の中にあてはまるものを答えるように授業を進める内容。(高)

テキスト	・小・中学校の内容を含むなど生徒の習熟や実態に合わせた自作のテキストやプリントを毎時間の授業で使用している（高）
フラッシュカード	・その時間のねらいになっている部分をカードにして視覚的にとらえやすくする。(小)
プレゼンテーションソフトを用いたフラッシュカード	・時計の読み方、筆算、四則演算などをフラッシュカードのようにスライドで作成しておき、復習等で活用する（小）
計算などのフラッシュ教材	・(小)
"フラッシュカード（Ｐｏｗｅｒ　Ｐｏｉｎｔ）"	・復習や導入場面　分章問題の提示（高）
公式カード	・計算する時に一緒に提示する。忘れてしまっている生徒もいるので、確認する時にフラッシュカードのように用いたりもする。（中）
カード	・誤りがあった場合に確認する場面で使う。家で練習をするときに使う。（手順を確認しながら練習する）(小)
指導書の付録の確認テスト集	・単元のまとめ時等に活用（高）
指導書の付録（確認テスト）	・単元のまとめ（高）
計算カード	・学習した、計算をカードにして、くりかえし学習させる（小）
算数の公式を書いたカード	・分数、対称の図形、面積等関連のある単元で、提示し、確認する。(小)
九九カード	・表に九九を裏に各式に対応した図をのせておりイメージをもちやすくしている。(小) ・苦手な九九の確認用に、間違えた時に使って復習する。(高) ・児童と一緒に書き込みながら、学習する。(小)
既習事項カード	・公式や図形の定理など重要なものをカードにまとめておいて、何を使って問題を解くか考えさせるのに使用している。(中)
算数セット	・授業全般、具体物の操作を通して数量感覚を養う（小）
ブロック・箱	・面積や体積の学習の際に、イメージを持ち安くするために使う。(小)
ブロック図	・たし算、ひき算場面において黒板上で操作し、イメージできるようにする。(小)
タイル	・数概念の学習の時に使用している。まとまりを理解しやすくなる。(小)

数直線	・大きな数を数える時に使う。数が変わることで１めもりの数が変わり、確認することができる。（小）
目盛りカード	・紙で作ったためもりカード。数の大小順番などを確認する時に使う。１０のまとまりを意識させるときにも使う。（小）
ブロックドット	・児童が･算数教材で持っている物を、拡大して、黒板に提示しやすくしたものを使用。（小）
高さを調べる学習教材	・中３の相似のまとめとして使う。実際に測定が難しい高さを、数学の知識を活用して求めることで、数学と実生活での活用を考えるきっかけとしている。（中）
分数タイル 円の面積の学習用	・課題を考えるときや、考えをまとめて発表するときに提示して使用する。（小）
図形	・立方体の学習など（小）
立体模型	・中１図形で利用（中）
カード、図形 立体図形	・視覚的にとらえられるように提示している。（最大公約数、最小公倍数、展開図、面積等）（高）
図形等のパワーポイント	・辺や面、頂点の問題をする時、使っている。（小）
図形の拡大したもの	・図を用いる問題で、教科書の問題と同じ図形を拡大コピーをし、黒板に貼って使用する（中）
図形の性質のカード	・繰り返し使う「図形の性質」では、カードを使ってくり返し使えるようにする（中）
時計のカード	・時を分に、分を秒に変換する学習の際に活用する。図を併せてのせており、イメージをもちやすくする。（小）
模擬時計	・何時が理解できるように、手元で動かせるようにしている。（小）
パワーポイント教材（時計）	・時刻の読み（○時、○時３０分）を学習する場面で使用する（小）
直角三角形	・三角比の学習で活用。（高）
図形	・問題文の提示で活用する。書き込みした物を復習等で使用する。（高）
図	・三角形などの図をラミネートしてマグネットを付けて活用し。辺の長さや角度を書き込める。再利用が可能（高）
方程式の天びん	・導入の際に使う（中）

べきタイル	・因数分解、展開（中）
わり算（文章問題）のプリント	・児童が文をきちんと読めているかをたしかめるために、文を読んで分かることと求めることを書かせて、式を書かせる。絵を書かせる時もあります。（小）
復習プリント	・さまざまな問題にふれながら復習をする（小）
パソコンフリーソフト	・関数のグラフの表示（変化も含め）計算練習、Ｅｘｃｅｌで作ったブラックボックス（中）
パソコンソフト	・方程式、関数のグラフ等のくり返しドリルで利用（技能の定着のため）（中）
関数の増減表	・関数のグラフを書くときに。拡大してホワイトボードに貼り使用している。（高）
グラフや図などのアニメーション	・グラフを描画する動きや、軌跡（図形と方程式）など、イメージしにくいものをアニメーションで見せることでイメージしやすくすることができる。（高）
立体模型	・空間図形の説明で活用（高） ・問題を解く際に立体を見せ目で見て考えられるようにする。（高）
単位換算表や公式などの掲示物	・生徒が忘れた時に、見て確認する。（高）
木製キューブ	・線（Ｘ）、面（Ｘ２）、立体（Ｘ３）の考え方や、数とのマッチング（高）
現金	・買いものの練習や数（金額）の操作に使用する。（小）
お金	・１２０÷３、６００÷３の時の計算のイメージがわかるように。（小）
商品カード、お金、レシート	・買い物の計算を行う際に生徒が視覚的にイメージができるように使う。（高）
１～１０までの具体物教材	・ボーリング、魚つりゲーム、缶つみゲーム、すごろく、具体物の写真カード（１０ヶずつ）など、数える学習に活用している。（小）
具体物	・児童が自ら操作し、理解を深めるために使用する（小）
具体物（あめ、ブロック、紙皿）お金（小銭）	・かけ算、わり算や筆算の指導で、手指を動かしながら理解できるようにしている。（小）
お金の模型	・操作活動に使用（小）
大きな時計	

量や長さ、面積の感覚をつかむための視覚的教材	・長さ、面積→実際にその長さのテープを出して紙にはったもの 量→単位変換がしやすいようにＬやｄＬのビーカーを絵に表したもの（小）
お金カード	・問題を解く時に、操作をして使用する。イメージしやすくする。（小）
量概念学習教材	・水の量や分数等の指導場面で使う、操作をしながら単位換算させたり、仮分数、帯分数の理解を促す（小）
お金の計算カード	・金額を読み取るときに使う、５０円と１０円５個が同じであることを比較する時に使う（小）
方程式、移項	・ＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔで、左辺から右辺（またはその逆）を動かして、移項する様子を視覚的に理解できるようにしている。（中）
方程式の上皿てんびん	・方程式の導入で使う。左辺と右辺をてんびんの皿に置きかえて、黒板に提示し、方程式の意味や解の意味の理解を促す。（中）
プレイスフォルダ	・「文字の式」の代入の学習の際に使用、文字の代わりに数字を入れるイメージがしやすいように、実際に数字カードを文字を入れて理解を促す。（中）
文字式神経衰弱	・連立方程式などの導入で使う。（中）
グラフソフト	・ｙ＝ａｘのａを変えるとグラフがどのように変化するか、生徒に予測させる（中）
お金の学習	・お金の計算問題で使用。プレゼンのアプリで作成。生徒自ら操作して学習を進めることができる。（中）
正負の数スケーラー	・正負の数の計算で使う数直線。縦方向で数値の増減を考える。（中）
一次関数トランプ	・式、表、グラフ、文で表された一次関数のうち、同じ関数のものを集めていくカード。式、表、グラフ、文を使い分ける力を育成する。（中）
てんびん	・（一次方程式の理解を促す。（等式の性質）（中）
百玉そろばん	・くり下がり引き算の指導でイメージをもたせるため。（高）
ペンやシール等	・場合の数や確率を考える際手元で動かせるものとして使用する（高）

	お金の計算プリント	・日々の宿題で使用 １０円玉～５００円玉までの様々な全種をまぜて出題（高）
	磁石付きコンパス	・普通のコンパスよりもブレることなく半径を好きな長さに決めて書くことができる（高）
算数・数学に関連する言語活動や言語活動や言語事項に関する教材 (11) (小 5) (中 1) (高 5)	キーワードカード	・問題文の読み取りの際に使う。「分かっていること」「聞かれていること」「１つ分の数」「全部の数」など、大事な部分を押さえる時に意識しやすくする。（小） ・写真や図等を提示。（高）
	ことばカード	・重要な言葉が登場する時、復習の時に使う。（高）
	ポイントカード	・数学用語やポイントを確認するときに、活用する。 生徒が考え方をイメージしやすくなるように用いる。（高）
	公式カードやグラフ、図、名称カード	・面積や体積のような基礎的なものから乗法公式と因数分解の公式などをマッチングさせる時に活用する。（図形と名称のマッチング等もいろいろ）（高）
	ものの数え方表	・日常生活で使うものの教え方を表にまとめたもので、教室等に掲示しておくことで、教え方についての知識を必要に応じて確認したり覚えられる。（高）
	宿題プリント	・数の読み方等（小）
	数カード	・数の読み方、書き方の確認、並べかえ、たし算、ひき算（小）
	表	・毎日、くりかえし、言い慣れさせ覚えさせたい、フレーズや文章を、大きめの紙に書き、くりかえしとなえさせる（小）
	ふりかえりプリント	・１日の活動中にあったことを１つとりあげ、写真の下に文をつけてプリントを作って宿題にしている。文の中の（ ）に言葉や助詞を入れるようにしている。（小
	フラッシュカード（重要語句、イラストなど）	・重要語句については、単元が終わるまで常に掲示をすることが多い。 イラストは文章問題など言葉（文章）の意味をイメージして理解しやすいようにする時に活用。（中）

学習内容の定着 発展のための数材 (33) (小 11) (中 14) (高 8)	自作の練習問題	・宿題や反復練習する時間に使う（小）
	自作のプリント	・さまざまな解き方を紹介したり、日常生活の中にどう活用されているか考えさせたりするため（小） ・学習単元により、また、生徒の到達度に応じて使用している（高） ・単元の終了時に、教科書の内容で作成している（高） ・(小)
	習熟プリント 自作のまとめのプリント	・時間での学びの確認の為、児童の実態に合わせ、大事な言葉を〇抜きに書かせたり、計算の仕方がわかりやすいよう枠をつけたり等工夫。宿題として活用している。(小)
	プリント	・類題や、計算練習等板書を写す時間を短縮させたい時や効率性を考えて自作プリントを使っている。(中)
	自作のプリント教材用エクセルシート	・授業のはじめに復習用に用いる。数値がランダムに変化するようになっており、繰り返し学習をすることで基礎の定着を促す（中） ・生徒が問題文を読みとりやすいようにことばをかえたり、改行するところをかえたりしている。(中) ・中１、正の数や負の数の計算、文字式の計算、方程式、中２の文字式の計算、中３の平方根二次方程式等の解き方を定着させる為の計算練習のプリント。数値を簡単にかえて同じ問題をくり返し解いて定着を図る。(中) ・授業、家庭学習（中） ・例題で提示し、練習に使う。(中) ・教科書の説明が簡単にしたもの。できるだけスモールステップできるようにしている。ノートに貼らせて一緒に確認している。(中)
	自作の計算プリント	・毎時間はじめの５～１０分で取りくむ。くり返し取りくむことで、計算の基礎力の定着を図る。(高)
	教科書の内容を穴うめ形式にしたプリント	・職業科で採用している教科書がこのプリントを用意しているので、時間短縮

	のため使用している（高）
自作の宿題プリント まとめの自作プリント	・市販の問題集を使っていましたが、生徒の実態を考えると、自作の方が使いやすい。（高）
ワーク、ドリル問題 （Ｗｅｂ、無料で使用可のもの）	・宿題等で習熟定着をはかるため（小）
自作のワークシート	・調べ学習の時に、結果を書きこみやすいように。（小） ・課題の理解を深めるために活用する。実際の場面をイメージしやすくする。（高）
問題文	・問題文の理解を促すために使う。わかっていることと聞かれていることを色分けした線を引いて、問題文の意味を理解する手がかりとしている。（小）
個人購入の問題集	・発展問題をさせたい児童に対してコピーして使っている。（小）
問題文（自作）	・児童の生活場面にもとづいた問題を提示する。（小）
文章題などの基本型	・各単元の基本型をもとに指導している。子どもたちは、できるようになっている。（小） ・それぞれの語いや力に合ったスモールステップの問題を自作して使用している。（中） ・校内（小・中・高）で統一したものを活用。小１～高の内容を網羅している。全４００枚程度、中学部では週２回×１０分で取りくんでいる。（中） ・計算問題で使用。生徒が計算ミスをしそうなところを穴うめ問題にすることで、ミスをしないように促している。（中）
学級通信	・折々の行事や学習の様子の写真をとりこんだ通信（Ａ４）を作成し、授業の振り返りや家庭学習に用いる。（小）
代入 移項説明器 単語カード	・文字に数字カードが入るもの カードがひっくり返る→手話とリンク 黒板提示(中)
計算トランプ	・計算とその答えを、ゲーム感覚でマッチングさせる。（中）

すごろく	・数字に親しんだり、ゲーム感覚で楽しめるようにする。とまったコマごとにお題を用意し、ふり返り、復習課題ができるようにする。(中)
ＨＴＭＬを使用した教材（自作）	・ＨＴＭＬを使用して数学の公式等がＰＤＰに表示されるもの。昨年学習した内容は全てここから表示している（中）
マグネットシート	・視覚的イメージを持たせるために使うことが多い。(高)
毎月のカレンダー	・毎月初めに作製 授業のある日にシールを貼る（高）

3) あると良い教材

算数・数学担当の回答者から、「このような教材があったら良いと思われるもの」について自由記述を求めたところ、116件の回答を得た。回答についてその内容を検討し、次の10のカテゴリーに分類した。

分類のカテゴリーは、①「板書等の視覚情報の充実」、②「提示用（教科書等）ソフトウェア」、③「計算等練習ソフトウェア」、④「操作関連教材」、⑤「問題集・九九等練習教材」、⑥「テスト集計用教育事務ソフトウェア」、⑦「評価の検査（意欲・習熟度等）、⑧「児童生徒用パソコン・電子機器」、⑨「他の学校の実践、データベース等」、⑩「言語事項に対応する教材」である。

小学部では、回答の多かった順では、板書等の視覚情報の充実（10 人)、提示ソフトウェア（19 人)、問題集・九九等練習教材（4 人）であった。中学部では、評価の検査（6 人)、操作関連教材（4 人)、板書等の視覚情報の充実（4 人）であった。高等部では、評価の検査（6 人)、板書等の視覚教材の充実（5 人)、提示ソフトウェア（3 人）であった。

表2-12-1に、具体的な記述内容を示した。

表 2-12-1　あると良い教材(116 回答　小 45、中 32、高 39)

使用用途	教材例	活用内容
１板書等の視覚情の充実(23) (小 10) (中 5) (高 8)	教科書の電子書籍	・授業（中）
	最新のデジタル教科書	・現在学校にあるものは、子どもたちの教科書と違うことがあるので、繰り上がりが目で確認できたりするデジタル教科書があればと思う。(小)
	デジタル教科書	・教科書と内容のリンクしたデジタル教科書があれば、電子黒板等を使っての学習も可能に。費用面での課題解決が待たれる。(小)
	教科書の内容がその通り表わせる電子教科書	・毎時間使いたい。クリアに見れるものがほしい。（小）
	１００インチサイズの電子黒板	・より具体物に近いものを提示でき、運用が黒板より良く効果は大。(高)

電子教科書	・内容の理解を深めるためのコンテンツが充実しているので、必要に応じて補足的に視覚面での支援に使いたい。（小）
電子教科書の無償配布化	・イメージの持ちにくい聴覚や知的に障害がある子には無償で電子教科書を配布することが望ましい。対処療法的に教材ソフトを作るのではなく、その予算を使って、教科全体をサポートできるようにすべきではないか。（小）
デジタル教科書及び附属の生徒が学習するデジタルアプリ	・スモールステップで提出する部分を選んで、授業のすすめ方を教師が選択できるものが出てきている。もっと安価に使用したい。高価で手が出にくい。（中）
デジタル教科書	・授業時に使用（高）
電子黒板	・図や写真を提示したり、それにかき込んだりすることで、学習内容への理解がよりスムーズになると思われる。（小）
	・（小）
	・関数で連続する変化を見せる。 図と公式の関連性（視覚情報）（高）
数直線や線分図が書かれた小黒板	・問題を解く際、活用。 児童同士の思考の際につかわせる。（小）
ビジネスプロジェクター（電子黒板）	・黒板を方眼用紙のように表すことで、図形等の辺の長さや大きさを理解しやすくなると思う。また、タブレットが普及した際に子どもの考えを投影し、共有するなど色々な使い方が期待できる。（小）
電子黒板か実物投影機（持ち運びに便利なサイズ）	・スムーズに教室間を移動させて、授業で活用したい。（小）
電子黒板とそれと、通信できるタブレット。	・書くことの意義は有ると思いますが、どうしても、遅れがちになるので、時間短縮をして、課程に遅れが生じないように活用したい。（高）
黒板本体に問題を映せるプロジェクター	・ｅｘ：文章問題を投影してポイントや線をかきこめるように（高）
生徒の解答や考えを電子黒板上にすぐに投映できるようなシステム	・生徒の解答や考えを電子黒板上にすぐに投映できるようなシステム（高）
デジタル教材（無償のもの）	・授業での活用（中）
問題に合った動画	・動点の問題や他の文章題（教科書の）において見ることで、題意が理解できるものを使って、文章表現の方法や、文章やことばの勉強にも、つなげられるものがあると良い。（中）
文章題のイメージ化した	・視覚的情報の活用。

	アニメーション	言葉（文章）から、イメージ化し、数学的な考え方を身につけたい。(中)
	大型モニター（各教室備え付けのもの）	・教材の提示（導入部）やまとめなどで使用。(高)
	テストや確認のためのもの	・動画があるとよい。関数（高）
２提示用（教科書・図形）ソフトウェア(26) (小 19) (中 4) (高 3)	図形に関する PC ソフト	・上記と同じで、立方体の学習、体積を求めたりする時に、アニメーションで見たりするソフトがあれば、理解しやすいと思われる。(小)
	ｉｐａｄで動く図形アプリ	・角柱や円柱などの立方体を学習する際、回転させて、いろいろな角度から見たり、見取り図や展開図になる過程をアニメーションで見たりすることで、図形へのィメージが深まると思われる。（４）(小)
	３Ｄ立体（立方体体積）がイメージしやすいＰＣソフト	・(小)
	立方体と直方体の展開図がわかるソフト	・実際に工作用紙で作らせるが、数に限りがあるので、いろんな立体を展開し、イメージをふくらませたい。(小)
	文章題や図形のシミュレーションソフト	・デジタル教科書（指導書）である程度視覚的に理解を補っているが、もっと自由度のあるシミュレーションができるようにしたい。(中)
	空間図形を回転させたり切断面を提示できるソフト	・空間図形の性質やその図形を基にした２次曲線等の提示に使う。(高)
	１０００００００ｃｍ^3＝１ｍ^{3}の分かりやすいソフト	・(小)
	図形や数量関係に関するソフトや視覚教材	・目で見て形や量関係がわかる教材があると良い。(小)
	図形の描き方の映像	・道具の動かし方や描く過程を映像で見せることでイメージがつくし、確認ができる。(小)
	分かりやすい動画教材	・文章で説明するより分かりやすい。視覚的に理解しやすいものがあれば、どの単元でも使いたい。(小)
	聴覚障害者用の教科書	・(小)
	数の概念が身につくようなもの	・映像などで、数や単位の概念が身につくようなものが欲しい。(小)
	視覚的に分かるデジタル数直線（板書用ホワイトボードでも）	・例えば１／２と２／４が同じなど、目で見て分かる数直線図があると良い。色をつけたり、消したりできるもの。他にも、同じような数直線を書かせることが多いので、ホワイトボード用教材があると良い。(小)

	抽象的な概念を視覚的に表現できるソフト	・"具体から抽象になっていく算数で、苦手意識をもつ児童も多いので・・・ ｅｘ）単位量をならすことや、平面、立体がどれくらい大きいかわかりやすくできるものなど・・・"（小）
	時間の経過が時計の針の動きとともに分かるＰＣソフト	・時の経過が線分図や模型で理解することが難しい児童に対し、経過が針の動きとともに表わされるソフトがあると、時間の計算等につながると思う。（小）
	時計に関するＰＣソフト	・時間の経過を動画でイメージできるような教材。（小）
	タブレット端末で使える無料の算数のアプリ（量、体積、立体）	・三次元のもののイメージをもてるように。（小）
	図形や計算など個人が使える算数全般のアプリケーション	・個別指導時に（小）
	関数を理解するための教材	・関数の指導の導入時に活用できるとよい（中）
	教科書に対応したパソコンを使って使用できるソフト	・特に、関数のグラフ（比例、反比例、１次関数、２次関数など）について、パソコンで作成できるものがあるとよい。例えば、ｙ＝２ｘ＋１の入力から、グラフが作成できるもの。（中）
	比例・反比例・一次関数などのソフト 回転体のソフト	・パソコンで、数値を入力したり、図形を選ぶと簡単にグラフや立体が出てくるソフト。 ☆高価だったり、使いにくいときがある（中）
	パソコンソフトというかデータ。	・２次関数のグラフがプロットされ描かれる動画。 場合の数の樹形図ができるような動画。 （インターネットを探すと、計算などの細かい資料や、パターン分析などはよく見ますが、視覚に訴えるような動画はないようです。）（高）
	計算ドリルのソフト（小１～高３） 数ＩＡⅡＢⅢ	・小１～高３まですべての計算が入ったドリルがあると使いやすいかなと思います。生徒の実態（どこまでできているか）を把握するのに便利かと思います。膨大な量になってしまいますが・・・・。（高）
３計算練習用ソフトゥエア(３) (小 2) (中 0) (高 1)	単位換算理解定着に関するＰＣソフト	・ｃｍ　ｍｍ　㎠　㎤　Ｌ　ｍＬ　等の読み方が音声、文字として定着してないこともあり一層、小数を使った換算が難しい様子。数字や単位がアニメーションで繰り返されたり加えたりすることで自ら確かめられるようなアプリが便利だと思われる。（小）
	文章題ソフトウェア	・文章問題をイメージするために、アニメーションの動きをみながら思考するためのソフトがあるとよい。（小）
	ソフト	・２次関数や１次関数、グラフとグラフの交わりや関係性が視覚的に分かり、そのグラフ等を、パネルタッチ

		で（画面を）自由に操作（移動）できるようなソフト。（あるのかもしれませんが…。）（高）
４操作関連教材 (18) （小 6） （中 3） （高 9）	ひっ算アプリ	・筆算を入力するとその過程をふくめて動画がながれる。（小）
	小数、数、大きな数の十進法のしくみの教材	・何とかの 10 倍が何とか、何とかは何とかの１／10、などの助詞を使った文章での理解が困難であるため、10 倍や 10 等分をアニメーション化したものを繰り返し見ることでイメージが深まるのではないかと思われる。（小）
	立体図形（現在もいくらかはある）	・実際に手でさわって、理解を深める（小）
	かけ算、わり算に関する具体物（多数）か画像とＰＣソフト	・具体的に物を操作することで、概念を身につけさせたい。（小）
	平面図形や立体図形を移動できたり切断できたりするもの	・頭の中だけでは処理しきれないものを可視化することで問題に対する理解が深まる。（中）
	マジキャップ（磁石付きプラスチック平板）	・立体図形の学習。（高）
	黒板などに固定できる立体模型。	・説明（手話）のために両手を離しても生徒の見える位置に提示したままにしたい。（高）
	図形、とくに空間・立体	・基本の立体、切断等ができるようなソフト 様々な角度から見ることができる。（高）
	自由に形を変えられる空間図形	・空間図形のイメージをもてるように自由に形をかえられるものがあると良い。（中）
	操作が見える（できる）具体的教材	・（小）
	図形に関する教材	・頂点と辺のしくみが分かりやすくなる。（小）
	グラフが描けるもの	・プロジェクターやパソコンを準備しなくてもグラフを描いて残せるものがあったらよい。（中）
	教材データベース	・パソコン、タブレットＰＣを使用する機会が増えてきたので、アプリ、動画、資料など共有できたら、授業計画の参考になる。（高）
	デジタル教材（生徒の自学自習用）	・少人数授業にしていても、理解の個人差が大きいので、早い生徒が待つ時間が増えてしまう。市販の問題集は難しすぎるので、難易度を指定できるようなデジタル教材があると便利。進み具合を教員側が確認できるとさらに良い。（高）
	マグネット付きの平面図形	・空間図形の単元で実際の型を見せられる。（高）
	空間座標説明器	・ねじれの位置、直線と平面の位置関係などを説明（高）

	２つの円の位置関係を黒板にはって説明できるもの。	・中心間の距離と半径の関係を、手話で説明しながらずらしていけるようなもの（黒板にはりたい）（高）
	空間図形	・空間図形を多角的にとらえられるような教材。（高）
５問題集・九九等練習教材(21) (小 2) (中 6) (高 13)	標準化された課題集	・"単元のまとめとして行えるもの。 この課題を解くことができれば、内容は理解できていることがわかる標準化された課題集"（高）
	難易度で分かれている問題集	・まとめ用で各単元ごとに使用する。（高）
	九九を使ったゲームができるもの	・九九が苦手な児童が多いので定着させるために、遊んで楽しく身につくようなものがほしい。（小）
	問題集	・スモールステップでできるような問題集が欲しい。（中）
	絵や図がある問題	・言語力が乏しい生徒に文章問題を解かしても理解に時間がかかるため、絵や図がある問題がほしいです。（小学校低学年の教材にはそれがありますが、高校生向けの問題集はほとんど文章だけ、文章の読解力がない生徒のために、毎回、絵や図などを描いています。（高）
	問題集	・スモールステップで学習できるような問題集（高） ・脳を鍛えるチャレンジドリル（高） ・プリントキッズ（高） ・ちびむすドリル
	課題プリント	・パソコン上でフリーでダウンロードして、すぐに使えるものを宿題や、課題として用いたい。（高） ・各単元の導入に使えるもの。（中）
	テストやプリント作成	・多くの問題が入っており、選択して、プリントが作れるもの。必要な物だけをまとめることができる。（高）
	タブレット用ドリル形式アプリケーション	・数学Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ａ，Ｂ，Ｃの内容で、授業で学んだ内容を家庭学習等で反復練習できるような、ドリル形式のアプリケーションソフト。（高）
	既習事項を単元ごと学年ごとにまとめたカード	・児童が自ら既習事項の確認に用いたり、既習事項を教師が提出したりする。学年ごとにあることにより下学年のものも見られるようにする。（小）
	問題づくり	・実際に起こり得る場面を想定した問題作り。（中）
	データベース	・ＰＣで、問題などプリントが作成できるソフト（数研出版のスタディ・エイドなど）（中）

	文章問題の説明されているもの	・絵などを用いて文章問題の意味が理解できるような本があるとよい。（中）
	準じた教育に関わらず、数学（算数）内容を、フィードバックして学習できる内容のもの	・家庭学習での活用、単元で弱い部分の活用（中）
	☆本の内容をさらに深め、社会生活で必要な内容を精選した教科書	・知的障害に伴う重複の生徒への指導の際に使う。（高）
	事象をよりいイメージし易いように、絵や図を多く取り入れた検定教科書	・通常学級に在籍する生徒への指導に使う。問題などの事象について、なかなかイメージが付きにくいものに対して理解を深める。（高）
	中・高の内容が系統的にかかれているテキスト・教材	・中学校の内容から高校への内容（数学Ⅰ・A）へ系統的に指導することができ、中学校の既習事項をすぐに振り返ることができるようなテキストや教材。（高）
６テスト集計用教育練習教材(2) (小 1) (中 1) (高 0)	民間会社との提携	・現在、チャレンジタブレット（ベネッセ社）等、視覚化、ゲーム化され、子どもにとても有効であろうと思われる電子教材はたくさんある。それらの１つと提携し、活用すると良いと思われる。（小）
	生徒の毎時間の評価を蓄積できるもの	・PC などを使い、生徒の評価を毎時間短時間で入力でき、通知表の算定に活用できるものがあるとよい（中）
７評価の検査（意欲・習熟度）(9) (小 1) (中 7) (高 1)	発達に問題をかかえている子に対する評価基準があれば知りたいです。	・教科書対応で合同で授業をしているので教科書対応の中で必ずおさえた方がよい基礎的なものだけ精選したものなど（小）
	新学習指導要領の新しい視点を調べる。テスト以外のもの	・評価するため（中）
	本県の過去の入試問題のデータ集	・中学３年で入試に向けた学習で活用できるとよい。（中）
	ルーブリック評価のテンプレート	・各単元や小単元ごとの、ルーブリック評価表の１つの基準となるものがあれば、使ってみたい。（中）
	内容理解を調査するもの	・生徒の内容理解がどの程度か、単元ごとに他校の中学生と比較できるようなものがあると、自身を客観的にみることができると思うため。（中）
	小～中の全学年のテストが１つになっているようなもの	・小～中までの全学年の全単元がどれくらい理解できているか調査できるテストとまとめられる表があり、その子がどこがぬけているのか分かるようなもの。（中）
	学習意欲を調査するもの	・生徒の実態を把握するため。教材や教具が、生徒の実態に適しているのか、効果はあるのかなどを把握できると

		良い。（中）
	語彙チェック、テスト	・数学に関する単語などを知っているか、説明できるかをチェックするもの（中）
	学習評価表（パソコンソフト？）	・小学校などで使用されているが、各教科、各単元ごとのテスト（確認）と、観点別評価が合致していて、数字を打ち込む（テストの結果を）と、観点別評価ができるようなもの。（高）
８生徒用パソコン・電子機器(3) (小 3) (中 0) (高 0)	個人１台のタブレットＰＣと安定して速いネット環境	・カメラ機能、調べ学習の時に活用する（小）
	各教室に１台の大型ディスプレイ	・全体指導時に（小）
	児童用タブレット	・量や図形等のイメージをつかませたり、楽しんで計算練習に取り組ませたりしたい。（小）
９言語事項に対応する教材(6) (小 1) (中 1) (高 4)	全国共通の数学用語辞典	・用語を手話で覚える生徒もいる。学校独自で作った手話でなく全国統一で使われればいいと思う。（高）
	数学の専門用語の手話辞典	・市販の手話辞典では見つからない専門用語があり、伝える時に苦労している。（高）
	数学用語の手話辞典	・常に必要（高） ・今ある物では用語が足りないので（高）
	量の呼唱（音韻？）に関するタブレットもしくはＰＣアプリ	・「１ぽん」「２ほん」「３ぼん」のような子音の変化や「一月（ひとつき）」「１分（いっぷん）」等の数字の日本語独特の呼唱変化に関するデータベース、それを使ったドリルやフラッシュカードが作成できるアプリ。ソフトではなく、アプリで作られることで、随時更新されるのが望ましい。（小）
	算数がおもしろくなるマンガ	・算数が苦手な生徒が多いので、マンガを見て、理解できるマンガがあればうれしい。（中）
10 その他(5) (小 0) (中 5) (高 0)	身近な場面で数学が使われている例	・「数学なんて社会に出てから何の役にも立たないから勉強しても無駄」と考えている生徒に具体例を提示することができる。（中）
	生徒の思考がみえるもの	・教科書のどこの部分をよんでいるか。（意外とよんでなかったり、文ではなく言葉だけをみて判断したりしている）言葉の意味がわかっているかわかるもの。夢のような機械があったらいいなーと思って書きました。すみません。（中）
	職業疑似的体験	・マーケティング調査など、勉強した内容を実際に用いている職業を疑似的に体験できるようなもの。（中）(3)

第３項　「算数・数学科」のまとめと考察

算数・数学を担当する先生方に教材の活用に関するアンケートを行った。回答をいただいた先生方の基本情報から、教員経験は 21 年以上で、どの学部も、聾学校での指導経験は 0～3 年の先生が多いということがわかった。また、小学部での算数・数学の学習指導グループは、1～2 人での学習グループが多いことがわかった。

教材の活用では、小学部、中学部、高等部とも、準じる教育課程のもとで検定教科書を使用し、市販のワークブックやドリル、問題集を使用しながら、学力の定着を図っていることが読み取れる結果である。小学部では、教科書やプリント以外にも、写真、カレンダー、写真、絵日記・日記等、具体物を教材として活用していることがわかった。

自作の教材では、教師が対象児童生徒の実態に合わせて、教科書の拡大や一斉提示のための情報保障の工夫がなされている。特にパワーポイントを活用し、問題文の掲示等している教師が多かった。また、教科書内容の理解においては、小学部では情景図や問題に沿った絵の作成など、算数教科を指導するために必要な言語力の理解を促す教材も多く作成されていることがわかった。総じて、聴覚障害教育において、具体的な経験を授業に取り入れたり、言語概念をかみ砕いて児童生徒へ説明したりするなどの手立てが行われているという状況があった。

次に、このような教材があったら良いと思われるものとして、デジタル教材の希望を多くされていることが分かった。小学部では、実際の経験や操作活動を通じて、計算や図形の理解を進めていくわけであるが、中学部、高等部と学年が上がるにつれて、すでに理解した既習の算数・数学の概念や言葉を使って、新しい分野の理解に進むため、児童生徒が基礎力をどれくらい身についているのかを確実に把握することも重要になってくるところである。学習評価の検査（意欲・習熟度）の教材を求める意見も上がっているところは、聴覚特別支援学校の児童生徒の算数・数学の学習に於いて、準じる教育、下学年適用の授業を評価するうえでも重要な視点と考えられる。

多くの学校設置の地域では、異動等の規則のために同一校勤務が数年間に限られる現実もあり、聴覚障害児童生徒の特性に対応する算数・数学の指導方法のノウハウを蓄積する必要があると思われる。

第３節－１　外国語活動

この度改訂された新特別支援学校小学部・中学部学習指導要領[1]において、以下のように示されている。

> 小学部における外国語活動の目標，内容及び指導計画の作成と内容の取扱いについては，小学校学習指導要領第４章に示すものに準ずるほか，次の事項に配慮するものとする。
> 1　児童の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じて，指導内容を適切に精選するとともに，その重点の置き方等を工夫すること。
> 2　指導に当たっては，自立活動における指導との密接な関連を保ち，学習効果を一層高めるようにすること。

小学校学習指導要領[3]　第４章　外国語活動では、外国語活動の目標としては、以下のように示されている。

> 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，話すことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
> (1) 外国語を通して，言語や文化について体験的に理解を深め，日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
> (2) 身近で簡単な事柄について，外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
> (3) 外国語を通して，言語やその背景にある文化に対する理解を深め，相手に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

また、新学習指導要領で新たに小学校に設定された教科「外国語」については、小学校学習指導要領[4]　第２章「各教科」の中の第 10 節「外国語」において、外国語の目標として、以下のように示されている。

> 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
> (1) 外国語の音声や文字，語彙，表現，文構造，言語の働きなどについて，日本語と外国語との違いに気付き，これらの知識を理解するとともに，読むこと，書くことに慣れ親しみ，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
> (2) コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，身近で簡単な 事柄について，聞いたり話したりするとともに，音声で十分に慣れ親しんだ 外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり，語順を意識しながら書いたりして，自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。
> (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め，他者に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

なお、新特別支援学校小学部・中学部学習指導要領[2)] 第2章 各教科において、知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校の中学部における［外国語］については、以下のように示されている。

1 目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語の音声や基本的な表現に触れる活動を通して，コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1)外国語を用いた体験的な活動を通して，身近な生活で見聞きする外国語に興味や関心をもち，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

(2)身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。

(3)外国語を通して、外国語やその背景にある文化の多様性を知り、相手に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

児童や学校の実態を考慮し、必要に応じて小学部において設けることができるとされた外国語活動についても、第4章 外国語活動において、以下のように示されている。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語や外国の文化に触れることを通して，コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1)外国語を用いた体験的な活動を通して，日本語と外国語の音声の違いなどに気付き，外国語の音声に慣れ親しむようにする。

(2)身近で簡単な事柄について，外国語に触れ，自分の気持ちを伝え合う力の素地を養う。

(3)外国語を通して，外国の文化などに触れながら，言語への関心を高め，進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

このように、特別支援学校（聴覚障害）においては、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる」こととしながら、児童生徒の実態に応じた教育課程を適切に編成・実施し、児童生徒の資質・能力を育成していくことが重要となっている。

旧学習指導要領（特別支援学校小学部・中学部学習指導要領）[5)]においては、以下のように示されている。

小学部における外国語活動の目標，内容及び指導計画の作成と内容の取扱いについては，小学校学習指導要領第4章に示すものに準ずるほか，次の事項に配慮するものとする。

1.児童の障害の状態等に応じて，指導内容を適切に精選するとともに，その重点の置き方等を工夫すること。

2.指導に当たっては，自立活動における指導との密接な関連を保ち，学習効果を一層高めるようにすること。

また、旧小学校学習指導要領解説 [6] では、外国語活動の目標として、以下のように示されている。

> ① 外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深める。
> ② 外国語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
> ③ 外国語を通じて，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。
> 以上の三つの柱を踏まえた活動を統合的に体験することで，中・高等学校等における外国語科の学習につながるコミュニケーション能力の素地をつくろうとするものである。

次に、旧特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 [7] 第 2 章　各教科において、知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校の中学部における［外国語］について、以下のように示されている。

> 1　目標
> 外国語に親しみ，簡単な表現を通して，外国語や外国への関心を育てる。
> 2　内容
> 英語　(1)　身近な生活の中で見聞きする英語に興味や関心をもつ。
> (2)　簡単な英語を使って表現する。
> その他の外国語
> その他の外国語の内容については，英語に準ずるものとする。

特別支援学校（聴覚障害）においては、平成 23 年度から完全実施となった外国語活動に対して、移行期間より ALT の導入や中学部・高等部教員の協力等、校内の指導体制を整えてきた状況があった。外国語活動の指導に当たっては、基本的には「英語ノート」[8]を活用するとともに、自立活動における指導との密接な関連を保ち、学習効果を高めるようにしていくことが大切であるが、聴覚障害児の特性を踏まえた指導には、配慮や工夫が求められる。

また、今回の学習指導要領の改定により、これまで小学部５、６年生で学習していた外国語活動が３、４年生へと早期化され、５、６年生において新たに外国語として教科化されたことを踏まえ、これまで積み重ねてきた実践の成果を基盤としながら、新学習指導要領の完全実施（小学部：令和２年度完全実施、中学部：令和３年度完全実施）に向け、各学校において適切に移行していくことが求められている。

なお、本調査については、学習指導要領改訂前の平成 29 年度に行ったものであることから、旧学習指導要領に基づき分析を加えた。

---

1)特別支援学校小学部・中学部学習指導要領　第 4 章　外国語活動（平成２９年４月告示）　文部科学省

2)特別支援学校小学部・中学部学習指導要領　第２章　各教科（平成２９年４月告示）　文部科学省

3)小学校学習指導要領　第４章　（平成２９年３月告示）　文部科学省

4)小学校学習指導要領　第２章　（平成２９年３月告示）　文部科学省

5)特別支援学校小学部・中学部学習指導要領　第 4 章　外国語活動（平成２１年３月告示）

文部科学省

6)小学校学習指導要領解説　外国語活動編　平成 20 年８月　文部科学省

7)特別支援学校小学部・中学部学習指導要領　第２章　各教科（平成２１年３月告示）

8)文部科学省が作成した外国語活動のための補助教材

第１項　基本情報

（１） 回答数

表 3-1-1 に、回答のあった学校数、総回答数、有効回答数を示した。有効回答数は、経験年数の未記入があった回答９件を削除した。なお、結果の集計に当たっては、複数学年担当について、地域バランスを考慮し、ランダムに１学年を選択した。

回答のあった学校数 95 校、総回答数 132 件、有効回答数は 123 件（回答率 100%）であった。

表 3-1-1　回答数

	小学部
有効回答数	123

（２）教職、聾学校、小学部経験年数

表 3-1-2 に、教職、聾学校、小学部経験年数を示した。教職経験 21 年以上の担当者が 36.7%（前回調査 32.8%）、聾学校経験 0～6 年の担当者が 50.9%（前回調査 45.6%）と半数近くを占め、小学部経験年数では 0～6 年の担当者が 58.1%（前回調査 59.4%）と半数を越えるなど、異動等に伴う聾学校経験年数の低下傾向が見られた。

表 3-1-2　教職、聾学校、小学部経験年数　　N=123(%)

	0～3年	3～6年	6～9年	9～12年	12～15年	15～18年	18～21年	21年以上
教職	12.5	15.0	9.2	3.3	11.7	7.5	4.2	36.7
聾学校	29.2	21.7	15.0	9.2	10.8	5.0	1.7	7.5
小学部	32.5	25.6	16.2	6.0	6.8	4.3	1.7	6.8

（３）担当（所属）

表 3-1-3 に、所属の担当を示した。学級担任が 66.7%（前回調査 71.9%）であった。

表 3-1-3　担当（所属）　　N=114(%)

担当(所属)	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
割合	66.7	9.6	0.9	14.9	7.9

（４）担当学年

表 3-1-4 に、担当学年を示した。外国語活動を行う 5 年生、6 年生の担当者が 83.8%であった。（複数回答あり）

表 3-1-4　担当学年　　**N=138（%）**

担当学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	重複
割合	3.3	1.6	4.9	8.1	40.7	43.1	10.6

第2項　結果

（1）コミュニケーション手段

表 3-2-1 に、コミュニケーション手段を示した。手話付きスピーチが 78.0%、聴覚口話は 64.2%であった。指文字の使用も 61.0%と高かった。

表 3-2-1　コミュニケーション手段　　**N=123（%）**

聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
64.2	78.0	8.1	35.0	8.9	61.0	25.2

（2）児童数及び指導者数

表 3-2-2 に、児童数と指導者数を示した。2～3 名の児童を担当している指導者が 37 人 31.6%（前回調査 46.0%）だった。児童数 5 人以上のグループ指導を行っていると回答したのは 32 人 27.4%（前回調査 40.5%）で、児童数 1 名に指導していると回答したのは 27 名 23.1%（前回調査 13.3%）と、特別支援学校（聾学校）が少人数化していることが本調査においても明らかとなった。

表 3-2-2　児童数及び指導者数　　**N=117（%）**　　未回答 6 名

児童数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
回答数	1	27	19	18	20	12	8	5	1	1	3	2

（3）教科書等の教材の有無と活用頻度

教科書等について 24 の教材を提示し、それぞれについて、「学校に保有する・個人で保有する・どちらにもない」の選択肢から一つ回答することを求めた。また、24 の教材について、「よく使う・時々使う・使わない」の選択肢から一つ選択することを求めた。表 3-2-3 に、教科書等の教材の有無と活用頻度の回答結果を示した。

80%以上「学校に保有する教材」としては、「国語辞典（94.6%）」、「絵本（93.7%）」、「図鑑（92.8%）」、「インターネット上の Web 情報（86.5%）」、「ことば絵じてん（85.6%）」、「紙芝居（82.0%）」、「新聞（82.0%）」、「手話辞典（80.2%）」が挙げられた。特に「インターネット上の Web 情報」については、前回調査では 64.6%となっており、教育の情報化が進展していることが調査結果として表れた。

個人で保有する教材としては、「電子辞書（36.7%）」、「カード教材（35.1%）」、「市販の英語テキスト、ワークブック（26.1%）」などが挙げられた。

よく使う教材としては、「カード教材（49.0%）」、「英語ノート 1、2（38.0%）」、「写真（人物、場所、活動場面等）（34.8%）」、「インターネット上の Web 情報（32.1%）」が挙げられ、「よく使う」と「時々使う」を合わせて 60%以上挙げられた教材は、「カード教材

（85.0%）」、「写真（81.2%）」、「インターネット上の Web 情報（70.5%）」、「カレンダー（69.9%）」、「英語ノート１、２（60.2%）」であった。

50%以上「学校に保有」されており、70%以上「使わない教材」としては、「紙芝居（81.8%）」が挙げられた。

表 3-2-3　教科書等の教材の有無と活用頻度　　（%）

	教材	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない
1	英語ノート１、２	113	72.6	3.5	23.9	108	38.0	22.2	39.8
2	教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	110	19.1	3.6	77.3	83	2.4	9.6	88.0
3	市販の英語テキスト､ワークブック	111	18.9	26.1	55.0	91	6.6	30.8	62.6
4	カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	111	40.5	35.1	24.3	100	49.0	36.0	15.0
5	語学学習用ＣＤ	108	42.6	9.3	48.1	97	4.1	18.6	77.3
6	英和辞典、和英辞典（紙媒体）	109	66.1	20.2	13.8	105	8.6	29.5	61.9
7	国語辞典（紙媒体）	111	94.6	4.5	0.9	111	18.9	21.6	59.5
8	電子辞書（英和辞典、和英辞典）	109	3.7	36.7	59.6	96	6.3	15.6	78.1
9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	111	80.2	12.6	7.2	111	18.9	36.0	45.0
10	ことば絵じてん	111	85.6	8.1	6.3	110	15.5	29.1	55.5
11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	111	92.8	1.8	5.4	112	10.7	41.1	48.2
12	絵本（行事、物語、説明等）	111	93.7	0.9	5.4	113	9.7	38.1	52.2
13	紙芝居（行事、物語、説明等）	111	82.0	0.0	18.0	110	0.9	17.3	81.8
14	写真（人物、場所、活動場面等）	112	77.7	14.3	8.0	112	34.8	46.4	18.8
15	動画（活動場面、人物、場所等）	113	54.9	17.7	27.4	103	23.3	35.0	41.7
16	カレンダー	112	78.6	12.5	8.9	113	26.5	43.4	30.1
17	日記・絵日記（スケッチブックの記録等）	110	60.0	21.8	18.2	112	17.0	18.8	64.3
18	新聞	111	82.0	6.3	11.7	112	8.9	31.3	59.8
19	広告、チラシ、ポスター	109	70.6	11.0	18.3	108	2.8	27.8	69.4
20	雑誌（幼児・児童向け、その他）	110	39.1	14.5	46.4	102	2.0	12.7	85.3
21	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	109	59.6	13.8	26.6	105	11.4	25.7	62.9
22	手話・字幕付きＤＶＤ	111	49.5	6.3	44.1	105	2.9	25.7	71.4
23	インターネット上の Web 情報	111	86.5	7.2	6.3	112	32.1	38.4	29.5
24	タブレット PC	112	79.5	6.3	14.3	110	13.6	30.0	56.4

（4）教材の活用状況

（3）と同様に、教科書等について 24 の教材を提示し、それぞれについて、「そのまま使う・手を加えて使う・自作する・使わない」の選択肢から一つ回答することを求めた。表 3-2-4 に、教材の活用状況を示した。

「そのまま活用する」教材としては、「手話辞典（52.9%）」、「図鑑（46.1%）」、「カレンダー（44.3%）」、「ことば絵じてん（43.4%）」、「国語辞典（42.7%）」、「インターネット上の Web 情報（42.7%）」、「絵本（41.7%）」であった。

「手を加え」及び「自作」を合わせて上位だった教材は、「カード教材（66.0%）」、「写真（57.0%）」であった。

表 3-2-4　教材の活用状況　　(%)

	教材	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1	英語ノート１、２	103	23.3	35.0	5.8	35.9
2	教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	81	6.2	3.7	2.5	87.7
3	市販の英語テキスト、ワークブック	91	16.5	18.7	3.3	61.5
4	カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	100	18.0	24.0	42.0	16.0
5	語学学習用ＣＤ	92	16.3	6.5	1.1	76.1
6	英和辞典、和英辞典（紙媒体）	99	39.4	1.0	2.0	57.6
7	国語辞典（紙媒体）	103	42.7	1.0	0.0	56.3
8	電子辞書（英和辞典、和英辞典）	91	22.0	0.0	0.0	78.0
9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	102	52.9	3.9	0.0	43.1
10	ことば絵じてん	99	43.4	4.0	0.0	52.5
11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	102	46.1	6.9	0.0	47.1
12	絵本（行事、物語、説明等）	103	41.7	7.8	1.0	49.5
13	紙芝居（行事、物語、説明等）	95	15.8	5.3	0.0	78.9
14	写真（人物、場所、活動場面等）	102	30.4	39.2	15.7	14.7
15	動画（活動場面、人物、場所等）	96	37.5	13.5	6.3	42.7
16	カレンダー	106	44.3	19.8	5.7	30.2
17	日記・絵日記（スケッチブックの記録等）	103	22.3	12.6	1.0	64.1
18	新聞	103	26.2	14.6	0.0	59.2
19	広告、チラシ、ポスター	97	18.6	12.4	0.0	69.1
20	雑誌（幼児・児童向け、その他）	92	10.9	4.3	0.0	84.8
21	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	95	31.6	5.3	0.0	63.2
22	手話・字幕付きＤＶＤ	93	25.8	4.3	0.0	69.9
23	インターネット上の Web 情報	103	42.7	28.2	2.9	26.2
24	タブレット PC	99	32.3	10.1	2.0	55.6

（5）その他の教材や自作教材

その他の教材や自作教材について自由記述を求め、表 3-2-5 のようにカテゴリーに分類した。

77 の自由記述があった。学習指導要領のねらいに基づき、外国語活動で使用されているその他の教材や自作教材を「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」、「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」及び「文部科学省教材」「歌」に分類した。

「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」としては、パワーポイント資料、絵カード、単語カード、挨拶カード、カードゲーム、自作ジャンケンカード、Web からダウンロードした英語の歌などの動画、英語による歌と映像の DVD、英単語カード、英文カード、英語の絵本、市販の音声教材、パワーポイント資料（英語と意味を併記したもの、英語に絵を加えて親やすくしたもの）、教科書の拡大コピー、文型カード、英単語カード、英語に発音を付記したカード、絵を付記して意味を捉えやすくしたもの等が挙げられた。ユニークな教材としては、「外国人変装グッズ」として、ALT 不在時でも英語に親しみ安くするように工夫している例が挙げられれた。

「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」としては、の英単語カード、基本的な単語を表した動画、世界遺産や世界の食べ物が書かれたカード、写真が挙げられた。また、「文部科学省教材」として、「Hi､friends!」が挙げられた

表 3-2-5　その他の教材や自作教材

使途			教材名	場面や活用方法
外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材	積極的に外国語を聞いたり、話したりする（６６）	外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験する（２５）	パワーポイント資料	導入や復習時に活用。（２）
			パワーポイント資料（アメリカの行事の紹介）	行事前の紹介用で活用。
			絵カード	”ｆｉｎｅ”、”ｓａｄ”など顔の表情がかかれたカードを導入時に活用。 授業の導入時にゲームで活用。（５） 学習した後に掲示。
			カードゲーム	英単語に慣れ親しむために活用。（７）
			単語カード、挨拶カード	毎時間、導入時で活用。（５）
			自作ジャンケンカード	毎時、ゲームをする際に活用。
			外国人変装グッズ	ALT が来校しない時の雰囲気づくりのために活用。
			ASL	語順を覚えたりコミュニケーションを楽しむ際に活用。
		歌（２）	Web からダウンロードした英語の歌などの動画	テーマや季節に合った歌を探し、歌詞を提示しながら活用。
			英語による歌と映像の DVD	楽しみながら英語に親しむために活用。
		単語、文の聞き取りや表出（２８）	英単語カード、英語文カード	理解を促進するために活用。（５）
			英語の絵本	行事の際の読み聞かせや英語の文型の導入後に活用。
			市販の音声教材	聴覚活用が可能な児童に正しい英語の発音を聴かせるために活用。
			パワーポイント資料	意味から英語へ、英語から意味へと関連付けを強めるために活用。（２） 絵を示して親しみやすくするために活用。
			教科書の拡大コピー	児童の注目を促すために活用。
			文型カード	学習内容の定着のために繰り返し活用。（３）
			数字や曜日を日本語と英語で表記したカード	曜日や数字の確認等で活用。（２）
			絵と単語を表記したカード	新出単語の確認で活用。（２）
			英語であいさつが書かれたカード	発音部分を隠しておき、確認やフラッシュカードとして活用。
			発音のみを書いたカード	音声での聞き取りが難しい際に活用。（４）
			英単語カード	提示したり、クイズ形式で確認する際に活用。
			絵カード	文や単語の読みや意味を確認する際に活用。
			単語表や会話表現が書かれた表	児童が表現を忘れた際に確認するために活用。

				単語をカテゴリー毎に整理し、掲示して活用。
			NHK for School プレ基礎英語	画像に合わせ、基本となる文を確認するために活用
		書く活動（4）	ワークシート	毎回小テストで活用
			プリント	本時で学習した表現や単語などを書くために活用。 友達にインタビューした内容を記録するために活用。 学習した英単語について確認する宿題プリント
		授業以外でも活用（4）	カード教材	学習で使用する他、ゲームでも活用。
			アルファベットパズル	休み時間などで使用。
			パワーポイント資料	行事の説明の際にも活用。
			子供向きの英語の本やアメリカ手話の資料	教室内にコーナーを設置し、話題にする。
		アルファベット（3）	自作のアルファベット練習帳	アルファベットの学習の際に、見本としてや書く練習をするために活用。
			パワーポイント資料（ヘボン式ローマ字）	ローマ字を確認する際に活用。
			自作のアルファベット（大文字）の指文字表	アルファベットの学習の補助教材として活用。
日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材（7）		外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむ、日本語との違いを知り言葉の面白さや豊かさに気づく（5）	英単語カード	新出英単語の発音の確認のために活用。（4）
			基本的な単語を表した動画（ASL による表現）	英単語の発音と共に確認するなどして活用。
		日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づく（2）	世界遺産や海外の食べ物が書かれたカード	児童が興味を持って調べた世界遺産や食べ物について、写真付きのカードにして活用。
			写真	海外の文化を伝える際に活用。

異なる文をもつ人々との交流当を体験し、文化等に対する理解を深める。		
（4）文科省教材	Hi､friends!（紙媒体、DVD）	聞き取りの練習で活用。（3） 基本的な表現の確認等で活用。

（6）その他の機器や自作教材

その他の機器や自作教材について自由記述を求めた。機器「提示・板書」と「教材作成」のカテゴリーに分類された(表 3-2-6）。「提示・板書」「教材作成」共に、学習した英単語等の活用の機会を多く確保しようとするための取り組みが行われていた。

表 3-2-6　その他の機器や自作教材

使途	機器名	場面や活用方法
提示・板書	文型カード・単語カード（41）	意味を日本語で、発音をカタカナで表記するなどして活用
	単語表	単元に合わせて活用
	外国人名前カード	よく目にする外国人の名前を男女別にまとめて掲示
教材作成	アルファベットカード	アルファベットを並び替えて単語を作成するなどの活動
	クロスワードパズル	文字数やアルファベットに着目し、新出単語を当てはめるなどして活用
	絵カード	
	振り返りシート	レッスンごとに重要な文型や単位時間毎の自己評価を記入するなどして活用

（7）あると良い教材

82 の自由記述があった。（5）と同様に、「あったら良い」と思われる教材を「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」、「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」及び「文部科学省教材」に分類した。表 3-2-7 に、あったら良いと思われる教材を示した。

「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」としては､単語カードやASL の DVD、外国の友だちからのクイズメッセージ動画、各単元に対応した絵カード、字幕の付い

たアニメーション、英単語の発音を指文字で表記したもの、音声と字幕が付いた動画、口や手話、字幕の付いた動画、発音表記付き単語カード、文型に発音や意味の表記を付けたカード、フラッシュカードの機能を持たせた DVD、単語に読み仮名を付けてくれるシステム、アニメーションが付いているパワーポイント形式の教材等が挙げられた。

「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」としては、日常会話や基本的な動詞が意味する動作を撮影した動画（手話と字幕付き）、CD 教材の音声や音楽に代わる動画、日本手話と ASL の違いが分かる動画、英語の歌の DVD（手話、字幕付き）、歌い手の口元が見える動画、外国の様々なろう者を紹介する動画、日本に住む外国人（ろう者）を紹介する動画、ASL に関わる動画や辞典等が挙げられた。

「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づくための教材」としては、外国の文化や生活などが紹介されている動画や写真、世界遺産を紹介した動画、外国の暮らしを撮影した動画（BGM が無く、手話と字幕付き）、外国の行事の動画、外国と日本の文化の違いや共通点を学べる動画等が挙げられた。

「異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深める教材」としては、外国のろう者とのテレビ電話や ASL の指文字や簡単な手話の動画、英語ノートに対応した ASL の本等が挙げられた。

「文科省教材」としては、Hi､friends!に対する、ゆっくりした発音や字幕、手話や指文字などへの希望、巻末のピクチャーカードの裏面に英語表記を付けた教材、英語ノートの内容に手話や字幕を付したもの等が挙げられた。また、聾学校における外国語活動の指導書や指導計画、事例集の希望が挙がっていた。

表 3-2-7　あると良い教材

使途			教材名	場面や活用方法
外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材	積極的に外国語を聞いたり、話したりする（３３）	外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験する（８）	単語カード（発音・読み方付き）	児童が発音しやすくなると授業もスムーズに進む。
			ASL の DVD	ALT の発音を聞き取ることが難しいため。 ASL に親しむことで児童の視野が広がる。（３）
			外国の友達からのクイズメッセージ動画	各単元でキーワードとなる言葉を使って英語でクイズ等を出してもらうと、児童が意欲的に取り組むことができる。
			各単元に対応した絵カード	導入時にゲームをしながら外国語に親しむことができると良い。
			字幕の付いたアニメーション	会話場面で活用
		単語、文の聞き取りや表出（２５）	教科書にあったカード教材や掛図	毎回自作しなくてはならないのが負担である。
			英単語の発音を指文字で表記したもの	口話による発音練習する際に使用する。
			音声と字幕（日本語、英語のルビ、英語）が付いた動画	音声、文字（英語）、文字（英語のルビ）、日本語の訳が同時に見られるような動画があると良い。
			手話と字幕の付いた動画	学習した英単語を用いた例示をする。
			英単語動画（口形、手話、字幕付き）	学習の導入時に活用する。
			発音が明瞭で口形が分かる動画	音声のみの CD では理解が難しい。
			発音表記付き単語カード	発音について、視覚的情報があると良い。（７）
			文型に合わせたカード（英語や発音の仕方をカタカナで表記、意味の日本語表記があるもの）	簡単な会話文にも英語の発音の仕方や意味の表記があると良い。（６）
			音声を使用しない教材	聾学校の児童が活用できる視覚的な教材があると良い。
			物の名前と英語を対応させたフラッシュカードとして活用できる DVD	
			アルファベットの歌に手話と字幕を付けた教材	聴覚障害のある教員が児童に指導する際に活用する。
			単語に読み仮名を付けてくれるシステム	特に新出単語を読む時に必要である。（２）
			アニメーションが付いているパワーポイント形式の教材	視覚的な動きにより注意や関心をひきやすく、記憶に残りやすい。

日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材（２８）	外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむ、日本語との違いを知り言葉の面白さや豊かさに気づく（１２）	日常会話や基本的な動詞が意味する動作を撮影した動画（手話と字幕付き）	手話が付いていると、日本語なしでも状況が理解できる。
		CD 教材の音声や音楽に代わる動画（字幕付き）	外国語活動で流せる児童に分かりやすいものがあると良い。
		日本手話とアメリカ手話の違いが分かる動画	視覚的に言語の違いが分かるものがあると良い。
		英語の歌（手話付き、字幕付き）DVD	授業の導入時に活用し、体の部位や動作を英語と結び付ける。
		歌い手の口元が見える童謡の動画（手話・字幕付き）	毎回の授業で季節に合わせた有名な曲に親しむ。
		単語の発音や口形が分かる動画	
		外国の様々なろう者を紹介する動画（手話・字幕付き）	同じろう者であることで親しみを持つほか、児童の視野が広がる。（２）
		日本に住む外国人（できればろう者）を紹介する動画	自身の文化に付いて理解し、自覚することで、外国の文化という概念を形成し、文化の理解につながる。
		ASL の動画	日本手話に対応して、ASL の内容を日本手話で確認できる。
		教材に合わせた ASL 表	ASL を使いながら授業を進める際に活用する。
		ASL の辞典	外国の手話も確認したい。
	日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づく（１２）	外国の文化や生活などが紹介されている動画や写真	外国の暮らしや文化に触れさせたい。各ユニットに対応したものがあると良い。（２）
		世界遺産を紹介した動画	世界の文化や自然、歴史などを知る。
		外国の暮らしを撮影した動画（BGM が無く、手話と字幕付き）	外国の暮らしや文化を知る場面で使う。BGM の有無が選択でき、一つの場面が短く何度でも見られるものが良い。（５）
		外国の行事の動画	外国独自の行事の様子が分かるものがあると良い。
		外国と日本の文化の違いや共通点を学べる動画（字幕付き）	各内容が短時間にまとめられているものがあると良い。（３）
	異なる文化をもつ人々との交流当を体験し、文化等に対する理解を深める（４）	外国のろう者とのテレビ電話	テレビ電話などを活用し、英語を使う機会を設定できると良い。
		ASL の指文字や、簡単な手話の動画	国によるろう文化の違いや共通点に気付かせる。（２）

	ASL の本（英語ノートに対応したもの）	ASL を学習する時に活用する。
文科省教材（21）	Hi､friends!（DVD 等の付属教材）	付属の音声教材に字幕があると良い。（5）
		ゆっくり発音している動画や、手話や指文字付きの動画だと良い。（4）
		ゆっくり発音し、カタカナ表記が付いていると良い。（2）
		説明したり活動するのに、手話や字幕が付いていると良い。（3）
		イラストやアルファベットだけでなく、発音の仕方も付けてほしい。
		大切なフレーズを視覚化してもらいたい。
	巻末のピクチャーカードの裏面に英語のみの表記を付けた教材	聞き取りの場面で裏の単語を提示する。
	英語ノートの内容を手話で表したもの	児童に内容を理解させやすい。
	英語ノートの内容に則した手話動画や字幕が付いた教材	児童に内容を理解させやすい。（2）
	聾学校用の外国語活動の指導書、指導計画、DVD、事例集	

第３項　「外国語活動」のまとめと考察

本調査票では、95 校から有効回答数 123 件（回答率 100%）の回答を得た。回答した教員は、教職経験 21 年以上が 36.7%、聾学校経験 0～6 年が半数以上を占め、小学部経験年数 0～6 年が約 58.1%であった。また、回答した教員の 66.7%は、学級担任であった。また、83.8%が、外国語活動を行う 5 年生、6 年生の担当者であった。

コミュニケーション手段は､手話付きスピーチ（78.0%）､指文字（61.0%）､聴覚口話は（64.2%）であった。また、日本手話の使用も 8.1%あった。

児童が 5 人以上のグループ指導を行っていたのは 27.4%、児童が 2～3 名では 31.6%、児童数 1 名では 23.1%であり、少人数化している傾向が強まっていた。外国語活動は、他者とのコミュニケーション活動を取り入れることより、活動が更に活発になることが期待される。このため、各学年の目標を明確にしながら 5 年生と 6 年生での合同活動を行うなど､グループでの活動などを工夫することがより一層必要となろう。

教科書等の教材の保有については、80％以上、学校に保有する教材としては「国語辞典（94.6%）」「手話辞典（80.2%）」「ことば絵じてん（85.6%）」「図鑑（92.8%）」「絵本（93.7%）」「紙芝居（82.0%）」「新聞（82.0%）」「インターネット上の Web 情報（86.5%）」があり、「よく使う」と「時々使う」を合わせて 60%以上挙げられた教材は､「英語ノート１､２（60.2%）」､「カード教材（85.0%）」「写真（81.2%）」「カレンダー（69.9%）」「インターネット上の

Web 情報（70.5%）」であった。また、50%以上「学校に保有」されており、70%以上「使わない教材」としては、「紙芝居（81.8%）」があった.。

教材の活用状況を見ると、「英語ノート１、２」の活用は、「そのまま」での活用が 23.3%、手を加えて活用が 35%だった。また手を加えたり自作したりして活用している教材としては、「カード教材」66.0%、「写真」57.0%となっていた。こうした結果から、児童の実態に応じて理解を促すことができるよう教員が教材を工夫している現状が分かった。

本調査票では、その他の教材や教材について、学習指導要領のねらいに基づき、「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」、「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」及び「文部科学省教材」から分類を試みた。記述数の割合は、「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」は 85.7%と殆どを占めた。「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」は 9.1%、「文部科学省教材」は 5.2%であった。

「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」では、具体的な活動として、パワーポイント資料や絵カードを作成し、英単語に触れ、クイズやゲームを楽しみ、意欲を高める活動を行っていることが伺われた。特に、外国語に親しむことを目標とした活動となっていた。

「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」については、数が少ないものの、世界遺産や海外の食べ物が書かれたカードを活用したり、写真を活用したりして、外国の生活や文化に触れる活動などの工夫を行っている取組もあった。地域や学校事情により、具体的な体験をする機会が少ないことが予想されるが、VTR 視聴による疑似体験の他、地域の博物館や資料館への社会見学等の機会を利用することも必要であろう。

また、「文部科学省教材」として、教科書付属の DVD を使用する活動が挙げられた。外国語活動ということでは、英語に限らず、今後さまざまな外国語の副教材を活用することも必要となろう。

「あると良い」と思われる教材については、記述数の割合は、「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」は 40.2%となり、「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」は 34.1%、「文部科学省教材」は 25.6%であった。

「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材」では、導入時に児童に分かりやすく伝えるための絵カードや字幕の付いたアニメーション、ASL を活用した動画のほか、外国の友達からのクイズメッセージなど、児童の興味関心を引き出すための教材が挙げられた。また、音声のみでは理解することが難しい児童に対する手話や字幕付きの動画などの教材に対して希望が挙げられた。

「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材」では、外国の文化や生活などが紹介されている動画や写真、世界遺産を紹介した動画、外国の暮らしを紹介した動画が挙げられた。また、英語を使う機会をテレビ電話により保証するというアイデアも出された。

「文部科学省教材」では、付属の音声教材に対する字幕や分かりやすい発音、手話や指文字などに対する希望が挙げられ、視覚的な手掛かりを保証する教材提供を望む意見が出されていた。

外国語担当者は、本活動の目標を踏まえ、限られた指導時間の中、精力的に指導に当たっている状況が示された。 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することを第一義としながら、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付いたり、外国の言語や異文化を理解したりすることで、多様なものの見方や考え方があることについても触れさせることが重要である。

外国語活動は外国語と目標に共通点もあるが、異なるものもある。今後、外国語によりコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成していくことができるよう、ねらいに即した一層の実践の積み重ねが期待される。

第３節－２　英語科

第１項　基本情報

（１）　回答数

表 3-3-1 に、回答のあった学校数とそのうち回答があった中学部と高等部の担当者の内訳を示した。中学部が設置されている学校 74 校のうち、英語科の担当者の回答数は 118 名であった。また、高等部が設置されている学校 59 校のうち、英語科の担当者の回答数は 95 名であった。

表 3-3-1　回答のあった学校数と中学部及び高等部の担当者数

	回答があった学校数（校）	回答があった担当者の人数（名）
中学部	74	118
高等部	59	95

（中学部　n=118、高等部　n=95）

（２）教職・聾学校・学部経験年数

表 3-3-2 に、教職経験年数を示した。教職経験年数は、中学部（37.6%）、高等部（41.8%）ともに「21 年以上」が高い割合が示された。

表 3-3-2　中学部及び高等部の回答者の教職経験年数　(%)

	0～3年	3～6年	6～9年	9～12年	12～15年	15～18年	18～21年	21年以上
中学部	10.3	12.0	8.5	8.5	10.3	5.1	7.7	37.6
高等部	11.0	5.5	4.4	7.7	7.7	11.0	11.0	41.8

（中学部　n=117、高等部　n=91）

表 3-3-3 に担当者の聾学校経験年数を示した。中学部（35.9%）、高等部（34.0%）ともに「0～3 年」に高い割合が示された。

表 3-3-3　中学部、高等部の回答者の聾学校経験年数　(%)

	0～3年	3～6年	6～9年	9～12年	12～15年	15～18年	18～21年	21年以上
中学部	35.9	17.1	18.8	9.4	4.3	6.0	0.9	7.7
高等部	34.0	21.3	14.9	8.5	7.4	6.4	1.1	6.4

（中学部　n=117、高等部　n=94）

表 3-3-4 に、中学部、高等部の回答者の学部経験年数を示した。中学部の経験年数は「0～3 年」が 46.6%と約半数を占めており、次いで「3～6 年」が 19.0%、「6～9 年」が 16.4%であった。また、高等部の経験年数は「0～3 年」が 33.3%、次いで「3～6 年」が 20.7%、「6～9 年」が 17.2%であった。

表 3-3-4　中学部、高等部の回答者の学部経験年数　(%)

	0～3年	3～6年	6～9年	9～12年	12～15年	15～18年	18～21年	21年以上
中学部	46.6	19.0	16.4	8.6	3.4	3.4	0.0	2.6
高等部	33.3	20.7	17.2	12.6	6.9	3.4	1.1	4.6

（中学部　n=116、高等部　n=87）

（3）中学部、高等部の指導グループ人数

指導グループとして最も多いのは、中学部高等部ともに、3 名と 5 名であった。また、7 名以上のグループで学習しているとの回答が中学部で 3 校、高等部で 7 校あった。

第2項　結果

（1）コミュニケーション手段

表 3-4-1 に、中学部のコミュニケーション手段、表 3-3-2 に高等部のコミュニケーション手段を示した。

中学部は、「手話付きスピーチ（91.9%）」、「聴覚口話（66.7%）」であった。また、高等部では、「手話付きスピーチ（88.4%）」、「聴覚口話（57.9%）」であった。

表 3-4-1　　中学部の英語の授業で用いるコミュニケーション手段の内訳（%）

(n=118)

聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
66.7	91.9	16.2	48.6	8.1	83.8	18.0

表 3-4-2　　高等部の英語の授業でコミュニケーション手段の内訳（%）

(n=95)

聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
57.9	88.4	14.7	54.7	2.1	76.8	15.8

（2）教材の有無と使用状況

ア　中学部の教材の有無

表 3-4-3 に、中学部の教材の有無を示した。(表中：「個人」は学校にはないが、個人で保有している教材)

学校に 70%以上保有されている教材としては、「検定教科書（99.1%）」、「国語辞典（91.0%）」、「手話辞典（88.2%）」、「インターネット上の Web 情報（84.7%）」、「図鑑（83.6%）」「英和辞典、和英辞典（紙媒体）（79.5%）」「絵本（行事、物語、説明等）（78.0%）」「カレンダー（77.3%）」「新聞 74.5%」「ことば絵じてん（70.9%）」が挙げられた。

また、個人で有する教具として、「電子辞書（49.1%）」、「市販の英語テキスト、ワークブック（30.6%）」、「カード教材（28.8%）」が挙げられた。

表 3-4-3　中学部における教材の有無　　(%)

教材	n	学校にある	個人	ない
検定教科書	112	99.1	0.0	0.9
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	110	19.1	3.6	77.3
市販の英語テキスト、ワークブック	111	61.3	30.6	8.1
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	111	45.0	28.8	26.1
語学学習用ＣＤ	111	48.6	5.4	45.9
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	112	79.5	19.6	0.9
国語辞典（紙媒体）	111	91.0	5.4	3.6
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	110	1.8	49.1	49.1
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	110	88.2	5.5	6.4
ことば絵じてん	110	70.9	7.3	21.8
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	110	83.6	5.5	10.9
絵本（行事、物語、説明等）	109	78.0	6.4	15.6
紙芝居（行事、物語、説明等）	107	62.6	0.9	36.4
写真（人物、場所、活動場面等）	109	49.5	22.0	28.4
動画（活動場面、人物、場所等）	110	36.4	19.1	44.5
カレンダー	110	77.3	9.1	13.6
日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	108	13.0	7.4	79.6
新聞	110	74.5	5.5	20.0
広告、チラシ、ポスター	110	65.5	2.7	31.8
雑誌（幼児・児童向け、その他）	108	38.9	11.1	50.0
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	108	37.0	13.0	50.0
手話・字幕付きＤＶＤ	109	49.5	4.6	45.9
インターネット上の Web 情報	111	84.7	8.1	7.2
タブレット PC	108	69.4	7.4	23.1

イ　中学部の教材の使用状況（活用の頻度の表を使用）

表 3-4-4 に、中学部の教材の使用状況を示した。よく使われる教材としては、検定教科書（93.9%）、市販の英語テキスト、ワークブック（64.3%）、カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等) (48.6%)、英和辞典、和英辞典(41.7%)と回答があった。

また、「よく使う」と「時々使う」を合わせて 50%以上の教材としては、「インターネット上の Web 情報（80.7%）」、「写真（64.5%）」、「手話辞典（50.0%）」が挙げられた。

表 3-4-4　中学部における教材の使用状況　　（%）

教材	n	よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	114	93.9	3.5	2.6
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	86	0.0	11.6	88.4
市販の英語テキスト、ワークブック	112	64.3	27.7	8.0
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	105	48.6	31.4	20.0
語学学習用ＣＤ	100	3.0	12.0	85.0
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	115	41.7	45.2	13.0
国語辞典（紙媒体）	112	8.9	33.0	58.0
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	106	10.4	20.8	68.9
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	114	14.9	44.7	40.4
ことば絵じてん	108	0.0	16.7	83.3
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	113	0.0	14.2	85.8
絵本（行事、物語、説明等）	112	0.0	17.0	83.0
紙芝居（行事、物語、説明等）	105	0.0	1.9	98.1
写真（人物、場所、活動場面等）	107	24.3	40.2	35.5
動画（活動場面、人物、場所等）	102	7.8	39.2	52.9
カレンダー	109	19.3	28.4	52.3
日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	97	0.0	4.1	95.9
新聞	111	2.7	28.8	68.5
広告、チラシ、ポスター	108	0.0	22.2	77.8
雑誌（幼児・児童向け、その他）	102	0.0	14.7	85.3
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	102	3.9	27.5	68.6
手話・字幕付きＤＶＤ	106	3.8	17.9	78.3
インターネット上の Web 情報	114	23.7	57.0	19.3
タブレット PC	108	7.4	34.3	58.3

ウ　高等部の教材の有無

表 3-4-5 に、高等部の教材の有無を示した。学校に 70%以上保有されている教材としては、「検定教科書（97.8%）」、「手話辞典（81.4%）」、「図鑑（80.7%）」、「英和･和英辞典（80.5%）」、「インターネット上の Web 情報（78.4%）」が挙げられた。また、個人で有する教具としては、「電子辞書（83.0%）」が最も多かった。

表 3-4-5　高等部の教材の有無　　(%)

教材	n	学校にある	個人	ない
検定教科書	90	97.8	0.0	2.2
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	88	19.3	4.5	76.1
市販の英語テキスト、ワークブック	88	68.2	27.3	4.5
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	87	39.1	28.7	32.2
語学学習用ＣＤ	88	55.7	2.3	42.0
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	87	80.5	19.5	0.0
外国語辞典（紙媒体）	87	46.0	14.9	39.1
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	88	4.5	83.0	12.5
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	86	81.4	16.3	2.3
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	88	80.7	1.1	18.2
写真（人物、場所、活動場面等）	87	48.3	16.1	35.6
動画（活動場面、人物、場所等）	87	34.5	18.4	47.1
カレンダー	88	59.1	15.9	25.0
日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	87	17.2	14.9	67.8
新聞	88	69.3	9.1	21.6
広告、チラシ、ポスター	87	57.5	6.9	35.6
雑誌（幼児・生徒向け、その他）	88	34.1	21.6	44.3
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	88	38.6	21.6	39.8
手話・字幕付きＤＶＤ	88	52.3	11.4	36.4
インターネット上の Web 情報	88	78.4	12.5	9.1
タブレット PC におけるアプリケーション	88	63.6	12.5	23.9

エ　高等部の教材の使用状況（活用の頻度の表を使用）

表 3-4-6 に、高等部の教材の使用状況を示した。よく使われる教材としては、「検定教科書（92.4%）」と回答があった。また、「よく使う」と「時々使う」を合わせて 70%以上の教材としては、「市販の英語テキスト、ワークブック（94.3%）」、「英和辞典・和英辞典（90.0%）」、「インターネット上の Web 情報（80.2%）」、「電子辞書（79.0%）」が挙げられた。

表 3-4-6　高等部の教材の使用状況　　（%）

教材	n	よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	92	92.4	6.5	1.1
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	74	0.0	10.8	89.2
市販の英語テキスト、ワークブック	88	42.0	52.3	5.7
カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	84	17.9	47.6	34.5
語学学習用ＣＤ	85	2.4	16.5	81.2
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	90	43.3	46.7	10.0
外国語辞典（紙媒体）	83	8.4	18.1	73.5
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	86	43.0	36.0	20.9
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	89	13.5	1.7	34.8
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	87	0.0	24.1	75.9
写真（人物、場所、活動場面等）	84	14.3	46.4	39.3
動画（活動場面、人物、場所等）	81	6.2	45.7	48.1
カレンダー	85	11.8	29.4	58.8
日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	80	6.3	11.3	82.5
新聞	86	4.7	32.6	62.8
広告、チラシ、ポスター	81	1.2	16.0	82.7
雑誌（幼児・生徒向け、その他）	82	1.2	15.9	82.9
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	82	3.7	35.4	61.0
手話・字幕付きＤＶＤ	84	4.8	32.1	63.1
インターネット上の Web 情報	91	29.7	50.5	19.8
タブレット PC におけるアプリケーション	86	19.8	25.6	54.7

（3）機器の有無と使用状況

ア　中学部の機器の使用状況

表 3-4-7 に、中学部の機器の有無を示した。学校に 90%以上保有されている教具としては、「パソコン（99.1%）」「プロジェクター（99.1%）」、「黒板（98.2%）」、「ＤＶＤプレーヤー（94.6%）」、「デジタルビデオカメラ（94.4%）」、「放送機器（93.5%）」、「ＣＤプレーヤー等オーディオ機器（91.0%）」、「デジタルカメラ（90.7%）」が挙げられた。また、個人で有する機器として多かったのは、「発表板（25.7%）」、「個人用ＦＭ等システム（13.3%）」であった。

表 3-4-7　中学部の機器の有無　　(%)

	n	学校にある	個人	ない
黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）	113	98.2	0.0	1.8
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	113	52.2	25.7	22.1
指文字表（五十音、アルファベット）	111	68.5	9.0	22.5
手話表（簡単な手話表現の絵）	111	41.4	7.2	51.4
電子黒板	111	59.5	0.0	40.5
ＯＨＰ	110	61.8	0.0	38.2
パソコン（タブレット PC は除く）	113	99.1	0.0	0.9
プロジェクター	112	99.1	0.0	0.9
地上デジタル対応テレビ	110	86.4	0.0	13.6
ＤＶＤプレーヤー	111	94.6	0.9	4.5
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	111	91.0	0.0	9.0
実物投影機	106	84.9	0.0	15.1
デジタルカメラ	108	90.7	7.4	1.9
デジタルビデオカメラ	107	94.4	1.9	3.7
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	106	84.9	0.9	14.2
放送機器	107	93.5	0.0	6.5
個人用ＦＭ等システム	105	55.2	13.3	31.4
音声記号図（日本語、英語)、調音部位図	107	43.0	3.7	53.3
母音図（口形を表した図や絵）	107	52.3	3.7	43.9
キューサイン表（発音サインも含む）	107	32.7	0.9	66.4
タブレット PC	108	79.6	4.6	15.7

表 3-4-8 に、機器の活用状況を示した。よく使われる教具としては、「黒板（86.7%）」が挙げられた。「よく使う」と「時々使う」を合わせて 50%以上の教材としては、「パソコン（84.1%）」、「発表版（54.0%）」「タブレット PC（51.9%）」が挙げられた。

表 3-4-8　中学部の機器の活用状況　　(%)

	n	よく使う	時々使う	使わない
黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）	113	86.7	6.2	7.1
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	111	19.8	34.2	45.9
指文字表（五十音、アルファベット）	105	2.9	20.0	77.1
手話表（簡単な手話表現の絵）	101	3.0	9.9	87.1
電子黒板	100	16.0	5.0	79.0
ＯＨＰ	98	3.1	3.1	93.9
パソコン（タブレット PC は除く）	113	48.7	35.4	15.9
プロジェクター	112	26.8	19.6	53.6
地上デジタル対応テレビ	109	18.3	22.0	59.6
ＤＶＤプレーヤー	112	5.4	33.0	61.6
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	109	9.2	18.3	72.5
実物投影機	109	7.3	16.5	76.1
デジタルカメラ	112	10.7	38.4	50.9
デジタルビデオカメラ	112	6.3	17.9	75.9
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	106	39.6	9.4	50.9
放送機器	111	9.0	7.2	83.8
個人用ＦＭ等システム	100	24.0	9.0	67.0
音声記号図（日本語、英語）、調音部位図	98	2.0	7.1	90.8
母音図（口形を表した図や絵）	100	2.0	4.0	94.0
キューサイン表（発音サインも含む）	96	3.1	1.0	95.8
タブレット PC	106	8.5	43.4	48.1

イ　高等部の機器の使用状況

表 3-4-9 に、高等部の機器の有無を示した。90%以上学校で有する機器としては、「プロジェクター（100.0%）」、「ＤＶＤプレーヤー（97.8.%）」、「パソコン（96.7%）」、「黒板（94.5.%）」、「デジタルビデオカメラ（93.0%）」、「デジタルカメラ・放送機器（91.9%）」が挙げられた。また、個人で有する教具として多いものに、「指文字表（20.2%）」、「発表板（15.7%）」が挙げられた。

表 3-4-9　高等部の機器の有無　　**（%）**

	N	学校にある	個人	ない
黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）	91	94.5	1.1	4.4
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	89	56.2	15.7	28.1
指文字表（五十音、アルファベット）	89	47.2	20.2	32.6
手話表（簡単な手話表現の絵）	89	40.4	9.0	50.6
電子黒板	89	51.7	0.0	48.3
ＯＨＰ	88	56.8	0.0	43.2
パソコン（タブレット PC は除く）	90	96.7	3.3	0.0
プロジェクター	89	100.0	0.0	0.0
地上デジタル対応テレビ	89	80.9	2.2	16.9
ＤＶＤプレーヤー	89	97.8	0.0	2.2
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	89	85.4	2.2	12.4
実物投影機	85	85.9	0.0	14.1
デジタルカメラ	86	91.9	7.0	1.2
デジタルビデオカメラ	86	93.0	4.7	2.3
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	86	80.2	2.3	17.4
放送機器	86	91.9	0.0	8.1
個人用ＦＭ等システム	84	59.5	9.5	31.0
音声記号図（日本語、英語)、調音部位図	85	34.1	1.2	64.7
母音図（口形を表した図や絵）	84	39.3	4.8	56.0
キューサイン表（発音サインも含む）	84	23.8	2.4	73.8
タブレット PC	85	81.2	4.7	14.1

表 3-4-10 に、高等部の機器の使用状況を示した。「よく使う」と「時々使う」を合わせて50%以上の教材活用として、「黒板（91.1%）」、「パソコン（90.1%）」、「DVD プレーヤー（59.3%）」、「プロジェクター（55.0%）」、「デジタルカメラ（50.6%）」、「タブレット PC（50.0%）」が挙げられた。

表 3-4-10　高等部の機器の使用状況　　（%）

	n	よく使う	時々使う	使わない
黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）	90	76.7	14.4	8.9
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	84	17.9	41.7	40.5
指文字表（五十音、アルファベット）	84	4.8	26.2	69.0
手話表（簡単な手話表現の絵）	79	1.3	17.7	81.0
電子黒板	81	12.3	7.4	80.2
ＯＨＰ	82	1.2	6.1	92.7
パソコン（タブレット PC は除く）	91	54.9	35.2	9.9
プロジェクター	91	24.2	30.8	45.1
地上デジタル対応テレビ	90	20.0	22.2	57.8
ＤＶＤプレーヤー	91	8.8	50.5	40.7
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	89	3.4	19.1	77.5
実物投影機	88	13.6	11.4	75.0
デジタルカメラ	91	13.2	37.4	49.5
デジタルビデオカメラ	90	7.8	18.9	73.3
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	87	29.9	10.3	59.8
放送機器	88	10.2	4.5	85.2
個人用ＦＭ等システム	84	22.6	9.5	67.9
音声記号図（日本語、英語）、調音部位図	81	2.5	2.5	95.1
母音図（口形を表した図や絵）	82	2.4	2.4	95.1
キューサイン表（発音サインも含む）	79	3.8	1.3	94.9
タブレット PC	88	25.0	25.0	50.0

（4）その他の教材や自作教材

その他の教材や自作教材について自由記述を求め、以下のカテゴリーに分類された(表3-5-1)。中学部で70、高等部で53の自由記述があった。中学部、高等部で活用している「その他の教材」・「自作教材」は、「学習内容の導入のための教材」「学習内容提示のための教材」「学習内容の定着をはかるための教材」「学習内容の理解を促すための教材」「リスニング（聞く）のための教材」「読むための教材」「話すための教材」に分類された。

表3-5-1　その他の教材や自作教材　（中学部　n=70　高等部　n=53）

カテゴリー	内容	中学部	高等部
学習内容の導入のための教材	学習に入る前に意欲付けを行ったり、授業内容の見通しをよくするために活用する教材	6	7
学習内容提示のための教材	教科書のテキストを表示したり、物の名前を表示したり、発音を表示したりするもので、学習している内容を整理された状態で提示するための教材	12	8
学習内容の定着をはかるための教材	カードやプリントを用いて繰り返し学習し、単語や文法などの重要な内容を定着させるための教材	22	9
学習内容の理解を促すための教材	ワークシートや映像を用いて、学習内容の理解を助けるための教材	13	24
聞く（リスニング）のための教材	聴覚障害者向けの英検や共通テストのリスニング問題と同様に英文が字幕で流れる画面を表示させる教材	6	3
読むための教材	プリントやパワーポイントを用いて、英文読解の練習や、読みやすくする教材	7	1
話すための教材	会話の練習をしたり、テキストの音読をしやすくするための教材	4	1

表3-5-2に、中学部で活用している「その他の教材」・「自作教材」を示した。

学習内容の導入のための教材としては、「自分で撮った写真をパワーポイントで示す」、「自作のピクチャーカード」、「アルファベットの形をしたマグネット」「各国や話題に合わせた番組を録画したＤＶＤ（ＮＨＫ）」「自作絵カード、自作アルファベットカード、自作単語カード」「パワーポイントが挙げられた。学習内容提示のための教材としては、「視覚文法教材」「教科書の単語・本文・文法・リスニング用のパワーポイント（ルビ付き）」「拡大提示用教科書（本文）」「本文テキストをパワーポイントにする。」「デジタル教科書」「自作絵カード」が挙げられた。学習内容の定着としては、「単語テスト・文法カード」「言葉のフラッシュカード（自作）」「学習シート」「マグネットカード」「単語練習プリント（自作）」「単語カード」「センテンスカード」「文法練習プリント（自作）」「電子語句カード（パワーポイント）」「単語、基本文のパワーポイント」「日本語と英語の対訳プリント」「パワーポイント」「副教材」「自作プリント」「単語カード（絵と単語）」「既習図」というものが挙げられた。授業内容の理解を促すための教材」としては、「検定教科書のデジタル版（登場人物へのインタビューの映像、人物、場所の写真や絵を含む）」「ピクチャーカード（夕食メニュー表）」「自作プリント」「訳

読プリント」「自作カード」「動詞カードとそれに合う絵カード（両方自作）」「パワーポイント」が挙げられた。リスニング（聞く）のための教材としては、「リスニング対応字幕テロップ」「リスニング用字幕パワーポイント（パワーポイントのアニメーション設定でスクリプトを流す。）」「英検リスニングＤＶＤ」「自作パワーポイント」がが挙げられた。読むための教材としては、「フラッシュカードのスライド」「教科書の英文に発音（カタカナとひらがな）を付与したプリントを使用（ルビ）」「デジタル教科書」「自作パワーポイント」「絵自作英単語カード」「自作パワーポイント資料」が挙げられた。話すための教材としては、「フォニックスカード」「発音足し算表（フォニックス）」「絵カードプリント」「語順カード」「発音をカタカナでつけたプリント」が挙げられた。

表 3-5-2　中学部で活用している「その他の教材」・「自作教材」

カテゴリー	教材例	活用の状況
学習内容の導入のための教材	パワーポイント	・自分で撮影した写真を、導入の際にパワーポイントで映す。新しい文法を説明する時にも用いる。 ・文法の導入やパターンプラクティスで使用。親しみやすいように絵や写真をたくさん入れて作成する。
	自作のピクチャーカード	・新出単語の導入時に使用する。
	アルファベットの形をしたマグネット	・ＡＢＣの順に並べたりして、アルファベットに親しむことができるようにしている。
	各国や話題に合わせた番組	・導入などで活用。
	自作絵カード、自作アルファベットカード、自作単語カード	・導入時に、ゲーム的に使ったり、重複の授業で使ったりしている。
学習内容提示のための教材	視覚文法教材	・文法導入 ・Oral Practice
	教科書の単語・本文・文法・リスニング用のパワーポイント（ルビ付き）	・授業を進めるときに使用している。 ・（単語・英文）フラッシュカード ・新出の英文や単語にルビをつけたもの。ルビは遅れて表示されるようにしてある。導入や反復練習で使用し、ルビなしで読めるようにしている。 ・文法事項や教科書本文について必要に応じて色をかえたり、注意点や要点を書き加えながら説明をする際に使用している。 ・教科書指導の際、一斉指導しやすいように。 ・文法の説明に活用する。 ・一斉音読・内容理解・説明の場面で活用する。
	拡大提示用教科書（本文） パワーポイント デジタル教科書	・本文をＡ１サイズに拡大したもの。 ・本文をわかりやすく映すため。 ・語句の確認や文の提示等のため。
	自作絵カード	・語彙の少ない生徒に対して１つの英単語につき複数の絵で示すことにより視覚的に体験させる。

学習内容の定着	単語テスト・文法カード	・単語や文法の練習に活用する。
	言葉のフラッシュカード（自作）	・授業の初めに毎時間使用、くり返し行う事により定着に繋がる。（２）
	マグネットカード	・単語やアルファベットを書いたマグネットシートを使い、反復練習、マッチング等行なっている。
	単語練習プリント（自作）	・反復練習
	単語カード	・反復練習用、イラスト、意味、スペルが書かれている。 ・単語練習をする時に使用。表に英語裏に意味が書いてあるもの。単語が定着するように反復練習する。 ・Ｂ４サイズ、読みはピンク、スペルは白、意味は水色で色分けしてある。ラミネートをかけてある。全部みて→読みをかくして→意味もかくして→意味だけ見せて→読みだけ見せて（空書）。 ・英作文練習に使用している。
	センテンスカード	・新しい文型が出てきた時に使用したり復習の時に使用したりしている。
	文法練習プリント（自作）	・新出の文法について、反復練習が必要なとき。 ・基本の確認や応用、発展問題。学習内容の理解を深めるために使用している。
	パワーポイントの語句定時	・語句の反復練習
	単語、基本文のパワーポイント	・身近な人やものの画像を取り入れて基本文や単語を提示。文型や語句を確認しながら反復練習を行っている。
	日本語と英語の対訳プリント	・復習・定着の目的で使う。
	パワーポイント	・単語を繰り返し提示したり、スペルを穴うめしたりできるもの。 ・アニメーションを加えて文法や単語を定着させる。反復練習、復習に使用する。
	副教材	・基礎力定着のため、課題として使用する。
	自作プリント	・文法事項について生徒の実態に応じてプリントを作成。教科書本文や新出語句をまとめる際にも書いて要点をまとめやすいようプリントを使用。 ・既習事項の定着のため。
	単語カード（絵と単語）	・復習に使う。カルタゲームのように使うこともある。 ・学習の振り返りに適宜活用している。
	既習図	

授業内容の理解を促すための教材	検定教科書のデジタル版（登場人物へのインタビューの映像、人物、場所の写真や絵を含む）	・文化の理解、様々な人々の考え方を知るために映像を使う。話す内容を文字にして示す。 ・場面のイメージをとらえやすくするためにデジタル教材内の画像を使う。
	ピクチャーカード（夕食のメニューなども含む）	・曜日、日付、天気、その日の気分、夕食のメニュー等、英語と絵がセットになっている。
	自作プリント	・単語にルビを振ったものを使って、本文の内容把握のために使用する。 ・教科書本文に読み仮名を付けたものや、読み仮名だけのもの。 ・予習として、単語調べや和訳を課題としている。 ・英文と日本文が対応させてあるプリントを作り、内容理解や音読練習に使用している。
	訳読プリント 自作カード	・絵・英語・読み方・意味を別々にしたカード。それぞれの学習場面で生徒が操作することもできるようにしマッチング等などの課題に用いる。 ・文を疑問文に作り変える練習用。ひっくり返すと語頭が大文字になったりして、生徒が操作、体験して覚えやすくする。 ・意味、英語、発音を別々に示すことができるように３部分に分けている。 ・ゲーム感覚で単語を覚えるために使用する。文法を説明する際にも使用している。
	動詞カードとそれに合う絵カード（両方自作） パワーポイント	・教科書の本文に読み方を付けたり、文法の説明をする。（2）
	リスニング対応字幕テロップ	・英検の聴覚障害特別措置の字幕を参考に、業者テストや県の学力診断テストの際に活用できるようパワーポイントで作成して提示している。
	リスニング用字幕パワーポイント（パワーポイントのアニメーション設定でスクリプトを流す。） 英検リスニングＤＶＤ	・教科書の中のリスニングを行う時にテレビに写し、英検と同様のやり方で行う。 ・教科書のリスニング教材をする時に、英検の練習も兼ねて行っている。
	自作パワーポイント	・英検対策用補習授業で使用している。 ・(単語、教科書の英文、課題)の提示及び反復練習。会話文のテロップを提示する。 ・新出単語や教科書本文を品詞を色分けして示すようにしている。リスニングでは字幕をつけるようにしている。

読むための教材	フラッシュカードのスライド	・難聴の生徒でも発音（教師の口の動き）がわかるように、単語の上にカタカナやひらがなでルビを振っている（教科書会社が発行している英和辞典に記載されているルビを参考にしている）
	教科書の英文に発音（カタカナとひらがな）を付与したプリントを使用（ルビ）	・英文の音読時に活用している。
	デジタル教科書 ・新出語句の音声	・十分発音要領を確認したあと、ネイティブの音声を聞いてまね、リズムや強弱を学ぶ
	・教科書文の音声	・十分音読練習したのち、文のリズムやイントネーションを真似て読む。
	自作パワーポイント	・文法事項の導入や口頭練習のために活用する。絵や発音、アクセントのポイントも表示する。
	絵自作英単語カード	・絵、英単語、よみ方（カタカナ）単語のよみは、手話、指文字で確認、マッチングにも活用。
	自作パワーポイント資料	・英文の発音を文字で提示したり、和訳を提示したりしている。
話すための教材	フォニックスカード 発音足し算表（フォニックス）	・準ずる教育課程の１年次に使用している。
	絵カードプリント	・食べもの、教科、スポーツ、月…など様々なカテゴリー別の絵がプリントされたもの。自己表現等の際くり返し参考用に使う。
	語順カード	・付箋等で自作。外国語指導助手との会話にも使う。
	発音をカタカナでつけたプリント	・発音練習や音読の時に使用している。

表 3-5-3 に、高等部で活用している「その他の教材」・「自作教材」を示す。学習内容の導入のための教材としては、「英会話（例文）教材」「パワーポイント教材」「自作ＤＶＤ（会話場面）」「教員が英会話の場面を演じている映像」「検定教科書の新出単語についてのフラッシュ教材」「自作単語カード（ピクチャーカード）」が挙げられた。学習内容提示のための視覚教材としては、「教科書の内容をタブレットＰＣに入れたもの。」「プレゼンテーションソフトで自作した教材（地図や英文、新出単熟語文法の説明などの映像）」「投影用教科書本文」「パワーポイント」「電子黒板」「Ｓｔｕｄｙａｉｄ.D.B.英語」が挙げられた。授業内容の理解を促すための教材としては、「自作ハンドアウト（教科書の内容をリライトした教材）」「デジタル教科書」「参考書（文法）」「自作のパワーポイント」「ＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔ　ｃｏｎｔｅｎｔｓ」「フォニックス」「英語手話辞書ツール（元筑波技大松藤教授制作）」「文法事項についてまとめた自作のカード（Ｂ４サイズの紙）」「ピクチャーカード（夕食メニュー表）」「プリント」「自作プリント（文字情報中心の学習教

材）」「自作フラッシュカードや自作のイラストプリント(絵を中心にした学習教材）)」「文法解説用プリント」「文法プリント」「日本語対応手話確認表・英語理解表・クラスルームイングリッシュ表・文、単語、語句並び換えカード」「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｔｏｋｙｏ」が挙げられた。学習内容の定着のための教材としては、「学習プリント」「教科書内容のまとめプリント」「学習内容と関わるワークシート」「単語カード」「センテンスカード」「文法練習プリント（教員が単元ごとに自作したもの）」「教科書付属のＣＤ－ＲＯＭ」が挙げられた。リスニングのための教材としては、「自作テロップ付音声データ」「教科書のＣＤにテロップを付けたもの。」「自作リスニングテロップ（教科書の単元導入・評価時に行うリスニングをテロップ代替し、ＴＶに表示する）」「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｔｏｋｙｏ」が挙げられた。読むための教材としては、「検定教科書の各セクションの本文及びカナ付き本文」が挙げられた。話すための教材としては、「単語カード（表に単語と絵、裏に意味と発音のカタカナ）」が挙げられた。

表 3-5-3　高等部で活用している「その他の教材」・「自作教材」

カテゴリー	教材例	活用の状況
学習内容の導入のための教材	英会話の例文教材	・授業に初めに活用する。
	パワーポイント教材	・新出文法事項の解説、まとめ、例文などを、絵や写真等入れながら作成。 ・新出文法事項の解説、まとめ、例文など絵や写真等入れながら作成。導入に使用している。 ・主に導入時、意欲喚起のため（2）。 ・本時の流れを説明する時や、導入時に使用。
	教員が英会話の場面を演じている映像	・授業開始時の雰囲気作りで活用している。
	自作単語カード(ピクチャーカード)	・授業開始時の雰囲気作りで活用。
	教科書の新出単語についてのフラッシュ教材	・各セクションの内容理解に入る前の発音・アクセント・意味、日本語手話、ＡＳＬの確認。
	教科書の内容をタブレットＰＣに入れたもの。	・課題の提示、文脈の理解を促す場面、復習を促す場面。
学習内容提示のための視覚教材	プレゼンテーションソフトで自作した教材	・適宜提示して説明している。
	パワーポイント	・授業（テキスト使用）の視覚化、読み、イディオム、日本語など授業の流れにそって使用
	投影用教科書本文	・一斉音読、内容理解、説明の場面。
	電子黒板	・普通の黒板として使用。（色を変えて目立たせ

		たり、パッと前の「ページ」に切り替えたりが簡単にできる。）
	Ｓｔｕｄｙａｉｄ.D.B.英語	・①プレゼンテーション～テキストの内容を画面上に表示したり、書き込みもできる②データ集～目的のデータを取り出せる③小テスト作成～簡単な操作で習熟度別に小テストを作成できる
授業内容の理解を促すための教材	自作ハンドアウト（教科書の内容をリライトした教材） デジタル教科書	・教科書の内容をあつかう場面で活用する。
		・意味・発音・問題解説で活用する。
	参考書（文法）	・新出単語の学習、本文音読、問題練習。
	自作のパワーポイント	・リライト教材として ・英語の歌の学習 ・文章の内容理解をさせるために使用。 ・文法解説や宿題などの規則説明。 ・課題提示、理解を促すのに活用。 ・音読練習、単語練習。英文の内容の理解を助ける。英文の内容を鑑賞する。 ・音読練習、単語練習、英文の内容の理解を助ける。英文の内容を鑑賞する。
	ＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔ ｃｏｎｔｅｎｔｓ	・授業場面での活用。 ・教科書の本文読解及び文法内容を理解させるために、自作ハンドアウトと、それに基づいたＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔ ｃｏｎｔｅｎｔｓを毎回用いている。
	フォニックス	・市販されているフォニックスの本をもとに、生徒にわかりやすく解説を入れたりしながらパワーポイントで作成
	英語手話辞書ツール（元筑波技大松藤教授制作） 文法事項についてまとめた	・基本的な単語や機能語をＡＳＬを通して覚えさせる。
	自作のカード（Ｂ４サイズの紙） ピクチャーカード （夕食メニュー表）	・文法事項の理解を促す場面 ・曜日、日付、天気、その日の気分、夕食のメニュー等、英語と絵がセットになっている。
	プリント	・文法の練習、教科書のまとめ等、教科書の内容を補足する形で自作している。 ・１つ１つの学習内容の整理確認などの場面

	自作プリント（文字情報中心の学習教材）	・文法の練習、教科書のまとめ等、教科書の内容を補足する形で自作している
	自作フラッシュカードや自作のイラストプリント(絵を中心にした学習教材)	・単語練習や文法ドリル学習 ・新しい言葉の獲得や復習などで使用。
	文法解説用プリント	・市販の文法書は、解説が長いので、平易な評言で、コンパクトな説明と、シンプルな例文を使う。
	文法プリント	・ワークシートにし、空欄を埋めて文法のルールを学ばせる。
	日本語対応手話確認表・英語理解表・クラスルームイングリッシュ表・文、単語、語句並び換えカード	・授業全般
	Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｔｏｋｙｏ	・教科書の内容を深めるときに使用。
学習内容の定着	学習プリント	・授業の内容をふりかえるための自作のプリントを復習用として使用。 ・単語・文法の説明が書いてある宿題として活用。 ・その時々の生徒の理解度やニーズに応じて、文法項目の説明、反復練習に用いる。 ・学習内容のまとめ、試験前等
	教科書内容のまとめプリント 学習内容と関わるワークシート	・学習内容の整理練習。
	単語カード	・単語練習で使用。表に英語、裏に意味を書きこんである。単語の定着に使用。 ・新しい文型が出てきたときに使用。
	センテンスカード 文法練習プリント（教員が単元ごとに自作したもの）	・問題演習、文法の定着や演習力を高めたい時。
	教科書付属のＣＤ－ＲＯＭ	・単元別、文法別演習問題をデータから抜粋して、テストを作成している。
リスニング	自作テロップ付音声データ 教科書のＣＤにテロップを付けたもの。	・リスニング指導
	自作リスニングテロップ	・教科書の単元導入・評価の場面、授業中、教室

	（教科書の単元導入・評価時に行うリスニングをテロップ代替し、ＴＶに表示する） Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｔｏｋｙｏ	に設置してあるＴＶを活用し、リスニング代替を行っている。 ・リスニングにおいての文脈理解・場面理解を促す。
読むための教材	検定教科書の各セクションの本文及びカナ付き本文	・音読練習、日本語手話及びＡＳＬ表出練習
話すための教材	単語カード（表に単語と絵、裏に意味と発音のカタカナ）	・単語指導、作文（会話）のため。

（５）学習評価で活用している教材

ア　市販のテストの活用状況

表 3-6-1 に、中学部・高等部における市販のテストの活用状況を示した。学習評価で活用されている教材として、中学部で 36.2%、高等部で 38.3%活用していないと回答があった。一方、いつも活用しているとの回答は中学部で 23.3%、高等部で 20.2%であった。

表 3-6-1　市販のテストの活用状況　(%)

	いつも活用している	時々活用している	活用していない
中学部　(n=118)	23.3	40.5	36.2
高等部　(n=95)	20.2	41.5	38.3

イ　市販のテスト以外の教材や自作教材

表 3-6-2 に、市販のテスト以外の教材や自作教材について、自由記述を求め、その割合を示した。中学部（75.3%）、高等部（75.3%）と共に自作テストを挙げる回答が多かった。自作テストは、単語テスト、文法問題、単元ごとのテストなどであった。自作プリント・ワークシートは、単元に沿っての説明などで作成したり、復習問題としたりして評価するものであった。その他としては、デジタル教材に付いている問題等が挙げられた。

表 3-6-2 市販テスト以外の教材や自作教材　(%)

	自作テスト	自作プリント・ワークシート	その他
中学部　(n=83)	75.3	17.2	7.5
高等部　(n=88)	75.3	19.7	9.9

（６）「あったら良い」と思われる教材

英語の授業や学習評価をするために、「あったら良いと思われる教材」について自由記述を求めた。中学部で80、高等部で47の自由記述が得られた。自由記述は、「学習内容の導入の

ための教材」「学習内容提示のための教材」「学習内容の定着をはかるための教材」「学習内容の理解を促すための教材」「リスニング（聞く）のための教材」「読むための教材」「話すための教材」「ICT」「ASL」「その他」に分類された(表3-7-1）。

表 3-7-1　あったら良いと思われる教材のカテゴリーと回答数

カテゴリー	内容	中学部(N=80)	高等部(N=47)
学習内容の導入のための教材	学習に入る前に意欲付けを行ったり、授業内容の見通しをよくするために活用する教材	5	2
学習内容提示のための教材	教科書のテキストを表示したり、物の名前を表示したり、発音を表示したりするもので、学習している内容を整理された状態で提示するための教材	6	9
学習内容の定着をはかるための教材	カードやプリントを用いて繰り返し学習し、単語や文法などの重要な内容を定着させるための教材	3	1
学習内容の理解を促すための教材	ワークシートや映像を用いて、学習内容の理解を助けるための教材	10	1
聞く（リスニング）のための教材	聴覚障害者向けの英検や共通テストのリスニング問題と同様に英文が字幕で流れる画面を表示する教材	10	3
読むための教材	プリントやパワーポイントを用いて、英文読解の練習や、読みやすくする教材	15	6
話すための教材	会話の練習をしたり、テキストの音読をしやすくするための教材	9	3
ICT	情報機器や学習プログラム	1	3
ASL	ASL に関した教材	8	6
その他		13	13

ア　中学部であったら良いと思われる教材

表 3-7-2 に、中学部であったら良いと思われる教材を示した。

学習内容の導入のための教材としては、「教科書に出てくる歌や外国に関する動画（英語、日本語字幕付き）」「教科書で扱う海外文化等の映像資料（字幕または手話による解説付き）」「外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付き）」「教科書の内容に合った動画（手話付き、英文字幕付き）」が挙げられた。学習内容提示のための教材としては、「ＤＶＤ」「デジタル教科書」「音声認識機器」が挙げられた。学習内容の定着をはかるための教材としては、「ルビ付きのフラッシュカード」「映像で光る電子メトロノーム」「単語のフラッシュカード」が挙げられた。学習内容の理解を促すための教材としては、「教科書の内容を映像化したもの」「英文、発音、和訳が提示できるスライド資料」「教科書に出てくる英語の手話をまとめたもの」が挙げられた。聞く（リスニング）のための教材としては、「字

幕入りの DVD」「教科書の本文や会話文にカタカナ表記付きの字幕がついたＤＶＤ」が挙げられた。読むための教材として、「教科書の英文にルビがあるもの」「音声＋字幕つきＤＶＤ」「発音がカタカナ表記されているフラッシュカード」「教科書の本文にイントネーションのラインがあるもの」「教科書の新出単語に発音記号がついているもの」「フォニックスの教材」等が挙げられた。話すための教材としては、「基本的な英会話の場面ごとの動画（字幕付き）」「外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付き）」「教科書の会話文のＤＶＤ」等が挙げられた。ICT としては、「外国の暮らしと英会話を撮影した動画（無償でネットでダウンロードもの）」が挙げられた。ASL としては、「ＡＳＬを扱ったＤＶＤ（内容は検定教科書に準じる）」「簡単なＡＳＬの紹介又は、学習ビデオ」等が挙げられた。その他としては、「聾学校英語科の指導の手引き」「英文法などを表した手話辞典」「外国の文化と日本の文化の違いを紹介する字幕付きＤＶＤ」「アルファベットの指文字表」「単語ゲーム」「生徒が好きそうなアニメや映画のＤＶＤ」「外国の方の手話映像」が挙げられた。

表 3-7-2　中学部で「あったら良い」と思われる教材　　N=80

カテゴリー	教材例	活用の方法
学習内容の導入のための教材	教科書に出てくる歌や外国に関する動画（英語、日本語字幕付き）	・教科書の内容と関連した外国の文化などを学べるような機会が作れるもの。
	教科書で扱う海外文化等の映像資料（字幕または手話による解説）	・海外の文化や生活を紹介する国際理解教育として授業で使用したい。
	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。ＢＧＭが無い又は調整できると良い。できれば、1 場面が短く、繰り返し何度も見られるようにすると、話し合いがしやすい。
	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）英会話なしのもの	・外国の文化、風土などを理解させるために活用できるとよい。
	教科書の内容に合った動画（手話付き）（英字幕付き）	・導入で使いたい。
学習内容提示のための教材	ＤＶＤ	・英語・字幕・手話つきのもの。
	デジタル教科書（聴覚障害者用）	・実態に合わせてルビ付にできると教材づくりが楽になる。（覚えたらルビを外せる。忘れたらルビを付けられる）
	デジタル教科書（歌についての教材。歌詞、日本語が流れるもの。）	・意味やリズムを視覚的にとらえられるとよい。（ルビは必要に応じて、担当が準備する）より英語の歌を楽しめるのではないか。 ・以前は、学校にあったが新版の教科書になってから購

		入できていない。中１、中２では動画も豊富にあり興味を持たせ易い。
	音声認識機器	・肉声や録音された音声にも対応したものが欲しい。即時的に英文を視覚的に確認させたい。
	教科書の本文や新出単語を英語に対応した手話で表したＤＶＤ	・ＡＳＬではなく、１語１語の単語を手話にしたＤＶＤ。
学習内容の定着をはかるための教材	ルビ付きのフラッシュカード	・単語練習
	映像で光る電子メトロノーム	・単語、英文をチャンツのようにリズムに合わせて覚えさせたい。
	単語のフラッシュカード	・新出単語のフラッシュカードで安くて購入しやすい物。
学習内容の理解を促すための教材	教科書の内容を映像化したもの	・教科書の内容（会話文、読んで理解させる単元、物語など）が、映像化又はアニメーション化されていると良いと思う。
	英文、発音、和訳が提示できるスライド資料と、場面が分かりやすい映像資料	・文章だけでは、想定しにくいので映像で視覚的に捉えやすい資料を提示して使いたい。 （例）中３　Ｕｎｉｔ３　フェアートレイドのしくみを簡単に説明するＤＶＤやガーナの農業に従事する子どもたちの様子を撮影した動画。 中１　Ｕｎｉｔ８　イギリスについての基本情報（位置、文化、農産業、名所、都市、名物など）を紹介する動画
	教科書の単元に関連する資料や動画ＤＶＤ	・どのような状況で会話が進んでいるかを知ることができる。 ・各単元で見れば、具体的イメージをもちやすい。 ・内容理解が進み、新語や新表現の理解や定着に繋げられるため。 ・本文をイメージしやすいように再現ビデオがあると良い。 ・本文内容の読み取り、理解の確認を行う。 ・本文の寸劇がサブタイトルつきであると、英語が苦手な生徒もイメージがしやすい。（活用場面：本文の学習）

		・毎時間、英単語を英手話で表して、授業で活用しているため。 ・読みものとして内容を理解させたいとき、生徒がよりその内容を理解しやすくなるような資料があるとよい。（理解の助けになるような）
リスニング教材	字幕入りの DVD	・リスニングの部分をろう学校用として字幕等で示すＤＶＤ
	英検の代替問題のような、字幕付きのリスニング教材	・英検対策やリスニング、読みとりの練習。
	リスニング用のＤＶＤ	・英検のときに流れるリスニングの様にスクリプトが流れて、答えられる様な教材。
	字幕のリスニング教材	・教科書のリスニングセクションで使用。
	教科書の本文や会話文にカタカナ表記付きの字幕がついたもの。（ＤＶＤ）	・リスニングＣＤ代わりに使うことができる。
	字幕式のリスニングＤＶＤ	・英検のリスニング代替措置で使われるような、字幕式リスニングＤＶＤ。教科書Ａｃｔｉｖｉｔｙの「対話を聞き取ろう」に対応していると良い。また、教科書本文を音声＋字幕で学べると良い。
	リスニングに代わる字幕のＤＶＤ	・リスニング代替して使用文字だけでなく、絵（登場人物）の吹き出しテロップみたいなものが良い。
	リスニング問題のテロップ代替え教材	・聴児の受けているリスニング関連の授業内容とテストを経験させることができる。授業と定期試験で活用。
	教科書のリスニングスクリプト（聴覚障害の生徒用の代替問題。）	・耳で聞くことができる生徒、代替問題が必要な生徒がいるので、どの生徒も取り組めるとよい。英検の練習にもなるのでスクリプトが右から左に流れるもの。 ・リスニング代替。
	テロップ	
読むための教材	教科書の英文にルビがあるもの	・音読練習時に活用する。
	教科書の本文や新出単語にカタカナで読み方がついたもの	・文字と音声が結びつきにくいので、正しい読み方を指導するのに活用したい。
	英文や英単語に読み方がふってある教科書や単語帳	・毎時間、読み方が合っているか確認するのに時間が割かれるため、予め書いてあると他の活動の時間に充てられる。

	音声＋字幕つきＤＶＤ 発音がカタカナ表記されているフラッシュカード フラッシュカード	・教科書（英文）の音読練習で使いたい。音声に合わせて字幕が出てくると、わかりやすい。 ・新出単語を確認する際に使うことができる。 ・教科書の内容理解、音読練習など ・単語の発音の仕方を丁寧に指導できる。
	中学校で使う、英文法を用いた、会話、教科書本文のＤＶＤ（字幕付き） 教科書の本文にイントネーションのラインがあるもの。 教科書の新出単語に発音記号がついているもの カタカナ付きの英文（教科書本文） フォニックスの教材 活用変化表 英文の字幕がカタカナ付きで出るもの。（外国のくらし・文化、日本のくらし・文化） 読み方が併記されている教科書があると良い。 教科書本文に、文のアクセント（拍）の印などがついて、英語のリズム（内容語と他の部分）視覚的に分かるもの	・教科書本文をＰＣから大型ＴＶに映す。本文のイントネーションはラインで引いてあるもの。 ・教科書の新出単語には全て発音記号をつけている。データとしてあると便利。 ・リーディングの練習。 ・聴覚障害に対応したもの。 ・発音指導時 ・カタカナ付きで音読できるようにして、映像を見ながら意味を推測させたい。 ・イントネーションや発音を記号等で記してあると使い易い。 ・本文の音読で使いたい。少し聞こえる生徒でも強弱は分かりにくいので。
話すための教材	基本的な英会話の場面ごとの動画があると良い。 外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い） 教科書の会話文のＤＶＤ	・日常生活のさまざまな場面でよく使われる表現がキーセンテンスで盛り込まれているもの。 ・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。ＢＧＭが無い又は調整できると良い。できれば、１場面が短く、繰り返し何度も見られるようにすると、話し合いがしやすい。 ・買い物、入国審査など教科書の英文を使ったＤＶＤ。実際に外国に入国する時や買い物をする場面を設定

		した会話練習で使用したい。
	ファストフード店、空港、買い物など生活場面に合わせた英会話の動画。手話・字幕付きが良い。	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。卒業後の海外旅行などに対して、少しでもイメージを付けさせる上での資料としたい。
	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。ＢＧＭが無い又は調整できると良い。できれば、１場面が短く、繰り返し何度も見られるようにすると、話し合いがしやすい。
	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（手話と字幕付き。できればルビも）	・英会話の学習に使いたい。（１場面が短いものが良い。）
	日常会話の動画。字幕がついたもの。	・日常会話を扱った単元で活用する。話者の顔（口）がはっきりわかるような映像。
	字幕つきの会話表現	・短いやりとりから始まり、場面が短いもの。初歩的なものが、とっつきやすい。教科書に準拠したものが使いやすい。
ICT	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	・できれば無償でネットでダウンロードできると良い。
	ＡＳＬを扱ったＤＶＤ（内容は検定教科書に準じる）	・日本の手話とアメリカの手話の違いや似ている点に気付いたりすることで異文化理解に繋げたい。
	マニュアルアルファベットや簡単なＡＳＬの視覚教材	・日常の指導で活用できるためのきっかけとして用いたい。
ASL	ＡＳＬの動画	・ＡＳＬに興味をもつ生徒がいる為、その学習ができる環境を整えたい。
	ＡＳＬを日本語で解説した教材（辞書、簡単な会話）	・よく使う単語（名詞、動詞）をＡＳＬで表したい。
	ＡＳＬを使用した映像教材（場面別）	・コミュニケーション活動で使用したい。教員のＡＳＬの知識を問わず使用できるものがあると子どもたちにとって良い。
	ＡＳＬの動画（アメリカ手話）アメリカ手話を学ぶＤＶＤ（日本手話、字幕付）	・外国人ＡＬＴの授業の復習したり、外国人のろう者と話すための練習。 ・場面設定された会話やＡＳＬを使ったアクティビティ、実際にＡＳＬ使用者の会話風景等を収めた初心者用学習ＤＶＤがあると良いと思う。
	簡単なＡＳＬの紹介又は、学習ビデオ	・英語の挨拶をよりスムーズに行うため。

	聾学校の英語の授業がどのように行われていて、何が一番ベストなのか教員向けのものがあればとても参考になる。	・スピーキングやリスニングの評価は、どうしているのか、リーディングやライティングに置き換えてしまうと、一般の中学校との評価の差が出てしまうのではないか。
	英文法などを表した手話辞典	
	外国の文化と日本の文化の違いを紹介する字幕付きＤＶＤ	・文法などを教えるときに、正しい手話で教えたい。 ・異文化理解の場面で使用したい。字幕は英語と日本語を選べると、生徒の実態に合わせて使用できて良い。 ・生活、文化を知る活動で使いたい。
	外国の生活、文化の写真、動画	・日本との違いを伝えるために活用したい（食べ物や生活スタイルなど） ・外国の暮らしや文化を知る活動で使用する。
	手話と字幕付きの英会話動画 手話と字幕付きの外国の文化紹介動画	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。字幕は、短いものが良い。（２）
その他	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。ＢＧＭが無い又は調整できると良い。できれば、１場面が短く、繰り返し何度も見られるようにすると、話し合いがしやすい。
	アルファベットの指文字表	・書籍に載っていたものをコピーして使用しているが、かわいらしく楽しく学べるようなイラスト入りの表があるとよい。
	： ゲーム	・聴覚に障害がある生徒たちが楽しめる英語のアクティビティ集。
	単語ゲームで、英語＋読み方がカタカナで表示されるものが良い。	・初期の単語学習を行う時に楽しく耳から正確に聞こえないので、どういう音か見て分かるような楽しいＤＶＤがあると良い。
	生徒が好きそうなアニメや映画のＤＶＤ（英文と日本文が同時に出る。）	・親しみやすい内容のアニメ等で自然な英会話のやりとりを日本語も同時に見ながら理解できるＤＶＤがあるといい。
	外国の方の手話映像	・海外のろう者の方の手話を見ると、外国（語）がより身近に感じられるように思うので。

イ　高等部であったら良いと思われる教材

表 3-7-3 に、高等部であったら良いと思われる教材を示した。学習内容の導入のための教材としては、「新出語彙のルビ付きフラッシュカード」「英単語のＤＶＤ」が挙げられた。学習内容提示のための教材としては、「デジタルテレビ」「音声文字変換ソフト」「電子黒板」「字幕、カナ付きデジタル教科書」「加工できるデジタル教材」「自動でルビが付けられるワ

ードやパワーポイント」「ルビ付き教科書本文」「音声認識機器」が挙げられた。学習内容の理解を促すための教材としては、「単語のつづりと発音(読み方）のパターン例をたくさん載せた単語帳やプリント」が挙げられた。リスニング教材としては、「英検の代替問題のような、字幕付きのリスニング教材」「リスニングテロップＤＶＤ」等が挙げられた。読むための教材としては、「イントネーションのラインのある教科書本文のデーター」「教科書新出単語の発音記号のあるデーター」「フォニックスがすぐわかる本」「音と文字の対応するフォニックスの内容が含まれた教材」「発音図表・発音記号表」「発音記号又は読み方がルビとして単語についている教材」が挙げられた。話すための教材としては、「字幕つきスキット（会話）」「会話場面に字幕が入ったＤＶＤ（実物でも絵でもよい）」が挙げられた。ICT としては、「タブレット型ＰＣとＷｉ－Ｆｉ」「学習内容の定着度を測定するためのアプリ」「描画ソフト」が挙げられた。ASL としては、「マニュアルアルファベットやアメリカ手話のＤＶＤ」「ＡＳＬの基礎を学ぶＤＶＤ」等が挙げられた。その他としては、「教室の黒板と同じ面積の埋込型電子黒板」「ロジャー（スクリーンタッチパネル）またはロジャーペン」「英和手話辞典・和英手話辞典」「英語の歌」「英語集」「アルファベットの点つなぎ（色塗りできるもの、英単語を練習できる４線付き）」「色のついたアルファベットのマグネット（大文字、小文字）」「フェルトでできた「形」のサンプルセット、模型」「店舗（ファストフード、洋服店等）や空港、レストラン等、旅行場面での会話集」「外国の暮らしや文化を紹介した動画。手話つきで会話の内容がわかるもの」「洋画のＤＶＤ」「中３～高１相当の英語の長文問題のネタ集」「聾学校独自の CAN-DO リスト」が挙げられた。

表 3-7-3　高等部で「あったら良い」と思われる教材　　N=47

カテゴリー	教材例	活用の方法
学習内容の導入のための教材	新出語彙のルビ付きフラッシュカード	・語彙の導入時
	英単語のＤＶＤ	・語彙の導入時、スペル、意味（手話）、発音（指文字、ルビ）の情報提供"
学習内容提示のための教材	デジタルテレビ	・各教室ごとに１台あると、授業ごとに移動する手間がはぶけて良い。
	音声文字変換ソフト、電子黒板	・高価なので国の補助が必要と思われる。
	デジタル教科書	・授業の中で、必要に応じていろいろと活用できる。 ・何回もくり返し見せたりきかせたり確認したりする時に便利です。
	字幕、カナ付きデジタル教科書	・毎時間での授業で使用。
	加工できるデジタル教材	・本文の間や端に、書き足すことができるもの。

	重複クラス用に自動でルビがふれるワードやパワーポイント	・本時の流れを説明する時に使用したい
	ルビ付き教科書本文	・サイズ変更可能なもの。
	音声認識機器	・肉声や録音された音声にも対応したものが欲しい。即時的に英文を視覚的に確認させたい。
学習内容の定着をはかるための教材	映像で光る電子メトロノーム	・単語、英文をチャンツのようにリズムに合わせて覚えさせたい。
学習内容の理解を促すための教材	単語のつづりと発音(読み方）のパターン例をたくさん載せた単語帳やプリント	・学習のできるだけ早い時期にある程度系統立てて学習させたい。聴こえる子にも有効だが、特に聴こえの障がいのある子には重要になる。
読むための教材	イントネーションのラインのある教科書本文のデーター	・本文にイントネーションのラインがほしい。
	教科書新出単語 発音記号のあるデーター	・単語の発音に発音記号は必要なのでデータがあるもの。
	フォニックスがすぐわかる本	・ちょっとした単語もフォニックスのルールに沿って読めるように練習する。
	音と文字の対応するフォニックスの内容が含まれた教材	・発音とスペルが異なった単語が出て来た時も対応できるのではないのかと思う。
	発音図表・発音記号表	・発音練習
	発音記号又は読み方がルビとして単語についている教材	・発音練習
聞く（リスニング)のための教材	英検の代替問題のような、字幕付きのリスニング教材	・英検対策、リスニング、読みとりの練習
	字幕でのリスニング教材	・リスニング問題の代替手段として広く使われているが、自作での対応を求められるため、あると良い。英検対策や入試対策での活用を想定している。
	リスニングテロップＤＶＤ	・単元各の評価や導入時、授業中や中間・期末テストで使う。評価の点数に加える。

	ＤＶＤ教材	・日常生活でよく使われる基本的な英会話の対話練習用として使用。字幕（意味や読み方）がついていると英語が苦手な生徒にも活用しやすい。
話すための教材	字幕つきスキット 会話場面に字幕が入ったＤＶＤ（実物でも絵でもよい）	・（読み方もついている字幕つき）会話の練習 ・文字と実際の会話のイメージをつなぐことで、文章の理解が深まったり、導入に時間をかけずに文法や英作文の練習を重点的にできる。
ICT	タブレット型ＰＣとＷｉ－Ｆｉ	・現在は個人所有のものを使用している。将来的に生徒一人一人に行き渡るようになると学習効果は大きいと思われる。
	学習内容の定着度を測定するためのアプリ	・各学習活動の最後５分間で、生徒各自に学習活動を振り返らせるための小テストを行い、その定着度を生徒個人が把握でき、データを集約できるもの。
	描画ソフト	・文章で表記された場面を視覚的に表現できるような描画ソフトがあれば、絵が下手でもイラストにして提示できる。
ASL	マニュアルアルファベットやアメリカ手話のＤＶＤ	・日常の指導や動機づけのために活用する。
	ＡＳＬの基礎を学ぶＤＶＤ	・教員の研修のため。
	ＡＳＬの基礎を学ぶ日本語の入門書	・教員の研修のため。
	ＡＳＬ辞典	・アメリカ手話の学習
	ＡＳＬで基本単語を表すＤＶＤ	・基本単語のみ。導入で使う時に、興味や意識づけで、その単元の最初の時間に見せる。
	ＡＳＬのＤＶＤ教材	・授業の導入等で生徒の興味・関心を惹くために使いたい。
その他	教室の黒板と同じ面積の埋込型電子黒板	・黒板としてだけでなく、ＰＣの画面を投影するなど、あらゆる情報を広い一面に集約できるもの。
	ロジャー（スクリーンタッチパネル）またはロジャーペン	・聴覚障害生徒のための聴力補助機器。離れたところからの音声が、はっきり聴き取れる。補聴器だけでは、聞きとれない生徒にとって有効な補助機器。
	英和手話辞典 和英手話辞典	・言葉と概念が一致させられるツールが必要であり、自分でわからない時に自分で調べて納得する道具があるといい。

英語の歌	・分かりやすい歌詞、カタカナ表記など、生徒が親しみやすい教材。
英語集	・重複クラス用に、社会に出たら目にするような英語集。
アルファベットの点つなぎ（色塗りできるもの、英単語を練習できる４線付き）	・アルファベットの順番を確認後、出来た絵を英語で何というか学ぶ。単語を書く練習、色塗りはあきさせないため。
色のついたアルファベットのマグネット（大文字、小文字）	・アルファベットの順番確認後、色別に分けて色の名前を学ぶ。数の言い方を学ぶ。
フェルトでできた「形」のサンプルセット、模型店舗（ファストフード、洋服店等）や空港、レストラン等、旅行場面での会話集	・実際に触ることで、いい刺激を与えながら学べる。「形」「色」を英語で理解する。 ・英語による活用パターンの習得、コミュニケーションのペアワークとして。
外国の暮らしや文化を紹介した動画。手話つきで会話の内容がわかるもの	・ＮＨＫ「大人の基礎英語」のような１０分くらいで見られる動画。興味をもちながら使ってみたい表現を楽しいドラマ仕立てで楽しんで見られると良い。 ・日本語、英語両方の字幕入りの使いやすいもの。
洋画のＤＶＤ	・英語の入試問題を毎年０から考えなければならないので、入試で使ってもよい長文がたくさん載っている本が大量に必要。
中３～高１相当の英語の長文問題のネタ集	・各生徒の英語力の伸び具合を確認。
聾学校独自の CAN-DO リスト	

第３項　「英語科」のまとめと考察

本調査では、中学部 118 名、高等部 95 名の回答を得た。教職経験年数 21 年以上の教員が、中学部（37.6%）、高等部（41.8%）であった。中学部担当者の聾学校経験年数は「0～3 年」が 35.9%、次いで「3～6 年」が 17.1%、「6～9 年」が 18.8%であった。また、高等部担当者の聾学校経験年数は「0～3 年」が 34.0%、次いで「3～6 年」が 21.3%、「6～9 年」が 14.9%であった。また、中学部担当者の該当学部経験年数は、「0～3 年」が 46.6%、次いで「3～6 年」が 19.0%、「6～9 年」が 16.4%であった。高等部担当者の該当学部経験年数は、「0～3 年」が 33.3%、次いで「3～6 年」が 20.7%、「6～9 年」が 17.2%であった。

指導グループでは、7 名以上のグループで学習している学校もあったものの（中学部で 3 校、高等部で 7 校）、中学部（3～5 名）、高等部（3～5 名）とも少人数での指導をしている実態であった。

コミュニケーション手段については、中学部・高等部ともに多様なコミュニケーション手段が使われていた。中学部では、手話付きスピーチが 91.9%、指文字が 83.8%、聴覚口話 66.7%。また、高等部では、手話付きスピーチが 88.4%、指文字が 76.8%、聴覚口話が 57.9%と、中学部の方が手話付きスピーチ、指文字、聴覚口話の使用が多かった。

教材の有無については、中学部で学校に 70%以上保有されている教材として、検定教科書、国語辞典、手話辞典、インターネット上の Web 情報、図鑑、英和辞典、和英辞典（紙媒体）、絵本（行事、物語、説明等）、カレンダー、新聞、ことば絵じてんが挙げられた。また、個人で有する教具として、電子辞書（49.1%）、市販の英語テキスト、ワークブック（30.6%）、カード教材（28.8%）があった。教材の使用状況では、よく使われる教材として、検定教科書（93.9%）、市販の英語テキスト、ワークブック（64.3%）、カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等) (48.6%)が挙げられた。時々使う教材は、インターネット上の Web 情報（57.0%）、英和辞典・和英辞典（45.2%）が挙げられた。

一方、高等部で学校に 70%以上保有されている教材としては、検定教科書、手話辞典、図鑑、英和･和英辞典、インターネット上の Web 情報が挙げられた。また、個人で有する教具として、電子辞書（83.0%）が挙げられた。教材の使用状況では、よく使われる教材として、検定教科書(92.4%)が挙げられた。時々使う教材としては、市販の英語テキスト、ワークブック(52.3%)、インターネット上の Web 情報（50.5%）が挙げられた。中学部・高等部ともに、教科書を中心として、辞典やインターネット上の Web 情報等を使用していた。

次に、機器の有無と使用状況であるが、中学部で学校に 90%以上保有されている教具としては、パソコン、プロジェクター、黒板、ＤＶＤプレーヤー、デジタルビデオカメラ、放送機器、ＣＤプレーヤー等オーディオ機器、デジタルカメラがあり、このうち、「よく使われる教材」としては、黒板（86.7%）、「時々使う」教材として、タブレット PC（43.4%）が挙げられた。

高等部で学校に 90%以上保有されている教具としては、プロジェクター、ＤＶＤプレーヤー、パソコン、黒板、デジタルビデオカメラ、放送機器と、中学部とほぼ同様であった。このうち、「よく使われる」機器としては、黒板（76.7%）が挙げられた。また、「時々使う」機器として、DVD プレイヤー（50.5%）が挙げられた。

その他の教材や自作教材については、中学部高等部とも、ＤＶＤの他、「自作のプリント」「自作リスニング教材」「自作カード」「自作パワーポイント」等の教材が挙げられた。何れの学部とも、単語学習教材が作成されており、英単語の語彙拡充を目指している実態が示された。

また、学習評価で活用している教材として、市販のテストを常に活用しているとの回答は中学部で 23.3%、高等部で 20.2%であり、活用していないと回答したのは、中学部で 36.2%、高等部で 38.3%であった。市販の教材については、聴覚障害生徒に適合した教材が十分に揃っていない状況が伺われ、担当教員が、既存の教材に手を加えたり、新たに自作教材を作成していると考えられた。

中学部であったら良いと思われる教材として、「字幕付の映像教材」、「教科書の単元の内容を再現した動画(字幕付き)、「リスニング用、字幕テロップ」等の他、「英語の発音 DVD」、「ASL を日本語で開設した DVD」等の映像教材が挙げられた。これらは、限られた指導時数内で生徒にわかりやすく、興味関心を持つような教材の必要性を示したものと思われる。

高等部であったら良いと思われる教材として、中学部同様、「手話付き DVD 教材」、「英語字幕付 DVD（教科書準拠）」等の映像教材の他、「デジタル教科書」「加工できるデジタ

ル教材」、「ルビ付き教科書本文」といった教科書の指導に直接有効な教材を求めていた。更に、
「タブレット型ＰＣとＷｉ－Ｆｉ」や「学習内容の定着度を測定するためのアプリ」等が挙げられ、将来の活用を想定した教材も求めていた。このように、担当者からは、各種ソフトウェアの利用を期待する意見もあった。これらは今後、導入されていくと予想されるが、これに伴う指導法の検討が進むことが予想される。

今回の調査では、英語という教科学習に対して、生徒の意欲を高め、基礎的なコミュニケーション力を育成することに直接結びつく質問は設定していない。しかし、自由記述等の回答からは、学習内容の定着を図るべく、様々な教材を活用している実態が示された。また、聴覚障害生徒にとって苦手と思われる「話す」「聞く」に関する教材も駆使されている状況があった。

第４節　自立活動

新特別支援学校学習指導要領[1)]においては、自立活動の指導内容として、健康の保持、心理的な安定、人間関係の形成、環境の把握、身体の動き、コミュニケーションの６つの区分が示されている。聴覚障害教育において、各項目の指導内容としては、「健康の保持」では、聴覚の疾患についての理解と自己管理、「心理的な安定」では、聴覚活用への関心、障害の受容、自立に向けた進路情報等の収集、「環境の把握」では、手話等の活用、 補聴器（人工内耳）装用による音・音声の聞き取り、「身体の動き」では、手話・指文字につながる手指機能や音器(舌･唇等)の機能、「コミュニケーション」では、コミュニケーション手段（読話、発音･発語､キュード・スピーチ、文字､指文字､手話等の活用)、情報機器等の活用等が考えられる。

また､自立活動における教材･教具について､新特別支援学校学習指導要領解説[2)]では「指導目標（ねらい）を達成するための学習は，一定期間にわたって行われるが，その間においても，幼児児童生徒が目標達成に近付いているか，また，教材・教具などに興味をもって取り組んでいるかなど，幼児児童生徒の学習状況を評価し，指導の改善に日ごろから取り組むことが重要である。」と示し、評価の観点から、教材の役割を述べられている。

本節では、幼稚部から高等部までの各学部の教員を対象にして、教職経験、自立活動に関する教材の有無、活用頻度、活用状況、自作教材、授業で活用する機器、あると良い教材等について尋ね、得られた結果から現状と課題について考察した。

1）特別支援学校幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領（平成 29 年４月）文部科学省

2）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）（平成 30 年３月）文部科学省

第１項　基本情報

４－１　幼稚部

有効回答数 150。表 4-1-1 に幼稚部配属教員における教職、聾学校、学部経験年数を示した。教職経験年数 21 年以上が 42.7%で、聾学校経験年数 0～3 年が 21.1%、幼稚部経験年数 0～3 年が 33.6%であった。教職経験年数が長いが、幼稚部経験が短い状況が示された。

表 4-1-1　教職、聾学校、幼稚部経験年数　　N=150 （数値は ％）

経験年数	0～3	3～6	6～9	9～12	12～15	15～18	18～21	21 以上
教職	5.3	10.7	14.7	5.3	7.3	7.3	6.7	42.7
聾学校	21.1	17.7	12.2	5.4	13.6	6.8	9.5	13.6
幼稚部	33.6	18.8	14.1	6.7	12.1	8.1	0.7	6.0

表 4-1-2 に担当（所属)、表 4-1-3 に、担当学年を示した。85.9%が、学級担任であり、担当学年では、年中が 41.3%（旧調査では年少、年中、年長とも 30%台と同率）であった

表 4-1-2　担当（所属）　　N=149（数値は ％）

学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
85.9	4.7	1.3	8.1	0.0

表 4-1-3　担当学年（いつも授業している学年）　　N=150 （数値は ％）

年少	年中	年長	重複障害
28.7	41.3	35.3	6.0

４－２　小学部

有効回答数 142。表 4-2-1 に、小学部配属の教員における教職、聾学校、学部経験年数を示した。教職経験年数 21 年以上が 44.0%で、聾学校経験年数 0～3 年が 20.7%、小学部経験年数 0～3 年が 22.1%であった。約半数が教職経験年数 21 年以上で、聾学校や小学部の経験 0～6 年の教員が半数ほど所属している状況が示された。

表 4-2-1　教職、聾学校、小学部経験年数　　N=142(数値は ％）

経験年数	0～3	3～6	6～9	9～12	12～15	15～18	18～21	21 以上
教職	9.2	8.5	11.3	6.4	8.5	4.3	7.8	44.0
聾学校	20.7	19.3	8.6	16.4	8.6	2.9	5.7	17.9
小学部	22.1	20.6	16.2	13.2	5.9	5.9	7.4	8.8

表 4-2-2 に、担当（所属）、表 4-2-3 に、担当学年を示した。58.3%が学級担任、回答者は、２～３割程度の割合で各学年に分散していた。（前回調査では、第１学年が最も多く全体の 1/4、第６学年の回答者は 4.1%）

表 4-2-2　担当（所属）　　N=132（数値は ％）

学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
58.3	9.1	0.8	28.0	3.8

表 4-2-3　担当学年（いつも授業している学年）　　N=142 （数値は ％）

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	重複障害
25.4	30.3	31.0	25.4	27.5	23.2	29.6

４－３　中学部

有効回数答 125。表 4-3-1 に、中学部配属の教員における教職、聾学校、学部経験年数を示した。教職経験年数 21 年以上が 34.1%で、聾学校経験年数 3～6 年が 24.0%、中学部経験年数 3～6 年が 30.9%であった。約半数が聾学校経験年数 0～6 年及び中学部の経験 0～6 年の教員である状況が示された。

表 4-3-1　教職、聾学校、中学部経験年数　　N=125(数値は ％)

経験年数	0～3	3～6	6～9	9～12	12～15	15～18	18～21	21 以上
教職	4.1	13.8	10.6	7.3	11.4	8.9	9.8	34.1
聾学校	18.4	24.0	16.0	10.4	8.8	7.2	7.2	8.0
中学部	26.8	30.9	13.0	7.3	8.1	7.3	3.3	3.3

表 4-3-2 に、担当（所属）、表 4-3-3 に担当学年を示した。68.6%が学級担任、回答者は第 1 学年から第 3 学年まで 30%台後半とほぼ同率であった。

表 4-3-2　担当（所属）　　N=118（数値は ％）

学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
68.6	14.4	3.4	8.5	5.1

表 4-3-3　担当学年（いつも授業している学年）　　N=125 （数値は ％）

1 年	2 年	3 年	重複障害
39.2	36.0	38.4	32.0

４－４　高等部

有効回答数 99。表 4-4-1 に、高等部配属の教員における教職、聾学校、高等部経験年数を示した。教職経験年数 21 年以上が 35.4%で、聾学校経験年数 0～3 年が 21.2%、高等部経験年数 0～3 年が 27.3%であった。約 1/3 が教職経験年数 21 年以上で、聾学校や高等部の経験 0～6 年の教員が半数前後所属している状況が示された。

表 4-4-1 教職、聾学校、高等部経験年数　　N=99(数値は ％)

経験年数	0～3	3～6	6～9	9～12	12～15	15～18	18～21	21 以上
教職	5.1	11.1	10.1	9.1	10.1	9.1	10.1	35.4
聾学校	21.2	18.2	16.2	13.1	8.1	8.1	4.0	11.1
高等部	27.3	24.2	16.2	10.1	8.1	6.1	4.0	4.0

表 4-4-2 に、担当（所属）を、表 4-4-3 に担当学年を示した。54.2%が学級担任、回答者は第 1 学年から第 3 学年まで約 1/3 とほぼ同率であった。

表 4-4-2　担当（所属）　　N=96（数値は ％）

学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
54.2	15.6	14.6	12.5	3.1

表 4-4-3　担当学年（いつも授業している学年）　　N=109 （数値は ％）

1 年	2 年	3 年	重複障害
35.0	33.0	38.0	36.0

第２項　結果

４－５　コミュニケーション手段（複数回答）

有効回答数 499。各学部のコミュニケーション手段を尋ねた。表 4-5-1 に結果を示した。どの学部においても、小学部から高等部は手話付スピーチの割合が 80%台で高く、聴覚口話、指文字が続いた。

高等部での聴覚口話の割合は 40%台だった。表中、手話付きスピーチは、補聴器（または人工内耳）を併用している。

表 4-5-1　コミュニケーション手段　　N=499（複数回答）(数値は ％)

	聴覚口話	手話付スピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
幼稚部	73.3	84.7	2.0	34.7	13.3	61.3	50.0
小学部	64.1	89.4	10.6	34.5	12.0	73.2	24.6
中学部	53.6	82.4	12.8	30.4	4.8	57.6	8.0
高等部	46.0	92.0	12.0	37.0	1.0	63.0	12.0

４－６　教材の有無、活用頻度、活用状況（幼稚部）

幼稚部における教材の有無と活用について、21 の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを１つ選択することを求めた。表 4-6-1 に、結果を示した。N は回答数。

学校で保有する教材で多いものは、絵本（97.9%）、紙芝居（96.5%）、図鑑（92.4%）、写真（90.8%）、ことば絵じてん（89.5%）、カレンダー（86.9%）が 90%前後を占めた。個人で保有する教材は、絵日記（60.4%）が最も多かった。活用の頻度では、よく使う教材として、絵カード（89.9%）、写真（86.4%）、ことば絵じてん（85.7%）、カレンダー（83.1%）絵本（73.3%）が挙げられた。活用状況として文字カード（48.3%）や絵カード（38.5%）が自作して活用されていた。

表 4-6-1　教材の有無、活用の頻度、活用の状況（幼稚部）　　(%)

	教材の有無				活用の頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
絵本（行事、物語、説明等）	146	97.9	2.1	0.0	146	73.3	25.3	1.4	139	71.9	26.6	0.0	1.4
紙芝居（行事、物語、説明等）	141	96.5	0.7	2.8	142	12.0	65.5	22.5	133	45.9	30.1	3.0	21.1
絵日記	139	34.5	60.4	5.0	145	71.0	23.4	5.5	135	50.4	17.0	28.1	4.4
写真（人物、場所、	141	90.8	9.2	0.0	147	86.4	12.2	1.4	142	32.4	51.4	14.8	1.4

活動場面等）													
動画	142	82.4	7.7	9.9	144	9.7	58.3	31.9	138	47.1	14.5	10.1	28.3
絵カード	144	80.6	19.4	0.0	148	89.9	9.5	0.7	143	27.3	33.6	38.5	0.7
文字カード	144	63.9	34.0	2.1	146	58.2	29.5	12.3	143	22.4	18.2	48.3	11.2
実物	141	59.6	36.9	3.5	146	54.1	44.5	1.4	140	65.7	26.4	6.4	1.4
新聞、雑誌	143	72.0	19.6	8.4	147	44.2	40.1	53.1	132	28.0	28.8	1.5	49.2
広告、ちらし、ポスター	142	66.9	21.1	12.0	144	1.4	43.1	51.4	128	7.0	26.6	2.3	48.4
図鑑	145	92.4	7.6	0.0	148	52.7	48.6	4.7	143	1.4	11.2	0.0	4.2
音楽ＣＤ	142	84.5	12.0	3.5	147	50.3	37.4	23.8	135	48.1	13.3	2.2	21.5
ＤＶＤ	141	61.0	15.6	23.4	147	4.8	33.3	63.9	132	47.0	7.6	0.0	59.8
手話・字幕付きＤＶＤ	138	41.3	3.6	55.1	142	24.6	11.3	88.7	129	4.7	2.3	0.8	87.6
ＰＣソフト	141	38.3	7.1	54.6	145	64.8	14.5	84.8	130	22.3	4.6	3.8	82.3
ことば絵じてん	143	89.5	9.8	0.7	147	85.7	40.1	6.8	141	56.0	13.5	1.4	5.7
カレンダー	145	86.9	13.1	0.0	148	83.1	11.5	1.4	141	80.1	55.3	19.9	1.4
インターネット上の Web 情報	144	75.0	6.3	18.8	145	6.9	20.7	65.5	130	82.3	22.3	3.1	61.5
アプリケーション	144	63.2	2.1	34.7	147	1.4	8.2	91.2	130	6.2	3.8	0.0	89.2

４－７　自作教材（幼稚部）

その他の自作教材について、自由記述を求めた。表 4-6-2 に、「よく使用する自作教材」を示した。自作教材として、行事と言語指導、意味理解のカテゴリーに分けた。行事・校外学習では、予定表を作成し、見通しを持たせるほか、写真カードなどを使用して幼児にイメージをもたせたり想起させたりしていた作成されていた。

表 4-6-2　よく使用する自作教材（自由記述：幼稚部）

使用用途	教材例	用例
行事（校外学習）	予定表	一日、一週間分の予定。その日の活動の記録（絵写真）し、振り返り
	掲示物	活動の様子などを掲示し、子供に想起を促す。
	デジタルカメラ	活動を写真に撮っておき、大型モニターに投影し、振り返る。
	絵カード・写真カード	関わりのある人物の顔写真等を使い、想起する。
	製作見本	子供の興味を引くよう、製作する物の見本をあらかじめ作っておく。
	パネルシアター	物語のストーリーの確認や、校外学習の確認等で使用する。
	単元カード	単元の流れを絵や文字にして示し、見通しを持たせるために使用する。

言語指導	ミニホワイトボード	移動先の場所において、適宜確認する際に活用する。
	短冊カード・バインダー	必要に応じて、ペンで書いて確認する。
	5W カード	伝えたいことを分かりやすく伝える際に使用する。
意味理解	じゃんけんカード	じゃんけんのルールを確認する。

４－８　屋外活動の教材の有無、活用頻度、活用状況（幼稚部）

屋外活動における教材の有無と活用について、14 の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「いつも持っていく・時々持っていく・あるが持っていかない・使わない」の質問を設け、当てはまるものを１つ選択することを求めた。表 4-6-3 に、結果を示した。

「よく使う」と「時々使う」の回答のあった教材を示した。「よく使う」と「時々使う」が 70%以上の教材として、虫かご（94.0%）、デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ（94.0%）、写真（89.2%）、虫取り網（88.6%）が挙げられた。

表 4-6-3　屋外活動の教材（よく使う＋時々使う　70%以上：幼稚部）

	回答総数(学校、個人)	回答数(%)	
		よく使う	時々使う
1 スケッチブック	143	4.9	34.3
2 メモ帳	147	32.7	30.6
3 虫かご	149	21.5	72.5
4 虫取り網	149	13.4	75.2
5 魚とり網、たも網	143	5.6	30.8
6 バケツ	149	12.1	57.0
7 ことば絵じてん	150	2.7	22.7
8 図鑑	150	7.3	46.7
9 絵本	150	3.3	34.0
１０紙芝居	145	0.7	9.7
１１写真	149	36.2	53.0
１２絵日記	150	2.0	19.3
１３デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ	150	72.7	21.3
１４タブレット PC	148	4.1	14.2

４－９　屋外活動の自作教材（自由記述：幼稚部）

その他の屋外活動の自作教材について、自由記述を求め、表 4-6-4 に結果を示した。屋外活動の自作教材として、ポケット図鑑、デジタルカメラ・コンパクトフォトプリンター、自作地図、手作りカードが挙げられた。

表 4-6-4　屋外活動の自作教材（自由記述：幼稚部）

教具例	用例
ポケット図鑑	移動中に、生き物や植物を見つけた時に特徴を話しながら調べる。
デジタルカメラ・コンパクトフォトプリンター	活動写真をすぐ印刷し、帰りの会で提示し、振り返り活動に使用する。
自作地図	子どもに分かりやすいように、遠足のルートなどを示す。
手作りカード	カードに書いてある季節の草花や生き物を探し、見つけたらシールを貼ったり○印をつけて遊ぶ。

４－１０　教材の有無、活用頻度、活用状況（小学部）

小学部における教材の有無と活用について、35 の教材を示し、それぞれの教材に対し「学校にある・個人のものがある・ない」.「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを１つ選択することを求めた。表 4-7-1 に結果を示した。N は回答数。学校に多く用意されている教材は、絵本(98.5%)、図鑑(97.1%)、聾学校用教科書(95.0%)、紙芝居 (94.2%)、新聞 (94.2%)、補聴器点検用具 (93.2%)、デジタルビデオカメラ (91.7%) 国語辞典 (91.3%)、が 90%以上を占めた。個人が所有する教材は、日記・絵日記 (45.6%)、市販のワークブック・問題集 (35.8%) が 30 から 45%に挙げられた。活用の頻度では、よく使う教材また時々使う教材として、写真 (94.1%)、カレンダー (93.3%)、絵本 (92.8%)、日記・絵日記 (91.2%)、図鑑 (91.2%)、絵カード (88.4%)、市販のワークブック (86.8%)、ことば絵辞典 (86.2%) が挙げられた。また、加工したり自作教材として多かったのは、写真(58.3%)、市販のワークブック(52.3%)、カレンダー(48.1%)、日本語指導用教材(47.9%)、絵カード (44.8%) が挙げられた。

表 4-7-1　教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）　(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工and自作
1 聾学校用教科書	140	95.0	1.4	3.6	63.0	32.8
2 文部科学省著作	132	72.7	3.8	23.5	25.8	18.3
3 附則９条本	126	57.9	8.7	33.3	31.6	21.8
4 日本語指導用教材	129	59.7	23.3	17.1	74.4	47.9
5 市販のワークブック、問題集	137	56.9	35.8	7.3	86.8	52.3
6 国語辞典	138	91.3	7.2	1.4	68.8	6.1
7 漢和辞典	138	88.4	8.7	2.9	55.1	4.0
8 電子辞書	132	6.8	28.0	65.2	20.7	1.8
9 手話辞典	136	86.8	8.8	4.4	81.9	11.0
10 ことわざ辞典	137	84.7	9.5	5.8	59.0	10.0
11 ことば絵じてん	138	89.1	8.0	2.9	86.2	17.3

12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	137	97.1	2.2	0.7	91.2	11.4
13 絵本（行事、物語、説明等）	137	98.5	1.5	0.0	92.8	18.5
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	137	94.2	0.7	5.1	48.9	11.9
15 なぞなぞ	135	77.8	18.5	3.7	66.9	32.8
16 カルタ、百人一首	137	68.6	25.5	5.8	65.2	11.1
17 絵カード	139	73.4	25.2	1.4	88.4	44.8
18 写真（人物、場所、活動場面等）	135	69.6	24.4	5.9	94.1	58.3
19 カレンダー	137	78.1	19.7	2.2	93.3	48.1
20 日記・絵日記	136	50.0	45.6	4.4	91.2	42.7
21 新聞	139	94.2	2.9	2.9	60.1	29.0
22 広告、チラシ、ポスター	137	86.1	6.6	7.3	45.3	20.8
23 雑誌	137	54.7	14.6	30.7	35.3	13.8
24 音素材用ＰＣソフト、CD	134	71.6	9.7	18.7	53.8	11.1
25 耳の構造図	137	85.4	4.4	10.2	50.7	20.2
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	137	86.9	9.5	3.6	76.1	13.7
27 補聴器点検用具	132	93.2	3.8	3.0	79.6	5.3
28 発音・発語指導用具	128	75.8	14.8	9.4	73.5	35.7
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	130	86.2	3.8	10.0	58.5	7.0
30 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	128	74.2	7.8	18.0	51.5	9.1
31 手話・字幕付きＤＶＤ	128	65.6	5.5	28.9	42.1	7.6
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	133	89.5	9.8	0.8	89.8	37.4
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	132	91.7	6.8	1.5	77.5	26.4
34 インターネットの Web 情報	128	85.2	7.0	7.8	75.4	37.8
35 アプリケーション	128	70.3	13.3	16.4	59.8	18.5

４－１１　授業で活用する機器（小学部）

自立活動の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、24 の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを１つ選択することを求めた。表 4-7-2 に結果を示した。N は回答数。

学校の教材・教具として多いものは、プロジェクター（100%）、黒板（98.6%）、パソコン（97.8%）、DVD プレーヤー（97.9%）、デジタルビデオカメラ（97.8%）、CD プレイヤー（95.7%）、放送機器（94.3%）、デジタルカメラ（93.5%）、集団補聴器（92.0%）、地上デジタル対応テレビ（92.0%）であった。「よく使う」及び「時々使う」教材として、黒板（89.2%）、発表板（84.8%）、デジタルカメラ（83.6%）、パソコン（73.0%）が挙げられた。また、加工したり自作したりする教材として多かったものは、母音図（27.1%）、ひらがなカード（26.8%）が挙げられた。

表 4-7-2　授業で活用する機器（小学部）　(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
１黒板	141	98.6	0.0	1.4	89.2	9.0
２発表板	140	67.9	27.1	5.0	84.8	11.6
３漢字表	140	72.1	22.9	5.0	65.7	14.1
４指文字表	139	77.7	12.9	9.4	51.5	8.8
５手話表	136	50.0	14.7	35.3	40.5	16.4
６電子黒板	140	57.1	0.0	42.9	17.2	0.8
７ＯＨＰ	133	57.1	0.0	42.9	7.9	1.8
８パソコン	137	97.8	0.7	1.5	73.0	10.2
９プロジェクター	140	100.0	0.0	0.0	54.3	3.9
１０地上デジタル対応テレビ	137	92.0	0.0	8.0	46.7	4.8
１１ＤＶＤプレイヤー	140	97.9	0.7	1.4	55.1	2.4
１２ＣＤプレイヤー等オーディオ機器	140	95.7	3.6	0.7	66.7	2.4
１３実物投影機	137	85.4	0.0	14.6	37.4	1.6
１４デジタルカメラ	138	93.5	6.5	0.0	83.6	14.3
１５デジタルビデオカメラ	138	97.8	2.2	0.0	72.1	5.3
１６集団補聴器	137	92.0	0.7	7.3	54.4	0.8
１７放送機器	140	94.3	1.4	4.3	37.7	3.2
１８個人用ＦＭ等システム	138	47.8	21.7	30.4	47.0	0.8
１９ひらがなカード	137	73.0	20.4	6.6	68.9	26.8
２０音声記号図	137	84.7	1.5	13.9	51.1	11.8
２１母音図	137	79.6	8.8	11.7	63.8	27.1
２２キューサイン表	134	42.5	9.0	48.5	19.2	9.7
２３カードリーダー	133	60.9	4.5	34.6	33.1	1.8
２４タブレット PC	137	81.8	5.1	13.1	60.0	5.6

４－１２　その他の自作教材（小学部）

その他の自作教材について表 4-7-3 に、自由記述を求めた結果を示した。その他の自作教材として、カードやゲームなどを活用して楽しみながら活動できるように工夫している教材が多く使われていた。

表 4-7-3　その他の自作教材（自由記述：小学部）

教具例	用例
話し合い活動ワークシート	合同で話し合い活動を行う際、話し合いで決まったことやメモをとるワークシートや、話し合う際の自分の目標とふり返りをするワークシートを利用し、自分の課題に向かえるようにしている。
原稿用紙	字を速く書くトレーニングで使用したり、文章を書かせる活動のときに使用した

	りする。
スリーヒントゲーム	言葉の指導で使う。 ヒントから、考えをめぐらし、答えを導き出していく。
お話づくり絵カード	言葉の指導で使う。 絵から、その状況を読み取り、それを言語化する。
絵カード	語い・語句の拡充。季節の野菜・果物の写真、友達・先生の写真を使用し、神経衰弱を行い、単語の勉強をしている。
助詞カード	文に合った助詞を考えることができるよう、手話の動きに合うように作成している。
調音部位図	構音理解のための説明に使う。
音声読み取りソフト	発声が正しくできているか確かめさせるために使う。
聴力活用アプリ	どれだけ聴力を活用しているかを調べる時に使う。
インジケーター	S.Nができているかを示すために使う。
難聴児支援教材研究会の教材	・日本語の文法指導や動詞の活用などを指導する際、ワークシートを使用。
発音発声プリント	発音練習の際に使用する音読用プリント。
すごろく（ゲーム）	自立活動の時間に使う。日常生活の中でででてきた事や物、物事の名称のクイズが、すごろくの台紙に書いてあり、生活言語の拡充のために使っている。
３ヒントゲーム用教材	似た絵カードを数枚用意し、スリーヒントゲームをしたり、クイズを考えたりする。
反対言葉カード	カードを組み合わせたり、３～４語文を作ったりする。
国語教材	国語の「スイミー」「どうぶつ園のじゅうい」「ちいちゃんのかげおくり」「大造じいさんとガン」等の読み取りに必要な教材がある。
５Ｗ１Ｈカード	文の読みとり、連絡帳書き、文作りなどのときに使用。自活では問題文の読みとりを目指し活用。
ふき出しシート	話し手、話した内容などを明確にし、文の読解力向上を図っている。
季節のことばカード	カレンダーワークで使う。 季節の移ろいをイメージできるように、カードを並べたり、どのような行動が○月に行われているかを説明したりできるようにする。
穴埋めプリント	行事や学校目標等､その時に押さえたい言語を穴埋め式にしたプリントを作成し、宿題にして定着を図る。
補聴器・人工内耳カレンダー	毎日の補聴器管理をすすんで行う子どもに育てるために、ケースに入れる、電池交換した日、イヤモールドを洗った日を記入できるようにしたワークシート
日本語文法指導教材	自立活動や国語の授業において日本語の文を構造的に捉え理解する時に使用する
擬音語・擬態語カード	絵と文字を裏表のカードに載せ、遊びながら、語いを獲得できるようにカードゲームにしました。
文字カード（ひらがな）	語彙力をつけるため使う。ランダムにおかれたひらがなカードを使い、言葉を作っていく。濁点がなかったり、一文字違ったりなどがわかる。
３６５日のワークシート	障害認識や自己理解について考えさせたりする。

ソーシャルスキルのドリル、カード	いろいろな場面でどうすればよいか考えさせたり、他者の思いを考えさせたりする。
「わたしはだれでしょう」「わたしは何でしょう」	・物語の主人公の特徴や、お話の内容を語り形式にした文章を読み、又はその物の特徴や役割を擬人化して語り形式にした文章を読み、誰（物語）のことか、何のことか、自分の持っている知識と結びつけて考える。
抽象語の意味を考えるお話。	・抽象語の入っている例文を読み、その抽象語の表している意味を自分の知っている言葉で置き換える。
４コマ漫画	言語指導（文脈の把握、場に合った表現など）で使う。登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする
音読集	子ども達に知って欲しい詩や伝承あそびをまとめた学校独自の詩集
リーディングテスト	読書力の診断に使用している
４コマ漫画本	言語指導(文脈の把握、場に合った表現など）で使う。吹き出しの一部台詞を消した４コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。
ＳＳＴボードゲーム なかよしチャレンジ	友達関係を楽しくする力を育てる。いろいろなトラブルに対して、どのように解決をすればよいか考える。
動詞・形容詞活用シート	動詞や形容動詞の活用形を一覧にしてまとめて学習するシート。日記の中で活用の誤りを見つけたときや新しい語句に出会ったときに使用し、活用形を正しく理解させる。
５Wカード	いつ、だれ、どこ、なに、どうしたを色分けしてカードで示す。 いつ（赤）、だれ（黄）、どこ（緑）、なに（青）、どうした（茶） 色分けして、板書し囲ったり、カードを分類したりしている。
手話カード	手話と言葉をのせ、カードにし覚えられるようにする。
こぐま会幼児用ドリル	言語指導
構音訓練ドリル	発音指導
ことばのドリル	言語指導
ソーシャルスキルトレーニング	場に応じた会話やふるまいを学ぶ
障害認識パワーポイント	各学年の障がい認識学習で使用。デフリンピック、聴導犬などの紹介や話し合い活動の資料を提示。
助詞を擬人化したカード	「で」（助詞）でも、場所で、理由でなど、意味にあわせて作った人形をカード化して、使用。 （市販のドリルをもとにしている） 「みるみる日本ご　みるくとくるみの大ぼうけん」「３６５日のワークシート」 「みるみる日本語　ＭＩＲＵＫＵとＫＵＲＵＭＩの大航海」
自作のパワーポイント教材	絵本の読み聞かせ、なぞなぞ（言葉あそび）など表示させる。アニメーション機能を活用し、興味をひく工夫をしている。

補聴器、人工内耳チェック表（電池調べ、イヤモールドの汚れチェック、電池室の汚れチェック等）	朝の自立活動の時間帯に各学年・学級で使用したり、自立活動の「聴能」の授業で毎回使用している。
３６５日のワークシート （全国聴覚障害教職員協議会）	手話、日本語、耳と聞こえのしくみ、障がい認識の学習で使用。
小学生の都道府県学習事典（どりむ社）	都道府県の学習で、都道府県マグネットパズルと併せて使用。
生活や行事のプリント	毎日の生活や行事をふり返るプリントを作成。大事なことばは、空らんにして、自分で書きこむようにする
季節と行事の絵カード（自作）	言語指導と四季の概念の定着のために使う。
動きのことばの絵カード(自作)	行動の言語化とその理解、定着のために使う。
パワーポイントで作った教材	国語の言語事項等、わかりやすくＰＰにまとめて授業で使っている
短文穴うめプリント	言語指導、聴覚学習で使う。 音韻数や言葉を考えさせたりする。
発音体操絵付きチェックシート	舌を楽しく出している絵を見て同じようにやる。
聴能聞きとりカード	既習の単語を書いてカードにして、ゲーム仕立てなどにして、聞きとって選ぶ。
品詞カード	文法指導に使う。品詞ごとに色分けしたカードで、品詞分類や文作り、構文の理解等に活用する。
助詞手話（記号）	助詞を手話で表現する、また記号で表現したもの。
ふき出しを入れた絵	物語の一部を絵にして吹き出しをかき、気持ちを考えさせる
呼吸練習のための各種教材	・息の効果的な使用を目的とした練習時 ・無声子音の誘導時
色分けされたことば用カード	大塚校が実践している江副文法をとり入れた指導のため、桃・黄・青・緑のカードを用いている。品詞ごとに色分けしたカードを並べ替えて文をつくるときの助けにする。
ことばの活用表	大塚校が実践しているものと同じ。 語末の活用には一定のルールがあることを知ってもらうため、どの形になるか自分で考えるヒントにするために使用している。
文法指導用のカード	
慣用句のカルタ	本校チャレンジタイムの時に活用。 三人組で競い、たのしく覚えるよう工夫した。
鏡	手話指導（表現の仕方等）で使う。

指導用プリント	言語指導（覚えたことば、助詞等の確認）で使う。 絵や穴埋め問題、文を書くスペースを作り、定着を図る。
鏡	言語指導で使う。 自分の口形が正しいかどうか確認させる。
５０音口形表	言語指導で使う。 母音口形を指導する際、正しい口形を確認させる。
書く力をつける	文章の並べ替えに慣らせるために、応用で使用している。
あごもけい	発音時の舌の位置を確認するのに使う
Ｓインジケーター	発音指導で子音語の息が出ているかを見て確認できる
コロコロゲーム	音のでるボウリングのようなゲーム
動詞プリント	イラストを見て、そのイラストにあう、動詞を考えさせる。
文法カルタ	格助詞や受け身、やりもらい等の学習をするための絵カードや文カード、プリント。
文法カルタ	格助詞・受け身など子どもたちの苦手とする文法をことばと絵・写真で表現し、学習させる教材。
きこえない子のための日本語チャレンジシリーズ	動詞の活用、など文法学習の定着や、ことばの理解と定着を図る。

４－１３　あると良い教材（自由記述：小学部）

自立活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があると良い。」と思われる教材について、表 4-7-4 に自由記述を求めた結果を示した。特に、言語力に関わる評価ツールに対する希望が多かった。

表 4-7-4　あると良い教材（自由記述：小学部）

教材	使用場面
自立活動の児童の実態や、発達段階等に合わせた指導実践例	自立活動は、どのようなことをしたらよいか分からないという教員（特に若手や経験の少ない先生）が多いため、新任者等に活用。
聴覚障害児用の日本語学習についての問題集のようなもの	家庭学習等で活用。
日本語文法のワークシート	授業はもとよりレディネスチェックやふり返りの時間に活用。
言語段階評価表	全児童に対して一定の評価を行うために活用。
自己認識学習の分野別年齢別の内容表のようなもの	幼→高卒業までの見通しを持ちながら自己認識学習を進めるために活用。
口形ＤＶＤ	誤音矯正の際に、舌の動き方が分かりやすく教えられるように活用。
息や声で遊べるソフト。	マイクに息や声を伝えることで画面上で遊べるソフトが欲しい。 発音や発声の指導で活用。
生活音や環境音のサンプルＣＤ（画像付き）	日常場面から、一緒に音をきき、聴覚学習で活用。

食育カルタ	偏食の場合、遊びながら食事の大切さを学ぶと理解や納得するために活用。
みのまわりのものの名前をドリル式に答えられるソフト、アプリ	一度学習した後でテストのように確かめとして活用。
色々な動詞の動画	イラストだけでは伝わりにくい動詞を動画で指導するために活用。
	明瞭な発音と、子供たちの発音の違いが、発声しながら視覚的に見えるものがあるとよい。
発音練習機	自立活動や生活の中で活用。
具体物や絵	課題に対応して活用。
国語の教科書に掲載されている物語教材のリライト文。	
ＷＩＳＣ－ＩＶ	アセスメントのために活用。
ＵＤトーク	情報がどれくらい受けとれているか児童生徒に対して客観的な理解を図るため活用。
言語能力が分かる評価テスト ・ＡＴＬＡＮ ・アラジンのバッテリーテスト ・レーヴンマトリックステスト ・手話能力検査（武居先生作）	
言語力を総合的に評価するテスト、又はテストバッテリー（できるだけ簡単にできるもの）	日々の生活の中で１時間程度で児童の日本語力を評価するために活用。
手話力を評価するテスト	読書力診断検査の手話バージョンのようなものがあると、子どもの手話力を評価でき、指導に生かせる。
電子黒板	集団で視聴覚教材を使うときに活用。
テレビ	日常的な情報や常識を学ぶために活用。
つながりやすいネット環境	すぐに調べたいときや、動画の資料を得たいときに活用。
手話の評価テスト （金沢大版が市販化され、普及するとよい。）	
身ぶりと手話の評価法	
認知学習教材 微細運動教材 粗大運動遊具	重複障がいをあわせ有する児童に対する学習で活用。
発音ソフトとノートパソコン、自立活動用	学習場面で活用。
簡単な楽しい課題を言うＣＤ	聴能学習で活用。
舌の模型	発音指導で活用。
発音指導のための教具集	自作教材製作の手助けとして活用。

読話用ＤＶＤ	練習、評価も含めて活用。
手話付スピーチＤＶＤ	練習・評価のために活用。
発音指導用ソフト	一定の音を発音させるために活用。
騒音計	様々な音の大きさを確認するために活用。
手話イラスト	言葉の獲得、文章の記述、読み取りの指導をする際に活用。
Ｎインジケーター	発音指導の際に活用。
ＫＡＢＣⅡ ＷＩＳＣⅣ	１対１の自活時間の際に活用。
動詞を動きで表してビデオで撮ったもの（動画）	語いを増やす二語文、三語文作りを学習する際に活用。

４－１４　教材の有無、活用頻度、活用状況（中学部）

中学部における教材の有無と活用について、35 の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、１つ選択することを求めた。表 4-8-1 に結果を示した。N は回答数。

学校に保有する教材は、多くが保有されていたが、附則９条本（44.4%）、日本語指導用教材（42.2%）、絵日記（42.1%）、市販のワークブック（41.4%）は 40%台の保有だった。特に電子辞書については 9.3%の保有となっていた。個人で保有する教材では、市販のワークブック（49.5%）や電子辞書（43.0%）が挙げられた。「よく使う」及び「時々使う」教材として、インターネット上の Web 情報（88.7%）、市販のワークブック（82.1%）が挙げられた。前回調査で 100%となっていた漢和辞典は、56.1%に半減していた。

また、加工したり自作したりしている教材として、割合が高いものとして、前回調査では、文部科学省著作（71.3%）、附則の９条本（69.0%）、紙芝居（64.1%）、絵日記（56.8%）が挙げられていたが、今回調査では市販のワークブック（50.0%）や写真（49.5%）となっていたが以前割合が高かったものが低い割合となっており、傾向に変化が見られた。

表 4-8-1　教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）　(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工 and 自作
1 聾学校用教科書	115	69.6	4.3	26.1	33.3	19.8
2 文部科学省著作	111	61.3	8.1	30.6	25.5	21.4
3 附則の９条本	108	44.4	8.3	47.2	28.6	15.9
4 日本語指導用教材	109	42.2	24.8	33.0	57.8	36.2
5 市販のワークブック、問題集	111	41.4	49.5	9.0	82.1	50.0
6 国語辞典	112	91.1	8.0	0.9	76.3	8.2
7 漢和辞典	112	88.4	10.7	0.9	56.1	4.8
8 電子辞書	107	9.3	43.0	47.7	21.6	1.1
9 手話辞典	111	93.7	4.5	1.8	75.4	8.3

10 ことわざ辞典	110	80.0	14.5	5.5	50.9	12.0
11 ことば絵じてん	110	87.3	8.2	4.5	52.2	15.4
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	110	96.4	3.6	0.0	53.9	7.8
13 絵本（行事、物語、説明等）	107	97.2	1.9	0.9	43.9	9.0
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	110	86.4	0.9	12.7	20.0	2.1
15 なぞなぞ	108	85.2	8.3	6.5	34.5	16.2
16 カルタ、百人一首	111	79.3	11.7	9.0	40.9	8.0
17 絵カード	109	82.6	13.8	3.7	49.6	22.6
18 写真（人物、場所、活動場面等）	109	73.4	21.1	5.5	79.3	49.5
19 カレンダー	112	90.2	9.8	0.0	71.6	25.5
20 絵日記	107	42.1	27.1	30.8	35.8	18.8
21 新聞	113	94.7	1.8	3.5	74.8	36.2
22 広告、チラシ、ポスター	112	83.9	11.6	4.5	52.6	21.2
23 雑誌	110	65.5	20.9	13.6	37.6	17.0
24 音素材用ＰＣソフト、CD	103	65.0	12.6	22.3	31.2	11.0
25 耳の構造図	111	91.9	3.6	4.5	60.2	21.2
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	112	89.3	7.1	3.6	71.3	8.5
27 補聴器点検用具	109	95.4	2.8	1.8	76.5	7.5
28 発音・発語指導用具	107	79.4	10.3	10.3	51.8	20.4
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	111	88.3	0.9	10.8	32.7	4.0
30 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	109	78.0	11.0	11.0	55.9	9.7
31 手話・字幕付きＤＶＤ	110	76.4	12.7	10.9	55.3	8.7
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	113	95.6	4.4	0.0	33.3	19.8
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	112	96.4	3.6	0.0	76.7	31.4
34 インターネット上の Web 情報	111	89.2	6.3	4.5	88.7	45.2
35 アプリケーション	109	85.3	3.7	11.0	61.9	14.0

４－１５　その他の自作教材（中学部）

その他の自作教材について、表 4-8-2 に、自由記述を求めた結果を示した。

表 4-8-2　その他の自作教材

教具例	用例
スライド	人間関係の学習。 社会性を伸ばす学習など自作のマンガを使って学ばせる。
手話で学ぶ慣用句	言葉の幅を広げ、奥の深い文章を理解できるようにするために日本手話の動画を見ながら、楽しく学習を行う。
龍太郎の「をに」退治	日本語の助詞学習を行うために開発した学習支援ソフト ｗｅｂ上で家庭でも学習できるように作られている。学校ではラズベリーパイを用いて作っている。（ｉｐａｄ、ｗｉｎｄｏｗｓ、ｍａｃすべてに対応）

龍太郎の同士集合 授業で作成したパワーポイントをフラッシュカードにして学習確認	動詞の学習支援ソフト、表示される漫画を動画にして学びやすくしている。上記と同じシステムで運用するようにしている。
手話動画	自立活動はグループに分かれて活動している。手話を学習するグループを担当しているので、生徒の手話を録画し、読み取る練習をさせている。
ワークシート	季節や学校行事に関する手話を学習できるように、ワークシートを自作し、活用している。
４コマ漫画本 新聞記事の切り抜き	１．音読させて、発音指導へ。 ２．読み取らせて、内容を話し合う。 ３．話し合ったことと感想を文章に書かせ、添削指導をする。
発音指導で使うストロー、コップ等	発音発語指導（ストロー、コップなどは「サ行」の発音の学習の時に舌の位置や使い方の確認のために使用する。）
模型など、自作教材	生徒の興味関心に応じて、機械の模型などを作る。
４コマ漫画本	言語指導（文脈の把握、場に合った表現等）で使う。吹き出しの一部台詞を消した４コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。
パワーポイントのスライド	生徒の実態に応じて、「社会常識（マナー）」「聴覚学習」「障害認識」などのテーマでスライドを自作する。それに沿って、生徒と対話しながら授業を進めていく。 施設見学の事前事後指導で使う。日時、場所、内容等を確認したり、写真を加え昨年度の様子を振り返り、事後の写真でも活動の内容を確認したりする。
自作プリント	生徒の実態に応じて、コミュニケーション力や一般常識等を身に付けさせるため、自立活動の時間に用いる。
小麦粘土	感覚遊びで使用する。 様々な感覚に触れる機会を作っている。
生徒自身の作品	行事ごとの作文や国語で書いた詩などの画用紙作品
３６５日のワークシート（全国聴覚障害教職員協議会）	障害について理解を深める。 写真や図、学習内容を盛り込み、視覚的に分かりやすく提示したい時に使う 性教育や進路指導、様々な内容を、ＰＰで作成している。 自立活動で使う。テーマに合ったパワーポイントをゲーム等を入れたり生徒が興味を持つ、わかりやすいように全領域で使えるようにしている。毎年、担当者が、今までのＰＰに手を加え、改良をして、保存している。 ・コミュニケーション・アサーショントレーニング。 ・人との関わり方、等の学習の時に、イラストや写真を用いて、日常場面を想起させたり、思考する手がかりとさせたりした。 正しい助詞等正しい日本語を書かせるため。 必要な部分をコピーして、指導内容に合わせて活用。（拡大等）

	手話の表現方法について、病院や、店でのやりとり、災害や、事故時の対処法など、ろう者にとって身近なテーマを項目に分け、生徒自身に考えさせる 聴覚学習、手話、障害認識などについて１時間の授業で取り上げるテーマごとに教材を自作している。 手話、日本語、障害認識等、に関わる学習。
作業学習の場面で使う言葉の確認をしよう（自作）	言語指導で使う。 動詞、名詞の確認、自分の行動を言語化する
表情カード	場に合った表現指導の際に使用する。
ひとコマイラストプリント	言語指導（状況の正確な描写、前後のストーリーの構築）で、イメージしたものを表現する言葉（オノマトペを含む）を獲得したり、新しい単語、誤記憶等の指導に活用したりする。
イラストの絵からストーリーを考える	様々な場面が想像できるイラストをワークシートに提示し、簡潔でわかりやすい文章（ストーリー）にまとめる
クラスが変わる！ 子どものソーシャルスキル指導法	本の内容から身に付けてほしいスキルを選び、ワークシートを活用している
愛知教育委員会「キャリア教育ノート」	行事の事前、事後指導。自己理解や進路に関する指導に利用する。
絵ロード（ソーシャルスキルトレーニング）	様々な状況を設定した絵があり、こんな時どうするか、考えさせたりする
自立活動事例集(本校自作)	事例を参考にして指導内容等、立案に生かしている
マナー（声かけ含む）	・人との距離 ・ソーシャルスキルなど具体的な場面で、どういう行動をすればいいか考え、自分の行動を振り返る
生活チェック	・ワークを作って、自分の日常生活を振り返り改善させる。
平均聴力レベルの求め方	福祉等で判断基準となる平均聴力レベルを求めることで、その仕組みを知り、今後の生活に生かすようにする。
音の周波数の範囲について	補聴器で聞き取れる音の範囲、人工内耳で聞き取れる音の範囲を知り、そこからヒトの聞き取り、他の動物の聞き取りの範囲へと音に広がりがあることについて触れていく。
本校自作のワークシートやプレゼン資料	手話、日本語、障害認識等、に関わる学習。
中学生むきの詩集	音読指導に使う。 中学生で１音１音の発音指導は、時間的にも人数的にも難しい
ことばのききわけ ききとり用ゲーム	言語の拡充指導で使う。 季節や行事のことばなどをききとったりききわけたりする
発音練習テキスト	・母音の発音確認 ・各５０音、濁音などの練習（アクセントなど視覚的に理解できて使いやすいので利用。）
からだに関わる日本語とそ	ほとんど網羅的に配列されている中からよく使われる表現を選択して文章例

の手話表現①②	としてリライトして使用。
日本語擬態語辞典	ユーモラスな絵と多くの「ことば」を扱っている。リライトして使用。
４コマ漫画本	言語指導（文脈の把握、場に合った表現等）で使う。吹き出しの一部台詞を消した４コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。
ことわざ慣用句	パワーポイントで作成したスライドを活用し、イラストに合った慣用句、ことわざと意味を結びつける教材を使って指導をしている
調音部位図	発音の指導を行う際に使用する。
絵のみの絵本	１つの物語が４～６つに分けて書かれているもので、それを使って、物語を考え、文章で表現させていく。

４－１６　授業で活用する機器（中学部）

自立活動の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、23 の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを１つ選択することを求めた。表 4-8-3 に結果を示した。N は回答数。

学校が保有する教材として 50%以下のものは、漢字表（45.0%）、キューサイン表（48.7%）であった。個人が保有する教材では、発表板（15.5%）、指文字表（13.8%）、手話表（14.4%、）個人用ＦＭ等システム（15.7%）あった。「よく使う」及び「時々使う」教材・教具として、黒板（91.9%）、パソコン・プロジェクター（91.6%）、デジタルカメラ（84.0%）が多く占めた。また、加工したり自作教材として、割合が高いものとして、前回調査では漢字表（62.4%）が挙げられていたが、今回の調査では強い傾向の見られる機器は無かった。

表 4-8-3　授業で活用する機器（中学部）　(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
１黒板	120	99.2	0.0	0.8	91.9	4.5
２発表板	116	67.2	15.5	17.2	73.9	9.3
３漢字表	111	45.0	10.8	44.1	21.5	5.4
４指文字表	116	73.3	13.8	12.9	37.4	8.2
５手話表	111	59.5	14.4	26.1	37.8	13.4
６電子黒板	116	62.9	0.9	36.2	32.7	10.6
７ＯＨＰ	115	60.0	0.0	40.0	11.3	1.1
８パソコン･プロジェクター	119	100.0	0.0	0.0	91.6	19.1
９地上デジタル対応テレビ	114	85.1	0.0	14.9	50.9	3.1
１０ＤＶＤプレイヤー	116	99.1	0.9	0.0	64.4	3.7
１１ＣＤプレイヤー等オーディオ機器	116	99.1	0.0	0.9	57.3	5.8
１２実物投影機	117	92.3	1.7	6.0	58.6	1.9

１３デジタルカメラ	117	97.4	2.6	0.0	84.0	17.1
１４デジタルビデオカメラ	118	99.2	0.8	0.0	75.0	12.6
１５集団補聴器	115	92.2	0.0	7.8	59.0	1.0
１６放送機器	116	97.4	0.0	2.6	42.7	4.0
１７個人用ＦＭ等システム	115	54.8	15.7	29.6	46.4	2.0
１８ひらがなカード	112	72.3	8.0	19.6	25.9	11.0
１９音声記号図	112	75.0	5.4	19.6	25.0	6.2
２０母音図	113	77.9	4.4	17.7	32.4	7.1
２１キューサイン表	113	48.7	4.4	46.9	9.2	3.1
２２カードリーダー	113	67.3	3.5	29.2	36.9	3.0
２３タブレット PC	116	91.4	1.7	6.9	63.8	9.8

４－１８　その他の自作教材（中学部）

その他の自作教材について、表 4-8-5 に、自由記述を求めた結果を示した。

表 4-8-4　その他の自作教材（自由記述：中学部）

教具例	用例
文字変換アプリ	ＶＴＲや映像を見る時の音声→文字変換を行うことで、情報保障に役立つ
太鼓	聴覚学習のため活用。
レーザーポインター	合図を出す際に使用する。
きくきくドリル	聞く力や記憶する力を育む。
Ｓインジケーター	発音練習の際に活用。
パワーポイント	授業の流れを提示する。
自作スイッチ	市販のスイッチが押しにくい際の代替手段として活用する。
トーキング・ピース（ぬいぐるみ）	「持っている者のみ発言できる」などの発言ルールの徹底に活用。

４－１７　あると良い教材（自由記述：中学部）

自立活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があると良い。」と思われる教材について、表 4-8-4 に、自由記述を求めた結果を示した。

表 4-8-5　あると良い教材（自由記述：中学部）

教材	使用場面
各教室にモニターを２台以上設置	目で見ることが大切なので教師の話している言葉も同時に表示できる支援ができれば理解の助けになる。手話も日本語もネーティブでない生徒にはいろいろなサポートが必要だと思う。
ワークブック	事例や場面が多くのっているもの。（できるだけ実態に対応できるように。）
発音のし方がわかるアニメの動画。（口の内外）	口の動きを外部と内部両方が動画で見れるものがほしい。アニメだとリアルすぎずに見れる。発音のつまずきへの指導に使いたい。

聾学校における指導内容系統表	聾学校勤務２年目なので自立活動の指導内容については、経験が長い先生に教えてもらいながら、行っているのが現状。指導内容表のようなものがあると参考になる。
赤青黄の発音棒（自作教材）	息のみの発音、鼻から息を出す音、声を出す音などの発音練習において、目で見て分かりやすい。
さまざまな環境音が入ったＣＤ	児童・生徒のきこえ方を把握するときに有効。
電子黒板	児童・生徒に伝えたいことをすぐに画像で映し出して視覚的な支援をするとともに、黒板に書き込めることで、児童・生徒の積極的な授業への参加の機会を増やすことができる。
タブレットＰＣ	設置台数をふやして、気軽に動画撮影やインターネット検索ができるとよい。
中学部段階で身につけるべき日本語を、段階的に指導していくプログラム	中１ではここまで,中２では…,中３では…,と、学年に応じて指導できるプログラムがあるとよい。次年度の担任にも、「どこまで指導し終え、どこから指導するのか」を明確に引き継げる。
黒板全体が電子だったら良い。（今まではＴＶの大きさだが…）	ＴＶや黒板両方見ながら授業すると、ろう者にとって、目が疲れたり、ＴＶだと映像が消えてしまい、記録に残らないため、始終記録に残すことができるものが良い。
感覚統合 ｅｘ）バランスボール、知育、手先のこうち性	重複学級の生徒へは、知的や肢体で使っているような教材が適している。
教室に、テレビ、ＤＶＤプレイヤーを設置する。	ＤＶＤ教材で学習するため。
ｗｉ－ｆｉ，タブレットＰＣ，モニター	情報を適切に、素早く提供できる。
３６５日のワークシートの最新のもの	今あるものは古いので、新しいものがあるとよい
社会で活躍している聴覚障害者を載せてある冊子（できれば２～３年ごとに更新してほしい）	聴覚認識や進路指導に使う
発音評価機器	発音学習で、生徒本人がどの音が不明瞭かを意識できるようなもの。
ＵＤトーク	話し手が話した内容（音声情報）を文字化や映像化にするソフト
学校場面での文法指導の教材となるイラストデータ	受身や使役、やりもらい文などの指導のときに、学校で起こりそうな場面を提示し、短文作りをする。
生徒が発語したもの	発音指導のときに、生徒自身が確認できるようにする。

が、どのように聞こえるか文字化するもの。	
言葉の発達段階表	計画を立てるときに、どの段階に生徒がいるのかを見て、次の授業の目標を考えるときに役立てる。
発音の状況を評価するソフトウェア（ＰＣタブレット等）	発音の指導と評価で使用。生徒自身が簡単に扱えるものがあると良い。
都道府県や主な国名を表す手話の解説ＤＶＤ	手話の学習で利用したい。 手話の表す意味（由来）も映像であるとわかりやすい。
回復への道のりーロードマップー	性に関する問題行動の指導
発音→文字化装置	自分の発音がどう聞き取られるのかを見たいという生徒がいるので、発音やコミュニケーションの指導に使いたい
聾学校用教科書（国語言語編）を現代に合った内容に変えてほしい。	自立活動（言語）で使用しているが、内容が古く今の子供の生活に合わない。
日本語の助詞指導に役立つ教材	助詞を間違えて覚える生徒の中には自分のルールがあるはずなので、その「自分ルール」をひもとき、指導できる指南書があればうれしい。
「わたし　出会い発見」シリーズ　大阪府人権教育研究協議会　発行	小・中学校の学活や仲間作り、学級作りで行われている実践集は聾学校の自立活動のコミュニケーションや人間関係の形成をねらった場面においてもおおいに活用できると考えている。
幼・保・小・中の学級作り 仲間作り関係書籍	小・中学校の学活や仲間作り、学級作りで行われている実践集は聾学校の自立活動のコミュニケーションや人間関係の形成をねらった場面においてもおおいに活用できると考えている。
日本語指導用のワーク	相手や場面に応じた使い方、言いまわしなどを、項目別に学習する。
聴覚障がいと知的障がいを併せ有する子への指導教材、教材集	重複障がいの子どもへの指導の手がかりとなる。 自立活動と日常生活、生活単元学習などを関連させて指導する際の手がかりとなる。
言語力の伸びがわかるソフト	PC などでテストを受け、結果をデータして残し、定期的に実施することで伸びが分かる→研究に活かす
音声入力→文字への変換、精度の良いソフト	手話の難しい人でも話を文字に即時におこせれば会話が可能 聴覚障害の生徒の発声のフィードバック
聴覚障がい教育の中	生活の中で、しては良い行動や悪い行動などの情報を視覚教材で使うことができ

で生活やルールなどを学べるアプリ	るアプリ（言い方や表現の情報を知ることができる。）
電子黒板	映像による視覚情報をよりクリアに提示できる。生徒自身が操作したり、全体への発表したりする場面で、有効。
言語指導や発音指導及び障害認識に関わる学習（発達）段階表。	生徒の学習内容の設定や評価の際と参考資料としたい。 ※客観的な評価指標としての活用。
手話の読みとり用のＤＶＤ。（児童・生徒が行事についてなど話しているもの）。	手話を読み取る力の評価。手話表現を広げる（工夫など）。
音を加工するソフト。	教員とかが比較的簡単に音を加工できるソフト。（専門的でないもの） 出前授業等の時、難聴体験などで使用する。
音のきこえ方、等の子どもむけＤＶＤ	補聴器メーカー等が作っているものはあるが、教材用としてあるとよいと思う。
手話ビデオ	自立活動の学習の際に活用。
発音に関するもの 中学生で行う発音に関する教材	自立活動の学習の際に活用。
読話に関するもの	自立活動の学習の際に活用。
Ｓインジケーター あるいはこれにかわる機器	発音指導の際、発音の確認、矯正ができる。
補聴器のメンテナンス	家庭で行う補聴器のメンテナンスの行い方を映像で示せる教材。

４－１９　教材の有無、活用頻度、活用状況（高等部）

高等部における教材の有無と活用について、35 の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを１つ選択することを求めた。表 4-9-1 に結果を示した。N は回答数。

学校が保有する教材として少ないものは、電子辞書（14.8%）、日記・絵日記（51.7%）であった。個人が保有する教材では、電子辞書（61.4%）が多かった。

「よく使う」及び「時々使う」教材として、70%以上のものは、デジタルカメラ（91.8%）、インターネット上の Web 情報（90.5%）、デジタルビデオカメラ（82.5%）、新聞（77.6%）、写真（75.8%）、カレンダー（74.2%）、国語辞典（73.4%）、手話辞典（72.7%）、アプリケーション（72.6%）DVD（71.9%）等であった。

また、加工した自作教材として、割合が高いものとして、写真（59.1%）、新聞（45.7%）、インターネット上の Web 情報（43.5%）が挙げられた。

表 4-9-1　教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）　(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工 and 自作
1 聾学校用教科書	86	76.7	0.0	23.3	10.5	5.1
2 文部科学省著作	87	69.0	2.3	28.7	10.3	3.9
3 附則９条本	83	61.4	1.2	37.3	18.3	5.2
4 日本語指導用教材	86	64.0	20.9	15.1	49.4	33.7
5 市販のワークブック、問題集	90	65.6	24.4	10.0	57.3	38.8
6 国語辞典	92	94.6	4.3	1.1	73.4	4.4
7 漢和辞典	91	94.5	3.3	2.2	57.3	4.4
8 電子辞書	88	14.8	61.4	23.9	39.6	1.2
9 手話辞典	97	90.7	6.2	3.1	72.7	9.4
10 ことわざ辞典	91	89.0	3.3	7.7	38.3	3.4
11 ことば絵じてん	90	84.4	4.4	11.1	28.7	7.0
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	92	94.6	0.0	5.4	41.1	10.0
13 絵本（行事、物語、説明等）	91	92.3	0.0	7.7	32.3	7.0
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	89	82.0	2.2	15.7	13.3	6.0
15 なぞなぞ	90	81.1	8.9	10.0	18.5	14.1
16 カルタ、百人一首	89	82.0	7.9	10.1	32.6	7.1
17 絵カード	86	81.4	10.5	8.1	41.5	22.1
18 写真（人物、場所、活動場面等）	92	70.7	19.6	9.8	75.8	59.1
19 カレンダー	94	87.2	10.6	2.1	74.2	28.9
20 日記・絵日記	89	51.7	28.1	20.2	45.2	25.3
21 新聞	93	92.5	4.3	3.2	77.6	45.7
22 広告、チラシ、ポスター	91	86.8	4.4	8.8	54.7	18.9
23 雑誌	89	59.6	11.2	29.2	40.9	13.8
24 音素材用ＰＣソフト、CD	88	70.5	4.5	25.0	26.9	7.9
25 耳の構造図	93	93.5	1.1	5.4	58.8	23.6
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	91	85.7	11.0	3.3	68.8	15.7
27 補聴器点検用具	84	94.0	2.4	3.6	69.5	6.7
28 発音・発語指導用具	83	83.1	8.4	8.4	37.2	16.5
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	79	84.8	1.3	13.9	23.1	1.2
30 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	83	88.0	10.8	1.2	71.9	12.5
31 手話・字幕付きＤＶＤ	83	83.1	8.4	8.4	67.4	7.1
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	84	95.2	4.8	0.0	91.8	43.0
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	85	94.1	4.7	1.2	82.5	35.9
34 インターネット上の Web 情報	82	90.2	7.3	2.4	90.5	43.5
35 アプリケーション	82	86.6	4.9	8.5	72.6	17.6

４－２０　その他の自作教材（高等部）

その他の自作教材について、自由記述を求め、表 4-9-2 に結果を示した。

表 4-9-2　その他の自作教材（自由記述）

教具例	用例
きこえのしくみ	きこえの学習で活用 耳～三半規管～脳←こまくの刺激で電流が流れるようにしている
「賛成」「反対」の札や三角柱など討論に使用するもの。	賛成・反対に分かれての集団討論で活用。
ランゲージパル	聴能学習時に目に見える形で音の出る時を意識させる
模造紙	調べた学習内容をまとめる。
音声分析器	音声や環境音の分析で活用。
電池チェッカー	電池の残量をチェックする際に活用。
手話掲示板	生徒が見やすい廊下に展示し、新しい手話や覚えてほしい手話表現について紹介している。
ＮＨＫ「手話ニュース」	毎週の学部集会にて、ＮＨＫの手話ニュースを録音し、字幕を隠して、内容を記入する。正解を見せた後に、修正したり、説明を加えたり、生徒の感想等を述べることで、受信、発信のコミュニケーション力を身につける。

４－２１　授業で活用する機器（高等部）

自立活動の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、23 の教材を示し、それぞれの教材に対して「学校にある・学校にないが個人のものがある・ない」、「よく使う・時々使う・使わない」、「そのまま活用している・手を加えて活用している・自作したものを活用している・使わない」の質問を設け、当てはまるものを１つ選択することを求めた。求めた。表 4-9-3 に結果を示した。N は回答数。

学校が保有する教材として少ないものは、前回調査では、ひらがなカード（6.8%）が挙げられていたが、今回調査ではその傾向はなくなっていた。個人が保有する教材では、発表板（12.6%）、個人用 FM 等システム（24.7%）であった。「よく使う」及び「時々使う」教材として、80%以上のものは、黒板、パソコン・プロジェクター、デジタルカメラであった。また、加工したり自作したりしている教材・教具として、パソコン（13.0%）、デジタルカメラ（12.4%）が挙げられた。

表 4-9-3　授業で活用する機器（高等部）　(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
1 黒板	96	99.0	1.0	0.0	92.8	1.1
2 発表板	95	70.5	12.6	16.8	70.5	8.7

３漢字表	90	62.2	4.4	33.3	17.8	3.8
４指文字表	93	78.5	5.4	16.1	31.2	6.0
５手話表	92	67.4	4.3	28.3	31.9	8.3
６電子黒板	94	71.3	0.0	28.7	32.6	5.1
７ＯＨＰ	94	63.8	0.0	36.2	10.0	0.0
８パソコン・プロジェクター	97	100.0	0.0	0.0	94.9	13.0
９地上デジタル対応テレビ	97	88.7	0.0	11.3	62.1	7.9
１０ＤＶＤプレイヤー	97	96.9	1.0	2.1	76.8	1.1
１１ＣＤプレイヤー等オーディオ機器	96	93.8	3.1	3.1	44.2	0.0
１２実物投影機	93	89.2	0.0	10.8	58.5	2.4
１３デジタルカメラ	96	94.8	4.2	1.0	88.7	12.4
１４デジタルビデオカメラ	97	97.9	1.0	1.0	75.8	8.2
１５集団補聴器	96	93.8	0.0	6.3	46.4	4.6
１６放送機器	96	95.8	0.0	4.2	40.4	5.8
１７個人用ＦＭ等システム	93	50.5	24.7	24.7	33.7	1.2
１８ひらがなカード	93	77.4	5.4	17.2	18.5	8.4
１９音声記号図	89	80.9	3.4	15.7	18.5	3.6
２０母音図	92	82.6	3.3	14.1	17.4	4.8
２１キューサイン表	92	47.8	3.3	48.9	5.6	2.5
２２カードリーダー	88	64.8	4.5	30.7	32.6	0.0
２３タブレット PC	96	90.6	1.0	8.3	71.0	9.2

４－２２　その他の教材・教具（自由記述：高等部）

自立活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があると良い。」と思われる教材について自由記述を求め、表 4-9-4 に結果を示した。

あると良い教材として、自立活動(聴覚障害者用)の教科書、聴覚障害教育の歴史等の映像教材、自立活動用チェックシート、手話テスト、読書力診断検査など、高校生用の教材等が挙げられた。

表 4-9-4　あると良い教材（自由記述）

教材	使用場面
自立活動ワークブック（聴覚障害用）	指針となる副読本があれば、もっと計画的な自立活動の授業が行える
顔表情認識アプリ	顔の表情から、喜怒哀楽を読み取ることができるソフトがあると良いと思う。絵などではなく、実際の写真を編集できると良い。
手話を評価する教材	どの程度、手話の力が身についているのか（語彙、文法）を評価し、指導に役立てる際に活用。
日本手話を学習する教材	系統的な指導ができるよう、シリーズ化されている教材があることが望まし

	い。
ろう文化、ろうの歴史について理解を深める教材	障害認識の分野において、アイデンティティの形成のため、様々なジャンルに関わる聴覚障害関連の情報や、ろうの歴史などを盛り込んだ教材があると誰でも自由に閲覧することができる。
タブレットＰＣでインターネットに接続できる環境	調べ学習等で活用。
ろう者に関する歴史の（ろう運動、ろう教育など）教科書	
日本語学習テキスト	
手話学習テキストＤＶＤ	
ＵＤトーク	テレビ視聴、映像字幕
校内ｗｉ-ｆｉシステム	様々な場所でタブレットを用いてインターネット情報を利用できる。
各教室でのＴＶ視聴設備（学校に地デジテレビはあるが、教室内で視聴できない）	教育番組や手話ニュースなどの視聴が教室でできる。
大型ＴＶとタブレットやウェブカメラ（実物投影機がわり）が簡単に連動するもの。	授業中に出てくる、様々な単語や状況の説明に補足の文章や映像をすぐに映し出せる。 ネット環境がもっと良くしないとＰＣもタブレットも宝のもちぐされ。ほとんど使えない状態。 パソコンも昔導入したものをそのまま使ってるので常に新しくしていかないと全く役に立たない。ＹＯＵ　ＴＵＢＥは見れるように県に指導してほしい。
コミュニケーションやビジネスマナーに関するＤＶＤ	実際の映像を見ながら、適切な方法及び不適切な行い等を目で見て確認する。
ソーシャルスキル教育関係の本	よりよい人間関係を築くための指導で参考になる。（卒業後）
日本語の使い方	ろう者の特性の視点で編集したもの 全国聴障教職員協議会も作成中
障がい者の福祉について	将来の生活のために。
障害受容に向けての段階表	健聴者のことが嫌いで壁を作ってしまう生徒や状況があるときに、その状況を乗り越えるための気持ちの段階表。
障害のある人が社会で働くためのそれぞれの職種の可能性と制約	障害のある人はどのような職種でどのように働かれているのか。生徒の中には事務しかない／製業しかない。と限定的に考えてしまう人がいるので就ける可能性のある職種を提示した表があると提示できる。
ＨＬ－ＳＰＬ変換アプリ	騒音形で、周波数を振定して測定すると自動的にＨＬの数値を返してくれるもの。

自立活動 実践事例集	６区分の内容に分かれた内容のものがあると、着任して間もない先生方の参考になる。これまでの聾教育の蓄積を見られるので、参考
手話通訳や字幕がついたＤＶＤ教材	教科書の文章などに、手話通訳がついていると子ども達の読みとりが深まって良い。
聴覚障害児の自立活動のねらいの達成度を診るための質問集	年度初めや終わりに質問集の問いに答えてもらい、レディネスを把握したり、１年後の評価に活用。
発音指導に使えるｉＰａｄ用のアプリ	手軽にどこでも生徒が自主的に反復練習をする際に活用。高等部ともなると自分で練習にとりくめ、自分がチャックできるものがあると良い ・生徒の発した声へ視覚的に表示するもの ・発育要領のアニメ（口形や舌の動きを示したもの）
学校で使う手話アプリ	書籍になっているもののアプリ版があると良い。
発音指導用音声分析提示装置	人工内耳装用者で、子音と母音の渉り、有声子音の弁別などに困難さのある生徒に活用。発音時の周波数とスペクトルと時間の関係を分かり易く視覚的につたえる教材があれば良い。
高等部における自立活動の指導事例集（冊子・ネットコンテンツ）	参考にして、自立活動の計画・指導内容・方法を考える。
スマホ･タブレット用発声発語	聴覚に障害のある生徒が主体的に自分の発声発語の明瞭さを確認し、必要なときにいつでも発声発語の練習が容易にできるｉＰｈｏｎｅ／ｉＰａｄ向けのアプリの必要性を感じる。
自主トレーニングアプリ（ハツトレ）	本アプリは、松下電器産業株式会社技術本部（１９８９）が開発した言語障害者用発声発語訓練装置「松下電器発声発語訓練システム」の主体的な活用が可能であるという面を携帯端末用アプリとして復活させたものというイメージを考えている。
聴覚口話､発音指導等に関するＤＶＤ，ソフト等	時代の変化、ニーズの多様化により、先代の教師が築き上げてきた、聴覚口話、発音指導、キュードスピーチ等が減少傾向にあります。このような伝統的な指導法の基礎基本をＤＶＤやデジタルで残すことが必要。

第３項　「自立活動」のまとめと考察

学部が上がるにつれて回答数が減っているが、基礎情報として、幼稚部から高等部まで、有効回答数 516 名の回答を得た。各部配属の教員における教職、聾学校、学部経験年数について、全学部とも教職経験年数 21 年以上の教員が 21%～44%と長いが、聾学校経験年数 0～6 年の教員の割合が概ね半数であった。所属学部経験年数を見ると、経験年数 0～3 年の教員が、幼稚部（33.6%）、小学部（22.1%）、中学部（26.8%）、高等部（27.3%）と 1/4～1/3 を占めた。自立活動は発達年齢に対応した専門的指導が求められる領域の一つであることを踏まえると、校内において研修体制の一層の充実が必要であると考えられる。

各学部のコミュニケーション手段については、幼稚部から高等部の全ての学部において手

話付スピーチの割合が 80～90%台と高く、補聴器（または人工内耳）の併用による指導が認められた。今日の特別支援学校(聴覚障害)のコミュニケーション手段として、総体的には手話付スピーチが定着している状況があり、自立活動においては、個に応じた指導という観点から、より一人一人の発達段階を考慮した指導が求められる。

学校保有の教材で多いものは、幼稚部では絵本、紙芝居、図鑑、ことば絵じてん、カレンダー等の教材が 90%前後を占めた。個人では絵日記が最も多かった。こうした教材は、聾学校で定常化され、視覚的に子どもの記憶に残したり、繰り返し活用したりすることのできる教材として、母子間でのコミュニケーション活動だけなく、学級内での活動にも有効に活用が図られていると考えられる。

幼稚部での自作教材としては、文字カードや絵カードが作成されていた。これらは、事後指導や指導内容の定着を図る際にも有効活用されている事が伺われた。

小学部では、聾学校用教科書、国語辞典、図鑑、絵本、紙芝居、新聞、広告・チラシ・ポスター、耳の構造図、補聴器、補聴器点検用具、ビデオカメラが広く活用され、書きことばを意識した教材を積極的に導入している状況が認められた。個人が保持する教材・教具として、絵日記、電子辞書、絵カードが挙げられた。また、日本語指導用教材、市販のワークブック、電子辞典、カルタ、絵カード、写真、日記・絵日記が活用頻度の高い教材をして採り入れられ、これを子どもに応じて修正し、活用している実態があった。

また、「あると良い教材」として手話などの言語力を評価し指導に役立てることができる教材が挙げられていた。

中学部では、多くの教材を保有していたが、附則 9 条本、日本語指導用教材、市販のワークブック、絵日記は 40%台の保有だった。特に電子辞書に付いては 9.3%の保有と低い割合を示していた。市販のワークブックやインターネット上の Web 情報がよく活用されており、反面、前回 100%の活用状況だった漢和辞典の活用状況が 56.1%に低下していた。これは、これまで辞典を活用し「へん」や「つくり」等を調べていた学習活動が、パソコンによる手書き入力機能やインターネット等により代替されてきていることが推測される。今後、その理由の検討や是非についても議論が必要となろう。

あると良い教材として、日本語の言語指導を段階的に行うための教材等が挙げられており、発達段階に応じた言語指導の必要性が伺われた。

高等部では、「よく使う」、「時々使う」教材、加工や自作教材の減少傾向が見られた。70%以上活用している教材は、10 教材であった。自作教材として、集団討論や調べ学習などでの活用を想定した教材が挙げられていた。あると良い教材として、手話の評価や障害受容など、社会を見据えた指導のための教材の充実が求められていた。

自作教材も既存の教材をアレンジして作成されている実態が明らかになった。更に、デジタルカメラやデジタルビデオカメラ、パソコン・プロジェクターは、どの学部においても教材作成の重要な道具となっていた。

自立活動は幼稚部から高等部までの一貫した指導が求められる。このため共通教材として、学部を超えて活用することも意義があり、ICT の活用により、簡便化や教材情報の共有化も期待される。一方で、発達段階に応じた教材も必要となる。自立活動は一人一人の障害の状態に応じた指導を行うという観点からは、教材の質の向上を図ることも重要である。高等部のように、発達段階に応じた教材の量そのものが潤沢ではない状況もあり、指導時間や指導内容を考慮した場合、学校全体の課題として捉える必要もある。更に、自立活動と他の領域

教科との関連性において、検討する必要もある。国語科や算数・数学、音楽科などで使用される教材と共通性を持たせて活用することも必要である。しかし、自立活動の指導のねらいは幼児児童生徒個々に設定されるべきであり、同一教材であっても、その活用については、一人一人に応じるような工夫が求められる。

自立活動は障害の克服・改善を目指した教育活動の一つである、とりわけ、幼児児童生徒の実態把握や指導計画の立案、指導の評価を行う上で、自立活動の視点を用いることが重要となる。幼児児童生徒の卒業後の自立と社会参加に向け、様々なコミュニケーション場面を設定(想定)した学習活動を用意したり、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための適切な教材及び効果的な活用方法等について検討したりしながら、各教科等において育まれる資質・能力の育成を支えていく必要がある。

第２章　特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する実態調査（調査２）

第２章　特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する実態調査（調査２）

１．調査の目的

本調査は、コミュニケーションの実態に関する調査（調査 A）及び言語及びコミュニケーションの評価法に関する調査（調査 B）より構成した。コミュニケーションの実態に関する調査（調査 A）では、特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段の選択、教師と幼児児童生徒、幼児児童生徒間でのコミュニケーション手段の種類について、コミュニケーションに関する実態を知ることを目的とした。

また、言語及びコミュニケーションの評価法に関する調査（調査 B）では、特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションの実態、日本語に関する評価法、手話に関する評価法の使用状況を得ることを目的とした。

２．調査対象

特別支援学校（聴覚障害）の幼稚部から高等部に所属する学部主事もしくは主任

３．調査方法

郵送によるアンケート調査（悉皆調査）

４．調査時期　　平成 29 年８月～9 月

（※　調査票は「調査 1：特別支援学校（聴覚障害）における指導法と教材活用に関する現状調査」に同封した。）

本調査では、コミュニケーション手段を、以下のように定義した。

聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む。）
キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
その他：絵カード、身振り、発音サイン等

第１節　基本情報

ここでは、幼稚部から高等部までの各学部における学級数、幼児数（重複障害学級を含む各学年の人数)、重複障害がある幼児数、人工内耳を装用児数、学部の教職員数、聴覚障害がある教員数、教職員に係る特記事項を尋ねた。

第１項　調査票回答数及び回収率

表 5-1-1 に、全体及び各学部の回答数、回答数を示した。本調査では、全国特別支援学校（聴覚障害）の分校・分教室を含む 95 校に調査票を送付し、95 校（回収率 100%）の回答を得た。

表 5-1-1　回答校数及び回収率

	全体	幼稚部	小学部	中学部	高等部
発送校	95	85	86	80	63
回答校（回収率）	95（100%）	85（100%）	86（100%）	80（100%）	63（100%）

第２項　在籍幼児児童生徒数

表 5-1-2 に学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳装用数を示した。

幼児児童生徒数は 5694 名、重複幼児児童生徒数は 1179 名（20.7%)、人工内耳幼児児童生徒数は 1560 名（27.4%）であった。

表 5-1-2　学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳幼児児童生徒数　（人）

学級数	幼児児童生徒数	重複幼児児童生徒数	人工内耳装用数
1707	5694	1179（20.7%）	1560（27.4%）

第３項　各部の学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳数

表 5-1-3 に幼稚部、表 5-1-4 に小学部、表 5-1-5 に中学部、表 5-1-6 に高等部の学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳数を示した。

幼稚部では、重複児の割合が、１年（年少）から３年（年長）で 9.7%～17.4%と、表 5-1-2 の全体平均より少なかった。また、人工内耳装用児は 34.7%～43.8%と全体平均より多くなっていた。

表 5-1-3　幼稚部

	学級数	幼児数	重複児数	人工内耳数
１年（年少）	94	329	32（9.7%）	114（34.7%）
２年（年中）	100	369	45（12.2%）	157（42.5%）
３年（年長）	95	340	59（17.4%）	149（43.8%）

小学部では、重複児の割合が、22.6%（小４年）～28.0%（小１年）と 20%台で推移していた。

表 5-1-4　小学部

	学級数	児童数	重複児数	人工内耳数
1 年	106	300	84（28.0%）	92（30.7%）
2 年	110	329	88（26.7%）	116（35.3%）
3 年	108	332	88（26.5%）	104（31.3%）
4 年	107	319	72（22.6%）	97（30.4%）
5 年	106	297	69（23.2%）	89（30.0%）
6 年	102	311	78（25.1%）	90（28.9%）

中学部では、重複児の割合が、どの学年も 20%を超える割合になった。また、人工内耳装用児は、20.0%から 24.8%の範囲内であった。

表 5-1-5　中学部

	学級数	生徒数	重複児数	人工内耳数
1 年	122	420	87（20.7%）	104（24.8%）
2 年	114	404	93（23.0%）	81（20.0%）
3 年	120	428	90（21.0%）	103（24.1%）

高等部では、重複児の割合は 18.2%~21.1%の割合であった。また、人工内耳装用児は 16.7%~18.5%の割合であった。人工内耳装用児の割合は、他学部の割合に比べて低かった。

表 5-1-6　高等部

	学級数	生徒数	重複児数	人工内耳数
1 年	139	486	92（18.9%）	81（16.7%）
2 年	139	517	94（18.2%）	88（17.0%）
3 年	145	513	108（21.1%）	95（18.5%）

第 4 項　教職員数及び聴覚障害職員数

本調査における全回答校の教職員数は 4,303 名（1 校平均 45.3 名）、聴覚障害職員数は 275 名（1 校平均 2.9 名）であった。表 3-1-7 に教職員に係わる特記事項を示した。この質問には 127 の回答（複数回答）があった。約半数が「教員の異動が多い」「講師の割合が多い」「経験の少ない教員が多い」つまり、指導技術の継承に課題を感じている記述が多かった。また、教員の異動が多いこと、教員の年齢のバランスが良くない（50 歳代以上が多い、20 歳代が多い）も挙げられた。24 年度調査に比べ、「学部をまたいで授業をしている」という記述が、45.8%から 4.7%に減り、「教員の異動が多い」等に関する記述が、21.5%から 65.4%に増加した。

表 5-1-7　教職員に係わる特記事項（複数回答）　　N=127

教職員に係わる特記事項	回答数
・教員の異動が多い・講師の割合が多い・経験の少ない教員が多い。 （指導技術の継承に課題を感じている。）	83
・学部をまたいで授業をしている	6
・教員の年齢のバランスが良くない（50 歳代以上が多い、20 歳代が多い）	6
その他　（乳幼児教育相談の担当の説明等）	32

第５項　「基本情報」のまとめと考察

本調査では、全国特別支援学校（聴覚障害）の分校・分教室を含む 95 校に調査票を送付し、95 校（回収率 100%）の回答を得た。基礎情報として、聾学校幼稚部から高等部までの各学部における学級数、幼児児童生徒数（重複障害学級を含む各学年の人数）、重複障害がある幼児児童生徒数、人工内耳装用幼児児童生徒数、学部の教職員数、聴覚障害がある教員数、教職員に係る特記事項を尋ねた。在籍幼児児童生徒数は、幼児児童生徒数は 5694 名、重複幼児児童生徒数は 1,179 名（20.7%）、人工内耳装用数は 1,560 名（27.4%）であった。また、全回答校の教職員数は 4,303 名（1 校平均 45.3 名）、聴覚障害職員数は 275 名（1 校平均 2.9 名）であった。

幼児児童生徒数は、1 校平均 59 名在籍となるが、地域により少人数化傾向が著しい。学校によっては 1 学級当たりの在籍数が減少し、複式学級で構成している学級もある。在籍児童生徒数や学校規模の減少のため、障害種を併せて学校再編が行われている地域もある。更に、障害のある子どもの教育の場の拡がりに伴い、通常の学校に移る子どもが増加していくことが予想される。

聴覚障害教育を取り巻く大きな変化として、新生児聴覚スクリーニングが全国で推進され、聴覚障害の早期発見に寄与している。新生児聴覚スクリーニングに伴う重度の聴覚障害の早期診断は、特別支援学校（聴覚障害）での相談時期が 0 歳児からに早まることに繋がっている。

本調査で特別支援学校（聴覚障害）における人工内耳装用の割合が 27%（24 年度は 20.4%）を越えたことは、新生児聴覚スクリーニングによる早期発見が進んだことを反映したものと考えられる。学部別では幼稚部、小学部の人工内耳装用児の在籍率が高いが、今後は現在の幼稚部、小学生の進級に伴い、中学部、高等部での人工内耳幼児児童生徒在籍率の増加が予想される。また、重複障害児については、医療機関より療育機関に紹介される事例が多いと考えられるが、聴覚障害を併せ有する場合には、特別支援学校（聴覚障害）で対応することもある。このように、多様な実態の特別支援学校（聴覚障害）幼児児童生徒に対し、個人や集団に対応したコミュニケーション手段を考慮する必要がある。

第２節　調査Ａ　コミュニケーションの実態に関する調査

調査 A では、コミュニケーション手段の選択や使用に際する学部で共通した方針の有無、コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項（３つ選択)、コミュニケーション手段の選択にかかわる課題（３つ選択）の３点を尋ねた。

第１項　コミュニケーション手段の選択や使用

幼稚部から高等部までの回答総数は 312（複数回答）であった。コミュニケーション手段の選択や使用に対する学部での共通した方針が「ある」と回答したのは 229（73.4%）、「ない」と回答したのは 83（26.6%）であった。

子どもたちのコミュニケーション手段について尋ねたが、具体的なコミュニケーション手段が 229（複数回答）記述されていた。

表 5-2-1 にコミュニケーション手段の分類を示した。表中、手話・手話付きスピーチ及び指文字は、補聴器（人工内耳）を併用して使用されている。トータルコミュニケーションという記述が、34.5%と一番多く、次いで手話・手話付きスピーチが 27.1%、聴覚口話、聴覚主導が 14.8%であった。そして、「子どもの実態に合わせて」と言う回答も 20.1%であった。

表 5-2-1　コミュニケーション手段　（複数回答）　N=229

	回答数
聴覚口話、聴覚主導	34(14.8%)
手話、手話付きスピーチ※	62(27.1%)
キュードスピーチ	3(1.3%)
トータルコミュニケーション	79(34.5%)
同時法	5(2.2%)
子どもの実態に合わせて	46(20.1%)

コミュニケーション手段の選択や使用に際して、学部で共通した方針がないとした回答の場合、どのようにしてコミュニケーション手段の選択をしているかについて尋ねた。その結果、学部内で相談する（37.5%）、担任の判断に委ねている（22.5%）、特になし（27.5%）、その他（12.5%）の回答があった。その他として以下の記述があった。

「児童の実態に応じて、様々な手段を用いている。(4)」「個に応じて、各担当に任せている。」「それぞれの教員が、それぞれの生徒のコミュニケーション手段に合わせて、多様な対応をしている。」「個々の生徒のコミュニケーション方法により対応している。」「親の希望」「生徒の手話力、日本語力等に合わせて一人一人の教員が判断し選択している。」「改めて決めてはいないが、相手の立場を考え、お互い通じやすい手段で積極的にコミュニケーションを図る。正しく伝わっているか確認しあうようにする。という共通理解のもと、取り組んでいる。」

第２項　コミュニケーション手段を選択する際、重視していること

コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項について 10 項目（生育歴、発達の状態や重複障害の有無、聴力の程度、人工内耳の装用、言語力、聴覚障害がある保護者、保護者の希望、学級集団の構成、特にない、その他）を示し、このうち３つを選択

することを求めた（複数回答）。

結果は、聴力の程度（23.1%）、言語力（21.6%）、発達の状態（20.9%）が選択された。

表 5-2-2　コミュニケーション手段の選択をする際、重視していること（複数回答）N=908

生育歴	発達の状態	聴力の程度	人工内耳	言語力	聴覚障害がある保護者	保護者の希望	本人の希望	学級集団構成	特にない	その他
28	190	210	30	196	10	68	63	82	7	24
3.1%	20.9%	23.1%	3.3%	21.6%	1.1%	7.5%	6.9%	9.0%	0.8%	2.6%

その他として、「個々に応じて、保護者との話し合いで。」「家庭環境や地域。」「キューサインを使用することが決まっている。」「学校独自の表にそって。」「聴覚活用（聴力の程度、人工内耳の装用）の程度。(4)」「就学先」「将来のことを含めて考える。」「どの幼児も見て分かる手段、聴力に関わらず伝え合えること。」「聴力にかかわらず手話は必要である。」「選択はしていない、統一されている。」「コミュニケーション手段は、基本的に統一している。」「集団共通の手段として音声併用手話を、どの児童にも使うようにしている。」「手話、口話、文字情報のミックスを意識すること。」「聴力にかかわらず、手話は必要である。」「特に決めてはいないが、手話付スピーチがあたりまえと皆思っている。」「聞こえない生徒同士のコミュニケーションでは手話が必要であるという学部の認識である。」「聞こえる人とのコミュニケーションは、自己選択。」「職員の共通理解」「本校の方針」「学部としての方針」「学校でのコミュニケーション手段使用にあわせて取り組んでいるので選択するときは、その流れにそっている。」「わかるように。」が挙げられた。

第３項　コミュニケーション手段の選択に関わる課題

コミュニケーション手段の選択にかかわる課題について 7 項目（補聴システムの整備、補聴器等の調整・聴覚活用の方法、教師の手話力、手話を用いた指導方法・指導内容、重複障害がある幼児、保護者の希望、その他）を示し、このうち 3 つ選択することを求めた。

手話を用いた指導方法・指導内容（23.6%）教師の手話力（23.5%）、補聴器等の調整・聴覚活用の方法（19.7%）が選択された。

表 5-2-3　コミュニケーション手段の選択にかかわる課題（複数回答）　N=908

補聴システム	補聴器等	教師の手話力	手話を用いた指導	重複障害	保護者の希望	本人の希望	その他
66	179	213	214	130	48	15	43
7.3%	19.7%	23.5%	23.6%	14.3%	5.3%	1.7%	4.7%

その他として、「教師（指導力、経験不足、知識、指導方法、コミュニケーション力、専門性、意識、視覚的教材(12)」「保護者の教育力・家庭環境・学校への協力、意識（5)」「親子関係」「子ども（言語力、聴力、個人差、発達段階、発話の明瞭性、コミュニケーション力、手話力、理解力、聴力、意識（23)」「コミュニケーション手段が違う子ども同士のコミュニケーション

(2)」「選択はしていないので、課題もない。」「文字情報提示機器の整備(2)。」「予算の確保」「社会に出たときにそのコミュニケーション手段が役立つかどうか。」が挙げられた。、また、１つの意見で２つの内容が書かれているときには、分けて記載した。

第４項　学部内でのコミュニケーション手段の使用状況

学部内でのコミュニケーション手段の使用状況について、教師と幼児児童生徒の間及び幼児児童生徒間で用いられているコミュニケーション手段のうち、6 項目（聴覚口話、手話付きスピーチ、日本手話、筆談、キュードスピーチ、その他）から、「当てはまるもの全て（複数選択)」及び「主に使用する（１つ選択)」の回答を求めた。ここでは「当てはまるもの全て」に１点、「主に使用するコミュニケーション方法」に２点を与え、合計した割合を示す。

表 5-2-4 に、教師と幼児児童生徒、表 5-2-5 に、幼児児童生徒間の学部内でのコミュニケーション手段の使用状況を示した。教師と幼児児童生徒では、手話付きスピーチ、聴覚口話の順であった。そして、学部が上がるにつれて、聴覚口話と手話付きスピーチの割合の差が大きくなっている。中学部と高等部では手話付きスピーチが聴覚口話を 13%以上、上回った。幼児児童生徒間をみると、表 5-2-4 と同様、手話付きスピーチ、聴覚口話の順であった。幼稚部では両者の差は、2%であるが、小学部 7.6%、中学部 9.5%、高等部 16.8%とその差が広がった。また、日本手話の使用については、中学部、高等部で 15%を超えていた。

表 5-2-4　　学部内でのコミュニケーション手段の使用状況（教師と幼児児童生徒）　(%)

学部	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	その他
幼稚部	32.8	38.7	2.1	4.1	5.6	16.7
小学部	27.7	38.2	6.1	11.9	5.3	10.8
中学部	27.8	41.4	7.8	15.2	1.9	5.8
高等部	27.6	44.4	5.6	18.5	1.3	2.6

表 5-2-5　学部内でのコミュニケーション手段の使用状況（幼児児童生徒間）　(%)

学部	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	その他
幼稚部	35.9	37.9	3.9	1.0	4.2	17.0
小学部	29.9	37.5	11.3	5.5	5.2	10.7
中学部	28.9	38.4	15.8	7.0	3.5	6.3
高等部	28.9	45.7	15.2	5.6	2.0	2.5

第５項　コミュニケーション手段の選択・使用のまとめと考察

コミュニケーション手段の選択や使用に際する学部で共通した方針については、「ある」と回答したのは 73.4%で、全回答の約 3/4 あった。残りの「ない」と回答したのは、学校の方針がないと判断するよりも、幼児児童生徒の実態に合わせて、コミュニケーション手段の選択や使用をしていると考えられる。

コミュニケーション手段の選択や使用に関しては、手話、手話付きスピーチが主流になっている状況が示された。

コミュニケーション手段については、「子どもの実態に合わせて」との回答が 20.1%であった。その意味するところは、「子どもを主体（中心）にした視点で、コミュニケーション手段を選択することが重要である」と思われた。

次に、コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項として、聴力の程度（23.1%）、言語力（21.6%）、発達の状態（20.9%）が選択された。この割合は、24 年度の時とほぼ同様の 20%弱のところを推移しているが、順番は少し変化した。24 年度は、発達の状態（24.3%）、言語力（21.5%）、聴力の程度（20.7%）が選択された。

コミュニケーション手段の選択にかかわる課題については、手話を用いた指導方法・指導内容（23.6%）教師の手話力（23.5%）、補聴器等の調整・聴覚活用の方法（19.7%）が選択された。24 年度は、教師の手話力（23.8%）、補聴器等及び手話を用いた指導方法・指導内容（各 20.9%）が選択された。

また、重複障害幼児児童生徒数（14.3%）は、24 年度（11.6%）から 2.7%増加した。

学部での教師と幼児児童生徒、幼児児童生徒間のコミュニケーション手段の使用状況の結果から、いずれも手話付きスピーチから、主たるコミュニケーション手段となっていることが示された。ただし、本調査では、高等部においても生徒間のコミュニケーション手段として聴覚口話を、一つのコミュニケーション手段として使用している生徒が 28.9%（24 年度 21.0%）おり、聴覚管理や補聴機器の調整に関する専門性が求められていることが示唆された。

また「合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ（平成 23 年）※2の資料 には、聴覚障害に起因する情報不足を補う指導の工夫として、教師等が、聴覚障害の状態に合わせた、コミュニケーション手段（音声、手話、文字等）の選択と活用ということが示されている。

コミュニケーション手段は聴覚障害教育の主要な課題であるが、国語教育をどう進めるかという観点を踏まえた実践が、引き続き重要となると考える。

第３節　調査Ｂ　言語及びコミュニケーション評価法に関する調査

調査 B では、コミュニケーションの状況を把握するための評価、日本語の言語力の状況を把握するための評価、手話の言語力の状況を把握するための評価の３点を尋ねた。
なお、本調査で言う評価とは、市販のテスト（発達検査、言語力検査等)、市販されていないが流通・共有されているテストやチェックリスト、自作のテストやチェックリスト及び評価項目、聴力測定等も含むものとした。

第１項　コミュニケーションの状況を把握するための評価

幼児児童生徒が使用しているコミュニケーションの状況を把握する方法について、名称等、活用の目的、実施の範囲、実施の周期、対象児の 5 つの欄を設け、それぞれ具体的な自由記述による回答を求めた。

なお、名称等には「市販のテスト・検査・自作のテスト・検査」、活用の目的には、「実態把握のため・指導に活用にため・その他」、実施の範囲には、「学部内でテスト・検査を実施・学部を超えてテスト・検査を実施」、実施の周期には、「定期的に実施・年に数回実施・不定期に実施」、対象児には、「全員に実施・決まった学年に実施・選択した幼児児童生徒に実施・選択の理由（自由記述)」を示し、該当する事項に選択を求めた。

(1) 名称等

全学部で 443 の回答があり、市販 310（70.0%)、自作 133（30.0%）であった。

評価法として最も多かったのは、語音聴力測定（語音弁別能検査）（155)、次いで発音明瞭度検査（145)、聴力検査・聴力測定（57）であった。
表５-3-1 に、コミュニケーションの状況を把握するための評価に関して記述のあった各種検査等を示した。

表 5-3-1　コミュニケーションの状況を把握するための評価

発達検査	乳幼児発達スケール（KIDS)、S－M 社会生活能力検査、乳幼児精神発達診断（津守式)、心の理論課題、新版 K 式発達検査、遠城寺式乳幼児分析的発達検査、K-ABC、WISC-Ⅳ、コミュニケーションシステム PECS(ペクス）、LC スケール他
語彙	J.COSS 語彙チェックリスト、PVT-R 絵画語い発達検査、語彙表、読字力検査、単語了解度、読書力診断テスト、身体名称度検査他
発音	発音チェック表、新版構音検査、VTR 分析速読検査、スピーチトラッキング（追唱)、言語流暢性検査他
手話	手話コミュニケーション日本語プログラム、手話検定他
聞き取り	単語の聴き取り（CI2004 検査表)、語音パターン知覚検査、JANT、日常生活文了解度検査、単語了解度試験他
その他	読話テスト、質問・応答関係検査（TQAID)、子どものコミュニケーション・チェックリスト 日本版 VTR 分析、行動観察、コミュニケーションの実態調査、自立活動指導段階チェック表他

(2) 活用の目的

各学部総数 821 の回答があり、実態把握 463（56.4%）、指導に活用 346（42.1%）、その他 12（1.5%）であった。

その他として、「保護者へのフィードバック（２）」「研究のため」「教師の力量を上げるため」「聞こえの状態や受け応えの適切さ、支援の求め方などをみる」等の記述があった。

(3) 実施の範囲

各学部総数 476 の回答があり、学部内 272（57.1%）、学部を超えて実施 204（42.9%）であった。半数以上が学部内で実施していた。

(4) 実施の周期

各学部総数 767 の回答があり、「定期的」320（41.7%）、「年に（　）回」300（39.1%）、「不定期」147（19.2%）であった。「定期的」と「年に（　）回」を加えると 80.8%と実施率が高かった。

(5) 対象児

各学部総数 486 の回答があり、「全員」261（53.7%）、「決まった学年」41（8.4%）、「選択した幼児児童生徒」184（37.9%）と、「全員」を対象児とするが 53.7%であり過半数を示した。選択の理由について、学部別に分類した。表 5-3-2 に、分類した結果を示す。

表 5-3-2　学部別の対象児選択の理由　（　）内は同じ回答数を表す。

幼	・検査が可能な幼児に実施している(13)。
稚	・ひらがなが読める幼児に実施している(10)。
部	・50 音が読める、あるいはキューと 50 音が結びついている幼児に実施している。
	・幼児の実態に応じて実施している(4)。
	・年長の子どもを対象にしている。
	・年中の子どもを対象としている(2)。
	・聴力検査への態勢がとれる幼児を対象としている。
	・音声聴取が可能な幼児、意味理解が可能な幼児を対象としている。
	・聴覚活用の実態に応じて実施している。
	・補聴器装用時を対象としている。
	・聴力の程度や発達段階に応じて実施している。
	・人工内耳装用児の実態把握として、人工内耳装用幼児に実施している(2)。
	・校内で発音指導を望む幼児に実施している。
	・発音に区別が付いてきた幼児に対して実施している。
	・１人ひとりの発達、保護者の理解を得られるかも考慮し、実施するかを担任が判断している。
	・保護者の協力が得られたお子さんに対して実施している(3)。
	・指導上必要を感じる幼児に実施している(2)。
	・保護者の希望で実施している。
	・研究対象児に実施している。
	・発達がゆるやかな幼児に対して実施している。
	・発達障害のある幼児に対して実施している。
	・重複障害児は実施不可能である(3)。

小学部	・コミュニケーションモード、児童の実態によって実施するかどうか判断する。 ・本人や保護者の希望で実施する(2)。 ・言葉の聞き取りの様子に変化があった場合に実施する。 ・聴覚口話を主たるコミュニケーション手段にする児童に実施している(3)。 ・研究の対象児に実施している。 ・担任の希望により、実施する(3)。 ・聴覚の単一障害の児童中心に実施している。(2) ・実態に応じて実施している(5)。 ・検査が可能な発達段階になり次第行う(4)。 ・実態として検査が可能な児童に行う。 ・ひらがなが読める児童に実施している(3)。 ・希望者に実施している。 ・重複障害児は実施不可能である(4)。 ・毎年２年生の希望者に実施している。 ・発音指導が必要な児童に実施している。 ・準ずる教育課程を受ける児童に実施している。 ・準ずる児童のうち聴力低下のある児童に実施している。 ・聴力に応じて、また障害認識の指導の必要に応じて行う。 ・重複学級の児童に実施している。 ・発音に課題がありそうな児童に実施している。 ・３音節了解度検査で、正解率 90%以上の児童と担任が希望する児童に実施している。
中学部	・保護者が発音について現状を知りたいという生徒に実施している。 ・実態やニーズの必要に応じて実施している(9)。 ・発音指導が課題の場合に実施している。 ・聴覚口話の生徒へ実施している(3)。 ・中学部１学年で実施している。 ・受験希望者に実施している。 ・発音、発語に不明瞭なところがある生徒に実施している。 ・発音指導を希望する生徒に実施している。 ・聴覚障害の単一障害である生徒に実施している(2)。 ・課題がある生徒に実施している(2)。 ・次の担当に引き継ぎのある生徒に実施している(2)。 ・自己認識の学習をしている生徒に実施している(3)。 ・希望の有無を保護者に確認して実施している。 ・発音が比較的明瞭な生徒に実施している。
高等部	・聴覚口話の生徒に実施している(2)。 ・担任の希望や判断で実施している(3)。 ・適宜、必要に応じて実施している(3)。 ・就学、医療機関受診の必要のある生徒に実施している(2)。 ・聞こえの実態に応じて決めている(4)。

・重複障害の生徒の一部以外に実施している。
・検査ができる生徒は全員実施している。
・本人・保護者の希望で実施している。
・補聴器を買い換え希望の生徒に実施している(4)。
・聴覚障害単一の生徒を基本として実施している。
・自己認識のための学習等を受けている生徒に実施している(3)。
・聴力低下の疑いがある生徒に実施している。
・人工内耳手術後の聞き取りの評価"として、人工内耳手術後の生徒に実施している。
・聴覚活用が可能だと思われる生徒について、実態を詳しく知るために実施している。
・補聴器の調子の悪さを訴えてきた生徒に実施している。

第２項　コミュニケーションの評価の必要性や課題

コミュニケーションの評価の必要性について自由記述による回答を求めた。学部別に分類した。表 5-3-3 に、分類した結果を示す。

表 5-3-3　コミュニケーションの評価の必要性

幼稚部	・誤発音の傾向がわかり、発音指導をする際に役立っている。（評価の必要性）
	・客観的な実態把握のため必要である。（評価の必要性）
	・学部研究等で利用するために実施した。発達の段階が分かるので、指導に生かせる。（評価の必要性）
	・客観的に実態把握をした上で、指導計画に生かすことができるので必須であると考える。（評価の必要性）
	・コミュニケーション手段が多様になってきているので、さまざまな面から客観的に評価できるような指標が必要だと感じる。（評価の必要性）
	・幼児の様子を観察することで、コミュニケーションの状況を把握している。（評価の必要性）
	・生活言語のレベルを理解するためには必要であると思う。（評価の必要性）
	・音声言語を理解し、正しい日本語を使用できるかどうかを知るために必要である。（評価の必要性）
	・担任が独自に各々の感覚で、幼児の力を把握するのではなく、共通の尺度での評価をすることで学部の教員が全幼児の実態を共有することができる。（評価の必要性）
	・子どもの発音の実態を把握し、その後の指導に生かすことができる。（評価の必要性）
	・市販の検査を使うことで客観的に聞こえや発音、コミュニケーションに関する評価を行うことができる。（評価の必要性）
	・子どもの実態把握をし、指導に生かすため。（評価の必要性）
	・発音（各音）の指導をする際、子どもの発音の特徴（課題）を客観視し、ターゲットを絞るために、評価は不可欠。（評価の必要性）
	・発音の状況を知り、より分かりやすい発音で話すことができるようにしていくことは、将来、社会に出た時に有効である。（評価の必要性）
	・聴力検査と共に、病院との連携の資料となる。（評価の必要性）
	・本校独自の「観察」を年２回行っており、音声言語、指文字、手話等のどのモードで理解し、表

出しているか、どの言葉が獲得できていないかの実態把握を行い、課題を明確にしている。（評価の必要性）
・人との関わりにおいて、言葉の理解、表出、活用の状況を、把握（実態把握）することによって必要な指導、支援を考えることができる。（評価の必要性）
・幼児のコミュニケーション能力に関わる実態把握を行ない、指導に生かすことができる。（評価の必要性）
・幼稚部において、コミュニケーション力の素地を培うことは、幼児の成長にとって大変重要である。（評価の必要性）
・人工内耳で聴覚活用ができていても、発音が不明瞭な幼児がおり、評価し、難しい音を練習する必要がある。（評価の必要性）
・どの程度の音に対して反応があり、認知できるか実態を知ることで、環境音への気づきを促したり、声をかける距離や声量等、指導上の配慮ができる。（評価の必要性）
・各自の聴取実態を把握することで、日常の指導に生かす。（評価の必要性）
・実態を把握することで、発達のどの段階にいるのかを知り、指導実践に活かせる。（評価の必　要性）
・保護者に実態を伝える為に必要。（評価の必要性）
・保護者に評価してもらい、教員も評価すると評価の違いが現われ意識の違いが分かる。（評価の必要性）
・聞きとりの状態を知ることに役立てることができる。（評価の必要性）
・毎年同じ検査を実施し、1年間の伸びの確認と指導の振り返りのために必要だと考えている。（評価の必要性）

小学部

・実態を基に、指導目標や学習内容を決めるために必要不可欠。（評価の必要性）
・語音聴力検査を実施することで、言葉の聞きとり状況の把握ができ、本人及び周囲が配慮すべき点もより明確になる。又、語彙数の把握によって、コミュニケーション方法を工夫する必要性も見えてくる。（評価の必要性）
・聴覚口話を謳っている本校にとっては、聴覚の検査等は必要欠くべからざるものである。（評価の必要性）
・一つ一つの発音技能の精度を上げることも必要だが、それ自体が目的ではなく、話したい内容が相手に伝わることが目的である。発音明瞭度検査では、母音の明瞭性の確認と全体としての明瞭度（%）の変化を見ることが大切であると考えている。（評価の必要性）
・現在、臨時任用職員と非常勤職員の言語聴覚士に検査をしてもらい、指導に生かしている。常勤の言語聴覚士を市に要求していきたい。（評価の必要性と課題）
・発音の練習などの参考にするために実施している。（評価の必要性）
・児童が、自分自身の聞こえの状態を知ることで、聞き誤まりやすい音がわかり、コミュニケーションに役立てられるので必要。教師も児童の聞こえの状況を知ることでコミュニケーション指導につなげることができる。（評価の必要性）
・児童の実態把握で、特に経験年数の少ない職員の指導に生かすために、また高学年児童が自分で自分の状況を知る上でも評価が必要だと思う。（評価の必要性）
・児童の実態把握のために必要(2)。（評価の必要性）
・日頃児童が、どの程度、正しく言葉のやりとりをしているか、特に理解面を評価し、把握するこ

とは指導者として必要と考える。（評価の必要性）
・子ども実態をつかむには、客観的に評価できる検査があることはとても大切である。（評価の必要性）
・子どもが間違っている音を確認することができる。（評価の必要性）
・コミュニケーションの課題を学部の職員全員で共有することで、タイムリーに必要な指導ができる。（評価の必要性）
・補聴器の調整。発音指導に必要。（評価の必要性）
・アセスメントをとるための材料として評価をし、学習につなげる。（評価の必要性）
・児童の実態を客観的に把握し、聴覚活用や発音発話力を向上させる支援を行い、日常生活や学習の中でよりコミュニケーションが円滑に成立するよう検査を実施している。（評価の必要性）
・意志疎通の難しい原因がどこにあるのか把握する。（評価の必要性）
・発音指導のための実態把握、指導後の変容について評価するため（口話のためだけの発音指導ではなく、言語指導につながる発音指導）（評価の必要性）
・聴力の変動がないかだけでなく、補聴器の状態の把握のためにも必要。（評価の必要性）
・聴力を知り、配慮の工夫をしたり、体調や聴力の変化に早く気づくことができる。（評価の必要性）
・単語、音節レベルの入出力の状況を客観的に把握し、重点的に指導する内容を明確化したり、指導法の改善に繋げたりするために必要だと考えている。（評価の必要性）

中学部

・生徒のコミュニケーションの力の発達について常に注意を払い、指導していくのは教科指導と同じように重要である。（評価の必要性）
・発音練習の参考にしたり、伝える手段を学習する際に活用している。（評価の必要性）
・実態を把握し、指導するために必要。（評価の必要性）
・聴覚口話（法）による言語コミュニケーション能力の育成にとって、実態把握の必要性からも必要。（評価の必要性）
・授業方法、提示の仕方の工夫を行う時に、必要な実態把握にデータを使用。（評価の必要性）
・自分自身を知り、自分にとって何が大切かを考えさせるためにも必要。（評価の必要性）
・外部機関への情報提供と連携のため必要。（評価の必要性）
・数値化することによる実態把握、実態を確認のためにも必要。（評価の必要性）
・本人（生徒自身）が自分の聞こえの傾向を知ることが必要。（評価の必要性）
・生徒の実態把握には評価の必要性を感じる。（評価の必要性）
・子どもの実態を理解することで、指導する時に教員が活用することができる。（評価の必要性）
・教員が指導上、把握しておくことはもちろん必要であるが、その結果を生徒自身が知っておくことは周りの人とのコミュニケーションを図るうえで大変重要だと考える。（評価の必要性）
・語音聴力検査は、標準の方法ではなく、本校独自の活用のしかたをしている。社会自立を視野に入れ、客観的評価は重要である。（評価の必要性）
・毎年の聴力の状況が把握でき、役立つ。（評価の必要性）
・将来に向けて、生徒自身が自分のコミュニケーションについて客観的に把握し、自分の弱み、強みを相手に伝えるため、又、教師が生徒の個々の課題を知り、授業をする上での留意点を考える上で必要である。（評価の必要性）
・それぞれがどのような力を生活の中や、学習をする上で必要なのかをつかむ為には必要。（評価

	の必要性） ・発音検査を行うことで、生徒自身も教師も発音について客観的に把握することができ、日常生活で意識させることができるメリットもある。（評価の必要性） ・発音の明瞭度や発音傾向を知ることで、指導に活かすことができる。結果を生徒にも伝え、強いところ、弱いところを意識させている。（評価の必要性）
高等部	・的確な実態把握に基づく指導・支援を行うために評価は必要である。（評価の必要性） ・外部機関への情報提供と連携のため必要。（評価の必要性） ・数値化することによる実態把握、実態の確認のために必要"。（評価の必要性） ・聴能の程度、補聴器装用（人工内耳のマッピング）の効果や調整の必要性を見るために必要。（評価の必要性） ・教科指導等の場面で役に立っている。（評価の必要性） ・生徒へのより良い支援や指導に生かすために必要。（評価の必要性） ・生徒の実態を知る手がかりとして、聴力検査は必要である。（評価の必要性） ・高等部において、自分の障害を理解し、説明する力を身に付けさせるためにもコミュニケーションの評価は必要であると感じている。（評価の必要性） ・「補聴・コミュニケーションに関する意識調査」を実施し、生徒一人ひとりが聞こえやコミュニケーションについて、どう捉えているかを実態把握し、それに基づいて担任を中心に自立活動や進路学習などの時間を通してコミュニケーションに関する指導を行っている。毎年、同じ項目で調査をしているので、捉え方の変容を見ることもできる。（評価の必要性） ・生徒自身が発音の明瞭度や聴力を意識している。（評価の必要性）

コミュニケーションの評価の課題については、表 5-3-4 に、「コミュニケーションの評価の課題」に学部ごとに結果を示す。

表 5-3-4　コミュニケーションの評価の課題

幼稚部	・保護者が聴覚補償ばかりを気にしていて、、前言語的コミュニケーションへの積極性に欠けるケースが多いため、言語発達の道筋を示したい。そのためにも特に前言語的コミュニケーションの状況把握及び促進への理解が課題である。（課題） ・現在は、単音の明瞭度のみの検査である。単語での検査の市販（一般化されたもの）があるとよい。また、絵を見て答えるなどの構音検査的なもの、（言語力と明瞭度）が合わさったような検査があると良い。指導者本人が手軽にチェックできるようなものがほしいと常々思っている。（課題） ・人工内耳装用の幼児が増え、コミュニケーションの状況の評価について、医療機関と連携を深める必要性を感じる。（課題） ・登校日数の少ない幼児は、時間がかかってしまう。（課題） ・コミュニケーションの評価を行える教師の力量の差がある。また、指導への活用についても担任に任せているため、不充分なケースもある。いずれも力量アップが課題である。（課題） ・年齢が小さい、文字が読めない子にはできない。（課題） ・発達がゆっくりなため、使用できるものがない。（課題） ・日常の中での様子観察（記録）が中心となってしまう。（課題）

・保護者にも課題を伝え、共有しているが、保護者の課題への取り組みに対する考え方により、活かされないこともある。（課題）
・実施が難しい幼児が多い。また、検査結果を指導に活用しきれていない。（課題）
実態差の事を課題と考える。（課題）
・重複障がいの幼児の場合、評価が難しい。（課題）
・在籍幼児の少人数化、多様化により客観的な評価が難しい。（課題）
・以前はきっちり評価していましたが、音声に関しては特に厳しいお子さんの場合、なかなかその後に繋がらない場合も多く、あまり活用されているとは言いがたい。手話やろう者の方の考え方などに配慮するとあまり強くも言えない。（課題）
・有効な評価の方法、手軽にできるものを実施したいがわからない。（課題）
・検査の種類が少ない。（課題）
・２０単語にしても６７－Ｓにしても１種類ずつしかなく、しかも古い。（課題）
・定期的（学期ごとなど）に実施する必要性を感じているが、なかなかできないのが現実である。（評価の必要性と課題）
・コミュニケーションの力がどのくらいなのかを知ることで、指導内容を考える時に参考となっている。検査等では測れないが、コミュニケーション意欲をどう育てるのか、話したい伝えたい思いを育てていくことが幼稚部段階では大切ではないかと考え、実践している。（評価の必要性と課題）
・教育課程や日々の活動計画を子どもの実態に合わせて作成することができた。現在は、子どもの実態把握のための評価基準となるものが必要であると感じる。（評価の必要性と課題）
・指導する上で、幼児を客観的に見る必要性がある。今まで、Ｓ－M検査を定期的に実施していたが、的確に評価しにくい幼児が増えてきたため、今年度から KIDS を取り入れることにした。（評価の必要性と課題）
・医療機関の言語指導に通う幼児も多いが、日常的に接する時間の長い教員が発音などの課題を把握するために評価し、生活場面の中で自然に指導を行うことが大切であると考える。ただし、人事異動や交流が盛んになる中で、評価後の「適切な指導」についてどうするべきか、専門性の継承がされにくくなってきていることが課題として挙げられる。（評価の必要性と課題）

小学部

・その検査結果を踏まえ、児童の指導に十分活かせているかと言われると不十分さを感じている。（課題）
・客観性をもつ評価になっているか。（課題）
・発音明瞭度が高いとか、獲得語彙数が多いからといって、コミュニケーション能力が高いとは限らない。自分の能力をいかに使っていくか、人とどのように関わっていくか等も問われてくるので、コミュニケーションモードのみの評価では、本当の意味でのコミュニケーションの評価にはならないように思う。（課題）
・単一聴覚障害学級設置間もないため、現在検討中です。（課題）
・人工内耳の児童に対する発音や聞き取りの検査が特に不十分である。（課題）
・検査結果の活用。指導面の共通理解が課題。（課題）
・聴力、発音発語力については、実態の幅が広く、全員に共通して実施できるような検査が見当たらない。また、統一した検査で評価する必要性があまりない。（個に応じて伸ばす、という観点で指導しているため）（課題）

・１つの検査のみでコミュニケーションの状況は把握しきれないので、複数の教師の見立てを検討する必要性がある。（課題）
・授業に生かされない。（課題）
・「聞く」をどう「聴く」に結びつけていくかが課題。（課題）
・児童の実態や担任、保護者の意向により、コミュニケーションの評価を行う必要がある。（課題）
・発達障害や、知的障害等、個々の状態が多様化しており、特に児童同士のコミュニケーションが難しくなってきている。（課題）
・聴覚検査や発音検査だけではコミュニケーションの力の一側面しか測ることはできない。（課題）
・評価したことをどう分析し、教育活動にどう生かしていくかが、検討できていない。（課題）
・コミュニケーションは、聴力、発音だけでなく統合的に評価するべき。その方法についてはっきりと決まっていないことが課題。ＫＡＢＣ－Ⅱも実際は知能検査だが、トータルとして〝やりとり〟の是非で結果が出る箇所もある。（課題）
・人事異動や校内配置の都合で適切に評価できる教員が、不足している状況。（課題）
・一部の職員は検査結果を日頃の言語的な関わりや言語指導に活かすことができているが、全職員が活かすところまでには至っていない。（課題）
・職員全員が検査を取れるようにしたい。検査をすることで指導の方向が見えてくるために大切である。（評価の必要性と課題）
・検査で把握した実態の中で得意な発音、苦手な発音を直接授業で指導している。１クラス内の人数が多いと評価がしにくい。（評価の必要性と課題）
・コミュニケーション力を育てることは、幼・小・中・高各学部を通して連続して取り組むことが必要である。自分のコミュニケーション力の実態（よいところ、伸ばしたいところ）、発音発語の良さや課題等を、諸検査を通して確認している。検査結果を含め、幼児児童のコミュニケーションに関わる実態を次の学部に確かに、丁寧に引き継いでいくことが課題である。（評価の必要性と課題）
・コミュニケーションの相手の意図を、正しくどの程度理解できているのかを正確に把握する必要性がある。また、その能力を正しく把握するための検査分析力の課題がある。（評価の必要性と課題）
・実態を把握し、指導に生かすために必要であると感じる。コミュニケーションの状況に迫った検査を自作のものでも考えていく必要があると感じている。（評価の必要性と課題）

中学部

・入学してきた経緯から「聴覚口話」「日本手話」「転入学のためどちらも未習得」と実態にばらつきがあり、一つのくくり、一つの方法での評価が難しい。唯一行えるのは授業を通しての「わかったか、どうか？」の評価が現状である。（課題）
・検査結果の分析の具体的活用方法の共有が難しい。（課題）
・把握するための指標がない。意識もない。（課題）
・中学生段階では検査に時間を費すより、学習活動の中でコミュニケーション力を高めた方がよいように思う。（課題）
・正式には、病院で行った検査を提出してもらっているが、あまり活用はされていない。（課題）
・効果的な活用について個々の教員に任せすぎている（経験年数や検査の活用や意味の理解など）

面が課題である。（課題）
・中学部生になると、自分のコミュニケーション手段も決まりつつあり、情報の収集や発信にも、個人が優先される。それが必要性でもあり、課題でもあると感じている。（課題）
・コミュニケーションの評価として、客観的で汎用性のある、聾学校に適したものが今のところみ見つからない。評価の必要性は感じている。（課題）
・検査を行うスキルと時間が課題である。（課題）
・聴覚重複の生徒で、市販の検査がそのままでは使いにくい。（課題）
・実態把握のための検査は定期的に実施しているが、中学部ではその結果を生かして、発音指導などを行う時間が足りない。（課題）
・検査結果の分析、教員への周知と活用に課題がある。（課題）
・評価したものを、担当（関係職員）で把握して、十分に活用できる所までは進んでいない。（課題）
・語音聴力検査をできる教員がほとんどおらず、やる時間もなく、実施していない。（課題）
・発音明瞭度検査について、発音指導のノウハウを持つ教員が少なく、結果を生かしきれていない。（課題）
・実態を把握できても指導に生かしたり、日常の授業の中で指導実践につなげられる教員がほぼいない。（課題）
・発音傾向は分かっても中学生段階に、どこまでの指導を行っていくのかの検討が必要であるし、教師の専門性も必要となる。（課題）
・生徒数が少なく、個の実態に合わせてコミュニケーションを図っており、特に困り感はないが、客観的なデータを基に指導を行うことは大切である。また、発達障がいを合わせもった生徒とのコミュニケーションは独特であるため、その他の検査等でフォローしていく必要性もある。（評価の必要性と課題）
・実態が異なる子ども達に対するコミュニケーションの評価を、統一された客観的に評価できる方法があれば、子ども達へのアプローチなど更に深められるのではないかと思います。（評価の必要性と課題）

高等部
・コミュニケーションの評価のためにどのような方法があるかがわからない。（課題）
・聴こえの状況については、高等部段階では、それほど変容がないこともあり、検査結果はあまり共有されていない。（病的な聴力低下は除く）（課題）
・測定機器の操作や、検査の実施手順について教員の十分な研修が必要である。（課題）
・検査結果の活用に課題が残る。（課題）
・語音検査を実施していないため、自分の聞こえを正確に把握することが難しい。（課題）
・聞こえに対する発音の明瞭度についても検証しにくい。（課題）
・客観的評価の指標となる検査等は実施しておらず、指導者の主観的評価に頼るところが大きい。（課題）
・生徒が持つ様々な能力も考慮して評価する必要がある点が課題である。（課題）
・聴力測定及び語音測定といった客観的評価を分析し指導に活かす、教師の力量が課題。（課題）
・評価の生かし方を統一したものがなく、各人に任されていることが課題である。（課題）
・時間的なものの制約（自立活動は週に１時間）であったり、生徒の個々の実態が多様であることによる、個々の実態に応じた指導計画の立案において課題として挙げられる。（課題）

・高等部段階になると聴力測定等以外の評価としては、現場実習先での企業による評価や交流、共同学習での自己評価が中心となる。検査課題での評価より、より実際的な評価が求められる。（課題）
・検査や評価の必要性は感じているが、教員数の少ない学校で、専門性のある教員は更に限られており、充分な検査が行えていないのが課題である。（課題）
・高等部では多様なコミュニケーション手段を用いているため、評価をしよう、という流れにはなっていない。（課題）
・授業や日常生活を通して、生徒の実態をつかむようにしているが、基準等はない。（課題）
・今後、基準や指導の工夫について学部内で共通理解できるものが作れるとよい。（課題）
・実態把握後の各教科指導における指導内容の連携が課題である。（課題）
・語音聴力検査ができる職員が少ない。（課題）
自分の聞こえについて、また発音について、自己認識へとつなげていきたい。（課題）
・単に聞こえにくい、わかりにくい、ということを生徒に突きつけるのではなく、自分が苦手な音を知ることで、周囲との関わりの中で意識できるようにさせていきたい。（課題）
・実態把握することで、生徒の支援に生かしていきたいと考えている。（課題）
・必要性については、聴力測定及び語音測定から個々のきこえの実態を把握し、それらを基に日々の指導に活かす。（評価の必要性と課題）
・指導時のコミュニケーション方法の確立及び生徒を理解する一助として、どのようなコミュニケーションを、どの程度獲得しているのか把握し、その後の指導に活かすことが必要だと考えている。（評価の必要性と課題）

第３項　「コミュニケーションの状況を把握するための評価」のまとめと考察

コミュニケーションの状況を把握する方法について、名称等では、評価法として多かったのは、語音聴力測定（語音弁別能検査）、次いで発音明瞭度検査、聴力検査・聴力測定であった。具体的な名称として、発達検査では、「新版 K 式発達検査」、「遠城寺式乳幼児分析的発達検査」、「K-ABC」、「WISC-Ⅳ」、「乳幼児精神発達診断（津守式）」、語彙評価として、「J.COSS 語彙チェックリスト」、「PVT-R 絵画語い発達検査」、「語彙表」、「読字力検査」、「読書力診断テスト」、「幼児･児童読書力テスト」、「観点別日本語能力テスト」、発音評価として、「発音チェック表」、「新版構音検査」、「言語流暢性検査」、手話評価として、「手話コミュニケーション日本語プログラム」、「手話検定」、聞き取り評価として、「単語の聴き取り（CI2004 検査表）」、「語音パターン知覚検査」、「JANT」、「日常生活文了解度検査」他等が挙げられ、市販や自作教材による評価を実施していた。

活用の目的は、「実態把握」を主としていたが、「関係機関との連携のため使用」、「保護者支援」等、外部との情報提供も行っていた。実施の範囲は、学部を超えて実施（42.9%）と全校的な取組となっている状況が示された。また、実施の周期は定期的にが 41.7%であり、対象児も全員と回答したのが 53.7%と多かった。特別支援学校（聴覚障害）では、様々な評価法を用いて、コミュニケーション評価に努めている状況が示された。

コミュニケーション評価の必要性と課題については、学部ごとに「評価の必要性」と「課題」「評価の必要性と課題」に関する回答を得た。「評価の必要性」に関しては、実態把握、自立活動、コミュニケーション、聴覚、発音、職員間理解に関する回答を得た。またコミュニケーション評価の「課題」については、実態把握、重複障害、手話、検査、将来、聴覚、発音、指

導力、保護者、教員間連携、時間に関する回答を得た。

第４項　日本語の言語力の状況を把握するための評価

幼児児童生徒の日本語の言語力の状況を把握する方法について、テスト・検査の名称等、活用の目的、実施の範囲、実施の周期、対象児の 5 つの欄を設け、それぞれ具体的な内容の自由記述による回答を求めた。また、名称等には「市販のテスト・検査・自作のテスト・検査」、活用の目的には、「実態把握のため・指導に活用のため・その他」、実施の範囲には、「学部内で実施・学部を超えて実施」、実施の周期には、「定期的に実施・年に数回実施・不定期に実施」、対象児には、「全員に実施・決まった学年に実施・選択した幼児児童生徒に実施・選択の理由（自由記述)」を示し、該当する事項に選択を求めた。

(1) 名称等

各学部総数 548 の回答があり、市販 501（91.4%)、自作 47（8.6%）であった。

(2) 活用の目的

各学部総数 928 の回答があり、実態把握 510（55.0%）、指導に活用 399（43.0%）、その他 19（2.0%）であった。

(3) 実施の範囲

各学部総数 534 の回答があり、学部内が 356（66.7%)、学部を超えて実施 178（33.3%）であった。66.7%が学部内で実施していた。

(4) 実施の周期

各学部総数 877 の回答があり、定期的 363（41.4%)、年に（　）回 354（40.4%)、不定期 160（18.2%）であった。「定期的」と「年に（　）回」を加えると 81.8%と実施率が高かった。

(5) 対象児

各学部総数 541 の回答があり、全員 243（44.9%)、決まった学年 102（18.9%)、選択した幼児児童生徒 196（36.2%）であった。

第５項　日本語の評価の必要性や課題

日本語の評価の必要性や課題について自由記述による回答を求めた。表 5-3-5 に学部別に分類した日本語の評価の必要性の結果を示す。

表 5-3-5　日本語の評価の必要性

幼稚部	・幼児児童読書力テストで採用されている下位検査には、他検査では珍しい「音節分解」や「音節抽出」があり、日本語の基礎となる音韻意識の定着度を測ることができる。その後、読字力、語彙力、文理解、文章理解と下位検査を進め、当該児の日本語力の課題がどこにあるのかを把握することで初めて、個別的な指導に結びつけることができると考えている。（評価の必要性） ・書き言葉に繋げるために、どの程度理解できていて、どこが足りないのかを知ることができるため、必要だと感じている。（評価の必要性） ・年長時の２学期頃、就学前に必要に応じて行う。言語発達の客観的実態把握になるものとして必要だと思う。（評価の必要性）

・客観的な実態把握を保護者と協同で作業して行い、指導に役立てていくために、必要。（評価の必要性）
・どこにつまずいているのか、多角的・分析的に把握し、指導に生かすことができる。（評価の必要性）
・客観的なデータをもとに、指導の方針や具体的な手立てを考え、指導者間で共通理解するために必要である。（評価の必要性）
・定期的に実施することで、幼児の伸び、指導の妥当性を確認する資料とする。（評価の必要性）
・言語力を評価し、個別の指導の時間等に学習を行っている。評価をすることで、課題が見えてくるので、役に立っている。（評価の必要性）
・実態把握し、目標を持ち、手立てを考えて指導し、結果を定期的に評価し、次の目標を設定することで幼児の言語力の向上に繋げられる。また、教師の指導力の向上や指導方法の確立につながる。（評価の必要性）
・日本語の力を客観的に評価し、個別の指導内容の確認や指導の振り返りをすることが必要。（評価の必要性）
・課題をはっきりとさせることで、目標や次にやるべきことも明らかになり、家庭と連携もとりやすい。（評価の必要性）
・日本語の理解力・読む力を把握し課題を明確にするためにも必要である。（評価の必要性）
・幼児の日本力の言語力の実態や課題を知って、指導や日常生活の中で気をつけるのに必要。（評価の必要性）
・５歳児の状況を知るために田中ビネーはしている。幼児によってはノンバーバル検査を実施している。（評価の必要性）
・本校作成の言葉のチェック表は、保護者が定期的にチェックしている。言葉の状態を保護者と教員が共通理解するのに役立っている。（評価の必要性）
・市販の検査は客観的に言葉の状態を把握できる。（評価の必要性）
・幼児一人一人の言語力の実態を知り、指導に活かす必要である。（評価の必要性）
・子どもの実態把握をし、指導に活かすため。（評価の必要性）
・日常の関りの中だけでは見落とす実態を把握できる。（評価の必要性）
・実態把握のために必要。（評価の必要性）
・担任の主観的な評価ではなく、客観的な評価は必要。（評価の必要性）
・理解していると思っていても、実際に検査をすると、理解していないことがよくわかり、指導に活用できる。（評価の必要性）・各自の読み書きの力、言語理解力、言語表現力の実態を把握し、日常の指導に活かす。（評価の必要性）
・評価をすることで幼児の日本語の実態に合わせ、スモールステップでの指導に活かせる。日常会話の中では、きちんと実態がつかめない。（評価の必要性）
・小学部からの教科学習のベースとして、テストや検査の必要性を考える。（評価の必要性）

小学部

・年々実態が様々になってきているため、検査等で言語力の状況を把握する必要がある。（評価の必要性）
・読書力診断検査の結果を生かして、日々の指導を行っている。（評価の必要性）
・言語発達検査の一部について、ルーティンに位置付けており、評価・分析結果を、職員で共通理解することが児童の言語力把握や、指導についての検討において意義深いと考えている。（評価

の必要性）
・実態を基に、指導目標や学習内容を決めるために必要不可欠である。（評価の必要性）
・語彙数の把握や日本語文法の理解など、改めて標準化された検査を実施することで、より具体的な目標が明確になる。（小学部では、教科学習の中で言葉の指導も行っていくが、教科指導の評価とは別に言語力を明らかにしたい。）（評価の必要性）
・子どもたちの日本語力の低さを、諸テストで再確認することにより、弱い面の具体的な指導強化ができる。（評価の必要性）
・特に J.COSS は聴覚障害児の言語発達について、客観的に測定できる標準化された検査なので、日本語の文法をどの程度理解できているのかを調べることができ、どの段階で躓いているのか把握し、指導に活かすことができる。（評価の必要性）
・日々の授業に関わって、実態把握をするための一つの方法として、実施している。（評価の必要性）
・児童の言語力を把握し、指導に役立てるために必要である。（評価の必要性）
・学年が上がるにつれて、使い慣れない言葉が増えてくる。又学習言語の習得という点でも共通の視点で、実態を捉え、指導を継続していきたい。前年と比較できる指標として、読書力診断検査は継続している。（評価の必要性）
・実態把握をし、教科学習の指導に活かす。（言語発達の実態を把握する）（評価の必要性）
・指導に活かすための評価が必要。（評価の必要性）
・コミュニケーション評価と同様に、日本語の評価も大切である。（評価の必要性）
・読む、書く力がどの程度身に付いているのか確認をするために必要。（評価の必要性）
・教科学習を進める上での実態把握のために意義がある。（評価の必要性）
・将来の自立（進学、就職）を考える上で評価は必要。（評価の必要性）
・本校は５障害対応の総合支援学校で、様々な障害のある児童が在籍している。今後学部内で言語力の評価の必要性を共通理解し、「読書力診断検査」等実施したいと考えている。（評価の必要性）
・テストの級が上がっていくことで子どもの意欲が高まる。（評価の必要性）
・実態把握ができる。（評価の必要性）
・実態や成長を知るために必要である。（評価の必要性）
・日本語の語彙力や文法力、読書力などが、客観的に何歳段階にあるのか、また、毎年同じ検査の結果を比較し、１年間の言語力の伸びを確認したり、それらから得られた結果から、指導内容や指導方法の反省・改善を行うために必要であると考えている。（評価の必要性）

中学部

・生徒の語彙の理解については、検査も含めて、常に評価、把握が必要である。（評価の必要性）
・日本語の評価をどのような観点で行うのか、例えば、聞くこと、書くこと、話すことなど。どのような項目で評価し関連付けていく必要があるのかがわかれば、子ども達の指導へも活かせるのではないかと思う。（評価の必要性）
・自立活動でのグループメンバーを決める時に活用している。そして各グループの目標や学習内容を考える時、とても参考になる。（評価の必要性）
・全ての教科の土台となる日本語であるので、正しい評価の必要性がある。（評価の必要性）
・読書力検査は読み書き能力の実態把握として行なっている。（評価の必要性）
・指導の際の、教師の言い回しで、二重否定文を理解できない生徒が多いことが分かり、評価の必

要性を感じた。（評価の必要性）
・学習効果の確認のため必要。（評価の必要性）
・現在実施していないが、生徒自身が自分の力を把握するためにも必要だと思う。（評価の必要性）
・読み書きのためには、評価は必要。（評価の必要性）
・評価から、日常会話で取り上げていくべき言語について共通理解ができる。（評価の必要性）
・教科学習の基礎となる日本語の言語力を把握し、教科の指導に活かす。（評価の必要性）
・将来の自立（進学、就職）を考える上で評価は必要。（評価の必要性）
・「語彙力」、特に文章理解については、このような客観的な検査が必要である。生徒理解につながる。（評価の必要性）
・中学部になると、学習内容が一段と難しく多くなる。言語力を教員が把握しないまま授業を進めても、生徒の理解には繋がらない。実りのある授業を計画するためにも評価は必要である。（評価の必要性）
・毎年行うので、読書力の実態についての変容等が分かり、指導の参考になる。（評価の必要性）
・客観的に言語面での課題を知ることで、学校生活、授業での躓きを見つけたり、指導や教材づくりのヒントになり、日本語力の向上に繋がる。（評価の必要性）
・言語力の評価を念頭にした教科等の学習指導における理解可能な言葉の使用ができる。（評価の必要性）
・日本語の言語力が各教科の力と関連性があるので、教科指導における学習グループを決定する際の参考としている。また、手話では学年相応のコミュニケーションができていても、日本語の理解力とずれがあるケースなどの把握に役立っている。（評価の必要性）
・言語力を評価するために、いくつかの検査バッテリーを組むことで、助詞の獲得を含む構文力を見ることができる。（評価の必要性）
・主・述の関係、助詞、接続詞の使用、動詞、形容詞等の活用、受動・能動文などの諸項目を分析的に評価し、日本語の育ちがどれくらいかが分かる。（評価の必要性）
・言葉を増やし、豊かなコミュニケーションを楽しむ生徒を育てたい。そのために、今の自分の力を生徒自身が知って努力していくもとになると思われる。（評価の必要性）

高等部
・生徒一人一人にあわせた指導、対応をする際、評価は参考にしている。（評価の必要性）
・客観的な判断材料がないと、教員も保護者も主観的な判断に陥ることがある。（評価の必要性）
・生徒の日本語力を、共通検査を行うことで客観的な見方ができ、指導に活かすことができる。（評価の必要性）"
・生徒が持っている日本語力の把握に基づく指導計画を立案するために必要。（評価の必要性）
・日本語の力を把握することで、課題の解決に繋がる。（評価の必要性）"
・日本語の評価は、指導の方針を定める上で重要な実態把握であると考える。（評価の必要性）
・生活言語や教科ごとの語彙力の生徒ごとの本当の実態の把握ができる。（評価の必要性）
・抽象的思考ができるか否かで、教科学習だけでなく、生徒の倫理観なども違ってくるので、評価は必要。（評価の必要性）
・語彙数や、語彙力、知識としてどの程度身につけているか、誤った知識として覚えていないか、間違えた読み方をしていないかの確認するため必要。（評価の必要性）
・語彙力を見るための指標があると、実態の客観的な把握がしやすい。（評価の必要性）

・評価がなくても、個々の生徒と接する中で、微妙な具合いを把握して対応できているが、入学時等に日本語の評価をするとよいかもしれない。（評価の必要性）
・教科指導等の場面で役に立っている。（評価の必要性）
・生徒へのより良い支援や指導に生かすために必要。（評価の必要性）
・語彙力の検査は、授業の進め方や、指導の効果を評価するためにも必要だと考える。（評価の必要性）
・生徒の日本語や文法事項の弱点を具体的に知り、それを指導に活かすために、日本語の評価は必要であり、有効であると考える。（評価の必要性）
・読書力診断検査は、生徒の読書に関する読書意欲、意義、行動が数値化され示されるので、毎年実施している。生徒の現在の実態とともに、これまでの経過を把握することができ、指導に役立っている。指導のために今後も続けていく予定である。（評価の必要性）

日本語の評価の課題については、表 5-3-6 に学部ごとに結果を示す。なお、課題とともに、評価の必要性について書かれた回答も示す。

表 5-3-6　日本語の評価の課題

幼稚部	・検査について、何の検査があるか、実施するとよいかなどについての情報は提示しているが、特に必ず実施する、というようには今のところしていなく、担任にまかせている。（課題） ・聴覚－音声がある程度進んだ後、日常的なコミュニケーションも進むため、本人も周りも満足してしまう傾向があるが、概念の広がりや、運用の状況など、学習言語の基礎作りのための言語指導の必要性を理解し、実践していくことが課題である。（課題） ・実施できる教員が少ない。（課題） ・評価からどのように指導に生かしていくかを捉えるのに、専門性が必要。（課題） ・幼児段階で、ひらがな文字の理解・表現をどの程度取り入れ、評価していくかが課題。（課題） ・すべてを実施するのに時間がかかってしまう。（課題） ・指導者が検査の方法、結果の分析方法を習得するのに時間を要することが課題。（課題） ・他校で使用している語いのリストを参考に基本語いの獲得状況を評価しているが、同じリストを長期にわたって使用しているため、内容の見直しが必要である。また現状では理解語・自発語の単語レベルでの評価にとどまっている。（課題） ・手話が中心の幼児に対して、どのように伝えながら検査をするのか迷いながら行っている。（課題） ・教師の異動等により、幼児の日本語の実態把握等の深まりが図れない。（課題） ・聴覚障害幼児の日本語力を正確に評価するような検査がない。（課題） ・就学に向けての手話言語から日本語を意識させていくかが課題である。日本語を意識させると子どもの活動を止めてしまうことがあるので。（課題） ・検査を実施できない幼児の言葉の力の客観的な評価がむずかしい。（課題） ・Ｊ・ＣＯＳＳが主軸になりつつあるが、聴覚障害児の言語力把握のためテストは、どのようなものが良いのかを検討中。（課題） ・就学に向けて年長時に検査することが多くなっている。低年齢から定期的にチェックできると指導に生かしやすいと思うが現状そうなっていない。（課題）

・課題は検査の読み取りや指導への生かし方などである。（課題）
・実態把握したことを指導にどう活かすかは、担任に任されており、評価したことの実践が課題である。（課題）
・筑波大学名誉教授齋藤佐和先生の段階表を文面は変えずに、チェックできるようにし、状況把握に活用しているが、評価する者の力量が乏しいと正しくチェックできない。チェック表を元に部内職員で話し合うことで幼児の実態把握の視点を学びあうようにしているが難しい。（課題）
・結果を見る度に、語彙力が身に付いていないことを痛感し、日々の活動の中での指導の大切さを感じる。（課題）
・言語力だけでなく、どうしてその実態になっているかの原因に繋がることを知りたい。また、生活の中で使える言語力について知りたい。（課題）
・語彙力を把握するための検査で、もう少し、詳しいもの（新しいもの）があれば活用したい。（課題）
・幼稚部独自でも客観的に評価をする必要性から、諸々の検査について職員が学習中、研修中である。（課題）
・言語指導をする上で、まず、幼児の言語の実態を客観的に評価することが求められるが、経験に頼った評価をする教師が多く、経験の浅い教師は評価の観点や基準が分からず、困っているのが現状である。（課題）
・把握したことを有効に活用していくことが課題。（課題）
・検査を日常性の中に（会話の中で）どう生かしていくかが大切である。（課題）
・発達がゆっくりな幼児なので、評価がむずかしい。（課題）
・言葉の記録は、『おやこ手話じてん』に掲載されているものを、チェックできるようにしたものである。保護者と担任で理解言語と表出言語について、どれくらいの状況（語彙）にあるのか一人一人チェックしているが、十分に活かされることが難しい状況にある。（課題）
・諸検査は、どれも幼児の実態把握のために必要であるが、ただ検査をするだけでなく、結果を分析し、どう指導に生かしていくかを考えたり実践していったりすることが大切ではないかと思う。（課題）
・幼児段階で、日本語の語彙が、どの程度できるか、把握が必要。事象や事物が手話で表現できても、日本語で表現できない場合がある。（課題）
・日本語の習得に繋がる身振りを評価しようと考えたとき、身振りを日本語に置き換える際に、評価者が変わると評価も変わりやすい。（課題）
・日本語の評価は必要であるが、日本語の力があまりついていない幼児にとっては、言語性の検査が難しい。（課題）
・語彙表のチェックは保護者にお願いし、担任がさらにチェックしているが、チェックの仕方が甘かったり、その後の活用が進まない。（課題）
・子どもの発達の状態をみる観点はいろいろ多面的。（認知面、言語面等）また、検査自体、非常に高額なものもある。ＰＶＴ－Ｒなどは３才未満だとわからない。（課題）
・個別で検査をするので、なかなか時間を確保するのが難しい。（課題）
・子どもの言語力が客観的に何歳段階にあるのか確認したり、検査結果を日頃のやりとりに活かすために必要だと考えている。ただ、現在の幼稚部の子どもたちに使える検査は少なく、日頃の行動観察による評価を大切にしている。（課題）

・５歳児の子どもでも検査の方法を理解できないことがある。（課題）
・定期的に評価し、保護者とも到達度を共有し、次のステップを確認するためにも必要である。一方、検査そのものの絵や状況が、現在の生活様式に合わない項目もあり、検査そのものの見直しも時代に応じてあるとよい。（評価の必要性と課題）
・日本語の獲得は一番の課題である。手話でコミュニケーションが豊かに成立することと日本語力は必ずしも一致しない。語彙（名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞等）中心であるが、手話、日本語（口語、指文字）共に理解、表出できているのかを評価している。（評価の必要性と課題）
・絵画語彙検査とＪ．ＣＯＳＳは年に１回担任が実施し、一人一人の実態を学部で共通理解している。一人一人の幼児が何が課題なのかを共通理解にかかわることができるため、話す内容や発問の仕方を工夫することに繋がる。Ｊ．ＣＯＳＳは、文法指導以前の段階の幼児にとっては、当たり前の結果（語彙が少ないなど）しか出ない。検査結果の読み取りや保護者へのお伝えをどのようにするのか（どう活かすのか）についてが課題である。（評価の必要性と課題）
・幼稚部では本校の語彙表チェック以外は実施していないが、お子さんによっては、他の評価も必要な場合もあると考える。（評価の必要性と課題）
・幼児のこれからの成長を見通したとき、日本語の読み書きの力の素地を培うことは、大変重要である。様々な体験を通して、多くの言葉に出会い、言葉と関わるようにしたり、絵本の読み聞かせ等の機会を設定している。幼稚部から小学部へ日本語の評価を確かに繋げていくための方途を検討している。（評価の必要性と課題）
・その時点の幼児の実態と指導の課題を把握し、指導に活かす。日常生活に必要な日本語の運用の評価が主観的になっている。（評価の必要性と課題）
・これまでは、必要に応じて担任判断で、絵画語彙検査を行ってきた。しかし、日本語力を評価することは全員に必要と思われるので、今後は自作のチェックリストを含め、アセスメントを検討していきたい。（評価の必要性と課題）
・子どもの言語力を把握することで、その後の指導計画に活かすことができる。（評価の必要性と課題）

小学部

・あくまで、子どもの実態把握の手段の一つとして扱わなければいけないと考えている。検査結果がその子の全体像の全てを表しているわけではないこと、指導の手がかりのために実施することを念頭にしたい。（課題）
・主観ではなく客観点な評価で、小学部の教員が小学部児童の実態を把握し、学部がまとまった考え方で指導にあたれることが望ましい。（課題）
・テストや検査の結果が授業に活かされていない。（課題）
・10 年程前から、聴覚以外の発達にも課題のある児童が増加してきた。一人ひとりの状態に合わせた指導方法を工夫する必要があるが、ニーズの見立てや評価が難しい。（課題）
・職員全員が検査を実施できるようにしたい。（課題）
・検査結果を指導に活かすことが大切である。（課題）
・客観的な評価は必要であるが、言語力は検査のみで測ることはできない。（課題）
・評価の活用の方法、どう教育活動に生かしていくかなどの方針を立てる時の分析の方法が課題である。（課題）
・語彙数が多い、文法を間違えないだけでなく、これらの知識力を〝統合して使えているか〟の評価を考えたい。（課題）

・必要性は感じているが、現段階では実施の予定はない。（課題）
・全員に、学年を決めて実施できれば良いが、多忙と人員不足のため、行えないでいる。（課題）
・評価を、教科書を使った指導に繋げにくい。（課題）
・客観性をもつ評価になっているかが課題。（課題）
・単一聴覚障害学級設置も間もないため、検討中。隣接医療施設で実施しているものもあり、その結果は共有できる。（課題）
・指導の成果、引き継ぎ資料等のため実施しているが、もっとしっかり分析する必要がある。（課題）
・J.COSS でほぼ満点を取れている児童について、次の段階にあたるような適切な文法力を測る検査ができておらず、検討中。（課題）
・読書力診断検査の誤答の分析を行い、それを日頃の国語科の指導に活かすことは有効だと考えているが、各担任任せとなっており、学部全体できちんと取りくめていない。（課題）"
・評価を意識して指導にあたっているかは、担任次第になっているというところが課題。（課題）
・客観的に児童の力を測ることは教員の指導を振り返り、次のステップへの指導の指針ともなる。ここのところ、学部としての継年変化をまとめていないので一度まとめる必要があると感じている。（評価の必要性と課題）
・児童の実態や成長の様子を捉えるため、日本語の評価を実施している。年度当初の評価を個別支援計画や年間指導計画に生かしている。検査結果の分析や部内における共通理解が深まることが望ましい。（評価の必要性と課題）
・実態把握の参考にしているが、各職員の意識化に繋がる。しかし、分野別の分析結果が出ても具体的アプローチにまで活用できていない点は課題。（評価の必要性と課題）
・児童の発達の様子を客観的に捉えるために必要である。しかし、学力テストについて県独自のものも実施しているため、学年によっては大きな負担となっている。（評価の必要性と課題）
・愛媛大学の先生から、テスト結果の読み取りについて講義を受けたり、小学部でも独自に分析を行ったりしているので、実態把握や指導に役立っている。日常会話や授業で考えていることと検査の結果がかなり違うこともあり驚いたこともあったので、評価をして、それを授業等に活かすための取り組みが必要だと思われる。（評価の必要性と課題）
・児童の課題を明らかにすることで、教師が系統立てて指導しやすくなる。また、ワークシート等を作成し、共有しやすくなる。しかし、評価できるテストの種類が少ない。（評価の必要性と課題）
・実態を把握し、指導に活かすために必要であると感じる。しかし、一方では検査をしっかり分析し、指導に活かせてない面もあるので、検査結果をどう扱っていくのか考えていかなければならないと感じる。（評価の必要性と課題）
・客観的な指標も必要であるし、接する機会が多い担任などの評価も、引き継いでいくことで、1つの評価としていく方法を作れると良い。（評価の必要性と課題）

中学部
・生徒に合った標準化されたものが必要である。（課題）
・実態を把握し、指導するために必要。（課題）
・読字力テストは漢字を読めても言葉の意味は分かっていない。また、使われる言葉も古い表現が多い。（課題）
・検査結果を一斉指導や個別指導の中でどのように生かすか。（課題）

・今年度、学部研究会の取組みの中で J.COSS を新たに試してみる。（課題）
・読みの躓きの段階や傾向を知ることは全教科の基本として必要と考える。（課題）
・評価の結果を、教科学習になかなか活かせない。（課題）
・評価には、生徒本来の姿が反映されていない一面がある。（課題）
・必要性はあると考えるが、個々に適したものを選択し、その検査等を行う時間の捻出が難しい。（課題）
・応答による検査は難しいので、指導者や保護者の観察による検査を実施している。（課題）
・評価を、それぞれの教科に落とし込んで、その教科特有の使い方、教科の言葉と合わせて指導することが難しく、職員の研修が必要。（課題）
・複数の検査の目的を理解して、活用していくことが難しい。（課題）
・解釈するためのスキルに教師の個人差がある。（課題）
・子どもの実態がわかり、授業で使用する教科書の読みなど、教員が指導に活用できる。評価を日本語の言語力を伸ばす指導に結びつけられていないことが課題である。（評価の必要性と課題）
・正しい日本語を身につけていくための評価は絶対に必要である。話せても書くことはまた違う。実態を把握して、指導に生かしていくことが大事であると考える。課題は検査を言語聴覚士に任せっきりになっていることと、十分に生かし切れていないことである。（評価の必要性と課題）

高等部

・現在、日本語の評価については、国語科を中心に行っているので、学校全体として、評価のあり方を検討する必要がある。（課題）
・語彙力、文法力、読解力に課題があるが、特に文章を読み取る力に課題がある。（課題）
・学習に必要な日本語の向上を目指して実態を把握し、目標を設定し、手立てを構築するためには、評価が必要である。評価について共通理解し、目標等を話し合う時間が十分でなく、統一した指導ができていないことが課題である。（課題）
・読み書きを含め、総合的に日本語力を評価し、系統的な指導に活かす必要があると思っている。（課題）
・指導者の日本語力を育むという視点の欠如。（課題）
・日本語能力は生徒によって差が大きい。一般教養としての日本語能力はどこまで求められるのかが判断に苦しむ。評価の結果と指導が直接結びつく検査等を選択することが難しい。（課題）
・学校全体でリーディングテストに取り組んでいるが、中学部生用までしかない。また、高等部内での明らかな能力の伸びは、このテストからは測れない。できれば、社会に出た時に必要な日本語の力を中心に評価し、指導に活かせるものがあるとよい。（課題）評価によって、この生徒には、わかり易い言い変えをして伝えようとの考えになりがちである。（課題）
・日本語の実態を捉えた上で、どのように指導に活用するか、検討していくことが課題である。（課題）
・手話を用いて授業を進めているとはいえ、各教科学習の評価は定期考査を含め、日本語を中心とした評価方法が中心である。生徒が手話の読み取り能力や手話表現が優れていても、日本語できちんと理解・表現ができる力をつけることが必要である。このことは卒業後の社会生活においても必要な力である。従って、生徒が日本語がどの程度理解でき、どの程度日本語で表現できるかという点を授業や読書力診断検査、読字力検定試験などで把握しているところである。把握の段階から、それを分析し、指導に活用する段階には到達していないという点が課題として挙げられ

る。（評価の必要性と課題）
・実態が様々であることから、評価は必要であるが、その必要性を学部間で共通理解し、指導に活用していくことが課題である。（評価の必要性と課題）
・実態把握においては、わかり易く、生徒たちが持っている力の様子が理解できるが、各教科の指導に具体的にどう活かすかが難しい。（評価の必要性と課題）
・客観的な評価は、実態把握の面でも指導の面でも必要である。しかし、現時点での読書力診断検査は中学部までのものであるので、高等部段階のものもあるとよい。（評価の必要性と課題）
・学習の意欲づけとして活用しているが、指導のための十分な時間確保が容易でない。（評価の必要性と課題）
・検査や評価の必要性は感じているが、教員数の少ない学校で、専門性のある教員は更に限られており、十分な検査が行えていないのが課題である。（評価の必要性と課題）
・実態把握のために必要である。しかし、指導には十分活かせていない。（評価の必要性と課題）

第６項　「日本語の言語力の状況を把握するための評価」のまとめと考察

日本語の言語力の状況を把握する方法について、名称等では、市販されているものを使用するのが 91.4%あった。活用の目的は、コミュニケーション評価と同様に、「実態把握」が 55.0%、「指導に活用」が 43.0%あった。学部内での評価の実施が 66.7%あり、実施の周期は、定期的と年に（　）回を加えると 81.8%あり、定常化が認められた。

評価対象児については、全員（44.9%）、決まった学年（18.9%）、選択した幼児児童生徒（36.2%）と、「全員」が多いものの判断が分かれた。

「選択した幼児児童生徒」の理由として、「可能な子ども」や「重複児以外」という記述も見られ、日本語の評価をどのようなもので行うと良いのか、学部や学校で異なっている状況が伺われた。その要因の一つに、聴覚障害児の日本語評価として、市販されているものを使用するのが 91.4%であり、聴覚障害児の特性に対応した日本語評価法の必要性が示唆された。

また、日本語の言語力の評価の必要性と課題の記述回答から、聴覚障害教育における日本語の指導は、教科指導の中核であり、多くの教師に強く意識されていることが伺われた。

第７項　手話の言語力の状況を把握するための評価

幼児児童生徒の手話の言語力の状況を把握する方法について、テスト・検査の名称等、活用の目的、実施の範囲、評価の内容、実施の周期、対象児の 6 つの欄を設け、それぞれ具体的な内容の自由記述による回答を求めた。また、名称等には「市販のテスト・検査・自作のテスト・検査」、活用の目的には、「実態把握のため・指導に活用のため・その他」、実施の範囲には、「学部内で実施・学部を超えて実施」、実施の周期には、「定期的に実施・年に数回実施・不定期に実施」、対象児には、「全員に実施・決まった学年に実施・選択した幼児児童生徒に実施・選択の理由（自由記述）」を示し、該当する事項に選択を求めた。

（1）名称等

各学部総数 28 の回答があり、市販 15（53.6%）、自作 13（46.4%）であった。手話の評価について市販の評価表が少なく、自作している状況があった。この中で、以下のような評価に関するテストや教材があった。「日本手話文法テスト（12）」、「手話検定（3）」「J.COSS 日本語理解テスト」等が行われていた。

(2) 活用の目的

各学部総数 45 の回答があり、実態把握 27（60.0%）、指導に活用 16（35.6%）、その他 2（4.4%）であった。その他として、「保護者支援」の記述があった。

(3) 実施の範囲

各学部総数 30 の回答があり、学部内 25（83.3%)、学部を超えて実施 5（16.7%）であった。83.3%が学部内で実施していた。

(4) 評価の内容

各学部総数 78 の回答があった。表 5-3-7 に、結果を示した。理解（33.3%）、表現（23.1%）語彙（20.5%）日本語対応手話の文法（11.5%）、日本語の文法（9.0%）の順で、理解の割合が全体の 1/3 を占めた。その他として「手指メディアを付けたときの発音（手指メディアなしでの発音も評価）」「５級の手話能力があるかどうか」が挙げられた。

表 5-3-7 評価の内容 N=78

理解	表現	語彙	日本手話の文法	日本語の文法	その他
26	18	16	9	7	2
33.3%	23.1%	20.5%	11.5%	9.0%	2.6%

(5) 実施の周期

各学部総数 44 の回答があり、定期的 15 (34.1%)、年に数回 15 (34.1%)、不定期 14 (31.8%) であった。定期的と年に数回を加えると 68.2%と実施率が高かった。

(6) 対象児

各学部総数 30 の回答があり、全員 11（36.7%)、決まった学年 6（20.0%)、選択した幼児児童生徒 13（43.3%）であった。「選択した幼児児童生徒」の理由として「日本手話による指導を希望している幼児のみが対象」、「手話付きスピーチを主なコミュニケーション手段としている幼児のみ」、「両親聾の家庭で、日本手話を主なコミュニケーション手段としているケース」、「就学前の手話力について、実態把握を行うため」、「手話理解の状態を知るため」、「日本手話グループの児童のみ実施」、「実態に応じて」、「主なコミュニケーションモードが手話のため」、「母語が手話の児童」、「日本語の文字を指文字で表現できる者が実施」、「希望性」、「検定のため希望者のみ」等の記述があった。

第８項 手話の評価の必要性や課題

手話の評価の必要性や課題について自由記述による回答を求めた。学部ごとに自由記述を分類した。表 5-3-8 に、手話の評価の必要性の学部ごとの結果を示す。

表 5-3-8 手話の評価の必要性

幼稚部	・手話を導入し、日常的に教員も子どもも使用しているが、客観的な手話力の評価はできていない。手話の表出は確認できるが、手話の理解力については、正確な実態把握が必要であると感じている。（評価の必要性）

・「手話力」という独立した形では行っていないが、「語彙チェックリスト」で、音声と手話の両方の理解をチェックするようにしている。（評価の必要性）
・現在は日本手話を活用している幼児がいないため、必要性を感じていないが、在籍している場合は手話の力を正しく判断するために評価は必要だと感じる。（評価の必要性）
・子どもの聴力、全般的な発達に応じて、聴覚口話のコミュニケーションを主としている場合、手話力評価は幼稚部段階では必要ないと思う。年令が上がって、読む、書く力が確立された上で、手話も身に付けた場合は、手話力評価も行ってもよいと思うが、現在の本校幼稚部では、必要性は感じられない。（評価の必要性）
・子ども自身にとっても、中・高生あたりは、手話力評価が必要なのかもしれない。（評価の必要性）
・幼児の実態に応じて、様々なコミュニケーション手段を活用している。手話はコミュニケーションの補助手段の１つであるので、特に手話力評価の必要性を感じていない。（評価の必要性）
・手話力だけを評価する必要性は感じていない。（評価の必要性）
・人工内耳で聴覚を活用している子どもが多く、手話の評価は必要な状況ではない。（評価の必要性）
・聴覚障害のある保護者からは、教員の手話力の向上を求められているが、現在子どもたちの手話力を評価することはできていない。（評価の必要性）
・手話を使っている幼児に対しては、観察の中で評価を行っている。（評価の必要性）
・教科指導を行うにあたって手話力について実態把握を行い、必要な支援を考えることができる。（評価の必要性）
・手話力の評価は行っていないが、客観的な評価の必要性は感じる。（評価の必要性）
・授業や生活場面全体を通して、幼児一人ひとりの手話力の把握に努めている。（評価の必要性）
・人工内耳装用児が増え、家庭では手話を使っていない幼児が増えている。そのため、手話が必要な幼児に対してや、全体での場面でしか手話を使わない幼児に対しては、手話力評価の必要性は感じない。（評価の必要性）
・使用したこともあったが、手話表現に地域差もあり、大まかな手話力の実態をつかむのにはいいが、時間をかけて評価するには、本校の場合は妥当でなかった。現在は、手話力評価は行っていない。（評価の必要性）
・今年度は、聴覚口話を主とする幼児と、重複障害幼児で構成されているために、手話の使用場面がほとんどないために評価できていない。幼児同士が日常的に手話を使う場合には、評価が必要である。（評価の必要性）
・幼児において手話力評価は難しい。（評価の必要性）
・現状、特に必要性を感じていない。（評価の必要性）

小学部
・必要に応じて手話を使うが、人工内耳装用児童も増え、あらゆる人とのコミュニケーション手段を用いることを小学生段階では考えており、手話力だけを把握する評価の必要性を感じていない。（評価の必要性）
・最近、聴覚口話の児童が増え、手話力評価の必要性はあまり感じていない。（評価の必要性）
・現在、手話を主なコミュニケーション手段にしている児童がいないため、必要性を感じていない。（評価の必要性）
・高学年に向けて、指文字や手話も使ってコミュニケーションができるようにと考えている。現在

は評価までは必要とはしていない。（評価の必要性）
・子ども同士で使っている手話はとてもあいまいで、正しい評価の必要は感じている。（評価の必要性）
・小学部では行なっておらず、中学部で行なっている。現状では、小学部段階での必要性は考えていない。（評価の必要性）
・健聴児の生活言語の評価を学童期に実施しないのと同様に必要性がわからない。学習言語としての手話力の評価をする必要があるのであれば、そういった必要性もあるのでしょうが、手話力を見る前に市販の学力テストでおよその学力は測れると思う。（評価の必要性）
・必要性を現段階では感じていない。（評価の必要性）
・母語が手話であっても手話が正しく使えてなかったり、手話での位置関係等の表現や読み取りは難しく、間違えて理解したりしているので、個々の手話力の評価は必要と考えられる。（評価の必要性）
・必要性を痛感しているが、実際にできていない状況。研修すべき内容が多岐にわたり、授業研究の時間を確保することが厳しい状況となっている。（評価の必要性）
・準ずる教育課程の児童に。主に手話や指文字を使っている子どもがいない為、手話力を評価するテスト等は実施していない。（評価の必要性）
・授業や生活場面を通して、児童の手話力を把握している。（評価の必要性）
・単一聴覚障害学級設置間もないため、検討中。（評価の必要性）
・児童の内言や、概念理解の程度を評価するために、手話力の評価は必要だが、本校の手指メディアは、スピーチ付きであることが前提のため、手話力のみの評価という考え方とは少し異なる。（評価の必要性）
・現段階では、あまり必要性を感じていない。（評価の必要性）
・コミュニケーションモードとして、どれぐらい使えているのかを知ることで、コミュニケーションの際に活用できる。（評価の必要性）
・家庭（保護者）のニーズで、評価までは踏み込めない部分がある。（評価の必要性）
・学部としては今のところ児童の手話力を評価すべきかという議論には至っていない。（評価の必要性）
・特に必要性を感じていないので、実施していない。（評価の必要性）
・教師側が手話力評価の方法を知らない。（評価の必要性）
・グレーゾーンにいる児童の手話力も評価できれば、重複認定の際に有効な判断の根拠としやすいかもしれない。（評価の必要性）
・現状等に必要性を感じていない。（評価の必要性）

中学部

・手話は聾者が自然に身につける言語であり、そこに「評価」という言葉は馴染まないと考える。ただ、使用する言語モードを越えて学習活動を行う場合や、学習場面で日本語と結びつけることを考えると、伸ばす必要があり、実態把握が必要であることは感じる。（評価の必要性）
・正確な手話でなかったり、内輪だけで通じている手話が多いので、できるだけ共通の手話を学ぶ必要がある。（評価の必要性）
・明晴学園のテスト（ＣＤ）を生徒に一部したことがあったが、存在をしらない。実施してみたい。（評価の必要性）
・手話力評価は必要であると思うが、これ以上研修等放課後の時間を確保することは難しい。特に

中学部は部活指導、生徒指導（教科指導）があり多忙である。（評価の必要性）

・手話力を評価する前に、日本語力、コミュニケーション力など総合的に評価することが求められている。生徒の実態差もあるが、正しく発信して伝える、正しく受信することができるようになるよう指導していくことが大切だと考える。（評価の必要性）
・現在の学校の方針上、必要を感じない。（評価の必要性）
・生徒の実態把握のため実施している。（評価の必要性）
・生徒の手話力については、授業や日常生活において、個々の実態に応じて、手話で会話をしているが、手話力評価についての必要性は感じないが、手話の表現方法が間違っている場合などは生徒に助言をしている。（評価の必要性）
・手話力の評価は日頃の生活で行う。（評価の必要性）
・手話表現にも地域や生活経験によって様々あり、コミュニケーションをよりよくするには、ある程度の統一性や、相手に合わせた手話の取得が必要なため、一定の基準を設けるには必要と思われる。（評価の必要性）

高等部

・生徒間のコミュニケーション力を高めるためにも手話は必要と考えるが、評価については、現段階ではその必要性を感じていない。（評価の必要性）
・現状として評価を行っていないが、生徒は教員の手話を見て覚えていく部分があるのは確かなので、手話力の向上とその評価は必要である。（評価の必要性）
・手話が生徒にどこまで通じているかを、２分間スピーチ（生徒が手話と口語で自分の興味のある事についてスピーチ）で生徒が聞き取り、メモをとったり、感想を書いたりして、確認している。あくまでも日本語を確認し、獲得することが大切。（評価の必要性）
・教員にとって、手話力の評価は必要だと感じている。（評価の必要性）
・教員より生徒の方が手話力が劣る場合は、最初の授業前に把握するために必要かもしれない。（評価の必要性）
・自分の手話力を知るためにも、また自身の課題を把握するためにも評価は必要だと感じる。（評価の必要性）
・正しい手話と手話言語の拡充のために評価は必要。（評価の必要性）
・聴力や教育歴、家庭環境等を考え、高等部において手話力の評価は行われていない。本校で使用している「手指メディア」の評価については、小学部と中学部で行っている。（評価の必要性）
・統一した手話を身につけ、誤解しないようにするため評価は必要である。（評価の必要性）
・重複障害の生徒やUターンで入学した生徒、教職員など、手話力の評価も考えなければならない時だと思う。（評価の必要性）
・ここ数年、普通中学校から入学してくる生徒が増え、聾学校で育った生徒とコミュニケーションや人間関係で課題が見られる。生徒の全体的な手話力の把握も重要視している。（評価の必要性）
・教員の異動が短くなり、手話に対して興味・関心が、教員が評価しようとするまで、高くならない。しかしながら、社会への段階である高等部では、それが課題であるとは捉えていない。（評価の必要性）
・手話力を評価する必要性は感じていないが、聾学校で生徒とコミュニケーションをとるための大切な手段であることは、ろう学校教員には認識しておいて欲しいと思う。（習得することを諦めない。どうしても難しい時には生徒に伝える手段（筆談、パワポ等視覚的手段）を準備する気持ちはもって欲しい。）（評価の必要性）

・聾学校高等部の生徒に適した、共通の手話力検査の必要性を感じる。（評価の必要性）

手話の評価の課題については、表 5-3-9 に学部ごとに結果を示す。なお、課題とともに、評価の必要性について書かれた回答も示す。

表 5-3-9　手話の評価の課題

幼稚部	・手話力を評価できる検査について、情報を得る必要がある。（課題） ・手話力の評価は特に行っていないが、今後必要になってくると考えられる。（課題） ・現在、評価を行っていないので、今後考えていきたい。（課題） ・日本語の言語力の評価に使用しているリストを使用して、語彙数と理解・表出を評価している。単語レベルでの評価に留まっている。（課題） ・今後の幼児の実態に応じて考えていく必要がある。（課題） ・手話を用いた指導方法や指導内容については、まだ系統的なものがなく、幼児あるいは教員の実情に応じて使用しているのが現状。評価に至るまでの活動計画や、使用にあたっての方針の策定などが課題と考える。（課題） ・発達がゆっくりなため、評価が難しいので、幼児手話辞典を使い、理解・表出を調べているが、それでよいのか分からない。他の方法も併せて知りたい。（課題） ・標準化された手話力評価に関する検査が出ていない。（課題） ・乳幼児期からのコミュニケーション（やりとり）や概念形成などを考えると、手話は必要ではあるが、本校では音声を併用した日本語対応手話を用いているため、評価はできない。（課題） ・実態は把握できるが、どう活用してよいかがわからない。何か指標のようなものがあるとよい。（課題） ・手話による指導を望まれている家庭もあり、手話指導に特化した領域の活動も行っている。指導をしているからには、手話の発達段階を理解し、今後はどのようなところを求めていくべきなのかを把握することが必要であると考える。ただし、受容・理解面の評価しかできず、表出・表現の評価ができるテストがないこと、そして多くが聴者である聾学校教員が手話に対する評価や指導をすることが容易ではないことが課題といえる。（評価の必要性と課題） ・日本語力と同様に手話力も評価することで、個々の幼児の言語面の特性がわかり、日々の関り方に活かせると思う。幼児の手話力評価の適切な検査が見つかっていない。（評価の必要性と課題） ・手話力の評価、理解の程度を知ることは必要であると考えているが、良い検査や評価方法が見つかっていない。（評価の必要性と課題） ・本校幼稚部では現在実施しているものはないが、本当は一番聾学校として必要なものかと思う。現状語彙表をチェックする際に理解言語と表出言語に分け、さらにそれを音声や手話で理解している。表出できる、といった分け方でチェックして、実態の把握に使用している。（評価の必要性） ・日本語ではない、手話力での評価は必要だと思うが、特にデフファミリーの家庭の場合、職員の手話力が向上していないので評価するのが難しい。聴覚障がいの職員との連携が必要になるのだろうか。（評価の必要性と課題）

・日本語の欄と同様。語彙中心の評価になる。特に日本手話を使用できるのは、ろうの教員に限られるので学部全体の評価は難しいと考えている。（評価の必要性と課題）

小学部

・今後の検討が必要。ただし、ろうの教員でも手話の文法、構造をきちんと身につけているとは限らない。評価をだれがどのように行うかが課題。（課題）
・評価できる教員が限定される。（課題）。
・子どもの手話の語彙力を正しく評価し、指導に繋げる能力の習得の必要性がある。（課題）
・標準化された検査が出ていない。（課題）
・手話力の実施できておらず、今後検討が必要である。（課題）
・手話力評価について今後研修を行っていきたい。（課題）
・課題は評価方法と時間の確保。（課題）
・自身の手話力を振り返り、更なるレベルアップを図る為には評価が必要、欠かせないと思う。しかし、現状の方法では不十分だと思う。（評価の必要性と課題）
・両親がろうで日本手話がメインの児童や、人工内耳で音声が得意な児童など多様な現状。書記日本語と同様に手話力の評価の重要性も感じるが、学部全体でのコンセンサスはまだ得られておらず、個々の担当の判断に留まっている。（評価の必要性と課題）
・経験年数の少ない職員が多く、児童だけでなく、指導に当たっている職員も手話力の評価には負荷を感じる。また、人工内耳の児童もいて音声でのやりとりも多く、手話力という視点は持ちにくい現状である。（評価の必要性と課題）
・評価があるにこしたことはないのかもしれないが、学校現場ではそういうことに時間や労力を注ぐより、日本語力や学力の実態把握や対策の研究実践に力を注ぎたい（時間が足りません）と思っている。どんな検査も結果を指導に生かすことが大切で、その点が課題だと思う。（評価の必要性と課題）

中学部

・手話を活用して、生徒とやりとりしたり授業を進めたりするのと、手話力を評価するということは、別のスキルが必要であり、誰もが客観的（主観的になりがち）な評価はできない。（できる人が限られている）（課題）
・本校は、乳幼児教育相談から、中学部までの学校である。日本語の力を育てるため、発達段階によって、コミュニケーション手段を考えて使用している。当然手話力を必要となる。中学部として必要性を感じている。しかし評価まではまだ考えられない状態。（課題）
・社会自立に向けて、生徒に身につけてほしいスキルは多様であり、手話力を評価する時間的なゆとりはあまりない。（課題）
・標準化された検査の実施が難しい。生活や学習の中でどのような手話を理解し、表現しているかを把握する程度である。（課題）
・標準化された検査が出ていない。（課題）
・単語レベルでの手話力の評価はできても、授業や生活などの会話レベルのものの手話の力は、さまざまな表現方法もあるため評価自体がなかなか難しいのではと思われる。（課題）
・手話力の評価は実施していない。手話力評価ができる教員がいない。（課題）
・評価は必要と考えているが、客観的な評価は実施できていない。（評価の必要性と課題）
・日本語の言語力を育てることが優先課題であり、手話力向上のための評価テストをする余裕がない。（評価の必要性と課題）
・それぞれが使う手話にも違いがあり、市販のテストでは判定が難しい面もある。（評価の必要性

と課題）

・手話の必要性については、職員間で共通認識できているが、評価にまで考えが及んでいないことが課題。（評価の必要性と課題）

・評価の必要性はあると思うが、評価方法が難しい。友だち同士の手話が多いので、一般的に通用しにくい面がある。（評価の必要性と課題）

・手話での会話を基準にする聾学校の教育があるが、生徒の中には指文字を多用してきた転入生もおり、難しい面もある。しかし、社会に出て、聾者の大人と協力し、交流する生徒達であるので、評価し、手話力向上を目指させたい。（評価の必要性と課題）

高等部

・研修する場面は多いが、自己評価になりがちで、きちんとした評価がしづらい。（課題）

・手話力を評価する方法として、一般的なものがない。（課題）

・生徒に対しての手話力評価については本校ではまだ実施できていない。（課題）

・手話検定等の機会の少なさ等があるが、実際評価については実施していない。（課題）

・手話力評価の必要性は感じるが、日々の学習や学校行事の準備その他の業務が多く、なかなか実施できないのが現状である。（課題）

・評価に使用できるものがない。（課題）

・評価できる教員がほとんどいない。（課題）

・生徒一人ひとりの手話力が異なることからも、手話力評価の必要性は実感している。しかし実践まで、学部として至っていない。手話に対する教員の意識の向上が課題であると考える。（評価の必要性と課題）

・手話での発信よりも受信（読みとり）の力が弱いと感じるので、正しく読みとりができるかどうかの客観的評価ができると良いとは思う。自立活動で読み取り練習をすることもあるが、評価は教員の主観によるところが大きい。（評価の必要性と課題）

・手話力が必要であることは間違いないが、評価については、どのように評価するのか、評価の基準がはっきりしないと何とも言えない。また、手話通訳者のように手話ができても、生徒（児童）は、その手話を知らない。また、その手話を言葉に替えても言葉の意味を理解していないなどの問題がある。（評価の必要性と課題）

・手話力評価に関する方法については、特別な取組（検査や調査等）は行っていない。授業や学校生活を通して生徒の手話力を把握しているところである。教員も手話に対する指導力に差があり、生徒に手話を指導できる者から、生徒から手話を教わって学習する者までまちまちであるのが実態であり、客観的な手話力評価の必要性を感じているところではあるが、どう評価したらよいかが手探りの状態であるのが実態である。この点については、他県の様子をお聞きしたいところである。（評価の必要性と課題）

・手話だけをとりあげた授業はなく、言語力やコミュニケーション力として、いろいろな表現方法について、総合的な評価を行っている。それだけをとりあげる必要性があるかどうかは疑問、しかし、手話を使っても通じないといった言語力の低い生徒は、そうした課題もある。（評価の必要性と課題）

第９項　「手話の言語力の状況を把握するための評価」のまとめと考察

手話の言語力の状況を把握する方法について、名称等を尋ねたが、この質問に対して、各学部総数で 28 の回答を得た。他の質問に比して回答数が相当少ないと言える。自作が 46.4%と回答があった。これは、手話の評価について市販の評価表が少ないことがある。自作の評価として、「チェックリストをもとにした手話発達リスト」、「語い表による基本語いのチェック」、「スピーチコンテスト」等が挙げられた。活用の目的は、実態把握（60.0%）、指導に活用（35.6%）と両者で 95%を越えた。実施の範囲では、学部内での実施が 83.3%であった。

評価内容（各学部総数 78）として、「理解（33.3%）」、「表現（23.1%）」「語彙（20.5%）」と言語としての手話の位置づけ評価がなされていた。また、「日本手話の文法（11.5.%）」、「日本語の文法（9.0%）」が挙げられ、評価内容や視点として、手話に関する捉えに相違があることが示唆された。 実施の周期は、定期的又は、年に数回が、学部内で 68.2%を越えた。対象児（各学部総数 30）は、全員が 36.7%であった。

次に、手話の評価の必要性と課題については、必要性、手話力、手話の言語力、日本語、コミュニケーション、実態把握、研修、指導等に関する話が回答に出てきた。

必要性については、「現在のところ特に必要は感じていない。」や「手話の言語評価は必要だと思うが、本校では現在のところできていない。」等の記述があった。

課題については、「手話力の評価、理解の程度を知ることは必要であると考えているが、良い検査や評価方法が見つかっていない。」「評価方法が難しい」「評価できる教員がいない。」等の記述があった。

なお、本調査において、国立特別支援教育総合研究所の聴覚障害教育研究班では「手話付きスピーチ」と「日本手話」について一応の定義付けをして回答を求めたが、「手話力」や「手話の言語力」については言及していない。

第１０項　教師の手話力向上のための評価の概要

教師の手話力向上のため、評価を用いている場合、その概要について自由記述による回答を求めた。手話の評価の課題については、学部ごとに「研修」「手話検定」「その他」に分類された。表 5-3-10 に各学部ごとに分類結果を示す。

表 5-3-10　教師の手話力向上のための評価の概要

幼稚部	・本自治体の教育委員会では「手話活用能力状況調査」を年に 1～２度実施している。本調査書は各自が習得している手話の語彙数や子どもたちと、どの程度やりとりができるかということを尺度（チェックリスト）に、５段階で自己評価することになっている。また、校内での手話研修会実施の際には、他者評価によりグルーピングをしたうえで研修を行うことがある。ただし、この場合は評価者（研修担当者）の主観によるものが多く、教員の手話力を把握するための客観的な指標は持ち合わせていない。（研修） ・毎日聴覚障がいのある教員と、学部全体で手話の研修を５分間行っている。学校全体の組織内に「手話研修委員会」をおき、そこを中心に研修内容を考え、月に１回程度手話研修会を実施している。（研修） ・教員は学校内外で様々な研修は受けているが、学校として評価は行っていない。（研修） ・職員の手話研修は行っているが、評価は特に実施していない。（研修） ・初任者（着任者）対象の手話研修を年間 15 回、手話力スキルアップをめざす手話研修を年間７回、研修支援部が計画実施している。（研修） ・研究研修部より全職員へ手話検定の薦めや手話通訳士の免許を取得するようにという話があった。しかし受験は各個人の判断に任され任意である。（手話検定） ・職員によっては、自主的に手話検定を受験している。（手話検定）" ・校内手話検定を実施。聴覚障害者協会や手話通訳士の協力を得、全国手話検定試験に準じた検定試験を毎年行い、評価をしている。（手話検定） ・個人的に手話通訳検定を受けたり、そのテキストで勉強したりする教師はいますが、全体的に評価をしていない。アンケートにより、４段階程度の自己評価アンケートは県の調査で行っている。（手話検定） ・学校全体としては、手話力認定試験を受験するように案内はしている。（手話検定） ・職員手話研修や手話検定（任意）（手話検定） ・教育委員会から示されている、手話の語彙数、表現、コミュニケーションの方法についての評価がある。（その他） ・評価することで教員のモチベーションがアップする教員もいると思うが、その反対に聾学校に対して嫌悪感をもつ教員も増えると思うので慎重に行なった方が良い。（その他） ・評価はしていない。日々の教育活動のなかで、教え合ったり気付きを交換したりして、教員の手話力を確かなものにするよう努めている。（その他）

小学部

・手話研修プログラムを活用した総合評価を行った。（研修）
・初任者（新着任）対象の手話研修を年間 15 回、手話力のスキルアップを目指す手話研修を年間 7 回、研修支援部が計画実施している。（研修）
・学校行事（始・終業式や文化祭等）での実際の挨拶について手話通訳の研修を行う等、実践に活かせる内容となっている。（研修）
・専門性向上のために、本校独自の専門研修体系表を用いて、手話検定の級を参考にして自己評価を行っている。（研修）
・外部講師を呼び、定期的に研修会を行い、手話力の向上を目指している。（研修）
・手話学習会を学部で今年度は２度行った。（研修）
・手話検定の受検や、地元の通訳養成講座に通い、登録通訳を目指すなど個々で進めている。今年度から、自治体の手話言語条例が制定され、自治体の主催による手話研修が始まった（それまでは学校が担っていた）。それを機に、評価の方法も広がるのではと期待したい。（研修）
・新着任の教師対象に、年 10 回の手話研修と、修了時に手話テストをし、評価している。（研修）
・手話を学びたい教師対象に、本校の聴覚障害がある教師や手話通訳士の資格のある教師や、外部の聴覚障害の講師を招いて研修会を開いている。（研修）
・職員朝会に、全教師による手話研修（手話による一言）を行っている。（研修）

・何人かの教員は、独自に手話検定試験を受験し、級をとっている。（手話検定）
・手話検定を受けようと管理職が呼びかけ、数名ですが受けている。（手話検定）
・手話検定などの紹介をしている。（手話検定）
・手話検定や講座等（手話検定）
・手話検定の受検（任意）（手話検定）
・全国手話検定に向けての全員による研修、受検。（手話検定）
・今年度より、学校全体で、いろいろな検定に取り組むことになり、希望者が学校で手話検定を受けられるようになった。まだ、実施していないので、結果を受けた評価には結びついていないが、今後、客観的な評価がわかることで、教師の手話力向上に繋がると思われる。（手話検定）
・手話検定の実施（本年度より）（手話検定）
・校内手話検定を実施している。（手話検定）
・個人的に手話検定を受検している教員も多い。（手話検定）
・共通理解（基準などの）が必要と感じる。（その他）
・手話活用能力把握アンケートがあった。（その他）
・自己評価のシート記入（単語（語彙）数等、自己評価）（その他）
・聴覚障害特別支援学校教員の日本手話活用状況調査を行った。（その他）
・学校内の聴覚障害の先生に任せている。（その他）
・小学部では授業のチェックリストを利用し、手話表現について評価している。（その他）

中学部

・週に１回、手話勉強会を実施している。（研修）
・職員朝会での手話研修（１０分程度）（研修）
・聴覚障害の職員による職員対象の手話研修（６０分）、特に評価は行っていないが、手話力向上のため研修を重ねている。（研修）
・評価という観点では数値化、可視化していないが、聴覚障害者にとって手話は大切という意識から、校内研修に日本手話講習を行っている。（研修）
・毎朝打合せで２つの手話を、年間７回、手話学習会を行っている。ただ評価についてはまだできていない状態。（研修）
・新人と異動して来た教員に、手話学習の場を持っている。そこでの目標は手話検定３級なので、３級を持っていることが多い。（研修）
・評価は用いていないが、初級者用の手話研修「初手研」を年間 15 回、上級者用の手話研修「上手研」（文化祭や卒業式での実際の手話通訳を研修）を年間７回行っている。（研修）

・今年度より教師の手話力向上のため、市販の手話検定を行うことになっている。希望者が受験することとしている。（手話検定）
・教員もできるだけ手話検定を受けるように呼びかけている。また、学習会を開いたり、毎朝当番制で、ワンポイント手話の学習に取り組んでいる。（手話検定）
・教師の手話力向上の評価は行っていないが、個人で自己の手話力について評価し、自主的、主体的に校内研修や校外で実施されている講座やサークルへ参加し、手話力の向上に努めている。また、個人の手話力を知るために手話検定などを紹介している。（手話検定）
・手話検定が何級かということが評価になる。（手話検定）
・自発的に手話検定を受ける。（手話検定）
・手話検定試験を全職員が受験し手話力向上を図っている。（手話検定）
・校内手話検定を実施し、手話力向上に向けて取り組んでいる。聴覚障害者協会に協力してもらい、筆記試験と面接を行っている。（手話検定）
・手話検定を受ける。（希望者のみ）（手話検定）
・担当教科を教えるにあたって、最低限必要な手話 30 こを書き出し、教員で相互評価する表を作って取り組んでいる。（その他）
・教師ごとに手話力が異なり、修正しながら行っているが、身につけた手話力を使えば授業が成り立つとは思えない。わかる授業、伝えられる内容をきちんとすることで、その上で手話を活用した授業をすれば、内容のある授業や、生徒とのコミュニケーションができると思う。（その他）
・年２回教育委員会が実施している「手話研修プログラム」を活用した総合評価がある。（その他）
・手話活用能力把握アンケート（教育委員会）がある。（その他）
・教育委員会から出ている手話研修プログラムを活用した総合評価がある。（その他）

高等部
・月に1回、職員全体による、手話学習会の実施。（研修）
・職員朝会時における、手話ワンポイントレッスンの実施。（研修）
・新着任者には、年度初めに12回程度研修を行い、夏季休業中に手話力テストを実施している。（研修）
・校内研修を通して手話単語や文法の学習をしているが、他県のように「全国手話検定試験」の受験を組織的に行ったりすることはしていない。個人的に手話サークルに通ったり、手話奉仕員養成講座に通ったり、検定試験を受験する者はいると思われるが、手話力向上のために校内での組織的な手話力評価は行っていない。（研修）。
・定期的な手話学習会の開催。（研修）
・特別支援部が週1回、朝会で簡単な表現を教えている。また、新規採用教員や他校種からの異動者対象に、手話学習会を開いている。最初の1年めの手話の向上が大切だと思う。（研修）
・教師の手話学習会は、定期的に行っているが、評価は行っていない。（研修）
・積極的な手話検定の受験の推奨をしている。（手話検定）
・評価は行っていないが、今年度は、全国手話検定の希望者を募って、本校を会場に団体受験する予定。（手話検定）
・手話検定の受検（希望者のみ）（手話検定）
・手話検定等、全員で取り組んでいるが、授業における教師の手話表現については、研究等で深めている部分はあるが、課題と考えている。（手話検定）
・手話検定に積極的に参加。（手話検定）
・毎月手話学習会を行い、今年度から教員が手話検定を受けることになっている。（手話検定）
・校内手話検定（全員参加）（手話検定）
・全国手話検定を受験するように薦めている。その合格によって、評価というより、教師の手話力の目安としている。（手話検定）

・教師の手話力についての評価は行っていない。授業における生徒アンケートで、「授業はわかりますか？」「困っていることはありますか？」のアンケートを取り、教師の手話についての意見を聞いている。（その他）

第１１項「教師の手話力向上のための評価の概要」のまとめと考察

手話の評価の課題については、回答数が多くなかった。教師の手話力に関しての評価を実施していない学部も多かった。

内容を見ると、研修では「手話研修会は実施しているが、評価は特にしていない。」という記述が多かった。また手話検定では「校内手話検定を実施。聴覚障害者協会や手話通訳士の協力を得、全国手話検定試験に準じた検定試験を毎年行い、評価をしている。」、「学校全体としては、手話力認定試験を受験するように案内はしている。」、「手話検定（任意）」、「個人的に手話検定を受検している教員も多い。」等が挙げられた。

また、今後、聴覚障害児が高等教育に進む事例が増加していくことを想定した場合、コミュニケーションベースだけはなく、発達段階に応じた思考の深まりや拡がりが一層求められる。このため、引き続き手話や「手話力」の在り方について十分議論する必要があると考えられる。

おわりに

本報告書は、聾学校における教材活用及びコミュニケーション手段に関する調査です。調査にあたっては、全国聾学校長会はじめ、平成 29 年度に全国聾学校長会に加盟する全ての聾学校 95 校に御協力をいただきました。本調査に多大なご協力をいただき深くお礼申し上げます。

調査の結果、教材活用及びコミュニケーション手段について、調査１、調査２を通して平成 24 年度の調査とほぼ同じ傾向が示されました。テストや検査の活用による評価については、学校現場で幼児児童生徒の実態に合わせ、自作教材等も作られ、評価をされていることが分かりました。

今回の報告については、すでに概要版を国立特別支援教育総合研究所ホームページに掲載しております。本報告書では、幼稚部から高等部における各教科の教材活用及びコミュニケーション手段の現状について、平成 24 年度との比較資料を別途巻末に掲載しました。また、自由記述欄では、多くの先生方にご意見をご記入いただき、過去、現在、そして今後の聴覚障害教育を考える貴重な情報を得ることができました。

聴覚障害教育研究班では、今後もさらに検討を深め、課題をより明確にし、今後の聴覚障害教育に有益な情報発信ができるよう努めていきたいと考えております。

最後になりますが、本報告書を多くの方々にご覧いただき、ご批正ご指導を賜れることができましたら幸甚です。

令和２年１月

国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

資料

資料１

特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する現状調査（調査１）についての24年度と29年度の比較

平成 24 年度調査と平成 29 年度調査の比較

基本情報

表 1-1　回答数

	小学部	中学部	高等部
平成 24 年度　有効回答数	150	120	96
平成 29 年度　有効回答数	155	120	99

※　有効回答…総回答数から教職、聾学校、学部経験年数が未記入のもの、複式学級担当、担当教育課程未記入のもの等を省いた。

表 1-2-1　教職・特別支援学校（聴覚障害）・小学部経験年数

平成 24 年度 N=150　　**平成 29 年度** N=155　　（数値は%）

	経験年数	0～3 未満	3～6 未満	6～9 未満	9～12 未満	12～15 未満	15～18 未満	18～21 未満	21 以上
平成 24 年度	教職	12	9.3	6.7	9.3	12.7	5.3	14.7	30
	聾学校	26	20	14.7	13.3	8.7	6	5.3	6
	小学部	30	23.3	12.8	13.3	6.7	5.3	3.3	5.3
平成 29 年度	教職	13.4	9.4	8.7	6.7	10.1	7.4	8.1	36.2
	聾学校	24.8	20.1	10.1	14.8	11.4	6.0	3.4	9.4
	小学部	30.6	19.7	15.0	10.9	10.9	3.4	0.7	8.8

表 1-2-2　教職・特別支援学校（聴覚障害）・中学部経験年数

平成 24 年度 N=120　　**平成 29 年度** N=120　　（数値は%）

	経験年数	0～3 未満	3～6 未満	6～9 未満	9～12 未満	12～15 未満	15～18 未満	18～21 未満	21 以上
平成 24 年度	教職	10	6.7	5.8	7.5	8.3	5	14.2	42.5
	聾学校	25.8	20.8	15.8	14.1	8.3	5.8	2.5	6.7
	中学部	34.2	26.7	20	5.8	7.5	0.8	0.8	4.2
平成 29 年度	教職	8.5	6.8	10.3	6.0	7.7	7.7	9.4	43.6
	聾学校	30.8	22.2	10.3	7.7	9.4	3.4	6.8	9.4
	中学部	39.2	24.2	18.3	6.7	4.2	2.5	3.3	1.7

表 1-2-3　教職・特別支援学校（聴覚障害）・高等部経験年数

平成 24 年度 N=96　　**平成 29 年度** N=99　　（数値は%）

	経験年数	0～3 未満	3～6 未満	6～9 未満	9～12 未満	12～15 未満	15～18 未満	18～21 未満	21 以上
平成 24 年度	教職	4.2	8.3	1	9.4	8.3	8.3	13.6	46.9
	聾学校	35.4	17.7	20.8	12.5	4.2	5.2	1.1	3.1
	高等部	29.2	19.8	13.5	13.5	7.3	6.3	2.1	8.3
平成 29 年度	教職	7.8	12.6	3.9	2.9	7.8	4.9	6.8	53.4
	聾学校	28.2	24.3	8.7	6.8	11.7	3.9	4.9	11.7
	高等部	29.3	21.2	14.1	13.1	9.1	5.1	4.0	4.0

表 1-3　担当（所属）

平成 24 年度　小学部 N＝150、中学部 N=120、高等部 N=96

平成 29 年度　小学部 N＝155、中学部 N=120、高等部 N=99　　（数値は%）

		学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
平成 24 年度	小学部	91.3	6.0	0	2.0	0.7
	中学部	43.3	22.5	5.0	24.2	5.0
	高等部	50.0	32.3	5.2	9.4	3.1
平成 29 年度	小学部	88.9	6.3	0.0	4.9	0.0
	中学部	52.2	21.2	5.3	13.3	8.0
	高等部	57.3	20.8	10.4	10.4	1.0

※　その他の回答…他学部所属

表 1-4　担当学年（いつも授業をしている学年）

平成 24 年度　小学部 N＝150、中学部 N=120、高等部 N=96

平成 29 年度　小学部 N＝155、中学部 N=120、高等部 N=99　　（数値は%）

		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	重複
平成 24 年度	小学部	19.3	18.7	18	14	12	10.7	7.3
	中学部	28.3	25.8	26.7	-	-	-	19.2
	高等部	27.1	27.1	27.1	-	-	-	18.7
平成 29 年度	小学部	22.6	20.0	17.4	12.3	10.3	8.4	9.7
	中学部	45.0	50.8	54.2	-	-	-	29.2
	高等部	48.5	50.5	45.5	-	-	-	24.2

表 1-5　学習グループ（学級）の児童生徒数

平成 24 年度　小学部 N＝150、中学部 N=120、高等部 N=96

平成 29 年度　小学部 N＝140、中学部 N=112、高等部 N=99　　（数値は%）

		1 名	2 名	3 名	4 名	5 名	6 名	7 名	8 名以上
平成 24 年度	小学部	27.6	20.0	17.2	20.7	9.7	3.4	0.7	0.7
	中学部	15.0	20.8	15.8	15.8	20.8	8.3	1.7	1.7
	高等部	12.5	19.8	15.6	24.0	13.5	4.2	8.3	2.1
平成 29 年度	小学部	32.9	22.9	11.4	15.0	8.6	7.9	1.4	0.0
	中学部	13.4	19.6	22.3	17.9	13.4	9.8	2.7	0.9
	高等部	12.1	14.1	24.2	15.2	23.2	5.1	3.0	1.0

国語科

表 1-6　国語科の教育課程

平成 24 年度　小学部 N＝150、中学部 N=120、高等部 N=96

平成 29 年度　小学部 N＝155、中学部 N=120、高等部 N=99　　（数値は%）

		準ずる	下学年適用	知的代替	自立主
平成 24 年度	小学部	81.3	10.7	6.0	2.0
	中学部	85.0	10.8	4.2	0
	高等部	90.6	5.2	4.2	0
平成 29 年度	小学部	79.2	13.0	6.5	1.3
	中学部	77.2	14.2	8.7	0
	高等部	85.0	3.7	11.2	0

表 1-7　使用コミュニケーション手段

平成 24 年度　小学部 N＝150、中学部 N=120、高等部 N=96

平成 29 年度　小学部 N＝155、中学部 N=120、高等部 N=99

（複数回答・数値は%）

		聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
平成 24 年度	小学部	62.7	78.0	14.0	35.3	14.0	56.0	17.3
	中学部	60.0	89.2	12.5	47.5	2.5	72.5	8.0
	高等部	56.3	93.8	10.4	60.4	1.0	78.1	12.5
平成 29 年度	小学部	60.0	87.1	8.4	38.7	10.3	70.3	22.6
	中学部	55.0	87.5	14.2	50.0	4.2	67.5	10.0
	高等部	60.6	94.9	6.1	45.5	0.0	73.7	5.1

表 1-8-1　教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）　（数値は%）

平成 24 年度調査

	教材の有無				活用の頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 検定教科書	150	97.5	1.3	1.2	150	89.3	4	6.7	150	74	18.7	1.3	6
2 聾学校用教科書	148	92.6	3.4	4	149	14.1	51	34.9	142	38.7	28.9	1.4	31
3 文部科学省著作本	138	67.4	3.6	29	127	0.8	15	84.2	116	3.4	10.3	3.4	82.9
4 附則の９条本	127	49.6	8.7	41.7	120	3.3	10.8	85.9	109	6.4	5.5	2.8	85.3
5 電子教科書	139	27.3	1.4	71.3	113	8	15.9	76.1	109	18.4	4.6	1.8	75.2
6 市販のワークブック、漢字ドリル	150	65.8	33.5	0.7	150	80	16	4	150	71.3	24	2	2.7
7 日本語指導用教材（教科書、問題集）	135	39.3	31.9	28.8	129	25.6	41.9	32.5	121	27.3	28.1	11.6	33
8 国語辞典、漢和辞典（紙媒体）	150	94.2	4.5	1.3	150	45.3	34.7	20	144	71.5	9.7	0.7	18.1
9 電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	140	3.4	16.4	80.2	114	3.5	6.1	90.4	108	7.4	0	0.9	91.7
10 手話辞典（紙媒体、電子媒体）	150	86.8	11.3	1.9	150	21.3	54	24.7	138	56.5	13	1.4	29.1
11 ことば絵じてん	149	92.6	6.7	0.7	119	16.8	65.6	17.6	137	68.6	16	2.9	12.5
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	147	100	0	0	150	31.3	63.3	5.4	147	80.3	14.3	0	5.4
13 絵本（行事、物語、説明等）	144	98.6	0.7	0.7	121	28.9	57.9	13.2	143	70.6	18.9	0.7	9.8
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	143	94.4	0	5.6	150	9.3	36	54.7	135	37	10.3	1.5	51.2
15 写真（人物、場所、活動場面等）	148	80.4	16.2	3.4	150	54	44.7	1.3	147	45.6	39.5	12.9	2
16 動画（ビデオカメラで撮影したもの）	141	68.8	12.8	18.4	150	8	60.7	31.3	140	38.6	20	8.6	32.8
17 カレンダー	146	89.7	9.6	0.7	150	50	40.7	9.3	148	60.8	20.9	8.8	9.5
18 絵日記（スケッチブックの記録等も）	137	57.7	32.8	9.5	147	43.5	32	24.5	138	43.5	21	10.9	24.6
19 新聞	147	88.4	9.5	2.1	150	12	56	32	144	36.8	30.6	2.1	30.5
20 広告、チラシ、ポスター	140	79.3	13.6	7.1	148	4.1	48.7	47.3	142	30.3	22.5	0.7	46.5
21 雑誌（幼児・児童向け、その他）	138	49.3	23.9	26.8	139	4.3	42.5	53.2	131	30.5	15.3	1.5	52.7
22 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	142	73.2	12.7	14.1	138	4.4	52.9	42.8	139	43.9	10.8	0.7	44.6
23 手話・字幕付きＤＶＤ	140	69.3	8.6	22.1	142	4.9	35.9	59.2	131	38.2	5.3	0.8	55.7
24 インターネット上の Web 情報	141	90.1	5.7	4.2	150	25.3	51.3	23.4	144	38.2	35.4	1.4	25

平成 29 年度調査

	教材の有無				活用の頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	な い	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 検定教科書	142	100.0	0.0	0.0	148	89.2	4.7	6.1	146	69.2	24.7	1.4	4.8
2 聾学校用教科書	142	89.4	3.5	7.0	140	12.1	48.6	39.3	126	34.1	29.4	0.8	35.7
3 文部科学省著作本	139	66.9	4.3	28.8	132	3.8	6.1	90.2	114	5.3	3.5	1.8	89.5
4 附則の 9 条本	131	48.9	12.2	38.9	118	2.5	10.2	87.3	108	5.6	7.4	0.9	86.1
5 電子教科書	138	29.7	0.0	70.3	113	10.6	13.3	76.1	110	20.9	2.7	0.0	76.4
6 市販のワークブック、漢字ドリル	140	75.0	25.0	0.0	144	84.7	13.9	1.4	141	75.9	22.0	0.7	1.4
7 日本語指導用教材（教科書、問題集）	134	48.5	29.1	22.4	128	23.4	50.8	25.8	123	35.0	36.6	3.3	25.2
8 国語辞典、漢和辞典(紙媒体)	139	95.7	4.3	0.0	146	39.7	42.5	17.8	137	77.4	5.1	0.7	16.8
9 電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	134	6.7	26.1	67.2	120	1.7	10.8	87.5	108	12.0	1.9	0.9	85.2
10 手話辞典（紙媒体、電子媒体）	139	89.9	8.6	1.4	145	33.1	46.2	20.7	132	68.2	12.1	0.8	18.9
11 ことば絵じてん	141	91.5	7.1	1.4	145	44.8	40.7	14.5	135	80.0	7.4	0.7	11.9
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	138	99.3	0.7	0.0	145	36.6	55.2	8.3	141	83.7	9.2	0.7	6.4
13 絵本（行事、物語、説明等）	141	97.2	2.8	0.0	146	32.2	61.6	6.2	142	80.3	14.1	0.0	5.6
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	138	91.3	1.4	7.2	144	7.6	38.9	53.5	128	46.9	3.9	0.8	48.4
15 写真（人物、場所、活動場面等）	141	75.2	22.0	2.8	145	62.8	32.4	4.8	142	43.0	36.6	16.2	4.2
16 動画(ビデオカメラで撮影したもの)	140	67.1	17.9	15.0	141	17.7	52.5	29.8	134	39.6	23.9	10.4	26.1
17 カレンダー	140	81.4	17.9	0.7	143	58.0	37.1	4.9	137	59.1	32.1	5.1	3.6
18 絵日記(スケッチブックの記録等も)	139	60.4	37.4	2.2	142	68.3	24.6	7.0	137	56.9	25.5	10.2	7.3
19 新聞	142	90.1	4.9	4.9	142	14.8	52.1	33.1	136	34.6	33.1	1.5	30.9
20 広告、チラシ、ポスター	138	85.5	10.9	3.6	142	4.2	44.4	51.4	130	32.3	19.2	1.5	46.9
21 雑誌(幼児･児童向け、その他)	134	41.0	15.7	43.3	130	2.3	26.2	71.5	121	21.5	8.3	0.8	69.4
22 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	137	59.9	8.8	31.4	131	3.1	34.4	62.6	123	34.1	4.9	0.8	60.2
23 手話･字幕付きＤＶＤ	138	56.5	8.0	35.5	130	0.0	26.9	73.1	123	28.5	0.8	1.6	69.1
24 インターネット上の Web 情報	137	85.4	5.8	8.8	143	28.0	50.3	21.7	136	40.4	36.8	2.2	20.6
25 タブレット PC におけるアプリケーション	138	76.1	7.2	16.7	141	7.8	33.3	58.9	128	35.2	8.6	0.8	55.5

表 1-8-2　教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）
平成 24 年度調査

（数値は%）

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				
		N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1	検定教科書	120	100	0	0	118	93.2	3.39	3.39	116	74.1	22.4	0	3.45
2	聾学校用教科書（中学部言語、小学部用）	111	86.5	2.7	10.8	110	4.55	34.5	60.9	97	23.7	21.6	0	54.6
3	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆国語☆☆☆☆）	100	63	3	34	99	5.05	14.1	80.8	82	6.1	14.6	2.44	76.8
4	附則の９条本（旧１０７条本）	100	46	16	38	91	4.4	11	84.6	77	9.09	9.09	0	81.8
5	電子教科書（検定教科書対応）	101	12.9	0.99	86.1	82	2.44	11	86.6	71	9.86	2.82	0	87.3
6	市販のワークブック、漢字ドリル	114	61.4	36.8	1.75	116	67.2	29.3	3.45	109	65.1	30.3	2.75	1.83
7	日本語指導用教材（教科書、問題集）	100	26	31	43	90	12.2	36.7	51.1	84	21.4	22.6	5.95	50
8	国語辞典、漢和辞典（紙媒体）	115	93.9	6.09	0	117	61.5	36.8	1.71	111	95.5	2.7	0	1.8
9	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	101	4.95	42.6	52.5	93	17.2	18.3	64.5	104	30.8	0.96	0	68.3
10	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	110	97.3	2.73	0	114	18.4	54.4	27.2	107	70.1	3.74	0	26.2
11	ことば絵じてん	108	87	4.63	8.33	109	5.5	37.6	56.9	107	34.6	7.48	0.93	57
12	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	107	97.2	1.87	0.93	110	9.09	49.1	41.8	106	48.1	8.49	0.94	42.5
13	絵本（行事、物語、説明等）	107	90.7	4.67	4.67	111	11.7	42.3	45.9	107	36.4	15.9	0	47.7
14	紙芝居（行事、物語、説明等）	102	77.5	2.94	19.6	106	3.77	15.1	81.1	102	8.82	3.92	0.98	86.3
15	写真（人物、場所、活動場面等）	107	71	21.5	7.48	111	26.1	56.8	17.1	105	32.4	39	7.62	21
16	動画（ビデオカメラで撮影したもの）	103	61.2	16.5	22.3	107	8.41	36.4	55.1	108	26.9	13	3.7	56.5
17	カレンダー	103	92.2	5.83	1.94	106	18.9	42.5	38.7	101	37.6	15.8	2.97	43.6
18	掛け図	103	68	1.94	30.1	108	5.56	17.6	76.9	105	12.4	5.71	1.9	80
19	新聞	105	90.5	5.71	3.81	112	19.6	67	13.4	104	40.4	42.3	0.96	16.3
20	広告、チラシ、ポスター	101	77.2	10.9	11.9	104	9.62	35.6	54.8	100	22	20	1	57
21	雑誌	102	52.9	25.5	21.6	107	5.61	36.4	57.9	103	17.5	21.4	0	61.2
22	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	101	61.4	17.8	20.8	110	9.09	35.5	55.5	107	28	12.1	2.8	57
23	手話・字幕付きＤＶＤ※	103	74.8	10.7	14.6	106	5.66	37.7	56.6	103	28.2	10.7	1.94	59.2
24	インターネット上の Web 情報	104	84.6	10.6	4.81	109	18.3	54.1	27.5	107	31.8	38.3	0.93	29

平成 29 年度調査

（数値は%）

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				
		N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1	検定教科書	114	97.4	1.8	0.9	117	88.9	4.3	6.8	112	67.9	26.8	0.0	5.4
2	聾学校用教科書	111	84.7	6.3	9.0	110	3.6	38.2	58.2	104	20.2	22.1	1.9	55.8
3	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆）	105	70.5	2.9	26.7	103	3.9	25.2	70.9	100	9.0	20.0	1.0	70.0
4	附則の９条本（旧１０７条本）	100	44.0	3.0	53.0	93	2.2	19.4	78.5	90	10.0	8.9	2.2	78.9
5	電子教科書（検定教科書対応）	104	25.0	0.0	75.0	92	9.8	9.8	80.4	90	17.8	2.2	0.0	80.0
6	市販のワークブック、漢字ドリル	111	70.3	27.9	1.8	114	65.8	31.6	2.6	112	65.2	30.4	2.7	1.8
7	日本語指導用教材（教科書、問題集）	106	36.8	23.6	39.6	101	9.9	34.7	55.4	96	25.0	19.8	3.1	52.1
8	国語辞典、漢和辞典（紙媒体）	112	95.5	4.5	0.0	116	53.4	41.4	5.2	115	93.0	2.6	0.0	4.3
9	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	110	3.6	33.6	62.7	102	11.8	19.6	68.6	98	31.6	1.0	0.0	67.3
10	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	113	90.3	7.1	2.7	113	25.7	47.8	26.5	109	67.9	6.4	0.9	24.8
11	ことば絵じてん	111	86.5	4.5	9.0	108	6.5	33.3	60.2	101	32.7	9.9	0.0	57.4
12	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	110	96.4	0.9	2.7	111	4.5	44.1	51.4	105	46.7	6.7	0.0	46.7
13	絵本（行事、物語、説明等）	111	96.4	0.9	2.7	112	3.6	41.1	55.4	103	37.9	8.7	1.0	52.4
14	紙芝居（行事、物語、説明等）	109	80.7	0.9	18.3	110	1.8	11.8	86.4	101	12.9	3.0	0.0	84.2
15	写真（人物、場所、活動場面等）	109	73.4	11.0	15.6	109	25.7	49.5	24.8	104	26.0	38.5	9.6	26.0
16	動画（ビデオカメラで撮影したもの）	109	67.0	9.2	23.9	106	9.4	44.3	46.2	103	24.3	23.3	6.8	45.6
17	カレンダー	113	95.6	3.5	0.9	110	20.0	32.7	47.3	104	47.1	8.7	0.0	44.2
18	日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	109	54.1	0.9	45.0	103	2.9	9.7	87.4	97	10.3	4.1	2.1	83.5
19	新聞	111	88.3	5.4	6.3	112	17.0	55.4	27.7	110	28.2	43.6	0.9	27.3
20	広告、チラシ、ポスター	111	75.7	11.7	12.6	112	1.8	33.9	64.3	104	17.3	18.3	1.9	62.5
21	雑誌（幼児・児童向け、その他）	107	51.4	15.9	32.7	105	1.9	25.7	72.4	100	15.0	15.0	1.0	69.0
22	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	109	67.9	10.1	22.0	110	2.7	38.2	59.1	107	30.8	7.5	1.9	59.8
23	手話・字幕付きＤＶＤ	106	66.0	6.6	27.4	108	1.9	33.3	64.8	106	29.2	4.7	0.9	65.1
24	インターネット上のWeb情報	111	85.6	7.2	7.2	112	21.4	62.5	16.1	107	39.3	43.9	0.9	15.9
25	タブレットPCにおけるｱﾌﾟﾘｹｰｼｮﾝ	108	78.7	5.6	15.7	109	9.2	34.9	56.0	103	38.8	5.8	1.0	54.4

表 1-8-3　教科書等の教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）
平成 24 年度調査

（数値は%）

		教材の有無				活用頻度				活用の状況				
		N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1	検定教科書	95	99	0	1	95	88	6	5	93	82	12	1	5
2	聾学校用教科書	86	60	3	36	89	4	6	90	87	8	0	0	92
3	文部科学省著作教科書	92	54	7	39	93	3	6	90	92	4	5	1	89
4	附則の９条本	91	45	3	52	89	2	9	89	85	5	4	1	91
5	電子教科書	86	7	0	93	89	1	3	96	85	0	1	0	99
6	市販のワークブック､漢字ドリル	94	63	36	1	90	60	36	4	85	49	46	0	5
7	日本語指導用教材（教科書、問題集）	85	40	28	32	87	11	40	48	82	12	33	4	51
8	国語辞典、漢和辞典（紙媒体）	94	83	17	0	92	68	30	1	86	99	0	0	1
9	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	93	4	56	40	91	21	25	54	88	43	0	0	57
10	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	92	96	4	0	89	26	53	21	83	70	7	0	23
11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	91	95	3	2	89	3	57	39	87	46	14	0	40
14	写真（人物、場所、活動場面等）	92	58	29	13	89	11	62	27	85	29	35	8	27
15	動画(ビデオカメラで撮影したもの)	90	46	17	38	90	1	36	63	86	15	15	6	64
16	カレンダー	89	81	13	6	90	13	36	51	89	37	8	3	52
17	掛け図	87	54	0	46	89	1	15	84	88	14	0	0	86
18	新聞	91	87	10	3	92	26	63	11	87	34	51	2	13
19	広告、チラシ、ポスター	89	80	10	10	91	3	40	57	89	20	18	2	60
20	雑誌	87	48	23	29	92	2	42	55	88	18	22	1	59
21	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	88	64	22	15	90	2	52	46	84	33	15	0	51
22	手話・字幕付きＤＶＤ	87	70	14	16	91	4	42	54	87	32	10	0	57
23	インターネット上の Web 情報	87	91	8	1	90	22	62	16	85	40	44	0	16

平成 29 年度調査

（数値は%）

		教材の有無				活用頻度				活用の状況			
		N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1	検定教科書	99	97.0	0.0	3.0	101	92.1	3.0	5.0	97	75.3	18.6	3.1	3.1
2	聾学校用教科書（中学部言語、小学部用）	84	65.5	0.0	34.5	78	0.0	16.7	83.3	69	8.7	10.1	0.0	81.2
3	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆国語☆☆☆☆）	87	65.5	2.3	32.2	75	1.3	9.3	89.3	66	4.5	7.6	0.0	87.9
4	附則の９条本（旧１０７条本）	83	53.0	4.8	42.2	77	3.9	15.6	80.5	68	1.5	14.7	2.9	80.9
5	電子教科書（検定教科書対応）	90	30.0	0.0	70.0	67	6.0	16.4	77.6	64	18.8	4.7	0.0	76.6
6	市販のワークブック、漢字ドリル	96	76.0	21.9	2.1	101	41.6	52.5	5.9	99	59.6	33.3	4.0	3.0
7	日本語指導用教材（教科書、問題集）	90	48.9	15.6	35.6	82	12.2	43.9	43.9	76	30.3	25.0	1.3	43.4
8	国語辞典、漢和辞典（紙媒体）	97	90.7	7.2	2.1	100	57.0	39.0	4.0	95	93.7	2.1	0.0	4.2
9	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）	95	5.3	55.8	38.9	83	32.5	32.5	34.9	80	66.3	1.3	0.0	32.5
10	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	97	84.5	11.3	4.1	99	25.3	49.5	25.3	89	83.1	0.0	0.0	16.9
11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	97	88.7	8.2	3.1	97	1.0	59.8	39.2	83	59.0	9.6	0.0	31.3
12	写真（人物、場所、活動場面等）	89	64.0	22.5	13.5	89	13.5	65.2	21.3	79	43.0	30.4	8.9	17.7
13	動画（ビデオカメラで撮影したもの）	90	50.0	20.0	30.0	86	1.2	44.2	54.7	69	26.1	18.8	7.2	47.8
14	カレンダー	96	87.5	9.4	3.1	96	8.3	49.0	42.7	82	58.5	9.8	0.0	31.7
15	掛け図	92	44.6	0.0	55.4	82	0.0	13.4	86.6	66	13.6	3.0	0.0	83.3
16	新聞	99	91.9	4.0	4.0	99	22.2	59.6	18.2	89	39.3	46.1	1.1	13.5
17	広告、チラシ、ポスター	93	80.6	5.4	14.0	91	2.2	35.2	62.6	78	24.4	17.9	0.0	57.7
18	雑誌	91	52.7	14.3	33.0	85	0.0	37.6	62.4	70	22.9	17.1	1.4	58.6
19	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	90	58.9	18.9	22.2	87	0.0	44.8	55.2	73	35.6	13.7	0.0	50.7
20	手話・字幕付きＤＶＤ	90	66.7	4.4	28.9	87	1.1	40.2	58.6	72	38.9	9.7	0.0	51.4
21	インターネット上の Web 情報	97	82.5	11.3	6.2	100	22.0	65.0	13.0	92	40.2	44.6	3.3	12.0
22	タブレット PC におけるアプリケーション	91	72.5	9.9	17.6	93	10.8	36.6	52.7	76	44.7	6.6	0.0	48.7

表 1-8-4　小学部国語科で活用する教科書等の自作教材等

平成 24 年度調査

N=38　(　)内は回答数

A　使途		B　教材例	C　用例等
教科書の内容に関する教材（8）		手話 DVD	物語や説明文を手話表現したもの
		本文や挿絵の拡大版	
		物語スライド（パワーポイント）	物語の場面毎にスライドを作成、登場人物の動きも提示する
		リライト教材文	物語文の読み取り､概要把握のため導入で活用、ルビ付きにする
教科書の内容理解を促すための教材（19）	文章の内容理解	パネルシアター	導入で見る活動で使用
		お面	動作化で使用
		写真、絵カード	本文の意味理解のため
		模型	説明文の読み取りで操作する
	語彙／漢字の理解と定着	言葉プリント	単元から語彙を抽出し、写真や絵を添えて解説したもの
		漢字プリント	漢字の練習、用例を書く
		言葉絵カード	絵と裏に名称と文例
		言葉学習用プリント	難語句の意味と短文作り、ひらがなやカタカナ練習用、濁音プリント
		言葉ノート	全教科共通で新出語句の意味と使い方を書く
	読解	ワークシート	学習した内容の理解､学習の流れの理解､場面の様子、人物の行動や気持ち､実験と結果､確認や宿題用の読解等
発展や補助のための教材（1）		作文集、読書感想文集、新聞や感想文の書き方の本	過去の作品として参考にする、教材文として活用
国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材（10）		作文メモノート	作文のためのメモ帳
		絵日記	毎日の体験を写真と文章でまとめる
		生活文	身近な出来事やニュースを読み取る
		新聞ノート	記事の要旨と感想、記事のスクラップ
		ひらがなカルタ、パズル	五十音の学習
		なぞり型パズル（iPad）	漢字学習用アプリ
		文法学習教材	５Ｗ１Ｈ、動作語、文の構造、動詞の活用、助詞等

平成 29 年度調査

N=61　(　)内は回答数

A　使途	B　教材名（品名）	C　用例等
教科書の内容に関する教材(12)	手話 DVD	・朝の会時に、手話で歌を歌っている。
	本文や挿絵の拡大版	・教科書対応掛図で挿絵を大きく見せている。 ・黒板に貼り、音読したり内容読解に使用。 ・児童がわからない言葉や言い回し等を拡大コピーに書きこみながら確認する。また内容の読みとり、読解にも活用する。（3） ・電子教科書でそのまま出すと読みとりがむずかしいため一文ずつ分かち書きでディスプレイに出す。（2）

		パワーポイントで作成した教材	・教科書からダウンロードし、絵や写真をつけ加え、内容を分かりやすくして提示する。
		リライト教材文	・漢字に変換した方が読みやすい子のために。 ・音読練習のために。
		電子絵本	・絵本を取り込んだものにリライトした文をつける。
教科書の内容理解を促すための教材（3）	文章の内容理解	紙芝居	・教科書の物語の単元の第１時に、挿絵を厚紙にコピーした紙芝居の読み聞かせを行う。（個別の授業のときのみ）
		ペープサート	・文章の登場人物の関係や心情をつかむために、主人公など、直接手にして動かしながら心情や物語の展開をつかんでいる。
		物語の絵本や図鑑	・挿絵をカラーコピーして提示する。
	語彙／漢字の理解と定着	言葉プリント	・難語句の意味を確認する。 ・イラストも入れ、視覚的にわかりやすくしている。。 ・単元ごとにねらいに対応したプリントを作っている。 ・単元ごとに覚えてほしい言葉や内容の理解度を測るための語句の抜き出しなど。 ・ことばの視写 ・イラストの下に単語を答えるようにしたプリント。実態に合わせて、枠の数をかえたり、イラストを変える。 ・テストの代わりに使用。意味調べ。
		漢字プリント	・漢字練習や読み取りに使う。 ・画数、読み方、その漢字を使った言葉や文を書かせている。
		漢字の学習	・身近な漢字について、１画目は赤、２画目は青、３画目は緑、４画目は黄と決めて色で分けている。その漢字のイメージのイラストも入れてイメージしやすくしている。（4
		言葉カード	・画用紙の表に言葉、裏にその意味を書いて掲示し、毎時間確認する。その場合、意味を見せて言葉を言わせることから始め、慣れてきたら言葉を見せて、意味を言わせる。 ・その時間に理解させたい言葉や新出語彙などをその場で書く。児童によってイラストをつけたり、口形図や手話の絵を加える。
		難語句教材	・定着するようにする。

	言葉絵カード	・言葉の意味や状況を確認する場面で使う。言葉の意味にあたる絵や写真を、言葉と一緒に載せたり、言葉を使った文を載せたりする。
	単語カード（絵カード）	・表にイラスト、裏に言葉や意味を載せたもの。 ・難語句の意味や絵・手話などが記入してある。難語句の学習や教材文の学習の中で活用する。 ・イメージ化を図るため（ことばの定着のため）
	漢字カード	・既習の漢字の読みを確認する場面で使う。授業の導入で 10 問程度実施する。漢字（表）を見せ、読み（裏）を確認する。
	音読カード	・家庭での音読の励みと、取り組みを自己評価できるために活用している。
	言葉の練習帳（スケッチブック使用）	・教科書に出てくる言葉の読みや意味、使い方を書き、それをページの一部をカットして、開くと答えが書いてあるクイズ形式のもの。
	動詞の活用表（各学年学部で作成）	・教科書に出てくる動詞のリストをもとに、活用について学習させ、チェックしている。
読解	ワークシート	・読み取ったことを簡単に分かりやすくまとめる。 ・教科書の内容に沿って、自作プリントを作成し、まとめとして使う。 ・教材文をコピーして、さらに、問題や吹き出し等を書き加えて、ワークにしたもの。教材とノートを一体化したもの。 ・時系列に５Ｗ１Ｈを質問して、あらすじを理解させたりするのに利用している。 ・毎時間プリントを本人の実態やねらいに合うように作成して使用。 ・課題の解き方や考え方を理解させるために構造化したもの。さらに、児童が繰り返し練習できるように自作したドリル。 ・授業や宿題で活用し、ことばの定着を図っている。
発展や補助のための教材（2）	作文集、読書感想文集、新聞や感想文の書き方の本	・作文や読書感想文の「構成」「書き出しの工夫」等、モデルになるような作品を取り上げ、良さを見つけたり、真似して書いたりする。

	言葉の一覧表（接続詞、気持ちを表すことば等）	・作文等を書く時に、児童が参考にしながら書く。普段は教室に掲示している。
国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材(13)	パワーポイント	・何かの手順や予定については写真、動画を用いて説明をしている。
	作文メモノート	・初め、中、終わりを意識させる。
	ことばノート（言葉集めノート）	・学習（生活）の中で出会ったことばを書き残すノート。（2）
	物語文	・文章理解
	絵日記・日記	・日記の構成を意識できるようなはじめ、中、終わりに分けた用紙。
	手作りカルタ	・下位→上位の単語の把握や語彙を広げ、慣用句や物語のあらすじをつかませるために、自作したもの。
	お絵かきトレーニング	・文章を読んでその内容を絵にしたり、その反対に絵を見て文章を作らせたりしている。
	漫画本（コミック）	・ふき出しの中（セリフ）を想像して書く。
	自作の写真・ことばカード	・語いの学習に活用している。いろいろな店の外観写真と店名とをカードにして、店名は「食品店」「スーパー」などで色別にして活用している。
	文法学習教材	・動作語やそれを使った文作りの課題として使用。
	動詞活用表	・言葉の活用などを活用表及びフラッシュカード等で確認する。
	教科やドリルの日文語の文（章）に手話のイラストをつけたプリント	・入学後、平仮名を習得した児童の読みの学習・文意の理解のために使用している。手話も家族内限定のものであるため、一般的な手話の習得も兼ねている。

表 1-8-5　中学部国語科で活用する教科書等の自作教材等
平成 24 年度調査

N=75　(　)内は回答数

A　使途		B　教材例	C　用例等
教科書の内容に関する教材（6）		本文の拡大版	読み間違いがないかを確認する。
		パワーポイント資料	授業の補助となる写真や絵をパワーポイントにまとめたものを用い板書とする。
			漢詩の朗読ＣＤを字幕と組み合わせたもの。中国語の発音や音韻について知らせる。
		リライト教材文	教科書に合わせた、リライト文や問題等
		手話 DVD	長い小説の面白さを伝えるため、最初に全部を見せ、大まかな把握をさせる。途中細かく分けて使うこともある。
教科書の内容理解を促すための教材（23）	文章の内容理解（6）	ペープサート	内容理解を促すため
		詩歌集・詩集	教科書の課題が難しい時、関連のある作者や内容で平易な言葉づかいのものをもってくる。（解説を加える）
		古典のマンガ版	導入段階で全体のイメージを持たせるために使う。
		パワーポイント資料	各単元でつくった、文章提示(内容の理解を深めるための)写真や絵等の提示のためのもの。
	語彙や漢字の理解･定着（12）	語彙プリント	本文の大切な表現、意味調べ、例文作りに活用する。
		意味調べ用ワークシート	単元の導入の際に、意味のわからない語句を確認させ、ページ、行、読み方、意味、反対･類義語、短文を書かせる。
		辞書学習用教材プリント	多義語の意味の調べ方を学習するために、文脈に合った意味を 3 択の中から選ぶ。
		国語の資料集	より多くの言葉の習得のために絵や写真の多い資料集を活用している。
		漢字プリント	新しい単元に入った時に 1 時間目に確認する。
			実用的あるいは理解できる例文に作りかえて、練習やテストとして使う。
		漢字の読みカード	熟語を作らせたり、漢字と読みを対応させたりする。
		パワーポイント資料	漢字の成り立ち、四字熟語等(主に漢字や文法)
		重複用(手作りの)マッチングプリント、文字練習プリント	日本語と事物のマッチング学習時、ひらがな学習時に利用している。
	読解（5）	ワークシート	教科書の進度に合わせて、理解を助けたり、構造的に読み取るためのワークシートを作成している。
			障害や生徒の実態にあわせて、書く量を減らすことを目的にして、教科書を要約したようなプリントを毎時間使う。
発展や補助のための教材（28）		読書感想文入選作品集、作文集等	構成や書き出し、タイトルの工夫、内容、視点の持ち方、考え方などを参考にする。
		国語の便覧	作者や作品の背景、他の著作、詩･短歌･俳句の表現技巧、作文の書き方等を知る手がかりとして活用。
			古典や漢文、小説など、時代背景の理解に活用したり、語句の学習や文法の学習にも活用。
		詩集、短歌・俳句、小説随筆等の作品集	好きな詩や言葉を見つける、視写する、発表する等の活動の際に活用。
			教科書の詩の学習に入る前に活用。

	高齢聴覚障害者の戦争体験 DVD	戦争の教材(教科書)を扱う際に活用。
	学習マンガ	古典文学の作品紹介や、場面のイメージをつかませるために利用す。マンガ自体は事前には読ませず事後に読ませることが多いが、対象の子どもによって使い方は変える。
	単元に関する内容が書かれた本	様々な本に触れあい、視野を広げることを目的とする。
	作文手引き	作文を書く手順や構成の仕方等が分かるようにワークシートにして書き込ませる。
	原稿用紙の書き方（パワーポイント資料、ワープロ機能）	作文指導の時に、提示して説明する。 作文の添削や推敲の際に活用。(入れ替えやつけ加え、削除が楽)
	百人一首(パワーポイント)	読み手の声の代わりに、一字一字画面に写し出してゲームをする。
	テレビの録画「10mini box」	古典で活用。
国語の関連する言語活動や言語事項に関する教材（18）	作文構成表	構成表、語彙表(行事に関係した語い)を用いて行事作文を書かせている。
	新聞記事、投稿文	要約や感想を話したり、書いたりする ･語句の意味を知る。　･ニュースを知ろうとする姿勢を身に付ける。　･出来事の一つ一つを上位概念につなげる。
	四コマ漫画	漫画の状況の説明や要約を話したり、書いたりする
	ことわざ、四字熟語プリント	一定のルールが視覚で分かるように表示したワークシート
	動詞プリント	文と絵(場面)を結びつけて覚えるようにする。(例)･肩をたたく･ドアをたたく･太鼓をたたく
	ことばのプリント	助詞、接続詞など文法の自作プリント
	文法(品詞)カード	品詞分類表に貼ったりはがしたり(マグネット付)してくり返し使用。
	受け身ドリル(自作教材)	絵を導入し、段階に応じた問題を作成し、一冊のドリルとしてまとめた。
	口語文法の活用表	口語文法指導の時に、提示して説明する。
	国楽帳(漢字のよみかき、読解、言語事項の問い)	新聞の切り抜きから生徒が問題を作り中学部全員が毎日１枚その問題を解く。
	対義語、類義語)ドリル	語彙の拡充
	文法学習用プリント	読字力検定を参考にして作成。指導事項の定着の確認のため。

平成 29 年度調査

N=63 （)内は回答数

A　使途		B　教材名（品名）	C　用例等
教科書の内容に関する教材(11)		本文の拡大版	・教科書の本文をコピーして黒板に貼る。学習グループの生徒全員で同じ文章を見て音読や読み取りをするときに使っている。(3) ・すべての授業において国語の教科書本文をＰＣ→プロジェクタ→ホワイトボードに提示し、説明や生徒の発言を盛り込みながらまとめられるようにしている。
		パワーポイント資料	・適宜、解説のためのイラストや写真、言葉の説明を挿入したものを投影して、一緒に読む(3) ・全員で本文を読むため、手話をしながら音読するために必要。（教科書の本文をパワーポイントに黒地に白字で作成） ・作者についての説明、新出語句の説明で使用する。
		リライト教材文	・文学作品においては実態に応じたグループ編成に合わせて、リライトして使用している ・教科書の単元によって理解が難しいと判断したもの、例えば「握手」（光村）のような教材文をリライト教材とする。
教科書の内容理解を促すための教材（16）	文章の内容理解	イラスト	・物語の一部分や文章の内容を説明するときに絵を描いて視覚的にわかるようにしている。
		語彙カード	・言葉と意味を書いたものを、教室内に掲示して見える化する。
	語彙や漢字の理解と定着	語彙プリント	・教科書の小説・論説などの文章に出てくる、漢字の読み（誤答しやすいもの）、語句の意味を、自分で調べさせ、 学習内容を定着させる。
		漢字プリント	・学習の初めの小テスト
		漢字カード	・新しく学習した漢字を 10 ㎝×10 ㎝のカードに音・訓を書く。それを使って、単元ごとに漢字ビンゴゲームを行い、漢字に興味を持ち、覚えるようにしている。
		敬語分類カード	・敬語の学習の際に使用
		品詞カード	・文法の単元で使用
		活用表	・文法の単元で使用
	読解	ワークシート	・読み取りの授業に関しては、５Ｗ１Ｈを問う問題を作成したり、段落相互の関係を問う問題を作成したりして、手がかりを見つけやすくしている。 ・視覚的（視力）に配慮を要する生徒のために、図地を反転させている。

		・読み取りの手助けになるようワークシートを作成して活用している。 ・授業で学習した内容が定着しているか確認のため宿題として出している。 ・ワークシートを作成し、書画カメラで提示している。 ・古文本文と現代語訳、漢文の場合は書き下し文も、表にして書き入れられるようにしている。 ・学習で押さえたいことを書き込んでいけるよう、また、流れが分かるように構成したワークシートを使い、時間の短縮と内容の定着を図る。 ・読書感想文の構成シートとして作成したり、教科書の教材を読み取り、整理するためのプリント教材。
発展や補助のための教材（13）	読書感想文入選作品集、作文集等	・作文や読書感想文の「構成」「書き出しの工夫」等、モデルになるような作品を取り上げ、良さを見つけたり、真似して書いたりする。 ・発表会を行い、感想カードで感想や意見を交換し合う。 ・他者の文章や感性に触れる副教材として活用している。 ・構成のモデル、心情表現のモデルとして鑑賞させたり、形を真似させて練習したりする。 ・優秀作品を取り上げて、どこが上手なのか解説する。 ・毎月テーマ、形式を示し、作らせている。作品を発表させたり、優良な作品に着目させている。 ・題材の取り上げ方、構成、言葉の選び方について、良さを見つけて、自作の中に取り入れて書いたりする。 ・構成を真似て書かせる。多様な考え方があることを知らせる。 ・作文の書き方を学ぶため。 ・挨拶文の例、構成等を載せたプリントを参考に手紙を書く。 ・作文の目的や注意点、書く手順、構成例を学ぶため。 ・いろいろな詩に親しむことを目的とする。 ・「書き出しの工夫」を参考にするため
国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材(22)	作文プリント	・150 字～250 字程度の文章が書けるプリント。設題に沿って、色々なことを考え、文を作る練習をする。その都度添削し、直した部分を再度書けるように作っている。
	作文構想メモシート	・自分で書きたいことを整理するために、シートの流れに沿って組立てを行うもの。
	漢字プリント	・それぞれの漢字検定受験級に合わせプリントを作成。

言葉を言葉で説明する文例集	・朝の会でトピックス的に扱ったものを文にし、掲示している。 例　通院とは、病院に行くことです。
ドリル問題	・漢字・故事成語・慣用句など ・長期休業中や、授業中の時間調整のために使用している。
読解問題（上位者対象）	・モンゴメリの短編などをわかりやすく一部書き直し、読解問題を作成している。 ・カテゴリー分類、語彙力向上のための資料として活用している。
もののなまえ絵じてん	・必要なページをコピーして配布して説明するか、写真を撮りＰＣに取り込んで映して説明する。
学習マンガ	・そのマンガの面白い所は何なのか、自分の言葉で文章で表す練習をしている。
４コマまんが集	・ブックトークなどで使っている。 生徒が持ち寄り、問題提起をして、みんなでディベートをする時に使う。 （例「いのちの花」等）→「犬猫の命と人間の命とで差が生じるのはなぜ？」など
市販の本	・語彙力向上のため、課題として使用。 （全国聴覚障害教職員協議会発行：みるみる日本語） ・多読のために実物投影機で写し、問いに答えさせる(2) ・漢字の学習。 ・内容に関わる問題を作成し、読後の感想などを書かせている。
漢字パズル	・語彙の拡充、社会事象への関心を高める。
新聞記事を活用したワークシート（活動）	・天声人語を用いて、書き写しや意味調べを行っている。 ・コラムを読んで、５Ｗ１Ｈでまとめたり、教師からの発問に答えながら要点をまとめるシート ・同様の出来事の記事を並べて比較検討を行う。
文法学習教材	・文法を中心に、重点項目に特化したプリントを作成している。 ・文法の自作プリント ・文法をわかりやすく伝えるためにパワーポイントで作成している。 ・主に文法で、聾学校の生徒が苦手とする分野のプリントを作成しており、活用している。

表 1-8-6　高等部国語科で活用する教科書等の自作教材等
平成 24 年度調査

N=75　(　)内は回答数

A　使途		B　教材例	C　用例
教科書の内容に関する教材（6）		新聞記事(読者投書欄、特に十代の若者の投書)	教科書を活用して授業を進めることが困難な学習グループで使用している(論説文にかえて)。新聞記事を読み、漢字、語句の意味確認、読解を一連の学習活動として行っている。
		学校採用以外の他社の教科書	
		小説、随筆、詩、意見文、現代詩、古文(漢文)等	教科書の教材が生徒の実態に合わない時に活用。(平易な内容のものや発展的な内容) 読書教材として活用。
		パワーポイント資料	教材文を投影させるための教材を作成し、活用。
教科書の内容理解を促すための教材（23）	文章の内容理解（6）	教育テレビなどで放送した特別番組の BD ディスク	情景の理解の補助教材として。
		プリント、ワークシート	日々の授業で使用する。生徒の実態や状況に合わせて作成している。
		小論文　題材、資料収集	調べ学習として活用。
		寝殿造りの基礎知識、百人一首の謎、絵巻の見方･扱い方等	教科書や問題集にはない背景的な部分での補助教材を自作して使用している。興味付けに利用することが多い。(特に古典･漢文教材として)
	語彙や漢字の理解・定着（12）	ことわざ等、まんが辞典	言葉を学習する際に。
		語彙カード	語句の定着、復習に活用。
		語いの学習(国語便覧より)	国語便覧をもとに、類義語、対義語、四字熟語、ことわざ、慣用句などのワークシートを作り、苦手な部分の補充をする。
		敬語、漢文(返り点等)学習用コンテンツ	ネット上に公開されているコンテンツの活用
発展や補助のための教材（28）		短編小説、エッセイ、随筆、単行本、雑誌、論説文、新聞のコラムや論説	小論文を書かせる際の題材として、短く、平易な表現のものを選択して活用。
		古典、漢詩、詩、俳句、和歌	読解の教材として自作したり、参考にする。 単元の補助教材、発展教材として活用。
		古典の自作教材	導入のところで､よく知られた昔話や説話文学を活用し、生徒に興味、関心をもたせている。
		他校の生徒会誌、作文コークールの入賞作品集	生徒の読み易い作文を取り上げ､読解の練習に用いている。
		日記(学習グループ内で共通する話題やできごとがあった時)	学習グループ内で全員が経験したことや､心に残るできごとがあった場合､読みもの教材として提示し、読みとれているか、確認する。
		物語(絵本)より	行事と関連づけて、実施。文字のみの文章を作成、ワークシートを作成し、絵本を補助として使用。古典や戦争教材の理解を促す時に活用。
		自作プリント、ワークシート	単元の補助教材又は発展教材として活用。
国語の関連する言語活動や言語事項に関する教材（18）		文法の基礎、敬語、慣用表現の視覚教材	パワーポイントを活用して､教科書で扱うとき補助教材として使用。
		漢字の成り立ちカード＆四字熟語カード	漢字検定資格取得、語い習得学習のために活用。
		文法、語句、国語表現、動詞活用などの教材(テキスト、カード、プリントなど)	生徒の実態や苦手分野に合わせて作成し、活用。

	序数詞を学ぶ(スクラップ帳)	さまざまなものの絵(カット集などからコピー)を見て、数えさせる。
	わかりやすい文章を書くための十ヶ条	作文を書かせる際には、ポイントを明確にするため、自作プリントを使用する。
	新聞記事、社説、コラム	要約、感想文、報道の仕方、視野を広げる等で活用。
	市販の問題集（大学入試小論文、評論問題集、就職試験問題）	入試や就職に向けた小論文課題等で活用。 様々な評論に触れ、視野を広げる。
	課題プリント	単元の補助教材として、就職試験、大学入試に向けて

平成 29 年度調査

N=53 （)内は回答数

A　使途		B　教材名（品名）	C　用例等
教科書の内容に関する教材(4)		本文の拡大版	・教科書と併用して、大型テレビに拡大した文章にわかりやすく注釈を付けることもある。
		パワーポイント資料	・教科書の本文提示や本文内容の語句の理解のための資料提示として扱う。 ・インターネット上やＴＶ番組などから使えそうな写真、動画を使用している。 ・補助教材として視覚的な情報を持たせるため提示している。
教科書の内容理解を促すための教材(12)	文章の内容理解	百人一首、いろはかるた	・百人一首大会の実施、ことわざの学習で活用。
		語彙カード	・慣用句やことわざ等語彙の拡充のため。 ・語彙の指導で反復練習する。
	語彙／漢字の理解と定着	語彙プリント	・外国から転入した生徒に対して、日本の教材をそのまま使えないので、自作している。 ・生徒の実態や必要な状況に応じ、自主教材を作成し、使用している。
		漢字ノート	・読めない漢字や使い方のわからない熟語を使った例文をノートに書き、語句調べと文の読みの課題を毎朝提出させるようにしている。
		漢字プリント	・導入や単元の意味調べ、漢字のまとめとして作っている。
		写真などの視覚教材	・単語など具体物と一致して覚えられるよう工夫している。 ・物の名前を手話、指文字、音声で表しながら覚える学習で、先生、友達、好きな物をカードにして提示している。

	敬語の冊子	・自作の敬語の使用法に関する冊子。年度末に集中的にまとめ的に実施。特に卒業学年には７～８時間をかける。
読解	ワークシート	・自己理解等に関するものや国語表現の単元で補助教材として使用。 ・実態に合ったものを作成して使用。
発展や補助のための教材（９）	読書感想文入選作品集、作文集等	・教科書の題材の発展教材として提示する。 ・能力に応じて文に興味を持たせるため、自作の小説を使い、自分でも表現できることを伝える。 ・教科書の教材の筆者、作者の文章を抜粋して、発展教材として用いる。 ・短歌の創作の際、入選作品を鑑賞し、参考にさせている。(現代学生百人一首(東洋大学)) ・作文指導を行う際に補助教材として使用している。（小論文・作文、模範文例等）
	指導書にある関連した文章	・単元の最後に紹介する。
	ＮＨＫ　ｆｏｒ　ｓｃｈｏｏｌ（ＮＨＫ動画サイト）	・単元の補助教材として使用する。小・中学生中心向きではあるが、生徒の実態に応じて活用している。字幕もあり活用しやすい。
	手紙の書き方（郵便局が配布）	・単元の補助教材として使用。発展教材としてワークブックと同じように使用している。
	助詞抜き物語（自作）	・自作の短編物語の助詞を全て（　）にしたものを作成し、宿題としてさせている。
国語科に関連する言語活動や言語事項に関する教材(28)	絵本	・生徒の実態に合わせて、内容についての設問を作成している。
	作文や面接	・その時に応じた文章作成や面接の準備に向けた教材。
	市販の問題集（大学入試小論文、評論問題集、就職試験問題）下学年の問題集など	・長期休業中や授業の５～１０分間で使用、文が長すぎず短すぎず生徒の理解度に合って指導できる。（下学年の問題集） ・生徒の実態に合わせて、発展教材として使用している。（漢字検定過去問集、読字力検定過去問集） ・進学に向けた補助教材として使用（入試問題集、参考書、文法問題集）
	慣用句の学習	・学習課題として取り組み、慣用句の意味理解と用法の理解として扱う。
	学習マンガ	・単元の補助教材として活用している。話の流れを掴みやすい。（特に古文）

市販の本	・単元の発展教材として取り上げる。(2) ・全文書きとり、ルビ（宿題）。教科書に抜粋として載っていた作品を発展として。（随筆の新書） ・生徒の実態に応じ、興味を持って読めそうなものは教材として扱う。 ・教科書の題材を扱った後、発展や比較のための教材として提示（短編小説、エッセイ） ・単元の補助教材又は発展教材として取り上げる。（小説、エッセイ、随筆等） ・単元の補助教材として使う。又、表現の指導に使う。（小説、詩集） ・単元の導入や発展として使う。 もしくは、本単元の理解を促すための補助教材として使用。（単行本、雑誌） ・語彙力をつけるために、授業の初めに解説をしたり、生徒たちが例文を考え たりして使用している。（マンガもついている言葉の本、単語、ことわざ、慣用句） ・読みとりの力をつけるために、生徒の興味に合わせて、大人の文としては平易な表現や短い題材のものを使用している（短編小説、エッセイ） ・単元の補助教材又は発展教材として取り上げる。生徒の実態から、教科書の題材が難しすぎる場合、同様の内容・程度で補助教材として平易な表現や短い題材を使用する。或いは、教科書の題材を扱った後、発展教材として提示する。 ・百人一首カルタ大会を毎年高等部で開催している。30 首ずつで行なっているが、興味を持たせ、内容を理解するための補助教材として活用。 （文庫本『こんなに面白かった「百人一首」』） ・自習時の課題や進路の取組が近づいた時期に、出題例を挙げて、意欲を高めるために使用している。 （単行本ＳＰＩ問題集より）

図形	・図形を見て、それを言葉だけで他の人に伝えていく活動、生徒の語彙力を正確に把握でき、どこがわからないかわかり、すぐに指導することができる。
新聞記事	・修学旅行等行事に関する内容や時事問題を扱う際、卒業後に向けて、必要な部分を使用する。 ・重複学級の国語科で使用。難語句の意味など参考につけ、1枚のプリントにしたもの。(新聞記事を活用したワークシート) ・新聞のコラムを切り取って貼り、視写をし、語句について調べたり、自分の感想や意見を書く。 ・ワークシートを作成し、朝の短時間活動や調べ学習の補助教材として。弁論や小論文のスモールステップとして。 ・時事問題について知るための補助教材として使用。 ・文章の構成や展開を確かめ、内容を読み取るための教材を作成し、用いている。また意見文を述べるため、考えるための題材として用いている。
文法学習教材	・古典の文法について、問題集をそのまま使用するのが難しいため、説明を加えた形で教材を作成している。

表 1-9-1　機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）
平成 24 年度調査

（数値は%）

	教材の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 黒板（短冊黒板、小黒板）	146	98.6	0	1.37	146	91.1	7.53	1.37	140	92	6.4	0	1.4
2 発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	141	51.8	23.4	24.8	137	27.7	36.5	35.8	127	56	8.7	0.8	35
3 漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	49	20.4	69.4	10.2	141	36.2	54.6	9.22	135	66	16	8.9	9.6
4 指文字表・指文字カード	139	66.9	20.9	12.2	135	10.4	30.4	59.3	129	38	4.7	0.8	57
5 手話表（簡単な手話表現の絵）	136	47.8	17.6	34.6	126	6.35	30.2	63.5	125	26	8.8	2.4	62
6 電子黒板	140	52.1	0.71	47.1	121	4.13	4.13	91.7	118	9.3	0	0	91
7 ＯＨＰ	138	74.6	0	25.4	130	2.31	6.15	91.5	120	10	0.8	0	89
8 パソコン、プロジェクター	145	98.6	0.69	0.69	143	33.6	51	15.4	136	68	13	5.1	14
9 地上デジタル対応テレビ	141	92.2	0.71	7.09	136	15.4	30.9	53.7	133	43	1.5	3	53
10 ＤＶＤプレーヤー	142	96.5	0.7	2.82	139	6.47	49.6	43.9	138	53	2.2	0.7	44
11 ＣＤプレーヤー等機器	141	97.9	0	2.13	138	5.8	45.7	48.6	135	46	3	1.5	50
12 実物投影機	137	82.5	1.46	16.1	136	8.09	22.8	69.1	133	30	0.8	0	69
13 デジタルカメラ	144	93.8	6.25	0	140	50.7	38.6	10.7	136	75	11	2.9	11
14 デジタルビデオカメラ	142	96.5	2.82	0.7	139	21.6	46.8	31.7	133	61	8.3	0	31
15 集団補聴器（ＦＭ､赤外線､ループ）	140	85.7	0.71	13.6	107	54.2	18.7	27.1	136	54	0.7	0	45
16 個人用ＦＭ等システム	135	42.2	11.9	45.9	134	17.2	9.7	73.1	132	26	0.8	0	73
17 音声記号図、調音部位図	136	86.8	0.74	12.5	133	1.5	36.1	62.4	121	32	4.1	1.7	62
18 母音図（口形を表した図や絵）	137	89.8	5.84	4.38	137	6.57	43.8	49.6	134	37	6	3.7	53
19 キューサイン表（発音サインも含む）	135	37	5.93	57	128	0	6.25	93.8	136	11	1.5	0	88

平成 29 年度調査

（数値は%）

	機器等の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 黒板（短冊黒板、小黒板）	149	98.0	0.0	2.0	147	91.8	6.1	2.0	139	92.1	5.8	0.0	2.2
2 発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	147	53.1	29.3	17.7	138	32.6	42.0	25.4	130	60.0	13.1	3.1	23.8
3 漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	147	68.7	23.8	7.5	141	40.4	48.9	10.6	135	58.5	15.6	17.0	8.9
4 指文字表・指文字カード	144	72.9	18.1	9.0	142	7.7	33.1	59.2	132	35.6	5.3	3.0	56.1
5 手話表（簡単な手話表現の絵）	146	46.6	17.8	35.6	132	8.3	36.4	55.3	122	32.0	11.5	1.6	54.9
6 電子黒板	147	55.8	0.0	44.2	130	13.1	7.7	79.2	120	16.7	3.3	1.7	78.3
7 ＯＨＰ	145	59.3	0.0	40.7	127	0.8	6.3	92.9	117	6.8	1.7	0.0	91.5
8 パソコン、プロジェクター	148	98.6	0.7	0.7	146	41.8	39.7	18.5	139	66.2	13.7	3.6	16.5
9 地上デジタル対応テレビ	148	85.8	0.0	14.2	143	11.2	28.0	60.8	127	36.2	3.9	0.0	59.8
10 ＤＶＤプレーヤー	141	94.3	0.7	5.0	141	10.6	34.0	55.3	124	44.4	5.6	0.8	49.2
11 ＣＤプレーヤー等機器	141	95.0	1.4	3.5	142	14.8	34.5	50.7	128	47.7	4.7	0.8	46.9
12 実物投影機	138	89.9	0.7	9.4	141	15.6	25.5	58.9	128	35.2	3.9	3.1	57.8
13 デジタルカメラ	139	90.6	9.4	0.0	145	42.8	42.8	14.5	135	77.0	10.4	0.0	12.6
14 デジタルビデオカメラ	140	97.1	2.1	0.7	144	13.2	50.0	36.8	132	61.4	6.8	0.0	31.8
15 集団補聴器（FM、赤外線、ループ）	138	89.9	0.0	10.1	139	44.6	8.6	46.8	131	54.2	1.5	0.0	44.3
16 個人用ＦM等システム	136	48.5	16.9	34.6	130	33.8	7.7	58.5	124	44.4	0.0	0.0	55.6
17 音声記号図、調音部位図	138	87.0	2.2	10.9	138	5.1	30.4	64.5	122	27.0	7.4	0.8	64.8
18 母音図（口形図や絵）	136	84.6	6.6	8.8	138	9.4	40.6	50.0	127	37.0	10.2	3.1	49.6
19 キューサイン表（発音サインも含む）	137	42.3	5.8	51.8	129	5.4	10.1	84.5	123	11.4	2.4	3.3	82.9
20 タブレット PC	140	85.7	5.0	9.3	142	21.8	37.3	40.8	133	54.9	6.8	0.8	37.6

表 1-9-2　機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）
平成 24 年度調査

（数値は%）

	教材の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 黒板（短冊黒板、小黒板）	117	96.58	0.855	2.564	116	86.21	6.897	6.897	117	91.45	1.709	0	6.838
2 発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）	111	54.95	13.51	31.53	112	18.75	33.04	48.21	103	45.63	2.913	0	51.46
3 漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	110	41.82	16.36	41.82	112	5.357	24.11	70.54	111	16.22	5.405	8.108	70.27
4 指文字表・指文字カード	106	66.04	14.15	19.81	109	5.505	15.6	78.9	108	16.67	2.778	2.778	77.78
5 手話表（簡単な手話表現の絵）	105	50.48	11.43	38.1	110	6.364	16.36	77.27	107	16.82	3.738	0.935	78.5
6 黒板	110	54.55	0.909	44.55	114	2.632	8.772	88.6	113	7.965	4.425	0.885	86.73
7 P	109	79.82	0.917	19.27	110	1.818	10.91	87.27	109	11.01	0.917	0.917	87.16
8 コン、プロジェク	114	99.12	0.877	0	116	35.34	52.59	12.07	105	71.43	8.571	6.667	13.33
9 デジタル対応テレビ	107	89.72	0	10.28	109	12.84	23.85	63.3	100	30	3	0	67
10 DVD プレーヤー	110	96.36	0.909	2.727	112	5.357	43.75	50.89	104	42.31	4.808	0	52.88
11 ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	107	96.26	0	3.738	110	3.636	22.73	73.64	107	20.56	2.804	0	76.64
12 実物投影機	105	84.76	0	15.24	106	3.774	27.36	68.87	102	26.47	1.961	0	71.57
13 デジタルカメラ	112	97.32	1.786	0.893	113	25.66	42.48	31.86	105	53.33	11.43	0.952	34.29
14 デジタルビデオカメラ	113	98.23	0.885	0.885	112	15.18	29.46	55.36	105	37.14	5.714	0	57.14
15 集団補聴器（FM、赤外線、ループ）	108	86.11	0	13.89	111	36.94	11.71	51.35	104	43.27	0.962	0.962	54.81
16 個人用ＦM等システム	102	35.29	7.843	56.86	107	8.411	9.346	82.24	101	10.89	1.98	0.99	86.14
17 音声記号図、調音部位図	103	71.84	0.971	27.18	107	1.869	8.411	89.72	108	6.481	5.556	0	87.96
18 母音図（口形を表した図や絵）	105	75.24	1.905	22.86	109	2.752	7.339	89.91	110	6.364	4.545	0.909	88.18
19 キューサイン表（発音サインも含む）	103	41.75	1.942	56.31	108	1.852	3.704	94.44	107	2.804	0.935	0.935	95.33

平成 29 年度調査

（数値は%）

	機器等の有無				活用頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1 黒板（短冊黒板、小黒板）	116	93.1	0.0	6.9	116	78.4	9.5	12.1	109	85.3	4.6	0.0	10.1
2 発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）	114	60.5	19.3	20.2	112	19.6	37.5	42.9	101	52.5	5.0	2.0	40.6
3 漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	111	44.1	14.4	41.4	107	7.5	18.7	73.8	99	19.2	6.1	3.0	71.7
4 指文字表・指文字カード	115	70.4	9.6	20.0	112	2.7	17.0	80.4	105	18.1	1.9	1.9	78.1
5 手話表（簡単な手話表現の絵）	114	57.9	7.0	35.1	108	1.9	20.4	77.8	103	18.4	3.9	1.0	76.7
6 黒板	111	55.0	0.0	45.0	105	13.3	6.7	80.0	101	19.8	3.0	0.0	77.2
7 ＯＨＰ	110	64.5	0.0	35.5	108	1.9	11.1	87.0	101	11.9	2.0	1.0	85.1
8 パソコン、プロジェクター	116	98.3	0.9	0.9	118	43.2	49.2	7.6	116	68.1	19.8	4.3	7.8
9 地上デジタル対応テレビ	114	86.0	0.0	14.0	112	9.8	32.1	58.0	102	40.2	3.9	0.0	55.9
10 ＤＶＤプレーヤー	114	93.9	0.9	5.3	116	3.4	27.6	69.0	105	32.4	1.9	0.0	65.7
11ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	112	94.6	1.8	3.6	113	6.2	20.4	73.5	101	27.7	5.0	0.0	67.3
12 実物投影機	109	87.2	0.0	12.8	112	17.0	29.5	53.6	103	41.7	5.8	1.0	51.5
13 デジタルカメラ	113	95.6	3.5	0.9	116	25.9	43.1	31.0	106	51.9	16.0	0.0	32.1
14 デジタルビデオカメラ	113	97.3	0.9	1.8	115	12.2	32.2	55.7	103	35.9	6.8	0.0	57.3
15 集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	112	88.4	1.8	9.8	115	39.1	6.1	54.8	103	45.6	2.9	0.0	51.5
16 個人用ＦＭ等システム	111	58.6	10.8	30.6	112	25.0	15.2	59.8	102	40.2	2.0	0.0	57.8
17 音声記号図、調音部位図	107	68.2	0.0	31.8	109	0.9	8.3	90.8	99	9.1	0.0	2.0	88.9
18 母音図（口形を表した図や絵）	109	74.3	1.8	23.9	111	1.8	10.8	87.4	99	11.1	1.0	2.0	85.9
19 キューサイン表（発音サインも含む）	107	44.9	3.7	51.4	106	0.0	3.8	96.2	99	4.0	1.0	2.0	92.9
20 タブレット PC	112	84.8	4.5	10.7	112	16.1	39.3	44.6	105	40.0	16.2	1.0	42.9

表 1-9-3　機器等の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）
平成 24 年度調査

（数値は%）

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
黒板（短冊黒板、小黒板）	95	93.7	0	6.3	00	
発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）	94	50.0	14.9	35.1	50.0	6.7
漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	92	27.2	18.5	54.3	17.6	5.5
指文字表・指文字カード	92	63.0	6.5	30.4	19.6	3.3
手話表（簡単な手話表現の絵）	92	45.7	6.5	47.8	19.8	3.4
電子黒板	94	52.1	0	47.9	10.6	1.1
ＯＨＰ	92	76.1	0	23.9	12.8	2.2
パソコン、プロジェクター	94	98.9	0	1.1	87.8	11.0
地上デジタル対応テレビ	93	88.2	0	11.8	0	**4.4**
ＤＶＤプレーヤー	92	95.	0	4.3	57.6	3.5
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	92	93.5	0	6.5	25.8	1.1
実物投影機	90	86.7	0	13.3	30.8	2.3
デジタルカメラ	94	95.7	2.1	2.1	67.0	14.3
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	90	87.8	0	12.2	32.2	1.1
個人用ＦＭ等システム	88	29.5	14.8	55.7	12.1	0
音声記号図、調音部位図	88	65.9	0	34.1	3.3	0
母音図（口形を表した図や絵）	90	70.0	1.1	28.9	5.5	0
キューサイン表（発音サインも含む）	89	41.6	1.1	57.3	2.2	0.

平成 29 年度調査

（数値は%）

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
黒板（短冊黒板、小黒板）	103	93.2	1.0	5.8	85.1	3.2
発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）	99	56.6	18.2	25.3	57.8	2.5
漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）	98	36.7	8.2	55.1	14.1	7.7
指文字表・指文字カード	100	55.0	9.0	36.0	14.0	1.4
手話表（簡単な手話表現の絵）	97	47.4	3.1	49.5	9.9	0.0
電子黒板	101	51.5	0.0	48.5	26.7	2.7
ＯＨＰ	96	54.2	0.0	45.8	18.8	7.7
パソコン、プロジェクター(タブレット PC は除く)	103	98.1	0.0	1.9	93.1	19.1

地上デジタル対応テレビ	98	78.6	0.0	21.4	32.6	2.6
ＤＶＤプレーヤー	98	94.9	0.0	5.1	47.9	2.5
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	97	92.8	0.0	7.2	27.1	0.0
実物投影機	95	86.3	0.0	13.7	50.5	7.9
デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ	98	96.9	1.0	2.0	68.8	9.6
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	96	84.4	1.0	14.6	41.9	1.3
個人用ＦＭ等システム	96	51.0	12.5	36.5	31.0	1.4
音声記号図、調音部位図	93	55.9	1.1	43.0	8.3	1.5
母音図（口形を表した図や絵）	95	60.0	2.1	37.9	9.2	1.4
キューサイン表（発音サインも含む）	91	36.3	0.0	63.7	1.3	0.0
タブレット PC	98	89.8	5.1	5.1	66.0	7.1

表 1-10-1　市販テストの活用状況　（数値は%）

		いつも活用	時々活用	活用していない
平成 24 年度	小学部(N=150)	60.7	20.7	17.3
	中学部(N=120)	21.0	39.5	39.5
	高等部(N=96)	13.5	52.1	31.3
平成 29 年度	小学部(N=144)	68.1	17.4	14.6
	中学部(N=114)	24.6	36.8	38.6
	高等部(N=95)	13.7	51.6	34.7

表 1-10-2　小学部でよく活用する自作テスト、評価用教材等
平成 24 年度調査

N＝36

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	27	自作テストやプリント（単元、本時の学習内容の確認、漢字や語句の確認）、市販の漢字テスト
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	4	市販の国語ドリル（日本語の使い方や文法）、自作プリント、動詞や形容詞の活用表
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	5	読書力診断検査、J,Coss 日本語理解テスト、標準学力検査 CRT（教研式）、NRT テスト

平成 29 年度調査

N＝64

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	55	自作テストやプリント（単元、本時の学習内容の確認、漢字や語句の確認）(44) 、市販の漢字テスト(３) 市販の国語ドリル（漢字や語句の復習や内容の読み取り）、市販のプリント（授業のまとめ）（2）、市販の問題集、ネット上に掲載されているプリント(2)、教科用図書の指導書付録の単元テスト 音読カードや視写カード
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	8	動詞や形容詞の活用表、自作漢字プリント(4) 自作のテスト(3)
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	1	標準学力検査 CRT（教研式）

表 1-10-3　中学部でよく活用する自作テスト、評価用教材等

平成 24 年度調査

N＝46

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	36	漢字テスト、漢字練習プリント、自作テスト（本時、単元、定期テスト）、自作ワーク（本時、宿題、自習）、ワーク（電子データ）、自己評価シート、ビデオ映像、イラスト（授業のまとめをイラスト化）
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	9	ことわざ自作テスト、ディベート採点表、リスニング・テスト（字幕提示）、10 問書き取りテスト、全校漢字テスト、漢字検定教材や問題集を参考にしたテスト、ことばの基礎に関するドリル
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	1	読字力テスト

平成 29 年度調査

N＝39

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	35	漢字テスト(5)、漢字練習プリント、自作テスト（本時、単元、定期テスト）(11)、自作ワーク（本時、宿題、自習）（4）、ビデオ映像(タブレット PC)を用いたビデオ映像を含め)(11)、市販のワークブック問題集、ノート、百人一首
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	4	全校漢字テスト、感想文、自作プリント、自作テスト
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	0	

表 1-10-4　高等部でよく活用する自作テスト、評価用教材等
平成 24 年度調査

N＝76

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	68	自作テスト（本時、単元、定期テスト）、漢字テスト、漢字練習プリント、自作プリント（復習、問題集、本時のまとめワークシート）
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	8	漢字テスト、過去に間違った問題や苦手分野の問題をまとめたテスト、
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	0	

平成 29 年度調査

N＝79

活用場面	回答数	内容
単元、本時の学習評価で活用	68	自作テスト（本時、単元、定期テスト）(54) 、漢字テスト(7)、自作プリント（復習、問題集、本時のまとめワークシート）(5)、教科書の指導書付録の CD、教科書の指導書のワークシート、教科書準拠ワークブック
国語科に関連する言語事項に関する評価で活用	11	漢字テスト（4）、自作テスト（能力に合わせて作成、文法の確認、単語の確認、習熟度の確認）(3) 問題作成ソフト、市販の問題集(3)
学年のまとめ 全体的な傾向の把握	0	

表 1-11-1　あると良い教材（自由記述：小学部）
平成 24 年度調査

N=63

教材の種類	教材名・内容	活用場面や方法
手話 DVD（5）	教科書対応、専門的な知識を持つ表現者による手話 DVD	教材文（特に物語文）の内容の把握、イメージ作りに活用。
教科書本文と挿絵の電子データ（4）	電子データ（拡大、加工可能な物） 拡大印刷した物 会議用ホワイトボードシートに教科書本文が拡大印刷されている物 電子教科書 手話に対応したデイジー図書	物語文で活用、書き込みできると良い。書いてあることを抜き出したり確かめたりするのに便利。 市販のものは高額のため、簡易なものがあればよい。 音声、文字、手話がセットになっていると確認や自学がやりやすくなる。
教科書とは別の教材（読解指導）（3）	児童が書いてある文の内容をイメージできるようなイラスト入りの長文。	高学年になるほど内容が抽象的で、文に抵抗を示すようになる。少しでもヒントを与えるようなイラスト入りの文章(物語)があればと良い。

	生活文の読みとり教材	いつも生活文を自作しており、クラスの児童の実態が異なるため、3 通り作っている。いろいろな言語段階に応じた日常的な文~ニュースの内容的なこと等いろいろな話題の短い読みとり文集があるとよい。
	知的障害を伴う重複の児童用の教材集	聴覚のみの障害のある児童もいるので、多様な段階に対応した教材教具は必要。
教科書の補助教材（7）	教科書に出てくる語句を子どもに分かりやすく解説している教材。(図・写真が多いもの)	授業で読解を進めていく際、使いたい。
	教科書に対応した新しい言葉、漢字の意味解説や単語の絵つきカード	意味が絵を見て理解しやすくする。進出漢字や熟語の学習で活用。
	動詞等の言葉を映像化したもの。	教科書本文や会話等の中で、分からない言葉を、動作化したり、映像化した教材
	文法事項がコンパクトにまとめられた表	教科書に出て来た文法事項の説明に役立てられる。
辞書に関するもの（2）	デジタル手話イラスト集	手話の確認、教材を作成する際に活用。重複児童への教材作成で困ることが多い。
	言葉の意味と映像写真辞典	言葉の意味を文だけでなく写真や、動画などで、調べることができる。
評価に関するもの（7）	授業振り返りシート	授業を終えて、児童が自分で何を学べたかを振り返られるもの。記入することで、学習したことを児童が確かめられるようにする。
	段階別になった文法テスト、文法教材と一覧表	小学部～高等部までが系統的に使えるような、品詞ごとの教材を活用し、定期的にテストも行い、合格したら次のステップへ進むことができるようにする。実態把握のため活用。
	副詞の一覧と評価のためのプリント	教科書に出てくる文法表現などを重点的におさえるために使用する。意味と用い方ができるかを確かめられるようにする。
	学年(段階)ごとに各品詞の達成度(定着度)が評価できるチェック表	一人一人の各品詞の定着度を確認し、弱点(重要事項)を把握して、以後の指導に活用するため
	語彙表	品詞ごとに「読み理解」「手話理解」「文字表現」「手話表現」の実態を確認したり、共有したりする。次にどのようなことばに広がっていくのかの見通しをもつ。
文法事項の指導に関するもの（22）	わかりやすい動詞、形容詞、感情を表す言葉の活用表。	文法理解、テスト、読み書き、日常会話などあらゆる場面で評価や指導で利用する。
	動詞の活用がわかりやすい動画（アニメーション）	文法の学習で使用する。
	助詞の種類と意味が書いてある表	児童が自分で表を見て、書く時や話す時に活用できるようにする。
	助詞の使い方の理解を深める教材（ドリル、活用表、例文表）	言語の学習の時間に。
	能動態、受動態の活用表。	文法理解。~する、~されるの理解がしやすいツールとなるもの。
	児童に分かりやすい指示語の表	

文指導に関するもの（3）	文章を拡充していくためのドリル的なもの	例えば、ある場面をあげて、自分の日常をふりかえりながら文をつないでいく形式のもの。「はじめに電灯をつけます。暗いと○○○○からです。」等
	話し言葉と書き言葉のちがいを理解できるテキスト	作文を書く時や、発表する時と、普段の会話での話し方を使い分けられるようにする。
	構造的に考えることができる、文のパズル	
語彙指導に関するもの（9）	ことばの意味に限った問題集	意味調べや記憶にとどまらず、定着させるために活用する。
	敬語の表（拡大・掲示できるもの）	小5国語の敬語の学習で活用する。他学年でも言葉の使い方を確認するために使える。
	絵とことばと手話、3位一体の表	日常生活でよく使われる絵とことばと手話が一緒になった表があれば、手話→絵→ことばの順で日本語を指導しやすい。
	動詞、名詞、形容詞、副詞など、各品詞について、その学年でおさえたい語彙の短冊	文作りにおいて、なかなか自分で書くことができない子どもに活用させる。掲示しておけば、くりかえし確認もできる。
	動詞、形容詞、心情を表す言葉の絵とことばのカード（絵と文字）	言葉で確認する前に絵でイメージをつくったり、絵を見せておいて、あてはまる言葉を考えさせたりする。
	名詞、形容詞、動詞別の語彙を増やすプリント	宿題や朝学習で日常的に使う。
	気持ちのことばのチャート図	うれしい、楽しい、かなしい、くやしい…など、気持ちを表すことばと表情や状況などが分かる図。
	気持ちを表す言葉、言い回しの表	「うれしい」「悲しい」などの単純な表現だけでなく、様々な言い回しがあることを知り、児童が日記等で活用できるようにする。
その他（1）	実物投影機	教科書を拡大して、大切なところ等を全員で確認する。 児童がノートに書いた考え等を発表する際に活用する。

平成29年度調査

N=76

教材の種類	教材名・内容	活用場面や方法
手話DVD（6）	教科書対応、専門的な知識を持つ表現者による手話DVD	・教科書の本文をろう者が手話で読んで表現している映像を読み取り、内容を掴ませる。 ・語句の理解が国語辞典では難しい際に使用する。 ・教師がまず確認して正しい手話で授業を行うために使用する。 ・特に物語文などは、読み取りの手助けとして活用したい。

	日本手話 ver. の DVD	・説明文や物語の文章を日本手話に変換した DVD があれば、さらに興味を掴めるから ・手話表現が分かり、習得しやすくするため。
教科書本文と挿絵の電子データ（10）	電子データ（拡大、加工可能な物）	・パソコンに取り込み、プロジェクターに投影できる。 ・吹き出しを書き込んだり、コピーして活用したい。（教科書の挿絵の拡大バージョン。） ・読み取りの際にプリントし、書き込みをする。 ・教材文の文字のフォントや配置を児童が見やすい形に加工して使用するため。又、他のデータも入れて、よりわかりやすい文章にした教科書にするため。 ・高学年の授業では、教科書を実物投影機で大型テレビに映し、画面に書き込みをする方法もとっているが、低学年では、この方法よりも、模造紙に書き込む方法の方が良い。そのため、模造紙に手書きをしたり、パソコンにデータ入力して印刷したりする方法で教材を作成しているので、加工できるデータがあれば、効率的に教材の準備ができる。
	デジタル教科書	・本文の写真を拡大したり、本文を示したりしたい時に使用したい ・板書をそのまま保存し、復習等で使用できる。 ・教科書だけでは読めないことがほとんどなので自力で読んでいくためのヒント（写真等）がたくさん入ったデジタル教科書がほしい。
	電子黒板	・低学年は動画が入ると、興味をもちやすく、印象に残るので、静止画よりは動画の方がありがたい。（例）ビーバーの大工事（２年国語下東京書籍）→ビーバーの巣づくりをしている様子がおさめられた動画など

	教科書の文章を黒板等に簡単に映し出せる機械。	・教科書の文章を模造紙に写すのは大変なので、簡単に文章を映し出せて、書き込めるような機器があると良いと思います。
教科書の補助教材（１3）	教科書に対応した大きな掛け図（挿絵）	・物語教材の内容理解の手がかりとする。
	重要語句と意味一覧表（単元毎）	・単元に入る前に、難語句の理解の際に活用する。
	教科書に出てくる語句を子どもに分かりやすく解説している教材。(図・写真が多いもの)	・難解な語句だけでなく、時代背景や状況把握に参考になるような言葉の解説がわかりやすく書いてあるものがあると予習や復習に活用できる。
	説明文の内容に関わる基本知識に関するDVD（字幕付き）や物語文（高学年）のアニメDVD（字幕付き）	・読み取りに入る前に、土台として基礎知識を得たり、全体のストーリーを把握したりする。（一般的な教材として販売されているが字幕がついていないため使えない。）
	物語や説明文の内容そのままのアニメーションや動画	・視覚的に大まかな内容を掴んだ上で、国語的な内容を深められるようにするため。
	教科書教材の動画	・文章のイメージを掴みやすくするため。
	物語の場面の絵の並び替えテスト	・物語の単元のまとめの時に、物語の内容を理解できているかの確認に使いたい。
	教科書に合った手話表現ＤＶＤ	・読みとった後、手話で内容を確認するため。
	や教科書の内容に沿ったワーク（市販より語彙についての内容が多いもの）	・指導後に定着度を見るために使う。
	聾学校用のワークシート（検定教科書）	・聞こえにくいことで押さえるポイントは市販のものでは、押さえどころが違うと感じる。内容読解の確認で、市販のものに加えて使用する。自作だったり、板書で行っているが、全国で共有できるものがあると良い。 ・聞こえにくい子どもたちへの押さえどころを押さえたワークシートを自作してはいるが、共有できるものがあるとありがたいと思う。伝承もできる。 ・教科書で学習した文法が活用できるか確かめられるように。

	国語の単元ごとの語彙表のようなもの	・児童が自分が分からない言葉があった際に活用できるようにする。
辞書に関するもの(3)	イラスト等を使い、視覚的に意味を捉えやすくした国語辞典	・意味調べで使う。市販のものでは全く使えない児童がいる。
	イラストや写真等があり、類語がたくさん載っている小学生向けの辞典	・言葉を増やすため。初めて知る語彙の定着の手がかりとして、知っている似た言葉（意味）の語彙から広がっていけるのではないか。イラストや写真が多い方が、視覚的に捉えやすい。
	ことばの絵辞典が電子化されたもの	・児童が知らない言葉を電子書籍上でカラーイラストや写真で、すぐに出せると便利だと思う。扱う言葉も小学生用レベルの言葉も含まれると良いかと思う。（インターネットで一つ一つ検索するのではなく、1つのものにまとめられていて、辞書のように、その1つのもまとめられたものを調べると、すぐ授業で活用できる。）
評価に関するもの(2)	副詞の一覧と評価のためのプリント	・文法の理解のために活用する。文に合わせた活用の仕方を児童が確かめられるように活用したい。
	動詞、形容詞の形の分類表（発達分類表付）	・品詞の分類が児童にも分かり、発達年齢に合わせて、覚えるべき言葉が表になっている。
文法事項の指導に関するもの（22）	文法の獲得等をねらった文と絵のカード・プリント	・「やり」「もらい文」、自動詞・他動詞、文末表現などと関連させたものがあると良い。日常会話の丁寧なやりとりだけでは獲得・定着が難しい子ども用に。
	児童にも分かりやすい動詞や形容詞の活用表＋形容動詞の活用表	・活用した形を児童が確かめられるようにする。（例）「さむいでした」というふうに書く児童が多い。「さむ（かっ）た」とはならない。「心配（な）とき」とはならず「心配のとき」と間違う。
	動詞の活用プリント	・「れる」「られる」「やりもらい」等、子が苦手とする活用を確認する。
	助詞の種類と意味が書いてある表	・読み書き全般に活用する。作文、短文づくりの際、見てわかるようなもの。

助詞の練習プリント集	・難易度別の助詞練習プリント。個の実態に応じて使えるもの。
助詞の使い方の理解を深める教材（ドリル、活用表、例文表）	・教室掲示できるものや、児童が手元で使えるようなサイズのものなど、あったら良い。（助詞の使い方表） ・日記指導や自分の言ったことや書いたことの間違いがないか確かめられるようにする。また、そのための練習ドリルがあるとよい。 ・日々のやり取りの際に活用する。視覚的に正誤を確認できるようにする。
動詞・形容詞等の活用表	・教室掲示できるものや、児童が手元で使えるようなサイズのものなど、あったら良い。 ・読み書き全般に活用する。いくつかの基本の活用が見てわかるようなもの。 ・文法テストや読み書きの際に活用する。言語力の育成のための教材として使用する。 ・文法テストや読み書きの際に活用する。授業で取り扱った動詞や形容詞について、活用ができるかどうかを児童が確かめられるようにする。(2)
低学年から使用できる文法テスト	・文法テストを利用することで、児童がどこにつまずいているのか（文法上）客観的に捉えやすい
文法的な内容を系統的に学習できる問題集	・聴覚障害児の特性に合ったもの(絵が多く、スモールステップになっているなど）自立活動で学習する他、宿題などで自分で学んでいけるようにする。
日本語教育を活用した教材	・日本語の文法を視覚的に分かりやすく学べる教材。
日本語文法を段階的に学べるワークシート	・5W1H の基本文型、受動文、使役文といった聾学校の自立で扱うような日本語文法の教材があると良い。主に自作し、利用しているが、初めての聾学校に就任した教師は文法の何から手をつけてよいかわからず苦労している様子があるので。
構文図	・一文を読み取る練習として使う。
日本語文法を系統立てて指導でき	・自立活動の指導の際、活用する。継続し

	る補助教本、確認テスト	て、段階を追って指導をする参考としたい。学習の後、確認評価を行いたい。
	文法指導段階表	・小学部のうちに、身につけておくべき文法を、段階的にもれなく指導する。
	助詞の運用で意味が変わることが分かる絵カード又は動画ソフト	・「AがBを追いかける」「AをBが追いかける」を実際に表したものがあると自分の助詞の使い方の正誤を子供がわかりやすく把握できる。ゲーム形式にもなると気軽に使いやすい。
	使役、受身のイラスト表、練習問題	・動詞の理解はできるが、場面での使い分けが苦手な子がいるので、練習できるようにする。
語彙指導に関するもの（19）	新しく使われるようになった言葉の単語集	・新聞やニュース等でよく取り上げられるようになった言葉などの意味を確認するために使いたい。 ・授業場面だけでなく、日常会話に繋げていきたい。
	イラストつきの単語表、カード	・言葉の学習に使用する。
	イラストつきの漢字カード（各学年）	・漢字の学習に使用する。
	動詞、形容詞、心情を表す言葉の絵とことばのカード（絵と文字）	・作文、日記の指導で、児童が自分で使って書けるようにする。
	分類、整理された性格を表す言葉、擬音語、擬態語、品詞別などの表と練習問題集	・作文指導で活用する。
	気持ちを表す言葉、言い回しの表	・日記指導で活用したい。
	接続詞のプリントや表	・接続詞の使い方がすぐ分かるようなプリントや表。
	オトマトペが表現された動画集	・「のそのそ」歩いている動物など、擬声語、擬態語で表現されたものが映像で見られるものがあるとよいかと思う。（インターネットで一つ一つ検索するのではなく、１つのものにまとめられていて、すぐ授業で活用できるもの。利便性のあるもの。）
	小学校入学前に覚えたいことば集	・教科書に入る前の部分での必要な力がどんなものか具体的に知りたい。
	漢字練習プリント	・漢字の苦手な子どもに対して活用できるプリント。
	学年で習う漢字表と手話	・漢字と手話を一緒に覚えられるようにす

		る。漢字の意味も覚えやすい。
	まちがいやすい言葉を集めたもの	・似たような言葉を集めて、はっきりちがいが分かるようなものがあると良い。
	抽象的な言葉を手話で表したもの	・形のないものを理解するのが難しい児童に役立つ。
	手話と日本語が裏表日本語なっているようなカード	・手話と日本語の両方を理解するためのもの。手話で表現できるが日本語で書けないときに確認できるもの。
	言葉の獲得順の目安	・獲得していくべき言葉は、たくさんあるが目安があれば参考にしたい。
	語彙段階表	・生活年齢に合わせて（1～12 歳くらいまで）必要な語彙が一覧表になったものがあると、それを目安に指導を行ったり、生活で活用していく。
	聾学校用「ことばのべんきょう」に対応した教材	・ワークシートのようなプリントで、自立活動で活用できるもの。
	電子化された手話、指文字、絵カードの拡充。	・手話なども電子データとして活用しやすい状態になっているものはごくわずかで、必要な手話はフォトショップなど使用して合成した絵を作っている。より多くのデータがあると良い。
	学年別の手話の本	・幼児教育を受けずに就学した児童で手話の語彙も少ないため、手話も含めたことばの学習をしているのですぐに使える、学年別の手話のイラスト辞典があるとよい。
その他（1）	県外の聾学校とスカイプ等で討議ができるシステム	・一人学級のため、意見交換等ができず、いつも困っている。児童の考えを深めたり、　広げたりするためにも、実際の子どもが書いた意見文などが読めるようにする。もしくは、リアルタイムで話すことができるようにする。

表 1-11-2　あると良い教材（自由記述：中学部）
平成 24 年度調査

N=51

教材の種類	教材名・内容	活用場面と方法
手話・字幕付き DVD（5）	手話 DVD（検定教科書対応） 字幕付き・手話付き DVD（朗読、古典作品、国語科に関連する映像番組や作品等）	検定教科書に掲載されている教材の翻訳 DVD 映像に合わせ音声も文字も同時に理解できるもの。朗読付(音声)、文字がカラオケのように色が変わるもの。。 作品に対するイメージ作り、意欲や興味・関心を高めるために活用。
教科書に関連するもの（9）	電子教科書（現行の物、改良への要望）	写真、絵等の豊富なデータ、漢字指導用のデータ、文章の内容理解を深められる工夫等が備わったものを望む。 書き込みと印刷が可能な物を望む。 ふりがな付きのデータだと良い。
	教科書本文、教科書に掲載される文章や写真等全ての電子データ	指導書に本文の電子データはついているが、横書きのテキストのため 必要な箇所を選択して提示する。
	教科書の本文(拡大印刷物)	授業中に掲示し、板書と合わせて活用。
教科書とは別の教材（読解指導）（2）	検定教科書のリライト文(３段階レベル)(電子データ版)	言語力のレベルの違う生徒を想定し、いくつかの段階のリライト文があれば、生徒の実態に合わせ、文章を編集し、教科書として使える。
	ろう学校教科書	ろう学校のために編集された教科書。
教科書の補助教材（3）	物語や、説明文など教科書の内容が絵(動画)になったもの。 映像 DVD 教科書の文にあったイラストのデータ	読解をしたあとに、目で見て、確認できる場面があると助かる。 教材に出てくる光景や物、動物等を提示する。 教科書に関連した映像データがあると、より分かりやすく提示できる。
辞書に関するもの（1）	手話の動画辞典	手話の学習で使う。
評価に関するもの（26）	問題集やテストの電子データ版	授業の演習で使う。生徒の実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習や評価を行う。 テスト作成や授業時の発問に使う。 家庭学習、予習・復習の課題として活用する。
	指導書にある問題やワークシートの電子データ	授業の演習、復習、評価で使う。
	聾学校対象の国語アチーブメントテスト	年に１回、到達度評価をみるために、聾学校を対象とした国語のテストがあるとよい。(全国模試の聾学校版)
	読字力検定に出る単語の意味を映像で映せるもの。	読みを覚える、単語の意味をイメージできるように学習する。
文法事項の指導に関するもの（1）	文法事項（助詞の使い方など）のデータ版	くり返し学習することで助詞の使い方を自然に身につける。
語彙指導に関するもの（2）	語彙の用法、意味のデータ版 映像	段階的に語彙力をつけていけるように進める。 例「見る」「注目する」「見つめる」「ながめる」「見渡す」などがわかるようなビデオがあれば、先生が一人で実演するより、わかりやすい。
その他（2）	プラズマディスプレイ	文章、写真、図、地図等を示し、学習の理解や動機づけを生かす。
	各教室毎に設置されたプロジェクタ、スクリーン等	本文を投影し音読時等に使用する。

N=51

教材の種類	教材名・内容	活用場面と方法
手話・字幕付きDVD（5）	手話 DVD（検定教科書対応） 字幕付き・手話付き DVD（朗読、古典作品、国語科に関連する映像番組や作品等）	・文学作品の鑑賞で有効活用する。手話表現の習得に役立てる。 ・人物、場面、感情、助詞など、文に合う手話表現方法を見せるため。 ・古典作品を扱ったＤＶＤはあるのだが、字幕があると、聴覚障害のある生徒にも使いやすい。 ・アニメや映像で話の流れを掴ませ、本文を読み進めていく。作品の成立時代の暮らしや調度品、風習等を、映像によって学習する。 ・授業で手話表現の仕方を確認する。または参考にする。
教科書に関連するもの（13）	電子教科書（現行の物、改良への要望）	・ページ指定がしやすく、時間短縮になり説明などに時間を使えるので ・指導者の口元を見ながら、教科書も見られる。 ・視覚的な支援がしやすく、効率的・効果的に授業を勧められる。
	電子黒板	・実物投影機では、教科書(中学)の本文を十分な大きさで表示することが難しい。本文全体が写せる教材があると便利。 ・文章を画面に映しながら書き込んで説明する。
	教科書本文、教科書に掲載される文章や写真等全ての電子データ	・授業のテキストを読む導入で使いたい。 ・視覚的補助教材として、日々の授業で使用する。 ・授業の時に視覚的に活用する為
	教科書本文ルビ付き	・本文に書き加えができたり、文字のポイント数を変えたりできるもの
	教科の内容に応じた手話の本	・重要語句を手話を含めて確認しながら学習を進める。
	実態把握シート	・教科書の次の単元に進む前にどのくらい習得しているかを事前に把握するシート。シートの結果から、単元の目標を設定する。
教科書とは別の教材（読解指導）（4）	古文などの映像（ビデオ教材）《ルビ付字幕がついたもの》	・市販のものでよい映像、よい内容のものがあっても字幕なしでは理解（聞き取り）が難しい。ルビがないと難解なことばも多いので、ルビ付字幕がついたものが良い。
	文学史についてのビデオ教材《ルビ付字幕がついたもの》	・便覧などよりも、視覚的に簡潔にまとまったもの。ルビ付字幕付のもの。 ・電子データになっていて、１つのテーマあたり

		５～１０分なら、古文や俳句・短歌、いわゆる名作の導入としても最適。
	教科書に出てくる物の写真やイラスト集	・視覚支援として
	電子教科書のような受験対策問題集	・中学部の電子教科書が非常に便利なので、高等部生の授業の時に、同じような体裁でセンター対策など指導できたらよいと思う。
教科書の補助教材（1）	それぞれの教材を日本手話に翻訳した動画、「竹取物語」や「走れメロス」等	・先にイメージを掴んで、ディベートをさせたい時にあると良い。最後に日本語に戻って、日本語の精読をさせる、というような教材の時に手話のビデオがあると良い。
辞書に関するもの（1）	国語便覧の電子版	・古文、漢文、言語事項など、大きく拡大して提示する。
評価に関するもの（10）	問題集やテストの電子データ版	・生徒の実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習を進める。 ・１人１人の間違いやすいところを対策できる。 ・授業の演習で使う。生徒の実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習を進める。また、アプリのように生徒が自分で問題を解き、自分の学習状況を確認できるとよい。 ・授業の演習で使う。生徒の実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習を進める。また、アプリのように生徒が自分で問題を解き自分の学習状況を確認できるとよい。 ・授業作りの業務軽減のため。 ・授業の演習で使う。実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習を進める。(2) ・生徒の実態や学習内容に合わせ、問題を編集して活用する。
	音声＋文字＋手話＋指文字のテスト	・授業の評価の一部に使いたい。
	助詞の定着度を調べるためのテスト	・助詞の定着度について客観的に知ることができる。
文法事項の指導に関するもの（3）	文法の教材	・言葉で説明することが難しい文法（主に単語、助詞、助動詞など）を視覚的に理解することができるような教材。
	作文のドリル	・テーマごとに書ける作文のノートなど
	文法（教科書本文や日常会話でつかう助詞、活用する語など）問題集	・授業の演習や導入時間、宿題などで取り組む。

語彙指導に関するもの（6）	小学校低学年程度の難易度の言葉の問題集	・言葉の意味から、簡単な熟語や言葉を当てはめていく問題集。市販の『言葉力１１００』のよりも簡単なものがあれば良い。
	小学校低学年程度の難易度の言葉の教材。	・言葉の意味から、漢字や言葉をあてはめる問題集。『言葉力 1100』では、難しい生徒もいる。
	敬語の使い方についての創作劇ＤＶＤ	・敬語を教える際に、場面ごとに教えたい。
	漢字を手話で表現するソフトウェア	・漢字をタッチすると意味を手話で表現してくれるソフトウェアがあると良い。
	クイズ形式の問題集	・漢字、四字熟語などの知識についての問題でおもしろい絵入りなどで必須単語などがあったら良い。
	観点別作成問題	・観点別の語彙の問題。
その他（8）	教科書の拡大本文が簡単に写し出せて書き込んだりできるもの	・授業で一斉に本文を見たり、注目させるために提示する。 拡大本文コピーはそれだけで作業時間が膨大
	実物投影機	・集団で、授業課題や、内容を確認し、共通理解を図る。また個に合った学習を進める。
	タブレット型ワーク	・ドリルをするように、空き時間を利用して問題になじむような学習を行う。
	教材書を拡大できる物	・学校に実物投影機はあるが、それぞれの教室に備え付けの物があると良い。
	各教室毎に設置されたプロジェクター、スクリーン等	・ホワイトボードにプリント類を映し、そのままボードで記入する。
	タブレット PC	・でてきた単元の実物を写真で見るとイメージしやすい。
	生徒一人一人のタブレットとそれが記録できるもの	・授業の演習や学習の積み重ね（記録）に使いたい。生徒自身が自分の成長が認識できる。
	インターネットのフル活用	・教育委員会によって閲覧禁止になっているサイトが多すぎて使いづらい。

表 1-11-3　あると良い教材（自由記述：高等部）
平成 24 年度調査

N=35

教材の種類	教材名・内容	活用場面や方法
手話・字幕付き DVD（8）	教科書対応手話 DVD	教科書の内容をろう者の感覚でとらえられるようにする。内容理解、確認のために活用。
	教科書対応 DVD（字幕、手話付き）	文字、ことばだけでは、内容をつかみにくい生徒に。大まかな話の流れをつかむため。
	字幕つき映像（文学作品、古典作品、関連する映像）	導入と全体像の把握(特に学力に課題のある生徒を対象) 事前学習や導入などで映像を見せるとき、字幕があると分かりやすい。
	教科書に載っている作品の手話つき DVD や作品に出てくる用語の手話辞典	高等部の国語(教科書レベル)になると手話辞典にそのまま出ているものが少ないので、作品ごとに手話での表現の方法とかを示す物があると良い。
教科書本文と挿絵の電子データ（4）	全部ふりがな付き本文	視覚による読みの確認、学習の効率化のため。
	電子黒板とそれに対応した教科書のデータ	長文読解において、文章の構造の説明等に使用したい。 教材を映し出し、その上に自由に書き込みができるもの。（書き出したものが印刷できると更によい。）
教科書の補助教材（3）	同一教材におけるリテラシイ文	同一教室において能力差がある生徒の指導に使いたい。
	デジタル資料集	資料集にのっている写真データをディスプレイに出し、説明や話し合いに使えると、共通画面に集中することができる。
	漢文、古文、文法学習用コンテンツ	小テストがわりに、短時間で知識の確認ができかつ、基礎的な事項を指導する際にも活用できるもの。
辞書に関するもの（2）	手話表現と国語の関連が視覚的にとらえられるもの。	品詞毎に手話を学ばせる。(例)形容詞、接続詞、副詞―ボキャブラリーを増やすためにも、日本語の微妙なニュアンスを伝えるという意味でも必要。
	抽象概念を表す手話の違い	(例)1.進歩、進化、発展、成長　2.文明、文化　3.伝統、しきたり、歴史、由来…細かい相違を表したもの
評価に関するもの（4）	単元別の評価規準表	単元ごとに評価規準がまとまったものがあれば、定期的に評価を実施することができる。
	テスト　問題作成システム	加工可能なデータ（教科書に沿ったもの）があり、必要に応じて加工し、テスト問題として形式を超えられるもの。
	シート、教科ふり返り	聾学校の生徒を指導する際に、国語の教科として留意して指導すべき点をまとめたもの。
	作文の評価表	生徒が自分の課題(作文に関する)を理解するために、作文の評価の際に用いる。
文法事項の指導に関するもの(5)	英語の品詞と日本語の品詞との（文法）共通教材	日本語の品詞分解をする時に英文の文法との共通点を思い出せるもの。助詞の意味など。
	日本語の文法力を向上させるドリル(高校生向け)	小学生レベルのものはあるが、それ以上の適当なものがない。単に敬語を覚えるといったものでなく、助動詞、助詞の適切な使い方を押さえつつ、文章力読解力を向上させるものがあるとよい。自立活動や国語の授業で使いたい。
	文法･語彙のテキストやワークブック	高等部の生徒のレベルに合ったものがあれば、特に国語表現Ⅰの学習の中で使用したい。 イラストを使ったわかりやすい文法や敬語のテキストがあると、生徒の理解が進むと思われる。 聴覚障害者の発達段階に合った文法の体系をまとめたテキストまたはテストがあればよいと思う。

作文指導（1）	書く力を育てるもの	短い文しか書けない生徒が多いので、書きたいという意欲が湧くような内容のもの。
読解（2）	<段階的にステップアップできる>「国語」の問題集 長文読解のワーク	小学校や中学校レベルの読解力や漢字力をつけたい場合、市販のものでは学年(例:小３など)が明記されており使いにくいため。 高校生用をそのまま使用すると、語いが不足している生徒には内容が難しく使えない。中１＝中２程度で学年が印刷されていないもの。（生徒の自尊感情を尊重）
語彙指導に関するもの（5）	語彙カード 日常生活で使用する語彙指導教材やテスト 対義語、ことわざ、慣用句、四字熟語カード 敬語に関する問題集や教材	授業での復習や語句の定着を図るために活用。 日常で使うことば(教科書ではあえて習わないような)の習得の程度をはかれるような教材またはテスト 言葉の学習で、ゲーム形式で楽しく、くり返し使用したい。 市販のものは、問題練習のみで、生徒にわかりにくいこともある。もっと場面や状況を限定して、使うことばを考えさせるものがほしい。
その他（1）	プレゼン用教材 日本語学習用音声ＰＣソフト	聴覚障害者がプレゼンを必要とした場面で使用できるもの 発音・聞き取り練習

平成 29 年度調査

N=27

教材の種類	教材名・内容	活用場面や方法
手話・字幕付きDVD（1）	教科書対応手話 DVD	・文学作品などの手話または字幕付のＤＶＤ 単元のまとめや導入として使用する。
教科書本文と挿絵の電子データ（7）	デジタル教科書	・通常の授業の中で
	電子黒板とそれに対応した教科書のデータ	・教科書を拡大提示して、難語句や重要な部分の印付けを指示したりするのに、電子黒板が利用できれば良い。 ・国語の授業で使用。 ・授業で活用 ・電子黒板を毎時使用しているが、現在は、プレゼンソフトで自作している。教材文や、写真、絵などを表示している。
	本文に関する写真や動画	・読解を支援するものとして
	聾学校用教科書の高校生用教科書（絵や写真なども一般の教科書より多い方がよい）	・中学部用の聾学校用教科書を終えてしまうと、教科書として適当なものが見つからなかった。中学校の教科書では文法、古典など、自立に向けての段階の教科書としては適当ではないように思う。
教科書の補助教材（8）	教科書の問題集の電子データ	・テストによる評価がしやすく、課題学習としても本校生に合ったように作り変えることができるため。
	同一教材におけるリライト文	・教科書の文章を、生徒の読解力レベルに合わせてリライトされたもの。
	日常会話や簡単なメ	・コミュニケーションの誤解が起きやすい場面を取り上げて、

	ール文のやりとりの例文集	健聴者と、ろう者の考え方の違いがわかるような内容のものでロールプレイをする。
	ドリル学習用の教材	・家庭学習で使用
	ワークシート	・語句や文法などの聾学校の生徒のつまずきやすいところをスモールステップで学び直しができる高校生向けの教材。自学→評価テストなど生徒の実態や目標に合わせて継続して取り組む。
	実物見本（例）公家や武士の装束、建物の模型など	・使い方や配置を立体的に見せる。
	生徒の意見集のようなもの（データでアップされていくような）	・１人学級のため（少人数）意見が広がりにくく限定的になりやすい。同世代の生徒が同じ単元を学習して、どのような意見を持ったかを知ることができるものがあると良い。
	実態把握とリンクした教材	・例えば、文法の比較文につまずきがあるので、この指導をしたら伸びるといった指導書や教材があると良い。
文法事項の指導に関するもの（2）	市販テストの電子データ	・生徒に必要な問題のみ選択したり、ふりがなをつけて作成できるため。
	・文法の教材	・文章作りに役立つような教材があれば良い。
読解（1）	短編集	・長文読解が苦手な生徒が多いので、８００字程度の短編集があると、補助教材として、あるいは主教材に使える。
語彙指導に関するもの（5）	大判のカルタ（漢字、ことわざなど）	・板書の代わりとして使用する。低学年の生徒や小さな文字を読むのが苦手な生徒などの指導に使う。
	・敬語を使えるようになるためのＤＶＤあるいは、脚本のようなの。	・敬語を使う具体的な場面を寸劇等で表現したＤＶＤを使って、どのように言えばいいのかを考えさせるような学習に使いたい。
	覚えておきたい、日本語表現（言葉）がまとめてある本。（高等部生徒用）	・日々の学習の積み重ねの中で、使用させ、力をつけさせる教材が合ったらよい。
	古典の動詞等活用表	・高１で古典の動詞の活用を覚える際に活用したい。（水性ペンで書きこみ、消せるように）
	国語総合、国語表現、国語現代文	・助詞の使用、敬語の学習用教材（特に副助詞の練習教材）
その他（3）	実物投影機	・書籍の一部は、スキャナー→ＰＣ→プロジェクターという３段の手間が必要だが、実物投影機なら、それ一台あればスキャンすら必要ない。
	プロジェクターやタブレットＰＣ等	・書いたものを拡大したり、他の生徒とその場で共通が図れるとよい。

（ホワイト）マグネットボード（軽量）で細長い形状のもの	・予め本文を書き込んでおいたり、生徒の考えを発表させたりするのに使う。記述したものの並べ変えなどに使う。

算数・数学科

表 3-1-1　教職経験年数

平成 24 年度調査

小学部（N=161）・中学部（N=121）・高等部（N=105）（数値は%）

経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	21 以上
小学部	12.5	9.3	10.6	5.6	8.7	5.0	11.8	36.6
中学部	12.4	9.1	9.9	9.9	4.1	9.1	13.2	31.4
高等部	8.6	6.7	8.6	10.5	2.9	6.7	6.7	48.6

平成 29 年度調査

小学部（N=144）・中学部（N=116）・高等部（N=102）（数値は%）

経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	21 以上
小学部	17.4	11.8	9.7	9.7	3.5	6.9	6.9	34.0
中学部	19.0	10.3	12.1	7.8	6.9	5.2	6.0	32.8
高等部	12.7	9.8	8.8	10.8	7.8	9.8	4.9	35.3

表 3-2-1　聾学校経験年数

平成 24 年度調査

小学部（N=161）・中学部（N=121）・高等部（N=105）、（数値は%）

経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	21 以上
小学部	32.3	24.8	11.8	8.7	8.1	3.1	2.5	7.5
中学部	31.4	19.0	21.5	9.1	7.4	6.6	1.7	3.3
高等部	30.5	24.8	13.3	10.5	4.8	4.8	3.8	7.6

平成 29 年度調査

小学部（N=146）・中学部（N=116）・高等部（N=103）、（数値は%）

経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	21 以上
小学部	32.9	21.2	13.0	9.6	6.2	7.5	2.1	7.5
中学部	42.2	18.1	11.2	6.9	9.5	4.3	2.6	5.2
高等部	34.0	23.3	13.6	4.9	9.7	3.9	6.8	3.9

表 3-3-1　学部経験年数

平成 24 年度調査

小学部（N=161）・中学部（N=121）・高等部（N=105）、（数値は%）

経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	21 以上
小学部	32.3	24.8	13.7	9.3	4.3	1.9	3.7	8.1
中学部	37.2	25.6	15.7	8.3	4.1	2.5	2.5	1.7
高等部	22.9	29.5	14.3	10.5	4.8	7.6	1.9	6.7

平成 29 年度調査

小学部（N=143）・中学部（N=112）・高等部（N=102）、（数値は%）

経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	21 以上
小学部	34.3	23.1	13.3	9.8	3.5	6.3	2.1	7.7
中学部	44.6	18.8	17.9	6.3	6.3	1.8	2.7	1.8
高等部	36.3	23.5	12.7	7.8	3.9	2.9	6.9	5.9

表 3-4-1　担当（所属）

平成 24 年度調査

小学部（N=161）・中学部（N=121）・高等部（N=105）（数値は%）

担当	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
小学部	81.4	7.5	1.2	8.1	0.0
中学部	43.0	28.1	5.0	18.2	5.8
高等部	41.9	25.7	6.7	16.2	7.6

平成 29 年度調査

小学部（N=138）・中学部（N=111）・高等部（N=99）（数値は%）

	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
小学部	79.7	6.5	0.7	13.0	0.0
中学部	47.7	27.0	0.9	16.2	8.1
高等部	41.4	26.3	14.1	14.1	4.0

表 3-5-1　担当学年

平成 24 年度調査

小学部（1～6　N=161）・中学部（1～3　N=121）・高等部（1～3　N=105）（数値は%・複数回答）

	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	重複
小学部	16.1	18.6	19.9	16.8	11.2	11.2	11.2
中学部	50.4	49.6	53.7	-	-	-	16.5
高等部	56.2	44.8	50.5	-	-	-	21.9

平成 29 年度調査

小学部（1～6　N=146）・中学部（1～3　N=116）・高等部（1～3　N=103）（数値は%・複数回答）

	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	重複
小学部	13.6	25.7	15.7	26.4	14.3	14.3	5.7
中学部	53.4	48.3	50.0	-	-	-	19.8
高等部	55.3	50.5	43.7	-	-	-	25.2

平成 24 年度調査

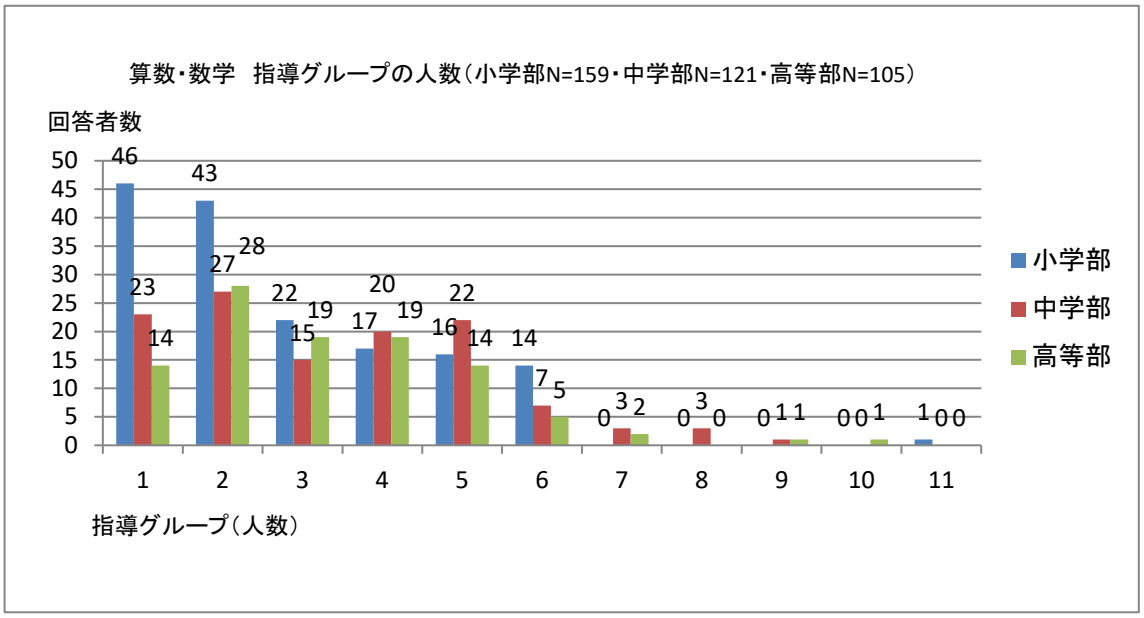

図 3-6-1　指導グループ人数

平成 29 年度調査

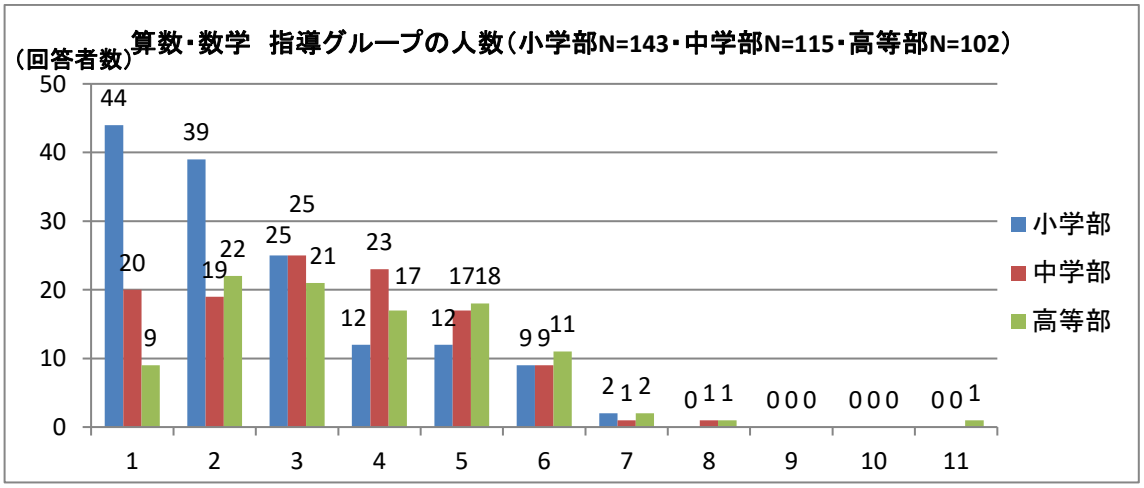

図 3-6-1　指導グループ人数

表 3-7-1　学部別教育課程

平成 24 年度調査

小学部（N=161）・中学部（N=121）・高等部（N=105）（数値は%・複数回答）

	準ずる教育	下学年適用	知的代替	自立活動主
小学部	92.5	25.5	21.1	3.7
中学部	91.7	38.8	25.6	5.0
高等部	87.6	27.6	20.0	1.0

平成 29 年度調査　学部別教育課程

小学部（N=146）・中学部（N=116）・高等部（N=103）（数値は%・複数回答）

	準ずる教育	下学年適用	知的代替	自立活動主
小学部	99.3	22.1	20.7	2.9
中学部	96.6	20.7	25.0	3.4
高等部	89.3	17.5	36.9	3.9

表 3-8-1　コミュニケーション手段

平成 24 年度調査

小学部（N=161）・中学部（N=121）・高等部（N=105）（数値は%・複数回答）

	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
小学部	56.5	82.6	7.5	33.5	12.4	63.4	13.0
中学部	57.0	86.0	10.7	43.0	4.1	65.3	8.3
高等部	51.4	83.8	16.2	39.0	1.0	56.2	2.9

※算数・数学担当者の回答から得られたコミュニケーション手段

平成 29 年度調査

小学部（N=146）・中学部（N=116）・高等部（N=103）（数値は%・複数回答）

	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
小学部	67.1	86.4	9.3	31.4	6.4	63.6	19.3
中学部	56.9	84.5	18.1	37.9	3.4	59.5	4.3
高等部	58.3	88.3	10.7	47.6	1.0	60.2	4.9

平成 24 年度調査

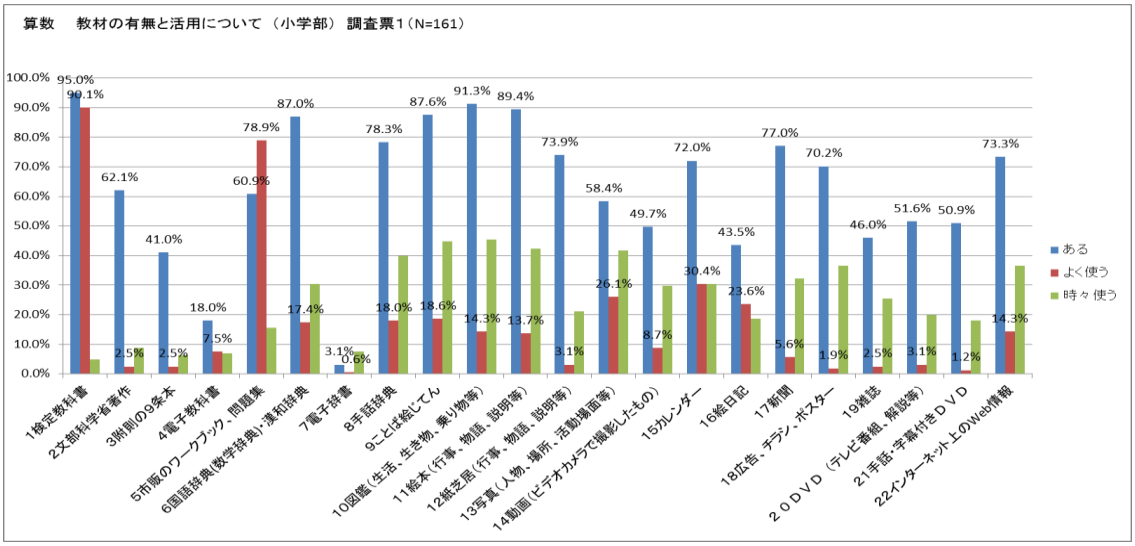

図 3-9-1　小学部（算数）　教材の有無と活用

平成 29 年度調査

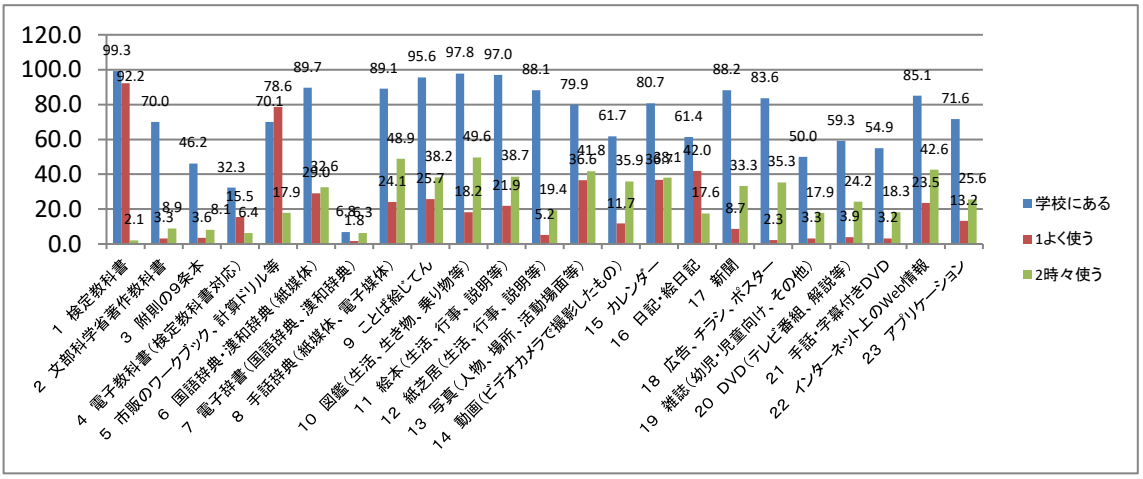

図 3-9-1　小学部（算数）　教材の有無と活用

平成 24 年度調査

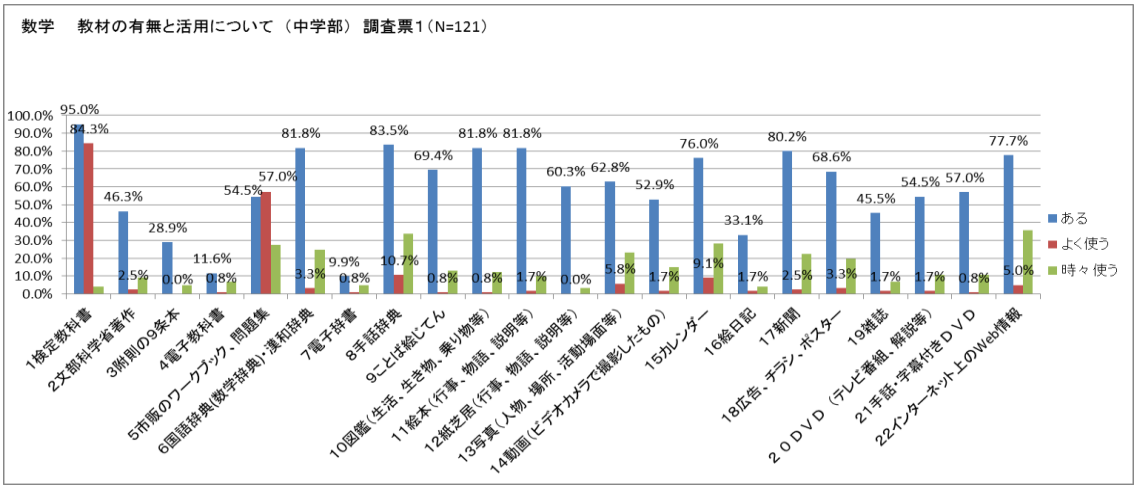

図 3-9-2　中学部（数学）　教材の有無と活用

平成 29 年度調査

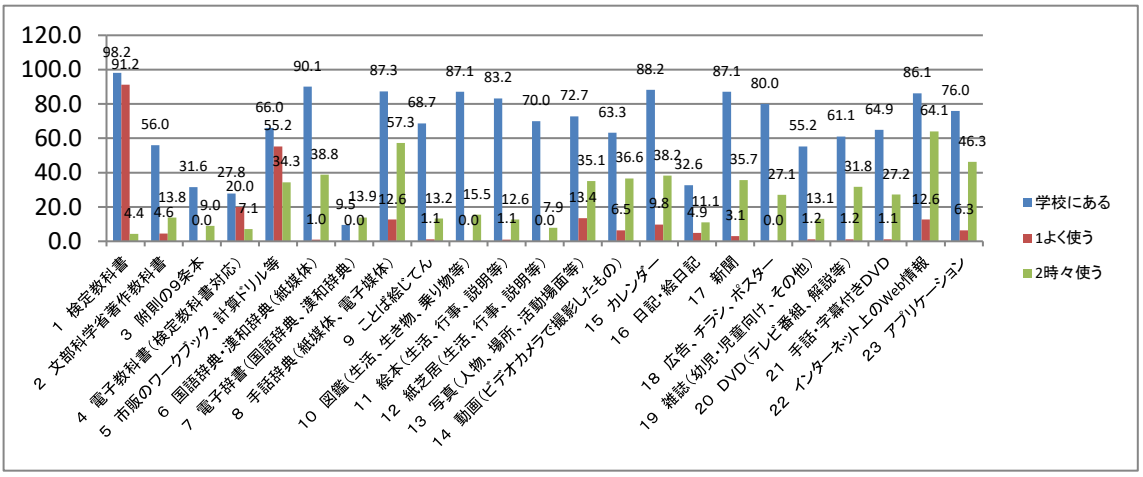

図 3-9-2　中学部（数学）　教材の有無と活用

平成 24 年度調査

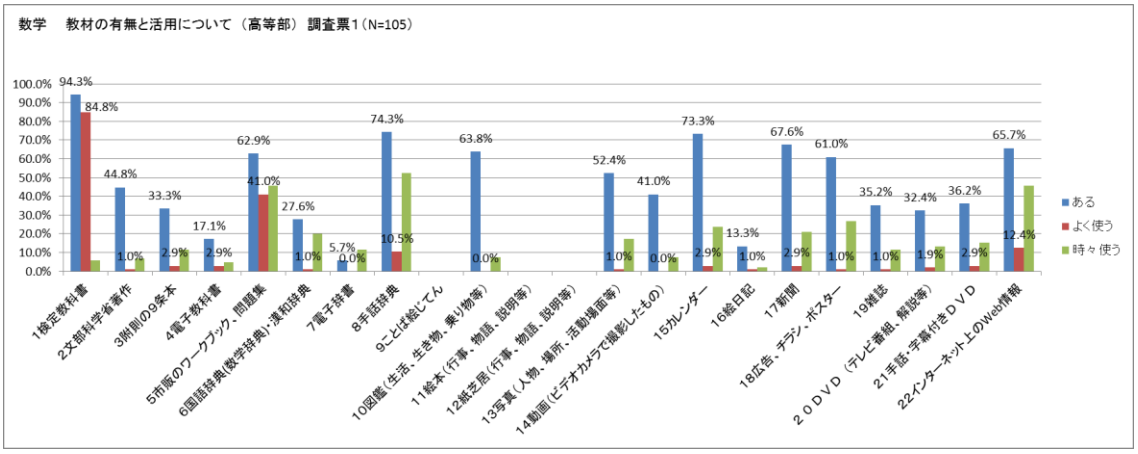

図 3-9-3　高等部（数学）教材の有無と活用

平成 29 年度調査

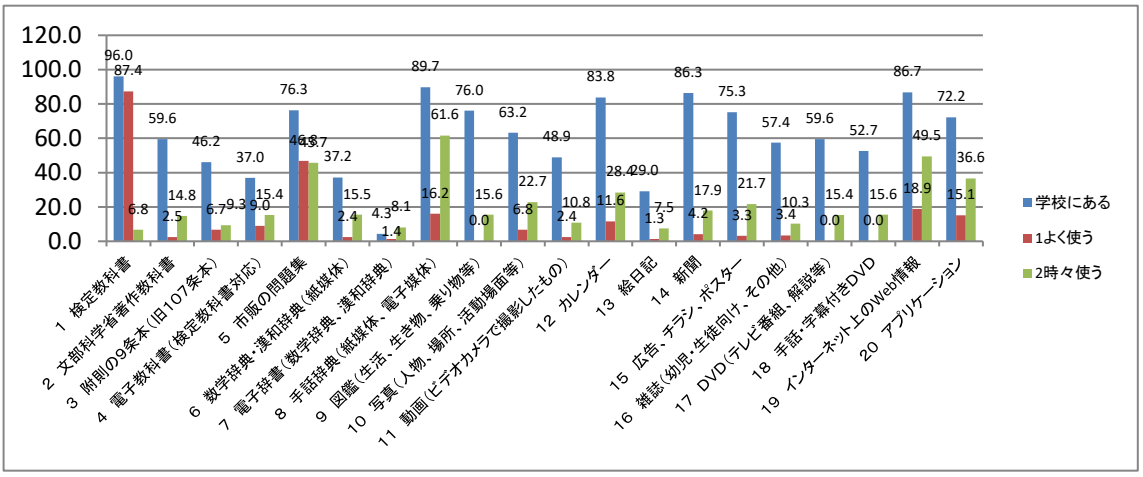

図 3-9-3　高等部（数学）教材の有無と活用

平成 24 年度調査

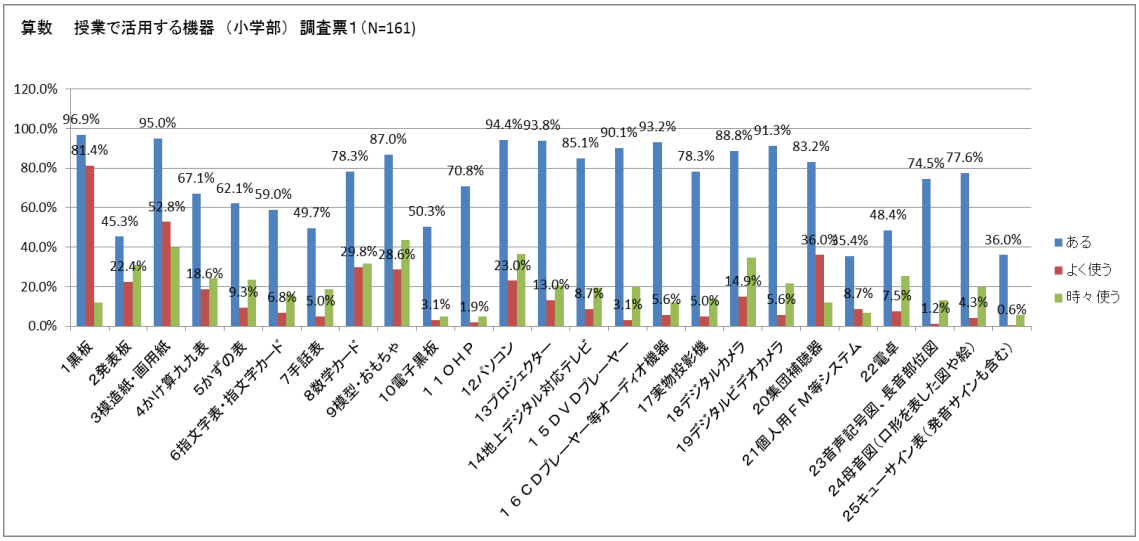

図 3-10-1　小学部　授業で活用する機器

平成 29 年度調査

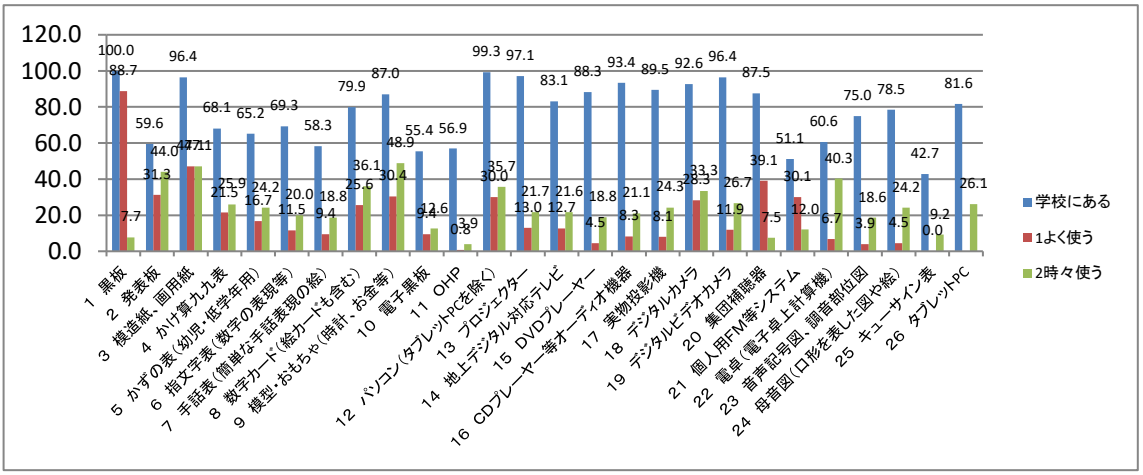

図 3-10-1　小学部　授業で活用する機器

平成 24 年度調査

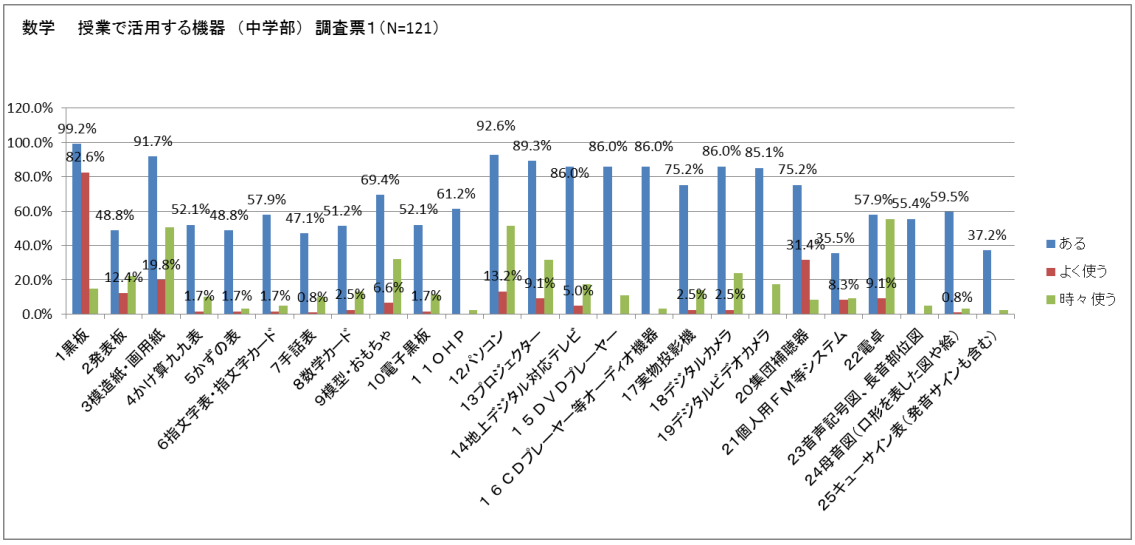

図 3-10-2　中学部　授業で活用する機器

平成 29 年度調査

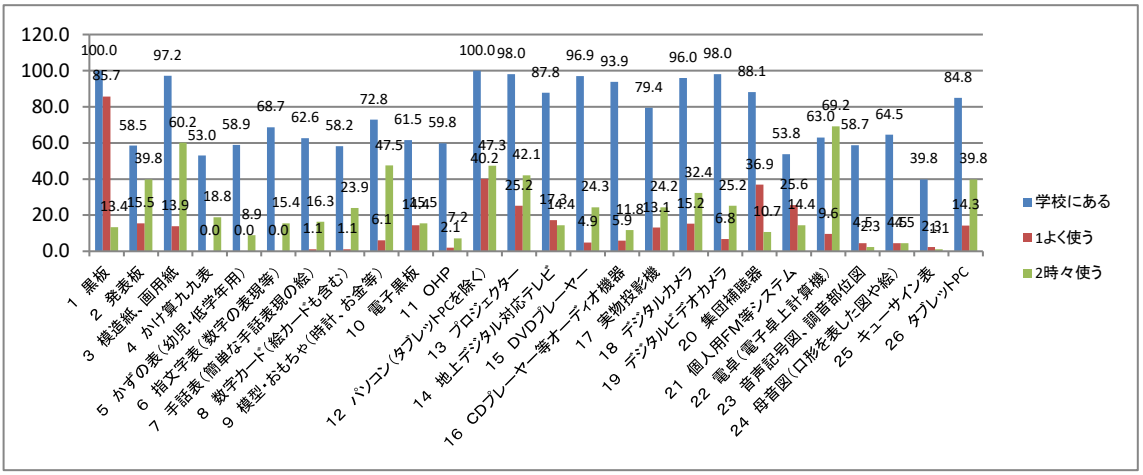

図 3-10-2　中学部　授業で活用する機器

平成 24 年度調査

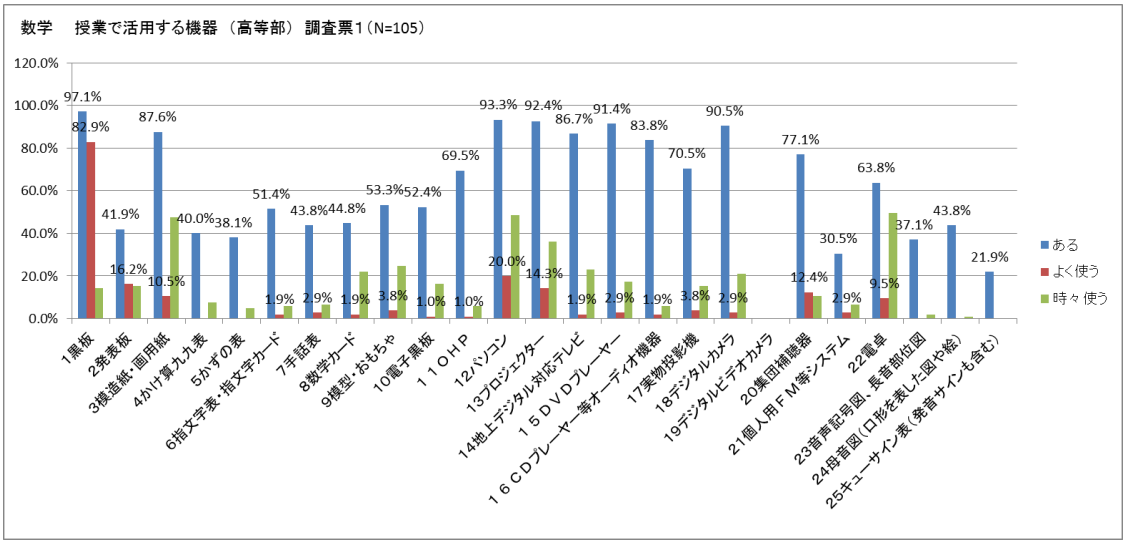

図 3-10-3　高等部　授業で活用する機器

平成 29 年度調査

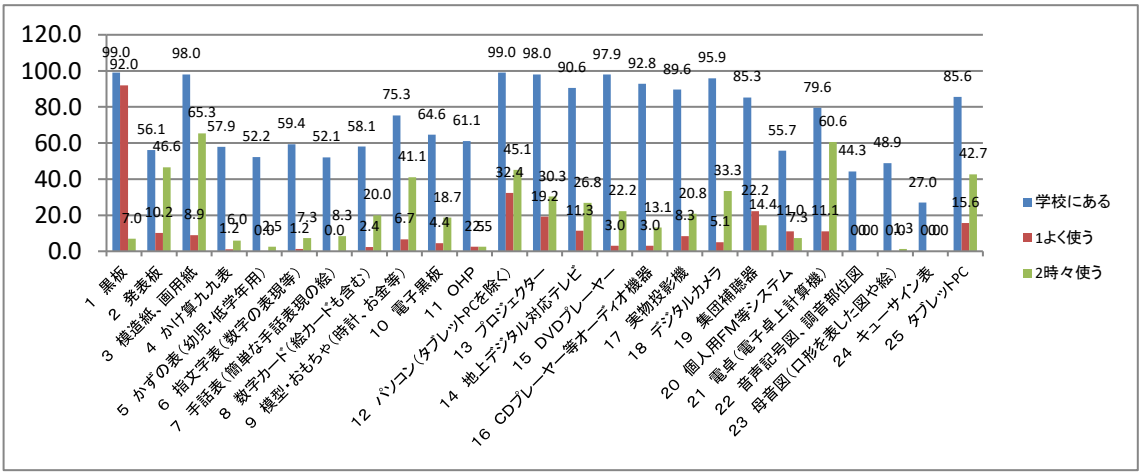

図 3-10-3　高等部　授業で活用する機器

表 2-4-1　自作教材
平成 24 年度調査

(回答 104：小 77、中 2、高 25)

使用用途	教材例	活用内容
教科書の内容の	拡大図	板書のため（小・高）
視覚的情報保障	テープ図	文章題を図示するために使用（小）
の充実（19）	文・言葉カード	問題文を大きくして書く（小）
(小 13)	計算カード	集団で一つのものを見るために使用（小）
(中 0)	スマートボード教材	教科書を画像として取り込み提示(小)
(高 6)	教科書プレゼンファイル	考え方の提示や問題文の提示（小・高）
	パワーポイントファイル	問題文の提示（小・高）
教科書の内容理	学習のポイントカード	学習の中の大切な言葉やポイントを掲示(小)
解を促すための	絵カード	日常生活に結びつけイメージしやすくする(小)
教材(54)	文章題の絵図	たし算、引き算の文章題を分かりやすくする（小）
(小 41)　授業全体	数カード（位取り板）	計算問題や筆算の仕方の説明（小）
(中 1)	場面絵・情景絵	文章題の内容をイメージ化する(小)
(高 12)	パワーポイント教材	操作の仕方が目で見てわかるように提示する(小)
	紙芝居	買い物シーンの紙芝居を作り、そこで計算する(小)
	プリント	生徒の実態にあわせて課題提示する（小・高）
	フラッシュカード	単位・公式を示し思考活動の手がかりとする（高）
	四則計算カード	加減の計算(小)
	九九カード	授業の導入時に毎時間使用（小）
	数え棒・タイル	計算の時に使用する(小)
	かけ算カード（よみ仮名付き）	九九の暗記に使用(小)
	立方体等の図形(自作)	問題提示後に使用し、視覚的に捉えやすくする(小)
特定単元等	時計の読み方・単位	ゲーム感覚で、時計の読み方・単位の理解(小)
	三角形の敷き詰め図	三角形の内角の和を生徒が操作して理解(小)
	プリント教材（エクセル）	一桁の瞬間的な四則演算のプリント教材(小)
	『たしざんフラッシュ』	計算スピードを高める（授業導入時：ＴＶ画面）(小)
	パワーポイント関数ソフト	図形や関数で使用(中・高)
算数・数学に関	文字カード	文章題の読み取りでキーワード提示する（小）
連する言語活動	文カード	問題文を虫食いにして提示し、重要な語を意識(小)
や言語事項に関	日にちの読み方シート	１日（ついたち）２日（ふつか）等の読み方(小)
する教材(12)	用語カード	覚えなければいけない用語や法則を掲示する(小)
(小 10)	あいうえおカード・数字カード	説明及び児童の操作理解(小)
(中 0)	重要事項のカード化	重要なことをカードにまとめ、提示(小)
(高 2)	ことばカード	覚えなければならない言葉をカードに提示(小)
	数学用語カード	数学の専門用語・印象づけたい用語の短冊(高)
学習内容の定着、	学習プリント	文章題の練習・文章読解の経験を積ませる（小）
発展のための教	ワークシート	学習内容のふり返り（児童の進度・理解度の対応）(小)

材(19)	紙黒板	復習場面で使用する(小)
(小 13)	数学の週末課題	その週に行った学習を確認する課題を配布（つまず
(中 1)		いた所に焦点をあてて作成（小）
(高 5)	基礎ドリル（数学）	授業内で問題提起として使用し、家庭学習にも使用(小)
	復習問題	電子黒板で、２択問題を提示（集中力が増す）(小)
	計算力テスト	学校全体（小学部～高等部）を通し進級式で実施
	基本問題プリント	基本問題を繰り返し練習(小・中・高)

平成 29 年度調査

(回答 199：小 100、中 47、高 52)

使用用途	教材例	活用内容
教科書の内容の視覚的情報保障の充実(35) (小 14) (中 12) (高 9)	拡大図	・Ａ４模造紙大に拡大できるため、教科書を拡大して児童と一緒に問題を解いたり、説明する。(小) ・教科書等に描かれた図形を拡大して示し、問題の解き方を一緒に考える。(小)
	カード又は図	・問題文の提示で活用する。 日常生活や社会生活でなじみのある数学的事象を絵や図にしておく。問題文を提示する際、情景図を添え、生徒がイメージしやすくする。(高)
	穴うめＰＤＦ	・黒板の内容をＰＤＦで作成し、プロジェクターで黒板に写す。穴うめの部分を作り、既習内容や、前後の式から生徒に思考させて答えさせる（高）
	提示用模造紙	・ポイントをかいて提示し、黒板の目につくところに貼る。(中)
	言葉カード（大）	・計算や問題を解く手順を学習する場面で使う。復習や確認の場面でも使う。 学習のポイントを押さえる時に使う。(小)
	文字カード	・問題文の提示場面 算数の用語の押さえ（小）
	式の意味カード	・式をイメージしやすいようにイラストも加えて提示する。(小)
	教科書をデータ化している板書データ、プレゼンテーションデータ、教材ビデオ	・プロジェクター表示する。(高) ・あらかじめタブレットで板書計画をし、応じて、プレゼンテーションソフトやビデオを織り交ぜ、生徒の理解を促す。(中)
	教科書紙面の画像（テレビやｉｐａｄ）	・問題の意味の説明や解き方を話し合う際に、その部分を拡大強調して見せる。(小)

パワーポイント	・動きをイメージできるようにする。（小） ・問題文の提示や、数直線や量などの考え方などに使う。（小） ・問題文を画像とともに提示し、内容をイメージしやすくする。アニメーションをつけ、算数的事象を視覚的に捉えられるようにする。（小） ・視覚情報を補うために板書と併用して使用する。（小） ・問題の提示、数直線の提示、問題文をイラストで表し動かすことでイメージを持たせる等、様々な場面で使っている。（小） ・算数の計算の方法をわかりやすく図示するために使う（小） ・動きがある物などは、プレゼンソフトのアニメーションを活用している。（小） ・問題文の提示場面、１文ずつ提示したいとき、絵を入れたいとき増減が分かりやすいように、アニメーションを作成し、実態差に対応するようにしている（小） ・図やイラストに動きを加えたいときにつかう（中） ・ストーリーで興味を持たせ、文章問題の苦手意識を軽減したり、楽しく取り組ませたりすることが目的。（中） ・関数や図形の単元の時に自作したものを使用する。板書に時間がかかるため、パワーポイントで出すことにしている。（中） ・１つのスライドの情報を極限まで減らして、扱いやすく加工し、利用している。（中） ・数えるものを動かして分かりやすく説明したい時に活用する。（中） ・文章題の提示（文章＋イラスト）ポイントのまとめ。（中） ・数学の問題提示に使用、もんたメソッドで解答を開くように使う。（中） ・問題文の提示や、学習内容の説明のため作成する。（中） ・課題のイメージ化の補助（視覚的支援として）（中） ・例、数学Ⅱの三角関数、動径など図形に動きを加えたいとき。（高）

		・確率の授業で問題文をイメージで図示して、生徒の理解を促す。(高) ・授業中の説明文・授業の流れを掲載（高） ・導入やまとめなどをスムーズに行うために、活用する。(高) ・既習の重点事項をまとめたものをいつでも提示できるようにしている。 問題文（今日の学習）の提示。 これまでの学習の違う点を全体で共有している。(高)
	電子黒板提示用教材	・専用アプリケーションを用いて、その授業で必要な視覚情報の提示や、情報共有のためのツールとして活用している。(中)
	重要な式や性質を書き、裏に磁石を貼った掲示物	・重要な式や性質を覚えたり、復習したりするときに使い、視覚を活用して、生徒の理解に役立てる。(高)
教科書の内容理解を促すための教材(120) (小 70) (中 20) (高 30)	学習カード 絵カード	・内容理解のためのカード（小） ・りんごやブロックなど、１つ１つのもの、１０のかたまりのものを用意し、黒板で操作しながら児童・教員ともに説明しやすいようにしている。(小) ・問題文の提示場面 イメージや理解を促す場面（小） ・文だけでなく、具体的にわかるように絵カード等にしておく。(小) ・イメージをしやすいよう具体物を絵にして提示する（小） ・問題文の視覚化に使う。 操作して増える、減るのイメージを持ちやすくするために使う。 数量の関係の視覚化に使う。(小) ・単元の最初の導入として、教科書に沿った絵など提示し、イメージしやすくする。 （小） ・問題文の提示や、他の意見を提示する際に使い、視覚的に分かりやすくする。(小) ・問題文の提示場面で使う。学校や日常生活で馴染みのある算数的事象を絵カードにしておく。問題文を提示する際、情景図として添え、イメージしやすくする。 （小）（４）

絵カード、問題文の紙	・問題文等の提示（小）
絵カード（お金、１Ｌ、１ｄＬマス）など	・立式した後、絵カードを操作させて数のイメージを作る。１Ｌ、１ｄＬマスは、実物を使用した後、(イメージ定着後)、計算時に使用した。(小)
もしくは教科書からコピーした絵カード	・問題の提示で使用する。 教科書に載っている絵や図を拡大したもの、あるいは自作したものを黒板に掲示し、具体的操作を行いながらイメージしやすくする。(小)
果物（お菓子）の模型	・算数の導入等で提示する時に使用。 児童の興味、感心を引き出す。 児童も教師も使用。(小)
絵カードや教具	・問題文の提示の際、生徒が具体的にイメージできるように、身近で興味、関心が高いものを題材に取り入れる。教具は生徒が自力で操作できるようなものに改良したりする。(高)
単位や道具等を絵つきでまとめたもの	・教室内に掲示し、日常生活の中で目にふれるようにする。(小)
写真カード	・先生、子どもの顔写真、教室場所のシンボル、校外学習先等ラミネート加工して、授業で使用する。(小)
提示物	・教科書の説明や図だけでは足りないと思う所を補う。 図や大切な所の強調など（小）
重要な式や性質を書き、裏に磁石を貼った掲示物	・重要な式や性質を覚えたり、復習したりするときに使い、視覚を活用して、生徒の理解に役立てる。(中)
教室掲示物	・大切な公式などをまとめてけいじする。問題をとくときに、子どもが振り返ってヒントにすることがある。(小)
問題解決のため必要な図や数値線など（全体提示用）	・問題文の提示場面～問題解決へと導くやりとりの場面で使う。(小) ・集合数や順序数のイメージをもち易くして、大きな数の学習を行っている。(小)
絵	・説明する際に、できるだけ具体物に近い状況で考える場面で活用している。(高)
数字カード	・実物とマッチングして数の意味を知らせる。（小）
取り表位	・大きな数や小数の学習の際に、位を意識で

	きるように使う。（小）
数字カード	・１～１０の数、数量、指文字を一覧表にまとめた。数を数える時に活用している。（小）
１００、１０、１のカード	・操作しながら数の構成を位をイメージできるようにする。 筆算の仕方のイメージをもたせる。（小）
１の位１０の位カード	・１の位と１０の位が分かるように操作しながら学習するためのカード（小）
位取り板、黒板用、児童個人用	・一億をこえる数を読んだり、書いたりする時に用いる。４ケタに分ける概念を養う。（小）
位取り表や数直線などの視覚教材	・ホワイトボードに貼ってみせたり、児童が動かして考えたりする時に使う。 児童のイメージをふくらませ、思考の手助けとする。（小）
位取り表	・大きい数や小数のしくみの指導の場面で○がいくつで□の考え方を各自記入して確かめる（小）
数カード（漢字、数字）	・数字と読み方が書いてあり、裏面に漢数字が書いてある。（小）
数カード	・数の提示や、指文字の練習場面で使う。ドットのあり、なし、大きさなどを、児童によって指導者が選んで使っている。（小）
公式カードや要点カード	・重要な公式や繰り返し出て来る公式や要点などをカードにまとめ、振り返りの際などに提示する。容易に提示できることで生徒の知識の定着に繋がる。（高）
公式カード	・毎回復習等で使用している。（高）
プリント、掲示教材	・教科書の問題を提示する際、習熟のためのドリルを行う際、スキャナして編集、作成したものを使用する（小）
プリント	・単元のねらいにあったプリント（小） ・（小） ・例題、練習、教科書の確認で使用している。（高）
学習プリント	・学習内容の整理や定着のためのドリル、復習などに使う（小）
問題プリント（掲示用拡大プリント含む）	・学習した内容の確認・復習（小）
教科書の内容でリライトした	・生徒がノートをとる時間を少なくし、でき

プリント	るだけ、前を見て考える時間を確保するために利用（高）
授業プリント	・問題文の提示・図や絵を含めて提示する練習問題（高） ・問題文を分かりやすく提示（図や表など）（高）
学習プリント	・スモールステップで学習を進めるために使用している（高）
説明プリント、計算プリント	・□の中にあてはまるものを答えるように授業を進める内容。（高）
テキスト	・小・中学校の内容を含むなど生徒の習熟や実態に合わせた自作のテキストやプリントを毎時間の授業で使用している（高）
フラッシュカード	・その時間のねらいになっている部分をカードにして視覚的にとらえやすくする。（小）
プレゼンテーションソフトを用いたフラッシュカード	・時計の読み方、筆算、四則演算などをフラッシュカードのようにスライドで作成しておき、復習等で活用する（小）
計算などのフラッシュ教材	・（小）
"フラッシュカード（Ｐｏｗｅｒ　Ｐｏｉｎｔ）"	・復習や導入場面　分章問題の提示（高）
公式カード	・計算する時に一緒に提示する。忘れてしまっている生徒もいるので、確認する時にフラッシュカードのように用いたりもする。（中）
カード	・誤りがあった場合に確認する場面で使う。家で練習をするときに使う。（手順を確認しながら練習する）（小）
指導書の付録の確認テスト集	・単元のまとめ時等に活用（高）
指導書の付録（確認テスト）	・単元のまとめ（高）
計算カード	・学習した、計算をカードにして、くりかえし学習させる（小）
算数の公式を書いたカード	・分数、対称の図形、面積等関連のある単元で、提示し、確認する。（小）
九九カード	・表に九九を裏に各式に対応した図をのせておりイメージをもちやすくしている。（小） ・苦手な九九の確認用に、間違えた時に使って復習する。（高） ・児童と一緒に書き込みながら、学習する。（小）
既習事項カード	・公式や図形の定理など重要なものをカード

	にまとめておいて、何を使って問題を解くか考えさせるのに使用している。（中）
算数セット	・授業全般、具体物の操作を通して数量感覚を養う（小）
ブロック・箱	・面積や体積の学習の際に、イメージを持ち安くするために使う。（小）
ブロック図	・たし算、ひき算場面で黒板上で操作し、イメージできるようにする。（小）
タイル	・数概念の学習の時に使用している。まとまりを理解しやすくなる。（小）
数直線	・大きな数を数える時に使う。数が変わることで１めもりの数が変わり、確認することができる。（小）
目盛りカード	・紙で作っためもりカード。数の大小順番などを確認する時に使う。１０のまとまりを意識させるときにも使う。（小）
ブロックドット	・児童が･算数教材で持っている物を、拡大して、黒板に提示しやすくしたものを使用。（小）
高さを調べる学習教材	・中３の相似のまとめとして使う。実際に測定が難しい高さを、数学の知識を活用して求めることで、数学と実生活での活用を考えるきっかけとしている。（中）
分数タイル 円の面積の学習用	・課題を考えるときや、考えをまとめて発表するときに提示して使用する。（小）
図形	・立方体の学習など（小）
立体模型	・中１図形で利用（中）
カード、図形 立体図形	・視覚的にとらえられるように提示している。（最大公約数、最小公倍数、展開図、面積等）（高）
図形等のパワーポイント	・辺や面、頂点の問題をする時、使っている。（小）
図形の拡大したもの	・図を用いる問題で、教科書の問題と同じ図形を拡大コピーをし、黒板に貼って使用する（中）
図形の性質のカード	・繰り返し使う「図形の性質」では、カードを使ってくり返し使えるようにする（中）
時計のカード	・時を分に、分を秒に変換する学習の際に活用する。図を併せてのせており、イメージをもちやすくする。（小）
模擬時計	・何時が理解できるように、手元で動かせる

	ようにしている。（小）
パワーポイント教材（時計）	・時刻の読み（○時、○時３０分）を学習する場面で使用する（小）
直角三角形	・三角比の学習で活用。（高）
図形	・問題文の提示で活用する。 書き込みした物を復習等で使用する。（高）
図	・三角形などの図をラミネートしてマグネットを付けて活用し。辺の長さや角度を書き込める。再利用が可能（高）
方程式の天びん	・導入の際に使う（中）
べきタイル	・因数分解、展開（中）
わり算（文章問題）のプリント	・児童が文をきちんと読めているかをたしかめるために、文を読んで分かることと 求めることを書かせて、式を書かせる。 絵を書かせる時もあります。（小）
復習プリント	・さまざまな問題にふれながら復習をする（小）
パソコンフリーソフト	・関数のグラフの表示（変化も含め）計算練習、Ｅｘｃｅｌで作ったブラックボックス（中）
パソコンソフト	・方程式、関数のグラフ等のくり返しドリルで利用（技能の定着のため）（中）
関数の増減表	・関数のグラフを書くときに。拡大してホワイトボードに貼り使用している。（高）
グラフや図などのアニメーション	・グラフを描画する動きや、軌跡（図形と方程式）など、イメージしにくいものをアニメーションで見せることでイメージしやすくすることができる。（高）
立体模型	・空間図形の説明で活用（高） ・問題を解く際に立体を見せ目で見て考えられるようにする。（高）
単位換算表や公式などの掲示物	・生徒が忘れた時に、見て確認する。（高）
木製キューブ	・線（Ｘ）、面（Ｘ２）、立体（Ｘ３）の考え方や、数とのマッチング（高）
現金	・買いものの練習や数（金額）の操作に使用する。（小）
お金	・１２０÷３、６００÷３の時の計算のイメージがわかるように。（小）
商品カード、お金、レシート	・買い物の計算を行う際に生徒が視覚的にイメージができるように使う。（高）
１～１０までの具体物教材	・ボーリング、魚つりゲーム、缶つみゲーム、

	すごろく、具体物の写真カード（１０ヶずつ）など、数える学習に活用している。（小）
具体物	・児童が自ら操作し、理解を深めるために使用する（小）
具体物（あめ、ブロック、紙皿） お金（小銭）	・かけ算、わり算や筆算の指導で、手指を動かしながら理解できるようにしている。（小）
お金の模型	・操作活動に使用（小）
大きな時計	
量や長さ、面積の感覚をつかむための視覚的教材	・長さ、面積→実際にその長さのテープを出して紙にはったもの 量→単位変換がしやすいようにＬやｄＬのビーカーを絵に表したもの（小）
お金カード	・問題を解く時に、操作をして使用する。イメージしやすくする。（小）
量概念学習教材	・水の量や分数等の指導場面で使う、操作をしながら単位換算したり、仮分数、帯分数の理解を促す（小）
お金の計算カード	・金額を読み取るときに使う、５０円と１０円５個が同じであることを比較する時に使う（小）
方程式、移項	・ＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔで、左辺から右辺（またはその逆）を動かして、移項する様子を視覚的に理解できるようにしている。（中）
方程式の上皿てんびん	・方程式の導入で使う。左辺と右辺をてんびんの皿に置きかえて、黒板に提示し、方程式の意味や解の意味の理解を促す。（中）
プレイスフォルダ	・「文字の式」の代入の学習の際に使用、文字の代わりに数字を入れるイメージがしやすいように、実際に数字カードを文字を入れて理解を促す。（中）
文字式神経衰弱	・連立方程式などの導入で使う。（中）
グラフソフト	・ｙ＝ａｘのａを変えるとグラフがどのように変化するか、生徒に予測させる（中）
お金の学習	・お金の計算問題で使用。プレゼンのアプリで作成。生徒自ら操作して学習を進めることができる。（中）
正負の数スケーラー	・正負の数の計算で使う数直線。縦方向で数値の増減を考える。（中）

	一次関数トランプ	・式、表、グラフ、文で表された一次関数のうち、同じ関数のものを集めていくカード。式、表、グラフ、文を使い分ける力を育成する。（中）
	てんびん	・（一次方程式の理解を促す。（等式の性質）（中）
	百玉そろばん	・くり下がり引き算の指導でイメージをもたせるため。（高）
	ペンやシール等	・場合の数や確率を考える際手元で動かせるものとして使用する（高）
	お金の計算プリント	・日々の宿題で使用 １０円玉～５００円玉までの様々な全種をまぜて出題（高）
	磁石付きコンパス	・普通のコンパスよりもブレることなく半径を好きな長さに決めて書くことができる（高）
算数・数学に関連する言語活動や言語活動や言語事項に関する教材 (11) (小 5) (中 1) (高 5)	キーワードカード	・問題文の読み取りの際に使う。「分かっていること」「聞かれていること」「１つ分の数」「全部の数」など、大事な部分を押さえる時に意識しやすくする。（小）
		・写真や図等を提示。（高）
	ことばカード	・重要な言葉が登場する時、復習の時に使う。（高）
	ポイントカード	・数学用語やポイントを確認するときに、活用する。 生徒が考え方をイメージしやすくなるように用いる。（高）
	公式カードやグラフ、図、名称カード	・面積や体積のような基礎的なものから乗法公式と因数分解の公式などをマッチングさせる時に活用する。（図形と名称のマッチング等もいろいろ）（高）
	ものの数え方表	・日常生活で使うものの教え方を表にまとめたもので、教室等に掲示しておくことで、教え方についての知識を必要に応じて確認したり覚えられる。（高）
	宿題プリント	・数の読み方等（小）
	数カード	・数の読み方、書き方の確認、並べかえ、たし算、ひき算（小）
	表	・毎日、くりかえし、言い慣れさせ覚えさせたい、フレーズや文章を、大きめの紙に書き、くりかえしとなえさせる（小）

	ふりかえりプリント	・１日の活動中にあったことを１つとりあげ、写真の下に文をつけてプリントを作って宿題にしている。文の中の（　）に言葉や助詞を入れるようにしている。(小
	フラッシュカード（重要語句、イラストなど）	・重要語句については、単元が終わるまで常に掲示をすることが多い。 イラストは文章問題など言葉（文章）の意味をイメージして理解しやすいようにする時に活用。(中)
学習内容の定着 発展のための数材 (33) (小 11) (中 14) (高 8)	自作の練習問題 自作のプリント	・宿題や反復練習する時間に使う（小） ・さまざまな解き方を紹介したり、日常生活の中にどう活用されているか考えさせたりするため（小） ・学習単元により、また、生徒の到達度に応じて使用している（高） ・単元の終了時に、教科書の内容で作成している（高） ・(小)
	習熟プリント 自作のまとめのプリント	・時間での学びの確認の為、児童の実態に合わせ、大事な言葉を〇抜きに書かせたり、計算の仕方がわかりやすいよう枠をつけたり等工夫。宿題として活用している。(小)
	プリント	・類題や、計算練習等板書を写す時間を短縮させたい時や効率性を考えて自作プリントを使っている。(中)
	自作のプリント教材用エクセルシート	・授業のはじめに復習用に用いる。数値がランダムに変化するようになっており、繰り返し学習をすることで基礎の定着を促す（中） ・生徒が問題文を読みとりやすいようにことばをかえたり、改行するところをかえたりしている。(中) ・中１、正の数や負の数の計算、文字式の計算、方程式、中２の文字式の計算、中３の平方根二次方程式等の解き方を定着させる為の計算練習のプリント。数値を簡単にかえて同じ問題をくり返し解いて定着を図る。(中) ・授業、家庭学習（中） ・例題で提示し、練習に使う。(中)

	・教科書の説明が簡単にしたもの。できるだけスモールステップできるようにしている。ノートに貼らせて一緒に確認している。（中）
自作の計算プリント	・毎時間はじめの５～１０分で取りくむ。くり返し取りくむことで、計算の基礎力の定着を図る。（高）
教科書の内容を穴うめ形式にしたプリント	・職業科で採用している教科書がこのプリントを用意しているので、時間短縮のため使用している（高）
自作の宿題プリント まとめの自作プリント	・市販の問題集を使っていましたが、生徒の実態を考えると、自作の方が使いやすい。（高）
ワーク、ドリル問題 （Ｗｅｂ、無料で使用可のもの）	・宿題等で習熟定着をはかるため（小）
自作のワークシート	・調べ学習の時に、結果を書きこみやすいように。（小）
	・課題の理解を深めるために活用する。実際の場面をイメージしやすくする。（高）
問題文	・問題文の理解を促すために使う。わかっていることと聞かれていることを色分けした線を引いて、問題文の意味を理解する手がかりとしている。（小）
個人購入の問題集	・発展問題をさせたい児童に対してコピーして使っている。（小）
問題文（自作）	・児童の生活場面にもとづいた問題を提示する。（小）
文章題などの基本型	・各単元の基本型をもとに指導している。子どもたちは、できるようになっている。（小）
	・それぞれの語いや力に合ったスモールステップの問題を自作して使用している。（中）
	・校内（小・中・高）で統一したものを活用。小１～高の内容を網羅している。全４００枚程度、中学部では週２回×１０分で取りくんでいる。（中）
	・計算問題で使用。生徒が計算ミスをしそうなところを穴うめ問題にすることで、ミスをしないように促している。

	（中）
学級通信	・折々の行事や学習の様子の写真をとりこんだ通信（Ａ４）を作成し、授業の振り返りや家庭学習に用いる。（小）
代入 移項説明器 単語カード	・文字に数字カードが入るもの カードがひっくり返る→手話とリンク 黒板提示(中)
計算トランプ	・計算とその答えを、ゲーム感覚でマッチングさせる。（中）
すごろく	・数字に親しんだり、ゲーム感覚で楽しめるようにする。とまったコマごとにお題を用意し、ふり返り、復習課題ができるようにする。（中）
ＨＴＭＬを使用した教材（自作）	・ＨＴＭＬを使用して数学の公式等がＰＤＰに表示されるもの。昨年学習した内容は全てここから表示している（中）
マグネットシート	・視覚的イメージを持たせるために使うことが多い。（高）
毎月のカレンダー	・毎月初めに作製 授業のある日にシールを貼る（高）

表 2-5-1　このような教材があったら良いと思われるもの
平成 24 年度調査

(72 回答　小 34、中 20、高 18)

使用用途	教材例	活用内容
１板書等の視覚情の充実（22） (小 13) (中 4) (高 5)	教科書の電子書籍	パワーポイントに貼り付けて授業できるように(小)
	大きいそろばん	黒板に貼れるマグネット式の大きいもの(小)
	掛図	特に低学年でイメージをもたせやすい(小)
	軽量ホワイトボード（マス目）	ノートの書き方の模範として使用(小)
	電子教科書	授業で、数直線や教科書の図版を拡大して提示(小・中)
	語彙数が少ない生徒の教科書	文章の意味がイラストつきで載っているもの(中)
	上下黒板	視覚情報をたくさん使いたい（高校の黒板）（中）
	個人ホワイトボード（マス目）	関数の単元で各自がグラフを作図し掲示する(高)
２提示用（教科書・図形）ソフトウェア(13) (小 10) (中 0) (高 3)	ipad での PC ソフトウェア	アニメーションなど三次元（立体）表示(小)
	式のイメージ可視ソフトウェア	数や量を操作しているかが分かるもの(小)
	図形に関するソフトウェア	立体の見取り図や展開図の表示(小)
	ブロックの位取り板（３ケタ）	見て、あとどれくらい入るのか分かるもの(小)
	フラッシュ動画教材	例えば、確率でサイコロを何千とふるようなもの(高)
	いろいろな関数ソフトウェア	任意の値でシュミレェーションできるもの(高)

３計算練習用ソ	数の計算ソフトウェア	かけ算、割り算（学校のだれでもが使えるもの）(小)
フトゥエア(3)	自学用計算練習ソフトウェア	習熟度に合わせて楽しみながら、効率よく行う(小)
(小 3)(中 0)（高 0）	文章題ソフトウェア	文章問題の練習（文章題内容のアニメ-ション）(小)
４操作関連教材	計算のアプリサイト使用	web 等経由でのシュミレェーションや操作(小)
(7)	教科書と同一の模型	教科書の絵のイメージを実物で操作させる(小)
(小 3)	具体物の模型	果物、虫（立体的な模型）(小)
(中 4)	生徒が自作できる教材	自作教材で、計算や公式の手順・意図が理解(中)
(高 0)	文章題用具体物・絵・写真	文章題の読み取り場面でイメージしやすくなる(中)
５問題集・九九等	単元ごとの簡易問題集	どこの学年（単元）でつまずきがあるか(小)
練習教材(6)	九九のＣＤ	聴覚障害があっても使えるもの（保護者の希望）(小)
(小4)	日常生活の算数能力テスト	買い物、食べ物の分配、単位と距離感、時間感覚(小)
(中1)	数の発達段階にそった問題集	生徒の実態把握'(中)
(高1)	演習問題	教科書と標準問題の間を埋めるようなレベル(高)
６テスト集計用教育	企業開発ソフト(web等)	テストの結果を入れるだけで、得点集計と個人診断可能
事務ソフトウェア(2)		個別の指導計画の参考になる）(小)
(小1)	成績の比較	過去の生徒とも比較できるもの(高)
(中0)(高1)		（１位○年度　高２ペンネーム　△点のようなもの）
７評価の検査（意欲・	意欲等調査	生徒の実態に教材や教具は生徒に適しているか(中)
習熟度）(12)	学習グループ分け評価	グループ分けが適正に行われていることの根拠(中)
(小 0)	観点別評価問題集	テストを作成する際、観点別に評価するための参考
(中 6)	基本問題集	基本事項のみを学習する生徒評価(中)
(高６)	実態把握検査	数学の基礎力（小～中学）の把握(高)
	評価プリント	単元別ごとの確認プリント（多くの量が欲しい）(高)
	自分でまとめるワークシート	単元後に理解度を測るため(高)
８生徒用パソコン・	タブレット	個人個人の分からないところが検索できるように(中)
電子機器(3)	生徒用電子ノート	生徒の机に実物カメラがあり、書いたものがすぐに
(小 0) (中 3) (高 0)		黒板に提示できるもの(中)
	学習意欲をたかめるもの	学習後に、ネット上の教材を練習する(中)
９他の学校の実践情報・	授業実践・教授法	他の学校での授業方法や実践が共有できるように(中)
問題データベース等(2)	問題データベース	課題問題の作成(高)
(小 0)(中 1)(高 1)		
10 言語事項に対応する	手話付きの数学史	数学に関する有名な人物の紹介(中)
教材(2)(小 0)		
(中 1)(高 1)	高等数学の手話表現	授業中に使いたい（現在は生徒と相談して決める）(高)

（116 回答　小 45、中 32、高 39）

使用用途	教材例	活用内容
１板書等の視覚情の充実(23) (小 10) (中 5) (高 8)	教科書の電子書籍 最新のデジタル教科書	・授業（中） ・現在学校にあるものは、子どもたちの教科書と違うことがあるので、繰り上がりが目で確認できたりするデジタル教科書があればと思う。（小）
	デジタル教科書	・教科書と内容のリンクしたデジタル教科書があれば、電子黒板等を使っての学習も可能に。費用面での課題解決が待たれる。（小）
	教科書の内容がその通り表わせる電子教科書	・毎時間使いたい。クリアに見れるものがほしい。（小）
	１００インチサイズの電子黒板	・より具体物に近いものを提示でき、運用が黒板より良く効果は大。（高）
	電子教科書	・内容の理解を深めるためのコンテンツが充実しているので、必要に応じて補足的に視覚面での支援に使いたい。（小）
	電子教科書の無償配布化	・イメージの持ちにくい聴覚や知的に障害がある子には無償で電子教科書を配布することが望ましい。対処療法的に教材ソフトを作るのではなく、その予算を使って、教科全体をサポートできるようにすべきではないか。（小）
	デジタル教科書及び附属の生徒が学習するデジタルアプリ	・スモールステップで提出する部分を選んで、授業のすすめ方を教師が選択できるものが出てきている。もっと安価に使用したい。高価で手が出にくい。（中）
	デジタル教科書 電子黒板	・授業時に使用（高） ・図や写真を提示したり、それにかき込んだりすることで、学習内容への理解がよりスムーズになると思われる。（小） ・（小） ・関数で連続する変化を見せる。 図と公式の関連性（視覚情報）（高）
	数直線や線分図が書かれた小黒板	・問題を解く際、活用。 児童同士の思考の際につかわせる。（小）
	ビジネスプロジェクター（電子黒板）	・黒板を方眼用紙のように表すことで、図形等の辺の長さや大きさを理解しやすくなると思う。また、タブレットが普及した際に子どもの考えを投影し、共有するなど色々な使い方が期待できる。（小）
	電子黒板か実物投影機（持ち運びに便利なサイズ）	・スムーズに教室間を移動させて、授業で活用したい。（小）

	電子黒板とそれと、通信できるタブレット。	・書くことの意義は有ると思いますが、どうしても、遅れがちになるので、時間短縮をして、課程に遅れが生じないように活用したい。(高)
	黒板本体に問題を映せるプロジェクター	・ｅｘ：文章問題を投影してポイントや線をかきこめるように（高）
	生徒の解答や考えを電子黒板上にすぐに投映できるようなシステム	・生徒の解答や考えを電子黒板上にすぐに投映できるようなシステム（高）
	デジタル教材（無償のもの）	・授業での活用（中）
	問題に合った動画	・動点の問題や他の文章題（教科書の）において見ることで、題意が理解できるものを使って、文章表現の方法や、文章やことばの勉強にも、つなげられるものがあると良い。(中)
	文章題のイメージ化したアニメーション	・視覚的情報の活用。 言葉（文章）から、イメージ化し、数学的な考え方を身につけたい。(中)
	大型モニター（各教室備え付けのもの）	・教材の提示（導入部）やまとめなどで使用。(高)
	テストや確認のためのもの	・動画があるとよい。関数（高）
２提示用（教科書・図形）ソフトウェア(26) (小 19) (中 4) (高 3)	図形に関する PC ソフト	・上記と同じで、立方体の学習、体積を求めたりする時に、アニメーションで見たりするソフトがあれば、理解しやすいと思われる。(小)
	ｉｐａｄで動く図形アプリ	・角柱や円柱などの立方体を学習する際、回転させて、いろいろな角度から見たり、見取り図や展開図になる過程をアニメーションで見たりすることで、図形へのィメージが深まると思われる。(４)(小)
	３Ｄ立体（立方体体積）がイメージしやすいＰＣソフト	・(小)
	立方体と直方体の展開図がわかるソフト	・実際に工作用紙で作らせるが、数に限りがあるので、いろんな立体を展開し、イメージをふくらませたい。(小)
	文章題や図形のシミュレーションソフト	・デジタル教科書（指導書）である程度視覚的に理解を補っているが、もっと自由度のあるシミュレーションができるようにしたい。(中)
	空間図形を回転させたり切断面を提示できるソフト	・空間図形の性質やその図形を基にした２次曲線等の提示に使う。(高)
	１０００００００ｃｍ^3＝１ｍ^{3}の分かりやすい	・(小)

ソフト	
図形や数量関係に関するソフトや視覚教材	・目で見て形や量関係がわかる教材があると良い。（小）
図形の描き方の映像	・道具の動かし方や描く過程を映像で見せることでイメージがつくし、確認ができる。（小）
分かりやすい動画教材	・文章で説明するより分かりやすい。視覚的に理解しやすいものがあれば、どの単元でも使いたい。（小）
聴覚障害者用の教科書	・（小）
数の概念が身につくようなもの	・映像などで、数や単位の概念が身につくようなものが欲しい。（小）
視覚的に分かるデジタル数直線（板書用ホワイトボードでも）	・例えば１／２と２／４が同じなど、目で見て分かる数直線図があると良い。色をつけたり、消したりできるもの。他にも、同じような数直線を書かせることが多いので、ホワイトボード用教材があると良い。（小）
抽象的な概念を視覚的に表現できるソフト	・"具体から抽象になっていく算数で、苦手意識をもつ児童も多いので・・・ ｅｘ）単位量をならすことや、平面、立体がどれくらい大きいかわかりやすくできるものなど・・・"（小）
時間の経過が時計の針の動きとともに分かるＰＣソフト	・時の経過が線分図や模型で理解することが難しい児童に対し、経過が針の動きとともに表わされるソフトがあると、時間の計算等につながると思う。（小）
時計に関するＰＣソフト	・時間の経過を動画でイメージできるような教材。（小）
タブレット端末で使える無料の算数のアプリ（量、体積、立体）	・三次元のもののイメージをもてるように。（小）
図形や計算など個人が使える算数全般のアプリケーション	・個別指導時に（小）
関数を理解するための教材	・関数の指導の導入時に活用できるとよい（中）
教科書に対応したパソコンを使って使用できるソフト	・特に、関数のグラフ（比例、反比例、１次関数、２次関数など）について、パソコンで作成できるものがあるとよい。例えば、ｙ＝２ｘ＋１の入力から、グラフが作成できるもの。（中）
比例・反比例・一次関数などのソフト	・パソコンで、数値を入力したり、図形を選ぶと簡単にグラフや立体が出てくるソフト。
回転体のソフト	☆高価だったり、使いにくいときがある（中）
パソコンソフトというかデータ。	・２次関数のグラフがプロットされ描かれる動画。 場合の数の樹形図ができるような動画。 （インターネットを探すと、計算などの細かい資料や、パターン分析などはよく見ますが、視覚に訴えるよう

		な動画はないようです。）（高）
	計算ドリルのソフト（小１～高３）数ＩＡⅡＢⅢ	・小１～高３まですべての計算が入ったドリルがあると使いやすいかなと思います。生徒の実態（どこまでできているか）を把握するのに便利かと思います。膨大な量になってしまいますが・・・・。（高）
３計算練習用ソフトゥエア(３) (小 2) (中 0) (高 1)	単位換算理解定着に関するＰＣソフト	・ｃｍ　ｍｍ　㎠　㎤　Ｌ　ｍＬ　等の読み方が音声、文字として定着してないこともあり一層、小数を使った換算が難しい様子。数字や単位がアニメーションで繰り返されたり加えたりすることで自ら確かめられるようなアプリが便利だと思われる。（小）
	文章題ソフトウェア	・文章問題をイメージするために、アニメーションの動きをみながら思考するためのソフトがあるとよい。（小）
	ソフト	・２次関数や１次関数、グラフとグラフの交わりや関係性が視覚的に分かり、そのグラフ等を、パネルタッチで（画面を）自由に操作（移動）できるようなソフト。（あるのかもしれませんが…。）（高）
４操作関連教材 (18) (小 6) (中 3) (高 9) 返	ひっ算アプリ	・筆算を入力するとその過程をふくめて動画がながれる。（小）
	小数、数、大きな数の十進法のしくみの教材	・何とかの 10 倍が何とか、何とかは何とかの１／10、などの助詞を使った文章での理解が困難であるため、10 倍や 10 等分をアニメーション化したものを繰り返し見ることでイメージが深まるのではないかと思われる。（小）
	立体図形（現在もいくらかはある）	・実際に手でさわって、理解を深める（小）
	かけ算、わり算に関する具体物（多数）か画像とＰＣソフト	・具体的に物を操作することで、概念を身につけさせたい。（小）
	平面図形や立体図形を移動できたり切断できたりするもの	・頭の中だけでは処理しきれないものを可視化することで問題に対する理解が深まる。（中）
	マジキャップ（磁石付きプラスチック平板）	・立体図形の学習。（高）
	黒板などに固定できる立体模型。	・説明（手話）のために両手を離しても生徒の見える位置に提示したままにしたい。（高）
	図形、とくに空間・立体	・基本の立体、切断等ができるようなソフト 様々な角度から見ることができる。（高）
	自由に形を変えられる空間図形	・空間図形のイメージをもてるように自由に形をかえられるものがあると良い。（中）
	操作が見える（できる）	・（小）

	具体的教材	
	図形に関する教材	・頂点と辺のしくみが分かりやすくなる。(小)
	グラフが描けるもの	・プロジェクターやパソコンを準備しなくてもグラフを描いて残せるものがあったらよい。(中)
	教材データベース	・パソコン、タブレットＰＣを使用する機会が増えてきたので、アプリ、動画、資料など共有できたら、授業計画の参考になる。(高)
	デジタル教材（生徒の自学自習用）	・少人数授業にしていても、理解の個人差が大きいので、早い生徒が待つ時間が増えてしまう。市販の問題集は難しすぎるので、難易度を指定できるようなデジタル教材があると便利。進み具合を教員側が確認できるとさらに良い。(高)
	マグネット付きの平面図形	・空間図形の単元で実際の型を見せられる。(高)
	空間座標説明器	・ねじれの位置、直線と平面の位置関係などを説明（高）
	２つの円の位置関係を黒板にはって説明できるもの。	・中心間の距離と半径の関係を、手話で説明しながらずらしていけるようなもの（黒板にはりたい）(高)
	空間図形	・空間図形を多角的にとらえられるような教材。(高)
５問題集・九九等練習教材(21) (小 2) (中 6) (高 13)	標準化された課題集	・"単元のまとめとして行えるもの。 この課題を解くことができれば、内容は理解できていることがわかる標準化された課題集"（高）
	難易度で分かれている問題集	・まとめ用で各単元ごとに使用する。(高)
	九九を使ったゲームができるもの	・九九が苦手な児童が多いので定着させるために、遊んで楽しく身につくようなものがほしい。(小)
	問題集	・スモールステップでできるような問題集が欲しい。(中)
	絵や図がある問題	・言語力が乏しい生徒に文章問題を解かしても理解に時間がかかるため、絵や図がある問題がほしいです。（小学校低学年の教材にはそれがありますが、高校生向けの問題集はほとんど文章だけ、文章の読解力がない生徒のために、毎回、絵や図などを描いています。（高）
	問題集	・スモールステップで学習できるような問題集（高） ・脳を鍛えるチャレンジドリル（高） ・プリントキッズ（高） ・ちびむすドリル
	課題プリント	・パソコン上でフリーでダウンロードして、すぐに使えるものを宿題や、課題として用いたい。(高) ・各単元の導入に使えるもの。(中)

	テストやプリント作成	・多くの問題が入っており、選択して、プリントが作れるもの。必要な物だけをまとめることができる。（高）
	タブレット用ドリル形式アプリケーション	・数学Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，A，B，Cの内容で、授業で学んだ内容を家庭学習等で反復練習できるような、ドリル形式のアプリケーションソフト。（高）
	既習事項を単元ごと学年ごとにまとめたカード	・児童が自ら既習事項の確認に用いたり、既習事項を教師が提出したりする。学年ごとにあることにより下学年のものも見られるようにする。（小）
	問題づくり	・実際に起こり得る場面を想定した問題作り。（中）
	データベース	・ＰＣで、問題などプリントが作成できるソフト（数研出版のスタディ・エイドなど）（中）
	文章問題の説明されているもの	・絵などを用いて文章問題の意味が理解できるような本があるとよい。（中）
	準じた教育に関わらず、数学（算数）内容を、フィードバックして学習できる内容のもの	・家庭学習での活用、単元で弱い部分の活用（中）
	☆本の内容をさらに深め、社会生活で必要な内容を精選した教科書	・知的障害に伴う重複の生徒への指導の際に使う。（高）
	事象をよりいイメージし易いように、絵や図を多く取り入れた検定教科書	・通常学級に在籍する生徒への指導に使う。問題などの事象について、なかなかイメージが付きにくいものに対して理解を深める。（高）
	中・高の内容が系統的にかかれているテキスト・教材	・中学校の内容から高校への内容（数学Ⅰ・A）へ系統的に指導することができ、中学校の既習事項をすぐに振り返ることができるようなテキストや教材。（高）
６テスト集計用教育練習教材(2) (小 1) (中 1) (高 0)	民間会社との提携	・現在、チャレンジタブレット（ベネッセ社）等、視覚化、ゲーム化され、子どもにとても有効であろうと思われる電子教材はたくさんある。それらの１つと提携し、活用すると良いと思われる。（小）
	生徒の毎時間の評価を蓄積できるもの	・PC などを使い、生徒の評価を毎時間短時間で入力でき、通知表の算定に活用できるものがあるとよい（中）
７評価の検査（意欲・習熟度）(9) (小 1)	発達に問題をかかえている子に対する評価基準があれば知りたいです。	・教科書対応で合同で授業をしているので教科書対応の中で必ずおさえた方がよい基礎的なものだけ精選したものなど（小）

(中 7)	新学習指導要領の新しい	・評価するため（中）
(高 1)	視点を調べる。テスト以外のもの	
	本県の過去の入試問題のデータ集	・中学３年で入試に向けた学習で活用できるとよい。（中）
	ルーブリック評価のテンプレート	・各単元や小単元ごとの、ルーブリック評価表の１つの基準となるものがあれば、使ってみたい。（中）
	内容理解を調査するもの	・生徒の内容理解がどの程度か、単元ごとに他校の中学生と比較できるようなものがあると、自身を客観的にみることができると思うため。（中）
	小～中の全学年のテストが１つになっているようなもの	・小～中までの全学年の全単元がどれくらい理解できているか調査できるテストとまとめられる表があり、その子がどこがぬけているのか分かるようなもの。（中）
	学習意欲を調査するもの	・生徒の実態を把握するため。教材や教具が、生徒の実態に適しているのか、効果はあるのかなどを把握できると良い。（中）
	語彙チェック、テスト	・数学に関する単語などを知っているか、説明できるかをチェックするもの（中）
	学習評価表（パソコンソフト？）	・小学校などで使用されているが、各教科、各単元ごとのテスト（確認）と、観点別評価が合致していて、数字を打ち込む（テストの結果を）と、観点別評価ができるようなもの。（高）
８生徒用パソコン・電子機器(3)	個人１台のタブレットＰＣと安定して速いネット環境	・カメラ機能、調べ学習の時に活用する（小）
(小 3)		
(中 0)	各教室に１台の大型ディスプレイ	・全体指導時に（小）
(高 0)	児童用タブレット	・量や図形等のイメージをつかませたり、楽しんで計算練習に取り組ませたりしたい。（小）
９言語事項に対応する教材(6)	全国共通の数学用語辞典	・用語を手話で覚える生徒もいる。学校独自で作った手話でなく全国統一で使われればいいと思う。（高）
(小 1)	数学の専門用語の手話辞典	・市販の手話辞典では見つからない専門用語があり、伝える時に苦労している。（高）
(中 1)		
(高 4)	数学用語の手話辞典	・常に必要（高）
		・今ある物では用語が足りないので（高）
	量の呼唱（音韻？）に関するタブレットもしくはＰＣアプリ	・「１ぽん」「２ほん」「３ぼん」のような子音の変化や「一月（ひとつき）」「１分（いっぷん）」等の数字の日本語独特の呼唱変化に関するデータベース、それを使ったドリルやフラッシュカードが作成できるアプリ。ソフトではなく、アプリで作られることで、随時更新される

		のが望ましい。(小)
	算数がおもしろくなるマンガ	・算数が苦手な生徒が多いので、マンガを見て、理解できるマンガがあればうれしい。(中)
10 その他(5) (小 0) (中 5) (高 0)	身近な場面で数学が使われている例	・「数学なんて社会に出てから何の役にも立たないから勉強しても無駄」と考えている生徒に具体例を提示することができる。(中)
	生徒の思考がみえるもの	・教科書のどこの部分をよんでいるか。(意外とよんでなかったり、文ではなく言葉だけをみて判断したりしている) 言葉の意味がわかっているかわかるもの。夢のような機械があったらいいなーと思って書きました。すみません。 (中)
	職業疑似的体験	・マーケティング調査など、勉強した内容を実際に用いている職業を疑似的に体験できるようなもの。(中) (3)

外国語活動

表 3-1-1　回答のあった学校数、総回答数、有効回答数

	回答学校数	総回答数	有効回答数
平成 24 年度	82 校	132 件	128 件
平成 29 年度	95 校	132 件	123 件

表 3-1-2　教職、聾学校、小学部経験年数　(%)

		0～3年	3～6年	6～9年	9～12年	12～15年	15～18年	18～21年	21年以上
平成24年度	教職	10.2	13.3	9.4	7	6.2	11.7	9.4	32.8
	聾学校	28.9	22.7	19.5	9.4	7	3.9	3.1	5.5
	小学部	35.2	24.2	18.8	10.2	1.6	5.5	2.3	2.2
平成29年度	教職	12.5	15.0	9.2	3.3	11.7	7.5	4.2	36.7
	聾学校	29.2	21.7	15.0	9.2	10.8	5.0	1.7	7.5
	小学部	32.5	25.6	16.2	6.0	6.8	4.3	1.7	6.8

表 3-1-3　担当（所属）　(%)

	担当(所属)	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
平成 24 年度	N=128	71.9	11.7	0.8	10.2	5.4
平成 29 年度	N=114	66.7	9.6	0.9	14.9	7.9

表 3-1-4　　担当学年　(%)

	担当学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	重複
平成 24 年度	N=128	0.8	0	0.8	3.1	40.6	48.4	6.3
平成 29 年度	N=138	3.3	1.6	4.9	8.1	40.7	43.1	10.6

表 3-2-1　コミュニケーション手段　(%)

	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
平成 24 年度	54.7	75.8	8.6	44.5	9.4	68.8	25
平成 29 年度	64.2	78.0	8.1	35.0	8.9	61.0	25.2

表 3-2-2　児童数及び指導者数

平成 24 年度 N=126　未回答 2 名　　**平成 29 年度 N=117**　未回答 6 名　　(%)

	児童数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平成 24 年度	回答数	17	26	32	17	9	9	8	4	1	2	0	1
平成 29 年度	回答数	1	27	19	18	20	12	8	5	1	1	3	2

表 3-2-3　教科書等の教材の有無と活用頻度

平成 24 年度調査

(%)

	教材	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない
1	英語ノート１、２	128	96.9	0.8	2.3	123	45.5	26.8	27.6
2	教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	122	17.2	5.7	77.0	89	1.1	20.2	78.7
3	市販の英語テキスト、ワークブック	124	19.4	32.3	48.4	100	9.0	37.0	54.0
4	カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	123	51.2	27.6	21.1	110	49.1	37.3	13.6
5	語学学習用ＣＤ	124	55.6	4.8	39.5	108	4.6	20.4	75.0
6	英和辞典、和英辞典（紙媒体）	125	74.4	13.6	12.0	118	11.9	31.4	56.8
7	国語辞典（紙媒体）	125	92.0	6.4	1.6	115	22.6	22.6	54.8
8	電子辞書（英和辞典、和英辞典）	123	4.9	30.9	64.2	99	8.1	10.1	81.8
9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	124	83.1	9.7	7.3	117	15.4	35.9	48.7
10	ことば絵じてん	123	88.6	6.5	4.9	119	17.6	40.3	42.0
11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	123	89.4	4.1	6.5	118	11.0	46.6	42.4
12	絵本（行事、物語、説明等）	123	86.2	5.7	8.1	118	10.2	39.0	50.8
13	紙芝居（行事、物語、説明等）	123	78.9	1.6	19.5	113	1.8	17.7	80.0
14	写真（人物、場所、活動場面等）	124	58.1	21.8	20.2	111	19.8	55.9	24.3
15	動画（活動場面、人物、場所等）	123	43.1	13.0	43.9	108	9.3	38.0	52.8
16	カレンダー	123	76.4	9.8	13.8	114	14.0	51.8	34.2
17	絵日記（スケッチブックの記録等）	116	21.6	12.9	65.5	107	3.7	12.1	84.1
18	新聞	117	70.9	9.4	19.7	114	3.5	34.2	62.3
19	広告、チラシ、ポスター	117	58.1	9.4	32.5	114	1.8	31.6	66.7
20	雑誌（幼児・児童向け、その他）	117	40.2	11.1	48.7	110	0	22.7	77.3
21	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	116	50.0	7.8	42.2	112	2.7	31.3	66.1
22	手話・字幕付きＤＶＤ	116	51.7	3.4	44.8	113	1.8	23.9	74.3
23	インターネット上の Web 情報	115	77.4	8.7	13.9	116	19.8	44.8	35.3

平成 29 年度調査

(%)

	教材	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない
1	英語ノート１、２	113	72.6	3.5	23.9	108	38.0	22.2	39.8
2	教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	110	19.1	3.6	77.3	83	2.4	9.6	88.0
3	市販の英語テキスト、ワークブック	111	18.9	26.1	55.0	91	6.6	30.8	62.6
4	カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	111	40.5	35.1	24.3	100	49.0	36.0	15.0
5	語学学習用ＣＤ	108	42.6	9.3	48.1	97	4.1	18.6	77.3
6	英和辞典、和英辞典（紙媒体）	109	66.1	20.2	13.8	105	8.6	29.5	61.9
7	国語辞典（紙媒体）	111	94.6	4.5	0.9	111	18.9	21.6	59.5
8	電子辞書（英和辞典、和英辞典）	109	3.7	36.7	59.6	96	6.3	15.6	78.1
9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	111	80.2	12.6	7.2	111	18.9	36.0	45.0
10	ことば絵じてん	111	85.6	8.1	6.3	110	15.5	29.1	55.5
11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	111	92.8	1.8	5.4	112	10.7	41.1	48.2
12	絵本（行事、物語、説明等）	111	93.7	0.9	5.4	113	9.7	38.1	52.2
13	紙芝居（行事、物語、説明等）	111	82.0	0.0	18.0	110	0.9	17.3	81.8
14	写真（人物、場所、活動場面等）	112	77.7	14.3	8.0	112	34.8	46.4	18.8
15	動画（活動場面、人物、場所等）	113	54.9	17.7	27.4	103	23.3	35.0	41.7
16	カレンダー	112	78.6	12.5	8.9	113	26.5	43.4	30.1
17	日記・絵日記（スケッチブックの記録等）	110	60.0	21.8	18.2	112	17.0	18.8	64.3
18	新聞	111	82.0	6.3	11.7	112	8.9	31.3	59.8
19	広告、チラシ、ポスター	109	70.6	11.0	18.3	108	2.8	27.8	69.4
20	雑誌（幼児・児童向け、その他）	110	39.1	14.5	46.4	102	2.0	12.7	85.3
21	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	109	59.6	13.8	26.6	105	11.4	25.7	62.9
22	手話・字幕付きＤＶＤ	111	49.5	6.3	44.1	105	2.9	25.7	71.4
23	インターネット上の Web 情報	111	86.5	7.2	6.3	112	32.1	38.4	29.5
24	タブレット PC	112	79.5	6.3	14.3	110	13.6	30.0	56.4

表 3-2-4　教材の活用状況
平成 24 年度調査

(%)

	教材	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1	英語ノート１、２	120	25.0	44.2	6.7	24.2
2	教授用掛図(発音図表､英語版世界地図等)	87	13.8	8.0	2.3	75.9
3	市販の英語テキスト、ワークブック	96	11.5	32.3	5.2	51.0
4	カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	107	24.3	23.4	40.2	12.1
5	語学学習用ＣＤ	102	17.6	5.9	1.0	75.5
6	英和辞典、和英辞典（紙媒体）	109	39.4	4.6	0.9	55.0
7	国語辞典（紙媒体）	106	43.4	3.8	0	52.8
8	電子辞書（英和辞典、和英辞典）	95	13.7	1.1	0	85.3
9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	112	43.8	6.3	1.8	48.2
10	ことば絵じてん	103	41.7	17.5	1.0	39.8
11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	109	45.0	13.8	2.8	38.5
12	絵本（行事、物語、説明等）	107	32.7	19.6	0.9	46.7
13	紙芝居（行事、物語、説明等）	104	12.5	6.7	1.0	79.8
14	写真（人物、場所、活動場面等）	103	29.1	32.0	16.5	22.3
15	動画（活動場面、人物、場所等）	101	23.8	16.8	7.9	51.5
16	カレンダー	105	38.1	24.8	4.8	32.4
17	絵日記（スケッチブックの記録等）	96	9.4	3.1	3.1	84.4
18	新聞	102	15.7	21.6	1.0	61.8
19	広告、チラシ、ポスター	102	16.7	16.7	0	66.7
20	雑誌（幼児・児童向け、その他）	99	11.1	11.1	1.0	76.8
21	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	102	25.5	7.8	0	66.7
22	手話・字幕付きＤＶＤ	99	21.2	6.1	0	72.7
23	インターネット上の Web 情報	102	32.4	30.4	2.0	35.3

平成 29 年度調査

(%)

	教材	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
1	英語ノート１、２	103	23.3	35.0	5.8	35.9
2	教授用掛図(発音図表､英語版世界地図等)	81	6.2	3.7	2.5	87.7
3	市販の英語テキスト、ワークブック	91	16.5	18.7	3.3	61.5
4	カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	100	18.0	24.0	42.0	16.0
5	語学学習用ＣＤ	92	16.3	6.5	1.1	76.1
6	英和辞典、和英辞典（紙媒体）	99	39.4	1.0	2.0	57.6
7	国語辞典（紙媒体）	103	42.7	1.0	0.0	56.3
8	電子辞書（英和辞典、和英辞典）	91	22.0	0.0	0.0	78.0
9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）	102	52.9	3.9	0.0	43.1
10	ことば絵じてん	99	43.4	4.0	0.0	52.5
11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）	102	46.1	6.9	0.0	47.1
12	絵本（行事、物語、説明等）	103	41.7	7.8	1.0	49.5
13	紙芝居（行事、物語、説明等）	95	15.8	5.3	0.0	78.9
14	写真（人物、場所、活動場面等）	144	21.5	43.1	13.9	21.5
15	動画（活動場面、人物、場所等）	96	37.5	13.5	6.3	42.7
16	カレンダー	106	44.3	19.8	5.7	30.2
17	日記・絵日記（スケッチブックの記録等）	103	22.3	12.6	1.0	64.1
18	新聞	103	26.2	14.6	0.0	59.2
19	広告、チラシ、ポスター	97	18.6	12.4	0.0	69.1
20	雑誌（幼児・児童向け、その他）	92	10.9	4.3	0.0	84.8
21	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	95	31.6	5.3	0.0	63.2
22	手話・字幕付きＤＶＤ	93	25.8	4.3	0.0	69.9
23	インターネット上の Web 情報	103	42.7	28.2	2.9	26.2
24	タブレット PC	99	32.3	10.1	2.0	55.6

表 3-2-5　その他の教材や自作教材
平成 24 年度調査

使途			教材名	場面や活用方法
外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材	積極的に外国語を聞いたり、話したりする（３８）	外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験する（９）	パワーポイント資料（自己紹介）	導入～まとめまで、視覚的教材として活用。
			文カード	毎時間、導入の挨拶で「あいさつ文」と「顔カード」を活用。
			絵カード（インターネット教材から購入し、ラミネート加工）	単語の紹介、ゲーム等で活用。
			ピクチャーカード	ゲームや外国語に慣れ親しむ際に活用。
			具体物や模型	ロールプレイでの会話で活用（食べ物、日用品など）。
			アルファベットカード	ゲームをする際に活用。
			ビンゴシート	学習内容を、楽しみながら反復練習をさせるときに活用。
			(H.24～)Hi! friends!　文科省	英単語にふれる、英語を使ったコミュニケーションの経験をし、楽しむ場面で活用。
		歌（３）	英語ソングビデオ（日本 LL 教育センター）	毎時の導入で意欲づけや雰囲気づくりのために活用。
			英語の歌の CD	・「かっこう」等、日本で親しまれている歌を英語の歌詞で歌ったりすることで、外国語の活動の導入とする。 ・「アルファベットソング」・「日よう月よう火よう・・・」のように、アルファベットや英単語に親しむことを目的に歌うこともある ・出来るだけ、児童にとって楽しい発見につながるよう配慮するようにしている。
			歌詞カード	歌を歌う時に発音を記入したカードを見ながら歌う。
		単語、文の聞き取りや表出（２４）	パワーポイント資料（単語、単文に読み方の字幕も挿入したもの）	単語や短文の聞きとりや表出の際、音声教材の代わりに字幕を挿入したスライドを提示し、見て分かるようにしている。
				英語ノートを基に自作。絵と英語とカタカナの読みを同時に提示する資料で、児童によって使う場合と使わない場合がある。
			パワーポイント資料（英単語・読み方（カタカナ）・意味（日本語を表示）	単元で必要な単語をとり出し、読みながら練習する。

	パワーポイント　資料（新出表現の英文） パワーポイント資料（身近な物で絵と写真、単語、発音を提示） CDROM（ASL 表現の動画で動物の名前、色々な国のあいさつを表すもの） Hi　Friends②　DVD 絵カード（数字、果物　動物、乗り物） 絵カード（英語ノートの絵を B5 サイズにカラーコピーしラミネート加工） ピクチャーカード 単語カード（スペル・読み方・絵カード） 英文・英単語カード（単語・文に発音、読み方アクセントを記入）6 フラッシュカード（英単語・構文を記載） カード教材（英語、日本語、訳、手話） 学習内容のキーワード、キーセンテンス短冊カード	新しい表現の導入で活用。クイズ形式で表示していく。 1 つのテーマを決め言葉を増やし、英語での言い方を学習する 導入や授業の一つとして活用。 音声、発音を聞いたり、ゲームをしたりする 数を数える　物の名前を覚える際に活用。 Hi. friends!に出てくる単語を学習する際に活用（提示、掲示） 授業で使う 内容に合わせて、出てくる単語はすべてスペル、読み、絵などの 3 種類を作って使用 単語や表現時に発音を記入したカードを見ながら表現活動を行う。 ・外国語活動の中で、挨拶等日常会話の場面で提示し、視覚的に英語に親しむ目的で活用している。 毎時間に活用。授業後に掲示。 新出単語を覚える、表出の手がかりとなるように活用。 毎時間活用する。その後ろう下の壁に貼って見られるようにしている 本時のキーワードを提示する時
書く活動（4）	ワークシート プリント	必要に応じて使用 書き込みのスペースや説明等、児童の実態に合わせて使用 イラストと単語を示したプリントで、くり返し書いて定着を図る。
授業以外でも活用（2）	英単語表　授業時、プリント等で出てきた英単語を、カテゴリー(数字、曜日、色など)に分けてまとめている の時間割	帰りの会の時に、復習をしたり覚えたりする機会をつくっている 教科名の単語カードを毎日貼り替え、1 日の時間割を教室に掲示する。

		アルファベット（5）	フォニックスカード（） カード（アルファベット）	アルファベットの形や音を確認する。随時。 1つ1つのスペルの書き方や大きさ、バランスなどを確かめるために、使うもの。 アルファベットの読み方を覚えるため、フラッシュカードとして使う。 ASL の指文字で表したり、発音したり、大文字と小文字をリンクさせるために使う。 カードは、大文字、小文字、発音の 3 種類を自作。アルファベットと発音を提示毎時間の導入で活用。全員で読んで、発音を確認し覚えたものは外して、くり返し学習する。
日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材（4）	外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむ、日本語との違いを知り言葉の面白さや豊かさに気づく		自作の英語カード等 日常生活（学校　地域社会）で目にする外国語 ASL の DVD	日本語カードと英語カードを用いてゲームをしながらカードあわせをする。 市販のワークブックと関連づけて生活で目にするものを見つけ出したり、覚えているものを話題にしたりして生活に根ざすようにしている。 ASL(American Sign Language)に親しむコーナーの際に活用。
	日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づく		ビデオ	ヨーロッパの景色や人々の様子を撮影したもの
	異なる文をもつ人々との交流当を体験し、文化等に対する理解を深める			

文科省教材（4）	Hi､friends!（紙媒体、DVD）	毎時間活用する 教材の補助的な活用を行う 付属の DVD をテレビに投影して使用している。 毎時間の授業のテキスト

平成 29 年度調査

使途			教材名	場面や活用方法
外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材	積極的に外国語を聞いたり、話したりする（６６）	外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験する（２５）	パワーポイント資料	導入や復習時に活用。（２）
			パワーポイント資料（アメリカの行事の紹介）	行事前の紹介用で活用。
			絵カード	”ｆｉｎｅ”、”ｓａｄ”など顔の表情がかかれたカードを導入時に活用。 授業の導入時にゲームで活用。（５） 学習した後に掲示。
			カードゲーム	英単語に慣れ親しむために活用。（７）
			単語カード、挨拶カード	毎時間、導入時で活用。（５）
			自作ジャンケンカード	毎時、ゲームをする際に活用。
			外国人変装グッズ	ALT が来校しない時の雰囲気づくりのために活用。
			ASL	語順を覚えたりコミュニケーションを楽しむ際に活用。
		歌（２）	Web からダウンロードした英語の歌などの動画	テーマや季節に合った歌を探し、歌詞を提示しながら活用。
			英語による歌と映像の DVD	楽しみながら英語に親しむために活用。
		単語、文の聞き取りや表出（２８）	英単語カード、英語文カード	理解を促進するために活用。（５）
			英語の絵本	行事の際の読み聞かせや英語の文型の導入後に活用。
			市販の音声教材	聴覚活用が可能な児童に正しい英語の発音を聴かせるために活用。
			パワーポイント資料	意味から英語へ、英語から意味へと関連付けを強めるために活用。（２） 絵を示して親しみやすくするために活用。
			教科書の拡大コピー	児童の注目を促すために活用。
			文型カード	学習内容の定着のために繰り返し活用。（３）
			数字や曜日を日本語と英語で表記したカード	曜日や数字の確認等で活用。（２）

		絵と単語を表記したカード	新出単語の確認で活用。（2）
		英語であいさつが書かれたカード	発音部分を隠しておき、確認やフラッシュカードとして活用。
		発音のみを書いたカード	音声での聞き取りが難しい際に活用。（4）
		英単語カード	提示したり、クイズ形式で確認する際に活用。
		絵カード	文や単語の読みや意味を確認する際に活用。
		単語表や会話表現が書かれた表	児童が表現を忘れた際に確認するために活用。
			単語をカテゴリー毎に整理し、掲示して活用。
		NHK for School プレ基礎英語	画像に合わせ、基本となる文を確認するために活用
	書く活動（4）	ワークシート	毎回小テストで活用
		プリント	本時で学習した表現や単語などを書くために活用。 友達にインタビューした内容を記録するために活用。 学習した英単語について確認する宿題プリント
	授業以外でも活用（4）	カード教材	学習で使用する他、ゲームでも活用。
		アルファベットパズル	休み時間などで使用。
		パワーポイント資料	行事の説明の際にも活用。
		子供向きの英語の本やアメリカ手話の資料	教室内にコーナーを設置し、話題にする。
	アルファベット（3）	自作のアルファベット練習帳	アルファベットの学習の際に、見本としてや書く練習をするために活用。
		パワーポイント資料（ヘボン式ローマ字）	ローマ字を確認する際に活用。
		自作のアルファベット（大文字）の指文字表	アルファベットの学習の補助教材として活用。

日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材（7）	外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむ、日本語との違いを知り言葉の面白さや豊かさに気づく（5）	英単語カード	新出英単語の発音の確認のために活用。（4）
		基本的な単語を表した動画（ASL による表現）	英単語の発音と共に確認するなどして活用。
	日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づく（2）	世界遺産や海外の食べ物が書かれたカード	児童が興味を持って調べた世界遺産や食べ物について、写真付きのカードにして活用。
		写真	海外の文化を伝える際に活用。
	異なる文をもつ人々との交流当を体験し、文化等に対する理解を深める。		
	文科省教材（4）	Hi､friends!（紙媒体、DVD）	聞き取りの練習で活用。（3） 基本的な表現の確認等で活用。

表 3-2-6　その他の機器や自作教材

平成 24 年度調査

使途	機器名	場面や活用方法
提示・板書	パソコン、プロジェクター、スクリーン、大型テレビやモニター	パソコンから TV 画面に英単語や英文を絵とともに写し、児童に印象づける。
	ペンタブレット	表示したデータに書き込む際に活用。
	貼りつけ式黒板	英語の罫線が入った貼りつけ式(マグネット)黒板を用いて、アルファベットや英単語の学習を行う際に活用。
教材作成	拡大コピー機 A1～B1	基本的な表現や会話、文章を拡大して黒板などに掲示するために活用。」
	ラミネーター	カード作りの際に活用。

平成 29 年度調査

使途	機器名	場面や活用方法
提示・板書	文型カード・単語カード（41）	意味を日本語で、発音をカタカナで表記するなどして活用
	単語表	単元に合わせて活用
	外国人名前カード	よく目にする外国人の名前を男女別にまとめて掲示
教材作成	アルファベットカード	アルファベットを並び替えて単語を作成するなどの活動
	クロスワードパズル	文字数やアルファベットに着目し、新出単語を当てはめるなどして活用
	絵カード	
	振り返りシート	レッスンごとに重要な文型や単位時間毎の自己評価を記入するなどして活用

表 3-2-7　その他の教材や教材
平成 24 年度調査

使途			教材名	場面や活用方法
外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材	外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験する（９）		BINGO など音声を使わなくてもできる楽しいゲーム集 様々なダンスやゲームなどの動画	ゲームや体を動かすことを通して、自然に英語の音に慣れる活動を設定する。
			3D の字幕付体感型の英会話教材機器	意欲を持たせる臨場感がある。シュミレーション的なものであればいいと思う。
			クイズやゲーム感覚で、単語や英会話の学習が学級や学年単位で進められるような動画や PC ソフト。	英語力を養うと共に、英語力の判定にも活用したい。
			よく使われる歌の身ぶりなどを入れた動画（ABC の歌やセブンステップスなど）字幕がありノーマルスピードとゆっくりスピードの両方があるもの	楽しみながら体で英語を覚えることができる。ウォーミングアップで使える
			簡単なフレーズを入れたスキットを撮影した DVD	ロールプレイをする際の導入で児童に見せて手本とする。
	積極的に外国語を聞いたり、話したりする（３５）	単語、文の聞き取りや表出（２６）	英会話の動画（字幕付き） ・会話場面、解説、部分練習等も含まれていると良い。	学習した構文や単語を範化する場面で活用。
			ASL の会話や基本表現の動画（字幕付き）	会話の様子を見せたり、真似して使ったりする場で活用。
			簡単な会話を場面ごとに撮影した動画（JSL、ASL と字幕付）	1 場面が短く、くりかえし何度も見られるようにすると反復学習しやすい。 名詞や動詞(単語)に触れるときに、絵→日本語→英語、絵→日本語→手話、絵→英語→ASL といった表示がなされるソフトやアプリケーションがあると良い。
			読み方の表記付き単語カード、短冊、教科書	読み（発音）の学習場面で活用。発音について、視覚的情報があると良い。
			曜日や動物、果物などカテゴリーでまとまっている単語表、短冊	教室内に掲示し、英語にふれる機会をふやしたい。
			単語・基本文型学習ソフトやアプリケーション	児童が入力・選択すると映像や動画、英単語、意味、読み方等が表示されるもの。

			フォニックスルールを学べる動画(アルファベット、口形付き)	文字を見てある程度何と発音するか分かり、子どもたちが意欲的に声を出して外国語を楽しめるような構成で制作されているとよい。
			アメリカ発音でなくイギリス発音のDVD（せめてアメリカ東部発音）	アメリカの Gereral American の発音は、ごく一部他地域のものであり、やや早口なので、口型のはっきりしたイギリス発音で単語になれさせられないか、と思う。
			日本でも馴染みのあるアニメーションの英語版（字幕付き）	子どもたちが親しみやすいキャラクターが、自然にやりとりするもの。聴覚を活用して英語を聞く場面で活用。
			簡単な英語の絵本	セリフを読んだり、寸劇をしたりして、英語に親しむ。
日本と外国の言語や文化について本検約に理解を深める教材		外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむ、日本語との違いを知り言葉の面白さや豊かさに気づく（１０）	外国語を外国の手話で表現している動画	授業中に、会話をしたりする場面で使う。英語を学習する時、いつも英文を見せるが、手話は日本の手話で表現しているから、結局英語の学習になっていない。こういう動画があれば、日本語との違いを、もっと促えられると思う。
			様々な外国語手話の DVD	色々な外国の暮らしや文化を知る場面で使う
			外国のろう者同士の会話を撮影した動画	手話は国によって変わるという理解のために使う。
			外国人が手話でコミュニケーションしている様子の動画	世界には、あらゆる言語があり、手話も地域によって異なることを学ぶ。
			いろいろな外国の聾学校の様子や手話などの DVD や動画	いろいろな外国の文化や、同じ境遇にいる人たちを知り、外国では言葉が違うように手話もちがうことも知る。

		ASL の動画辞典	授業準備や授業中子どもが知りたい ASL をその場で提示する。
		ASL 教材	手話での指導なので、子供たちに ASL を通して外国語とふれあってほしい。
		外国の手話(ASL など)で簡単な会話をしている様子を撮影した動画	手話にも違いがあることを知り、外国の言葉や文化に興味をもたせる。
		日常生活で目にする外国語を撮影した写真や動画	自分たちの生活と外国語のかかわりを知る場面で使う。
		ASL での簡単なあいさつや表現の方法を示した DVD 等	ASL で伝えることで、外国語を学習してしる意識を作りやすいため。教師も学習できる。
	日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づく（１１）	外国の暮らし、文化、学校（学校、聾学校）、会話などを撮影した動画	外国の暮らしや文化を知る。
		同上（字幕＋手話付き）	付属の単語カード（発音表記付き）が良い。
		同上（字幕付き）BGM 無し。	パワーポイント等で提示用の教材を作成し、外国の生活の様子を見て、日本での暮らしとの違いを考えさせる。
		外国の暮らしを撮影した写真データ	異文化を知る学習で使用する。教室に置いておき、いつでも自由に見ることができるとよい。
		外国の暮らしに関する本	
	異なる文化をもつ人々と交流当を体験し、文化等に対する理解を深める（２）	ASL ができるろう者	
		日本手話　ろう教師モデルの DVD（ASL や国際手話）	
文科省教材（８）		Hi、friends!や英語ノート（紙媒体、DVD 等の付属教材）	付属の音声教材に字幕があると良い。授業全体で活用することができる。
		Hi、friends!の副読本に合った内容の絵カードやフラッシュカード	各単元の学習内容を指導する時に、使いたい。(デジタル教材の絵カードの絵だけでは不足)
			授業内容を深めるためにカードや発音を表記するなど視覚化した教材があると、「見る、読む」活動が多く設定しやすい。
		小学生向けの英語ノートに準拠したドリル	授業のまとめ、宿題、学習評価に使用する。
		ろう学校用の外国語活動用教材	

使途			教材名	場面や活用方法
外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図るための教材	積極的に外国語を聞いたり、話したりする（33）	外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験する（8）	単語カード（発音・読み方付き）	児童が発音しやすくなると授業もスムーズに進む。
			ASL の DVD	ALT の発音を聞き取ることが難しいため。 ASL に親しむことで児童の視野が広がる。（3）
			外国の友達からのクイズメッセージ動画	各単元でキーワードとなる言葉を使って英語でクイズ等を出してもらうと、児童が意欲的に取り組むことができる。
			各単元に対応した絵カード	導入時にゲームをしながら外国語に親しむことができると良い。
			字幕の付いたアニメーション	会話場面で活用
		単語、文の聞き取りや表出（25）	教科書にあったカード教材や掛図	毎回自作しなくてはならないのが負担である。
			英単語の発音を指文字で表記したもの	口話による発音練習する際に使用する。
			音声と字幕（日本語、英語のルビ、英語）が付いた動画	音声、文字（英語）、文字（英語のルビ）、日本語の訳が同時に見られるような動画があると良い。
			手話と字幕の付いた動画	学習した英単語を用いた例示をする。
			英単語動画（口形、手話、字幕付き）	学習の導入時に活用する。
			発音が明瞭で口形が分かる動画	音声のみの CD では理解が難しい。
			発音表記付き単語カード	発音について、視覚的情報があると良い。（7）
			文型に合わせたカード（英語や発音の仕方をカタカナで表記、意味の日本語表記があるもの）	簡単な会話文にも英語の発音の仕方や意味の表記があると良い。（6）
			音声を使用しない教材	聾学校の児童が活用できる視覚的な教材があると良い。
			物の名前と英語を対応させたフラッシュカードとして活用できる DVD	
			アルファベットの歌に手話と字幕を付けた教材	聴覚障害のある教員が児童に指導する際に活用する。
			単語に読み仮名を付けてくれるシステム	特に新出単語を読む時に必要である。（2）
			アニメーションが付いているパワーポイント形式の教材	視覚的な動きにより注意や関心をひきやすく、記憶に残りやすい。

日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めるための教材（２８）	外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむ、日本語との違いを知り言葉の面白さや豊かさに気づく（１２）	日常会話や基本的な動詞が意味する動作を撮影した動画（手話と字幕付き）	手話が付いていると、日本語なしでも状況が理解できる。
		CD 教材の音声や音楽に代わる動画（字幕付き）	外国語活動で流せる児童に分かりやすいものがあると良い。
		日本手話とアメリカ手話の違いが分かる動画	視覚的に言語の違いが分かるものがあると良い。
		英語の歌（手話付き、字幕付き）DVD	授業の導入時に活用し、体の部位や動作を英語と結び付ける。
		歌い手の口元が見える童謡の動画（手話・字幕付き）	毎回の授業で季節に合わせた有名な曲に親しむ。
		単語の発音や口形が分かる動画	
		外国の様々なろう者を紹介する動画（手話・字幕付き）	同じろう者であることで親しみを持つほか、児童の視野が広がる。（２）
		日本に住む外国人（できればろう者）を紹介する動画	自身の文化に付いて理解し、自覚することで、外国の文化という概念を形成し、文化の理解につながる。
		ASL の動画	日本手話に対応して、ASL の内容を日本手話で確認できる。
		教材に合わせた ASL 表	ASL を使いながら授業を進める際に活用する。
		ASL の辞典	外国の手話も確認したい。
	日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気づく（１２）	外国の文化や生活などが紹介されている動画や写真	外国の暮らしや文化に触れさせたい。各ユニットに対応したものがあると良い。（２）
		世界遺産を紹介した動画	世界の文化や自然、歴史などを知る。
		外国の暮らしを撮影した動画（BGM が無く、手話と字幕付き）	外国の暮らしや文化を知る場面で使う。BGM の有無が選択でき、一つの場面が短く何度でも見られるものが良い。（５）
		外国の行事の動画	外国独自の行事の様子が分かるものがあると良い。
		外国と日本の文化の違いや共通点を学べる動画（字幕付き）	各内容が短時間にまとめられているものがあると良い。（３）

		異なる文化をもつ人々との交流当を体験し、文化等に対する理解を深める（4）	外国のろう者とのテレビ電話	テレビ電話などを活用し、英語を使う機会を設定できると良い。
			ASL の指文字や、簡単な手話の動画	国によるろう文化の違いや共通点に気付かせる。（2）
			ASL の本（英語ノートに対応したもの）	ASL を学習する時に活用する。
	文科省教材（21）		Hi､friends!（DVD 等の付属教材）	付属の音声教材に字幕があると良い。（5）
				ゆっくり発音している動画や、手話や指文字付きの動画だと良い。（4）
				ゆっくり発音し、カタカナ表記が付いていると良い。（2）
				説明したり活動するのに、手話や字幕が付いていると良い。（3）
				イラストやアルファベットだけでなく、発音の仕方も付けてほしい。
				大切なフレーズを視覚化してもらいたい。
			巻末のピクチャーカードの裏面に英語のみの表記を付けた教材	聞き取りの場面で裏の単語を提示する。
			英語ノートの内容を手話で表したもの	児童に内容を理解させやすい。
			英語ノートの内容に則した手話動画や字幕が付いた教材	児童に内容を理解させやすい。（2）
			聾学校用の外国語活動の指導書、指導計画、DVD、事例集	

英語

表 3-3-1　回答のあった学校数と中学部及び高等部の担当者数

		回答があった学校数（校）	回答があった担当者の人数(名)
平成 24 年度	中学部（n=112）	76	112
	高等部（n=98）	60	98
平成 29 年度	中学部（n=118）	74	118
	高等部（n=95）	59	95

表 3-3-2　中学部及び高等部の回答者の教職経験年数　(%)

		0～3年	3～6年	6～9年	9～12年	12～15年	15～18年	18～21年	21年以上
平成24 年度	中学部（n=112）	9.8	10.7	11.6	9.8	8.0	6.3	8.0	35.7
	高等部（n=98）	4.0	14.1	8.1	13.1	6.1	6.1	8.1	40.4
平成29 年度	中学部（n=117）	10.3	12.0	8.5	8.5	10.3	5.1	7.7	37.6
	高等部（n=91）	11.0	5.5	4.4	7.7	7.7	11.0	11.0	41.8

表 3-3-3　中学部、高等部の回答者の聾学校経験年数　(%)

		0～3年	3～6年	6～9年	9～12年	12～15年	15～18年	18～21年	21年以上
平成24 年度	中学部（n=112）	46.4	17.0	12.5	13.4	8.0	0.9	0.0	1.8
	高等部（n=98）	45.9	19.4	13.3	7.1	7.1	0.0	3.1	4.1
平成29 年度	中学部（n=117）	35.9	17.1	18.8	9.4	4.3	6.0	0.9	7.7
	高等部（n=94）	34.0	21.3	14.9	8.5	7.4	6.4	1.1	6.4

表 3-2-4　中学部、高等部の回答者の学部経験年数　(%)

		0～3年	3～6年	6～9年	9～12年	12～15年	15～18年	18～21年	21年以上
平成24 年度	中学部（n=112）	49.5	18.0	20.7	8.3	3.6	1.8	2.7	0.9
	高等部（n=98）	31.3	31.3	13.5		6.3	2.1	2.1	5.2
平成29 年度	中学部（n=116）	46.6	19.0	16.4	8.6	3.4	3.4	0.0	2.6
	高等部（n=87）	33.3	20.7	17.2	12.6	6.9	3.4	1.1	4.6

平成 24 年度調査

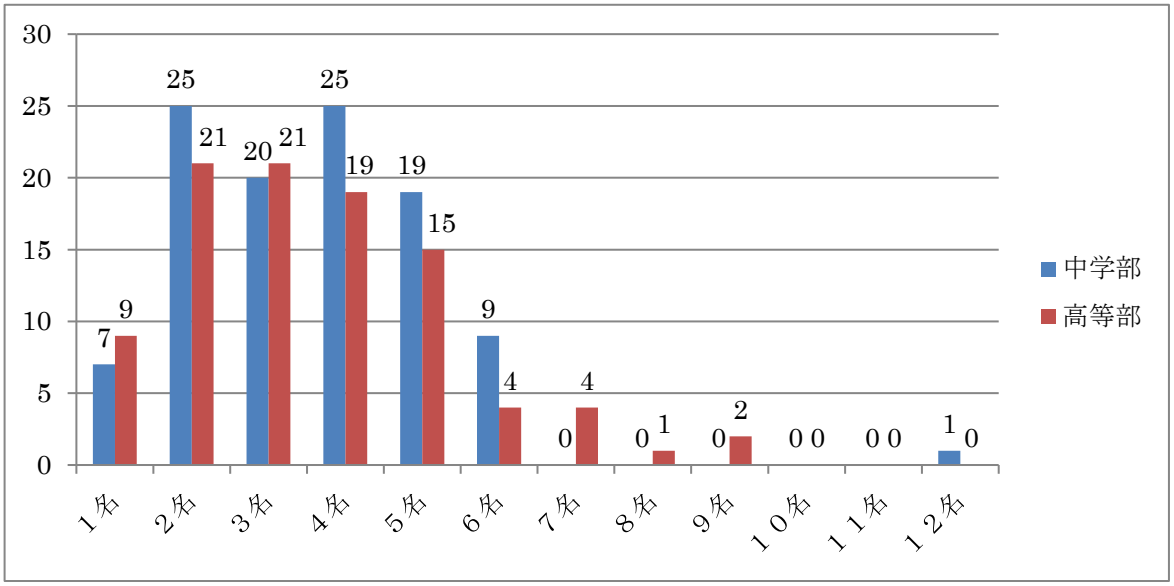

図 3-1　各学部の指導グループ人数

平成 29 年度調査

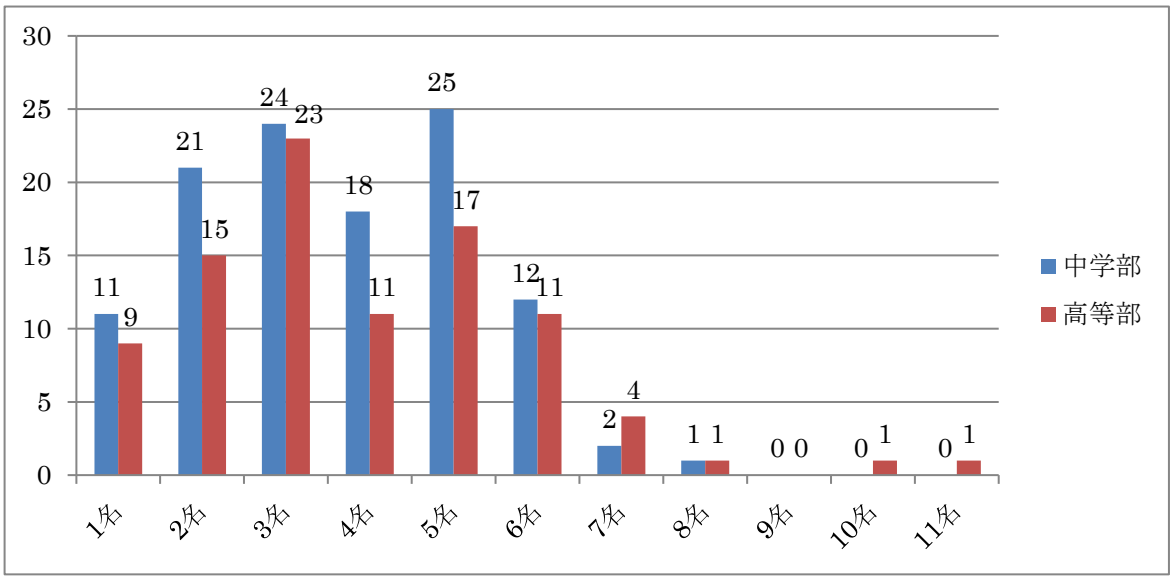

図 3-1　各学部の指導グループ人数

表 3-4-1　　中学部の英語の授業で用いるコミュニケーション手段の内訳（%）

	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
平成24年度　(n=112)	60.2	85.8	9.7	53.1	6.2	74.3	20.4
平成29年度　(n=118)	66.7	91.9	16.2	48.6	8.1	83.8	18.0

表 3-4-2　高等部の英語の授業でコミュニケーション手段の内訳（%）

	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
平成 24 年度　(n=98)	62.6	90.9	10.1	68.7	5.1	77.8	20.2
平成 29 年度　(n=95)	57.9	88.4	14.7	54.7	2.1	76.8	15.8

表 3-4-3　中学部における教材の有無
平成 24 年度調査

(%)

教材	n	学校にある	個人	ない
検定教科書	107	98.1	0.9	0.9
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	108	88.9	8.3	2.8
国語辞典（紙媒体）	106	84.9	11.3	3.8
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	107	86.9	5.6	7.5
インターネット上の Web 情報	102	87.3	6.9	5.9
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	107	82.2	15.9	1.9
カレンダー	103	84.5	7.8	7.8
新聞	103	80.6	7.8	11.7
絵本（行事、物語、説明等）	107	82.2	4.7	13.1
ことば絵じてん	105	74.3	10.5	15.2
市販の英語テキスト、ワークブック	106	62.3	35.8	1.9
紙芝居（行事、物語、説明等）	102	61.8	1.0	37.3
語学学習用ＣＤ	106	54.7	8.5	36.8
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	103	47.6	16.5	35.9
写真（人物、場所、活動場面等）	102	43.1	27.5	29.4
広告、チラシ、ポスター	103	62.1	10.7	27.2
動画（活動場面、人物、場所等）	102	40.2	19.6	40.2
絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	99	14.1	10.1	75.8
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	107	39.3	40.2	20.6
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	105	20.0	4.8	75.2
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	106	8.5	49.1	42.5
手話・字幕付きＤＶＤ	102	54.9	14.7	30.4
雑誌	102	41.2	22.5	36.3

平成 29 年度調査

(%)

教材	n	学校にある	個人	ない
検定教科書	112	99.1	0.0	0.9
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	110	19.1	3.6	77.3
市販の英語テキスト、ワークブック	111	61.3	30.6	8.1
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	111	45.0	28.8	26.1
語学学習用ＣＤ	111	48.6	5.4	45.9
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	112	79.5	19.6	0.9
国語辞典（紙媒体）	111	91.0	5.4	3.6
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	110	1.8	49.1	49.1
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	110	88.2	5.5	6.4
ことば絵じてん	110	70.9	7.3	21.8
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	110	83.6	5.5	10.9
絵本（行事、物語、説明等）	109	78.0	6.4	15.6
紙芝居（行事、物語、説明等）	107	62.6	0.9	36.4
写真（人物、場所、活動場面等）	109	49.5	22.0	28.4
動画（活動場面、人物、場所等）	110	36.4	19.1	44.5
カレンダー	110	77.3	9.1	13.6
日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	108	13.0	7.4	79.6
新聞	110	74.5	5.5	20.0
広告、チラシ、ポスター	110	65.5	2.7	31.8
雑誌（幼児・児童向け、その他）	108	38.9	11.1	50.0
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	108	37.0	13.0	50.0
手話・字幕付きＤＶＤ	109	49.5	4.6	45.9
インターネット上の Web 情報	111	84.7	8.1	7.2
タブレット PC	108	69.4	7.4	23.1

表 3-4-4　中学部における教材の使用状況
平成 24 年度調査

(%)

教材	n	よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	110	89.1	6.4	4.5
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	108	62.0	35.2	2.8
国語辞典（紙媒体）	103	43.7	35.9	20.4
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	110	26.4	59.1	14.5
インターネット上の Web 情報	106	18.9	47.2	34.0
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	100	16.0	50.0	34.0
カレンダー	103	13.6	37.9	48.5
新聞	106	9.4	38.7	51.9
絵本（行事、物語、説明等）	107	8.4	42.1	49.5
ことば絵じてん	96	8.3	36.5	55.2
市販の英語テキスト、ワークブック	101	6.9	30.7	62.4
紙芝居（行事、物語、説明等）	99	6.1	29.3	64.6
語学学習用ＣＤ	95	4.2	24.2	71.6
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	106	3.8	17.9	78.3
写真（人物、場所、活動場面等）	95	4.2	20.0	75.8
広告、チラシ、ポスター	96	3.1	34.4	62.5
動画（活動場面、人物、場所等）	103	2.9	16.5	80.6
絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	91	3.3	8.8	87.9
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	105	1.9	19.0	79.0
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	96	2.1	17.7	80.2
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	95	2.1	6.3	91.6
手話・字幕付きＤＶＤ	100	1.0	24.0	75.0
雑誌	82	1.2	24.4	74.4

平成 29 年度調査

(%)

教材	n	よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	114	93.9	3.5	2.6
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	86	0.0	11.6	88.4
市販の英語テキスト、ワークブック	112	64.3	27.7	8.0
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	105	48.6	31.4	20.0
語学学習用ＣＤ	100	3.0	12.0	85.0
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	115	41.7	45.2	13.0
国語辞典（紙媒体）	112	8.9	33.0	58.0
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	106	10.4	20.8	68.9
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	156	10.9	39.1	50.0
ことば絵じてん	108	0.0	16.7	83.3
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	113	0.0	14.2	85.8
絵本（行事、物語、説明等）	112	0.0	17.0	83.0
紙芝居（行事、物語、説明等）	105	0.0	1.9	98.1
写真（人物、場所、活動場面等）	107	24.3	40.2	35.5
動画（活動場面、人物、場所等）	102	7.8	39.2	52.9
カレンダー	109	19.3	28.4	52.3
日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	97	0.0	4.1	95.9
新聞	111	2.7	28.8	68.5
広告、チラシ、ポスター	108	0.0	22.2	77.8
雑誌（幼児・児童向け、その他）	102	0.0	14.7	85.3
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	102	3.9	27.5	68.6
手話・字幕付きＤＶＤ	106	3.8	17.9	78.3
インターネット上の Web 情報	114	23.7	57.0	19.3
タブレット PC	108	7.4	34.3	58.3

表 3-4-5　高等部の教材の有無
平成 24 年度調査

（%）

教材	n	学校にある	個人	ない
検定教科書	96	100.0	0.0	0.0
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	93	89.2	8.6	2.2
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	93	83.9	16.1	0.0
インターネット上の Web 情報	86	90.7	7.0	2.3
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	92	83.7	4.3	12.0
カレンダー	90	80.0	8.9	11.1
新聞	89	76.4	13.5	10.1
市販の英語テキスト、ワークブック	93	63.4	33.3	3.2
手話・字幕付きＤＶＤ	88	59.1	14.8	26.1
語学学習用ＣＤ	91	54.9	7.7	37.4
広告、チラシ、ポスター	88	56.8	21.6	21.6
写真（人物、場所、活動場面等）	91	53.8	20.9	25.3
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	88	48.9	22.7	28.4
雑誌（幼児・生徒向け、その他）	87	43.7	18.4	37.9
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	93	38.7	30.1	31.2
動画（活動場面、人物、場所等）	91	38.5	18.7	42.9
外国語辞典（紙媒体）	86	34.9	27.9	37.2
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	91	17.6	7.7	74.7
絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	87	6.9	12.6	80.5
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	93	5.4	69.9	24.7

平成 29 年度調査

(%)

教材	n	学校にある	個人	ない
検定教科書	90	97.8	0.0	2.2
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	88	19.3	4.5	76.1
市販の英語テキスト、ワークブック	88	68.2	27.3	4.5
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	87	39.1	28.7	32.2
語学学習用ＣＤ	88	55.7	2.3	42.0
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	87	80.5	19.5	0.0
外国語辞典（紙媒体）	87	46.0	14.9	39.1
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	88	4.5	83.0	12.5
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	86	81.4	16.3	2.3
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	88	80.7	1.1	18.2
写真（人物、場所、活動場面等）	87	48.3	16.1	35.6
動画（活動場面、人物、場所等）	87	34.5	18.4	47.1
カレンダー	88	59.1	15.9	25.0
日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	87	17.2	14.9	67.8
新聞	88	69.3	9.1	21.6
広告、チラシ、ポスター	87	57.5	6.9	35.6
雑誌（幼児・生徒向け、その他）	88	34.1	21.6	44.3
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	88	38.6	21.6	39.8
手話・字幕付きＤＶＤ	88	52.3	11.4	36.4
インターネット上の Web 情報	88	78.4	12.5	9.1
タブレット PC におけるアプリケーション	88	63.6	12.5	23.9

表 3-4-6　高等部の教材の使用状況
平成 24 年度調査

（%）

教材	n	よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	93	93.5	3.2	3.2
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	93	57.0	34.4	8.6
市販の英語テキスト、ワークブック	92	47.8	50.0	2.2
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	85	40.0	34.1	25.9
カード教材(ピクチャーカード、 フラッシュカード等)	85	34.1	37.6	28.2
インターネット上の Web 情報	94	17.0	61.7	21.3
写真（人物、場所、活動場面等）	87	14.9	47.1	37.9
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	96	13.5	44.8	41.7
カレンダー	90	12.2	31.1	56.7
外国語辞典（紙媒体）	80	10.0	22.5	67.5
新聞	90	8.9	37.8	53.3
動画（活動場面、人物、場所等）	87	5.7	34.5	59.8
語学学習用ＣＤ	83	4.8	10.8	84.3
広告、チラシ、ポスター	88	3.4	35.2	61.4
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	119	2.5	48.7	48.7
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	87	2.3	29.9	67.8
雑誌（幼児・生徒向け、その他）	88	2.3	30.7	67.0
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	89	2.2	42.7	55.1
手話・字幕付きＤＶＤ	92	2.2	41.3	56.5
絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	83	0.0	10.8	89.2

平成 29 年度調査

（%）

教材	n	よく使う	時々使う	使わない
検定教科書	92	92.4	6.5	1.1
教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)	74	0.0	10.8	89.2
市販の英語テキスト、ワークブック	88	42.0	52.3	5.7
カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)	84	17.9	47.6	34.5
語学学習用ＣＤ	85	2.4	16.5	81.2
英和辞典、和英辞典（紙媒体）	90	43.3	46.7	10.0
外国語辞典（紙媒体）	83	8.4	18.1	73.5
電子辞書（英和辞典、和英辞典）	86	43.0	36.0	20.9
手話辞典（紙媒体、電子媒体）	89	13.5	1.7	34.8
図鑑（生活、生き物、乗り物等）	87	0.0	24.1	75.9
写真（人物、場所、活動場面等）	84	14.3	46.4	39.3
動画（活動場面、人物、場所等）	81	6.2	45.7	48.1
カレンダー	85	11.8	29.4	58.8
日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）	80	6.3	11.3	82.5
新聞	86	4.7	32.6	62.8
広告、チラシ、ポスター	81	1.2	16.0	82.7
雑誌（幼児・生徒向け、その他）	82	1.2	15.9	82.9
ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	82	3.7	35.4	61.0
手話・字幕付きＤＶＤ	84	4.8	32.1	63.1
インターネット上の Web 情報	91	29.7	50.5	19.8
タブレット PC におけるアプリケーション	86	19.8	25.6	54.7

表 3-4-7　中学部の機器の有無
平成 24 年度調査

（%）

	n	学校にある	個人	ない
プロジェクター	110	100.0	0.0	0.0
ＤＶＤプレーヤー	112	98.2	0.9	0.9
パソコン	111	98.2	0.9	0.9
黒板（短冊黒板、小黒板）	111	96.4	0.9	2.7
デジタルビデオカメラ	111	96.4	2.7	0.9
デジタルカメラ	112	93.8	5.4	0.9
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	111	93.7	2.7	3.6
放送機器	108	93.5	1.9	4.6
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	111	90.1	0.9	9.0
地上デジタル対応テレビ	109	87.2	0.0	12.8
実物投影機	108	76.9	0.0	23.1
ＯＨＰ	109	73.4	0.9	25.7
指文字表（五十音、アルファベット）	111	66.7	11.7	21.6
母音図（口形を表した図や絵）	109	62.4	0.9	36.7
音声記号図（日本語、英語）、調音部位図	110	59.1	1.8	39.1
電子黒板	110	57.3	0.0	42.7
手話表（簡単な手話表現の絵）	108	46.3	9.3	44.4
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	110	40.9	18.2	40.9
個人用ＦＭ等システム	106	42.5	3.8	53.8
キューサイン表（発音サインも含む）	107	33.6	4.7	61.7

平成 29 年度調査

（%）

	n	学校にある	個人	ない
黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）	113	98.2	0.0	1.8
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	113	52.2	25.7	22.1
指文字表（五十音、アルファベット）	111	68.5	9.0	22.5
手話表（簡単な手話表現の絵）	111	41.4	7.2	51.4
電子黒板	111	59.5	0.0	40.5
ＯＨＰ	110	61.8	0.0	38.2
パソコン（タブレット PC は除く）	113	99.1	0.0	0.9
プロジェクター	112	99.1	0.0	0.9
地上デジタル対応テレビ	110	86.4	0.0	13.6
ＤＶＤプレーヤー	111	94.6	0.9	4.5
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	111	91.0	0.0	9.0
実物投影機	106	84.9	0.0	15.1
デジタルカメラ	108	90.7	7.4	1.9
デジタルビデオカメラ	107	94.4	1.9	3.7
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	106	84.9	0.9	14.2
放送機器	107	93.5	0.0	6.5
個人用ＦＭ等システム	105	55.2	13.3	31.4
音声記号図（日本語、英語)、調音部位図	107	43.0	3.7	53.3
母音図（口形を表した図や絵）	107	52.3	3.7	43.9
キューサイン表（発音サインも含む）	107	32.7	0.9	66.4
タブレット PC	108	79.6	4.6	15.7

表 3-4-8　中学部の機器の活用状況
平成 24 年度調査

（%）

	n	よく使う	時々使う	使わない
黒板（短冊黒板、小黒板）	110	86.4	5.5	8.2
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	109	36.7	2.8	60.6
パソコン	111	30.6	53.2	16.2
デジタルカメラ	126	19.8	42.9	37.3
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	105	20.0	27.6	52.4
プロジェクター	109	19.3	37.6	43.1
個人用ＦＭ等システム	94	13.8	9.6	76.6
地上デジタル対応テレビ	108	11.1	25.0	63.9
ＤＶＤプレーヤー	110	8.2	45.5	46.4
指文字表（五十音、アルファベット）	105	6.7	26.7	66.7
電子黒板	99	5.1	11.1	83.8
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	108	3.7	19.4	76.9
放送機器	108	3.7	7.4	88.9
実物投影機	102	2.9	16.7	80.4
デジタルビデオカメラ	110	2.7	28.2	69.1
母音図（口形を表した図や絵）	104	1.9	6.7	91.3
キューサイン表（発音サインも含む）	97	2.1	3.1	94.8
手話表（簡単な手話表現の絵）	100	1.0	13.0	86.0
ＯＨＰ	104	1.0	8.7	90.4
音声記号図（日本語、英語）、調音部位図	101	1.0	9.9	89.1

平成 29 年度調査

（%）

	n	よく使う	時々使う	使わない
黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）	113	86.7	6.2	7.1
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	111	19.8	34.2	45.9
指文字表（五十音、アルファベット）	105	2.9	20.0	77.1
手話表（簡単な手話表現の絵）	101	3.0	9.9	87.1
電子黒板	100	16.0	5.0	79.0
ＯＨＰ	98	3.1	3.1	93.9
パソコン（タブレット PC は除く）	113	48.7	35.4	15.9
プロジェクター	112	26.8	19.6	53.6
地上デジタル対応テレビ	109	18.3	22.0	59.6
ＤＶＤプレーヤー	112	5.4	33.0	61.6
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	109	9.2	18.3	72.5
実物投影機	109	7.3	16.5	76.1
デジタルカメラ	112	10.7	38.4	50.9
デジタルビデオカメラ	112	6.3	17.9	75.9
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	106	39.6	9.4	50.9
放送機器	111	9.0	7.2	83.8
個人用ＦＭ等システム	100	24.0	9.0	67.0
音声記号図（日本語、英語）、調音部位図	98	2.0	7.1	90.8
母音図（口形を表した図や絵）	100	2.0	4.0	94.0
キューサイン表（発音サインも含む）	96	3.1	1.0	95.8
タブレット PC	106	8.5	43.4	48.1

表 3-4-9　高等部の機器の有無
平成 24 年度調査

（%）

	N	学校にある	個人	ない
プロジェクター	96	100.0	0.0	0.0
パソコン	96	97.9	0.0	2.1
ＤＶＤプレーヤー	96	96.9	0.0	3.1
黒板（短冊黒板、小黒板）	96	94.8	2.1	3.1
デジタルビデオカメラ	96	94.8	1.0	4.2
デジタルカメラ	96	93.8	3.1	3.1
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	96	90.6	1.0	8.3
放送機器	94	92.6	0.0	7.4
地上デジタル対応テレビ	94	90.4	1.1	8.5
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	96	85.4	1.0	13.5
実物投影機	94	78.7	1.1	20.2
ＯＨＰ	93	78.5	0.0	21.5
指文字表（五十音、アルファベット）	94	64.9	12.8	22.3
手話表（簡単な手話表現の絵）	93	62.4	7.5	30.1
電子黒板	94	59.6	0.0	40.4
個人用ＦＭ等システム	92	60.9	6.5	32.6
母音図（口形を表した図や絵）	95	56.8	4.2	38.9
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	93	50.5	16.1	33.3
音声記号図（日本語、英語）、調音部位図	93	48.4	2.2	49.5
キューサイン表（発音サインも含む）	93	37.6	3.2	59.1

平成 29 年度調査

(%)

	N	学校にある	個人	ない
黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）	91	94.5	1.1	4.4
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	89	56.2	15.7	28.1
指文字表（五十音、アルファベット）	89	47.2	20.2	32.6
手話表（簡単な手話表現の絵）	89	40.4	9.0	50.6
電子黒板	89	51.7	0.0	48.3
ＯＨＰ	88	56.8	0.0	43.2
パソコン（タブレット PC は除く）	90	96.7	3.3	0.0
プロジェクター	89	100.0	0.0	0.0
地上デジタル対応テレビ	89	80.9	2.2	16.9
ＤＶＤプレーヤー	89	97.8	0.0	2.2
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	89	85.4	2.2	12.4
実物投影機	85	85.9	0.0	14.1
デジタルカメラ	86	91.9	7.0	1.2
デジタルビデオカメラ	86	93.0	4.7	2.3
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	86	80.2	2.3	17.4
放送機器	86	91.9	0.0	8.1
個人用ＦＭ等システム	84	59.5	9.5	31.0
音声記号図（日本語、英語)、調音部位図	85	34.1	1.2	64.7
母音図（口形を表した図や絵）	84	39.3	4.8	56.0
キューサイン表（発音サインも含む）	84	23.8	2.4	73.8
タブレット PC	85	81.2	4.7	14.1

表 3-4-10　高等部の機器の使用状況
平成 24 年度調査

（%）

	n	よく使う	時々使う	使わない
黒板	94	81.9	4.3	13.8
パソコン	95	37.9	41.1	21.1
プロジェクター	93	22.6	33.3	44.1
集団補聴器	90	20.0	18.9	61.1
発表板	87	18.4	29.9	51.7
指文字表	92	10.9	22.8	66.3
デジタルテレビ	92	10.9	20.7	68.5
個人用ＦＭ等システム	84	11.9	7.1	81.0
デジタルカメラ	94	7.4	35.1	57.4
手話表	89	4.5	19.1	76.4
実物投影機	89	4.5	21.3	74.2
デジタルビデオカメラ	94	4.3	21.3	74.5
放送機器	90	4.4	7.8	87.8
電子黒板	88	3.4	12.5	84.1
ＤＶＤプレーヤー	94	3.2	59.6	37.2
ＣＤプレーヤー等	93	3.2	22.6	74.2
ＯＨＰ	93	2.2	9.7	88.2
母音図	87	1.1	6.9	92.0
キューサイン表	85	1.2	1.2	97.6
音声記号図、調音部位図	84	0.0	9.5	90.5

平成 29 年度調査

(%)

	n	よく使う	時々使う	使わない
黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）	90	76.7	14.4	8.9
発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）	84	17.9	41.7	40.5
指文字表（五十音、アルファベット）	84	4.8	26.2	69.0
手話表（簡単な手話表現の絵）	79	1.3	17.7	81.0
電子黒板	81	12.3	7.4	80.2
ＯＨＰ	82	1.2	6.1	92.7
パソコン（タブレット PC は除く）	91	54.9	35.2	9.9
プロジェクター	91	24.2	30.8	45.1
地上デジタル対応テレビ	90	20.0	22.2	57.8
ＤＶＤプレーヤー	91	8.8	50.5	40.7
ＣＤプレーヤー等オーディオ機器	89	3.4	19.1	77.5
実物投影機	88	13.6	11.4	75.0
デジタルカメラ	91	13.2	37.4	49.5
デジタルビデオカメラ	90	7.8	18.9	73.3
集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）	87	29.9	10.3	59.8
放送機器	88	10.2	4.5	85.2
個人用ＦＭ等システム	84	22.6	9.5	67.9
音声記号図（日本語、英語)、調音部位図	81	2.5	2.5	95.1
母音図（口形を表した図や絵）	82	2.4	2.4	95.1
キューサイン表（発音サインも含む）	79	3.8	1.3	94.9
タブレット PC	88	25.0	25.0	50.0

表 3-5-1　その他の教材や自作教材

平成 24 年度調査

（中学部　n=62　高等部　n=51）

カテゴリー	内容	中学部	高等部
学習内容の導入のための教材	学習に入る前に意欲付けを行ったり、授業内容の見通しをよくするために活用する教材	6	0
学習内容提示のための教材	教科書のテキストを表示したり、物の名前を表示したり、発音を表示したりするもので、学習している内容を整理された状態で提示するための教材	13	19
学習内容の定着をはかるための教材	カードやプリントを用いて繰り返し学習し、単語や文法などの重要な内容を定着させるための教材	16	14
学習内容の理解を促すための教材	ワークシートや映像を用いて、学習内容の理解を助けるための教材	16	2
聞く（リスニング）のための教材	聴覚障害者向けの英検や共通テストのリスニング問題と同様に英文が字幕で流れる画面を表示させる教材	4	6
読むための教材	プリントやパワーポイントを用いて、英文読解の練習や、読みやすくする教材	4	3
話すための教材	会話の練習をしたり、テキストの音読をしやすくするための教材	3	7

平成 29 年度調査

（中学部　n=70　高等部　n=53）

カテゴリー	内容	中学部	高等部
学習内容の導入のための教材	学習に入る前に意欲付けを行ったり、授業内容の見通しをよくするために活用する教材	6	7
学習内容提示のための教材	教科書のテキストを表示したり、物の名前を表示したり、発音を表示したりするもので、学習している内容を整理された状態で提示するための教材	12	8
学習内容の定着をはかるための教材	カードやプリントを用いて繰り返し学習し、単語や文法などの重要な内容を定着させるための教材	22	9
学習内容の理解を促すための教材	ワークシートや映像を用いて、学習内容の理解を助けるための教材	13	24
聞く（リスニング）のための教材	聴覚障害者向けの英検や共通テストのリスニング問題と同様に英文が字幕で流れる画面を表示させる教材	6	3
読むための教材	プリントやパワーポイントを用いて、英文読解の練習や、読みやすくする教材	7	1
話すための教材	会話の練習をしたり、テキストの音読をしやすくするための教材	4	1

表 3-5-2　中学部で活用している「その他の教材」・「自作教材」
平成 24 年度調査

カテゴリー	教材例	活用の状況
学習内容の導入のための教材	要点を書いたカード	本時のポイントとして授業の初めに提示する。生徒にはノートにとらせる。まとめとして使用する。
	ワークシート	授業の始めに毎回使用する
	絵カルタ	絵を見てどの単語になるのか考えさせるカルタ。色･曜日･ものなど。ゲーム感覚でやらせて興味を持たせる。
学習内容提示のための教材	教科書の本文を拡大したもの	生徒にわかりやすいように絵を加えたり、発音のし方を書いたりして黒板にはって使っている。
	自作フラッシュカード（Power point）	語句と共に覚えられるよう、絵や写真も添付してある。
	自作（パワーポイント）教材	基本文の習得のために、パワーポイントで日本文→英文の確認をさせている。
	プロジェクター提示用本文	板書する時間を省くため。終了後印刷して配布(パワーポイント)
	デジタル教科書	基本文、本文の提示
学習内容の定着	品詞別、カテゴリー別の色付カード　絵カード等	各種語いの定着、文法や語順を視覚的に学習させている
	文法カルタ	1～3 年生までの重要文法や疑問詞のカルタをテスト前等に利用している。(30～40 枚程度)　いくつ?→How many?　未来形→be going to+動詞の原型
	フラッシュカード	カタカナで読み方を書いたカードの読みの部分だけをかくせるもの。新出語句の復習で使用。
	単語学習プリント　音読プリント	単語学習プリント→新出単語･連語を何度も書いて覚えるための学習プリント　音読プリント
	一斉に行われる一般テストの対策プリント	基本文と熟語を暗記して書けるまで、徹底的に取り組ませている。
授業内容の理解を促すための教材	教科書の本文とその訳文のプリント	まず訳文を読ませ、それぞれの課の内容を日本語で理解させて英文を読ませ、新しい文法の説明をするようにしている
	教科書を打ち直した物	本文を学習する時に使う。英語にはふり仮名をふって視覚的にも情報保障している
	自作ワークシート	教科書の音読や文法で、補助教材として使用する
	自作ビデオ	場面を想定させたり、状況の理解を促す時。

	教科書プリント　本文の発音をカタカナ表記したもの	単語習得およびスピーキングの為、実際に発音しながら、読ませる。
リスニング（聞く）のための教材	自作リスニング教材　英検に準じた形で字幕が流れる	教科書のリスニングセクションのスクリプトをパワーポイントを使って流している。全ての学年で展開できるよう準備中のため、活用頻度はまだ高い状況ではない。
	英検のリスニングを想定した字幕教材	英検リスニング代替試験の練習用として、パワーポイントを用いて行う。
読むための教材	単語学習プリント　音読プリント	単語学習プリント→新出単語･連語を何度も書いて覚えるための学習プリント　音読プリント→教科書の本文（英文）の下にカタカナで発音を記入し、音読の練習に使うもの
	自作のプリント	内容の解読等、口話や手話のみで難しい場合の補助として使用している
話すための教材	絵カード（テキストのコピー） ボードゲームで使うボードやカード（テキストのコピー）	ALT と英会話の授業で使う。
	教科書プリント　本文の発音をカタカナ表記したもの	単語習得およびスピーキングの為、実際に発音しながら、読ませる。

平成 29 年度調査

表 3-5-2　中学部で活用している「その他の教材」・「自作教材」

カテゴリー	教材例	活用の状況
学習内容の導入のための教材	パワーポイント	・自分で撮影した写真を、新しい課の導入の際にパワーポイントで映すことが多い。新しい文法を説明する時にも用いる。 ・文法の導入やパターンプラクティスで使用。親しみやすいように絵や写真をたくさん入れて作成する。
	自作のピクチャーカード	・新出単語の導入時に使用する。
	アルファベットの形をしたマグネット	・ＡＢＣの順に並べたりして、アルファベットに親しむことができるようにしている。
	各国や話題に合わせた番組	・導入などで活用。
	自作絵カード、自作アルファベットカード、自作単語カード	・導入時に、ゲーム的に使ったり、重複の授業で使ったりしている。
学習内容提示のための教材	視覚文法教材	・文法導入 ・Oral Practice
	教科書の単語・本文・文法・リスニング用のパワーポイント（ルビ付き）	・授業を進めるときに使用している。 ・（単語・英文）フラッシュカード ・新出の英文や単語にルビをつけたもの。ルビは遅れ

		て表示されるようにしてある。導入や反復練習で使用し、ルビなしで読めるようにしている。
		・文法事項や教科書本文について必要に応じて色をかえたり、注意点や要点を書き加えながら説明をする際に使用している。
		・教科書指導の際、一斉指導しやすいように。
		・文法の説明に活用する。
	拡大提示用教科書（本文）	・一斉音読・内容理解・説明の場面で活用する。
	パワーポイント	・本文をＡ１サイズに拡大したもの。
	デジタル教科書	・本文をわかりやすく映すため。
		・語句の確認や文の提示等のため。
	自作絵カード	・語彙の少ない生徒に対して１つの英単語につき複数の絵で示すことにより視覚的に体験させる。
学習内容の定着	単語テスト・文法カード	・単語や文法の練習に活用する。
	言葉のフラッシュカード（自作）	・授業の初めに毎時間使用、くり返し行う事により定着に繋がる。（２）
	マグネットカード	・単語やアルファベットを書いたマグネットシートを使い、反復練習、マッチング等行なっている。
	単語練習プリント（自作）	・反復練習
	単語カード	・反復練習用、イラスト、意味、スペルが書かれている。
		・単語練習をする時に使用。表に英語裏に意味が書いてあるもの。単語が定着するように反復練習する。
		・Ｂ４サイズ、読みはピンク、スペルは白、意味は水色で色分けしてある。ラミネートをかけてある。全部みて→読みをかくして→意味もかくして→意味だけ見せて→読みだけ見せて（空書）。
	センテンスカード	・英作文練習に使用している。
	文法練習プリント（自作）	・新しい文型が出てきた時に使用したり復習の時に使用したりしている。
		・新出の文法について、反復練習が必要なとき。
	パワーポイントの語句定時	・基本の確認や応用、発展問題。学習内容の理解を深めるために使用している。
	単語、基本文のパワーポイント	・語句の反復練習
		・身近な人やものの画像を取り入れて基本文や単語を提示。反復練習を行っている。
	日本語と英語の対訳プリント	
	パワーポイント	・復習・定着の目的で使う。

		・単語を繰り返し提示したり、スペルを穴うめしたりできるもの。
	副教材	・アニメーションを加えて文法や単語を定着させる。
	自作プリント	反復練習、復習に使用する。
		・基礎力定着のため、課題として使用する。
		・文法事項について生徒の実態に応じてプリントを作成。教科書本文や新出語句をまとめる際にも書いて
	単語カード（絵と単語）	要点をまとめやすいようプリントを使用。
		・既習事項の定着のため。
	既習図	・復習に使う。カルタゲームのように使うこともある。
		・学習の振り返りに適宜活用している。

授業内容の理解を促すための教材	検定教科書のデジタル版（登場人物へのインタビューの映像、人物、場所の写真や絵を含む）	・文化の理解、様々な人々の考え方を知るために映像を使う。話す内容を文字にして示す。
		・場面のイメージをとらえやすくするためにデジタル教材内の画像を使う。
	ピクチャーカード（夕食のメニューなども含む）	・曜日、日付、天気、その日の気分、夕食のメニュー等、英語と絵がセットになっている。
	自作プリント	・単語にルビを振ったものを使って、本文の内容把握のために使用する。
		・教科書本文に読み仮名を付けたものや、読み仮名だけのもの。
		・予習として、単語調べや和訳を課題としている。
		・英文と日本文が対応させてあるプリントを作り、内容理解や音読練習に使用している。
	訳読プリント	・絵・英語・読み方・意味を別々にしたカード。それぞれの学習場面で生徒が操作することもできるようにしマッチング等などの課題に用いる。
	自作カード	・文を疑問文に作り変える練習用。ひっくり返すと語頭が大文字になったりして、生徒が操作、体験して覚えやすくする。
		・意味、英語、発音を別々に示すことができるように３部分に分けている。
		・ゲーム感覚で単語を覚えるために使用する。文法を説明する際にも使用している。
	動詞カードとそれに合う絵カード（両方自作）	・教科書の本文に読み方を付けたり、文法の説明をする。（2）
	パワーポイント	

	リスニング対応字幕テロップ	・英検の聴覚障害特別措置の字幕を参考に、業者テストや県の学力診断テストの際に活用できるようパワーポイントで作成して提示している。
	リスニング用字幕パワーポイント（パワーポイントのアニメーション設定でスクリプトを流す。） 英検リスニングＤＶＤ	・教科書の中のリスニングを行う時にテレビに写し、英検と同様のやり方で行う。 ・教科書のリスニング教材をする時に、英検の練習も兼ねて行っている。
	自作パワーポイント	・英検対策用補習授業で使用している。 ・(単語、教科書の英文、課題)の提示及び反復練習。会話文のテロップを提示する。 ・新出単語や教科書本文を品詞を色分けして示すようにしている。リスニングでは字幕をつけるようにしている。
読むための教材	フラッシュカードのスライド	・難聴の生徒でも発音（教師の口の動き）がわかるように、単語の上にカタカナやひらがなでルビを振っている（教科書会社が発行している英和辞典に記載されているルビを参考にしている）
	教科書の英文に発音（カタカナとひらがな）を付与したプリントを使用（ルビ）	・英文の音読時に活用している。
	デジタル教科書 ・新出語句の音声 ・教科書文の音声	・十分発音要領を確認したあと、ネイティブの音声を聞いてまね、リズムや強弱を学ぶ ・十分音読練習したのち、文のリズムやイントネーションを真似て読む。
	自作パワーポイント	・文法事項の導入や口頭練習のために活用する。絵や発音、アクセントのポイントも表示する。
	絵自作英単語カード	・絵、英単語、よみ方（カタカナ）単語のよみは、手話、指文字で確認、マッチングにも活用。
	自作パワーポイント資料	・英文の発音を文字で提示したり、和訳を提示したりしている。
話すための教材	フォニックスカード 発音足し算表（フォニックス）	・準ずる教育課程の１年次に使用している。
	絵カードプリント	・食べもの、教科、スポーツ、月…など様々なカテゴリー別の絵がプリントされたもの。自己表現等の際くり返し参考用に使う。
	語順カード	・付箋等で自作。外国語指導助手との会話にも使う。
	発音をカタカナでつけたプリント	・発音練習や音読の時に使用している。

表 3-5-3　高等部で活用している「その他の教材」・「自作教材」
平成 24 年度調査

カテゴリー	教材例	活用の状況
学習内容提示のための視覚教材	教科書付属の CD	･演習問題　･導入　･トピックにあった資料の提示
	パワーポイント教材	･指文字(日本語・アルファベット)　･単元毎の要点、復習問題　･板書内容の整理、提示
	自作 DVD	場面の提示
授業内容の理解を促すための教材	ろう学校向け副教材（都ろう教員による共同作)	ろう学校の生徒に使いやすい（自学自習できる）ワークブック
学習内容の定着	単語テスト	個々に応じたスピード（進度）、レベルですすめていく、覚えていく
	生徒の作ったクイズのカード	･文法の理解を深める場面　･単元の文法事項を用いて生徒同士でクイズの英文を作り､出題させる。
	教材プリント	文法練習の問題などを追加するときに使用する
	英検、センター試験、入試過去問等	･問題演習　･項目別要点整理、復習教材
リスニング	PC データ(CD ROM 教科書付録)	リスニング教材の音声をパワーポイントで文字にして流し、英問英答や内容把握の学習に活用
	自作リスニング教材(英文をテロップで流す)	英検のリスニング対策として使用
読むための教材	自作ワークシート	文章の読み取り、文法事項の練習
	自作プレゼンテーション	リーディングの題材の導入のため、写真･文字で（クイズ形式など）情報を提示。
	パワーポイントによる英文のテロップ表示教材	会話文の学習、内容の理解を促す場面
話すための教材	自作ワークシート	会話活動の場面
	ふきだしカード（コミュニケーション活動で使用する短い文を書いてある）	あいさつのやりとりや問題がわからないとき助けを求める（Helpme!）など、コミュニケーションを活性化させるために使用。

平成 29 年度調査

カテゴリー	教材例	活用の状況
学習内容の導入のための教材	英会話の例文教材	・授業に初めに活用する。
	パワーポイント教材	・新出文法事項の解説、まとめ、例文などを、絵や写真等入れながら作成。
		・新出文法事項の解説、まとめ、例文など絵や写真等入れながら作成。導入に使用している。

		・主に導入時、意欲喚起のため（2）。 ・本時の流れを説明する時や、導入時に使用。
	教員が英会話の場面を演じている映像	・授業開始時の雰囲気作りで活用している。
	自作単語カード（ピクチャーカード）	・授業開始時の雰囲気作りで活用。
学習内容提示のための視覚教材	教科書の新出単語についてのフラッシュ教材	・各セクションの内容理解に入る前の発音・アクセント・意味、日本語手話、ＡＳＬの確認。
	教科書の内容をタブレットＰＣに入れたもの。	・課題の提示、文脈の理解を促す場面、復習を促す場面。
	プレゼンテーションソフトで自作した教材	・適宜提示して説明している。
	パワーポイント	・授業（テキスト使用）の視覚化、読み、イディオム、日本語など授業の流れにそって使用
	投影用教科書本文	・一斉音読、内容理解、説明の場面。
	電子黒板	・普通の黒板として使用。（色を変えて目立たせたり、パッと前の「ページ」に切り替えたりが簡単にできる。）
	Ｓｔｕｄｙａｉｄ.D.B.英語	・①プレゼンテーション～テキストの内容を画面上に表示したり、書き込みもできる②データ集～目的のデータを取り出せる③小テスト作成～簡単な操作で習熟度別に小テストを作成できる
授業内容の理解を促すための教材	自作ハンドアウト（教科書の内容をリライトした教材）	・教科書の内容をあつかう場面で活用する。
	デジタル教科書	・意味・発音・問題解説で活用する。
	参考書（文法）	・新出単語の学習、本文音読、問題練習。
	自作のパワーポイント	・リライト教材として ・英語の歌の学習 ・文章の内容理解をさせるために使用。 ・文法解説や宿題などの規則説明。 ・課題提示、理解を促すのに活用。 ・音読練習、単語練習。英文の内容の理解を助ける。英文の内容を鑑賞する。
	ＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔ	・音読練習、単語練習、英文の内容の理解を助ける。英文の内容を鑑賞する。 ・授業場面での活用。

	ｃｏｎｔｅｎｔｓ フォニックス 英語手話辞書ツール（元筑波技大松藤教授制作） 文法事項についてまとめた自作のカード（Ｂ４サイズピクチャーカード（夕食メニュー表）	・教科書の本文読解及び文法内容を理解させるために、自作ハンドアウトと、それに基づいたＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔ　ｃｏｎｔｅｎｔｓを毎回用いている。 ・市販されているフォニックスの本をもとに、生徒にわかりやすく解説を入れたりしながらパワーポイントで作成 ・基本的な単語や機能語をＡＳＬを通して覚えさせる。 ・文法事項の理解を促す場面 ・曜日、日付、天気、その日の気分、夕食のメニュー等、英語と絵がセットになっている。
	プリント 自作プリント（文字情報中心の学習教材） 自作フラッシュカードや自作のイラストプリント(絵を中心にした学習教材) 文法解説用プリント 文法プリント 日本語対応手話確認表・英語理解表・クラスルームイングリッシュ表・文、単語、語句並び換えカード Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｔｏｋｙｏ	・文法の練習、教科書のまとめ等、教科書の内容を補足する形で自作している。 ・１つ１つの学習内容の整理確認などの場面 ・文法の練習、教科書のまとめ等、教科書の内容を補足する形で自作している ・単語練習や文法ドリル学習 ・新しい言葉の獲得や復習などで使用。 ・市販の文法書は、解説が長いので、平易な評言で、コンパクトな説明と、シンプルな例文を使う。 ・ワークシートにし、空欄を埋めて文法のルールを学ばせる。 ・授業全般 ・教科書の内容を深めるときに使用。
学習内容の定着	学習プリント	・授業の内容をふりかえるための自作のプリントを復習用として使用。 ・単語・文法の説明が書いてある宿題。 ・その時々の生徒の理解度やニーズに応じて、文法項目の説明、反復練習に用いる。

		・学習内容のまとめ、試験前等
	教科書内容のまとめプリント 学習内容と関わるワークシート	・学習内容の整理練習。
	単語カード	・単語練習で使用。表に英語、裏に意味を書きこんである。単語の定着に使用。 ・新しい文型が出てきたときに使用。
	センテンスカード 文法練習プリント （教員が単元ごとに自作したもの）	・問題演習、文法の定着や演習力を高めたい時。
	教科書付属のＣＤ－ＲＯＭ	・単元別、文法別演習問題をデータから抜粋して、テストを作成している。
リスニング	自作テロップ付音声データ 教科書のＣＤにテロップを付けたもの。	・リスニング指導
	自作リスニングテロップ（教科書の単元導入・評価時に行うリスニングをテロップ代替し、ＴＶに表示する） Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｔｏｋｙｏ	・教科書の単元導入・評価の場面、授業中、教室に設置してあるＴＶを活用し、リスニング代替を行っている。 ・リスニングにおいての文脈理解・場面理解を促す。
読むための教材	検定教科書の各セクションの本文及びカナ付き本文	・音読練習、日本語手話及びＡＳＬ表出練習
話すための教材	単語カード（表に単語と絵、裏に意味と発音のカタカナ）	・単語指導、作文（会話）のため。

表 3-6-1　市販のテストの活用状況　　(%)

		いつも活用している	時々活用している	活用していない
平成 24 年度	中学部　(n=107)	12.1	43.9	43.9
	高等部　(n=90)	12.2	42.2	45.6
平成 29 年度	中学部　(n=118)	23.3	40.5	36.2
	高等部　(n=95)	20.2	41.5	38.3

表 3-6-2 市販テスト以外の教材や自作教材　　(%)

		自作テスト	自作プリント・ワークシート	その他
平成 24 年度	中学部　(n=83)	79.5	18.1	2.4
	高等部　(n=88)	80.7	15.9	3.4
平成 29 年度	中学部　(n=83)	75.3	17.2	7.5
	高等部　(n=88)	75.3	19.7	9.9

表 3-7-1　あったら良いと思われる教材のカテゴリーと回答数
平成 24 年度調査

カテゴリー	内容	中学部(72)	高等部（52）
学習内容の導入のための教材	学習に入る前に意欲付けを行ったり、授業内容の見通しをよくするために活用する教材	34	13
学習内容提示のための教材	教科書のテキストを表示したり、物の名前を表示したり、発音を表示したりするもので、学習している内容を整理された状態で提示するための教材	10	6
聞く（リスニング）のための教材	聴覚障害者向けの英検や共通テストのリスニング問題と同様に英文が字幕で流れる画面を表示する教材	7	5
読むための教材	プリントやパワーポイントを用いて、英文読解の練習や、読みやすくする教材	0	1
話すための教材	会話の練習をしたり、テキストの音読をしやすくするための教材	13	15
ICT	情報機器や学習プログラム	6	6
その他		2	6

平成 29 年度調査

カテゴリー	内容	中学部(N=80)	高等部(N=47)
学習内容の導入のための教材	学習に入る前に意欲付けを行ったり、授業内容の見通しをよくするために活用する教材	5	2
学習内容提示のための教材	教科書のテキストを表示したり、物の名前を表示したり、発音を表示したりするもので、学習している内容を整理された状態で提示するための教材	6	9
学習内容の定着をはかるための教材	カードやプリントを用いて繰り返し学習し、単語や文法などの重要な内容を定着させるための教材	3	1
学習内容の理解を促すための教材	ワークシートや映像を用いて、学習内容の理解を助けるための教材	10	1
聞く（リスニング）のための教材	聴覚障害者向けの英検や共通テストのリスニング問題と同様に英文が字幕で流れる画面を表示する教材	10	3
読むための教材	プリントやパワーポイントを用いて、英文読解の練習や、読みやすくする教材	15	6
話すための教材	会話の練習をしたり、テキストの音読をしやすくするための教材	9	3
ICT	情報機器や学習プログラム	1	3
ASL	ASL に関した教材	8	6
その他		13	13

表 3-7-2　中学部で「あったら良い」と思われる教材
平成 24 年度調査

n=72

カテゴリー	教材例	活用の方法
学習内容の導入のための教材	教科書で紹介された街や行事、人物について画像、動画を集めたサイト	なじみのない街、行事、人物を扱う内容の題材の場合、そのイメージをつかませることに、痛心している。画像や動画はパソコンを通して、テレビの画面で見ることが多いので教科書対応の画像、動画のサイトがあると便利である。
	字幕付の映像教材	実際の会話場面や文化を知るため。
	ハロウィン、クリスマス、サンクスギビングデイなど 1 年の行事を紹介しているもの	外国の文化をイメージできるような視覚教材　･外国文の文化を知る（それを確認する）アクティビティー
	洋楽で歌手の口と英語字幕が一緒に見られるような DVD	生徒の中には音楽に興味を持っている生徒もいるので、英語で歌わせたい。

	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（BGM が無く、手話と字幕付きが良い）	教科書に沿った内容で、その土地のことや文化につい説明と字幕付きの動画で説明したい。
学習内容提示のための教材	教科書に合った DVD にテロップが付いたもの	読む力をつけるのにも良いし、英検(リスニング代替)の練習にもなる
	教科書の単元の内容を再現したアニメなどの動画(字幕付き)	教科書の内容を理解するために、わかりやすい動画があると良い。リスニング CD が活用しにくい分、映像を使いたい。
	ピクチャーカード	教科書の内容を推量したり、理解を促したりするために必要だと思う。
	デジタル教科書（色が変化し、強調できるようなもの）	新出文法の導入
リスニング教材	リスニング用、字幕テロップ	リスニングの代替になる、字幕テロップがあると、今後のテストや受験、英検対策になる。
話すための教材	英語の発音 DVD	口形や舌の位置、息の使い方等、日本語口話をヒントにしながら習得できると、スピーキングに役立つ。
	教科書に準拠した新出語句等の発音をカタカナで表示する	新出語句等の導入に活用
	口形がわかるフラッシュカードの映像	単語の発音など文字だけでなく、口形でも読みとれるようにすると情報の 1 つとして良い
ICT	字幕作成ソフト	英語検定で使用している字幕のようなものが、簡単に入力して作れると、日常的に活用できる。
	パソコンソフト	・英単語のつづりを入力し、正解、不正解（どこがまちがったか）を生徒自身が気づけるようなもの　・前時の復習として、導入で使用し、書く意欲づけにつなげたい。
ASL	ASL の動画	アメリカ手話のかんたんなものを紹介できるとよい。異文化への理解にもつながる。
	ASL の DVD	簡単な ASL を学習したい。実際の場面に合わせた会話を ASL で学習したい。
	教科書に沿った ASL の DVD	教科書を読む場面で使いたい。
その他	聾学校用の問題集	・ワークだけでなく、問題集で基本を伸ばしたい。　・問題文の指示もわかりやすく、絵が多いものが良い。
	基本文が使われる場面を映像化したもの(手話と字幕つき)	わかりやすい場面で覚えさせたい。

n=80

カテゴリー	教材例	活用の方法
	教科書に出てくる歌や外国に関する動画（英語、日本語字幕付き）	・教科書の内容と関連した外国の文化などを学べるような機会が作れるもの。
	教科書で扱う海外文化等の映像資料（字幕または手話による解説）	・海外の文化や生活を紹介する国際理解教育として授業で使用したい。
学習内容の導入のための教材	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。ＢＧＭが無い又は調整できると良い。できれば、1 場面が短く、繰り返し何度も見られるようにすると、話し合いがしやすい。
	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）英会話なしのもの	・外国の文化、風土などを理解させるために活用できるとよい。
	教科書の内容に合った動画（手話付き）（英字幕付き）	・導入で使いたい。
学習内容提示のための教材	ＤＶＤ	・英語・字幕・手話つきのもの。
	デジタル教科書（聴覚障害者用）	・実態に合わせてルビ付にできると教材づくりが楽になる。（覚えたらルビを外せる。忘れたらルビを付けられる）
	デジタル教科書（歌についての教材。歌詞、日本語が流れるもの。）	・意味やリズムを視覚的にとらえられるとよい。（ルビは必要に応じて、担当が準備する）より英語の歌を楽しめるのではないか。 ・以前は、学校にあったが新版の教科書になってから購入できていない。中１、中２では動画も豊富にあり興味を持たせ易い。
	音声認識機器	・肉声や録音された音声にも対応したものが欲しい。即時的に英文を視覚的に確認させたい。
	教科書の本文や新出単語を英語に対応した手話で表したＤＶＤ	・ＡＳＬではなく、1 語 1 語の単語を手話にしたＤＶＤ。
学習内容の定着をはかるための教材	ルビ付きのフラッシュカード	・単語練習
	映像で光る電子メトロノーム	・単語、英文をチャンツのようにリズムに合わせて覚えさせたい。
	単語のフラッシュカード	・新出単語のフラッシュカードで安くて購入しやすい物。（現行の物は高過ぎて、改定のことも考えると購入希望が出せない。）

	教科書の内容を映像化したもの	・教科書の内容（会話文、読んで理解させる単元、物語など）が、映像化又はアニメーション化されていると良いと思う。
	英文、発音、和訳が提示できるスライド資料と、場面が分かりやすい映像資料	・文章だけでは、想定しにくいので映像で視覚的に捉えやすい資料を提示して使いたい。 （例）中３　Ｕｎｉｔ３　フェアートレイドのしくみを簡単に説明するＤＶＤやガーナの農業に従事する子どもたちの様子を撮影した動画。 中１　Ｕｎｉｔ８　イギリスについての基本情報（位置、文化、農産業、名所、都市、名物など）を紹介する動画
学習内容の理解を促すための教材	教科書の単元に関連する資料や動画ＤＶＤ	・どのような状況で会話が進んでいるかを知ることができる。 ・各単元で見れば、具体的イメージをもちやすい。 ・内容理解が進み、新語や新表現の理解や定着に繋げられるため。 ・本文をイメージしやすいように再現ビデオがあると良い。 ・本文内容の読み取り、理解の確認を行う。 ・本文の寸劇がサブタイトルつきであると、英語が苦手な生徒もイメージがしやすい。（活用場面：本文の学習） ・毎時間、英単語を英手話で表して、授業で活用しているため。 ・読みものとして内容を理解させたいとき、生徒がよりその内容を理解しやすくなるような資料があるとよい。（理解の助けになるような）
	字幕入りの DVD	・リスニングの部分をろう学校用として字幕等で示すＤＶＤ
	英検の代替問題のような、字幕付きのリスニング教材	・英検対策やリスニング、読みとりの練習。
リスニング教材	リスニング用のＤＶＤ	・英検のときに流れるリスニングの様にスクリプトが流れて、答えられる様な教材。
	字幕のリスニング教材	・教科書のリスニングセクションで使用。
	教科書の本文や会話文にカタカナ表記付きの字幕がついたもの。（ＤＶＤ）	・リスニングＣＤ代わりに使うことができる。

	字幕式のリスニングＤＶＤ	・英検のリスニング代替措置で使われるような、字幕式リスニングＤＶＤ。教科書Ａｃｔｉｖｉｔｙの「対話を聞き取ろう」に対応していると良い。また、教科書本文を音声＋字幕で学べると良い。
	リスニングに代わる字幕のＤＶＤ	・リスニング代替して使用文字だけでなく、絵（登場人物）の吹き出しテロップみたいなものが良い。
	リスニング問題のテロップ代替え教材	・聴児の受けているリスニング関連の授業内容とテストを経験させることができる。授業と定期試験で活用。
	教科書のリスニングスクリプト（聴覚障害の生徒用の代替問題。）	・耳で聞くことができる生徒、代替問題が必要な生徒がいるので、どの生徒も取り組めるとよい。英検の練習にもなるのでスクリプトが右から左に流れるもの。 ・リスニング代替。
	テロップ	
読むための教材	教科書の英文にルビがあるもの	・音読練習時に活用する。
	教科書の本文や新出単語にカタカナで読み方がついたもの	・文字と音声が結びつきにくいので、正しい読み方を指導するのに活用したい。
	英文や英単語に読み方がふってある教科書や単語帳	・毎時間、読み方が合っているか確認するのに時間が割かれるため、予め書いてあると他の活動の時間に充てられる。
	音声＋字幕つきＤＶＤ	・教科書（英文）の音読練習で使いたい。音声に合わせて字幕が出てくると、わかりやすい。
	発音がカタカナ表記されているフラッシュカード	・新出単語を確認する際に使うことができる。
	フラッシュカード	・教科書の内容理解、音読練習など ・単語の発音の仕方を丁寧に指導できる。
	中学校で使う、英文法を用いた、会話、教科書本文のＤＶＤ（字幕付き）	・教科書本文をＰＣから大型ＴＶに映す。本文のイントネーションはラインで引いてあるもの。
	教科書の本文にイントネーションのラインがあるもの。	・教科書の新出単語には全て発音記号をつけている。データとしてあると便利。 ・リーディングの練習。
	教科書の新出単語に発音記号がついているもの	・聴覚障害に対応したもの。
	カタカナ付きの英文（教科書本文）	・発音指導時 ・カタカナ付きで音読できるようにして、映像を見ながら意味を推測させたい。

	フォニックスの教材 活用変化表	
	英文の字幕がカタカナ付きで出るもの。（外国のくらし・文化、日本のくらし・文化）読み方が併記されている教科書があると良い。	・イントネーションや発音を記号等で記してあると使い易い。
	教科書本文に、文のアクセント（拍）の印などがついて、英語のリズム（内容語と他の部分）視覚的に分かるもの	・本文の音読で使いたい。少し聞こえる生徒でも強弱は分かりにくいので。
話すための教材	基本的な英会話の場面ごとの動画があると良い。（字幕付きで）	・日常生活のさまざまな場面でよく使われる表現がキーセンテンスで盛り込まれているもの。
	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。ＢＧＭが無い又は調整できると良い。できれば、１場面が短く、繰り返し何度も見られるようにすると、話し合いがしやすい。
	教科書の会話文のＤＶＤ	・買い物、入国審査など教科書の英文を使ったＤＶＤ。実際に外国に入国する時や買い物をする場面を設定した会話練習で使用したい。
	ファストフード店、空港、買い物など生活場面に合わせた英会話の動画。手話・字幕付きが良い。	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。卒業後の海外旅行などに対して、少しでもイメージを付けさせる上での資料としたい。
	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。ＢＧＭが無い又は調整できると良い。できれば、１場面が短く、繰り返し何度も見られるようにすると、話し合いがしやすい。
	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（手話と字幕付き。できればルビも）	・英会話の学習に使いたい。（１場面が短いものが良い。）
	日常会話の動画。字幕がついたもの。	・日常会話を扱った単元で活用する。話者の顔（口）がはっきりわかるような映像。
	字幕つきの会話表現	・短いやりとりから始まり、場面が短いもの。初歩的なものが、とっつきやすい。教科書に準拠したものが使いやすい。

ICT	外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	・できれば無償でネットでダウンロードできると良い。
ASL	ＡＳＬを扱ったＤＶＤ（内容は検定教科書に準じる）	・日本の手話とアメリカの手話の違いや似ている点に気付いたりすることで異文化理解に繋げたい。
	マニュアルアルファベットや簡単なＡＳＬの視覚教材	・日常の指導で活用できるためのきっかけとして用いたい。
	ＡＳＬの動画	・ＡＳＬに興味をもつ生徒がいる為、その学習ができる環境を整えたい。
	ＡＳＬを日本語で解説した教材（辞書、簡単な会話）	・よく使う単語（名詞、動詞）をＡＳＬで表したい。
	ＡＳＬを使用した映像教材（場面別）	・コミュニケーション活動で使用したい。教員のＡＳＬの知識を問わず使用できるものがあると、子どもたちにとって良い。
	ＡＳＬの動画（アメリカ手話）アメリカ手話を学ぶＤＶＤ（日本手話、字幕付）	・外国人ＡＬＴの授業の復習したり、外国人のろう者と話すための練習。 ・場面設定された会話やＡＳＬを使ったアクティビティ、実際にＡＳＬ使用者の会話風景等を収めた初心者用学習ＤＶＤがあると良いと思う。
	簡単なＡＳＬの紹介又は、学習ビデオ	・英語の挨拶をよりスムーズに行うため。
その他	聾学校の英語の授業がどのように行われていて、何が一番ベストなのか教員向けのものがあればとても参考になる。英文法などを表した手話辞典	・スピーキングやリスニングの評価は、どうしているのか、リーディングやライティングに置き換えてしまうと、一般の中学校との評価の差が出てしまうのではないか。
	外国の文化と日本の文化の違いを紹介する字幕付きＤＶＤ	・文法などを教えるときに、正しい手話で教えたい。 ・異文化理解の場面で使用したい。字幕は英語と日本語を選べると、生徒の実態に合わせて使用できる。
	外国の生活、文化の写真、動画	・生活、文化を知る活動で使いたい。 ・日本との違いを伝えるために活用したい
	手話と字幕付きの英会話動画	・外国の暮らしや文化を知る活動で使用する。
	手話と字幕付きの外国の文化紹介動画	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。字幕は、短いものが良い。（２）
	外国の暮らしと英会話を撮影した動画	・外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。

アルファベットの指文字表	・書籍に載っていたものをコピーして使用しているが、かわいらしく楽しく学べるようなイラスト入りの表があるとよい。
ゲーム	･聴覚に障害がある生徒たちが楽しめる英語のアクティビティ集。
単語ゲームで、英語＋読み方がカタカナで表示されるものが良い。	･初期の単語学習を行う時に楽しく耳から正確に聞こえないので、どういう音か見て分かるような楽しいＤＶＤがあると良い。
生徒が好きそうなアニメや映画のＤＶＤ（英文と日本文が同時に出る。）	･親しみやすい内容のアニメ等で自然な英会話のやりとりを日本語も同時に見ながら理解できるＤＶＤがあるといい。
外国の方の手話映像	・海外のろう者の方の手話を見ると、外国（語）がより身近に感じられるように思うので。

表 3-7-3　高等部で「あったら良い」と思われる教材
平成 24 年度調査

n=52

カテゴリー	教材例	活用の方法
学習内容の導入のための教材	手話付き DVD	文化や歴史、芸術などの説明や、英語の説明に視覚教材として使用する
	教科書の本文の DVD（英文の状況を見られる）	導入で見せたい。
	ピクチャーカード　フラッシュカード	･文や会話の状況をイメージする助けとして活用できると良い･ウォームアップ等で毎回活用したい。
	ASLの会話DVD	ASL を用いての挨拶、簡単な会話などの DVD があると、授業の導入で使える
	ドリル	授業の最初に応答練習(コミュニケーション活動)をしたり、英作文をしたりするためのベースになる。
	国別紹介動画	単元の導入部分で、登場人物の出身国、人種、言語文化などがまとめられた動画があるとわかりやすい。
学習内容提示のための教材	英語字幕付 DVD（教科書準拠）	教科書の単元の内容理解を助けるため、又は発展的な内容まで英語で理解し考えさせるために使用したい。
	教科書の指導書に出ている写真などを電子化した教材。+基本的な知識を補えるような画像。	現在、プレゼンテーションを作成するため、自分で 1 から写真や本を集めてカラーで提示しているので、集めたものがあると非常に時間節約になる。
	･デジタル教科書	準ずる学習において、有効に活用できる。
読むための教材	英検（3 級や準 2 級レベル）の 2 次試験で用いられる音読用の長さの英文が多く載っている本。	短い文章を見て、それを理解し、要約できる力を身につけさせたい。

聞く（リスニング)のための教材	英会話用 DVD　せりふが文字で流れて出るもの	英検などのリスニングで代用されているような形式の DVD があると、英会話のパターンプラクティスやロールプレイ、英検対策になると思う。
	教科書の音声リスニング CD をテロップ	聞いて活動するものが教科書に多いため､そのかわりとする。現在はほとんど省いている。
話すための教材	英語の発音の仕方、子音や母音など単語の基本的な発音が学べる教材	適度に本当の英語の発音に近いカタカナも交えたような発音の仕方がわかるような教材があればいい
	教科書本文の読み方の書いてある教材	読み方は、本当の英語の発音とカタカナ表記と違うが、できるだけ英語の発音に近いものが良い。
	市販の英語ソフトに発音をカタカナ表記したもの	授業で使う場面が多くあると思う｡現在も小学校向けなど映像的にも良い物が多く出ているが発音がわからないので使えない
	会話練習DVD	小人数での学習のため、口頭での英文練習がDVDでもできるようになれば良い
ICT	英単語テストアプリ(電子端末、i-pad)	英会話の状況;（印字での）視覚確認が安易なので、また文法も動く図解があれば理解しやすいのではないか英単語のスペル、意味、読み方を確認できる習熟度別テストがあれば､授業の始めなどに確認テストとして利用したい。
その他	外国の硬貨や紙幣のサンプル	外国為替のレートについて、日々変動することを理解し、経済に対する意識を高める。
	聾学校での効果的な英語教育（授業）実践集	書く力をつけるための事例実践。

平成 29 年度調査

n=47

カテゴリー	教材例	活用の方法
学習内容の導入のための教材	新出語彙のルビ付きフラッシュカード	・語彙の導入時
	英単語のＤＶＤ	・語彙の導入時、スペル、意味（手話）、発音（指文字、ルビ）の情報提供"
学習内容提示のための教材	デジタルテレビ	・各教室ごとに１台あると、授業ごとに移動する手間がはぶけて良い。
	音声文字変換ソフト、電子黒板	・高価なので国の補助が必要と思われる。
	デジタル教科書	・授業の中で、必要に応じていろいろと活用できる。 ・何回もくり返し見せたりきかせたり確認したりする時に便利です。

	字幕、カナ付きデジタル教科書	・毎時間での授業で使用。
	加工できるデジタル教材	・本文の間や端に、書き足すことができるもの。
	重複クラス用に自動でルビがふれるワードやパワーポイント	・本時の流れを説明する時に使用したい
	ルビ付き教科書本文	・サイズ変更可能なもの。
	音声認識機器	・肉声や録音された音声にも対応したものが欲しい。即時的に英文を視覚的に確認させたい。
学習内容の定着をはかるための教材	映像で光る電子メトロノーム	・単語、英文をチャンツのようにリズムに合わせて覚えさせたい。
学習内容の理解を促すための教材	単語のつづりと発音(読み方）のパターン例をたくさん載せた単語帳やプリント（カタカナ読み仮名付）	・学習のできるだけ早い時期にある程度系統立てて学習させたい。聴こえる子にも有効だが、特に聴こえの障がいのある子には重要になる。
読むための教材	イントネーションのラインのある教科書本文のデーター	・本文にイントネーションのラインがほしい。
	教科書新出単語 発音記号のあるデーター	・単語の発音に発音記号は必要なのでデータがあるもの。
	フォニックスがすぐわかる本	・ちょっとした単語もフォニックスのルールに沿って読めるように練習する。
	音と文字の対応するフォニックスの内容が含まれた教材	・発音とスペルが異なった単語が出て来た時も対応できるのではないのかと思う。
	発音図表・発音記号表	・発音練習
	発音記号又は読み方がルビとして単語についている教材	・発音練習
聞く（リスニング)のための教材	英検の代替問題のような、字幕付きのリスニング教材	・英検対策、リスニング、読みとりの練習
	字幕でのリスニング教材	・リスニング問題の代替手段として広く使われているが、自作での対応を求められるため、あると良い。英検対策や入試対策での活用を想定している。
	リスニングテロップＤＶＤ	・単元各の評価や導入時、授業中や中間・期末テストで使う。評価の点数に加える。

話すための教材	ＤＶＤ教材	・日常生活でよく使われる基本的な英会話の対話練習用として使用。字幕（意味や読み方）がついていると英語が苦手な生徒にも活用しやすい。
	字幕つきスキット 会話場面に字幕が入ったＤＶＤ（実物でも絵でもよい）	・（読み方もついている字幕つき）会話の練習 ・文字と実際の会話のイメージをつなぐことで、文章の理解が深まったり、導入に時間をかけずに文法や英作文の練習を重点的にできる。
ICT	タブレット型ＰＣとＷｉ－Ｆｉ	・現在は個人所有のものを使用している。将来的に生徒一人一人に行き渡るようになると学習効果は大きいと思われる。
	学習内容の定着度を測定するためのアプリ	・各学習活動の最後５分間で、生徒各自に学習活動を振り返らせるための小テストを行い、その定着度を生徒個人が把握でき、データを集約できるもの。
	描画ソフト	・文章で表記された場面を視覚的に表現できるような描画ソフトがあれば、絵が下手でもイラストにして提示できる。
ASL	マニュアルアルファベットやアメリカ手話のＤＶＤ	・日常の指導や動機づけのために活用する。
	ＡＳＬの基礎を学ぶＤＶＤ	・教員の研修のため。
	ＡＳＬの基礎を学ぶ日本語の入門書	・教員の研修のため。
	ＡＳＬ辞典	・アメリカ手話の学習
	ＡＳＬで基本単語を表すＤＶＤ	・基本単語のみ。導入で使う時に、興味や意識づけで、その単元の最初の時間に見せる。
	ＡＳＬのＤＶＤ教材	・授業の導入等で生徒の興味・関心を惹くために使いたい。
その他	教室の黒板と同じ面積の埋込型電子黒板	・黒板としてだけでなく、ＰＣの画面を投影するなど、あらゆる情報を広い一面に集約できるもの。
	ロジャー（スクリーンタッチパネル）またはロジャーペン	・聴覚障害生徒のための聴力補助機器。離れたところからの音声が、はっきり聴き取れる。補聴器だけでは、聞きとれない生徒にとって有効な補助機器。
	英和手話辞典 和英手話辞典	・言葉と概念が一致させられるツールが必要であり、自分でわからない時に自分で調べて納得する道具があるといい。

英語の歌	・分かりやすい歌詞、カタカナ表記など、生徒が親しみやすい教材。
英語集	・重複クラス用に、社会に出たら目にするような英語集。
アルファベットの点つなぎ（色塗りできるもの、英単語を練習できる４線付き）	・アルファベットの順番を確認後、出来た絵を英語で何というか学ぶ。単語を書く練習、色塗りはあきさせないため。
色のついたアルファベットのマグネット（大文字、小文字）	・アルファベットの順番確認後、色別に分けて色の名前を学ぶ。数の言い方を学ぶ。
フェルトでできた「形」のサンプルセット、模型	・実際に触ることで、いい刺激を与えながら学べる。「形」「色」を英語で理解する。
店舗（ファストフード、洋服店等）や空港、レストラン等、旅行場面での会話集	・英語による活用パターンの習得、コミュニケーションのペアワークとして。
外国の暮らしや文化を紹介した動画。手話つきで会話の内容がわかるもの	・ＮＨＫ「大人の基礎英語」のような１０分くらいで見られる動画。興味をもちながら使ってみたい表現を楽しいドラマ仕立てで楽しんで見られると良い。 ・日本語、英語両方の字幕入りの使いやすいもの。
洋画のＤＶＤ	・英語の入試問題を毎年０から考えなければならないので、入試で使ってもよい長文がたくさん載っている本が大量に必要。
中３～高１相当の英語の長文問題のネタ集	・各生徒の英語力の伸び具合を確認。
聾学校独自の CAN-DO リスト	

自立活動

表 4-1-1　教職、聾学校、幼稚部経験年数

平成 24 年度 N=164　　平成 29 年度 N=150　　（数値は ％）

	経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	22 以上
平成 24 年度	教職		6.7	10.4	10.4	6.1	8.5	13.4	44.5
	聾学校	17.9	18.5	16.7	14.8	6.8	10.5	5.6	9.4
	幼稚部	34.1	22.6	12.2	14.6	4.9	3.7	2.4	5.5
平成 29 年度	教職	5.3	10.7	14.7	5.3	7.3	7.3	6.7	42.7
	聾学校	21.1	17.7	12.2	5.4	13.6	6.8	9.5	13.6
	幼稚部	33.6	18.8	14.1	6.7	12.1	8.1	0.7	6.0

表 4-1-2　担当（所属）

平成 24 年度 N=164　　平成 29 年度 N=149　　（数値は ％）

	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
平成 24 年度	92.7	3.0	0.0	3.0	1.2
平成 29 年度	85.9	4.7	1.3	8.1	0.0

表 4-1-3　担当学年（いつも授業している学年）

平成 24 年度 N=171　　平成 29 年度 N=150　　（数値は ％）

	年少	年中	年長	重複障害
平成 24 年度	30.4	33.3	33.9	2.4
平成 29 年度	28.7	41.3	35.3	6.0

表 4-2-1　教職、聾学校、小学部経験年数

平成 24 年度 N=159　　平成 29 年度 N=142　　（数値は ％）

	経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	22 以上
平成 24 年度	教職	5.7	6.9	6.9	8.8	9.4	4.4	10.7	47.2
	聾学校	17.6	18.2	16.4	15.7	7.5	5.7	8.8	10.1
	小学部	25.2	22.6	13.8	16.4	7.5	3.1	3.2	8.2
平成 29 年度	教職	9.2	8.5	11.3	6.4	8.5	4.3	7.8	44.0
	聾学校	20.7	19.3	8.6	16.4	8.6	2.9	5.7	17.9
	小学部	22.1	20.6	16.2	13.2	5.9	5.9	7.4	8.8

表 4-2-2　担当（所属）

平成 24 年度 N=159　　平成 29 年度 N=132　　数値は %）

	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
平成 24 年度	53.5	13.2	1.5	25.8	5.0
平成 29 年度	58.3	9.1	0.8	28.0	3.8

表 4-2-3　担当学年（いつも授業している学年）

平成 24 年度 N=159　　平成 29 年度 N=142　　（数値は %）

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	重複障害
平成 24 年度	24.1	14.2	9.5	15.1	19.3	4.1	13.7
平成 29 年度	25.4	30.3	31.0	25.4	27.5	23.2	29.6

表 4-3-1　教職、聾学校、中学部経験年数

平成 24 年度 N=136　　平成 29 年度 N=125　　（数値は %）

	経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	22 以上
平成 24 年度	教職	8.8	9.6	7.0	7.4	9.2	6.6	13.2	38.2
	聾学校	26.5	19.1	14	10.3	11.2	7.4	2.2	9.3
	中学部	34.6	30.9	14.0	7.4	2.2	4.4	2.9	3.6
平成 29 年度	教職	4.1	13.8	10.6	7.3	11.4	8.9	9.8	34.1
	聾学校	18.4	24.0	16.0	10.4	8.8	7.2	7.2	8.0
	中学部	26.8	30.9	13.0	7.3	8.1	7.3	3.3	3.3

表 4-3-2　担当（所属）

平成 24 年度 N=136　　平成 29 年度 N=118　　（数値は %）

	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
平成 24 年度	64.7	15.4	3.2	12.3	4.4
平成 29 年度	68.6	14.4	3.4	8.5	5.1

表 4-3-3　担当学年（いつも授業している学年）

平成 24 年度 N=136　　平成 29 年度 N=125　　（数値は %）

	1 年	2 年	3 年	重複障害
平成 24 年度	28.2	27.6	26.6	17.6
平成 29 年度	39.2	36.0	38.4	32.0

表 4-4-1 教職、聾学校、高等部経験年数

平成 24 年度 N=109　　平成 29 年度 N=99　　（数値は %）

	経験年数	0～3	3～6	7～9	10～11	12～15	16～18	19～21	22 以上
平成 24 年度	教職	6.4	7.3	5.5	10.1	7.3	7.4	11	45
	聾学校	21.1	22.9	18.3	10.1	8.3	4.3	3.7	11.3
	高等部	32.1	21.1	11	10.9	6.5	5.5	4.6	8.3
平成 29 年度	教職	5.1	11.1	10.1	9.1	10.1	9.1	10.1	35.4
	聾学校	21.2	18.2	16.2	13.1	8.1	8.1	4.0	11.1
	高等部	27.3	24.2	16.2	10.1	8.1	6.1	4.0	4.0

表 4-4-2　担当（所属）

平成 24 年度 N=109　　平成 29 年度 N=96　　（数値は %）

	学級担任	副担任	学年所属	学部所属	その他
平成 24 年度	58.7	21.1	8.2	8.3	3.7
平成 29 年度	54.2	15.6	14.6	12.5	3.1

表 4-4-3　担当学年（いつも授業している学年）

平成 24 年度 N=109　　平成 29 年度 N=96　　（数値は %）

	1 年	2 年	3 年	重複障害
平成 24 年度	29.4	28.6	25.8	16.2
平成 29 年度	35.0	33.0	38.0	36.0

表 4-5-1　コミュニケーション手段

平成 24 年度 N=499　　平成 29 年度 N=499　　（複数回答）（数値は %）

		聴覚口話	手話付スピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	指文字	その他
平成 24 年度	幼稚部	22.4	26.3	2.0	11.0	4.8	19.4	14.0
	小学部	59.1	82.4	9.4	43.4	11.3	70.4	21.4
	中学部	56.6	84.6	13.2	56.6	5.1	67.6	9.6
	高等部	39.4	88.1	17.4	50.5	3.7	68.8	12.8
平成 29 年度	幼稚部	73.3	84.7	2.0	34.7	13.3	61.3	50.0
	小学部	64.1	89.4	10.6	34.5	12.0	73.2	24.6
	中学部	53.6	82.4	12.8	30.4	4.8	57.6	8.0
	高等部	46.0	92.0	12.0	37.0	1.0	63.0	12.0

表 4-6-1　教材の有無、活用の頻度、活用の状況（幼稚部）
平成 24 年度調査

(%)

	教材の有無				活用の頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
絵本（行事、物語、説明等）	164	94.7	5.3		159	78.6	20.1	1.3	157	68.8	30.6	0.6	0.0
紙芝居（行事、物語、説明等）	164	93.0	5.6	1.9	162	16.7	67.9	15.4	134	57.3	26.1	1.9	
絵日記	158	39.9	57.0	3.2	160	75.6	21.9	2.5	155	58.7	13.5	25.8	1.9
写真（人物、場所、活動場面等）	164	89.2	10.8	0.0	163	88.3	11.7		157	37.6	43.3	0.0	19.1
動画	161	80.7	8.7	10.6	161	9.3	67.7	23.0	164	39.6	24.4	8.5	27.4
絵カード	164	81.9	16.9	1.2	163	90.8	8.0	1.2	160	39.4	26.9	32.5	1.3
文字カード	160	66.3	28.8	5.0	162	62.3	30.9	6.8	158	20.9	23.4	48.7	7.0
実物	164	59.0	37.3	3.6	162	45.6	53.1	1.3	145	78.8	14.7	4.5	1.9
新聞、雑誌	160	74.4	18.1	7.5	162	1.9	46.9	51.2	144	24.3	29.9	1.4	44.4
広告、ちらし、ポスター	159	71.1	20.1	8.8	162	1.9	50.6	47.5	145	23.4	33.1	0.7	42.8
図鑑	164	95.2	4.8	0.0	160	5.1	5.6	0.2	155	84.5	13.5	0.0	1.9
音楽ＣＤ	163	86.7	12.7	0.6	162	34.0	48.8	17.3	157	63.7	16.6	2.5	17.2
ＤＶＤ	163	73.9	18.2	7.9	163	5.2	44.4	56.9	154	42.2	5.2	2.6	50.0
手話・字幕付きＤＶＤ	155	54.2	5.2	40.6	156	0.6	11.5	87.8	144	11.1	0.0	0.7	88.2
ＰＣソフト	154	38.3	9.7	51.9	154	0.6	13.0	86.4	139	10.1	2.9	2.9	84.2
ことば絵じてん	164	89.1	9.7	1.2	164	50.0	46.3	3.7	160	78.8	18.8	0.0	2.5
カレンダー	164	89.6	10.4	0.0	164	90.2	9.1	0.6	160	31.3	45.6	22.5	0.6
インターネット上の Web 情報	156	78.8	5.8	15.4	161	11.2	32.9	55.9	69	18.8	76.8	2.9	1.4

平成 29 年度調査

(%)

	教材の有無				活用の頻度				活用の状況				
	N	学校	個人	ない	N	よく使う	時々使う	使わない	N	そのまま	手を加え	自作	使わない
絵本（行事、物語、説明等）	146	97.9	2.1	0.0	146	73.3	25.3	1.4	139	71.9	26.6	0.0	1.4
紙芝居（行事、物語、説明等）	141	96.5	0.7	2.8	142	12.0	65.5	22.5	133	45.9	30.1	3.0	21.1
絵日記	139	34.5	60.4	5.0	145	71.0	23.4	5.5	135	50.4	17.0	28.1	4.4
写真（人物、場所、活動場面等）	141	90.8	9.2	0.0	147	86.4	12.2	1.4	142	32.4	51.4	14.8	1.4
動画	142	82.4	7.7	9.9	144	9.7	58.3	31.9	138	47.1	14.5	10.1	28.3
絵カード	144	80.6	19.4	0.0	148	89.9	9.5	0.7	143	27.3	33.6	38.5	0.7
文字カード	144	63.9	34.0	2.1	146	58.2	29.5	12.3	143	22.4	18.2	48.3	11.2
実物	141	59.6	36.9	3.5	146	54.1	44.5	1.4	140	65.7	26.4	6.4	1.4
新聞、雑誌	143	72.0	19.6	8.4	147	44.2	40.1	53.1	132	28.0	28.8	1.5	49.2
広告、ちらし、ポスター	142	66.9	21.1	12.0	144	1.4	43.1	51.4	128	7.0	26.6	2.3	48.4
図鑑	145	92.4	7.6	0.0	148	52.7	48.6	4.7	143	1.4	11.2	0.0	4.2
音楽ＣＤ	142	84.5	12.0	3.5	147	50.3	37.4	23.8	135	48.1	13.3	2.2	21.5
ＤＶＤ	141	61.0	15.6	23.4	147	4.8	33.3	63.9	132	47.0	7.6	0.0	59.8
手話・字幕付きＤＶＤ	138	41.3	3.6	55.1	142	24.6	11.3	88.7	129	4.7	2.3	0.8	87.6
ＰＣソフト	141	38.3	7.1	54.6	145	64.8	14.5	84.8	130	22.3	4.6	3.8	82.3
ことば絵じてん	143	89.5	9.8	0.7	147	85.7	40.1	6.8	141	56.0	13.5	1.4	5.7
カレンダー	145	86.9	13.1	0.0	148	83.1	11.5	1.4	141	80.1	55.3	19.9	1.4
インターネット上の Web 情報	144	75.0	6.3	18.8	145	6.9	20.7	65.5	130	82.3	22.3	3.1	61.5
アプリケーション	144	63.2	2.1	34.7	147	1.4	8.2	91.2	130	6.2	3.8	0.0	89.2

表 4-6-2　よく使用する自作教材（自由記述：幼稚部）
平成 24 年度調査

使用用途	教材例	用例
行事（校外学習）	予定表	一日、一週間分の予定。その日の活動の記録（絵写真）し、振り返り
	日課の絵カードに文字と口形文字	毎日、朝すること（タオルをかける、シールをはる、など）のことばを押えるために使用。音声を確実にとらえるために(記号として)口形文字を添えて使用
	絵カード	行事(運動会、遠足、プール学習、夏休みの生活、クリスマス、お正月、節分、ひなまつり、冬のあそび)の時に話す時に使う　紙芝居ふうにしたりして話したりする
	おゆうぎ DVD	学校でうたう歌やおゆうぎを担当者が、DVD で撮り、教材にしている。
	子どもや保護者の人形カード	行事などを説明するときに実態にこのカードを操作することで内容を理解しやすくする。
	遠足等の事前学習用パワーポイント	学校～目的地まで行く過程が分かるパワーポイントを作成し、スライドショーで見せる。(学校の写真、子どもや T の写真をペープサートにしたもの、目的地の写真、利用するのりものの写真を使いスライドを作成する。行事ごとに作成する。)　前年度の行事の写真をスライドショーで流し、行事のイメージをつかんでもらう。
言語指導	こどはあそび等の自作教材(ex、しりとり○のつくことば、クロスワード等)	各学令ごとに、保育で使用する。ことばあそびのための自作の教材
	立体教材	絵カードと同様、子どもが何度も繰り返し、さわったり試したり遊んだりできる教材を作っています。(例えばさつまいもほりの時は、ダナボール箱の畑やさつもいもつるなど)
	言葉、数、色、形など	個々の実態に合わせたものを作成し、個別指導で扱う。

平成 29 年度調査

使用用途	教材例	用例
行事（校外学習）	予定表	一日、一週間分の予定。その日の活動の記録（絵写真）し、振り返り
	掲示物	活動の様子などを掲示し、子供に想起を促す。
	デジタルカメラ	活動を写真に撮っておき、大型モニターに投影し、振り返る。
	絵カード・写真カード	関わりのある人物の顔写真等を使い、想起する。
	製作見本	子供の興味を引くよう、製作する物の見本をあらかじめ作っておく。
	パネルシアター	物語のストーリーの確認や、校外学習の確認等で使用する。
	単元カード	単元の流れを絵や文字にして示し、見通しを持たせるために使用する。
言語指導	ミニホワイトボード	移動先の場所において、適宜確認する際に活用する。
	短冊カード・バインダー	必要に応じて、ペンで書いて確認する。
	５W カード	伝えたいことを分かりやすく伝える際に使用する。
意味理解	じゃんけんカード	じゃんけんのルールを確認する。

表 4-6-3　屋外活動の教材

平成 24 年度調査

	回答総数(学校、個人)	回答数(%)	
		よく使う	時々使う
1スケッチブック	144	9.0	36.1
2メモ帳	145	31.7	44.8
3虫かご	163	23.9	69.3
4虫取り網	161	17.4	80.6
5魚とり網、たも網	108	13.0	62.0
6バケツ	164	4.3	55.5
7ことば絵じてん	164	2.4	9.8
8図鑑	164	9.1	47.2
9絵本	164	3.7	30.6
１０紙芝居	164	1.2	4.3
１１写真	162	38.3	52.8
１２絵日記	155	2.6	16.1
１３デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ	164	76.8	18.3

平成 29 年度調査

	回答総数(学校、個人)	回答数(%)	
		よく使う	時々使う
1スケッチブック	143	4.9	34.3
2メモ帳	147	32.7	30.6
3虫かご	149	21.5	72.5
4虫取り網	149	13.4	75.2
5魚とり網、たも網	143	5.6	30.8
6バケツ	149	12.1	57.0
7ことば絵じてん	150	2.7	22.7
8図鑑	150	7.3	46.7
9絵本	150	3.3	34.0
１０紙芝居	145	0.7	9.7
１１写真	149	36.2	53.0
１２絵日記	150	2.0	19.3
１３デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ	150	72.7	21.3
１４タブレット PC	148	4.1	14.2

表 4-6-4　屋外活動の自作教材（自由記述：幼稚部）

平成 24 年度調査

教具例	用例
ことばあそび絵カード	花や虫などのカードを使用する。　名前を覚えるため、ひらがなを併記している。
ポケット図鑑手作りカード集	主に首にかけたり、ウエストポーチなどに入れて携帯し、必要に応じて出す。
活動写真表	活動内容を写した写真を時系列に並べたり、コメントを記入したりして、体験したことを思い出す手がかりにしている。また、保護者に伝える手がかりにする。
手作りプリント	観察したいもの、見つけさせたいもののみの写真を貼って名前や特徴をそえたプリント。自分で探す手がかり等に活用(ex 春の草花を数種類のせたもの)

平成 29 年度調査

教具例	用例
ポケット図鑑	移動中に、生き物や植物を見つけた時に特徴を話しながら調べる。
デジタルカメラ・コンパクトフォトプリンター	活動写真をすぐ印刷し、帰りの会で提示し、振り返り活動に使用する。
自作地図	子供に分かりやすいように、遠足のルートなどを示す。
手作りカード	カードに書いてある季節の草花や生き物を探し、見つけたらシールを貼ったり○印をつけて遊ぶ。

表 4-7-1　教材の有無、活用の頻度、活用の状況（小学部）

平成 24 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工and自作
1 聾学校用教科書	153	92.8	2.6	4.6	64.7	36.6
2 文部科学省著作	148	70.3	4.1	25.7	20.3	12.2
3 附則の９条本	138	54.3	15.9	29.7	25.4	13.0
4 日本語指導用教材	145	56.6	24.1	19.3	60.7	37.2
5 市販のワークブック、問題集	151	54.3	38.4	7.3	82.8	52.3
6 国語辞典	154	97.4	2.6	0.0	66.2	3.9
7 漢和辞典	153	96.7	2.6	0.7	41.2	1.3
8 電子辞書	145	7.6	25.5	66.9	5.5	0.7
9 手話辞典	154	92.9	5.8	1.3	66.9	9.1

10 ことわざ辞典	151	88.7	7.9	3.3	44.4	9.9
11 ことば絵じてん	157	94.3	5.1	0.6	92.4	20.4
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	155	97.4	2.6	0.0	91.0	9.0
13 絵本（行事、物語、説明等）	156	96.2	3.8	0.0	90.4	21.2
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	150	96.7	0.0	3.3	44.7	13.3
15 なぞなぞ	155	89.7	8.6	2.6	65.8	38.7
16 カルタ、百人一首	156	76.9	20.4	2.6	63.5	10.9
17 絵カード	157	75.2	22.9	1.9	42.0	21.7
18 写真（人物、場所、活動場面等）	153	60.8	37.3	2.0	45.1	32.0
19 カレンダー	153	81.7	17.6	0.7	44.4	19.0
20 絵日記	144	50.0	41.7	9.7	34.0	18.8
21 新聞	153	89.5	7.8	2.6	30.1	16.3
22 広告、チラシ、ポスター	147	81.6	10.9	7.5	26.5	14.3
23 雑誌	146	56.2	19.9	24.0	26.0	12.3
24 音素材用ＰＣソフト、CD	148	71.6	10.8	17.6	32.4	10.1
25 耳の構造図	146	93.8	2.1	4.1	50.0	15.8
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	153	92.8	5.9	1.3	77.8	8.5
27 補聴器点検用具	152	19.1	0.0	0.0	85.5	4.6
28 発音・発語指導用具	153	87.6	9.8	2.6	73.9	31.4
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	146	90.4	2.1	7.5	53.4	6.
30 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	147	81.0	7.5	11.6	45.6	5.4
31 手話・字幕付きＤＶＤ	146	80.8	8.9	10.3	42.5	4.8
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	152	91.4	8.6	0.0	89.5	44.7
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	149	92.6	6.7	0.7	69.1	30.2
34 インターネットの Web 情報	148	91.2	5.4	3.4	65.8	35.8

平成 29 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工and自作
1 聾学校用教科書	140	95.0	1.4	3.6	63.0	32.8
2 文部科学省著作	132	72.7	3.8	23.5	25.8	18.3
3 附則９条本	126	57.9	8.7	33.3	31.6	21.8
4 日本語指導用教材	129	59.7	23.3	17.1	74.4	47.9
5 市販のワークブック、問題集	137	56.9	35.8	7.3	86.8	52.3
6 国語辞典	138	91.3	7.2	1.4	68.8	6.1
7 漢和辞典	138	88.4	8.7	2.9	55.1	4.0
8 電子辞書	132	6.8	28.0	65.2	20.7	1.8

9 手話辞典	136	86.8	8.8	4.4	81.9	11.0
10 ことわざ辞典	137	84.7	9.5	5.8	59.0	10.0
11 ことば絵じてん	138	89.1	8.0	2.9	86.2	17.3
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	137	97.1	2.2	0.7	91.2	11.4
13 絵本（行事、物語、説明等）	137	98.5	1.5	0.0	92.8	18.5
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	137	94.2	0.7	5.1	48.9	11.9
15 なぞなぞ	135	77.8	18.5	3.7	66.9	32.8
16 カルタ、百人一首	137	68.6	25.5	5.8	65.2	11.1
17 絵カード	139	73.4	25.2	1.4	88.4	44.8
18 写真（人物、場所、活動場面等）	135	69.6	24.4	5.9	94.1	58.3
19 カレンダー	137	78.1	19.7	2.2	93.3	48.1
20 日記・絵日記	136	50.0	45.6	4.4	91.2	42.7
21 新聞	139	94.2	2.9	2.9	60.1	29.0
22 広告、チラシ、ポスター	137	86.1	6.6	7.3	45.3	20.8
23 雑誌	137	54.7	14.6	30.7	35.3	13.8
24 音素材用ＰＣソフト、CD	134	71.6	9.7	18.7	53.8	11.1
25 耳の構造図	137	85.4	4.4	10.2	50.7	20.2
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	137	86.9	9.5	3.6	76.1	13.7
27 補聴器点検用具	132	93.2	3.8	3.0	79.6	5.3
28 発音・発語指導用具	128	75.8	14.8	9.4	73.5	35.7
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	130	86.2	3.8	10.0	58.5	7.0
30 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	128	74.2	7.8	18.0	51.5	9.1
31 手話・字幕付きＤＶＤ	128	65.6	5.5	28.9	42.1	7.6
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	133	89.5	9.8	0.8	89.8	37.4
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	132	91.7	6.8	1.5	77.5	26.4
34 インターネットの Web 情報	128	85.2	7.0	7.8	75.4	37.8
35 アプリケーション	128	70.3	13.3	16.4	59.8	18.5

表 4-7-2　授業で活用する機器（小学部）
平成 24 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
1 黒板	150	98.0	0.7	1.3	86.9	3.3
2 発表板	84	56.4	20.8	22.8	67.1	8.7
3 漢字表	113	74.8	16.6	8.6	58.3	10.6
4 指文字表	114	75.0	17.1	7.9	45.4	7.2
5 手話表	73	49.3	16.9	33.8	35.8	10.1
6 電子黒板	88		0	41.7	8.	1.3
7 ＯＨＰ	121	79.6	0.7	19.7	4.6	1.3
8 パソコン	155	100	0.0	0	70.3	14.2
9 プロジェクター	150	98.0	0.7	1.3	51.6	2.0
１０地上デジタル対応テレビ	137	90.1	0	9.9	44.1	3.9
１１ＤＶＤプレイヤー	150	98.0	0	2.0	54.9	1.3
１２ＣＤプレイヤー等オーディオ機器	150	98.0	1	0.	61.4	2.6
１３実物投影機	135	88.2	0.7	11.1	33.3	0.7
１４デジタルカメラ	148	94.9	4.5	0.6	84.0	12.2
１５デジタルビデオカメラ	150	98.0	2.0	0	64.1	7.2
１６集団補聴器	135	88.8	0	11.2	48.7	0
１７放送機器	139	92.1	0	7.9	29.8	1.3
１８個人用ＦＭ等システム	61	42.1	9.0	49.0	26.2	2.1
１９ひらがなカード	107	70.4	26.1	3.3	59.9	27.6
２０音声記号図	139	92.7	2.7	4.7	48.0	13.3
２１母音図	135	88.2	8.5	3.3	55.6	20.3
２２キューサイン表	66	44.3	6.0	49.7	16.1	4.0
２３カードリーダー	94	62.3	2.0	35.8	19.9	2.6

平成 29 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
１黒板	141	98.6	0.0	1.4	89.2	9.0
２発表板	140	67.9	27.1	5.0	84.8	11.6
３漢字表	140	72.1	22.9	5.0	65.7	14.1
４指文字表	139	77.7	12.9	9.4	51.5	8.8
５手話表	136	50.0	14.7	35.3	40.5	16.4
６電子黒板	140	57.1	0.0	42.9	17.2	0.8
７ＯＨＰ	133	57.1	0.0	42.9	7.9	1.8
８パソコン	137	97.8	0.7	1.5	73.0	10.2
９プロジェクター	140	100.0	0.0	0.0	54.3	3.9
１０地上デジタル対応テレビ	137	92.0	0.0	8.0	46.7	4.8
１１ＤＶＤプレイヤー	140	97.9	0.7	1.4	55.1	2.4
１２ＣＤプレイヤー等オーディオ機器	140	95.7	3.6	0.7	66.7	2.4
１３実物投影機	137	85.4	0.0	14.6	37.4	1.6
１４デジタルカメラ	138	93.5	6.5	0.0	83.6	14.3
１５デジタルビデオカメラ	138	97.8	2.2	0.0	72.1	5.3
１６集団補聴器	137	92.0	0.7	7.3	54.4	0.8
１７放送機器	140	94.3	1.4	4.3	37.7	3.2
１８個人用ＦＭ等システム	138	47.8	21.7	30.4	47.0	0.8
１９ひらがなカード	137	73.0	20.4	6.6	68.9	26.8
２０音声記号図	137	84.7	1.5	13.9	51.1	11.8
２１母音図	137	79.6	8.8	11.7	63.8	27.1
２２キューサイン表	134	42.5	9.0	48.5	19.2	9.7
２３カードリーダー	133	60.9	4.5	34.6	33.1	1.8
２４タブレット PC	137	81.8	5.1	13.1	60.0	5.6

表 4-7-3　その他の自作教材（自由記述：小学部）
平成 24 年度調査

教具例	用例
読解問題に応じたペープサート	読解教材（自作）に合わせ、動きや行動を表現するためのもの
ＰＣのパワーポイントの教材	言語指導（文法指導、語彙指導）
	アニメーション機能を利用した発音練習や、イラストや写真、動画を利用した単語およびスピーチレベルにおける発音練習の教材として使う。
文法ドリル	文法カルタの内容を定着させるためのドリル。週末はその週とりあつかっている文法事項のプリントをさせている。
文法カルタ　「がをで」「が、を、に」時制やりもらい、受身こそあど接続詞、使役　自動詞等	9 つの文法事項を合同自立活動の時間に週 1 回カルタ形式で学習している。小学部の児童を語い力に応じて 3 つのグループに分から子ども同士競い合い、楽しみながら行う
会話文用設定イラスト	言語指導、作文指導（場面の把握など）複数の登場人物の気持ちや発言を考えさせ会話を文章化する。
iPad	数の指導…数の合成分解の理解　50 音…書き順などくり返し
ことばカード	動詞や形容詞等を絵、手話、ひらがなで表したカード
日記新聞	週末の出来事を各自発表し、友人の話を記事に書く。記事をまとめ新聞にする。言語指導で用いる。
短冊をつかって絵日記	スケッチブックに、絵日記をかく
ことばのプリント	言語指導で使う。文章の中に正しく助詞や接続詞を記入させたり、動詞の活用を考えさせたり、テーマを決めて、それについて説明させたり、自分の考えをまとめさせたり等、様々な内容について活用。
文法ドリルプリント	助詞や動詞の活用などの練習プリントを朝の自立活動の時間に使用している。
ＨＡ各部の名称プリント	自分のＨＡの各称・各部の各称を学習する際に使用している
認知に関するプリント	主に幼児教育で使われている空間認知や図形認知、記憶ことばなどのプリントを朝自習や家庭学習プリントをしてさせている
構文クイズプリント	児童の言語表現の実態を把握するために使用
ランゲージパズル	先生や友だち（自分も含めて）の声や音を録音して、誰の声か聞き分けさせたり、何と言っているか聞きとらせたりする。
気もちの種類表	「うれしい、楽しい」などの決まりきった感情表現だけでなく、「とまどう、はればれする」など多様な表現を一覧できる表にし、自分の気持ちに合うものを選ぶ。
カラーヒントカルタ	ことばの指導(語句を覚える場をイメージして様子をことばで表現する等)で使用
おかし	舌あそびをしてリラックスした状態と、舌の動きをなめらかにした上で発音指導に入るようにしている

発音カード	自立活動の学習のはじめの 5～10 分で発音練習を行う。
小学部連絡板	季節や行事、いろいろな話題について、クイズやふき出しを掲示し、言語指導に使っている。
口腔模型	調音指導（調音点の確認等）で使う。単音節の調音要領、特に顎の開き具合や舌の口蓋への接触の有無や程度を児童に実際に操作させイメージさせる。
カセットレコーダー	構音学習で自分の声を聞き返す時、再生して使用している。

平成 29 年度調査

教具例	用例
話し合い活動ワークシート	合同で話し合い活動を行う際、話し合いで決まったことやメモをとるワークシートや、話し合う際の自分の目標とふり返りをするワークシートを利用し、自分の課題に向かえるようにしている。
原稿用紙	字を速く書くトレーニングで使用したり、文章を書かせる活動のときに使用したりする。
スリーヒントゲーム	言葉の指導で使う。 ヒントから、考えをめぐらし、答えを導き出していく。
お話づくり絵カード	言葉の指導で使う。 絵から、その状況を読み取り、それを言語化する。
絵カード	語い・語句の拡充。季節の野菜・果物の写真、友達・先生の写真を使用し、神経衰弱を行い、単語の勉強をしている。
助詞カード	文に合った助詞を考えることができるよう、手話の動きに合うように作成している。
調音部位図	構音理解のための説明に使う。
音声読み取りソフト	発声が正しくできているか確かめさせるために使う。
聴力活用アプリ	どれだけ聴力を活用しているかを調べる時に使う。
インジケーター	S.Nができているかを示すために使う。
難聴児支援教材研究会の教材	・日本語の文法指導や動詞の活用などを指導する際、ワークシートを使用。
発音発声プリント	発音練習の際に使用する音読用プリント。
すごろく（ゲーム）	自立活動の時間に使う。日常生活の中でででてきた事や物、物事の名称のクイズが、すごろくの台紙に書いてあり、生活言語の拡充のために使っている。
３ヒントゲーム用教材	似た絵カードを数枚用意し、スリーヒントゲームをしたり、クイズを考えたりする。
反対言葉カード	カードを組み合わせたり、３～４語文を作ったりする。
国語教材	国語の「スイミー」「どうぶつ園のじゅうい」「ちいちゃんのかげおくり」「大造じいさんとガン」等の読み取りに必要な教材がある。
５Ｗ１Ｈカード	文の読みとり、連絡帳書き、文作りなどのときに使用。自活では問題文の読みとりを目指し活用。
ふき出しシート	話し手、話した内容などを明確にし、文の読解力向上を図っている。

季節のことばカード	カレンダーワークで使う。 季節の移ろいをイメージできるように、カードを並べたり、どのような行動が○月に行われているかを説明したりできるようにする。
穴埋めプリント	行事や学校目標等､その時に押さえたい言語を穴埋め式にしたプリントを作成し、宿題にして定着を図る。
補聴器・人工内耳カレンダー	毎日の補聴器管理をすすんで行う子どもに育てるために、ケースに入れる、電池交換した日、イヤモールドを洗った日を記入できるようにしたワークシート
日本語文法指導教材	自立活動や国語の授業において日本語の文を構造的に捉え理解する時に使用する
擬音語・擬態語カード	絵と文字を裏表のカードに載せ、遊びながら、語いを獲得できるようにカードゲームにしました。
文字カード（ひらがな）	語彙力をつけるため使う。ランダムにおかれたひらがなカードを使い、言葉を作っていく。濁点がなかったり、一文字違ったりなどがわかる。
３６５日のワークシート	障害認識や自己理解について考えさせたりする。
ソーシャルスキルのドリル、カード	いろいろな場面でどうすればよいか考えさせたり、他者の思いを考えさせたりする。
「わたしはだれでしょう」「わたしは何でしょう」	・物語の主人公の特徴や、お話の内容を語り形式にした文章を読み、又はその物の特徴や役割を擬人化して語り形式にした文章を読み、誰（物語）のことか、何のことか、自分の持っている知識と結びつけて考える。
抽象語の意味を考えるお話。	・抽象語の入っている例文を読み、その抽象語の表している意味を自分の知っている言葉で置き換える。
４コマ漫画	言語指導（文脈の把握、場に合った表現など）で使う。登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする
音読集	子ども達に知って欲しい詩や伝承あそびをまとめた学校独自の詩集
リーディングテスト	読書力の診断に使用している
４コマ漫画本	言語指導(文脈の把握、場に合った表現など）で使う。吹き出しの一部台詞を消した４コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。
ＳＳＴボードゲーム なかよしチャレンジ	友達関係を楽しくする力を育てる。いろいろなトラブルに対して、どのように解決をすればよいか考える。
動詞・形容詞活用シート	動詞や形容動詞の活用形を一覧にしてまとめて学習するシート。日記の中で活用の誤りを見つけたときや新しい語句に出会ったときに使用し、活用形を正しく理解させる。
５Wカード	いつ、だれ、どこ、なに、どうしたを色分けしてカードで示す。 いつ（赤）、だれ（黄）、どこ（緑）、なに（青）、どうした（茶） 色分けして、板書し囲ったり、カードを分類したりしている。
手話カード	手話と言葉をのせ、カードにし覚えられるようにする。
こぐま会幼児用ドリル	言語指導
構音訓練ドリル	発音指導
ことばのドリル	言語指導

ソーシャルスキルトレーニング	場に応じた会話やふるまいを学ぶ
障害認識パワーポイント	各学年の障がい認識学習で使用。デフリンピック、聴導犬などの紹介や話し合い活動の資料を提示。
助詞を擬人化したカード	「で」（助詞）でも、場所で、理由でなど、意味にあわせて作った人形をカード化して、使用。 （市販のドリルをもとにしている） 「みるみる日本ご　みるくとくるみの大ぼうけん」「３６５日のワークシート」 「みるみる日本語　ＭＩＲＵＫＵとＫＵＲＵＭＩの大航海」
自作のパワーポイント教材	絵本の読み聞かせ、なぞなぞ（言葉あそび）など表示させる。アニメーション機能を活用し、興味をひく工夫をしている。
補聴器、人工内耳チェック表（電池調べ、イヤモールドの汚れチェック、電池室の汚れチェック等）	朝の自立活動の時間帯に各学年・学級で使用したり、自立活動の「聴能」の授業で毎回使用している。
３６５日のワークシート （全国聴覚障害教職員協議会）	手話、日本語、耳と聞こえのしくみ、障がい認識の学習で使用。
小学生の都道府県学習事典（どりむ社）	都道府県の学習で、都道府県マグネットパズルと併せて使用。
生活や行事のプリント	毎日の生活や行事をふり返るプリントを作成。大事なことばは、空らんにして、自分で書きこむようにする
季節と行事の絵カード（自作）	言語指導と四季の概念の定着のために使う。
動きのことばの絵カード(自作)	行動の言語化とその理解、定着のために使う。
パワーポイントで作った教材	国語の言語事項等、わかりやすくＰＰにまとめて授業で使っている
短文穴うめプリント	言語指導、聴覚学習で使う。 音韻数や言葉を考えさせたりする。
発音体操絵付きチェックシート	舌を楽しく出している絵を見て同じようにやる。
聴能聞きとりカード	既習の単語を書いてカードにして、ゲーム仕立てなどにして、聞きとって選ぶ。
品詞カード	文法指導に使う。品詞ごとに色分けしたカードで、品詞分類や文作り、構文の理解等に活用する。
助詞手話（記号）	助詞を手話で表現する、また記号で表現したもの。
ふき出しを入れた絵	物語の一部を絵にして吹き出しをかき、気持ちを考えさせる

呼吸練習のための各種教材	・息の効果的な使用を目的とした練習時 ・無声子音の誘導時
色分けされたことば用カード	大塚校が実践している江副文法をとり入れた指導のため、桃・黄・青・緑のカードを用いている。品詞ごとに色分けしたカードを並べ替えて文をつくるときの助けにする。
ことばの活用表	大塚校が実践しているものと同じ。 語末の活用には一定のルールがあることを知ってもらうため、どの形になるか自分で考えるヒントにするために使用している。
文法指導用のカード	
慣用句のカルタ	本校チャレンジタイムの時に活用。 三人組で競い、たのしく覚えるよう工夫した。
鏡	手話指導（表現の仕方等）で使う。
指導用プリント	言語指導（覚えたことば、助詞等の確認）で使う。 絵や穴埋め問題、文を書くスペースを作り、定着を図る。
鏡	言語指導で使う。 自分の口形が正しいかどうか確認させる。
５０音口形表	言語指導で使う。 母音口形を指導する際、正しい口形を確認させる。
書く力をつける	文章の並べ替えに慣らせるために、応用で使用している。
あごもけい	発音時の舌の位置を確認するのに使う
Ｓインジケーター	発音指導で子音語の息が出ているかを見て確認できる
コロコロゲーム	音のでるボウリングのようなゲーム
動詞プリント	イラストを見て、そのイラストにあう、動詞を考えさせる。
文法カルタ	格助詞や受け身、やりもらい等の学習をするための絵カードや文カード、プリント。
文法カルタ	格助詞・受け身など子どもたちの苦手とする文法をことばと絵・写真で表現し、学習させる教材。
きこえない子のための日本語チャレンジシリーズ	動詞の活用、など文法学習の定着や、ことばの理解と定着を図る。

表 4-7-4　あると良い教材（自由記述：小学部）
平成 24 年度調査

教材	使用場面
発音チェックソフト	自分の発音状況を確認させる
チャットのできる端末やソフト	子ども同士でのメールの方法　やり方を教える

安定性の高い、発音練習機器、ソフト	・呼気の調整・発音のコントロール・母音、各子音の発音練習・プロソディの練習等　・単独、あるいはＰＣに接続して発声・発語指導をゲーム的に繰り返して行う。
障害や福祉制度について、年齢に応じた指導教材（ＤＶＤソフト）	
かんたんにうてるキーボード	パソコンをつかって絵日記をかく　ひらがな表のようなキーボード
タブレット端末	・自己紹介や音読　・音声練習　・ビデオ撮影機能を利用して自己の発音の状況を即時に客観的に把握する。・音声分析ソフトを利用して、自声の音響的特徴を把握する。
マインドマップ	･作文を書くための指導　･マインドマップを作成し、1つの事象から枝を増やしていってイメージをふくらませ、単語を文章化するという方法で作文を書く方法を知る。
日本語各音節の調音要領がダイナミックな視覚的イメージで表されるような機器	・日本語の音節の調音要領の確認　・モニターを見て、各音節の調音要領を視覚的（動画）に把握する。・特に誤発している音節について確認し、自己修正の力を育てる。
ことば写真辞典	語彙の少ない子どもや知らないものについて初めて教える場面で写真を見せる
何と言っているでしょう	･話し手の気持ちを考える。　･友達や人の気持ちを考える。　･社会性を身につける。　･何らかの場面を設定した文章があり、会話の部分を空欄にする。前後の流れからどんなことを言っているか考える
ストーリーを考えて、セリフを入れよう。	･物語の読み取り学習　･話しの流れをイメージする学習　･絵カードをストーリーに沿った順に並び替える。　･物語やセリフを考える。
言語指導大系(のようなもの)	自立活動における言語指導。児童の発達段階や言語力に合わせ指導する際に参考。

平成 29 年度調査

教材	使用場面
自立活動の児童の実態や、発達段階等に合わせた指導実践例	自立活動は、どのようなことをしたらよいか分からないという教員（特に若手や経験の少ない先生）が多いため、新任者等に活用。
聴覚障害児用の日本語学習についての問題集のようなもの	家庭学習等で活用。
日本語文法のワークシート	授業はもとよりレディネスチェックやふり返りの時間に活用。
言語段階評価表	全児童に対して一定の評価を行うために活用。
自己認識学習の分野別 年齢別の内容表のようなもの	幼→高卒業までの見通しを持ちながら自己認識学習を進めるために活用。
口形ＤＶＤ	誤音矯正の際に、舌の動き方が分かりやすく教えられるように活用。
息や声で遊べるソフト。	マイクに息や声を伝えることで画面上で遊べるソフトが欲しい。 発音や発声の指導で活用。
生活音や環境音のサンプルＣＤ（画像付き）	日常場面から、一緒に音をきき、聴覚学習で活用。

食育カルタ	偏食の場合、遊びながら食事の大切さを学ぶと理解や納得するために活用。
みのまわりのものの名前をドリル式に答えられるソフト、アプリ	一度学習した後でテストのように確かめとして活用。
色々な動詞の動画	イラストだけでは伝わりにくい動詞を動画で指導するために活用。
	明瞭な発音と、子供たちの発音の違いが、発声しながら視覚的に見えるものがあるとよい。
発音練習機	自立活動や生活の中で活用。
具体物や絵	課題に対応して活用。
国語の教科書に掲載されている物語教材のリライト文。	
ＷＩＳＣ－ＩＶ	アセスメントのために活用。
ＵＤトーク	情報がどれくらい受けとれているか児童生徒に対して客観的な理解を図るため活用。
言語能力が分かる評価テスト ・ＡＴＬＡＮ ・アラジンのバッテリーテスト ・レーヴンマトリックステスト ・手話能力検査（武居先生作）	
言語力を総合的に評価するテスト、又はテストバッテリー（できるだけ簡単にできるもの）	日々の生活の中で１時間程度で児童の日本語力を評価するために活用。
手話力を評価するテスト	読書力診断検査の手話バージョンのようなものがあると、子どもの手話力を評価でき、指導に生かせる。
電子黒板	集団で視聴覚教材を使うときに活用。
テレビ	日常的な情報や常識を学ぶために活用。
つながりやすいネット環境	すぐに調べたいときや、動画の資料を得たいときに活用。
手話の評価テスト （金沢大版が市販化され、普及するとよい。）	
身ぶりと手話の評価法	
認知学習教材 微細運動教材 粗大運動遊具	重複障がいをあわせ有する児童に対する学習で活用。
発音ソフトとノートパソコン、自立活動用	学習場面で活用。
簡単な楽しい課題を言うＣＤ	聴能学習で活用。
舌の模型	発音指導で活用。
発音指導のための教具集	自作教材製作の手助けとして活用。

読話用ＤＶＤ	練習、評価も含めて活用。
手話付スピーチＤＶＤ	練習・評価のために活用。
発音指導用ソフト	一定の音を発音させるために活用。
騒音計	様々な音の大きさを確認するために活用。
手話イラスト	言葉の獲得、文章の記述、読み取りの指導をする際に活用。
Ｎインジケーター	発音指導の際に活用。
ＫＡＢＣⅡ ＷＩＳＣⅣ	１対１の自活時間の際に活用。
動詞を動きで表してビデオで撮ったもの（動画）	語いを増やす二語文、三語文作りを学習する際に活用。

表 4-8-1　教材の有無、活用の頻度、活用の状況（中学部）
平成 24 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工 and 自作
1 聾学校用教科書	122	82.0	0.8	17.2	37.7	52.5
2 文部科学省著作	122	68.0	4.9	27.0	14.8	71.3
3 附則の９条本	113	64.6	12.3	27.4	19.5	69.0
4 日本語指導用教材	122	45.9	23.0	31.1	46.7	45.9
5 市販のワークブック、問題集	122	43.4	45.9	10.7	77.9	25.4
6 国語辞典	131	93.9	5.3	0.8	70.2	21.4
7 漢和辞典	131	93.9	5.3	0.8	100	35.9
8 電子辞書	129	10.9	44.2	45.0	23.3	58.1
9 手話辞典	131	90.1	9.9	0	0.2	20.6
10 ことわざ辞典	130	84.6	10.8	4.6	47.7	39.2
11 ことば絵じてん	132	85.6	6.1	8.3	47.7	37.1
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	132	97.7	1.5	0.8	60.6	27.3
13 絵本（行事、物語、説明等）	131	96.2	1.5	2.3	45.8	38.9
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	128	88.3	0	11.7	16.4	64.1
15 なぞなぞ	130	81.5	10.8	7.7	36.2	47.7
16 カルタ、百人一首	128	71.1	21.1	7.8	40.6	50.8
17 絵カード	128	73.4	17.2	9.4	61.7	36.7
18 写真（人物、場所、活動場面等）	128	62.5	25.0	1.2	76.6	37.5
19 カレンダー	128	86.7	12.5	0.8	75.0	19.5
20 絵日記	125	31.2	20.8	48.0	28.8	56.8
21 新聞	127	87.4	9.4	3.1	85.0	28.3
22 広告、チラシ、ポスター	125	76.8	14.4	8.8	60.0	30.4

23 雑誌	124	49.2	32.3	18.5	50.8	35.5
24 音素材用ＰＣソフト、CD	123	69.9	10.6	19.5	30.9	56.9
25 耳の構造図	127	92.1	2.4	5.5	63.8	26.0
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	128	88.3	8.6	2.3	70.3	23.4
27 補聴器点検用具	125	96.8	3.2	0	78.4	18.4
28 発音・発語指導用具	125	84.8	5.6	9.6	47.2	42.4
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	123	87.0	0	13.0	30.1	56.1
30 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	127	76.4	16.5	7.1	56.7	35.4
31 手話・字幕付きＤＶＤ	127	80.3	11.8	7.9	56.7	29.9
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	128	89.1	0	0	85.9	16.4
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	127	92.1	0	0	74.0	21.3
34 インターネットの Web 情報	127	84.3	0	0	84.4	12.5

平成 29 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工 and 自作
1 聾学校用教科書	115	69.6	4.3	26.1	33.3	19.8
2 文部科学省著作	111	61.3	8.1	30.6	25.5	21.4
3 附則の９条本	108	44.4	8.3	47.2	28.6	15.9
4 日本語指導用教材	109	42.2	24.8	33.0	57.8	36.2
5 市販のワークブック、問題集	111	41.4	49.5	9.0	82.1	50.0
6 国語辞典	112	91.1	8.0	0.9	76.3	8.2
7 漢和辞典	112	88.4	10.7	0.9	56.1	4.8
8 電子辞書	107	9.3	43.0	47.7	21.6	1.1
9 手話辞典	111	93.7	4.5	1.8	75.4	8.3
10 ことわざ辞典	110	80.0	14.5	5.5	50.9	12.0
11 ことば絵じてん	110	87.3	8.2	4.5	52.2	15.4
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	110	96.4	3.6	0.0	53.9	7.8
13 絵本（行事、物語、説明等）	107	97.2	1.9	0.9	43.9	9.0
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	110	86.4	0.9	12.7	20.0	2.1
15 なぞなぞ	108	85.2	8.3	6.5	34.5	16.2
16 カルタ、百人一首	111	79.3	11.7	9.0	40.9	8.0
17 絵カード	109	82.6	13.8	3.7	49.6	22.6
18 写真（人物、場所、活動場面等）	109	73.4	21.1	5.5	79.3	49.5
19 カレンダー	112	90.2	9.8	0.0	71.6	25.5
20 絵日記	107	42.1	27.1	30.8	35.8	18.8
21 新聞	113	94.7	1.8	3.5	74.8	36.2
22 広告、チラシ、ポスター	112	83.9	11.6	4.5	52.6	21.2

23 雑誌	110	65.5	20.9	13.6	37.6	17.0
24 音素材用ＰＣソフト、CD	103	65.0	12.6	22.3	31.2	11.0
25 耳の構造図	111	91.9	3.6	4.5	60.2	21.2
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	112	89.3	7.1	3.6	71.3	8.5
27 補聴器点検用具	109	95.4	2.8	1.8	76.5	7.5
28 発音・発語指導用具	107	79.4	10.3	10.3	51.8	20.4
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	111	88.3	0.9	10.8	32.7	4.0
30 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	109	78.0	11.0	11.0	55.9	9.7
31 手話・字幕付きＤＶＤ	110	76.4	12.7	10.9	55.3	8.7
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	113	95.6	4.4	0.0	33.3	19.8
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	112	96.4	3.6	0.0	76.7	31.4
34 インターネット上の Web 情報	111	89.2	6.3	4.5	88.7	45.2
35 アプリケーション	109	85.3	3.7	11.0	61.9	14.0

表 4-8-2　その他の自作教材
平成 24 年度調査

教具例	用例
日本語指導の手引き	手引きを元にパワーポイントやワークシートを作成したりしている。
4 コマ漫画本	言語指導(文脈の把握、場に合った表現等)で使う。吹き出しの一部台詞を消した 4 コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。それから、擬音語･擬声語の使い方を知るために用いる。
	漫画をワークシートに提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。上記のものプラス、その場面状況を説明する文作りも行っている。
	バラバラの 4 コマ漫画を並べかえさせて、その後、状況を客観的に文章で説明させる
	言語指導(文脈の把握、場に合った表現等)で使う。吹き出しの一部台詞を消した 4 コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。
	言語指導（文脈の把握、場に合った表現等）で使う。吹き出しの一部台詞を消した 4 コマ漫画をワークシートに提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。
	言語指導（文脈の把握、場に合った表現等）で使う。吹き出しの一部台詞を消した 4 コマ
6 コママンガ(歌詞)	歌詞をよんで、6 コママンガにする。背景、人の気持を考えて描いていく。
鏡文字のカード	鏡に向って、生徒と並んで発音チェックに使用し、良い、もう少しと区分けし、意識して発音できるようにさせる。

発音に関する自作プリント	考えを記入させたり、アンケートをとらせたり、そして発表させて、明瞭さを確認する
日本語指導のための（書記日本語）文法指導用プリント	動詞、形容詞、助動詞の活用の法則や使用例を知り、毎日の帯自立の時間に短文づくりを行う。ことばの使い方（絵じてん）よりピックアップし、いろんな日常生活場面で使うことばを記入できるようにしている
手作リワークシート、パワーポイント	・障害（自己）認識　・聴覚、補聴器についてなど、災害時の情報補償、手帳の活用などそれぞれ関連項目について、ワークシートになるよう自作している
365 日のワークシート	･言語指導に使う。手話や日本語に関心をもたせ、理解に結びつける。　･障害について考え、どのように行動していくか実践的な態度の育成を図る。
プレゼンテーションソフト	耳の構造やきこえのしくみ等の説明に使う。
自校で作成した手話ビデオ	定型手話（指導手話）の手型について学ぶ、方言的な手話について学ぶ
ニュース紹介(新聞)	ニュースの記事を紹介する。自分の感想を入れて発表するための「原稿ワークシート」を見ながら写真を提示するなどして、相手に伝わりやすい発表の工夫を考えさせている。
新聞記事	新聞記事の要約活動で使う。
朝日小学生新聞のスクラッチ	今、話題、ニュースを意識させる。特集をスクラッチして、図鑑や資料として活用する。
NHK 手話ニュースこどもウィークリー	･ニュースを知り、自分の考えをまとめる。　･番組を録画しておき、DVD にダビングして視聴。ニュースを知ることと、それについて意見を書く練習
文法すごろく	文法指導の問題の復習で使用。教室の床いっぱいにロープではしご状にすごろくを作り、子どもに合わせた問題をおいておく
動詞めくりゲーム	言語指導で（動詞の活用）の理解を深めさせるために使用
場面に応じた対話の方法（自作）	「もし・・・したら・・・」「○○の時・・・する」正しい返答ができるか、生活場面で対応できるかなどを考えさせ、手話、筆談で答えさせたりする。
SST シート	絵を見て、描かれた状況を把握し、その場にふさわしい言動･態度のとり方を考える。
騒音計	音の大きさを調べる、きこえ方等の基礎知識について学ぶ

平成 29 年度調査

教具例	用例
スライド	人間関係の学習。 社会性を伸ばす学習など自作のマンガを使って学ばせる。
手話で学ぶ慣用句	言葉の幅を広げ、奥の深い文章を理解できるようにするために日本手話の動画を見ながら、楽しく学習を行う。
龍太郎の「をに」退治	日本語の助詞学習を行うために開発した学習支援ソフト ｗｅｂ上で家庭でも学習できるように作られている。学校ではラズベリーパイを用いて作っている。（ｉｐａｄ、ｗｉｎｄｏｗｓ、ｍａｃすべてに対応）
龍太郎の同士集合 授業で作成したパワーポイントをフラッシュカードにして学習確認	動詞の学習支援ソフト、表示される漫画を動画にして学びやすくしている。上記と同じシステムで運用するようにしている。

手話動画	自立活動はグループに分かれて活動している。手話を学習するグループを担当しているので、生徒の手話を録画し、読み取る練習をさせている。
ワークシート	季節や学校行事に関する手話を学習できるように、ワークシートを自作し、活用している。
４コマ漫画本 新聞記事の切り抜き	１．音読させて、発音指導へ。 ２．読み取らせて、内容を話し合う。 ３．話し合ったことと感想を文章に書かせ、添削指導をする。
発音指導で使うストロー、コップ等	発音発語指導（ストロー、コップなどは「サ行」の発音の学習の時に舌の位置や使い方の確認のために使用する。）
模型など、自作教材	生徒の興味関心に応じて、機械の模型などを作る。
４コマ漫画本	言語指導（文脈の把握、場に合った表現等）で使う。吹き出しの一部台詞を消した４コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。
パワーポイントのスライド	生徒の実態に応じて、「社会常識（マナー）」「聴覚学習」「障害認識」などのテーマでスライドを自作する。それに沿って、生徒と対話しながら授業を進めていく。 施設見学の事前事後指導で使う。日時、場所、内容等を確認したり、写真を加え昨年度の様子を振り返り、事後の写真でも活動の内容を確認したりする。
自作プリント	生徒の実態に応じて、コミュニケーション力や一般常識等を身に付けさせるため、自立活動の時間に用いる。
小麦粘土	感覚遊びで使用する。 様々な感覚に触れる機会を作っている。
生徒自身の作品	行事ごとの作文や国語で書いた詩などの画用紙作品
３６５日のワークシート（全国聴覚障害教職員協議会）	障害について理解を深める。 写真や図、学習内容を盛り込み、視覚的に分かりやすく提示したい時に使う 性教育や進路指導、様々な内容を、ＰＰで作成している。（障がい認識、ＳＳＴなど…） 自立活動で使う。テーマに合ったパワーポイントをゲーム等を入れたり生徒が興味を持つ、わかりやすいように全領域で使えるようにしている。毎年、担当者が、今までのＰＰに手を加え、改良をして、保存している。 ・コミュニケーション・アサーショントレーニング。 ・人との関わり方、等の学習の時に、イラストや写真を用いて、日常場面を想起させたり、思考する手がかりとさせたりした。 正しい助詞等正しい日本語を書かせるため。 必要な部分をコピーして、指導内容に合わせて活用。（拡大等） 手話の表現方法について、病院や、店でのやりとり、災害や、事故時の対処法など、ろう者にとって身近なテーマを項目に分け、生徒自身に考えさせる 聴覚学習、手話、障害認識などについて１時間の授業で取り上げるテーマごとに教材を自作している 手話、日本語、障害認識等、に関わる学習。

作業学習の場面で使う言葉の確認をしよう（自作）	言語指導で使う。 動詞、名詞の確認、自分の行動を言語化する
表情カード	場に合った表現指導の際に使用する
ひとコマイラストプリント	言語指導（状況の正確な描写、前後のストーリーの構築）で、イメージしたものを表現する言葉（オノマトペを含む）を獲得したり、新しい単語、誤記憶等の指導に活用したりする。
イラストの絵からストーリーを考える	様々な場面が想像できるイラストをワークシートに提示し、簡潔でわかりやすい文章（ストーリー）にまとめる
クラスが変わる！ 子どものソーシャルスキル指導法	本の内容から身に付けてほしいスキルを選び、ワークシートを活用している
愛知教育委員会「キャリア教育ノート」	行事の事前、事後指導。自己理解や進路に関する指導に利用する。
絵ロード（ソーシャルスキルトレーニング）	様々な状況を設定した絵があり、こんな時どうするか、考えさせたりする
自立活動事例集(本校自作)	事例を参考にして指導内容等、立案に生かしている
マナー（声かけ含む）	・人との距離 ・ソーシャルスキルなど具体的な場面で、どういう行動をすればいいか考え、自分の行動を振り返る
生活チェック（あいさつ含む）	・ワークを作って、自分の日常生活を振り返り改善させる
平均聴力レベルの求め方	福祉等で判断基準となる平均聴力レベルを求めることで、その仕組みを知り、今後の生活に生かすようにする。
音の周波数の範囲について	補聴器で聞き取れる音の範囲、人工内耳で聞き取れる音の範囲を知り、そこからヒトの聞き取り、他の動物の聞き取りの範囲へと音に広がりがあることについて触れていく。
本校自作のワークシートやプレゼン資料	手話、日本語、障害認識等、に関わる学習。
中学生むきの詩集	音読指導に使う。 中学生で１音１音の発音指導は、時間的にも人数的にも難しい
ことばのききわけ ききとり用ゲーム	言語の拡充指導で使う。 季節や行事のことばなどをききとったりききわけたりする
発音練習テキスト	・母音の発音確認 ・各５０音、濁音などの練習（アクセントなど視覚的に理解できて使いやすいので利用。）
からだに関わる日本語とその手話表現①②（脇中起余子著）	ほとんど網羅的に配列されている中からよく使われる表現を選択して文章例としてリライトして使用。
日本語擬態語辞典	ユーモラスな絵と多くの「ことば」を扱っている。リライトして使用。

（五味太郎）	
４コマ漫画本	言語指導（文脈の把握、場に合った表現等）で使う。吹き出しの一部台詞を消した４コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。
ことわざ慣用句	パワーポイントで作成したスライドを活用し、イラストに合った慣用句、ことわざと意味を結びつける教材を使って指導をしている
調音部位図	発音の指導を行う際に使用する。舌の位置、息の出し方等、視覚的にとらえさせるために使用する。
絵のみの絵本	１つの物語が４～６つに分けて書かれているもので、それを使って、物語を考え、文章で表現させていく。

表 4-8-3　授業で活用する機器（中学部）
平成 24 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
１黒板	130	98.5	0.8	0.8	86.9	3.1
２発表板	129	62.0	17.1	20.9	55.8	7.8
３漢字表	125	58.4	11.2	30.4	27.2	62.4
４指文字表	128	81.3	7.8	10.9	28.9	2.3
５手話表	123	50.4	15.4	34.1	26.0	7.3
６電子黒板	127	58.3	0.8	40.9	18.9	0.8
７ＯＨＰ	127	77.2	0.0	22.8	11.8	0.8
８パソコン･プロジェクター	128	100.0	0.0	0.0	88.3	11.7
９地上デジタル対応テレビ	127	92.9	0.0	7.1	5.5	2.4
１０ＤＶＤプレイヤー	128	98.4	0.0	1.6	7.8	2.3
１１ＣＤプレイヤー等オーディオ機器	128	95.3	0.0	4.7	10.9	0.8
１２実物投影機	123	84.6	0.0	15.4	11.4	1.6
１３デジタルカメラ	130	96.2	3.1	0.8	8.5	5.4
１４デジタルビデオカメラ	129	97.7	1.6	0.8	7.8	3.1
１５集団補聴器	127	91.3	1.6	7.1	4.7	0.8
１６放送機器	126	93.7	0.0	6.3	3.2	2.4
１７個人用ＦＭ等システム	123	49.6	13.8	36.6	1.6	0.8
１８ひらがなカード	125	68.8	13.6	17.6	1.6	0.8
１９音声記号図	122	86.1	1.6	12.3	3.3	4.1
２０母音図	126	84.9	2.4	12.7	4.0	0.8
２１キューサイン表	122	47.5	4.9	47.5	0.8	0.8
２２カードリーダー	119	53.8	7.6	38.7	3.4	1.7

平成 29 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
１黒板	120	99.2	0.0	0.8	91.9	4.5
２発表板	116	67.2	15.5	17.2	73.9	9.3
３漢字表	111	45.0	10.8	44.1	21.5	5.4
４指文字表	116	73.3	13.8	12.9	37.4	8.2
５手話表	111	59.5	14.4	26.1	37.8	13.4
６電子黒板	116	62.9	0.9	36.2	32.7	10.6
７ＯＨＰ	115	60.0	0.0	40.0	11.3	1.1
８パソコン･プロジェクター	119	100.0	0.0	0.0	91.6	19.1
９地上デジタル対応テレビ	114	85.1	0.0	14.9	50.9	3.1
１０ＤＶＤプレイヤー	116	99.1	0.9	0.0	64.4	3.7
１１ＣＤプレイヤー等オーディオ機器	116	99.1	0.0	0.9	57.3	5.8
１２実物投影機	117	92.3	1.7	6.0	58.6	1.9
１３デジタルカメラ	117	97.4	2.6	0.0	84.0	17.1
１４デジタルビデオカメラ	118	99.2	0.8	0.0	75.0	12.6
１５集団補聴器	115	92.2	0.0	7.8	59.0	1.0
１６放送機器	116	97.4	0.0	2.6	42.7	4.0
１７個人用ＦＭ等システム	115	54.8	15.7	29.6	46.4	2.0
１８ひらがなカード	112	72.3	8.0	19.6	25.9	11.0
１９音声記号図	112	75.0	5.4	19.6	25.0	6.2
２０母音図	113	77.9	4.4	17.7	32.4	7.1
２１キューサイン表	113	48.7	4.4	46.9	9.2	3.1
２２カードリーダー	113	67.3	3.5	29.2	36.9	3.0
２３タブレット PC	116	91.4	1.7	6.9	63.8	9.8

表 4-8-5　その他の自作教材（自由記述：中学部）
平成 24 年度調査

教具例	用例
発音指導	発音明瞭度検査で活用している。プログラム(PC ソフト)
	母音の練習のため
	・息の使い方を意識させるための教材（域をすったり、はいたりして楽しめるもの）息じゃんけん、息ボーリング

音調べ	騒音計を使う。廊下を走る音、ものを落とす音。ハウリング、ドアをあける音等
パワーポイント	学習する内容を自作してためてある。各々のクラスや学年で実態に合わせて作り直している。
譜面台	発表原稿を見ながらスピーチするときに原稿を置く。
4コマまんが	セリフを考えたり、気持ちを考えたりする

平成29年度調査

教具例	用例
文字変換アプリ	ＶＴＲや映像を見る時の音声→文字変換を行うことで、情報保障に役立つ
リズム教材（たいこ）	聴覚学習のため活用。
レーザーポインター	合図を出す際に使用する。
きくきくドリル	聞く力や記憶する力を育む。
Ｓインジケーター	発音練習の際に活用。
パワーポイント	授業の流れを提示する。
自作スイッチ	市販のスイッチが押しにくい際の代替手段として活用する。
トーキング・ピース（ぬいぐるみ）	「持っている者のみ発言できる」などの発言ルールの徹底に活用。

表4-8-4　あると良い教材（自由記述：中学部）
平成24年度調査

教材	使用場面
語彙、構文のチェックリスト表	･学習評価･引き継ぎの資料として。
ストーリーを考えて、セリフを入れよう。	･物語の読み取り学習　･話しの流れをイメージする学習　･絵カードをストーリーに沿った順に並び替える。　･物語やセリフを考える。
語彙チェック表	自立活動や個別指導の時。個人の語彙力、語彙の傾向等を把握する。
ワークシート	ゲーム感覚でコミュニケーションや言葉、必要な情報を学べるもの。
ろう教育の歴史・ろう文化・ろう運動について	生徒たちに知識として、指導したいと思っていても、映像や文字情報ではっきりと提示できるものを持っていないのであると良い。映像を見ながら、感想や疑問点等、自由に話し合わせる。
障害や福祉制度について、年齢に応じた指導教材（視覚教材）	写真や映像のソフトがたくさん欲しい。目からの情報を使って、さらにイメージをふくらませられるものが良い。
何と言っているでしょう	･話し手の気持ちを考える。　･友達や人の気持ちを考える。　･社会性を身につける。　･何らかの場面を設定した文章があり、会話の部分を空欄にする。前後の流れからどんなことを言っているか考える。

日本手話と日本語対応手話のちがい	DVD のような間接的なものでなく、人的な教材があるといいと思う。見るだけでなく、実践も入れながらの授業。
発音チェックソフト	自分の発音状況を確認させる
マインドマップ	･作文を書くための指導･マインドマップを作成し、1 つの事象から枝を増やしていってイメージを膨らませ、単語を文章化するという方法で作文を書く方法を知る。

平成 29 年度調査

教材	使用場面
各教室にモニターを２台以上設置	目で見ることが大切なので教師の話している言葉も同時に表示できる支援ができれば理解の助けになる。手話も日本語もネーティブでない生徒にはいろいろなサポートが必要だと思う。
ワークブック	事例や場面が多くのっているもの。（できるだけ実態に対応できるように。）
発音のし方がわかるアニメの動画。（口の内外）	口の動きを外部と内部両方が動画で見れるものがほしい。アニメだとリアルすぎずに見れる。発音のつまずきへの指導に使いたい。
聾学校における指導内容系統表	聾学校勤務２年目なので自立活動の指導内容については、経験が長い先生に教えてもらいながら、行っているのが現状。指導内容表のようなものがあると参考になる。
赤青黄の発音棒（自作教材）	息のみの発音、鼻から息を出す音、声を出す音などの発音練習において、目で見て分かりやすい。
さまざまな環境音が入ったＣＤ	児童・生徒のきこえ方を把握するときに有効。
電子黒板	児童・生徒に伝えたいことをすぐに画像で映し出して視覚的な支援をするとともに、黒板に書き込めることで、児童・生徒の積極的な授業への参加の機会を増やすことができる。
タブレットＰＣ	設置台数をふやして、気軽に動画撮影やインターネット検索ができるとよい。
中学部段階で身につけるべき日本語を、段階的に指導していくプログラム	中１ではここまで,中２では…,中３では…,と、学年に応じて指導できるプログラムがあるとよい。次年度の担任にも、「どこまで指導し終え、どこから指導するのか」を明確に引き継げる。
黒板全体が電子だったら良い。（今まではＴＶの大きさだが…）	ＴＶや黒板両方見ながら授業すると、ろう者にとって、目が疲れたり、ＴＶだと映像が消えてしまい、記録に残らないため、始終記録に残すことができるものが良い。
感覚統合 ｅｘ）バランスボール、知育、手先のこうち性	重複学級の生徒へは、知的や肢体で使っているような教材が適している。
教室に、テレビ、ＤＶＤプレイヤーを設置する。	ＤＶＤ教材で学習するため。

ｗｉ－ｆｉ，タブレットＰＣ，モニター	情報を適切に、素早く提供できる。
３６５日のワークシートの最新のもの	今あるものは古いので、新しいものがあるとよい
社会で活躍している聴覚障害者を載せてある冊子（できれば2～３年ごとに更新してほしい）	聴覚認識や進路指導に使う
発音評価機器	発音学習で、生徒本人がどの音が不明瞭かを意識できるようなもの。
ＵＤトーク	話し手が話した内容（音声情報）を文字化や映像化にするソフト
学校場面での文法指導の教材となるイラストデータ	受身や使役、やりもらい文などの指導のときに、学校で起こりそうな場面を提示し、短文作りをする。
生徒が発語したものが、どのように聞こえるか文字化するもの。	発音指導のときに、生徒自身が確認できるようにする。
言葉の発達段階表	計画を立てるときに、どの段階に生徒がいるのかを見て、次の授業の目標を考えるときに役立てる。
発音の状況を評価するソフトウェア（ＰＣタブレット等）	発音の指導と評価で使用。生徒自身が簡単に扱えるものがあると良い。
都道府県や主な国名を表す手話の解説ＤＶＤ	手話の学習で利用したい。 手話の表す意味（由来）も映像であるとわかりやすい。
回復への道のりーロードマップー	性に関する問題行動の指導
発音→文字化装置	自分の発音がどう聞き取られるのかを見たいという生徒がいるので、発音やコミュニケーションの指導に使いたい
聾学校用教科書（国語言語編）を現代に合った内容に変えてほしい。	自立活動（言語）で使用しているが、内容が古く今の子供の生活に合わない。
日本語の助詞指導に役立つ教材	助詞を間違えて覚える生徒の中には自分のルールがあるはずなので、その「自分ルール」をひもとき、指導できる指南書があればうれしい。
「わたし　出会い発見」シリーズ　大阪府人権教育研究協議会　発行	小・中学校の学活や仲間作り、学級作りで行われている実践集は聾学校の自立活動のコミュニケーションや人間関係の形成をねらった場面においてもおおいに活用できると考えている。

幼・保・小・中の学級作り 仲間作り関係書籍	小・中学校の学活や仲間作り、学級作りで行われている実践集は聾学校の自立活動のコミュニケーションや人間関係の形成をねらった場面においてもおおいに活用できると考えている。
日本語指導用のワーク	相手や場面に応じた使い方、言いまわしなどを、項目別に学習する。
聴覚障がいと知的障がいを併せ有する子への指導教材、教材集	重複障がいの子どもへの指導の手がかりとなる。 自立活動と日常生活、生活単元学習などを関連させて指導する際の手がかりとなる。
言語力の伸びがわかるソフト	PC などでテストを受け、結果をデータして残し、定期的に実施することで伸びが分かる→研究に活かす
音声入力→文字への変換、精度の良いソフト	手話の難しい人でも話を文字に即時におこせれば会話が可能 聴覚障害の生徒の発声のフィードバック
聴覚障がい教育の中で生活やルールなどを学べるアプリ	生活の中で、しては良い行動や悪い行動などの情報を視覚教材で使うことができるアプリ（言い方や表現の情報を知ることができる。）
電子黒板	映像による視覚情報をよりクリアに提示できる。生徒自身が操作したり、全体への発表したりする場面で、有効。
言語指導や発音指導及び障害認識に関わる学習（発達）段階表。	生徒の学習内容の設定や評価の際と参考資料としたい。 ※客観的な評価指標としての活用。
手話の読みとり用のＤＶＤ。（児童・生徒が行事についてなど話しているもの）。	手話を読み取る力の評価。手話表現を広げる（工夫など）。
音を加工するソフト。	教員とかが比較的簡単に音を加工できるソフト。（専門的でないもの） 出前授業等の時、難聴体験などで使用する。
音のきこえ方、等の子どもむけＤＶＤ	補聴器メーカー等が作っているものはあるが、教材用としてあるとよいと思う。
手話ビデオ	自立活動の学習の際に活用。
発音に関するもの 中学生で行う発音に関する教材	自立活動の学習の際に活用。
読話に関するもの	自立活動の学習の際に活用。
”Ｓインディケーター” あるいはこれにかわる機器	発音指導の際、発音の確認、矯正ができる。
補聴器のメンテナンス	家庭で行う補聴器のメンテナンスの行い方を映像で示せる教材。

表 4-9-1　教材の有無、活用の頻度、活用の状況（高等部）
平成 24 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工 and 自作
1 聾学校用教科書	92	65.2	4.3	30.4	9.8	72.8
2 文部科学省著作	87	59.8	2.3	37.9	12.6	74.7
3 附則の９条本	89	56.2	7.9	36.0	12.4	71.9
4 日本語指導用教材	94	68.1	7.4	24.5	33.0	55.3
5 市販のワークブック、問題集	100	59.0	28.0	13.0	61.0	30.0
6 国語辞典	104	95.2	3.8	1.0	67.3	25.0
7 漢和辞典	104	91.3	5.8	2.9	48.1	38.5
8 電子辞書	99	13.1	51.5	35.4	43.4	39.4
9 手話辞典	103	94.2	4.9	1.0	75.7	18.4
10 ことわざ辞典	97	88.7	8.2	3.1	44.3	45.4
11 ことば絵じてん	98	85.7	9.2	5.1	36.7	55.1
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	100	97.0	1.0	2.0	44.0	47.0
13 絵本（行事、物語、説明等）	99	97.0	1.0	2.0	33.3	53.5
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	97	82.5	1.0	16.5	14.4	69.1
15 なぞなぞ	97	85.6	8.2	6.2	26.8	55.7
16 カルタ、百人一首	99	80.8	7.1	12.1	29.3	54.5
17 絵カード	97	80.4	11.3	8.2	36.1	56.7
18 写真（人物、場所、活動場面等）	97	66.0	21.6	12.4	68.0	40.2
19 カレンダー	102	91.2	6.9	2.0	58.8	34.3
20 絵日記	92	43.2	22.8	33.7	21.7	68.5
21 新聞	100	90.0	60.0	40.0	82.0	13.0
22 広告、チラシ、ポスター	99	89.9	6.1	4.0	60.6	33.3
23 雑誌	98	58.2	18.4	23.5	50.0	39.8
24 音素材用ＰＣソフト、CD	90	67.8	6.7	25.6	36.7	55.6
25 耳の構造図	100	91.0	30.0	60.0	56.0	34.0
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	100	92.0	50.0	30.0	68.0	25.0
27 補聴器点検用具	100	96.0	40.0	0.0	59.0	34.0
28 発音・発語指導用具	97	82.5	5.2	12.4	28.9	59.8
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	95	90.5	1.1	8.4	17.9	68.4
30 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	100	87.0	10.0	3.	67.0	29.0
31 手話・字幕付きＤＶＤ	98	89.8	7.1	3.1	71.4	24.5
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	99	98.0	0.0	0.0	81.8	20.2
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	99	97.0	0.0	0.0	70.7	31.3
34 インターネットの Web 情報	96	97.9	0.0	0.0	89.6	12.0

平成 29 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工 and 自作
1 聾学校用教科書	86	76.7	0.0	23.3	10.5	5.1
2 文部科学省著作	87	69.0	2.3	28.7	10.3	3.9
3 附則９条本	83	61.4	1.2	37.3	18.3	5.2
4 日本語指導用教材	86	64.0	20.9	15.1	49.4	33.7
5 市販のワークブック、問題集	90	65.6	24.4	10.0	57.3	38.8
6 国語辞典	92	94.6	4.3	1.1	73.4	4.4
7 漢和辞典	91	94.5	3.3	2.2	57.3	4.4
8 電子辞書	88	14.8	61.4	23.9	39.6	1.2
9 手話辞典	97	90.7	6.2	3.1	72.7	9.4
10 ことわざ辞典	91	89.0	3.3	7.7	38.3	3.4
11 ことば絵じてん	90	84.4	4.4	11.1	28.7	7.0
12 図鑑（生活、生き物、乗り物等）	92	94.6	0.0	5.4	41.1	10.0
13 絵本（行事、物語、説明等）	91	92.3	0.0	7.7	32.3	7.0
14 紙芝居（行事、物語、説明等）	89	82.0	2.2	15.7	13.3	6.0
15 なぞなぞ	90	81.1	8.9	10.0	18.5	14.1
16 カルタ、百人一首	89	82.0	7.9	10.1	32.6	7.1
17 絵カード	86	81.4	10.5	8.1	41.5	22.1
18 写真（人物、場所、活動場面等）	92	70.7	19.6	9.8	75.8	59.1
19 カレンダー	94	87.2	10.6	2.1	74.2	28.9
20 日記・絵日記	89	51.7	28.1	20.2	45.2	25.3
21 新聞	93	92.5	4.3	3.2	77.6	45.7
22 広告、チラシ、ポスター	91	86.8	4.4	8.8	54.7	18.9
23 雑誌	89	59.6	11.2	29.2	40.9	13.8
24 音素材用ＰＣソフト、CD	88	70.5	4.5	25.0	26.9	7.9
25 耳の構造図	93	93.5	1.1	5.4	58.8	23.6
26 補聴器、イヤモールド、チューブ	91	85.7	11.0	3.3	68.8	15.7
27 補聴器点検用具	84	94.0	2.4	3.6	69.5	6.7
28 発音・発語指導用具	83	83.1	8.4	8.4	37.2	16.5
29 楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）	79	84.8	1.3	13.9	23.1	1.2
30 ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）	83	88.0	10.8	1.2	71.9	12.5
31 手話・字幕付きＤＶＤ	83	83.1	8.4	8.4	67.4	7.1
32 デジタルカメラ（撮影した写真や動画）	84	95.2	4.8	0.0	91.8	43.0
33 デジタルビデオカメラ（撮影した動画）	85	94.1	4.7	1.2	82.5	35.9
34 インターネット上の Web 情報	82	90.2	7.3	2.4	90.5	43.5
35 アプリケーション	82	86.6	4.9	8.5	72.6	17.6

表 4-9-2　その他の自作教材（自由記述）
平成 24 年度調査

教具例	用例
発音指導プログラム(PC ソフト)	発音明瞭度検査で活用している。
パワーポイント	学習する内容を自作してためてある。各々のクラスや学年で実態に合わせて作り直している。
譜面台	発表原稿を見ながらスピーチするときに原稿を置く。
デジタルフォトフレーム	行事等の後、画像をスライドショーにして廊下で流しておく。活動の場面を繰り返し、生徒が目にすることで記憶に残る。
iPad　&　モバイル Wi-Fi	･授業の中で、各自調べたい内容をすぐに調べることができる。･動画で自分の手話や表情を確認できる。
模擬体験用機材一式	市役所･病院･銀行の 3 つを高 1～高 3 で模擬体験している。その時の教材。市役用･病院用･銀行用と卒業後、1 人で行く事を想定して活用している
365 日のワークシート	自立活動の時間に提示　クイズ形式にしたり、事象を提示して、やりとりすることを大事にしている

平成 29 年度調査

教具例	用例
きこえのしくみ	きこえの学習で活用 耳～三半規管～脳←こまくの刺激で電流が流れるようにしている
「賛成」「反対」の札や三角柱など討論に使用するもの。	賛成・反対に分かれての集団討論で活用。
ランゲージパル	聴能学習時に目に見える形で音の出る時を意識させる
模造紙	調べた学習内容をまとめる。
音声分析器	音声や環境音の分析で活用。
電池チェッカー	電池の残量をチェックする際に活用。
手話掲示板	生徒が見やすい廊下に展示し、新しい手話や覚えてほしい手話表現について紹介している。
ＮＨＫ「手話ニュース」	毎週の学部集会にて、ＮＨＫの手話ニュースを録音し、字幕を隠して、内容を記入する。正解を見せた後に、修正したり、説明を加えたり、生徒の感想等を述べることで、受信、発信のコミュニケーション力を身につける。

表 4-9-3　授業で活用する機器（高等部）

平成 24 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
1 黒板	101	97.0	1.0	2.3	86.1	1.0
2 発表板	101	61.4	12.9	25.7	58.4	5.9
3 漢字表	99	55.6	8.1	35.6	40.4	3.0
4 指文字表	100	77.0	4.0	19.0	22.0	5.0
5 手話表	99	51.5	10.1	38.4	17.2	5.1
6 電子黒板	99	59.6	1.0	39.4	21.2	4.0
7 ＯＨＰ	100	81.0	0.0	19.0	19.0	3.0
8 パソコン・プロジェクター	103	98.1	0.0	1.9	93.2	11.7
9 地上デジタル対応テレビ	99	94.9	0.0	5.1	56.6	3.0
１０ＤＶＤプレイヤー	102	99.0	0.0	1.0	75.5	2.0
１１ＣＤプレイヤー等オーディオ機器	101	96.0	1.0	3.0	45.5	2.0
１２実物投影機	96	92.7		7.3	55.2	3.1
１３デジタルカメラ	101	98.0	2.0	0.0	82.2	9.9
１４デジタルビデオカメラ	102	98.0	1.0	1.0	64.7	5.9
１５集団補聴器	102	96.1	1.0	2.9	40.2	0.0
１６放送機器	103	92.2	0.0	7.8	26.2	0.0
１７個人用ＦＭ等システム	94	50.0	7.4	42.6	17.0	0.0
１８ひらがなカード	93	6.8	8.6	22.6	18.3	3.2
１９音声記号図	96	80.2	2.1	17.7	17.7	3.1
２０母音図	99	75.8	4.0	20.2	17.2	2.0
２１キューサイン表	90	53.3	2.2	44.4	5.6	2.2
２２カードリーダー	89	57.3	2.2	40.4	16.9	0.0

平成 29 年度調査

(%)

	N	学校	個人	ない	よく使う+時々	加工・自作
1 黒板	96	99.0	1.0	0.0	92.8	1.1
2 発表板	95	70.5	12.6	16.8	70.5	8.7
3 漢字表	90	62.2	4.4	33.3	17.8	3.8
4 指文字表	93	78.5	5.4	16.1	31.2	6.0
5 手話表	92	67.4	4.3	28.3	31.9	8.3
6 電子黒板	94	71.3	0.0	28.7	32.6	5.1
7 ＯＨＰ	94	63.8	0.0	36.2	10.0	0.0

８パソコン・プロジェクター	97	100.0	0.0	0.0	94.9	13.0
９地上デジタル対応テレビ	97	88.7	0.0	11.3	62.1	7.9
１０ＤＶＤプレイヤー	97	96.9	1.0	2.1	76.8	1.1
１１ＣＤプレイヤー等オーディオ機器	96	93.8	3.1	3.1	44.2	0.0
１２実物投影機	93	89.2	0.0	10.8	58.5	2.4
１３デジタルカメラ	96	94.8	4.2	1.0	88.7	12.4
１４デジタルビデオカメラ	97	97.9	1.0	1.0	75.8	8.2
１５集団補聴器	96	93.8	0.0	6.3	46.4	4.6
１６放送機器	96	95.8	0.0	4.2	40.4	5.8
１７個人用ＦＭ等システム	93	50.5	24.7	24.7	33.7	1.2
１８ひらがなカード	93	77.4	5.4	17.2	18.5	8.4
１９音声記号図	89	80.9	3.4	15.7	18.5	3.6
２０母音図	92	82.6	3.3	14.1	17.4	4.8
２１キューサイン表	92	47.8	3.3	48.9	5.6	2.5
２２カードリーダー	88	64.8	4.5	30.7	32.6	0.0
２３タブレット PC	96	90.6	1.0	8.3	71.0	9.2

表 4-9-4　あると良い教材（自由記述）
平成 24 年度調査

教材	使用場面
自立活動(聴覚障害者用)の教科書(できれば幼･小･中･高一貫した内容で)	年間の指導計画や個人の指導計画･指導内容を作成する上で役立つ
聴覚障害者の歴史に関する掛図またはＤＶＤ（手話と口話の歴史､聴覚障害教育の歴史など	生徒たちに知識として、指導したいと思っていても、映像や文字情報ではっきりと提示できるものを持っていないのであったらいいなと思う。映像を見ながら、感想や疑問点等、自由に話し合わせる。
	「障害についての理解を深める」授業の中で利用する。
	社会生活を送る上で、聴覚障がい者が困る場面や判断に迷う場面を事例別に編集したビデオＤＶＤ。例、会社での人間関係。公共の場でのトラブル、情報保障のない場面など　解決するための事例学習に活用する。
	国内外問わず、聴覚障害があっても、多方面に活躍している方々の映像やインタビュー、スピーチ等が文字入りで入っているもの。なるべく、多数、多職種について触れてあるとよい。
他校の紹介ビデオ	生徒は他校の様子を知りたがりますが、実際に見学には行けません。他校を知ることで、自校の特色がわかればと思います
社会参加に向けたＤＶＤ	社会参加する上での色々な場面での対応の仕方の参考になるもの。全体指導などから卒業後の再学習などに対応できるもの、個人が安価で購入できるものでも可か。

字幕つきの DVD 教材	「性の指導」や「聞こえについて」の学習に活用。
様々な場面（会社に入るときや入ってから）を想定したＤＶＤ	障害認識などで活用し、ディスカッションさせたい。
福祉用具(目ざまし時計、インタホーン、呼名、ベビージグナル)実際に使うために布団と枕があるといい。	
ライブチャットのようなもの	席にいながら手元で授業に対する意見、感想などを入力し、リアルタイムで集約し、メイン画面で出力する。キーボード入力の難しい場合にも自分の意見に近いものをボタンで選べるようにする。
ｉｐａｄ	現在沢山のアプリがあるので、そのアプリを利用し（例）社会人のマナー　社会人の言葉づかいなど　動画を使用し視覚的に学べるものを選び指導に役立てる。
自立活動用チェックシート（高等部用）	社会参加に必要なことがらを、自立活動の領域別に発達の段階に則した具体的な達成内容の目安があるもの。担当者や本人が達成の目安にできる。
語学力、文法力が生徒に分かる教材	個別指導　生徒が自己の力を客観的につかむ
ろう学校検定のようなもの	・よみとり・コミュニケーション・手話力・行動力　などをなかるもの　社会に出るために何級レベルなど。
進路に関する全国の聾学校卒業生の実態がまとめてあるもの（データ）	本校の卒業生の様子（就職して困ったこと等）を伝え、厳しい現状を伝えるようにしているが、本校だけだと少ないため、全国の方の様子や、働く際に直面している課題を幅広く知ることができると良い。
障害を知る、自己認識のチェック項目	障害認識の授業の際、生徒がどこまで受けとめているかによって内容がかわってくるため、事前の実態把握に使用したい。
手話テスト（高校、成人用）語い、文法について	実態把握や事後評価に使用したい。聴覚障害者向けの高校生で知っておくとよいもの（手話）が目安程度でもわかるとよい。
日本手話と日本語対応手話のちがい	DVD のような間接的なものでなく、人的な教材があるといいと思う。見るだけでなく、実践も入れながらの授業をしたい。
読書力診断検査（高校・成人用）	現在、実際把握のため、中学生用を使用しているが、参考程度であり、進路等の話し合いなど、保護者や本人に実力を理解してほしい時に、明確な資料になりづらい、聴者との差がわかると目標がはっきりすると思われる。

平成 29 年度調査

教材	使用場面
自立活動ワークブック（聴覚障害用）	指針となる副読本があれば、もっと計画的な自立活動の授業が行える
顔表情認識アプリ	顔の表情から、喜怒哀楽を読み取ることができるソフトがあると良いと思う。絵などではなく、実際の写真を編集できると良い。
手話を評価する教材	どの程度、手話の力が身についているのか（語彙、文法）を評価し、指導に役立てる際に活用。
日本手話を学習する教材	系統的な指導ができるよう、シリーズ化されている教材があることが望まし

	い。
ろう文化、ろうの歴史について理解を深める教材	障害認識の分野において、アイデンティティの形成のため、様々なジャンルに関わる聴覚障害関連の情報や、ろうの歴史などを盛り込んだ教材があると誰でも自由に閲覧することができる。
タブレットＰＣでインターネットに接続できる環境	調べ学習等で活用。
ろう者に関する歴史の（ろう運動、ろう教育など）教科書	
日本語学習テキスト	
手話学習テキストＤＶＤ	
ＵＤトーク	テレビ視聴、映像字幕
校内ｗｉ-ｆｉシステム	様々な場所でタブレットを用いてインターネット情報を利用できる。
各教室でのＴＶ視聴設備（学校に地デジテレビはあるが、教室内で視聴できない）	教育番組や手話ニュースなどの視聴が教室でできる。
大型ＴＶとタブレットやウェブカメラ（実物投影機がわり）が簡単に連動するもの。	授業中に出てくる、様々な単語や状況の説明に補足の文章や映像をすぐに映し出せる。
	ネット環境がもっと良くしないとＰＣもタブレットも宝のもちぐされ。ほとんど使えない状態。
	パソコンも昔導入したものをそのまま使ってるので常に新しくしていかないと全く役に立たない。ＹＯＵ　ＴＵＢＥは見れるように県に指導してほしい。
コミュニケーションやビジネスマナーに関するＤＶＤ	実際の映像を見ながら、適切な方法及び不適切な行い等を目で見て確認する。
ソーシャルスキル教育関係の本	よりよい人間関係を築くための指導で参考になる。（卒業後）
日本語の使い方	ろう者の特性の視点で編集したもの 全国聴障教職員協議会も作成中
障がい者の福祉について	将来の生活のために。
障害受容に向けての段階表	健聴者のことが嫌いで壁を作ってしまう生徒や状況があるときに、その状況を乗り越えるための気持ちの段階表。
障害のある人が社会で働くためのそれぞれの職種の可能性と制約	障害のある人はどのような職種でどのように働かれているのか。生徒の中には事務しかない／製業しかない。と限定的に考えてしまう人がいるので就ける可能性のある職種を提示した表があると提示できる。

ＨＬ－ＳＰＬ	騒音形で、周波数を振定して測定すると自動的にＨＬの数値を返してくれる

変換アプリ	もの
自立活動 実践事例集	６区分の内容に分かれた内容のものがあると、着任して間もない先生方の参考になる。これまでの聾教育の蓄積を見られるので、参考になると思う。
手話通訳や字幕がついたＤＶＤ教材	教科書の文章などに、手話通訳がついていると子ども達の読みとりが深まって良い。
聴覚障害児の自立活動のねらいの達成度を診るための質問集	年度初めや終わりに質問集の問いに答えてもらい、レディネスを把握したり、１年後の評価に活用。
発音指導に使えるｉＰａｄ用のアプリ	手軽にどこでも生徒が自主的に反復練習をする際に活用。高等部ともなると自分で練習にとりくめ、自分がチャックできるものがあると良い（簡易的でもよいので） ・生徒の発した声へ視覚的に表示するもの ・発育要領のアニメ（口形や舌の動きを示したもの）
学校で使う手話アプリ	書籍になっているもののアプリ版があると良い。
発音指導用音声分析提示装置	人工内耳装用者で、子音と母音の渉り、有声子音の弁別などに困難さのある生徒に活用。発音時の周波数とスペクトルと時間の関係を分かり易く視覚的につたえる教材があれば良い。
高等部における自立活動の指導事例集（冊子・ネットコンテンツ）	参考にして、自立活動の計画・指導内容・方法を考える。
スマホ･タブレット用発声発語 自主トレーニングアプリ（ハツトレ）	聴覚に障害のある生徒が主体的に自分の発声発語の明瞭さを確認し、必要なときにいつでも発声発語の練習が容易にできるｉＰｈｏｎｅ／ｉＰａｄ向けのアプリの必要性を感じる。 本アプリは、松下電器産業株式会社技術本部（１９８９）が開発した言語障害者用発声発語訓練装置「松下電器発声発語訓練システム」の主体的な活用が可能であるという面を携帯端末用アプリとして復活させたものというイメージを考えている。
聴覚口話､発音指導等に関するＤＶＤ，ソフト等	時代の変化、ニーズの多様化により、先代の教師が築き上げてきた、聴覚口話、発音指導、キュードスピーチ等が減少傾向にあります。このような伝統的な指導法の基礎基本をＤＶＤやデジタルで残すことが必要で、教材化があれば良い。

資料２

特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーションと言語に関する実態調査（調査２）についての24年度と29年度の比較

表 5-1-1　回答校数及び回収率

		全体	幼稚部	小学部	中学部	高等部
平成 24 年度	発送校	100	94	93	88	66
	回答校（回収率）	94（94%）	88（94%）	85（91%）	77（88%）	61（92%）
平成 29 年度	発送校	95	85	86	80	63
	回答校（回収率）	95（100%）	85（100%）	86（100%）	80（100%）	63（100%）

表 5-1-2　学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳数　（人）

	学級数	幼児児童生徒数	重複幼児児童生徒数	人工内耳数
平成 24 年度	1,640	5,479	881（13.9%）	1290（20.4%）
平成 29 年度	1707	5694	1179（20.7%）	1560（27.4%）

表 5-1-3　幼稚部 学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳数

		学級数	幼児数	重複児数	人工内耳数
平成 24 年度	1 年（年少）	113	395	33	128
	2 年（年中）	104	365	37	135
	3 年（年長）	102	349	48	111
平成 29 年度	1 年（年少）	94	329	32	114
	2 年（年中）	100	369	45	157
	3 年（年長）	95	340	59	149

表 5-1-4　小学部 学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳数

		学級数	児童数	重複児数	人工内耳数
平成 24 年度	1 年	96	296	64	84
	2 年	100	326	55	102
	3 年	108	295	74	72
	4 年	101	312	62	73
	5 年	109	322	78	68
	6 年	99	300	54	64
平成 29 年度	1 年	106	300	84	92
	2 年	110	329	88	116
	3 年	108	332	88	104
	4 年	107	319	72	97
	5 年	106	297	69	89
	6 年	102	311	78	90

表 5-1-5　中学部 学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳数

		学級数	生徒数	重複児数	人工内耳数
平成 24 年度	1 年	119	392	78	90
	2 年	104	365	37	135
	3 年	102	349	48	111
平成 29 年度	1 年	122	420	87	104
	2 年	114	404	93	81
	3 年	120	428	90	103

表 5-1-6　高等部 学級数、幼児児童生徒数、重複幼児児童生徒数、人工内耳数

		学級数	生徒数	重複児数	人工内耳数
平成 24 年度	1 年	127	476	71	48
	2 年	125	456	77	35
	3 年	131	481	65	34
平成 29 年度	1 年	139	486	92	81
	2 年	139	517	94	88
	3 年	145	513	108	95

表 5-1-7　教職員に係わる特記事項（複数回答）

平成 24 年度調査

N=177

教職員に係わる特記事項	回答数
学部をまたいで授業をしている	81
教員の異動が多い	38
その他	58

平成 29 年度調査

N=127

教職員に係わる特記事項	回答数
・教員の異動が多い・講師の割合が多い・経験の少ない教員が多い。（指導技術の継承に課題を感じている。）	83
・学部をまたいで授業をしている	6
・教員の年齢のバランスが良くない（50 歳代以上が多い、20 歳代が多い）	6
その他　（乳幼児教育相談の担当の説明等）	32

表 5-2-1　コミュニケーション手段　（複数回答）

平成 24 年度調査

N=220

	回答数
聴覚口話、聴覚主導	53
日本手話	4
手話、手話付きスピーチ※	134
指文字※	53
トータルコミュニケーション	8
同時法	5
子どもの実態に合わせて	48

平成 29 年度調査

N=229

	回答数
聴覚口話、聴覚主導	34
手話、手話付きスピーチ※	62
キュードスピーチ	3
トータルコミュニケーション	7
同時法	5
子どもの実態に合わせて	46

表 5-2-2　コミュニケーション手段の選択する際、重視していること（複数回答）

平成 24 年度 N=883　　**平成 29 年度** N=908

	生育歴	発達の状態	聴力の程度	人工内耳	言語力	聴覚障害がある保護者	保護者の希望	本人の希望	学級集団構成	特にない	その他
平成 24 年度	15	183	215	44	190	16	69	42	71	10	28
	1.7%	20.7%	24.3%	5.0%	21.5%	1.8%	7.8%	4.8%	8.0%	1.1%	3.2%
平成 29 年度	28	190	210	30	196	10	68	63	82	7	24
	3.1%	20.9%	23.1%	3.3%	21.6%	1.1%	7.5%	6.9%	9.0%	0.8%	2.6%

表 5-2-3　コミュニケーション手段を選択にかかわる課題（複数回答）

平成 24 年度 N=880　　平成 29 年度 N=908

	補聴システム	補聴器等	教師の手話力	手話を用いた指導	重複障害	保護者の希望	本人の希望	その他
平成 24 年度	74	184	209	184	102	60	14	53
	8.4%	20.9%	23.8%	20.9%	11.6%	6.8%	1.6%	6.0%
平成 29 年度	66	179	213	214	130	48	15	43
	7.3%	19.7%	23.5%	23.6%	14.3%	5.3%	1.7%	4.7%

表 5-2-4　学部内でのコミュニケーション手段の使用状況（教師と幼児児童生徒）　（%）

	学部	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	その他
平成 24 年度	幼稚部	35.3	35.6	3.8	5.2	6.0	14.0
	小学部	31.1	37.0	5.4	11.4	4.9	10.3
	中学部	27.7	43.2	3.7	18.2	2.0	5.1
	高等部	27.5	41.2	7.3	18.0	1.7	4.3
平成 29 年度	幼稚部	32.8	38.7	2.1	4.1	5.6	16.7
	小学部	27.7	38.2	6.1	11.9	5.3	10.8
	中学部	27.8	41.4	7.8	15.2	1.9	5.8
	高等部	27.6	44.4	5.6	18.5	1.3	2.6

表 5-2-5　学部内でのコミュニケーション手段の使用状況（幼児児童生徒間）　（%）

	学部	聴覚口話	手話付きスピーチ	日本手話	筆談	キュードスピーチ	その他
平成 24 年度	幼稚部	35.8	37.4	6.8	1.0	4.8	14.2
	小学部	28.9	41.6	11.7	3.8	5.4	8.6
	中学部	27.0	45.6	11.2	8.1	3.5	4.6
	高等部	21.0	44.1	20.5	6.2	2.1	6.2
平成 29 年度	幼稚部	35.9	37.9	3.9	1.0	4.2	17.0
	小学部	29.9	37.5	11.3	5.5	5.2	10.7
	中学部	28.9	38.4	15.8	7.0	3.5	6.3
	高等部	28.9	45.7	15.2	5.6	2.0	2.5

表 5-3-1　コミュニケーションの状況を把握するための評価

平成 24 年度調査

発達検査	新田中 B 式知能検査、乳幼児精神発達診断（津守式）、WIPPSI、絵画語彙発達検査、WISC 言語性、新版 K 式発達検査、TIC 式言語発達診断検査、遠城寺、K・ABC、WISC-Ⅲ他
語彙	語彙チェックリスト、語彙表、読字力検査、単語了解度、幼児・児童読書力テスト、漢字力検査、読話テスト、観点別日本語能力テスト他
発音	発音チェック表、音韻操作課題、発音定着確認表、発音指導プログラム 2009 他
手話	手話コミュニケーション日本語プログラム、日本手話検定他
聞き取り	C1-2004 きこえの検査、聴能マトリックス検査、JANT、日常生活文聴取検査他
その他	あそびの記録、VTR 分析、行動観察、コミュニケーションの実態調査、自立活動指導段階チェック表他

平成 29 年度調査

発達検査	乳幼児発達スケール（KIDS）、S－M 社会生活能力検査、乳幼児精神発達診断（津守式）、心の理論課題、新版 K 式発達検査、遠城寺式乳幼児分析的発達検査、K-ABC、WISC-Ⅳ、コミュニケーションシステム PECS(ペクス) 、LC スケール他
語彙	J.COSS 語彙チェックリスト、PVT-R 絵画語い発達検査、語彙表、読字力検査、単語了解度、読書力診断テスト、身体名称度検査他
発音	発音チェック表、新版構音検査、VTR 分析速読検査、スピーチトラッキング（追唱）、言語流暢性検査他
手話	手話コミュニケーション日本語プログラム、手話検定他
聞き取り	,単語の聴き取り（CI2004 検査表）、語音パターン知覚検査、JANT、日常生活文了解度検査、単語了解度試験他
その他	読話テスト、質問・応答関係検査（TQAID）、子どものコミュニケーション・チェックリスト 日本版 VTR 分析、行動観察、コミュニケーションの実態調査、自立活動指導段階チェック表他

表 5-3-2　対象児選択の理由
平成 24 年度調査

対象	希望しない生徒を除く、小学校に入学を希望している幼児、　重度､重複学習の発語の難しい児童は除く、　聴覚口話が主になっている子ども、　より客観的データが必要な場合、　文レベルの聴取が可能になった段階、　手話･日本語障害認識含めて取組やすいと感じた子ども、　聞きとれる　聴力の残っている生徒のみ、　発育器官に障害がなく､かつ､ひらがなが読める者、　本校の乳幼児教育相談で定期的な指導を受けずに入学した幼児のみ
	就学を控えた 5 歳児と保育園や幼稚園へのインテグレーション､交流保育を希望している幼児、　検査可能なレベルになったら実施する（幼すぎるうちはムリにやらない）、検査目的､方法が理啓できる生徒、　検査方法の理解の難しい児童は除く
担任	担任が実態把握のために必要と判断した場合に実施、　重複児童については担任の判断で実施している、　学習態度の成熟度で判断するため、　実態を全職員に正しく理解してもらう必要があったため
コミュニケーション	主なコミュニケーション手段が聴覚口話の児童、　音声によるコミュニケーションが有効かどうか客観的に判断するため、　内耳､聴覚活用を主にコミュニケーションしている児童生徒、　音声言語によるコニュニケーションの個々の実態を把握するため
聴覚活用	聴覚活用がある程度できている子、　聴覚活用や音韻の意識から可能と思われる児童、測定結果と HA 装用時の話声の聞き取りに差が感じられたため、　補聴評価の一環としてルーチン化されている
補聴器	聴力低下の疑いのある生徒　補聴器を買い換えた生徒、　補聴器の装用効率を見るため、　補聴器のフィッティングをする子ども。 転学を考えている児童、　補聴器を新たに購入する際､機種同士で比較する　保有聴力及び HA 調整の把握
発音	聴きとった音を発声できる児童、　発音指導の内容を決めたり評価したりするために必要な幼児、　子どもの発音発声の状況に合わせて実施、個々の子どもの発音実態により実施するかどうか決める、　五十音の平仮名が読め､発音要領をほぼ獲得している幼児､特に発音が不明瞭でうまくなりたいと希望した生徒、　音声で会話をするようになった幼児の実態把握
グループ	聴覚口話+手話つきスピーチグループで行っている指導編成グループ、　聴覚口話グループ所属児童と日本手話グループ所属児童で希望する者、　聴覚口話+手話つきスピーチグループで行っている
保護者	本人や保護者の希望や生徒の実態を踏まえた学級担任の判断

平成 29 年度調査（29 年度は学部別）

幼　・検査が可能な幼児に実施している(13)。
稚　・ひらがなが読める幼児に実施している(10)。
部　・50 音が読める、あるいはキューと 50 音が結びついている幼児に実施している。
・幼児の実態に応じて実施している(4)。
・年長の子どもを対象にしている。

・年中の子どもを対象としている(2)。
・聴力検査への態勢がとれる幼児を対象としている。
・音声聴取が可能な幼児、意味理解が可能な幼児を対象としている。
・聴覚活用の実態に応じて実施している。
・補聴器装用時を対象としている。
・聴力の程度や発達段階に応じて実施している。
・人工内耳装用児の実態把握として、人工内耳装用幼児に実施している(2)。
・校内で発音指導を望む幼児に実施している。
・発音に区別が付いてきた幼児に対して実施している。
・１人ひとりの発達、保護者の理解を得られるかも考慮し、実施するかを担任が判断している。
・保護者の協力が得られたお子さんに対して実施している(3)。
・指導上必要を感じる幼児に実施している(2)。
・保護者の希望で実施している。
・研究対象児に実施している。
・発達がゆるやかな幼児に対して実施している。
・発達障害のある幼児に対して実施している。
・重複障害児は実施不可能である(3)。

小学部

・コミュニケーションモード、児童の実態によって実施するかどうか判断する。
・本人や保護者の希望で実施する(2)。
・言葉の聞き取りの様子に変化があった場合に実施する。
・聴覚口話を主たるコミュニケーション手段にする児童に実施している(3)。
・研究の対象児に実施している。
・担任の希望により、実施する(3)。
・聴覚の単一障害の児童中心に実施している。(2)
・実態に応じて実施している(5)。
・検査が可能な発達段階になり次第行う(4)。
・実態として検査が可能な児童に行う。
・ひらがなが読める児童に実施している(3)。
・希望者に実施している。
・重複障害児は実施不可能である(4)。
・毎年２年生の希望者に実施している。
・発音指導が必要な児童に実施している。
・準ずる教育課程を受ける児童に実施している。
・準ずる児童のうち聴力低下のある児童に実施している。
・聴力に応じて、また障害認識の指導の必要に応じて行う。
・重複学級の児童に実施している。
・発音に課題がありそうな児童に実施している。
・３音節了解度検査で、正解率 90%以上の児童と担任が希望する児童に実施している。

中学部	・保護者が発音について現状を知りたいという生徒に実施している。 ・実態やニーズの必要に応じて実施している(9)。 ・発音指導が課題の場合に実施している。 ・聴覚口話の生徒へ実施している(3)。 ・中学部１学年で実施している。 ・受験希望者に実施している。 ・発音、発語に不明瞭なところがある生徒に実施している。 ・発音指導を希望する生徒に実施している。 ・聴覚障害の単一障害である生徒に実施している(2)。 ・課題がある生徒に実施している(2)。 ・次の担当に引き継ぎのある生徒に実施している(2)。 ・自己認識の学習をしている生徒に実施している(3)。 ・希望の有無を保護者に確認して実施している。 ・発音が比較的明瞭な生徒に実施している。
高等部	・聴覚口話の生徒に実施している(2)。 ・担任の希望や判断で実施している(3)。 ・適宜、必要に応じて実施している(3)。 ・就学、医療機関受診の必要のある生徒に実施している(2)。 ・聞こえの実態に応じて決めている(4)。 ・重複障害の生徒の一部以外に実施している。 ・検査ができる生徒は全員実施している。 ・本人・保護者の希望で実施している。 ・補聴器を買い換え希望の生徒に実施している(4)。 ・聴覚障害単一の生徒を基本として実施している。 ・自己認識のための学習等を受けている生徒に実施している(3)。 ・聴力低下の疑いがある生徒に実施している。 ・人工内耳手術後の聞き取りの評価"として、人工内耳手術後の生徒に実施している。 ・聴覚活用が可能だと思われる生徒について、実態を詳しく知るために実施している。 ・補聴器の調子の悪さを訴えてきた生徒に実施している。

表 5-3-3　コミュニケーションの評価の必要性

平成 24 年度調査

実態把握	・客観的な評価と行動観察､保護者からの聞き取りや医療（療育）情報を合わせ総合的､多面的な実態把握をする必要がある。 ・幼児の実態把握の際､基本となる聴力を各担任が読み取ることができること。 ・幼児の実態把握とともに指導者の指導方法や内容の反省や改善につながる。 ・生徒の状況を定期的に把握することは必要。 ・実態把握には必要な評価であり､また、児童の変化を確認する意味でも必要。

・児童の実態把握や指導方法の工夫の為に必要。
・実態把握のために必須　・実態を把握し指導に活かすために必要。
・生徒の指導のために実態を把握するため。
・生徒一人一人の発音やコミュニケーションの実態を明らかにして個々の実態に応じた教科指導に活かすために評価が必要。
・本校では部内で統一した評価を行っていないが個別指導等で実態を把握し指導している。
・実態を把握し個の聴力やコミュニケーション能力に応じた指導を行うためには大変重要。
・子どもの実態から市販の検査等は難しいので要求、意思表示に関するチェック表を作成し活用している。コミュニケーションの評価は実態を把握し学部の教師全体で指導に当たる必要があるので何らかの形の評価は必要。
・学部での共通したものはなく学級担任が生徒の実態を見て実施しているが全員を対象とした実施も望まれている。
・客観的なコミュニケーションの実態や課題を知る方法の一つとして、検査は必要だと思う。
・個別の教育支援計画の中にコミュニケーションの欄を設け項目ごとに現在の状況と課題等を記入して評価に当てている。
・幼児の場合、集中力や興味によって課題（検査）に応じられない子もいる中でペーパーや生活に関係ないコミュニケーションの検査は厳しいと思う。
・主に就学前(5 才児)に担任が必要性を感じた場合 WISC-Ⅲ、ノンバーバルなどを行っている WISC-Ⅲを実施した場合には言語性検査によりある程度のコミュニケーション、日本語、手話（手話で実施した場合）の評価が得られると考えている。
・一人一人の幼児の実態を正しく評価することによって課題や手立てをより適確に設定し指導を勧めることができるようになると思われるので、よりよい評価となるようにしていきたい。
・客観テストで、子どもの課題が明確になる。学部内で子どもの実態を共通理解できる。
・個々の実態を客観的に把握し適切な課題を設定するため。

自立活動

・結果は担任や ST さんとも共通理解できる客観的評価で自立活動等の指導につながる。
・社会に出たときに、どれだけ通用するかが大切で就業体験や現場実習などはそのよい機会と考える。コミュニケーションの評価は自立活動の中で数値化していく方法も考えられる。
・コミュニケーションの評価については自立活動の時間における指導で担当者の判断で行っている程度で日常の観察が主な評価となっている。定期的にどんな評価を行っていけばよいかの検討が必要である。
・個別の教育支援計画や自立活動の目標設定等を作成していくための評価として必要である。将来に向けての必要な力をつけていくため。
・日常生活（教科学習）の時の指導や自立活動の時の指導に活用するため必要である。
・自分の発話がどの程度どのように他者に聞こえているのかについて生徒自身にフィードバックして意識させたり、検査の結果をうけて日ごろの指導の中でも意図的に取り上げたりすることは必要。
・もともと聴覚を活用している生徒が多い。最近は人工内耳の生徒も増えている。聴力の状況の把握は必要である。また、進学や就職にあたって発音を気にする生徒も出てくる。高等部では 3 年次

のみ自立活動の時間を使い発音指導を行っているが、とても大切な活動だと考えている。
・生徒の日本語力の評価は自立活動や教科学習のグループ編成に役立つ　実態の把握は指導内容の（日本語指導・発音指導）の精選化に役立つ。
・将来の社会自立を見据え自立活動における発音指導のニーズが高まってきている　幼稚部から高等部までの継続的、段階的な指導が必要と思われる。

コミュニケーション

・部内や家族など限られた人とのコミュニケーションはある程度できている。ただしいずれも大人を介する場合が多く、子ども同士の話し合いが十分できていないことや環境も含め模索しているところである。
・読話テストがそのやる目的が、現在のろう学校の現状に合っているのかという疑問の声が教員から上がっている。
・コミュニケーションの評価自体むずかしい。あれば授業の中でも使える。現在子どもの姿をもとに評価を検討している。
・本人が場に応じたコミュニケーション手段を使い自身が知識はもちろん自己を確立していく過程で自分のコミュニケーション力を知ることは必要である。また、本人が社会に出たときにすべてを手がかりとして活用できる様、自分のきこえの状態を知りどうすればよいかを考える手立ての一つになると考えている。
・コミュニケーション自体を検査することはしていない。日常生活や授業の中で生徒のコミュニケーションの状況をとらえ指導している。
・アンケートの実施は生徒のコミュニケーション状態や必要性を把握する上で有用。
・コミュニケーション手段を手話としているためコミュニケーション力と手話力は密接に関わっていると思い手話力の評価を行いたいのですがそういった指標がなく困っています。幼児から教員まで評価できるものがあると良い。
・検査をするまでもなく、非常に評価が近い生徒もいる。
・音韻や音声言語の受信や発信の状態を知ることは日本語の習得について個々に合わせた指導をしたりコミュニケーションをしたりするときに欠かせない情報だと思います
・小学生は分かりたい・伝えたいという思いが強いので特にそういう意欲を持っている。小学部の時期であるからこそコミュニケーションの力がどれくらいあるのかコミュニケーションとして欠けている力を補うためにも必要であると思います。
・コミュニケーションスキルに関する評価は客観的に評価できていないのが現状である。チェックリスト等作って評価する必要性を感じている。
・児童のコミュニケーションの状況や興味・関心の有様についての詳細なアセスメントが必要であるとともに言葉の質的な側面である「生活」の中で言葉が果たす役割について教師一人一人が共通認識を有することが肝要である。
・コミュニケーションは様々な方法を用いて伝え合うことだと考えている。そのため筆談や身ぶり表情、絵なども含めた力をはかる検査が必要と考える。
・児童の実態が具体的に分かることで次の指導内容を見直したり、普段の生活の中でもその部分に気をつけることができる。

・まずは親子で通じる、担任と通じる→他の人にも通じる→みんなに通じることを基本にしている。数値化はしていない。
・子どもと教師また、子ども同士のやりとりの様子から 5W1H を含めたことばの理解､表出について日々観察に行っている。
・生徒の傾向や特徴を知ることは大切。
・本人の障害認識を含めた指導に活かすこと。
・やりとりの中で質問されたことに適確に答えられず一部のことばだけをとって自分の言いたいことばかりしゃべる子どもがいる｡質問されたことをどの程度理解できるか､分からないのはどうして分からないか（手話が必要･･･ことばを知らない）を把握できる。
・教員が生徒の発した言葉を理解するためにはなどを行い､生徒一人ひとりのコニュニケーションを評価することは大切であると思う。
・いわゆる言葉のセンスやターンの良さ､要領を得た応答の仕方などについて評価できる検査がなく類種の検査と日常的な観察を組み合わせて評価するようにしている。
・スマートフォンのソフトで自分の声を文字化するものを使った時､本人は言っているつもりでも、そのような文字､文章に変換しなかった｡本人はショックを受けていた｡自分の発音の明瞭度を知るよい機会となったと思う。
・明瞭度検査は毎年やっているので指導の成果が明らかになり､また、課題も把握できるので日常の指導に役立つ｡その他コミュニケーション態度（最後までしっかり聞く､わかろうとするわかりやすく伝えようとするなど）や伝え合える話の内容のレベル（どの程度の話題ならスムーズに伝え合えるのか）などに関心をはらい評価していくことが必要であると思う。
・評価をする事によって意欲が高まるし課題も見えてくると思います｡評価がなかなか良くならない時のはげまし方が大切になると思います。

聴覚

・聴覚活用の実態､発音明瞭度の実態を把握し①日々の指導に生かし②聴覚管理や③保護者支援につなげていくために評価が必要。
・聴力検査の結果と併用し個々の実態により具体的につなげられる。
・検査を通して聞き取りにくい語､聞き取りやすい語の実態を把握すると共に補聴器装用の効果についても確認することができる。
・聞き分ける力､発音の明瞭度の向上のため評価を基に自立の指導計画を作成するので何らかの評価は必要。
・聞こえやすい音､単語など個々の聞き取りの状況を把握し､生徒が自己理解を深められるようにしている。
・聴覚活用と音声コミュニケーションの成立のためには聴力の状況とその活用状況を常に把握しておかないといけない｡子どもに負担をかけすぎたり逆に能力をのばせなかったりする。
・聴覚活用､手話､読話､発音､発語､文字等のコミュニケーション手段を活用することによって意思の相互伝達が客観的にどの程度まで可能となっているか把握する必要がある。
・職場実習やインターンシップの際､聴力測定の結果だけでは先方に生徒のコミュニケーションの状況を客観的に伝えることが難しい｡「聴覚活用ができているので正面から話しかけてほしい」というような説明だけでは誤解を生じる｡教員が生徒の聞こえの状態や聴覚活用の有無､主たるコミュニケーションモード（発信､受信）等より細かに把握する必要がある。

・聴覚を最大限に活用するために聞こえの状態を把握する。
・聴力と聴覚活用の程度､バランスを評価し指導に活かすため、現在聴能に関する指導が不十分でない面あるため他学部の聴能担当とも連携をとりながら指導の充実を図りたい。
・語音聴力検査で今までわからないという答えがあったため聞こえの状態が把握できなかった場合があり､意味のある言葉でなくても聞こえたように言ってもらうように統一しようと考えている。
・人工内耳のマッピングや補聴器のフィッティングの参考にするため　（課題）市販の検査ができにくい子の客観的評価をどうするか。 評価の効果的な活用について聞き取り発音の状況を知り指導に活かす
・きこえ､発音の実態をつかみ語音聴力検査より補助手段の効果的な使い方､話しかけの声の大きさをコミュニケーションに生かしたり、より課題となる音､音声の順序等参考にしている。

発音
・発音の明瞭度がその生徒なりに保たれ､向上しているか評価したり、コミュニケーション手段に関する実態を調べるために必要。
・子どもの実態を把握し指導に活かすことができるので必要。
・発音の実態をとり発音指導の手立てと考えるために活用。

職員間理解
・職員の共通理解が図れる
・コミュニケーションの実態を全職員に正しく理解してもらい指導に役立てるには評価は必要。
・指導の方向性を出すために客観的かつ具体的なコミュニケーションの評価=実態把握は不可欠だと思います｡課題はその評価を担任以外の全職員が共通理解すること。
・生徒数が少ないため同じコミュニケーションモードを使用する集団を形成してのコミュニケーション活動を深める場が乏しい現状です｡コニュニケーションの評価の観点一覧表を基に職員が同じ観点で生徒の実態を評価していきたい。
・このプログラムは作られる以前は担任の経験から主観的な評価しかできておらず見通しをもった指導につながりにくいという反省がありました｡経験の浅い先生にも専門性が同じように求められ 3 年間を通して育てたい力を問われた際にも活用できると思い作成したものです。
・評価を行うことで日常的な印象ではなく客観的な指標として保護者やクラス担任に説明できる点では有効であると思う。

平成 29 年度調査（29 年度は学部別）

幼稚部
・誤発音の傾向がわかり、発音指導をする際に役立っている。（評価の必要性）
・客観的な実態把握のため必要である。（評価の必要性）
・学部研究等で利用するために実施した。発達の段階が分かるので、指導に生かせる。（評価の必要性）
・客観的に実態把握をした上で、指導計画に生かすことができるので必須であると考える。（評価の必要性）
・コミュニケーション手段が多様になってきているので、さまざまな面から客観的に評価できるような指標が必要だと感じる。（評価の必要性）
・幼児の様子を観察することで、コミュニケーションの状況を把握している。（評価の必要性）

・生活言語のレベルを理解するためには必要であると思う。（評価の必要性）
・音声言語を理解し、正しい日本語を使用できるかどうかを知るために必要である。（評価の必要性）
・担任が独自に各々の感覚で、幼児の力を把握するのではなく、共通の尺度での評価をすることで学部の教員が全幼児の実態を共有することができる。（評価の必要性）
・子どもの発音の実態を把握し、その後の指導に生かすことができる。（評価の必要性）
・市販の検査を使うことで客観的に聞こえや発音、コミュニケーションに関する評価を行うことができる。（評価の必要性）
・子どもの実態把握をし、指導に生かすため。（評価の必要性）
・発音（各音）の指導をする際、子どもの発音の特徴（課題）を客観視し、ターゲットを絞るために、評価は不可欠。（評価の必要性）
・発音の状況を知り、より分かりやすい発音で話すことができるようにしていくことは、将来、社会に出た時に有効である。（評価の必要性）
・聴力検査と共に、病院との連携の資料となる。（評価の必要性）
・本校独自の「観察」を年２回行っており、音声言語、指文字、手話等のどのモードで理解し、表出しているか、どの言葉が獲得できていないかの実態把握を行い、課題を明確にしている。（評価の必要性）
・人との関わりにおいて、言葉の理解、表出、活用の状況を、把握（実態把握）することによって必要な指導、支援を考えることができる。（評価の必要性）
・幼児のコミュニケーション能力に関わる実態把握を行ない、指導に生かすことができる。（評価の必要性）
・幼稚部において、コミュニケーション力の素地を培うことは、幼児の成長にとって大変重要である。（評価の必要性）
・人工内耳で聴覚活用ができていても、発音が不明瞭な幼児がおり、評価し、難しい音を練習する必要がある。（評価の必要性）
・どの程度の音に対して反応があり、認知できるか実態を知ることで、環境音への気づきを促したり、声をかける距離や声量等、指導上の配慮ができる。（評価の必要性）
・各自の聴取実態を把握することで、日常の指導に生かす。（評価の必要性）
・実態を把握することで、発達のどの段階にいるのかを知り、指導実践に活かせる。（評価の必　要性）
・保護者に実態を伝える為に必要。（評価の必要性）
・保護者に評価してもらい、教員も評価すると評価の違いが現われ意識の違いが分かる。（評価の必要性）
・聞きとりの状態を知ることに役立てることができる。（評価の必要性）
・毎年同じ検査を実施し、１年間の伸びの確認と指導の振り返りのために必要だと考えている。（評価の必要性）

小学部

・実態を基に、指導目標や学習内容を決めるために必要不可欠。（評価の必要性）
・語音聴力検査を実施することで、言葉の聞きとり状況の把握ができ、本人及び周囲が配慮すべき点もより明確になる。又、語彙数の把握によって、コミュニケーション方法を工夫する必要性も見えてくる。（評価の必要性）

・聴覚口話を謳っている本校にとっては、聴覚の検査等は必要欠くべからざるものである。（評価の必要性）
・一つ一つの発音技能の精度を上げることも必要だが、それ自体が目的ではなく、話したい内容が相手に伝わることが目的である。発音明瞭度検査では、母音の明瞭性の確認と全体としての明瞭度（%）の変化を見ることが大切であると考えている。（評価の必要性）
・現在、臨時任用職員と非常勤職員の言語聴覚士に検査をしてもらい、指導に生かしている。常勤の言語聴覚士を市に要求していきたい。（評価の必要性と課題）
・発音の練習などの参考にするために実施している。（評価の必要性）
・児童が、自分自身の聞こえの状態を知ることで、聞き誤まりやすい音がわかり、コミュニケーションに役立てられるので必要。（評価の必要性）
・児童の実態把握で、特に経験年数の少ない職員の指導に生かすために、また高学年児童が自分で自分の状況を知る上でも評価が必要だと思う。（評価の必要性）
・児童の実態把握のために必要(2)。（評価の必要性）
・日頃児童が、どの程度、正しく言葉のやりとりをしているか、特に理解面を評価し、把握することは指導者として必要と考える。（評価の必要性）
・子ども実態をつかむには、客観的に評価できる検査があることはとても大切である。（評価の必要性）
・子どもが間違っている音を確認することができる。（評価の必要性）
・コミュニケーションの課題を学部の職員全員で共有することで、タイムリーに必要な指導ができる。（評価の必要性）
・補聴器の調整。発音指導に必要。（評価の必要性）
・アセスメントをとるための材料として評価をし、学習につなげる。（評価の必要性）
・児童の実態を客観的に把握し、聴覚活用や発音発話力を向上させる支援を行い、日常生活や学習の中でよりコミュニケーションが円滑に成立するよう上記検査を実施している。（評価の必要性）
・意志疎通の難しい原因がどこにあるのか把握する。（評価の必要性）
・発音指導のための実態把握、指導後の変容について評価するため。（評価の必要性）
・聴力の変動がないかだけでなく、補聴器の状態の把握のためにも必要。（評価の必要性）
・聴力を知り、配慮の工夫をしたり、体調や聴力の変化に早く気づくことができる。（評価の必要性）
・単語、音節レベルの入出力の状況を客観的に把握し、重点的に指導する内容を明確化したり、指導法の改善に繋げたりするために必要だと考えている。（評価の必要性）

中学部

・生徒のコミュニケーションの力の発達について常に注意を払い、指導していくのは教科指導と同じように重要である。（評価の必要性）
・発音練習の参考にしたり、伝える手段を学習する際に活用している。（評価の必要性）
・実態を把握し、指導するために必要。（評価の必要性）
・聴覚口話（法）による言語コミュニケーション能力の育成にとって、実態把握の必要性からも必要。（評価の必要性）
・授業方法、提示の仕方の工夫を行う時に、必要な実態把握にデータを使用。（評価の必要性）

・自分自身を知り、自分にとって何が大切かを考えさせるためにも必要。（評価の必要性）
・外部機関への情報提供と連携のため必要。（評価の必要性）
・数値化することによる実態把握、実態を確認のためにも必要。（評価の必要性）
・本人（生徒自身）が自分の聞こえの傾向を知ることが必要。（評価の必要性）
・生徒の実態把握には評価の必要性を感じる。（評価の必要性）
・子どもの実態を理解することで、指導する時に教員が活用することができる。（評価の必要性）
・教員が指導上、把握しておくことはもちろん必要であるが、その結果を生徒自身が知っておくことは周りの人とのコミュニケーションを図るうえで大変重要だと考える。（評価の必要性）
・語音聴力検査は、標準の方法ではなく、本校独自の活用のしかたをしている。社会自立を視野に入れ、客観的評価は重要である。（評価の必要性）
・毎年の聴力の状況が把握でき、役立つ。（評価の必要性）
・将来に向けて、生徒自身が自分のコミュニケーションについて客観的に把握し、自分の弱み、強みを相手に伝えるため、又、教師が生徒の個々の課題を知り、授業をする上での留意点を考える上で必要である。（評価の必要性）
・それぞれがどのような力を生活の中や、学習をする上で必要なのかをつかむ為には必要。（評価の必要性）
・発音検査を行うことで、生徒自身も教師も発音について客観的に把握することができ、日常生活で意識させることができるメリットもある。（評価の必要性）
・発音の明瞭度や発音傾向を知ることで、指導に活かすことができる。結果を生徒にも伝え、強いところ、弱いところを意識させている。（評価の必要性）

高等部

・的確な実態把握に基づく指導・支援を行うために評価は必要である。（評価の必要性）
・外部機関への情報提供と連携のため必要。（評価の必要性）
・数値化することによる実態把握、実態の確認のために必要"。（評価の必要性）
・聴能の程度、補聴器装用（人工内耳のマッピング）の効果や調整の必要性を見るために必要。（評価の必要性）
・教科指導等の場面で役に立っている。（評価の必要性）
・生徒へのより良い支援や指導に生かすために必要。（評価の必要性）
・生徒の実態を知る手がかりとして、聴力検査は必要である。（評価の必要性）
・高等部において、自分の障害を理解し、説明する力を身に付けさせるためにもコミュニケーションの評価は必要であると感じている。（評価の必要性）
・「補聴・コミュニケーションに関する意識調査」を実施し、生徒一人ひとりが聞こえやコミュニケーションについて、どう捉えているかを実態把握し、それに基づいて担任を中心に自立活動や進路学習などの時間を通してコミュニケーションに関する指導を行っている。毎年、同じ項目で調査をしているので、捉え方の変容を見ることもできる。（評価の必要性）
・生徒自身が発音の明瞭度や聴力を意識している。（評価の必要性）

表 5-3-4　コミュニケーションの評価の課題

平成 24 年度調査

実態把握	・生徒の実態把握はできたが、分析等細かな話し合いができていない。 ・発音指導・きこえの実態については担任に任されており客観的な実態把握ができていない。計画的な発音指導をしていくための実態把握は部内で検討していきたい。 ・実態を適確に把握するために検査等を用いた評価は有効である。しかし、そこから一人一人にあった適確な課題や指導方法につなげるところに課題がある。 ・幼児の実態に即した指導ややりとり、日常の配慮をするために評価が必要である。また、就学やインテグレーションにあたっては幼児の実態からそれが妥当であるかどうかを検討するために評価が必要である。発音の評価については指導に活かすという本来の目的が十分生かされていないのが現状。 ・生徒の実態把握をするうえで必要な評価であると考えているが教員の移動や専門性ともかかわって、指導にいかしきれていないのが現状であり課題である。 ・実態把握を研修会等をもって共通認識をもつようにしているが、実態は曖昧と感じている。客観的な評価を加えた共通認識をもてるようにしたい。 ・コミュニケーション力を基盤とした言語活動の充実を図るため、幼児の実態把握として客観的な評価は必要であると考える。その結果を分析し効果的な指導につなげていくことが課題である。 ・個人のコミュニケーション力の発達の様子や実態を把握し、より個に応じた細やかな指導を行うため必要と思われるが、学部内で明確な位置づけや実施計画がなく担任まかせになっている点が課題。 ・入学してくる生徒の実態が毎年あまりにもちがいすぎて評価の必要性など考察する余裕がない。 ・個々の生徒のコミュニケーション状況のアセスメントに関する全核的な研修が急がれる。 ・コミュニケーション力は語彙量だけではないので客観的に評価することが難しい。 ・幼児にとってコミュニケーションの評価ができる検査があるのかよくわからない。コミュニケーション発達段階表を作成中である。 ・コミュニケーションの力は聴力等聴こえだけで評価できず様々な要因が関係しているので、それらをどのように考慮していくのかが課題である。 ・コミュニケーションの構成要因は何かあるか、これを測定できるものさしと、その結果の解釈、そして今後の指導に活かす対応が一貫されており、かつ信頼性が高く評価できる検査があれば紹介していただきたい。 ・コミュニケーションの評価について必要性は感じるが特に統一した評価を行っていない。 ・コミュニケーションという言葉には様々な要素が含まれているので聴覚障害のある生徒の特徴として「言葉の裏を読む」ということが苦手であり、その事に起因するコミュニケーション上の課題が多い。 ・検査結果の共有は図られているが実際の指導の中で十分に生かし、本人のコミュニケーションスキルを高めるところまで活用しきれていないことが多いのが課題と言える。
重複障害	・重複の子どもの評価が難しい。 ・重複児の割合が高く、発達全般の評価に偏りがちになる。 ・重複障害のある児童の割合が増え検査ができる子が減っている。職員の入れ替わりが多く発音指導や検査の方法などについて引き継がれていかない。

手話	・コミュニケーションのつまずきや実態を把握し指導に生かし一次言語をしっかり身に付けさせる必要がある。 ・コミュニケーションの状況と言語力は大きく関係しておりコミュニケーションの評価、日本語、手話の言語力の評価は分けて評価することはできない。 ・教師の手話力の問題もあるので生徒がどれだけ手話を理解し行動できているのか日本語に置き換えることができているのか評価する点で困難を感じる。 ・LC スケールを主たるコミュニケーション手段が手話に適用しにくい面がある。 ・例えば 80%検査できききとれたからといって実際のコミュニケーションで 8 割分かるわけではない。逆にどれだけきこえづらいかを教師や親が考えて代替手段（手話、指文字等）をきちんと使用する等、コミュニケーションの障壁をとりのぞく努力につなげていくことが課題ではないかと思います。また、小学部以降は情報保障という視点も課題になると思います。
検査	・談話や語用能力、会話能力を評価するツールがない。 ・実施した検査の結果はある程度評価されるが、その評価を指導に活かすための手立てが個々の指導計画に十分に反映されていないことが課題としてあげられる。 ・客観的にコミュニケーション力を評価できる検査方法、特に年少のまだ文字が読めない幼児を対象に実施できる検査方法があれば、それについても研修していく必要がある。 ・日常観察で記録に残し次の指導に活かすようにしているが客観的な評価が継続的にできる検査については研修不足もあり実施には至っていない。 ・何をどう評価するのか　本当に現行の読音聴力検査やで正しい評価ができるのか。口話の有用性を否定する人もいる。 ・評価は必要だと思うが、実際場面に生かせるような検査法と評価があればよい。 ・検査結果を実際の指導にもっと生かしていけるよう活用の仕方を改善していくことや他にもっとよい（指導に活用しやすい）検査方法を探していくことが課題。 ・言語聴力検査を正しく実施できる教員がいない。聴力測定が学級担任が実施することになるので正しく実施できているか心配。認定補聴器技能者の資格をとるよう呼びかけている。 ・検査をすること結果をその後の指導に生かしていくこと等のスキルを全職員が向上させることが課題。 ・アセスメントの課題をどう指導につなげるか。 ・測定の結果を日ごろの指導に活かすこと。 ・コミュニケーション能力の要素として視線、表情、人と関わる意欲など客観的に測ることができない面が多く含まれることや、客観的にえられた検査結果が必ずしも実生活でのコミュニケーション力として反映させられない場合もあることなどからコニュニケーションの評価の難しさを感じる。
将来	・個に応じたコミュニケーション手段はどのようなものかを探ったり自己の発音状況を把握することは、社会自立をするために必要な自己理解であると思う。人事異動により発音指導が可能な教職員が少なくなくなっていること等が課題となっている。 ・社会に参加し自立していくためのコミュニケーションのあり方を指導するために評価は必要である。日常生活の中で授業での様子、交流活動における聴者とのやりとりの様子などを観察して評価している。場や相手に応じて適切にコミュニケーション手段を使いわける指導も必要である ・人の声がどの程度聴こえているのか、それが社会で役に立つものなのか客観的に判断したい。職場で困らないように曖昧なコミュニケーションを減らしたい。

・学校を卒業し就職した時、コミュニケーションの能力はとても大切になる。そのコミュニケーション能力をどの程度身につけているか確認するための評価は必要である。言葉の語彙数や文章能力、声の発音や語音聴力の個人差を埋めていくかが課題である。
・コミュニティーの中で生活していくには必須の内容であり本人が少しでも豊かな生活を送れるための力をつけてやる必要がある。そのために正確に客観的評価を行い職員が共通の評価基準に基づいて指導を展開していくために評価は必要。課題はその評価をどう指導に生かしていくかという点で個々の教師の技量にかかる点が大きいなど評価の必要性ややり方など知らない人が増えているので研修で扱ってはいるが実際に行うまでには至っていないのが現状である。
・卒業後の進路先において音声をつかったコミュニケーションは重要な部分をしめることになる。そのため、コミュニケーション評価の必要性は大きい。しかし、本校高等部ではこの評価を受けての指導体制が十分とは言いがたい。今後の課題である。

聴覚
・67S は検査材料が 10 例あるのだが 67A に関しては 2 例しかないので、もう少し検査材料がほしい。
・いわゆる聴覚管理<能力の育成>は聴覚口話法による言語コミュニケーション能力の育成にとって重要であり、その能力育成が同時に重要な（指導上の）課題です。
・特に聴力のきびしい生徒について補助手段の理解度を把握した上で授業等での活用に配慮が必要。
・デジタル補聴器、人工内耳の進歩によりキューサインが曖昧になっている児童が増えている。聴覚口話、キューサインを原則としているので学部内での手段のばらつきはないが人工内耳装用児に対する指導もきちんと考えなければならないと思っている。
・聴力等に関しての教員の知識不足。
・子ども達がどれくらいの音を聞いているのかを把握することで音声でのやりとりがどこまで理解できそうなのかを知る手がかりになる。
・担任が定期的に聴力測定をすることで子どもの聞こえに合わせた声掛けやコミュニケーション手段の選択ができる。また、聴力低下等の急変にもすばやく対応できる。

発音
・コミュニケーション能力は聴能面、発音面からだけではとらえきれないと考える。
・聞こえの良し悪し=発音が明瞭というわけではないのに発音が明瞭だと聞こえがよいと思いこんでしまう。そのため配慮しなければならない点が曖昧になる。

指導力
・教員の指導力に格差がある（コミュニケーション技能）
・評価者から指導者の連携が困難。客観性をもたせた評価から同僚教員に率直な授業改善の提言がしにくい一面がある。外部の評価を導入したり、様々な工夫が必要となる。どうしても相互の評価がしにくい教育現場、特に専門性を自負するベテランの多い環境では課題となる。
・現在在籍している高等部生徒については実施していない。必要に応じて自立活動等で積極的に行っていく必要がある
・指導計画の作成、見直し等行っているが、具体の授業の場面になかなかつながっていかない
・聴能室をよく使っているが、使いたい時になかなか使えない。行事と重なって学部使用可の時に使えないこともある。聴力測定ができる職員を増や研修、新しい先生が使えるまでの機会が少ない
・職員全員が生徒一人一人のコミュニケーション力向上のための課題を共通理解し日々の生活の中で徹底した指導を行えるようにすることが課題である。
・正確な数値を計測するために複数の担当者が必要であるが、実際は 1 名で対応している。
・課題として語彙の獲得が少ない場面や聞いた音を再現（音声、指文字、文字）できない幼児の場合は評価がしづらい。また、教師の力量不足で指導に生かしきれない、活動の中でのちょい指導につなげ

られない等､評価だけで終わってしまうことがある。

・自立（聴能）担当に任せることが多く普段の指導に生かせていない。

・検査をした後、その結果を正しく理解しコミュニケーション方法の選択や言語指導に活かす方法が十分に行われていない。

・意思を伝え合うために個々のコミュニケーション手段をどこまで使いこなしているかという評価は必要｡筆談でコミュニケーションを行うための文章表現等が課題である。

・生徒がどれくらいの音なら聞こえるのかを把握することで音声でのやりとりをどこまで理解できるのかを知る手掛かりになる。 高校生になると進路を見据えて補聴や発音への意識が高まる子らと逆に全くあきらめてしまう子どもが出てきて、その差が大きくなるために指導のもっていき方も難しい面がある（よい面もあるが）。

保護者教員間連携

・保護者の願いや医療機関からのアプローチとの調整も課題の１つ。

・個々のコミュニケーションの力に合わせたやりとりができているかを観点にして日常生活の中で児童のコミュニケーションの力を引き出すことを目標にしている｡子ども同士､子どもと教員の両方が大事｡児童同士の話し合い活動を積極的に取り入れていくことで、児童と教員ではまだ伝わり合うことが難しい部分もあることが課題。

・担任や関連聴研と連携を取る場合には検査結果を資料として共有するだけでは不十分であり、分析を行った上でこの検査を今後どのように指導していくかという点での共通理解が必要であるが、その辺りで課題が残るように思う。

・生徒のコミュニケーションの実態から次のステップや進路指導のポイント等を考えていく必要があると思うが学部間での共通理解をはかることが難しい。

時間

・教科指導に追われてなかなか検査結果を指導にいかすことができない

・ろう教育の専門性の継承において非常に大切だと思います｡実際には授業中にかなり経験的に言語指導をすることが多く､実践を整理して伝えられないのが課題です。

・児童数が多く検査に時間がかかる｡また、検査結果もなかなか十分に分析できない。検査者（自立活動担当）と担任がもっと連携しなくてはいけない。

・職員の測定技術の向上　聴能に関するノウハウの伝授　これらが必要であるがその時間的余裕がないというのが現状。

・自分の聴こえの状態や発音の状況を知ることは自分にできること周囲に支援を求めること等を理解させるために必要である｡このことは自立に向けて重要なことと位置付けている。生徒自身に上記必要性をいかに自覚させるか､また、その積み上げに要する時間の確保が課題である。

・教科指導や日ごろの学部･学級運営で手がいっぱい｡評価の時間や話し合いの時間がない。(例:医的ケアの児童が入学し、新しく体制を整えるのにかなりの労力をさいている｡系統立てた指導計画･評価の計画がない｡担任の意識や経験の差などにより指導内容にも温度差がある。

・発音の実態をとり発音指導の手立てと考えるために活用｡語音聴力検査は聞こえの状態を知り指導に活かすために実施している｡語音聴力検査は保護者とお子さんについて話し合う時には必要だが、評価方法を学習したり評価する時間を確保したりするのが厳しい。

・語音聴取検査等は補聴器調整など聴覚管理上､必要であり数多くの検査法が市販されているので客観性がある｡また、語音聴取検査や本人の障害認識を深める意味でも必要である｡ただ中学部では発音指導の時間が十分にとれていない。

・コミュニケーションのもととなる｢聞こえ｣について正しい評価をし、フィッティングすることが聞

き取りやすさにつながるので聞こえの状況の把握はまず第１に必要なことだと考える評価をもととした指導方法は教師の経験によりバラつきが出てしまう。教師が研修をする時間の確保が必要。

・明瞭度を確かめ○×をつけることではなく、発音要領を身につけ、やがては日本語の獲得につながっていくものであることから、その評価の必要性を感じている。評価や評価後の指導の時間が足りないのが課題である。

・生徒の実態について教職員がよく知る必要がある（このように通じる、このように通じないという実態）それをもとにコミュニケーション方法等についての研修が行われることが望ましいが研修の時間がなかなか確保できず課題である

・実態を知り指導に活かすため必要。しかし、検査実施方法、評価の方法、指導に活かすための職員の研修時間を確保すること、児童をぬきだし検査する時間を確保することが難しい現状がある。他にも職員の研修課題があり職員の専門性を維持していくことが難しい。

・社会に出た時に手話や指文字でのコミュニケーションではなく口話や筆談で伝えることが多くなるので高等部の生徒こそ発音指導も重要だと考えるが現実は時間的に難しいこともあって思うように実施できていない。

平成 29 年度調査（29 年度は学部別）

幼稚部

・保護者が聴覚補償ばかりを気にしていて、、前言語的コミュニケーションへの積極性に欠けるケースが多いため、言語発達の道筋を示したい。そのためにも特に前言語的コミュニケーションの状況把握及び促進への理解が課題である。（課題）

・現在は、単音の明瞭度のみの検査である。単語での検査の市販（一般化されたもの）があるとよい。また、絵を見て答えるなどの構音検査的なもの、（言語力と明瞭度）が合わさったような検査があると良い。指導者本人が手軽にチェックできるようなものがほしいと常々思っている。（課題）

・人工内耳装用の幼児が増え、コミュニケーションの状況の評価について、医療機関と連携を深める必要性を感じる。（課題）

・登校日数の少ない幼児は、時間がかかってしまう。（課題）

・コミュニケーションの評価を行える教師の力量の差がある。また、指導への活用についても担任に任せているため、不充分なケースもある。いずれも力量アップが課題である。（課題）

・年齢が小さい、文字が読めない子にはできない。（課題）

・発達がゆっくりなため、使用できるものがない。（課題）

・日常の中での様子観察（記録）が中心となってしまう。（課題）

・保護者にも課題を伝え、共有しているが、保護者の課題への取り組みに対する考え方により、活かされないこともある。（課題）

・実施が難しい幼児が多い。また、検査結果を指導に活用しきれていない。（課題）
実態差の事を課題と考える。（課題）

・重複障がいの幼児の場合、評価が難しい。（課題）

・在籍幼児の少人数化、多様化により客観的な評価が難しい。（課題）
・以前はきっちり評価していましたが、音声に関しては特に厳しいお子さんの場合、なかなかその後に繋がらない場合も多く、あまり活用されているとは言いがたい。手話やろう者の方の考え方などに配慮するとあまり強くも言えない。（課題）
・有効な評価の方法、手軽にできるものを実施したいがわからない。（課題）
・検査の種類が少ない。（課題）
・２０単語にしても６７－Ｓにしても１種類ずつしかなく、しかも古い。（課題）
・定期的（学期ごとなど）に実施する必要性を感じているが、なかなかできないのが現実である。（評価の必要性と課題）
・コミュニケーションの力がどのくらいなのかを知ることで、指導内容を考える時に参考となっている。検査等では測れないが、コミュニケーション意欲をどう育てるのか、話したい伝えたい思いを育てていくことが幼稚部段階では大切ではないかと考え、実践している。（評価の必要性と課題）
・教育課程や日々の活動計画を子どもの実態に合わせて作成することができた。現在は、子どもの実態把握のための評価基準となるものが必要であると感じる。（評価の必要性と課題）
・指導する上で、幼児を客観的に見る必要性がある。今まで、Ｓ－M検査を定期的に実施していたが、的確に評価しにくい幼児が増えてきたため、今年度から KIDS を取り入れることにした。（評価の必要性と課題）
・医療機関の言語指導に通う幼児も多いが、日常的に接する時間の長い教員が発音などの課題を把握するために評価し、生活場面の中で自然に指導を行うことが大切であると考える。ただし、人事異動や交流が盛んになる中で、評価後の「適切な指導」についてどうするべきか、専門性の継承がされにくくなってきていることが課題として挙げられる。（評価の必要性と課題）

小学部

・その検査結果を踏まえ、児童の指導に十分活かせているかと言われると不十分さを感じている。（課題）
・客観性をもつ評価になっているか。（課題）
・発音明瞭度が高いとか、獲得語彙数が多いからといって、コミュニケーション能力が高いとは限らない。自分の能力をいかに使っていくか、人とどのように関わっていくか等も問われてくるので、コミュニケーションモードのみの評価では、本当の意味でのコミュニケーションの評価にはならないように思う。（課題）
・単一聴覚障害学級設置間もないため、現在検討中です。（課題）
・人工内耳の児童に対する発音や聞き取りの検査が特に不十分である。（課題）
・検査結果の活用。指導面の共通理解が課題。（課題）
・聴力、発音発語力については、実態の幅が広く、全員に共通して実施できるような検査が見当たらない。また、統一した検査で評価する必要性があまりない。（課題）
・１つの検査のみでコミュニケーションの状況は把握しきれないので、複数の教師の見立てを検討する必要性がある。（課題）
・授業に生かされない。（課題）
・「聞く」をどう「聴く」に結びつけていくかが課題。（課題）
・児童の実態や担任、保護者の意向により、コミュニケーションの評価を行う必要がある。（課題）

・発達障害や、知的障害等、個々の状態が多様化しており特に児童同士のコミュニケーションが難しくなってきている。（課題）
・聴覚検査・発音検査だけではコミュニケーションの力の一側面しか測ることはできない。（課題）
・評価したことをどう分析し、教育活動にどう生かしていくかが、集団的に検討することができていないのが課題である。（課題）
・コミュニケーションは、聴力、発音だけでなく統合的に評価するべき。その方法についてはっきりと決まっていないことが課題。K（課題）
・人事異動や校内配置の都合で適切に評価できる教員が、検査できているといえない状況。（課題）
・一部の職員は検査結果を日頃の言語的な関わりや言語指導に活かすことができているが、全職員が活かすところまでには至っていない。（課題）
・職員全員が検査を取れるようにしたい。検査をすることで指導の方向が見えてくるために大切である。（評価の必要性と課題）
・検査で把握した実態の中で得意な発音、苦手な発音を直接授業で指導している。１クラス内の人数が多いと評価がしにくい。（評価の必要性と課題）
・コミュニケーション力を育てることは、各学部を通して連続して取り組むことが必要である。自分のコミュニケーション力の実態（よいところ、伸ばしたいところ）、発音発語の良さや課題等を、諸検査を通して確認している。検査結果を含め、幼児児童のコミュニケーションに関わる実態を次の学部に確かに、丁寧に引き継いでいくことが課題である。（評価の必要性と課題）
・"コミュニケーションの相手の意図を、正しくどの程度理解できているのかを正確に把握する必要性がある。また、その能力を正しく把握するための検査分析力の課題がある。"（評価の必要性と課題）
・実態を把握し、指導に生かすために必要であると感じる。もっとコミュニケーションの状況に迫った検査がないか、または自作のものでも考えていく必要があると感じている。（評価の必要性と課題）

中学部

・入学してきた経緯から「聴覚口話」「日本手話」「転入学のためどちらも未習得」と実態にばらつきがあり、一つのくくり、一つの方法での評価が難しい。唯一行えるのは授業を通しての「わかったか、どうか？」の評価が現状である。（課題）
・検査結果の分析の具体的活用方法の共有が難しい。（課題）
・把握するための指標がない。意識もない。（課題）
・中学生段階では検査に時間を費すより、学習活動の中でコミュニケーション力を高めた方がよいように思う。（課題）
・正式には、病院で行った検査を提出してもらっているが、あまり活用はされていない。（課題）
・効果的な活用について個々の教員に任せすぎている（経験年数や検査の活用や意味の理解など）面が課題である。（課題）
・中学部生になると、自分のコミュニケーション手段も決まりつつあり、情報の収集や発信にも、個人が優先される。それが必要性でもあり、課題でもあると感じている。（課題）
・コミュニケーションの評価として、客観的で汎用性のある、聾学校に適したものが今のところみ見つからない。評価の必要性は感じている。（課題）

・検査を行うスキルと時間が課題である。（課題）
・聴覚重複の生徒で、市販の検査がそのままでは使いにくい。（課題）
・実態把握のための検査は定期的に実施しているが、中学部ではその結果を生かして、発音指導などを行う時間が足りない。（課題）
・検査結果の分析、教員への周知と活用に課題がある。（課題）
・評価したものを、担当（関係職員）で把握して、十分に活用できる所までは進んでいない。（課題）
・語音聴力検査をできる教員がほとんどおらず、やる時間もなく、実施していない。（課題）
・発音明瞭度検査について、発音指導のノウハウを持つ教員が少なく、結果を生かしきれていない。（課題）
・実態を把握できても指導に生かしたり、日常の授業の中で指導実践につなげられる教員がほぼいない。（課題）
・発音傾向は分かっても中学生段階に、どこまでの指導を行っていくのかの検討が必要であるし、教師の専門性も必要となる。（課題）
・生徒数が少なく、個の実態に合わせてコミュニケーションを図っており、特に困り感はないが、客観的なデータを基に指導を行うことは大切である。また、発達障がいを合わせもった生徒とのコミュニケーションは独特であるため、その他の検査等でフォローしていく必要性もある。（評価の必要性と課題）
・実態が異なる子ども達に対するコミュニケーションの評価を、統一された客観的に評価できる方法があれば、子ども達へのアプローチなど更に深められるのではないかと思います。（評価の必要性と課題）

高等部

・コミュニケーションの評価のためにどのような方法があるかがわからない。（課題）
・聴こえの状況については、高等部段階では、それほど変容がないこともあり、検査結果はあまり共有されていない。（病的な聴力低下は除く）（課題）
・測定機器の操作や、検査の実施手順について教員の十分な研修が必要である。（課題）
・検査結果の活用に課題が残る。（課題）
・語音検査を実施していないため、自分の聞こえを正確に把握することが難しい。（課題）
・聞こえに対する発音の明瞭度についても検証しにくい。（課題）
・客観的評価の指標となる検査等は実施しておらず、指導者の主観的評価に頼るところが大きい。（課題）
・生徒が持つ様々な能力も考慮して評価する必要がある点が課題である。（課題）
・聴力測定及び語音測定といった客観的評価を分析し指導に活かす、教師の力量が課題。（課題）
・評価の生かし方を統一したものがなく、各人に任されていることが課題である。（課題）
・時間的なものの制約（自立活動は週に１時間）であったり、生徒の個々の実態が多様であることによる、個々の実態に応じた指導計画の立案において課題として挙げられる。（課題）
・高等部段階になると聴力測定等以外の評価としては、現場実習先での企業による評価や交流、共同学習での自己評価が中心となる。検査課題での評価より、より実際的な評価が求められる。（課題）
・検査や評価の必要性は感じているが、教員数の少ない学校で、専門性のある教員は更に限られており、充分な検査が行えていないのが課題である。（課題）

・高等部では多様なコミュニケーション手段を用いているため、評価をしよう、という流れにはなっていない。（課題）
・授業や日常生活を通して、生徒の実態をつかむようにしているが、基準等はない。（課題）
・今後、基準や指導の工夫について学部内で共通理解できるものが作れるとよい。（課題）
・実態把握後の各教科指導における指導内容の連携が課題である。（課題）
・語音聴力検査ができる職員が少ない。（課題）
自分の聞こえについて、また発音について、自己認識へとつなげていきたい。（課題）
・単に聞こえにくい、わかりにくい、ということを生徒に突きつけるのではなく、自分が苦手な音を知ることで、周囲との関わりの中で意識できるようにさせていきたい。（課題）
・実態把握することで、生徒の支援に生かしていきたいと考えている。（課題）
・必要性については、聴力測定及び語音測定から個々のきこえの実態を把握し、それらを基に日々の指導に活かす。（評価の必要性と課題）
・指導時のコミュニケーション方法の確立及び生徒を理解する一助として、どのようなコミュニケーションを、どの程度獲得しているのか把握し、その後の指導に活かすことが必要だと考えている。（評価の必要性と課題）

表 5-3-5　日本語の評価の必要性
平成 24 年度調査

実態把握	・それぞれの教科指導の中で日本語の評価に近い内容で生徒の実態把握をしながら指導方法の検討をしている状況です。基準となる評価方法で評価することは必要と感じています。
	・学力の基礎となる日本語をどこまで理解できているかを推し量るために必要。
	・児童の実態把握、読解力や思考力を評価できる。
	・客観的な評価があることでより確実に実態を把握し学習内容の検討や指導に活かす。
	・日本語が身についているかということは読書力、学力、ひいては人生観にも影響が及ぶ。教員にとって子どもの実態把握と同様に自分の指導法に関する適切性についてフィードバックを図る必要がある。
	・本校では帯自立（15 分間）の指導として言語指導を習熟度別のグループ編成をして行っており、そのために実態把握と評価は必要です。一定の成果も上がっていると考えています。
	・手話や身ぶり表現はできるが、なかなか日本語が定着しない児童の把握（実態把握）には日本語言語力検査は必要。具体的な内容は理解できているが、なかなか抽象思考が難しい児童の実態把握に必要。
	・生きていくうえで必要な日本語力を把握するのに必要である。
	・生い立ちや家庭環境も含め総合的にとらえていくこと。
	・一人一人の実態を把握し指導に役立てることができる。保護者にも客観的資料として結果を知らせ家庭と連携を図る上での 1 つの材料とすることができる。J.COSS 日本語理解テストも今後実施予定。
	・本人の得意・不得意分野を把握し、指導に活かすため定期的な評価が必要である。
	・特に書き言葉や能力をより正確に把握することで学校の全教育活動の手法が決定すると考えている。
	・日本語の言語力と学力の間に相関があるのかないのかを明らかにする。

・どのことばを知っているのか、何がわからないのかを適確に指導者も保護者も分かる。次にどのように支援したらいいのか子どもの課題も明確になる。抜けていることば、知らないことばがよく分かる。

・「ことばのきろく」の中に含まれる言葉の中に時代遅れのものがあったり、必要なものが入っていなかったりするので今年度、改訂版を作成予定。保護者が理解語彙をカウントしていくため評価にやばらつき（厳しい保護者と甘くつける保護者）があるが大体の語彙を把握できるのと何より成長の様子がつかめるので引き続き使用していく。

検査

・絵画語彙検査や ITPA など担任が個人的に実施する場合もあるが客観的な日本語の評価は学部としては行われていないので何か実施をしてもよいかとも感じる。

・評価（検査結果）によって児童の言語力の実態が把握でき、分析により指導の目安が立てやすくなる。

・読書力の診断検査を止めて CRT 標準学力検査に切り替えて総合的な日本語の力を把握するよう取り組んでいる。生活にも学習にも総合的な日本語の力が必要であると考えている。

・日本語の力（ある部分ではあるが）を客観的に見られる。検査の内容と結果を細くみることで指導方法の改善につなげられる。調べたい事柄とうまく合う検査がなかなか見つからない。検査結果だけでは日本語の全体の力を評価することはできない。結果のみがひとり歩きしないように注意を要する。

・日本語の言語力は様々で分かっていると思われることばでも分かっていないことがあり、指導に活かすための状況を把握する意味でも必要。

・読書力検査の結果の下位項目のプロフィールは過去の状況とあまり変わっておらず読解力を高めるための指導の必要性が高い。

・言葉の理解の程度にはかなりの差がある。個に応じて、どの程度の言葉を使用するべきかを判断する上で日本語の評価は大切である。本校では基礎言語力検査を行っているが国語科の指導にとどまらない活用の方法も考えたい。

・年に 1 回の検査により実態把握と言語力の伸びの確認、指導方法の検討を行っている。

・日本語の評価をどのような検査バッテリーで行っていくのかという学部内のコンサンセンスが必要。

・日本語の言語力を把握することは必要だと思います。把握するための手段?検査法を知りたい。

・検査だけでは計りきれない言語力の評価。

・読書力診断検査を実施し読字力、語彙力、文法力、読解の鑑賞力において実態把握と結果の分析を行いより丁寧な日本語思考力の実態把握に努めている。検査の経過（前回との）比較も行っている。実施方法や結果の分析方法の共通理解を図るため研修を組んでいる。

・他の検査等を用いて、より多面的な評価が必要である。

・聴力障害のある児童にとって日本語力を育てることは大変重要な側面を持ち、その為にいろいろな視点から検査を行うことはより実態を客観的に把握でき、有効であると思う。

・言語力の向上は本校の重点課題の一つである。よりよい指導を目指すためにも生徒の言語力の実態を学部で共有し各教科等で指導方法を探る必要がある。中学部段階で言語力向上をより確かにするには生徒の実態が必要である。

・幼児段階における「読む」「書く」「聞く」「話す」など日本語習得の評価は必要。小学入学後は教科書やノートを使っての学習ができるように幼稚部で評価できる検査があれば紹介していただきたい。

	・日本語の評価は主観的になりやすいので市販の検査を使い客観的に評価することは必要である。ただ、それが日本語の力を測るすべてではないので評価結果の扱いについては注意する必要がある。 ・これまでの幼稚部では手指に重点を置いていたので検査方法も音声提示ではなく聴力差の生じない文字、指文字、手話を用いて問題提示をしていたようです。現在その提示方法について検討しています。 ・小学部での学習と関連性が見られるものと WPPSI のようにあまり見られないものがあり、目的と検査の特性を踏まえて活用している。 ・基本は日々児童と接する中で（授業時間だけでなく）言語力、学力をチェックしていくことだと思うが標準化されたテストを年度ごとに行うことで経年的変化や領域別の課題も明らかになる。 ・指導上必要であると考えている。年齢相応の力はなくてもその子なりの向上がみられたりある領域に特に遅れがみられたりなど日常気付きにくい点が把握できるので指導に役立つ。 ・生徒の発達段階に応じて課題はかわるのだが 10 代以降の生徒の言語力を測定するスケールとなるテストや観点がなかなかみつからない。
コミュニケーション	・基礎学習において日本語は欠かせないものであり教科指導を行っていく上でも児童の言語力を知っておく必要がある。教科指導にかかわらずコミュニケーションをとる上でも（手話等を使っても）日本語は重要と考えます。 ・豊かなコミュニケーションをするための評価は指導の目標・手立てを考える上で必要である。日常的な言語活動（読解、作文、コミュニケーション、新聞作り、授業内のやりとり等）の中で総合的に判断し指導に役立てていくことが必要である。 ・生徒同士がコミュニケーションをとる場面や指導をする場面などにおいても、その生徒の日本語の力を理解しておくことは重要である。 ・幼稚部での主なコミュニケーション方法は手話付きスピーチである。そこでコミュニケーションに大きな支障がない場合には日本語としての誤り（例:単語の音節を正しく覚えること、助詞を正しく使うこと、語尾の変化など）を見落としがちである。そこで正しい日本語を習得しているかどうかを日常会話の中でも注意深く評価していく必要を感じる。 ・生活言語レベルでの音韻意識 ・今後社会に出たとき様々な人間関係を形成していく上で不可欠なものと考える。
職員間理解	・読書力診断検査終了後、学習指導係が分析し誤りの傾向等について部の教員に報告している。やりっぱなしではなく分析し全員に伝えることは必要だと思う。 ・日本語の言語力の状況について教員間で共通理解を図ったり、保護者に説明したりするために、ある程度標準化した評価の必要性は感じる。特に 5 歳児の就学先を検討する際に活用することができる。 ・聴覚障害のある生徒の日本語力の把握と教員全体としての課題の共通理解が必要である。 ・学習グループの編成や日本語指導の目標設定に役立つ。生徒の共通課題を抽出することで学校全体としての日本語力の課題を把握できる。 ・学部間のわたりを具体化することと課題を全職員が共通理解すること。 ・客観テストを使用することで、子どもの課題が明確になる。学部内で子どもの実態を共通理解する。
指導	・社会生活上では日本語が中心となるため日本語をどのように理解して使っているかを把握し、その後指導に役立たせるためには必要性を感じる。 ・言語の習得具合を確認するのに必要。

・学習活動を進める上での生徒個人の実態把握。学習グループ編成の資料として活用。
・「ことばの力」（日本語の力）を育てることをめあてにして教育活動を進めている。客観的な評価は実態の把握のため、また、指導の評価にとっても大事な観点だと思う。
・コミュニティーの中で生活していくには必須の内容であり本人が少しでも豊かな生活を送れるための力をつけてやる必要がある。その為に生活に客観的評価を行い職員が共通の評価基準に基づいて指導を展開していく為に評価は必要。課題はその評価をどう指導に活かしていくかという点で個々の教師の議了にかかる点が大きい。
・日本語の理解の状況の評価をすることで語彙の理解と文の理解の状況（名詞、形容詞、動詞、否定、複文、重文など）を知ることで指導に活用する。
・評価は必要だが、実態に合った、また、指導に活用しやすいものがあればよい。
・正しく使用しているか分かって使用しているか、どこでつまずきがあるか、繰り返しつまずくのはどこか等を把握し指導に活かす。
・生徒の傾向や特徴を把握し苦手なところ弱いところを補ってやるような配慮が必要である。
・言語力を把握し指導方針、指導計画を立てるために評価が必要。
・高等部では生徒自らが言語力を知ることで学習への意欲を高めることができる。
・日々の保育の中で実態に即した概念形成や思考力の育ちの積み重ねができているか課題。子どもの側に立って、共に試行錯誤しつつ考え方の道筋を尊いたり、子どもから表出を導くことより教えることに重きを置きがちなので、定点的に評価することで子どもの言語力の育ちを振り返りたい。
・通じるだけでなく理解する、さらに考える学習を行うためには日本語の言語力が必要になる。校内で日本語指導を推進している。共通のテキストも作成した。しかし、中高等部向けの内容となっており、小学部の児童向けに新たに教材化して使用している。
・生徒の日本語力を把握し指導に活かすために必要。
・適切な課題設定のため、発達の様子を客観的に評価することにより段階を追うことができる。就学先を検討する上での参考となる。就学先への引継ぎ資料として。
・児童の言語力の状況を把握し指導目標を具体的に検討、修正するためにも必要不可欠である。
・日本語習得の為の方法を考えたり、指導の評価をするために必要だと思います。
・日々の指導や観察によって幼児の言語力の実態は把握できるので必要ではないと考える。

教科

・今後 ALADJIN の結果がでたので必要なドメインを選択して実施していくことを計画している。学習を進めていく上での基礎となる一次言語をしっかり身につけさせる必要がある。実態をしっかり把握した上で指導を勧め遅れずに教科学習を進めていく力をつけさせる必要がある。
・日本語の力が教科指導を行う際に重要になってくる。教科学習の内容を理解するためには児童がどれだけの言語力をもっているかの評価は必要だと思う。
・生徒一人一人の日本語の実態を明かにして教科指導に活かすための評価の必要性があると考える。
・生徒の日本語力を正しく把握することが各教科、科目、特別活動、自立活動等、学習指導の基盤となる。学習グループ分け等の際の参考にもしている。
・教科指導を進めていく上で日本語の言語力を把握しておくことは大切なことである。

読み

・本校生徒の日本語活用は高いとは言い難い。理由の 1 つに語彙力不足が考えられる。例えば熟語の意味と読みが一致していない理解をしていることがあり十分使いこなすことができていない。よりきめ細かい指導、教科を越えた全体でかかわる指導が必要と考える。
・児童段階における言語活動を構成する各活動、例えば「読み」「書き」「聞く」「話す」活動は充実してい

かなければならないと考える。

・子どもの情報のとり方、表出の状態など個々に合わせた指導を行うため評価も必要と思うが難聴児にとっての検査は手話を使うかどうか文字にした場合、読み取りの力が影響するなど一般の検査では力を把握することに難しさもある。検査時の様子、使ったコミュ手段などを考慮して評価し個々の得意、不得意を考えた指導、課題設定などに活かすようにしている。

・漢検などにより漢字の数は増加しても読み取る力、伝える力が弱いという状況があり、そのギャップや課題を客観的に把握するため必要である。

・読み取る力を知ることでウィークポイントを補う手立てをうち読み取る力を高めていく必要がある。

・読み書きの力を養うために必要な指導方法、内容を考えるために必要である。

語彙	・語彙チェックについて使いやすいものを作りたいと考えているが現在は各担任が過去の資料などを使ってチェックをしている。 ・知的能力と語彙の関係など客観的評価を参考にする事でより具体的となる。 ・絵画語彙検査を定期的に行うことで、どのような言葉を身につけたらよいかの課題がはっきりする。 ・行事の言葉など幼稚部の主な活動の語彙表は作成しているところである。幼児の言語力をチェックしおさえる言葉を明確にすることで経験が短い教員の参考となるようにしている。 ・やりとりが成立するには語彙数がたくさんあることが必要である。たくさんある語彙の中から調査することばを選ぶ手掛かりとしてシソーラスを利用している。シソーラスの見直しもする必要がある。 ・日本語の読解力や語彙力を評価していくことは、その生徒に適した学習内容を検討して授業を行う。また、日本語の言語力や表現力を探ることは日常の生活指導を行う上でも不可欠である。 ・コミュニケーションで必要な語彙をどのくらい獲得しているか検査し、実際の場面での活用の様子を把握するようにしている。 ・語彙力、理解力を知り授業に役立てる。類語、同音異議語などタイミングよく教え、幅を広げる。
文法	・語彙獲得や文法、よみとりの力を評価することで日常の学習に生かせることができ個々の課題にあわせた内容を選んでいくことができる。 ・日本語力の客観的な評価方法とその分析結果から「～のような点に課題があり」（例…格助詞の使い方）「～のような指導が効果的である」（帰納的な方法での文法指導）のような評価と指導が一体になったものがあればよいと思います。

平成 29 年度調査（29 年度は学部別）

幼稚部	・幼児児童読書力テストで採用されている下位検査には、他検査では珍しい「音節分解」や「音節抽出」があり、日本語の基礎となる音韻意識の定着度を測ることができる。その後、読字力、語彙力、文理解、文章理解と下位検査を進め、当該児の日本語力の課題がどこにあるのかを把握することで初めて、個別的な指導に結びつけることができると考えている。（評価の必要性） ・書き言葉に繋げるために、どの程度理解できていて、どこが足りないのかを知ることができるため、必要だと感じている。（評価の必要性） ・年長時の２学期頃、就学前に必要に応じて行う。言語発達の客観的実態把握になるものとして必要だと思う。（評価の必要性）

・客観的な実態把握を保護者と協同で作業して行い、指導に役立てていくために、必要。（評価の必要性）
・どこにつまずいているのか、多角的・分析的に把握し、指導に生かすことができる。（評価の必要性）
・客観的なデータをもとに、指導の方針や具体的な手立てを考え、指導者間で共通理解するために必要である。（評価の必要性）
・定期的に実施することで、幼児の伸び、指導の妥当性を確認する資料とする。（評価の必要性）
・言語力を評価し、個別の指導の時間等に学習を行っている。評価をすることで、課題が見えてくるので、役に立っている。（評価の必要性）
・実態把握し、目標を持ち、手立てを考えて指導し、結果を定期的に評価し、次の目標を設定することで幼児の言語力の向上に繋げられる。また、教師の指導力の向上や指導方法の確立につながる。（評価の必要性）
・日本語の力を客観的に評価し、個別の指導内容の確認や指導の振り返りをすることが必要。（評価の必要性）
・課題をはっきりとさせることで、目標や次にやるべきことも明らかになり、家庭と連携もとりやすい。（評価の必要性）
・日本語の理解力・読む力を把握し課題を明確にするためにも必要である。（評価の必要性）
・幼児の日本力の言語力の実態や課題を知って、指導や日常生活の中で気をつけるのに必要。（評価の必要性）
・５歳児の状況を知るために田中ビネーはしている。幼児によってはノンバーバル検査を実施している。（評価の必要性）
・本校作成の言葉のチェック表は、保護者が定期的にチェックしている。言葉の状態を保護者と教員が共通理解するのに役立っている。（評価の必要性）
・市販の検査は客観的に言葉の状態を把握できる。（評価の必要性）
・幼児一人一人の言語力の実態を知り、指導に活かす必要である。（評価の必要性）
・子どもの実態把握をし、指導に活かすため。（評価の必要性）
・日常の関りの中だけでは見落とす実態を把握できる。（評価の必要性）
・実態把握のために必要。（評価の必要性）
・担任の主観的な評価ではなく、客観的な評価は必要。（評価の必要性）
・理解していると思っていても、実際に検査をすると、理解していないことがよくわかり、指導に活用できる。（評価の必要性）・各自の読み書きの力、言語理解力、言語表現力の実態を把握し、日常の指導に活かす。（評価の必要性）
・評価をすることで幼児の日本語の実態に合わせ、スモールステップでの指導に活かせる。日常会話の中では、きちんと実態がつかめない。（評価の必要性）
・小学部からの教科学習のベースとして、テストや検査の必要性を考える。（評価の必要性）

小学部

・年々実態が様々になってきているため、検査等で言語力の状況を把握する必要がある。（評価の必要性）
・読書力診断検査の結果を生かして、日々の指導を行っている。（評価の必要性）
・言語発達検査の一部について、ルーティンに位置付けており、評価・分析結果を、職員で共通理解することが児童の言語力把握や、指導についての検討において意義深いと考えている。（評価

の必要性）
・実態を基に、指導目標や学習内容を決めるために必要不可欠である。（評価の必要性）
・語彙数の把握や日本語文法の理解など、改めて標準化された検査を実施することで、より具体的な目標が明確になる。（小学部では、教科学習の中で言葉の指導も行っていくが、教科指導の評価とは別に言語力を明らかにしたい。）（評価の必要性）
・子どもたちの日本語力の低さを、諸テストで再確認することにより、弱い面の具体的な指導強化ができる。（評価の必要性）
・特に J.COSS は聴覚障害児の言語発達について、客観的に測定できる標準化された検査なので、日本語の文法をどの程度理解できているのかを調べることができ、どの段階で躓いているのか把握し、指導に活かすことができる。（評価の必要性）
・日々の授業に関わって、実態把握をするための一つの方法として、実施している。（評価の必要性）
・児童の言語力を把握し、指導に役立てるために必要である。（評価の必要性）
・学年が上がるにつれて、使い慣れない言葉が増えてくる。又学習言語の習得という点でも共通の視点で、実態を捉え、指導を継続していきたい。前年と比較できる指標として、読書力診断検査は継続している。（評価の必要性）
・実態把握をし、教科学習の指導に活かす。（言語発達の実態を把握する）（評価の必要性）
・指導に活かすための評価が必要。（評価の必要性）
・コミュニケーション評価と同様に、日本語の評価も大切である。（評価の必要性）
・読む、書く力がどの程度身に付いているのか確認をするために必要。（評価の必要性）
・教科学習を進める上での実態把握のために意義がある。（評価の必要性）
・将来の自立（進学、就職）を考える上で評価は必要。（評価の必要性）
・本校は５障害対応の総合支援学校で、様々な障害のある児童が在籍している。今後学部内で言語力の評価の必要性を共通理解し、「読書力診断検査」等実施したいと考えている。（評価の必要性）
・テストの級が上がっていくことで子どもの意欲が高まる。（評価の必要性）
・実態把握ができる。（評価の必要性）
・実態や成長を知るために必要である。（評価の必要性）
・日本語の語彙力や文法力、読書力などが、客観的に何歳段階にあるのか、また、毎年同じ検査の結果を比較し、１年間の言語力の伸びを確認したり、それらから得られた結果から、指導内容や指導方法の反省・改善を行うために必要であると考えている。（評価の必要性）

中学部

・生徒の語彙の理解については、検査も含めて、常に評価、把握が必要である。（評価の必要性）
・日本語の評価をどのような観点で行うのか、例えば、聞くこと、書くこと、話すことなど。どのような項目で評価し関連付けていく必要があるのかがわかれば、子ども達の指導へも活かせるのではないかと思う。（評価の必要性）
・自立活動でのグループメンバーを決める時に活用している。そして各グループの目標や学習内容を考える時、とても参考になる。（評価の必要性）
・全ての教科の土台となる日本語であるので、正しい評価の必要性がある。（評価の必要性）
・読書力検査は読み書き能力の実態把握として行なっている。（評価の必要性）
・指導の際の、教師の言い回しで、二重否定文を理解できない生徒が多いことが分かり、評価の必

要性を感じた。（評価の必要性）
・学習効果の確認のため必要。（評価の必要性）
・現在実施していないが、生徒自身が自分の力を把握するためにも必要だと思う。（評価の必要性）
・読み書きのためには、評価は必要。（評価の必要性）
・評価から、日常会話で取り上げていくべき言語について共通理解ができる。（評価の必要性）
・教科学習の基礎となる日本語の言語力を把握し、教科の指導に活かす。（評価の必要性）
・将来の自立（進学、就職）を考える上で評価は必要。（評価の必要性）
・「語彙力」、特に文章理解については、このような客観的な検査が必要である。生徒理解につながる。（評価の必要性）
・中学部になると、学習内容が一段と難しく多くなる。言語力を教員が把握しないまま授業を進めても、生徒の理解には繋がらない。実りのある授業を計画するためにも評価は必要である。（評価の必要性）
・毎年行うので、読書力の実態についての変容等が分かり、指導の参考になる。（評価の必要性）
・客観的に言語面での課題を知ることで、学校生活、授業での躓きを見つけたり、指導や教材づくりのヒントになり、日本語力の向上に繋がる。（評価の必要性）
・言語力の評価を念頭にした教科等の学習指導における理解可能な言葉の使用ができる。（評価の必要性）
・日本語の言語力が各教科の力と関連性があるので、教科指導における学習グループを決定する際の参考としている。また、手話では学年相応のコミュニケーションができていても、日本語の理解力とずれがあるケースなどの把握に役立っている。（評価の必要性）
・言語力を評価するために、いくつかの検査バッテリーを組むことで、助詞の獲得を含む構文力を見ることができる。（評価の必要性）
・主・述の関係、助詞、接続詞の使用、動詞、形容詞等の活用、受動・能動文などの諸項目を分析的に評価し、日本語の育ちがどれくらいかが分かる。（評価の必要性）
・言葉を増やし、豊かなコミュニケーションを楽しむ生徒を育てたい。そのために、今の自分の力を生徒自身が知って努力していくもとになると思われる。（評価の必要性）

高等部
・生徒一人一人にあわせた指導、対応をする際、評価は参考にしている。（評価の必要性）
・客観的な判断材料がないと、教員も保護者も主観的な判断に陥ることがある。（評価の必要性）
・生徒の日本語力を、共通検査を行うことで客観的な見方ができ、指導に活かすことができる。（評価の必要性）"
・生徒が持っている日本語力の把握に基づく指導計画を立案するために必要。（評価の必要性）
・日本語の力を把握することで、課題の解決に繋がる。（評価の必要性）"
・日本語の評価は、指導の方針を定める上で重要な実態把握であると考える。（評価の必要性）
・生活言語や教科ごとの語彙力の生徒ごとの本当の実態の把握ができる。（評価の必要性）
・抽象的思考ができるか否かで、教科学習だけでなく、生徒の倫理観なども違ってくるので、評価は必要。（評価の必要性）
・語彙数や、語彙力、知識としてどの程度身につけているか、誤った知識として覚えていないか、間違えた読み方をしていないかの確認するため必要。（評価の必要性）
・語彙力を見るための指標があると、実態の客観的な把握がしやすい。（評価の必要性）

・評価がなくても、個々の生徒と接する中で、微妙な具合いを把握して対応できているが、入学時等に日本語の評価をするとよいかもしれない。（評価の必要性）
・教科指導等の場面で役に立っている。（評価の必要性）
・生徒へのより良い支援や指導に生かすために必要。（評価の必要性）
・語彙力の検査は、授業の進め方や、指導の効果を評価するためにも必要だと考える。（評価の必要性）
・生徒の日本語や文法事項の弱点を具体的に知り、それを指導に活かすために、日本語の評価は必要であり、有効であると考える。（評価の必要性）
・読書力診断検査は、生徒の読書に関する読書意欲、意義、行動が数値化され示されるので、毎年実施している。生徒の現在の実態とともに、これまでの経過を把握することができ、指導に役立っている。指導のために今後も続けていく予定である。（評価の必要性）

表 5-3-6　日本語の評価の課題
平成 24 年度調査

実態把握	・結果を指導場面で効果的に活用することが課題である。 ・生徒の実態把握をするうえで必要な評価であると考えているが､教員の移動や専門性ともかかわって指導に活かしきれていないのが現状であり課題である。 ・実態把握が生徒の能力を決定付けてしまい一層の向上に向かうのではなく現状を肯定し生徒の能力を見切ってしまうことにつながる懸念がある。 ・日本語の評価により実態把握した後､指導に活用してはいるが言語力の向上に結び付ける市同方法や指導内容に教師は課題を感じている。 ・市販の標準化された検査で評価､実態把握を行っているが全員が対象といいつつも重複障害の幼児には使用できない。 ・障害が重度､多様化する中で子どもの実態把握し指導に活用できる検査等を知りたい。 ・実態把握にはなるが､活用が効果的にできていないのが課題。 ・言語力の把握方法について現在学部で検討中｡評価は必要であるが絵カード等は母子関係が危ぶまれるほどのトレーニングに追い込まれる可能性もある。 ・年齢=読書力にはなっていない｡その生徒の実態に合わせた問いかけが必要となるため。
検査	・客観的な日本語の力の実態や課題を知る方法の一つとして、検査は必要である。 ・検査結果を充分に生かし切れていないことが課題である。 ・市販の検査では把握しかねる実態の児童について自作の検査がない。 ・音声言語だけでの検査の場合､その子の本当の力を評価できるのか?しかし、手話で検査することも妥当とは思えないので検査方法がわからない。 ・諸検査を通して幼児の日本語力における評価を客観的にしていくことは大切である｡しかし、その結果を以後の指導にどう生かしていくかが課題である。 ・生徒の実態は把握できたが細かな分析についての話し合いができていない｡読書力診断検査の結果、読字力はあるが読解力､文法力に欠けている｡クラスの実態に応じた毎日の課題学習（短い文章の読解等）を行っている｡学部全体ではブックトーク（週に 1 回）等の読書推進活動を行っている。

・読書力診断検査の結果を十分に分析しきれていない　日本語力をつけるための小学部全体の共通した方策がなく個々の教員の考えで行っている。
・聾学校高等部生徒に適した検査がない。漢字能力検定や日本語検定が最も適していると思われるが経費のこともあり全員が受けるのは難しい。
・幼児の実態がさまざまであるが、どの状況でも把握しやすく日々の指導にいかしやすい検査を使うことを考えているが研修不足で実施には至っていない。
・言語力がかなり厳しい生徒には読書力検査を有効に扱えないという声があり今後 J.COSS 検査を用いる予定である。また、検査を実施した後、「結果を十分に分析し教員間で把握し生徒にフィードバックする」ということができていないことが課題。原因として考えられるのは多忙と教員の意識である。
・読書力診断検査の結果は各担任に返却し目を通してもらっている。また、各教科担当にも見られるようにしている。しかし、結果を知るだけで指導に活用することは余りできておらず課題となっている
・言語力を客観的に把握する必要を感じている。例えば、幼稚部卒業後に地域の小学校を希望する保護者が多い。小学校の学習や人間関係に対応する日本語力があるのか等、示せるものがなかった。今年度実施する絵画語彙検査も含め、客観データと分析が課題である。
・研究授業のために検査を行っている。また、必要に応じて各種のテストの利用をしている。
・日本語の評価とまではいかないが読解力、表現力、思考力などの力を教科の学習の中で評価しているのが現状。より簡単に実施できる検査があれば実施したい。
・学習したこと柄についての評価は可能だが、どれくらいの応用ができるのか定着の度合いなどを評価できるものがない（あるのかもしれないが）。
・市販の検査ができにくい子に対する客観的評価、評価の効果的な活用。
・実態を適確に把握するために検査等を用いた評価は有効である。しかし、そこから一人一人にあった適確な課題や指導方法につなげるところに課題がある。
・定期的な検査をもとにした効果的、継続的な指導について課題がある。
・諸検査の結果をどう有効に活かしていくか検討。
・現在本校では書記日本語について研究テーマを設け、学部全体で取り組んでいる。そのために個々の児童の言語力の状況を把握する。また、系統立てた計画をたてるために状況把握の検査は必要。
・日本語の言語力をつけていく上で評価は絶対必要だが幼児の力を把握する検査が少ない。
・日本語の力の正確な評価がピンポイントの指導に結び付くのではないか。下学年対応の児童の検査（読書力診断検査を対応学年のものは難しすぎて解くことができない児童への対応）。
・どんな検査があるのか分からない。
・読書力診断検査は高等部バージョンがないので中学部用を使っている。
・幼稚部の年齢でできる客観検査があまりなく適確に評価できていないのが現状である。
・作文力を把握する検査の開発。
・実態を把握し指導に活かすために必要。検査の結果を指導にどう活かすかが、まだ十分に考えられていないのが現状。

評価方

・個々の生徒の言語力の把握が指導者たちの印象や学習した資料等によるものが多く共通理解を得るにはアバウトで曖昧さが残る。このような調査等を行い客観的な評価の活用を図る必要がある。

法	・必要を感じているが現段階で決めて行っているものはない。今年度､何を使ってどう評価していくのか検討していく予定である。 ・経験言語レベルから生活言語レベルへ、そして教科言語レベルへと意識を高めていくためにも定期的に評価することは大切だと思う｡評価結果の活かし方が課題。
コミュニケーション	・評価によって一人一人の苦手な分野が明らかとなった際､それに対してより効果的な指導が課題。 ・生徒のつまずきがどこにあるのか理解のレベルはどの程度なのか等､生徒の実態を把握することで日ごろの指導方法や指導内容に反映させることができる｡テスト結果を分析し、日ごろの指導に具体的に生かす技量を教員が磨いていくことが課題である。 ・言語力の評価は日々の授業に生かして言語力を向上させるために必要だと思うが､把握する方法が少なくどう客観的に判断し指導に活かすことができるか悩むところである。 ・日本語の知識はできるだけ増やしたい｡日本語の力､即ちコミュニケーションの力ではないので日本語の力をコミュニケーションの力に結び付けていくことが課題である。 ・日本語（母語）の運用能力の状況を客観的なデータで把握･評価すること自体重要であり､かつ難しい課題だと考えています。 ・語彙力を伸ばし将来のコミュニケーション力をつけていくためには指導の前の評価として必ず実施すべき内容である。
指導	・語彙に関する評価は行っているが日本語の言語力を総合的に評価する必要性を感じている。 ・教科学習をすすめていくために児童の言語力を客観的に把握しておくことは必要であり､その発達段階に応じたていねいな言語指導をしなければならないと考えている。 ・毎日の日記指導で助詞や言葉の順序について書くことができるようにする具体的指導方法の工夫。 ・助詞の使い方をよくまちがう生徒がいる。濁音や半濁音をつけまちがう。日記を書かせ文の書き方など指導しているがなかなか直らない。 ・指導をしていく上では生徒の日本語の評価をする必要があると感じている（生徒が理解できる発問の仕方や指示を考えるなど）。 ・子ども一人一人の日本語力の段階や発達を把握することで、次にどんな指導が必要かを考え選定していくことができるので評価のめやすとなる指標や段階表などが必要ではないかと考える。 ・評価を行う事で自分の弱い所を知る事ができ､そこを中心に学習することができると思います。 ・生徒の言語発達の現状を知り､個々の言語におけるつまづきに対して指導を工夫する。 ・評価を効果的に活かす指導内容､方法が課題。 ・筆談をする時に自分の言いたい事をきちんと相手に伝えるために日本語力は必要である　助詞の使い方をどうやったら理解できるかが課題。 ・日本語の言語力は国語や自立活動の時間だけでなく、全ての教科の中で高めていくという意識が大切｡筆談を正確に行えるよう指導している。 ・個々の生徒の実態はある程度把握できるが実際の指導に結び付けにくい。 ・語彙や表現力の乏しい生徒が多いので実態を把握し日々の HP や授業で補うことが社会へ出る直前の高等部としてはとても大きな課題になっている。 ・日本語の力をつけさせるためには子ども一人ひとりの日本語の諸能力がどの程度かを見極めてその少し上の段階に引き上げることが必要｡無茶なとか一般的なとか､年齢相応のとかの指導を数打ってもなかなか当たらない。

・高等部段階では個人差が大きくでるので結局は個別対応になりがちです。小学部のようなボトムアップを丁寧にする時間のない中、トップダウンで必要性の高いところから取り組んでいるのが現状。

・健聴児との比較を常に忘れず基礎学力を身につけさせるために必要。日本語獲得の難しさ。

・様々な方法で客観的な日本語の言語力の状況を知ることで授業内容や指導方法に活かすことができる。学習意欲に差が出、あきらめてしまって学習する姿勢が後退してしまう生徒への指導が課題。

読み・文法

・文法の中でも助詞の指導方法の工夫　日本語の読み取りに対する評価の方法。

・情報を正確に読み取り自分の考えを整理してまとめて伝える力を身につけさせるための具体的指導の在り方について研究、工夫していく必要がある。

・日本語の教科書を使って学習を進めるためには日本語の読み書きは必要。さらに意味理解において文法力、○○大学附属市民総合医療センターも読みの力等が課題となっている。

・日本語の読み書きの力はすべての教科指導のために必要であるから、児童の力を把握しておくことは必要である。課題・評価の範囲が広いので簡単には実態をつかみきれない。

・音韻認識等、読み書きのレディネスを評価できる検査がない。

・読み書き障害等を併せ有する場合の評価方法。

・読み書きの力をつけるために評価が必要だと思う。ただ、助詞や主述の理解など日ごろの指導でも課題はたくさん見つかるものだと思う。指導法を見つけることが必要かも知れない。

・児童がどこに課題があるために文章が書けないのか、読み取りで単語の意味が分からないためにイメージがつかめないのか文法が分かっていないので内容が読み取れていなかったのかなど実態が分かることで必要な指導を組みたてることができたり、力を伸ばしていく指導につながることができる。結果を指導場面で取り入れていくが、どういう方法でどうやって指導に結び付けていくと効果的な指導ができるのか次のステップへのつなぎ方が課題です。

・一人一人の子どもの実態に合わせた文法指導（自立活動）。

・言語力とは何をさすのかが明確でない。自発語の数だけでも評価できないし構文力を評価する方法もわからない。

時間

・教科指導（教科書指導）で本人がどれだけの力を持っているのか実態を把握する必要がある。その力を向上させる必要があるが時間がない。

・教科書がない中、担任の考えだけで指導をしていくには不安もあり保護者にもお話する上での指針となる。じっくりと検査にとりくむ時間がとりづらい。

・お子さんの実態をとらえ保護者と話をするには必要である。しかし、その実態をもとにどのように指導計画をすればよいのか、また、評価方法の学習、評価の時間の確保等難しい。

・課題としてはこれらの検査には時間がかかり少し構えないと実施に踏み切れない。

・第三者の立場で児童の実態を評価することができるのが良い点だが調べられない力もある。検査については実施する時間やお金の問題もあるため多くの検査を実施することは難しい。

・評価することで、幼児の言語力の傾向が分かるが語彙の数のチェックなど時間がかかるのが課題。

・個々の児童の実態把握を適切にする事で課題が見えてくるのだが検査を分析し正しく活用する能力・経験・時間的余裕が足らず検査をしても充分に活かしきれていないのではないかと思う。

・自ら読書をし、自分の考えをもつことができる生徒を目指しているが、とても難しく現カリキュラムの中では読書指導（文法、読解等）の時間がしっかりとれていない。

・助詞や構文に関する実態を知るための評価は就学に向けての実態把握として１回実施しているが、普段の指導に役立てるためにも行えばよいと思われる。ただ実施に時間を作ることが難しい。

保護者

・今年度在籍の幼児には単語（名詞中心）の言葉チェックぐらいしか実施できない（実態により）学校と保護者の共通理解及び指導の際の参考となるため必要である。
・いろいろな検査があるので目的に応じて使っていくことが大切。保護者への説明が不可欠だが適切に説明する必要がある。
・手話でコミュニケーションをしていると手話さえあれば全て理解できると誤解することもある。
・学校からの教科学習が始まることをふまえて生活言語を日本語でも理解･表現する力をつけていくことは必要なことなので、指導する上において子どもの課題をつかむことは大切。課題を保護者にかえして、どう力をつけていくかが理解してもらうのはなかなか難しいこともある。
・学校を離れ聾の世界だけではない社会へ出ていく上では当然日本語は必要。保護者の願いとの調整も課題の１つである。

平成 29 年度調査（29 年度は学部別）

幼稚部

・検査について、何の検査があるか、実施するとよいかなどについての情報は提示しているが、特に必ず実施する、というようには今のところしていなく、担任にまかせている。（課題）
・聴覚－音声がある程度進んだ後、日常的なコミュニケーションも進むため、本人も周りも満足してしまう傾向があるが、概念の広がりや、運用の状況など、学習言語の基礎作りのための言語指導の必要性を理解し、実践していくことが課題である。（課題）
・実施できる教員が少ない。（課題）
・評価からどのように指導に生かしていくかを捉えるのに、専門性が必要。（課題）
・幼児段階で、ひらがな文字の理解・表現をどの程度取り入れ、評価していくかが課題。（課題）
・すべてを実施するのに時間がかかってしまう。（課題）
・指導者が検査の方法、結果の分析方法を習得するのに時間を要することが課題。（課題）
・他校で使用している語いのリストを参考に基本語いの獲得状況を評価しているが、同じリストを長期にわたって使用しているため、内容の見直しが必要である。また現状では理解語・自発語の単語レベルでの評価にとどまっている。（課題）
・手話が中心の幼児に対して、どのように伝えながら検査をするのか迷いながら行っている。（課題）
・教師の異動等により、幼児の日本語の実態把握等の深まりが図れない。（課題）
・聴覚障害幼児の日本語力を正確に評価するような検査がない。（課題）
・就学に向けての手話言語から日本語を意識させていくかが課題である。日本語を意識させると子どもの活動を止めてしまうことがあるので。（課題）
・検査を実施できない幼児の言葉の力の客観的な評価がむずかしい。（課題）
・Ｊ・ＣＯＳＳが主軸になりつつあるが、聴覚障害児の言語力把握のためテストは、どのようなものが良いのかを検討中。（課題）
・就学に向けて年長時に検査することが多くなっている。低年齢から定期的にチェックできると指導に生かしやすいと思うが現状そうなっていない。（課題）

・課題は検査の読み取りや指導への生かし方などである。（課題）
・実態把握したことを指導にどう活かすかは、担任に任されており、評価したことの実践が課題である。（課題）
・筑波大学名誉教授齋藤佐和先生の段階表を文面は変えずに、チェックできるようにし、状況把握に活用しているが、評価する者の力量が乏しいと正しくチェックできない。チェック表を元に部内職員で話し合うことで幼児の実態把握の視点を学びあうようにしているが難しい。（課題）
・結果を見る度に、語彙力が身に付いていないことを痛感し、日々の活動の中での指導の大切さを感じる。（課題）
・言語力だけでなく、どうしてその実態になっているかの原因に繋がることを知りたい。また、生活の中で使える言語力について知りたい。（課題）
・語彙力を把握するための検査で、もう少し、詳しいもの（新しいもの）があれば活用したい。（課題）
・幼稚部独自でも客観的に評価をする必要性から、諸々の検査について職員が学習中、研修中である。（課題）
・言語指導をする上で、まず、幼児の言語の実態を客観的に評価することが求められるが、経験に頼った評価をする教師が多く、経験の浅い教師は評価の観点や基準が分からず、困っているのが現状である。（課題）
・把握したことを有効に活用していくことが課題。（課題）
・検査を日常性の中に（会話の中で）どう生かしていくかが大切である。（課題）
・発達がゆっくりな幼児なので、評価がむずかしい。（課題）
・言葉の記録は、『おやこ手話じてん』に掲載されているものを、チェックできるようにしたものである。保護者と担任で理解言語と表出言語について、どれくらいの状況（語彙）にあるのか一人一人チェックしているが、十分に活かされることが難しい状況にある。（課題）
・諸検査は、どれも幼児の実態把握のために必要であるが、ただ検査をするだけでなく、結果を分析し、どう指導に生かしていくかを考えたり実践していったりすることが大切ではないかと思う。（課題）
・幼児段階で、日本語の語彙が、どの程度できるか、把握が必要。事象や事物が手話で表現できても、日本語で表現できない場合がある。（課題）
・日本語の習得に繋がる身振りを評価しようと考えたとき、身振りを日本語に置き換える際に、評価者が変わると評価も変わりやすい。（課題）
・日本語の評価は必要であるが、日本語の力があまりついていない幼児にとっては、言語性の検査が難しい。（課題）
・語彙表のチェックは保護者にお願いし、担任がさらにチェックしているが、チェックの仕方が甘かったり、その後の活用が進まない。（課題）
・子どもの発達の状態をみる観点はいろいろ多面的。（認知面、言語面等）また、検査自体、非常に高額なものもある。ＰＶＴ－Ｒなどは３才未満だとわからない。（課題）
・個別で検査をするので、なかなか時間を確保するのが難しい。（課題）
・子どもの言語力が客観的に何歳段階にあるのか確認したり、検査結果を日頃のやりとりに活かすために必要だと考えている。ただ、現在の幼稚部の子どもたちに使える検査は少なく、日頃の行動観察による評価を大切にしている。（課題）

・５歳児の子どもでも検査の方法を理解できないことがある。（課題）
・定期的に評価し、保護者とも到達度を共有し、次のステップを確認するためにも必要である。一方、検査そのものの絵や状況が、現在の生活様式に合わない項目もあり、検査そのものの見直しも時代に応じてあるとよい。（評価の必要性と課題）
・日本語の獲得は一番の課題である。手話でコミュニケーションが豊かに成立することと日本語力は必ずしも一致しない。語彙（名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞等）中心であるが、手話、日本語（口語、指文字）共に理解、表出できているのかを評価している。（評価の必要性と課題）
・絵画語彙検査とＪ．ＣＯＳＳは年に１回担任が実施し、一人一人の実態を学部で共通理解している。一人一人の幼児が何が課題なのかを共通理解にかかわることができるため、話す内容や発問の仕方を工夫することに繋がる。Ｊ．ＣＯＳＳは、文法指導以前の段階の幼児にとっては、当たり前の結果（語彙が少ないなど）しか出ない。検査結果の読み取りや保護者へのお伝えをどのようにするのか（どう活かすのか）についてが課題である。（評価の必要性と課題）
・幼稚部では本校の語彙表チェック以外は実施していないが、お子さんによっては、他の評価も必要な場合もあると考える。（評価の必要性と課題）
・幼児のこれからの成長を見通したとき、日本語の読み書きの力の素地を培うことは、大変重要である。様々な体験を通して、多くの言葉に出会い、言葉と関わるようにしたり、絵本の読み聞かせ等の機会を設定している。幼稚部から小学部へ日本語の評価を確かに繋げていくための方途を検討している。（評価の必要性と課題）
・その時点の幼児の実態と指導の課題を把握し、指導に活かす。日常生活に必要な日本語の運用の評価が主観的になっている。（評価の必要性と課題）
・これまでは、必要に応じて担任判断で、絵画語彙検査を行ってきた。しかし、日本語力を評価することは全員に必要と思われるので、今後は自作のチェックリストを含め、アセスメントを検討していきたい。（評価の必要性と課題）
・子どもの言語力を把握することで、その後の指導計画に活かすことができる。（評価の必要性と課題）

小学部

・あくまで、子どもの実態把握の手段の一つとして扱わなければいけないと考えている。検査結果がその子の全体像の全てを表しているわけではないこと、指導の手がかりのために実施することを念頭にしたい。（課題）
・主観ではなく客観点な評価で、小学部の教員が小学部児童の実態を把握し、学部がまとまった考え方で指導にあたれることが望ましい。（課題）
・テストや検査の結果が授業に活かされていない。（課題）
・10 年程前から、聴覚以外の発達にも課題のある児童が増加してきた。一人ひとりの状態に合わせた指導方法を工夫する必要があるが、ニーズの見立てや評価が難しい。（課題）
・職員全員が検査を実施できるようにしたい。（課題）
・検査結果を指導に活かすことが大切である。（課題）
・客観的な評価は必要であるが、言語力は検査のみで測ることはできない。（課題）
・評価の活用の方法、どう教育活動に生かしていくかなどの方針を立てる時の分析の方法が課題である。（課題）
・語彙数が多い、文法を間違えないだけでなく、これらの知識力を〝統合して使えているか〟の評価を考えたい。（課題）

・必要性は感じているが、現段階では実施の予定はない。（課題）
・全員に、学年を決めて実施できれば良いが、多忙と人員不足のため、行えないでいる。（課題）
・評価を、教科書を使った指導に繋げにくい。（課題）
・客観性をもつ評価になっているかが課題。（課題）
・単一聴覚障害学級設置も間もないため、検討中。隣接医療施設で実施しているものもあり、その結果は共有できる。（課題）
・指導の成果、引き継ぎ資料等のため実施しているが、もっとしっかり分析する必要がある。（課題）
・J.COSS でほぼ満点を取れている児童について、次の段階にあたるような適切な文法力を測る検査ができておらず、検討中。（課題）
・読書力診断検査の誤答の分析を行い、それを日頃の国語科の指導に活かすことは有効だと考えているが、各担任任せとなっており、学部全体できちんと取りくめていない。（課題）"
・評価を意識して指導にあたっているかは、担任次第になっているというところが課題。（課題）
・客観的に児童の力を測ることは教員の指導を振り返り、次のステップへの指導の指針ともなる。ここのところ、学部としての継年変化をまとめていないので一度まとめる必要があると感じている。（評価の必要性と課題）
・児童の実態や成長の様子を捉えるため、日本語の評価を実施している。年度当初の評価を個別支援計画や年間指導計画に生かしている。検査結果の分析や部内における共通理解が深まることが望ましい。（評価の必要性と課題）
・実態把握の参考にしているが、各職員の意識化に繋がる。しかし、分野別の分析結果が出ても具体的アプローチにまで活用できていない点は課題。（評価の必要性と課題）
・児童の発達の様子を客観的に捉えるために必要である。しかし、学力テストについて県独自のものも実施しているため、学年によっては大きな負担となっている。（評価の必要性と課題）
・愛媛大学の先生から、テスト結果の読み取りについて講義を受けたり、小学部でも独自に分析を行ったりしているので、実態把握や指導に役立っている。日常会話や授業で考えていることと検査の結果がかなり違うこともあり驚いたこともあったので、評価をして、それを授業等に活かすための取り組みが必要だと思われる。（評価の必要性と課題）
・児童の課題を明らかにすることで、教師が系統立てて指導しやすくなる。また、ワークシート等を作成し、共有しやすくなる。しかし、評価できるテストの種類が少ない。（評価の必要性と課題）
・実態を把握し、指導に活かすために必要であると感じる。しかし、一方では検査をしっかり分析し、指導に活かせてない面もあるので、検査結果をどう扱っていくのか考えていかなければならないと感じる。（評価の必要性と課題）
・客観的な指標も必要であるし、接する機会が多い担任などの評価も、引き継いでいくことで、1つの評価としていく方法を作れると良い。（評価の必要性と課題）

中学部

・生徒に合った標準化されたものが必要である。（課題）
・実態を把握し、指導するために必要。（課題）
・読字力テストは漢字を読めても言葉の意味は分かっていない。また、使われる言葉も古い表現が多い。（課題）
・検査結果を一斉指導や個別指導の中でどのように生かすか。（課題）

・今年度、学部研究会の取組みの中で J.COSS を新たに試してみる。（課題）
・読みの躓きの段階や傾向を知ることは全教科の基本として必要と考える。（課題）
・評価の結果を、教科学習になかなか活かせない。（課題）
・評価には、生徒本来の姿が反映されていない一面がある。（課題）
・必要性はあると考えるが、個々に適したものを選択し、その検査等を行う時間の捻出が難しい。（課題）
・応答による検査は難しいので、指導者や保護者の観察による検査を実施している。（課題）
・評価を、それぞれの教科に落とし込んで、その教科特有の使い方、教科の言葉と合わせて指導することが難しく、職員の研修が必要。（課題）
・複数の検査の目的を理解して、活用していくことが難しい。（課題）
・解釈するためのスキルに教師の個人差がある。（課題）
・子どもの実態がわかり、授業で使用する教科書の読みなど、教員が指導に活用できる。評価を日本語の言語力を伸ばす指導に結びつけられていないことが課題である。（評価の必要性と課題）
・正しい日本語を身につけていくための評価は絶対に必要である。話せても書くことはまた違う。実態を把握して、指導に生かしていくことが大事であると考える。課題は検査を言語聴覚士に任せっきりになっていることと、十分に生かし切れていないことである。（評価の必要性と課題）

高等部

・現在、日本語の評価については、国語科を中心に行っているので、学校全体として、評価のあり方を検討する必要がある。（課題）
・語彙力、文法力、読解力に課題があるが、特に文章を読み取る力に課題がある。（課題）
・学習に必要な日本語の向上を目指して実態を把握し、目標を設定し、手立てを構築するためには、評価が必要である。評価について共通理解し、目標等を話し合う時間が十分でなく、統一した指導ができていないことが課題である。（課題）
・読み書きを含め、総合的に日本語力を評価し、系統的な指導に活かす必要があると思っている。（課題）
・指導者の日本語力を育むという視点の欠如。（課題）
・日本語能力は生徒によって差が大きい。一般教養としての日本語能力はどこまで求められるのかが判断に苦しむ。評価の結果と指導が直接結びつく検査等を選択することが難しい。（課題）
・学校全体でリーディングテストに取り組んでいるが、中学部生用までしかない。また、高等部内での明らかな能力の伸びは、このテストからは測れない。できれば、社会に出た時に必要な日本語の力を中心に評価し、指導に活かせるものがあるとよい。（課題）評価によって、この生徒には、わかり易い言い変えをして伝えようとの考えになりがちである。（課題）
・日本語の実態を捉えた上で、どのように指導に活用するか、検討していくことが課題である。（課題）
・手話を用いて授業を進めているとはいえ、各教科学習の評価は定期考査を含め、日本語を中心とした評価方法が中心である。生徒が手話の読み取り能力や手話表現が優れていても、日本語できちんと理解・表現ができる力をつけることが必要である。このことは卒業後の社会生活においても必要な力である。従って、生徒が日本語がどの程度理解でき、どの程度日本語で表現できるかという点を授業や読書力診断検査、読字力検定試験などで把握しているところである。把握の段階から、それを分析し、指導に活用する段階には到達していないという点が課題として挙げられ

る。（評価の必要性と課題）
・実態が様々であることから、評価は必要であるが、その必要性を学部間で共通理解し、指導に活用していくことが課題である。（評価の必要性と課題）
・実態把握においては、わかり易く、生徒たちが持っている力の様子が理解できるが、各教科の指導に具体的にどう活かすかが難しい。（評価の必要性と課題）
・客観的な評価は、実態把握の面でも指導の面でも必要である。しかし、現時点での読書力診断検査は中学部までのものであるので、高等部段階のものもあるとよい。（評価の必要性と課題）
・学習の意欲づけとして活用しているが、指導のための十分な時間確保が容易でない。（評価の必要性と課題）
・検査や評価の必要性は感じているが、教員数の少ない学校で、専門性のある教員は更に限られており、十分な検査が行えていないのが課題である。（評価の必要性と課題）
・実態把握のために必要である。しかし、指導には十分活かせていない。（評価の必要性と課題）

表 5-3-7　評価の内容

	理解	表現	語彙	日本手話	日本語	その他
平成 24 年度	32	21	27	14	7	2
（N=103）	31.1%	20.4%	26.2%	13.6%	6.8%	1.9%
平成 29 年度	26	18	16	9	7	2
（N=78）	33.3%	23.1%	20.5%	11.5%	9.0%	2.6%

表 5-3-8　手話の評価の必要性
平成 24 年度調査

必要性	・手話そのものを考えるなら将来､いわゆる聾社会の中に溶け込んでいくためには必要なものだと考える｡学校教育においては概念形成をしていくため一方法だと捉えている。 ・行っていません｡必要性は感じていません。 ・手話の必要性を意識してもらうには言語力評価を実施することは大変有効と考える。 ・現在のところ特に必要は感じていません。 ・幼児の実態把握のため必要である。手話での単語レベルの評価はしているが対応手話での理解表出の評価の方法は観察等にとどまっている｡文法的にどの程度言語力があるのか評価するのに教師の手語力によってまちまちであり適切な評価方法がないのが課題である。 ・必要だと思うが現在は評価する形をとっていない。 ・手話の言語力と学力の間に相関があるのかないのかを明らかにする。 ・手話の言語評価は必要だと思いますが本校ではできていません。 ・行っていない｡手話を使用している関係上､必要なのかもしれないが､現段階では検討していない。 ・必要であると思うが具体的にどのようにすれば良いかわからず手をこまねいている。 ・近年の幼稚部在籍児が聴覚活用がよくできる音声言語が中心の子どものため手話を使うことが少ない｡そのため手話の言語力評価の必要性をあまり感じていない。

・本校の高等部では手話を常時使用しているので生徒の実態から今後手話の使用も考慮する必要があるとは思うが、本人がまだその必要性について理解しておらずその使用について検討していく必要があると考える。（注）生徒数が減少のため中学部在籍は現在中１名のみ。

手話力

・手話力については日常生活の中でどの程度使用しているかを評価する必要性がある。
・教員の手話力の不足をどう向上させるか必要です。コミュニケーション力、言語力を図りたいが図れないのが現状。「○○こんな言葉もしらない」「ことばがない」とよく言われますが、言う人たちは日本語のみ「ことば」と言っている為、手話言語についての理解が得られません。一般化された手話力評価のものがあると、どこに課題があるのか測れます。
・教師の手話力の問題があるのでビデオ教材を使って行っているが、保護者の手話力をどうつけるか。
・教師の手話力（日本手話）。
・幼児でも取り組めるものがあるとよいが教師自身の手話力が拙いことも課題である。
・職員の手話力がまちまちなので一定基準の技術や表現力を維持。
・子どもたちの教育歴や家庭環境は様々であり手話の力も様々。また、子ども達の手話力を評価するためには子ども達以上の手話表現力と手話読み取り力が教員には必要だが、どちらもなかなか上達せずに苦労する教員もいるのが現状。子どもたちもそうだが自分が間違っていることになかなか気づけず、まちがったままの手話を繰り返し提示し、予想外の返事が子どもから返ってきたときに子どもが理解できていないと勘違いしてしまうなど･･･事態は深刻。
・生徒の手話力の実態をつかむ必要性はあると考えるが、教師側の手話力もまだ不十分な面もあり、そのような取組は今のところできていない。
・将来的は必要な評価と考えている。その前に指導者の手話力の課題をなんとかしなくてはならない。
・教員の手話力の向上。
・人工内耳装用の児童が多く手話力の向上という意味合いが薄れている。重複のお子さんについても簡単な意志疎通ができる程度であり、言葉をおさええるのには指文字を使っている状況。
・教員の手話能力向上の取組。

手話の言語力

・聴覚障害教員（非常勤）の手話をどの程度理解できているかを把握できるとよい。しかし、手話の言語力を伸ばすためにはあえて「授業で」というより普段の学校生活や聴覚障害教員の授業などを通して自然に身につけさせていくしかないのではないかと考えている。
・手話の言語力評価は必要だと思うが、手話力向上のための研修をもっと充実させることがまず必要。
・手話の言語力というよりは日本語と手話とのマッチング能力･･･つまり日本語力の評価になってしまうようにも思えるが教師が発信する手話を生徒がどの程度知っているのかは測っておきたい。
・中学部から進学する者と他の中学校から進学してくる者がいる。そのため手話を使ってのコミュニケーション力に差がある。しかし、卒業後のろう社会で生きていくためには手話の上達は必須となる。手話の言語力評価をする必要性は感じているがまだ実施していない。
・手話の言語力評価の方法について、どのようなものがあるのかなど、あまり校内で話題にされることはないので情報を知る必要がある。
・他校種からの異動者や産休代替、時間講師の手話の言語力について課題があり校内で手話講習会を行っているが、どのくらい身についているか分かるとよいと思う。

・生徒の手話も曖昧な所があったりすることもあり、教師も含め手話の言語力向上のための評価は必要と思います。
・今のところ手話の言語力についての評価は予定していないが必要性については考えていかなければいけないと感じている。

・手話の言語力評価については必要性を感じている。

・両親聾の生徒以外は手話の言語力は不確かである。生徒どうし話しているのを見てどの程度伝わっているのかと思う時もある。お互いの意志疎通がうまくできずにトラブルになる事例もある。日本語も手話も曖昧なセミリンガルの状況を感じる。
・本校では手話の言語力の評価を今までしていないと思います。日常的に伝わる、伝わりにくいという判断になっている部分があるので今後手話の言語力の評価も必要と思いました。。

日本語

・日本語の言語力と手話の言語力を同一バッテリー（本校自立担当者自作）を用いて評価している。今後検査内容の検討が必要。

・日本語把握との関係性を知る上では有効と考える。

・手話で一次言語をしっかり身に付け、遅れずに教科学習、日本語の学習についていくことができる（読む、書く）。
・言葉のイメージを捉えるために手話は有効であるが、日本語と結び付けて指導する必要がある。
・あくまで日本語力と両輪であるべきという前提で生活・学習場面で手活力（受容、思考、表現の力）は必要である。しかし、小学部中学年-中学部の段階で手活力と日本語力に明らかな差が出るケースは子どもへの心理的影響を考える必要が生じる。手活力評価は受容、理解、表出が平易によみとれるアセスメントが必要と考える。
・中学部の目標からもまずは日本語力の向上を目指している段階である。
・手話の内容を日本語におきかえていく時には手話で理解できているのか確認する必要がある。
・日本語から手話、手話から日本語に置き換えて表現できる力を持っているかで本当の意味理解につながると考え、中学部では週一時間自立の時間に実施してきている段階。
・手話付きスピーチが主たるコミュニケーション方法ではあるが本学部では日本語の言語と同じ比重で手話の言語と指導しているとは言い難く現段階では評価するということは考えていません。不必要とは考えませんが、手話の位置づけ幼児一人ずつの手話のニーズをしっかり検討し職員が手話の言語力をつけているということが前提になると思います。

コミュニケーション

・本校及び当学部では先に（P2）「学部の指導目標」で示したとおり「個に応じた手段でコミュニケーション能力を高める」指導を行っていますが、現在のところ聴覚口話法を基盤にして行っており、当面、手話はその補助的手段として活用しています。言語コミュニケーション手段の多様な考え方を総合的に検討しながら指導にあたってまいります。
・生徒が手話、音声のどちらの手段から主に情報を得ているのか、どの程度理解できているのか等の現状把握は生徒個々のコミュニケーション手段を考えていく上でも必要である。
・手話を含めたトータルなコミュニケーションツールを用いた言語力養成は、生徒の将来を左右する大きな問題であると思う。
・口話同様に手話表現の追求を図る取組が少ない。手話をつかっているが手話そのものへの研究が不足している。同時に口話や聴覚への研究が不足している。ただ手話を保障し話を補聴器できいている生徒がいるという印象があり、どこまできこえていて手話は一人一人に何を伝えもたらしてい

	るのかというコミュニケーションの側面での捉え方は弱いと思われる。「通じている」ことは確かであるが一体どういうルートをつかってどれだけ通じているかという分析は不十分と考える。 ・コミュニケーション、言語、手話ともに定点観測のような評価ができれば成長がよくわかると思います。ただ中高には自立の専科担当がいないので必要性を感じる教師が個人的に実践しています。もっと広く学部の共通認識になればと思います。 ・将来のコミュニケーション手段の方法として必要。 ・実態把握、コミュニケーション能力向上の指導に活かす。 ・手話が主なコミュニケーション手段である生徒がいるのは事実なので手話の言語力評価も必要かとも思うが、生徒も教師も日常の簡単な手話ですんでしまっているのが現状である。
実態把握	・日本手話文法テストは数年前1度実施しましたが、その後は使用していません。現在手話を第1言語とする児童は重複障害の児童だけなので観察でほぼ実態把握はできると考えています。 ・部内では手話中心に活動が進められている。ろう教員は小学部30名中7人名いる。手話の使える教員もたくさんいる。しかし、子ども同士のやりとりは読み取りきれないものがある。手話を覚えている最中の教員はたいへんな負担を感じている。実態把握をして授業を行うために評価は必要ある。 ・言語の定着を確認するのに必要。 ・生徒がどのような手話をどのように理解しているか実態を把握することは大切。 ・手話の理解度を把握した上で授業等での活用に配慮していく。 ・手話の言語力評価は特にやっていないが、語彙数のチェック時に手話で表わすことができるかを確認している。 ・部内で手話に関する評価について検討していない。 ・学級担任が学部行事（弁論大会など）と関連づけて個別に評価を試行している。 ・ある程度客観的評価ができるとよいと思うが、方法について考えていく必要がある。 ・評価していない。今後は検討していく必要があるかもしれない。 ・本校の「観察」は聴覚口話を基本としたもので手話に特化したものではない。人工内耳装用が増えている一方で蝸牛奇形があり人工内耳、補聴器ともほとんど活用できない幼児も増えている。今後手話の評価が必要になる可能性がある。 ・今後は実態に応じて全国の検定試験などを実施したい。 ・大人の手話単語ではなく幼児の手話表現を育てたり評価（?）する方法、学習方法があればと思う。
研修	・教師の日本手話の力をつけることが大事。手話のとらえ方を職員で共通理解する必要がある。 ・教師側の評価も必要だと考えます。 ・自分達が日常使用している手話表現が、本当にその時その時の文章に合ったものであるか見直したり通常使用する表現以外の手話があることを知る機会を設けることは大切だと思う。
指導	・小学部までは、「日本手話文法理解度検査」（金沢大）を使用していたが、中学部生徒向けではないため、実施していない。 ・教科学習を進める上で、必要な言語力（手話に関する）を把握し、指導を進める必要を感じる。 ・どのように評価していくのかを共通理解していくこと　・評価したあとどのように指導していくか。
幼稚	・手話に関して幼稚部段階で客観的に評価する必要性を今のところ感じていない。 ・幼稚部の段階では手話は意味理解の手掛かりとして使用しているため獲得状況の評価は必要とし

部　ていない。

・幼稚部段階で使用する手話は身ぶりの延長の範囲にとどまるであることが多いので今の時点では必要性がない。

・幼稚部で使用しているのが理解やコミュニケーションの補助としての身ぶりサインであるので手話の評価を必要としない。

・人工内耳の幼児が増える中で手話を位置づけ、幼稚部として検討中。

平成 29 年度調査（29 年度は学部別）

幼稚部

・手話を導入し、日常的に教員も子どもも使用しているが、客観的な手話力の評価はできていない。手話の表出は確認できるが、手話の理解力については、正確な実態把握が必要であると感じている。（評価の必要性）

・「手話力」という独立した形では行っていないが、「語彙チェックリスト」で、音声と手話の両方の理解をチェックするようにしている。（評価の必要性）

・現在は日本手話を活用している幼児がいないため、必要性を感じていないが、在籍している場合は手話の力を正しく判断するために評価は必要だと感じる。（評価の必要性）

・子どもの聴力、全般的な発達に応じて、聴覚口話のコミュニケーションを主としている場合、手話力評価は幼稚部段階では必要ないと思う。年令が上がって、読む、書く力が確立された上で、手話も身に付けた場合は、手話力評価も行ってもよいと思うが、現在の本校幼稚部では、必要性は感じられない。（評価の必要性）

・子ども自身にとっても、中・高生あたりは、手話力評価が必要なのかもしれない。（評価の必要性）

・幼児の実態に応じて、様々なコミュニケーション手段を活用している。手話はコミュニケーションの補助手段の１つであるので、特に手話力評価の必要性を感じていない。（評価の必要性）

・手話力だけを評価する必要性は感じていない。（評価の必要性）

・人工内耳で聴覚を活用している子どもが多く、手話の評価は必要な状況ではない。（評価の必要性）

・聴覚障害のある保護者からは、教員の手話力の向上を求められているが、現在子どもたちの手話力を評価することはできていない。（評価の必要性）

・手話を使っている幼児に対しては、観察の中で評価を行っている。（評価の必要性）

・教科指導を行うにあたって手話力について実態把握を行い、必要な支援を考えることができる。（評価の必要性）

・手話力の評価は行っていないが、客観的な評価の必要性は感じる。（評価の必要性）

・授業や生活場面全体を通して、幼児一人ひとりの手話力の把握に努めている。（評価の必要性）

・人工内耳装用児が増え、家庭では手話を使っていない幼児が増えている。そのため、手話が必要な幼児に対してや、全体での場面でしか手話を使わない幼児に対しては、手話力評価の必要性は感じない。（評価の必要性）

・使用したこともあったが、手話表現に地域差もあり、大まかな手話力の実態をつかむのにはいいが、時間をかけて評価するには、本校の場合は妥当でなかった。現在は、手話力評価は行っていない。（評価の必要性）

・今年度は、聴覚口話を主とする幼児と、重複障害幼児で構成されているために、手話の使用場面がほとんどないために評価できていない。幼児同士が日常的に手話を使う場合には、評価が必要である。（評価の必要性）
・幼児において手話力評価は難しい。（評価の必要性）
・現状、特に必要性を感じていない。（評価の必要性）

小学部

・必要に応じて手話を使うが、人工内耳装用児童も増え、あらゆる人とのコミュニケーション手段を用いることを小学生段階では考えており、手話力だけを把握する評価の必要性を感じていない。（評価の必要性）
・最近、聴覚口話の児童が増え、手話力評価の必要性はあまり感じていない。（評価の必要性）
・現在、手話を主なコミュニケーション手段にしている児童がいないため、必要性を感じていない。（評価の必要性）
・高学年に向けて、指文字や手話も使ってコミュニケーションができるようにと考えている。現在は評価までは必要とはしていない。（評価の必要性）
・子ども同士で使っている手話はとてもあいまいで、正しい評価の必要は感じている。（評価の必要性）
・小学部では行なっておらず、中学部で行なっている。現状では、小学部段階での必要性は考えていない。（評価の必要性）
・健聴児の生活言語の評価を学童期に実施しないのと同様に必要性がわからない。学習言語としての手話力の評価をする必要があるのであれば、そういった必要性もあるのでしょうが、手話力を見る前に市販の学力テストでおよその学力は測れると思う。（評価の必要性）
・必要性を現段階では感じていない。（評価の必要性）
・母語が手話であっても手話が正しく使えてなかったり、手話での位置関係等の表現や読み取りは難しく、間違えて理解したりしているので、個々の手話力の評価は必要と考えられる。（評価の必要性）
・必要性を痛感しているが、実際にできていない状況。研修すべき内容が多岐にわたり、授業研究の時間を確保することが厳しい状況となっている。（評価の必要性）
・準ずる教育課程の児童に。主に手話や指文字を使っている子どもがいない為、手話力を評価するテスト等は実施していない。（評価の必要性）
・授業や生活場面を通して、児童の手話力を把握している。（評価の必要性）
・単一聴覚障害学級設置間もないため、検討中。（評価の必要性）
・児童の内言や、概念理解の程度を評価するために、手話力の評価は必要だが、本校の手指メディアは、スピーチ付きであることが前提のため、手話力のみの評価という考え方とは少し異なる。（評価の必要性）
・現段階では、あまり必要性を感じていない。（評価の必要性）
・コミュニケーションモードとして、どれぐらい使えているのかを知ることで、コミュニケーションの際に活用できる。（評価の必要性）
・家庭（保護者）のニーズで、評価までは踏み込めない部分がある。（評価の必要性）
・学部としては今のところ児童の手話力を評価すべきかという議論には至っていない。（評価の必要性）

・特に必要性を感じていないので、実施していない。（評価の必要性）
・教師側が手話力評価の方法を知らない。（評価の必要性）
・グレーゾーンにいる児童の手話力も評価できれば、重複認定の際に有効な判断の根拠としやすいかもしれない。（評価の必要性）
・現状等に必要性を感じていない。（評価の必要性）

中学部

・手話は聾者が自然に身につける言語であり、そこに「評価」という言葉は馴染まないと考える。ただ、使用する言語モードを越えて学習活動を行う場合や、学習場面で日本語と結びつけることを考えると、伸ばす必要があり、実態把握が必要であることは感じる。（評価の必要性）
・正確な手話でなかったり、内輪だけで通じている手話が多いので、できるだけ共通の手話を学ぶ必要がある。（評価の必要性）
・明晴学園のテスト（ＣＤ）を生徒に一部したことがあったが、存在をしらない。実施してみたい。（評価の必要性）
・手話力評価は必要であると思うが、これ以上研修等放課後の時間を確保することは難しい。特に中学部は部活指導、生徒指導（教科指導）があり多忙である。（評価の必要性）
・手話力を評価する前に、日本語力、コミュニケーション力など総合的に評価することが求められている。生徒の実態差もあるが、正しく発信して伝える、正しく受信することができるようになるよう指導していくことが大切だと考える。（評価の必要性）
・現在の学校の方針上、必要を感じない。（評価の必要性）
・生徒の実態把握のため実施している。（評価の必要性）
・生徒の手話力については、授業や日常生活において、個々の実態に応じて、手話で会話をしているが、手話力評価についての必要性は感じないが、手話の表現方法が間違っている場合などは生徒に助言をしている。（評価の必要性）
・手話力の評価は日頃の生活で行う。（評価の必要性）
・手話表現にも地域や生活経験によって様々あり、コミュニケーションをよりよくするには、ある程度の統一性や、相手に合わせた手話の取得が必要なため、一定の基準を設けるには必要と思われる。（評価の必要性）

高等部

・生徒間のコミュニケーション力を高めるためにも手話は必要と考えるが、評価については、現段階ではその必要性を感じていない。（評価の必要性）
・現状として評価を行っていないが、生徒は教員の手話を見て覚えていく部分があるのは確かなので、手話力の向上とその評価は必要である。（評価の必要性）
・手話が生徒にどこまで通じているかを、２分間スピーチ（生徒が手話と口語で自分の興味のある事についてスピーチ）で生徒が聞き取り、メモをとったり、感想を書いたりして、確認している。あくまでも日本語を確認し、獲得することが大切。（評価の必要性）
・教員にとって、手話力の評価は必要だと感じている。（評価の必要性）
・教員より生徒の方が手話力が劣る場合は、最初の授業前に把握するために必要かもしれない。（評価の必要性）
・自分の手話力を知るためにも、また自身の課題を把握するためにも評価は必要だと感じる。（評価の必要性）

・正しい手話と手話言語の拡充のために評価は必要。（評価の必要性）
・聴力や教育歴、家庭環境等を考え、高等部において手話力の評価は行われていない。本校で使用している「手指メディア」の評価については、小学部と中学部で行っている。（評価の必要性）
・統一した手話を身につけ、誤解しないようにするため評価は必要である。（評価の必要性）
・重複障害の生徒やUターンで入学した生徒、教職員など、手話力の評価も考えなければならない時だと思う。（評価の必要性）
・ここ数年、普通中学校から入学してくる生徒が増え、聾学校で育った生徒とコミュニケーションや人間関係で課題が見られる。生徒の全体的な手話力の把握も重要視している。（評価の必要性）
・教員の異動が短くなり、手話に対して興味・関心が、教員が評価しようとするまで、高くならない。しかしながら、社会への段階である高等部では、それが課題であるとは捉えていない。（評価の必要性）
・手話力を評価する必要性は感じていないが、聾学校で生徒とコミュニケーションをとるための大切な手段であることは、ろう学校教員には認識しておいて欲しいと思う。（習得することを諦めない。どうしても難しい時には生徒に伝える手段（筆談、パワポ等視覚的手段）を準備する気持ちはもって欲しい。）（評価の必要性）
・聾学校高等部の生徒に適した、共通の手話力検査の必要性を感じる。（評価の必要性）

表 5-3-9　手話の評価の課題

平成 24 年度調査

手話力	・教師の主観で生徒の手話力を評価しており、それがコミュニケーションの豊さや学力の向上に十分につながっていない。また、この手話力の重要性等について学部や学校全体で話し合いがされていない現状であることが課題としてあげられる。 ・教師の手話力もまだ不十分な状態では生徒へ教える語数も少ない。 ・現在は手話力についての評価は実施していません。今後の検討課題です。 ・このアンケート内容を見ながら生徒のコミュニケーションや言語力の実態を正しく捉えるためには生徒の手話力を客観的に把握することが大事だと気付かされた。脇中氏（京都府立ろう学校）の作成されたチェック表で調査を行ったことがあるが、本校生徒の実態に合ったチェック表をどのように作成し評価後の指導にどのように活用するのか等課題として考えられる。 ・教科学習（教科書指導）をする中で手話力が必要になる。そのためどれほどの手話力を持ち、その手話表現は書記言語としても理解できているのかは必要である。新しい言葉を意味理解まで学習するとなると時間がかかる。 ・手話コミュニケーション能力を評価する教員の手話力の研修システム。 ・幼児向けのものがなかなかない。手話力に差がある。 ・教職員の手話の力量に課題がある。
手話の言語	・聴力の厳しい子、聴覚障害の家庭など、手話言語を持っている子どもの評価も必要と思う。また、一般の検査ではやりにくいこともあるので手話での言語力評価も必要だろう。本校では実施していないが他校の情報などを得ることも課題の一つである。 ・手話の言語力向上は大切ですが指導者側の手話力は課題だと思います。ただし手話ができるできないだけで教員を選ぶことはたいへん危険だと思います。

力	・自立活動の時間に帯時間で毎朝、手話表現の指導をしている。手話の言語力をまとまった形で評価していなかったが行う必要があると思う。課題としては生徒のニーズに応じて指導の内容が異なるので目的とどこまでの（実態からくる教育的ニーズ）内容を扱うかを学部で検討する必要がある。 ・コミュニケーションを深める意味でも手話の言語力評価は必要であるがテストを実施できていない。 ・手話の言語力評価は必要と考えるが定期的に実施するにはまだ指導体制が十分とは言えない。 ・手話の言語力評価は必要だと思うが、本校では現在行ってはいない。 ・手話の言語力を評価する具体的なイメージが浮かばないため、その必要性を感じていない。しかし、言語力の向上を何らかの形で確かめることは大切だと思う。 評価の方法や客観性が課題だと思う。 ・日本語に対して国語のテスト、英語に対して英語のテストがあるように手話に対しても手話の言語力評価は必要だと思われる。実際の方法については今後の検討課題である。 ・手話学習会（外部講師）を定期的に実施しているが、手話の言語力評価までは行っていない。 ・手話の言語力を 2 つに分けて考える。1 つは手話通訳として翻訳のように置き換える力、もう一つは幼児のもつ言語力を伸ばすための手話を使う力。教育現場では後者のほうがよいが、これを評価する検査がない。 ・手話の言語力を 2 つに分けて考える。1 つは手話通訳として翻訳のように置き換える力、もう一つは児童のもつ言語力を伸ばすための手話を使う力。教育現場では後者の方がよいがこれを評価する検査がない。 ・語彙表に関しては、子どもの語彙力を把握し指導に活用することが目的で、手話の言語力を評価するものではないため、手話に限定されるとあてはまらないこともある。 ・手話の言語力の評価はしていますが、それをうまく指導につなげていこうという職員内の共通理解はしていません。
実態把握	・伝達内容の詳しさ　伝達の意欲　日本語の習得とのバランス（コミュニケーションと日本語の押さえ）必要であると感じているが実施には至っていない。 ・コミュニケーションの評価と同じカテゴリーになるのでは?　地域差が激しい手話を統一的な視点で評価できるのだろうか。 ・生徒が普段使っている手話について通じ会っているようでしっかりと通じていないこともある。 ・手話の理解力の把握 ・　実態把握後の指導例がない。 ・　結果のデータ数が少ないので比較が難しい。 ・実際に手話での言語がどれくらいあるのか状況を把握する必要があるのだろうが、本校では実施していない。しかし、実態把握ができたとしても手話の指導は難しく結果が活かせないのではないか。 ・中学部段階で手話よりも指文字を使う生徒が多い。手話の定着度を上げるため、評価をどう活かしていくかが今後の課題である。
指導	・手話表現や手話で通訳する場面で正しく理解できているかを把握するため指導にどう利用するか。 ・評価の仕方に課題　語彙の広がりをどう指導するか。 ・まだ学校として「生徒の手話使用」「手話の指導について」様々な意見があり手話をどう学校教育に位置づけるかという段階です。

・特に指導はしていないが間違った手話は正している。
・手話と文字言語を結び付けて指導していて手話のみは行ってない。教師の手話力不足。
・手話が必要な子どもにとって、それが身についているのかを確認していくことは必要。
・聴覚活用をまずすすめ、曖昧な部分を手話で補っている。
・必要性を感じるがその方法が本校にはないという点では課題を感じる。
・これまで行ったことがなかった。今後検討してみたい。
・生徒が社会に出た時に日本手話の理解や手話通訳者の手話の理解も大切。様々な手話の表現方法や手話単語なども自立活動等で今後扱っていくことが重要であるが、本校では現在それらの活動が本格的に行われておらず、どう行っていくかが課題である。
・小学部では小学部用手指辞典（基本単語 350）を使用して 6 年生から先行学習を行っている。中学部での手話使用にスムーズに入れる児童もいるが、なかなか移行できない（覚えられない）児童もいる。
・児童が違った手話を使っていることが多く評価の必要性を感じる（原因は教員が誤った表現をしているのでそれを覚えてしまったのか?）教員の異動のため 1～2 年の先生は手話がわからない。特に児童の手話の読み取りができない。

評価法

・国語や英語においてテストを行なうように手話においてもどれくらい手話単語を、文章を表現できるかというテストを行う必要があると思います。ただどのようにやっていくかという方法が確立されていない気がします。
・どのような方法で評価すればよいか具体的な話し合いができていない。
・実施、活用していないことが課題である。
・評価法の知識が普及していない。
・手話にも方言がある。
・手話の語彙の獲得状況を評価するツールがない。
・何らかの形での実施の必要性は感じるが良い手段が見当たらない。

平成 29 年度調査（29 年度は学部別）

幼稚部

・手話力を評価できる検査について、情報を得る必要がある。（課題）
・手話力の評価は特に行っていないが、今後必要になってくると考えられる。（課題）
・現在、評価を行っていないので、今後考えていきたい。（課題）
・日本語の言語力の評価に使用しているリストを使用して、語彙数と理解・表出を評価している。単語レベルでの評価に留まっている。（課題）
・今後の幼児の実態に応じて考えていく必要がある。（課題）
・手話を用いた指導方法や指導内容については、まだ系統的なものがなく、幼児あるいは教員の実情に応じて使用しているのが現状。評価に至るまでの活動計画や、使用にあたっての方針の策定などが課題と考える。（課題）
・発達がゆっくりなため、評価が難しいので、幼児手話辞典を使い、理解・表出を調べているが、それでよいのか分からない。他の方法も併せて知りたい。（課題）
・標準化された手話力評価に関する検査が出ていない。（課題）
・乳幼児期からのコミュニケーション（やりとり）や概念形成などを考えると、手話は必要ではあるが、本校では音声を併用した日本語対応手話を用いているため、評価はできない。（課題）

・実態は把握できるが、どう活用してよいかがわからない。何か指標のようなものがあるとよい。（課題）
・日本語の欄と同様。語彙中心の評価になる。特に日本手話を使用できるのは、ろうの教員に限られるので学部全体の評価は難しいと考えている。（評価の必要性と課題）

小学部

・今後の検討が必要。ただし、ろうの教員でも手話の文法、構造をきちんと身につけているとは限らない。評価をだれがどのように行うかが課題。（課題）
・評価できる教員が限定される。（課題）。
・子どもの手話の語彙力を正しく評価し、指導に繋げる能力の習得の必要性がある。（課題）
・標準化された検査が出ていない。（課題）
・手話力の実施できておらず、今後検討が必要である。（課題）
・手話力評価について今後研修を行っていきたい。（課題）
・課題は評価方法と時間の確保。（課題）
・自身の手話力を振り返り、更なるレベルアップを図る為には評価が必要、欠かせないと思う。しかし、現状の方法では不十分だと思う。（評価の必要性と課題）
・両親がろうで日本手話がメインの児童や、人工内耳で音声が得意な児童など多様な現状。書記日本語と同様に手話力の評価の重要性も感じるが、学部全体でのコンセンサスはまだ得られておらず、個々の担当の判断に留まっている。（評価の必要性と課題）
・経験年数の少ない職員が多く、児童だけでなく、指導に当たっている職員も手話力の評価には負荷を感じる。また、人工内耳の児童もいて音声でのやりとりも多く、手話力という視点は持ちにくい現状である。（評価の必要性と課題）
・評価があるにこしたことはないのかもしれないが、学校現場ではそういうことに時間や労力を注ぐより、日本語力や学力の実態把握や対策の研究実践に力を注ぎたい（時間が足りません）と思っている。どんな検査も結果を指導に生かすことが大切で、その点が課題だと思う。（評価の必要性と課題）

中学部

・手話を活用して、生徒とやりとりしたり授業を進めたりするのと、手話力を評価するということは、別のスキルが必要であり、誰もが客観的（主観的になりがち）な評価はできない。（できる人が限られている）（課題）
・本校は、乳幼児教育相談から、中学部までの学校である。日本語の力を育てるため、発達段階によって、コミュニケーション手段を考えて使用している。当然手話力を必要となる。中学部として必要性を感じている。しかし評価まではまだ考えられない状態。（課題）
・社会自立に向けて、生徒に身につけてほしいスキルは多様であり、手話力を評価する時間的なゆとりはあまりない。（課題）
・標準化された検査の実施が難しい。生活や学習の中でどのような手話を理解し、表現しているかを把握する程度である。（課題）
・標準化された検査が出ていない。（課題）
・単語レベルでの手話力の評価はできても、授業や生活などの会話レベルのものの手話の力は、さまざまな表現方法もあるため評価自体がなかなか難しいのではと思われる。（課題）
・手話力の評価は実施していない。手話力評価ができる教員がいない。（課題）
・評価は必要と考えているが、客観的な評価は実施できていない。（評価の必要性と課題）

・日本語の言語力を育てることが優先課題であり、手話力向上のための評価テストをする余裕がない。（評価の必要性と課題）
・それぞれが使う手話にも違いがあり、市販のテストでは判定が難しい面もある。（評価の必要性と課題）
・手話の必要性については、職員間で共通認識できているが、評価にまで考えが及んでいないことが課題。（評価の必要性と課題）
・評価の必要性はあると思うが、評価方法が難しい。友だち同士の手話が多いので、一般的に通用しにくい面がある。（評価の必要性と課題）
・手話での会話を基準にする聾学校の教育があるが、生徒の中には指文字を多用してきた転入生もおり、難しい面もある。しかし、社会に出て、聾者の大人と協力し、交流する生徒達であるので、評価し、手話力向上を目指させたい。（評価の必要性と課題）

高等部

・研修する場面は多いが、自己評価になりがちで、きちんとした評価がしづらい。（課題）
・手話力を評価する方法として、一般的なものがない。（課題）
・生徒に対しての手話力評価については本校ではまだ実施できていない。（課題）
・手話検定等の機会の少なさ等があるが、実際評価については実施していない。（課題）
・手話力評価の必要性は感じるが、日々の学習や学校行事の準備その他の業務が多く、なかなか実施できないのが現状である。（課題）
・評価に使用できるものがない。（課題）
・評価できる教員がほとんどいない。（課題）
・生徒一人ひとりの手話力が異なることからも、手話力評価の必要性は実感している。しかし実践まで、学部として至っていない。手話に対する教員の意識の向上が課題であると考える。（評価の必要性と課題）
・手話での発信よりも受信（読みとり）の力が弱いと感じるので、正しく読みとりができるかどうかの客観的評価ができると良いとは思う。自立活動で読み取り練習をすることもあるが、評価は教員の主観によるところが大きい。（評価の必要性と課題）
・手話力が必要であることは間違いないが、評価については、どのように評価するのか、評価の基準がはっきりしないと何とも言えない。また、手話通訳者のように手話ができても、生徒（児童）は、その手話を知らない。また、その手話を言葉に替えても言葉の意味を理解していないなどの問題がある。（評価の必要性と課題）
・手話力評価に関する方法については、特別な取組（検査や調査等）は行っていない。授業や学校生活を通して生徒の手話力を把握しているところである。教員も手話に対する指導力に差があり、生徒に手話を指導できる者から、生徒から手話を教わって学習する者までまちまちであるのが実態であり、客観的な手話力評価の必要性を感じているところではあるが、どう評価したらよいかが手探りの状態であるのが実態である。この点については、他県の様子をお聞きしたいところである。（評価の必要性と課題）
・手話だけをとりあげた授業はなく、言語力やコミュニケーション力として、いろいろな表現方法について、総合的な評価を行っている。それだけをとりあげる必要性があるかどうかは疑問、しかし、手話を使っても通じないといった言語力の低い生徒は、そうした課題もある。（評価の必要性と課題）

表 5-3-10　教師の手話力向上のための評価の概要

平成 24 年度調査

研修	・学部、学校としては、実施していないが、会議の際に（職員会議、学部会等）、ミニ研修を行ったり、全校研修に年間数回取り組むなど手話力の向上に取り組んでいる。 ・校内研修の中で、日本手話文法テストを行う（評価は特にしていない）。 ・校内研修での年度末確認テスト（上級、中級、初級にわかれて各講座講師が実施）。 ・教師の評価はないが、職員全員による手話研修や有志による手話研修（サークル）などで研修を実施している。 ・手話研修会は実施しているが、評価は特にしていない。 ・特に実施していないがレベル別手話研修を年 4 回実施。これ以外に新転任者向け手話研修を 4 月末までに 5 回実施している。 ・着任の教員に対する手話研修の最終回は手話テストを実施している（表現と読み取り）。 ・月 1 回、職員の手話研修、保護者への研修を行っていますが評価までは行っていません。 ・各教師の自主研修に任せている。 ・評価というよりは折々機会をとらえて研修を続けています。 ・ろう教員や手話の上手な教員による「手話講習会」を年に数回行っているが、特に評価を用いていない。 ・（評価ではないが）毎週 1 回「手話の勉強会」が開かれ、特に新任者が多く参加している。 ・特に評価はしていないが週 1 回手話の勉強会を持っている。 ・手話学習会を初級、中級と設けている（各 5 回）。 ・週 1 回の学習会を行っている。 ・手話学習会でろう者の方に協力をいただいて行ったことがある。 ・　手話力向上のために年間 6 回手話講座を 5:15～行っている。 ・○○教育委員会が行っている自己評価による手話力の評価を実施している。 ・各教師の習熟度に応じてグループ分けによる研修は実施していますが客観的評価については十分ではありません。 ・研究授業後の検討会において教師の手話表現について検討する。
手話検定	・任意であるが手話検定を受けている。 ・手話検定の本を使って手話の勉強している。ドリル練習を行い検定用の DVD を使っておおまかな評価を行う。 ・手話検定に沿った研修の実施。 ・希望者は手話能力検定を受検しているが、評価をしているわけではない。 ・手話検定か、県聴覚障害者協会主催の講座への参加をよびかけている。
その他	・自己評価ではあるが学部会のはじめ 5 分程度、手話の読み取りを行っている。出題者の手話（200 字程度の文）を代表 1 名が声を出して読み取る。その後、参加者全員で出題者の手話付きスピーチを聞きながら自分の読み取りについて評価する。 ・授業の指導自己評価の中で一部評価項目として挙げてあり全教師がチェックしています ・校内においても日本手話と日本語対応手話についての認済が深まらず、どちらをターゲットにして育てていくのかの方向性を定めにくい。 ・通常小学部では手話付きスピーチまたはスピーチでのかかわりが多い為、特に教師の手話力を評価

することはありません。ただ児童に少し複雑な話をしようとする時は日本手話が有効なので教師の手話力は向上させなくてはならないと思っています。

・ないため、必要性を強く感じています。手が動いていれば「手話をしている、取り入れている」と言っている人が多いのですが、実際見てみると読み取れないものが多く、指導にも影響が出ているのではと思われます。

平成 29 年度調査（29 年度は学部別）

幼稚部

・本自治体の教育委員会では「手話活用能力状況調査」を年に 1～2 度実施している。本調査書は各自が習得している手話の語彙数や子どもたちと、どの程度やりとりができるかということを尺度（チェックリスト）に、5 段階で自己評価することになっている。また、校内での手話研修会実施の際には、他者評価によりグルーピングをしたうえで研修を行うことがある。ただし、この場合は評価者（研修担当者）の主観によるものが多く、教員の手話力を把握するための客観的な指標は持ち合わせていない。（研修）

・毎日聴覚障がいのある教員と、学部全体で手話の研修を 5 分間行っている。学校全体の組織内に「手話研修委員会」をおき、そこを中心に研修内容を考え、月に 1 回程度手話研修会を実施している。（研修）

・教員は学校内外で様々な研修は受けているが、学校として評価は行っていない。（研修）

・職員の手話研修は行っているが、評価は特に実施していない。（研修）

・初任者（着任者）対象の手話研修を年間 15 回、手話力スキルアップをめざす手話研修を年間 7 回、研修支援部が計画実施している。（研修）

・研究研修部より全職員へ手話検定の薦めや手話通訳士の免許を取得するようにという話があった。しかし受験は各個人の判断に任され任意である。（手話検定）

・職員によっては、自主的に手話検定を受験している。（手話検定）"

・校内手話検定を実施。聴覚障害者協会や手話通訳士の協力を得、全国手話検定試験に準じた検定試験を毎年行い、評価をしている。（手話検定）

・個人的に手話通訳検定を受けたり、そのテキストで勉強したりする教師はいますが、全体的に評価をしていない。アンケートにより、4 段階程度の自己評価アンケートは県の調査で行っている。（手話検定）

・学校全体としては、手話力認定試験を受験するように案内はしている。（手話検定）

・職員手話研修や手話検定（任意）（手話検定）

・教育委員会から示されている、手話の語彙数、表現、コミュニケーションの方法についての評価がある。（その他）

・評価することで教員のモチベーションがアップする教員もいると思うが、その反対に聾学校に対して嫌悪感をもつ教員も増えると思うので慎重に行なった方が良い。（その他）

・評価はしていない。日々の教育活動のなかで、教え合ったり気付きを交換したりして、教員の手話力を確かなものにするよう努めている。（その他）

小学部	・手話研修プログラムを活用した総合評価を行った。（研修） ・初任者（新着任）対象の手話研修を年間 15 回、手話力のスキルアップを目指す手話研修を年間 7 回、研修支援部が計画実施している。（研修） ・学校行事（始・終業式や文化祭等）での実際の挨拶について手話通訳の研修を行う等、実践に活かせる内容となっている。（研修） ・専門性向上のために、本校独自の専門研修体系表を用いて、手話検定の級を参考にして自己評価を行っている。（研修） ・外部講師を呼び、定期的に研修会を行い、手話力の向上を目指している。（研修） ・手話学習会を学部で今年度は２度行った。（研修） ・手話検定の受検や、地元の通訳養成講座に通い、登録通訳を目指すなど個々で進めている。今年度から、自治体の手話言語条例が制定され、自治体の主催による手話研修が始まった（それまでは学校が担っていた）。それを機に、評価の方法も広がるのではと期待したい。（研修） ・新着任の教師対象に、年 10 回の手話研修と、修了時に手話テストをし、評価している。（研修） ・手話を学びたい教師対象に、本校の聴覚障害がある教師や手話通訳士の資格のある教師や、外部の聴覚障害の講師を招いて研修会を開いている。（研修） ・職員朝会に、全教師による手話研修（手話による一言）を行っている。（研修） ・何人かの教員は、独自に手話検定試験を受験し、級をとっている。（手話検定） ・手話検定を受けようと管理職が呼びかけ、数名ですが受けている。（手話検定） ・手話検定などの紹介をしている。（手話検定） ・手話検定や講座等（手話検定） ・手話検定の受検（任意）（手話検定） ・全国手話検定に向けての全員による研修、受検。（手話検定） ・今年度より、学校全体で、いろいろな検定に取り組むことになり、希望者が学校で手話検定を受けられるようになった。まだ、実施していないので、結果を受けた評価には結びついていないが、今後、客観的な評価がわかることで、教師の手話力向上に繋がると思われる。（手話検定） ・手話検定の実施（本年度より）（手話検定） ・校内手話検定を実施している。（手話検定） ・個人的に手話検定を受検している教員も多い。（手話検定） ・共通理解（基準などの）が必要と感じる。（その他） ・手話活用能力把握アンケートがあった。（その他） ・自己評価のシート記入（単語（語彙）数等、自己評価）（その他） ・聴覚障害特別支援学校教員の日本手話活用状況調査を行った。（その他） ・学校内の聴覚障害の先生に任せている。（その他） ・小学部では授業のチェックリストを利用し、手話表現について評価している。（その他）

中学部

・週に１回、手話勉強会を実施している。（研修）
・職員朝会での手話研修（１０分程度）（研修）
・聴覚障害の職員による職員対象の手話研修（６０分）、特に評価は行っていないが、手話力向上のため研修を重ねている。（研修）
・評価という観点では数値化、可視化していないが、聴覚障害者にとって手話は大切という意識から、校内研修に日本手話講習を行っている。（研修）
・毎朝打合せで２つの手話を、年間７回、手話学習会を行っている。ただ評価についてはまだできていない状態。（研修）
・新人と異動して来た教員に、手話学習の場を持っている。そこでの目標は手話検定３級なので、３級を持っていることが多い。（研修）
・評価は用いていないが、初級者用の手話研修「初手研」を年間 15 回、上級者用の手話研修「上手研」（文化祭や卒業式での実際の手話通訳を研修）を年間７回行っている。（研修）

・今年度より教師の手話力向上のため、市販の手話検定を行うことになっている。希望者が受験することとしている。（手話検定）
・教員もできるだけ手話検定を受けるように呼びかけている。また、学習会を開いたり、毎朝当番制で、ワンポイント手話の学習に取り組んでいる。（手話検定）
・教師の手話力向上の評価は行っていないが、個人で自己の手話力について評価し、自主的、主体的に校内研修や校外で実施されている講座やサークルへ参加し、手話力の向上に努めている。また、個人の手話力を知るために手話検定などを紹介している。（手話検定）
・手話検定が何級かということが評価になる。（手話検定）
・自発的に手話検定を受ける。（手話検定）
・手話検定試験を全職員が受験し手話力向上を図っている。（手話検定）
・校内手話検定を実施し、手話力向上に向けて取り組んでいる。聴覚障害者協会に協力してもらい、筆記試験と面接を行っている。（手話検定）
・手話検定を受ける。（希望者のみ）（手話検定）
・担当教科を教えるにあたって、最低限必要な手話 30 こを書き出し、教員で相互評価する表を作って取り組んでいる。（その他）
・教師ごとに手話力が異なり、修正しながら行っているが、身につけた手話力を使えば授業が成り立つとは思えない。わかる授業、伝えられる内容をきちんとすることで、その上で手話を活用した授業をすれば、内容のある授業や、生徒とのコミュニケーションができると思う。（その他）
・年２回教育委員会が実施している「手話研修プログラム」を活用した総合評価がある。（その他）
・手話活用能力把握アンケート（教育委員会）がある。（その他）
・教育委員会から出ている手話研修プログラムを活用した総合評価がある。（その他）

高等部

・月に１回、職員全体による、手話学習会の実施。（研修）

・職員朝会時における、手話ワンポイントレッスンの実施。（研修）

・新着任者には、年度初めに 12 回程度研修を行い、夏季休業中に手話力テストを実施している。（研修）

・校内研修を通して手話単語や文法の学習をしているが、他県のように「全国手話検定試験」の受験を組織的に行ったりすることはしていない。個人的に手話サークルに通ったり、手話奉仕員養成講座に通ったり、検定試験を受験する者はいると思われるが、手話力向上のために校内での組織的な手話力評価は行っていない。（研修）。

・定期的な手話学習会の開催。（研修）

・特別支援部が週１回、朝会で簡単な表現を教えている。また、新規採用教員や他校種からの異動者対象に、手話学習会を開いている。最初の１年めの手話の向上が大切だと思う。（研修）

・教師の手話学習会は、定期的に行っているが、評価は行っていない。（研修）

・積極的な手話検定の受験の推奨をしている。（手話検定）

・評価は行っていないが、今年度は、全国手話検定の希望者を募って、本校を会場に団体受験する予定。（手話検定）

・手話検定の受検（希望者のみ）（手話検定）

・手話検定等、全員で取り組んでいるが、授業における教師の手話表現については、研究等で深めている部分はあるが、課題と考えている。（手話検定）

・手話検定に積極的に参加。（手話検定）

・毎月手話学習会を行い、今年度から教員が手話検定を受けることになっている。（手話検定）

・校内手話検定（全員参加）（手話検定）

・全国手話検定を受験するように薦めている。その合格によって、評価というより、教師の手話力の目安としている。（手話検定）

・教師の手話力についての評価は行っていない。授業における生徒アンケートで、「授業はわかりますか？」「困っていることはありますか？」のアンケートを取り、教師の手話についての意見を聞いている。（その他）

資料３

平成 29 年度調査票１並びに調査票２

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査　－幼稚部　担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**幼稚部所属のうち２名の先生（本務職員の方）**に記入のご協力をお願いします。ここでは、幼稚部での話し合い活動の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。

回答結果については、回答者個人や学校が特定できないように統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

1　記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（1）記入者について該当するものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）小学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）幼稚部に４年勤務した場合は、
①教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　幼稚部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
③	幼稚部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任　（　）副担任　（　）学年所属　（　）学部所属　（　）その他

（2）あなたが、いつも授業をされている幼児の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年に、それ以外は言語・コミュニケーション活動で担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年〔年少〕　（　）第２学年〔年中〕　（　）第３学年〔年長〕（　）重複障害学級
※ 重複障害学級の場合、在籍幼児の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年

（3）あなたの受け持ち学級の幼児数をお教えください。学級担任以外の先生は、話し合い活動で一番人数が多い学習グループの幼児数をお教えください。　（　　）名

2　話し合い活動で活用している絵本や教材（話し合いの題材として活用するもの、語句の意味や扱う内容を説明するもの等）及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1）　あなたが、いつも使用している※コミュニケーション手段について、該当するものに〇をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話　（　）手話付きスピーチ　（　）日本手話　（　）筆談　（　）キュードスピーチ　（　）指文字　（　）その他

※　コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等　→　下表の備考欄にお書きください

（2）　あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、該当するものに〇をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、コミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、コミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（３）　下の表に挙げた教材の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

活動		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
話し合い活動（朝の会、絵日記を使った話し合い等）	1	絵本（行事、物語、説明等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	2	紙芝居（行事、物語、説明等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	3	絵日記（スケッチブックの記録等含む）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	4	写真（活動場面、物、人物、場所等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	5	動画（デジタルビデオカメラで撮影したもの）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	6	絵カード（物、動作等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	7	文字カード（単語、文）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	8	実物（食べ物、日用品等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	9	新聞、雑誌				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	10	広告、ちらし、ポスター				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	11	図鑑（生き物、生活、乗り物等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	12	音楽ＣＤ（童謡、アニメソング等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	13	ＤＶＤ（テレビ番組、童話、アニメ等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	14	手話・字幕付きＤＶＤ（テレビ番組、童話等） ※　手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	15	ＰＣソフト（生き物、物語、乗り物、ことば遊び等） タブレットPCにおけるアプリケーション（ソフトウェア）は除く。				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	16	ことば絵じてん				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	17	カレンダー				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	18	インターネット上のｗｅｂ情報				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	19	タブレットPCにおけるアプリケーション（ソフトウェア）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	

（4）（3）の19で1または2と回答された方は、アプリケーション（ソフトウェア）の品名、使用場面や活用方法をお教えください。

アプリケーション（ソフトウェア）品名	使用場面や活用方法（教科名　どのような活動での使用か）	活用の頻度	活用の状況
		1　よく使う 2　時々使う	1　そのまま活用している 2　手を加えて活用している 3　自作したものを活用している

（5）上記に書かれたアプリケーション（ソフトウェア）のダウンロードについて、お尋ねします。該当するものに〇をつけてください。

（　　）1学校全体や学部として協議の上ダウンロードしている。

（　　）2個人的にダウンロードしている。

（　　）3 その他　具体的にご記入ください。

（　　）

※　その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1　よく使う 2　時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 〇〇社図鑑「３６５日のくらし」	季節の行事について話し合うときに使う。出来事や動作が分かりやすい絵を抜き出して、絵カードやペープサートにて提示する。	1　・　②	1　・　②　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3

※ この他、「このような教材があったら良い」と思われるものがありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法
例 デジタル絵本（通常の絵本のように挿絵と文字があり、文字をクリックすると読み上げる機能があると良い。）	絵本を見ながらの話し合いで使う。絵本を画面に映すことで、教師も手話をしながら会話しやすくなる。

３　話し合い活動で活用する教材や教具・機器（発表や表示するために活用するもの）について、お尋ねします。下の表に挙げた物の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

活動		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
話し合い活動（朝の会、絵日記を使った話し合い等）	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	2	発表用板（各幼児が持つホワイトボードや小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	模造紙、画用紙				1・2・3	1・2・3・4	
	4	ひらがな表（カタカナ、数字も含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	指文字表				1・2・3	1・2・3・4	
	6	手話表（簡単な手話表現の絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	電子黒板				1・2・3	1・2・3・4	
	8	パソコン、プロジェクター				1・2・3	1・2・3・4	
	9	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	
	10	ＤＶＤプレーヤー				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				1・2・3	1・2・3・4	
	12	実物投影機				1・2・3	1・2・3・4	
	13	デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	14	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				1・2・3	1・2・3・4	
	15	個人用ＦＭ等システム				1・2・3	1・2・3・4	
	16	音声記号図、調音部位図				1・2・3	1・2・3・4	
	17	母音図（口形を表した図や絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	18	キューサイン表（発音サインも含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	19	タブレット PC				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1　よく使う 2　時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 おえかきボード	幼児が伝えたいことを絵や文字で表現するときに使う。話し言葉だけで表現するのが難しそうな場合、ボードを渡し、表現を促す。汚れず、いろいろな場所で使える。	① ・ 2	① ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

４　屋外での活動「自然観察（散歩等）」をする場合に活用する教材や機器（道具、内容を説明するためのもの）について、お尋ねします。

次の表に挙げた教材の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

活動		教材	教材の有無			活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 いつも、持っていく 2 時々、持っていく 3 あるが、持っていかない 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
自然観察（散歩等）	1	スケッチブック				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	2	メモ帳				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	3	虫かご（代わりとなるペットボトルやビニール袋等も含む）				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	4	虫取り網				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	5	魚取り網、たも網				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	6	バケツ（代わりとなるペットボトルやビニール袋等も含む）				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	7	ことば絵じてん				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	8	図鑑（生き物、天気等）				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	9	絵本（生き物、天気等）				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	10	紙芝居（生き物、天気等）				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	11	写真（活動場面、物、人物、場所等）				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	12	絵日記（スケッチブックの記録等含む）				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	13	デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	14	タブレットPC				1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	

※　その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したもの活用している
例 ポラロイドカメラ	観察したもの（植物、生き物）や活動場面をその場で撮影し、その場あるいは散歩直後の話し合いで活用する。写真を絵カードのようにして使う。黒板に掲示し、事後の話し合いで、体験したことの話題を思い出す手がかりとする。また、伝え合うための手がかりとする。	① ・ 2	① ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

8 / 8（幼）

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－小学部　国語担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**小学部所属のうち２名の先生方（本務職員の方）**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。回答結果については、回答者個人や学校が特定できないように統計的に処理します。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

1　記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（1）記入者について該当するものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）中学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）小学部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　小学部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
③	小学部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（2）　あなたが、いつも授業をされている児童の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年	（　）第２学年	（　）第３学年	（　）第４学年
（　）第５学年	（　）第６学年	（　）重複障害学級	

※ 重複障害学級の場合、在籍児童の学年をご記入ください。

例）　第１学年、第３学年

（2） あなたの受け持ち学級の児童数をお教えください。学級担任の先生は学級の児童数を、学級担任以外の先生は、国語の授業で一番多い人数の学習グループの児童数をお教えください。（　　）名

（3） 小学部の国語の教育課程は、どのようになっていますか。該当するものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程　（　）自立活動主の教育課程

【国　語】

これから、国語の授業や教材等について、お尋ねします。

あなたが受け持っている国語の教育課程は、どのようになっていますか。該当するものに○をつけてください。（学級担任以外の先生は、国語の授業で一番多い人数の学習グループの場合についてお答えください。）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程　（　）自立活動主の教育課程

2　国語の授業で活用している教科書や副読本、語句の意味を確認するための教材、指導内容を説明するための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1）あなたが国語の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、該当するものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話　（　）手話付きスピーチ　（　）日本手話　（　）筆談　（　）キュードスピーチ　（　）指文字　（　）その他

※　コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等　→　下表の備考欄にお書きください

（2）あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、該当するものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（３）　下の表に挙げた教材の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教　材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備　考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1　よく使う 2　時々使う 3　使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
国語	1	検定教科書				１・２・３	１・２・３・４	
	2	聾学校用教科書				１・２・３	１・２・３・４	
	3	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆）				１・２・３	１・２・３・４	
	4	附則の９条本（旧１０７条本）				１・２・３	１・２・３・４	
	5	電子教科書（検定教科書対応）				１・２・３	１・２・３・４	
	6	市販のワークブック、漢字ドリル				１・２・３	１・２・３・４	
	7	日本語指導用教材（教科書、問題集）				１・２・３	１・２・３・４	
	8	国語辞典、漢和辞典（紙媒体）				１・２・３	１・２・３・４	
	9	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）				１・２・３	１・２・３・４	
	10	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				１・２・３	１・２・３・４	
	11	ことば絵じてん				１・２・３	１・２・３・４	
	12	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				１・２・３	１・２・３・４	
	13	絵本（行事、物語、説明等）				１・２・３	１・２・３・４	
	14	紙芝居（行事、物語、説明等）				１・２・３	１・２・３・４	
	15	写真（人物、場所、活動場面等）				１・２・３	１・２・３・４	
	16	動画（ビデオカメラで撮影したもの）				１・２・３	１・２・３・４	
	17	カレンダー				１・２・３	１・２・３・４	
	18	日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）				１・２・３	１・２・３・４	
	19	新聞				１・２・３	１・２・３・４	
	20	広告、チラシ、ポスター				１・２・３	１・２・３・４	
	21	雑誌（幼児・児童向け、その他）				１・２・３	１・２・３・４	
	22	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				１・２・３	１・２・３・４	
	23	手話・字幕付きＤＶＤ ※　手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				１・２・３	１・２・３・４	
	24	インターネット上の Web 情報				１・２・３	１・２・３・４	
	25	タブレット PC におけるアプリケーション（ソフトウェア）				１・２・３	１・２・３・４	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 作文集、読書感想文集	作文指導作文や読書感想文の「構成」「書き出しの工夫」等、モデルになるような作品を取り上げ、良さをみつけたり、真似して書いたりする。	① ・ 2	1 ・ ② ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

3 国語の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無 学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
国語	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	2	発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	3	漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	4	指文字表・指文字カード				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	5	手話表（簡単な手話表現の絵）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	6	電子黒板				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	7	ＯＨＰ				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	8	パソコン、プロジェクター （タブレットPCは除く）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	9	地上デジタル対応テレビ				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	

	10	ＤＶＤプレーヤー				１・２・３	１・２・３・４	
	11	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				１・２・３	１・２・３・４	
	12	実物投影機				１・２・３	１・２・３・４	
	13	デジタルカメラ				１・２・３	１・２・３・４	
	14	デジタルビデオカメラ				１・２・３	１・２・３・４	
	15	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				１・２・３	１・２・３・４	
	16	個人用ＦＭ等システム				１・２・３	１・２・３・４	
	17	音声記号図、調音部位図				１・２・３	１・２・３・４	
	18	母音図（口形を表した図や絵）				１・２・３	１・２・３・４	
	19	キューサイン表（発音サインも含む）				１・２・３	１・２・３・４	
	20	タブレットＰＣ				１・２・３	１・２・３・４	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 模造紙（単元の文章を手書きしたもの）	重要な文、語句に線を引く場面で使う。 黒板脇に掲示しておき、教師が文や語句を示したり、書き込んだりする。児童の発表の際に指さして発表させる。学習の結果が残るので、前時の振り返りやまとめにも使う。	①　・　2	①　・　2　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3

４　国語の授業の学習評価で活用している教材（単元別テスト、漢字や言語事項のテスト等）について、お尋ねします。

次の表に挙げた教材の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

教科等	教材		活用の頻度 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
国語	1	市販のテスト（単元別、漢字、言語事項）	１　・　２　・　３

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
例 自作テスト	単元のまとめのテストで使う。教科書で扱う内容を精選しているため、指導内容に合わせて設問を作成している。	１　・　②　・　３
		１　・　２　・　３
		１　・　２　・　３

５　国語の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法
例 児童にも分かりやすい動詞や形容詞の活用表	文法テストや読み書きの際に活用する。授業で取り扱った動詞や形容詞について、活用ができるかどうかを児童が確かめられるようにする。

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－小学部　算数担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**小学部所属のうち２名の先生方（本務職員の方）**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。回答結果については、回答者個人や学校が特定できないように統計的に処理します。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

1　記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（1）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）中学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）小学部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　小学部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
③	小学部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（2）　あなたが、いつも授業をされている児童の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年　（　）第２学年　（　）第３学年　（　）第４学年 （　）第５学年　（　）第６学年　（　）重複障害学級
※ 重複障害学級の場合、在籍児童の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年

（3） あなたの受け持ち学級の児童数をお教えください。学級担任の先生は学級の児童数を、学級担任以外の先生は、算数の授業で一番多い人数の学習グループの児童数をお教えください。（　　）名

（4） 小学部の算数の教育課程は、どのようになっていますか。該当するものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程　（　）自立活動主の教育課程

【算　数】

これから、算数の授業や教材等について、お尋ねします。

あなたが受け持っている算数の教育課程は、どのようになっていますか。該当するものに○をつけてください。（学級担任以外の先生は、算数の授業で一番多い人数の学習グループの場合についてお答えください。）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程

2　算数の授業で活用している教科書や副読本、語句の意味を確認するための教材、指導内容を説明するための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1） あなたが算数の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、該当するものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話　（　）手話付きスピーチ　（　）日本手話　（　）筆談　（　）キュードスピーチ　（　）指文字　（　）その他

※　コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等　→　下表の備考欄にお書きください

（2） あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（３）　下の表に挙げた教材の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教　材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
算数	1	検定教科書				1・2・3	1・2・3・4	
	2	文部科学省著作教科書（知的障害者用さんすう☆～☆☆☆）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	附則の９条本（旧１０７条本）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	電子教科書（検定教科書対応）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	市販のワークブック、計算ドリル等				1・2・3	1・2・3・4	
	6	国語辞典・漢和辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	ことば絵じてん				1・2・3	1・2・3・4	
	10	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				1・2・3	1・2・3・4	
	11	絵本（生活、行事、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	12	紙芝居（生活、行事、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	13	写真（人物、場所、活動場面等）				1・2・3	1・2・3・4	
	14	動画（ビデオカメラで撮影したもの）				1・2・3	1・2・3・4	
	15	カレンダー				1・2・3	1・2・3・4	
	16	日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	17	新聞				1・2・3	1・2・3・4	
	18	広告、チラシ、ポスター				1・2・3	1・2・3・4	
	19	雑誌（幼児・児童向け、その他）				1・2・3	1・2・3・4	
	20	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				1・2・3	1・2・3・4	
	21	手話・字幕付きＤＶＤ ※　手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				1・2・3	1・2・3・4	
	22	インターネット上の Web 情報				1・2・3	1・2・3・4	
	23	タブレット PC におけるアプリケーション（ソフトウェア）				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	活用場面	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 自作の絵カード	問題文の提示場面で使う。学校や日常生活でなじみのある算数的事象を絵カードにしておく。問題文を提示する際、情景図として添え、イメージしやすくする。	① ・ 2	1 ・ 2 ・ ③
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

3 算数の授業で活用する機器（発表や表示等で活用するもの）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無 学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
算数	1	黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	2	発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	3	模造紙、画用紙				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	4	かけ算九九表				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	5	かずの表（幼児・低学年用）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	6	指文字表（数字の表現等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	7	手話表（簡単な手話表現の絵）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	8	数字カード（絵カードも含む）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	9	模型・おもちゃ（時計、お金等）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	10	電子黒板				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	11	ＯＨＰ				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	12	パソコン（タブレットPCを除く）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	

13	プロジェクター				1・2・3	1・2・3・4	
14	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	
15	ＤＶＤプレーヤー				1・2・3	1・2・3・4	
16	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				1・2・3	1・2・3・4	
17	実物投影機				1・2・3	1・2・3・4	
18	デジタルカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
19	デジタルビデオカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
20	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				1・2・3	1・2・3・4	
21	個人用ＦＭ等システム				1・2・3	1・2・3・4	
22	電卓（電子卓上計算機）				1・2・3	1・2・3・4	
23	音声記号図、調音部位図				1・2・3	1・2・3・4	
24	母音図（口形を表した図や絵）				1・2・3	1・2・3・4	
25	キューサイン表（発音サインも含む）				1・2・3	1・2・3・4	
26	タブレットPC				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 数のブロック（自作）	計算の学習で、児童が具体物（ブロック）を使って発表する際に使う。教師が説明する際にも使う。	1 ・ ②	1 ・ 2 ・ ③
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

４　算数の授業の学習評価で活用している教材（単元別テスト、計算や文章題のテスト等）について
お尋ねします。

次の表に挙げた教材の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

教科等	教材		活用の状況 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
算数	1	市販のテスト（単元別、計算、文章題等）	１　・　２　・　３

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
例 自作テスト	単元のまとめのテストで使う。教科書で扱う内容を精選しているため、指導内容に合わせて設問を作成している。	１　・　２　・　３
		１　・　２　・　３
		１　・　２　・　３

書ききれない場合は、別紙にお書きください。

５　算数の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法
例 図形に関するＰＣソフト	角柱や円柱などの立方体を学習する際、回転させていろいろな角度から見たり、見取り図や展開図になる過程をアニメーションで見たりすることで、図形へのイメージが深まると思われる。

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp
定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp
山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp
新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－小学部　外国語活動担当者用－

学　校　名	

このアンケート調査は、**小学部所属のうち２名の先生方（本務職員の方）**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。回答結果については、回答者個人や学校が特定できないように統計的に処理します。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

1　記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（1）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）中学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）小学部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　小学部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
	小学部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（2）　先生が、いつも授業をされている児童の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年　（　）第２学年　（　）第３学年　（　）第４学年 （　）第５学年　（　）第６学年　（　）重複障害学級
※ 重複障害学級の場合、在籍児童の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年

（3） あなたの受け持ち学級の児童数をお教えください。学級担任の先生は学級の児童数を、学級担任以外の先生は、外国語活動の授業で一番多い人数の学習グループの児童数をお教えください。

（　　）名

【外国語活動】

1 外国語活動で活用している副読本、指導内容を説明するための教材、情報保障のための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1） あなたが外国語活動の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、該当するものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話 （　）手話付きスピーチ （　）日本手話 （　）筆談 （　）キュードスピーチ （　）指文字 （　）その他

※ コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等 → 下表の備考欄にお書きください

（2） 先生が、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（3） 下の表に挙げた教材の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
外国語活動	1	英語ノート１、２				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	2	教授用掛図（発音図表、英語版世界地図等）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	3	市販の英語テキスト、ワークブック				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	4	カード教材（ピクチャーカード、フラッシュカード等）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	5	語学学習用ＣＤ				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	6	英和辞典、和英辞典（紙媒体）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	7	国語辞典（紙媒体）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	8	電子辞書（英和辞典、和英辞典）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	10	ことば絵じてん				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	12	絵本（行事、物語、説明等）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	13	紙芝居（行事、物語、説明等）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	14	写真（人物、場所、活動場面等）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	15	動画（活動場面、人物、場所等）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	16	カレンダー				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	17	日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	18	新聞				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	19	広告、チラシ、ポスター				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	20	雑誌（幼児・児童向け、その他）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	21	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	22	手話・字幕付きＤＶＤ ※ 手話のみ、手話と字幕、字幕のみのDVDやビデオを含む				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	23	インターネット上の Web 情報				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	
	24	タブレット PC				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 自作ＤＶＤ（歌、ゲーム） ＡＬＴに協力してもらい撮影。脇に手話をする教員、絵カード等を持つ教員もいる動画。	毎時間の導入で活用する。月毎にテーマを変え、導入時にＤＶＤを見ながら歌ったり、ゲームをしたりする。	①　・　2	1　・　2　・　③
		1　・　2	1　・　2　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3

２　外国語活動の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、おたずねします。
下の表に挙げた物の有無と活用について、該当するものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無 学校にある	教材の有無 学校にないが個人のものがある	教材の有無 ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
外国語活動	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	2	発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	指文字表（五十音、アルファベット）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	手話表（簡単な手話表現の絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	電子黒板				1・2・3	1・2・3・4	
	6	ＯＨＰ				1・2・3	1・2・3・4	
	7	パソコン（タブレットPCは除く）				1・2・3	1・2・3・4	

	8	プロジェクター				1・2・3	1・2・3・4	
	9	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	
	10	ＤＶＤプレーヤー				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				1・2・3	1・2・3・4	
	12	実物投影機				1・2・3	1・2・3・4	
	13	デジタルカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	14	デジタルビデオカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	15	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				1・2・3	1・2・3・4	
	16	放送機器				1・2・3	1・2・3・4	
	17	個人用ＦＭ等システム				1・2・3	1・2・3・4	
	18	音声記号図（日本語、英語）、調音部位図				1・2・3	1・2・3・4	
	19	母音図（口形を表した図や絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	20	キューサイン表（発音サインも含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	21	タブレットPC				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 文型カード（英文、発音はカタカナ、意味は日本語表記）	学習の開始、終了の挨拶の場面で使う。毎回使う挨拶ややりとりの言い回しのパターンですでに学習したものは、文型カードにして掲示しておく。	①　・　2	1　・　②　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3

３　外国語活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法
例 外国の暮らしを撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	外国の暮らしや文化を知る場面で使う。ＢＧＭが無い又は調整できると良い。できれば、１場面が短く、繰り返し何度も見られるようにすると、話し合いがしやすい。

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－小学部　自立活動担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**小学部所属のうち２名の先生方（本務職員の方のみ）**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。回答結果については、回答者個人や学校が特定できないように統計的に処理します。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

1　記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（1）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）中学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）小学部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　小学部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
	小学部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（1）あなたが、いつも授業をされている児童の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年　（　）第２学年　（　）第３学年　（　）第４学年 （　）第５学年　（　）第６学年　（　）重複障害学級
※ 重複障害学級の場合、在籍児童の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年

（2）あなたの受け持ち学級の児童数をお教えください。学級担任の先生は学級の児童数を、学級担任以外の先生は、自立活動の授業で一番多い人数の学習グループの児童数をお教えください。

（　　）名

【自立活動】

1　自立活動の授業で活用している副読本、語句の意味を確認するための教材、指導内容を説明するための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1）　あなたが自立活動の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話　（　）手話付きスピーチ　（　）日本手語　（　）筆談　（　）キュードスピーチ　（　）指文字　（　）その他

※　コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等　→　下表の備考欄にお書きください

（2）　あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（3） 下の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
自立活動	1	聾学校用教科書				1・2・3	1・2・3・4	
	2	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	附則の９条本（旧１０７条本）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	日本語指導用教材（教科書、問題集）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	市販のワークブック（言語事項に関するもの）				1・2・3	1・2・3・4	
	6	国語辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	漢和辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	10	ことわざ辞典（外来語辞典、ことば使い分け辞典等）				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ことば絵じてん				1・2・3	1・2・3・4	
	12	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				1・2・3	1・2・3・4	
	13	絵本（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	14	紙芝居（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	15	なぞなぞ（言葉遊び、言葉に関するゲーム本等）				1・2・3	1・2・3・4	
	16	カルタ、百人一首				1・2・3	1・2・3・4	
	17	絵カード（ことば絵カード、文絵カード）				1・2・3	1・2・3・4	
	18	写真（人物、場所、活動場面等）				1・2・3	1・2・3・4	
	19	カレンダー				1・2・3	1・2・3・4	
	20	日記・絵日記 （スケッチブックの記録等を含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	21	新聞				1・2・3	1・2・3・4	
	22	広告、チラシ、ポスター				1・2・3	1・2・3・4	
	23	雑誌（幼児・児童向け、その他）				1・2・3	1・2・3・4	
	24	音素材用PCソフト、CD				1・2・3	1・2・3・4	
	25	耳の構造図（掛図、模型等）				1・2・3	1・2・3・4	
	26	補聴器、イヤモールド、チューブ				1・2・3	1・2・3・4	

	27	補聴器点検用具				1・2・3	1・2・3・4	
	28	発音・発語指導用具				1・2・3	1・2・3・4	
	29	楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）				1・2・3	1・2・3・4	
	30	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				1・2・3	1・2・3・4	
	31	手話・字幕付きＤＶＤ ※ 手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				1・2・3	1・2・3・4	
	32	デジタルカメラ（撮影した写真や動画）				1・2・3	1・2・3・4	
	33	デジタルビデオカメラ（撮影した動画）				1・2・3	1・2・3・4	
	34	インターネット上のWeb情報				1・2・3	1・2・3・4	
	35	タブレットPCにおけるアプリケーション（ソフトウェア）				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 ４コマ漫画本	言語指導（文脈の把握、場に合った表現など）で使う。吹き出しの一部台詞を消した４コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。	1 ・ ②	1 ・ ② ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

２　自立活動の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
自立活動	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	2	発表板（各児童が持つホワイトボードや小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	漢字表（カタカナ、ローマ字も含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	指文字表				1・2・3	1・2・3・4	
	5	手話表（簡単な手話表現の絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	6	電子黒板				1・2・3	1・2・3・4	
	7	ＯＨＰ				1・2・3	1・2・3・4	
	8	パソコン（タブレットPCは除く）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	プロジェクター				1・2・3	1・2・3・4	
	10	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ＤＶＤプレーヤー				1・2・3	1・2・3・4	
	12	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				1・2・3	1・2・3・4	
	13	実物投影機				1・2・3	1・2・3・4	
	14	デジタルカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	15	デジタルビデオカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	16	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				1・2・3	1・2・3・4	
	17	放送機器				1・2・3	1・2・3・4	
	18	個人用ＦＭ等システム				1・2・3	1・2・3・4	
	19	ひらがなカード（文字、単語）				1・2・3	1・2・3・4	
	20	音声記号図、調音部位図				1・2・3	1・2・3・4	
	21	母音図（口形を表した図や絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	22	キューサイン表（発音サインも含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	23	カードリーダー				1・2・3	1・2・3・4	
	24	タブレットPC				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

3 自立活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	活用場面	活用方法

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

7/8（小－自）

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－中学部　国語担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**中学部国語担当の先生方（本務職員の方）２名**に記入のご協力をお願いします。
ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。
回答結果については、回答者個人や学校が特定できないよう統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

1 記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（1）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）小学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）中学部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　中学部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
③	中学部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（2）　あなたが、いつも授業をされている生徒の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年　（　）第２学年　（　）第３学年　（　）重複障害学級	
※ 重複障害学級の場合、在籍生徒の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年	

。

（3） あなたが、国語の授業をされている一番多い人数の学習グループの生徒数をお教えください。

（　　）名

（4） 中学部の国語の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程　（　）自立活動主の教育課程

これから、国語の授業や教材等について、お尋ねします。

先生が受け持っている国語の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（国語の授業で一番多い人数の学習グループの場合についてお答えください。）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程

2 国語の授業で活用している教科書や副読本、語句の意味を確認するための教材、指導内容を説明するための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1） あなたが国語の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話（　）手話付きスピーチ（　）日本手話（　）筆談（　）キュードスピーチ（　）指文字（　）その他

※ コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等 → 下表の備考欄にお書きください

（2）あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（3） 下の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
国語	1	検定教科書				1・2・3	1・2・3・4	
	2	特別支援学校用教科書（中学部国語、小学部用）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆国語☆☆☆☆）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	附則の９条本（旧１０７条本）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	電子教科書（検定教科書対応）				1・2・3	1・2・3・4	
	6	市販のワークブック、漢字ドリル				1・2・3	1・2・3・4	
	7	日本語指導用教材（教科書、問題集）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	国語辞典、漢和辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）				1・2・3	1・2・3・4	
	10	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ことば絵じてん				1・2・3	1・2・3・4	
	12	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				1・2・3	1・2・3・4	
	13	絵本（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	14	紙芝居（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	15	写真（人物、場所、活動場面等）				1・2・3	1・2・3・4	
	16	動画（ビデオカメラで撮影したもの）				1・2・3	1・2・3・4	
	17	カレンダー				1・2・3	1・2・3・4	
	18	掛け図				1・2・3	1・2・3・4	
	19	新聞				1・2・3	1・2・3・4	
	20	広告、チラシ、ポスター				1・2・3	1・2・3・4	
	21	雑誌				1・2・3	1・2・3・4	
	22	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				1・2・3	1・2・3・4	
	23	手話・字幕付きＤＶＤ ※ 手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				1・2・3	1・2・3・4	
	24	インターネット上の Web 情報				1・2・3	1・2・3・4	
	25	タブレット PC におけるアプリケーション（ソフトウェア）				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 作文集、読書感想文集	作文や読書感想文の「構成」「書き出しの工夫」等、モデルになるような作品を取り上げ、良さをみつけたり、真似して書いたりする。	① ・ 2	1 ・ ② ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

3 国語の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無 学校にある	教材の有無 個人のものがある	教材の有無 学校にないが ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
国語	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	2	発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	3	漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	4	指文字表・指文字カード				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	5	手話表（簡単な手話表現の絵）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	6	電子黒板				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	7	ＯＨＰ				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	8	パソコン、プロジェクター（タブレットPCは除く）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	9	地上デジタル対応テレビ				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	10	ＤＶＤプレーヤー				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	

	11	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				１・２・３	１・２・３・４	
	12	実物投影機				１・２・３	１・２・３・４	
	13	デジタルカメラ				１・２・３	１・２・３・４	
	14	デジタルビデオカメラ				１・２・３	１・２・３・４	
	15	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				１・２・３	１・２・３・４	
	16	個人用ＦＭ等システム				１・２・３	１・２・３・４	
	17	音声記号図、調音部位図				１・２・３	１・２・３・４	
	18	母音図（口形を表した図や絵）				１・２・３	１・２・３・４	
	19	キューサイン表（発音サインも含む）				１・２・３	１・２・３・４	
	20	タブレットPC				１・２・３	１・２・３・４	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 画用紙	あらかじめ或いはその場で語句や図を書き、黒板に掲示したり、フラッシュカードとして使ったりする。	①・２	①・２・３
		１・２	１・２・３
		１・２	１・２・３

４　国語の授業の学習評価で活用している教材（単元別テスト、漢字や言語事項のテスト等）について、お尋ねします。

次の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等	教材		活用の頻度 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
国語	1	市販のテスト（単元別、漢字、言語事項）	１　・　２　・　３

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
例 ビデオ映像	生徒の発表場面を撮影し、映像を見ながら生徒が自己評価できるようにしている。生徒が自分の表現をより客観的に評価できるとともに、教師自身の評価としても活用している。	１　・　②　・　３
		１　・　２　・　３
		１　・　２　・　３

５　国語の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法
例 問題集の電子データ版	授業の演習で使う。生徒の実態に合わせ、問題を編集して、一人一人に合った学習を進める。

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－中学部　数学担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**中学部数学担当の先生方（本務職員の方）２名**に記入のご協力をお願いします。
ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。
回答結果については、回答者個人や学校が特定できないよう統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

１記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（１）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）小学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）中学部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　中学部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
③	中学部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担　当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（２）　先生が、いつも授業をされている生徒の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年	（　）第２学年	（　）第３学年	（　）重複障害学級
※ 重複障害学級の場合、在籍生徒の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年			

（３）　先生が、数学の授業をされている一番多い人数の学習グループの生徒数をお教えください。

（　　）名

（4）中学部の数学の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程　（　）自立活動主の教育課程

これから、数学の授業や教材等について、お尋ねします。

先生が受け持っている数学の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（数学の授業で一番多い人数の学習グループの場合についてお答えください。）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程

2　数学の授業で活用している教科書や副読本、語句の意味を確認するための教材、指導内容を説明するための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1）　先生が数学の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話　（　）手話付きスピーチ　（　）日本手話　（　）筆談　（　）キュードスピーチ　（　）指文字　（　）その他

※　コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等　→　下表の備考欄にお書きください

（2）先生が、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（3） 下の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
数学	1	検定教科書				1・2・3	1・2・3・4	
	2	文部科学省著作教科書（知的障害者用 さんすう☆～☆☆☆数学☆☆☆☆）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	附則の９条本（旧１０７条本）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	電子教科書（検定教科書対応）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	市販のワークブック、計算ドリル等				1・2・3	1・2・3・4	
	6	国語辞典・漢和辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	ことば絵じてん				1・2・3	1・2・3・4	
	10	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				1・2・3	1・2・3・4	
	11	絵本（生活、行事、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	12	紙芝居（生活、行事、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	13	写真（人物、場所、活動場面等）				1・2・3	1・2・3・4	
	14	動画（ビデオカメラで撮影したもの）				1・2・3	1・2・3・4	
	15	カレンダー				1・2・3	1・2・3・4	
	16	絵日記（スケッチブックの記録等を含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	17	新聞				1・2・3	1・2・3・4	
	18	広告、チラシ、ポスター				1・2・3	1・2・3・4	
	19	雑誌（幼児・児童向け、その他）				1・2・3	1・2・3・4	
	20	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				1・2・3	1・2・3・4	
	21	手話・字幕付きＤＶＤ ※ 手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				1・2・3	1・2・3・4	
	22	インターネット上のWeb情報				1・2・3	1・2・3・4	
	23	タブレットPCにおけるアプリケーション（ソフトウェア）				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 自作の情景図、数コマの漫画	問題文の提示で使う。日常生活や社会生活でなじみのある事象のうち、数学的活動として扱いたいものを1場面の絵や数コマの絵にしておき、問題文と併せて提示することで、生徒の理解を促す。	① ・ 2	1 ・ 2 ・ ③
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

3 数学の授業で活用する機器（発表や表示等で活用するものや教具）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無 学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
数学	1	黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	2	発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	3	模造紙、画用紙				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	4	かけ算九九表				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	5	かずの表（幼児・低学年用）				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	6	指文字表（数字の表現等）				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	7	手話表（簡単な手話表現の絵）				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	8	数字カード（絵カードも含む）				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	9	模型・おもちゃ（時計、お金等）				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	10	電子黒板				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	11	ＯＨＰ				1 ・ 2 ・ 3	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	

	12	パソコン（タブレットPCは除く）				1・2・3	1・2・3・4	
	13	プロジェクター				1・2・3	1・2・3・4	
	14	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	
	15	ＤＶＤプレーヤー				1・2・3	1・2・3・4	
	16	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				1・2・3	1・2・3・4	
	17	実物投影機				1・2・3	1・2・3・4	
	18	デジタルカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	19	デジタルビデオカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	20	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				1・2・3	1・2・3・4	
	21	個人用ＦＭ等システム				1・2・3	1・2・3・4	
	22	電卓（電子卓上計算機）				1・2・3	1・2・3・4	
	23	音声記号図、調音部位図				1・2・3	1・2・3・4	
	24	母音図（口形を表した図や絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	25	キューサイン表（発音サインも含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	26	タブレットPC				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 自作の関数ボックス	関数の指導で、１対１対応を理解させるため、導入時に活用する。	1 ・ ②	1 ・ 2 ・ ③
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

４　数学の授業の学習評価で活用している教材（単元別テスト、計算テスト等）について、お尋ねします。

次の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等	教材		活用の状況 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
数学	1	市販のテスト（単元別、計算、文章題等）	1　・　2　・　3

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
例 自作テスト	単元のまとめのテストで使う。教科書で扱う内容を精選しているため、指導内容に合わせて設問を作成している。	①　・　2　・　3
		1　・　2　・　3
		1　・　2　・　3

５　数学の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法
例 学習意欲を調査するもの	生徒の実態を把握するため。教材や教具が、生徒の実態に適しているのか、効果はあるのかなどを把握できると良い。

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

8/8（中・数）

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－中学部　英語担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**中学部英語担当の先生方（本務職員の方）２名**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、聴覚障害特別支援学校（聾学校）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。

回答結果については、回答者個人や学校が特定できないよう統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

１記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（１）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）小学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）中学部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　中学部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
③	中学部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（２）　あなたが、いつも授業をされている生徒の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年	（　）第２学年	（　）第３学年	（　）重複障害学級

※ 重複障害学級の場合、在籍生徒の学年をご記入ください。

例）　第１学年、第３学年

（3）あなたが、英語の授業をされている一番多い人数の学習グループの生徒数をお教えください。

（　　）名

（4）中学部の英語の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程　（　）自立活動主の教育課程

これから、英語の授業や教材等について、お尋ねします。

先生が受け持っている英語の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（英語の授業で一番多い人数の学習グループの場合についてお答えください。）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程

2　英語で活用している教科書、副読本、指導内容を説明するための教材、情報保障のための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1）　先生が英語の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話（　）手話付きスピーチ（　）日本手話（　）筆談（　）キュードスピーチ（　）指文字（　）その他

※　コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等　→　下表の備考欄にお書きください

（2）あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（2） 下の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
英語	1	検定教科書				1・2・3	1・2・3・4	
	2	教授用掛図（発音図表、英語版世界地図等）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	市販の英語テキスト、ワークブック				1・2・3	1・2・3・4	
	4	カード教材（ピクチャーカード、フラッシュカード等）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	語学学習用ＣＤ				1・2・3	1・2・3・4	
	6	英和辞典、和英辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	国語辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	電子辞書（英和辞典、和英辞典）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	10	ことば絵じてん				1・2・3	1・2・3・4	
	11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				1・2・3	1・2・3・4	
	12	絵本（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	13	紙芝居（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	14	写真（人物、場所、活動場面等）				1・2・3	1・2・3・4	
	15	動画（活動場面、人物、場所等）				1・2・3	1・2・3・4	
	16	カレンダー				1・2・3	1・2・3・4	
	17	絵日記（スケッチブックの記録等を含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	18	新聞				1・2・3	1・2・3・4	
	19	広告、チラシ、ポスター				1・2・3	1・2・3・4	
	20	雑誌				1・2・3	1・2・3・4	
	21	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				1・2・3	1・2・3・4	
	22	手語・字幕付きＤＶＤ ※ 手話のみ、手話と字幕、字幕のみのDVDやビデオを含む				1・2・3	1・2・3・4	
	23	インターネット上のWeb情報				1・2・3	1・2・3・4	
	24	タブレットPCにおけるアプリケーション（ソフトウェア）				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 自作ＤＶＤ（会話場面） 教員が英会話の場面を演じている映像。	課題の提示、反復練習等。生徒が分かりやすいよう、動作、手話、カード等も使いながら、ゆっくりしたペースで映像を撮影している。随時、一時停止して反復したり、考えさせたりしている。	①　・　2	1　・　②　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3

3　英語の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教　材	教材の有無 学校にある	教材の有無 学校にないが個人のものがある	教材の有無 ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
英語	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	2	発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	指文字表（五十音、アルファベット）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	手話表（簡単な手話表現の絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	電子黒板				1・2・3	1・2・3・4	
	6	ＯＨＰ				1・2・3	1・2・3・4	
	7	パソコン（タブレットPCは除く）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	プロジェクター				1・2・3	1・2・3・4	
	9	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	
	10	ＤＶＤプレーヤー				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				1・2・3	1・2・3・4	

	12	実物投影機				１・２・３	１・２・３・４	
	13	デジタルカメラ				１・２・３	１・２・３・４	
	14	デジタルビデオカメラ				１・２・３	１・２・３・４	
	15	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				１・２・３	１・２・３・４	
	16	放送機器				１・２・３	１・２・３・４	
	17	個人用ＦＭ等システム				１・２・３	１・２・３・４	
	18	音声記号図(日本語、英語)、調音部位図				１・２・３	１・２・３・４	
	19	母音図（口形を表した図や絵）				１・２・３	１・２・３・４	
	20	キューサイン表（発音サインも含む）				１・２・３	１・２・３・４	
	21	タブレットPC				１・２・３	１・２・３・４	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	活用場面	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 文型カード（英文、発音はカタカナ、意味は日本語表記）	学習の開始、終了の挨拶で使う。毎回使う挨拶ややりとりの言い回しのパターンですでに学習したものは、文型カードにして掲示しておく。	① ・ ２	１ ・ ② ・ ３
		１ ・ ２	１ ・ ２ ・ ３
		１ ・ ２	１ ・ ２ ・ ３

４　英語の授業の学習評価で活用している教材（単元別テスト、単語テスト等）について、お尋ねします。

次の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教　材	活用の状況 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
英語	1	市販のテスト（単元別テスト、単語テスト等）	１　・　２　・　３

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1　いつも、活用している 2　時々、活用している 3　活用していない
例 自作テスト	単元のまとめのテストで使う。教科書で扱う内容を精選しているため、指導内容に合わせて設問を作成している。	1　・　②　・　3
		1　・　2　・　3
		1　・　2　・　3

5　英語の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法
例 外国の暮らしと英会話を撮影した動画（ＢＧＭが無く、手話と字幕付きが良い）	外国の暮らしや文化を知る活動で使いたい。ＢＧＭが無い又は調整できると良い。できれば、1場面が短く、繰り返し何度も見られるようにすると、話し合いがしやすい。

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）	TEL 046-839-6847	E-mail	harada@nise.go.jp
定岡　孝治	TEL 046-839-6880	E-mail	sadaoka@nise.go.jp
山本　　晃	TEL 046-839-6875	E-mail	yamamoto@nise.go.jp
新谷　洋介	TEL 046-839-6884	E-mail	araya@nise.go.jp

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－中学部　自立活動担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**中学部自立活動担当或いは指導をしている先生方（本務職員の方）２名**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。回答結果については、回答者個人や学校が特定できないよう統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

１記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（１）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）小学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）中学部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　中学部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
③	中学部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（２）　あなたが、いつも授業をされている生徒の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年	（　）第２学年	（　）第３学年	（　）重複障害学級
※ 重複障害学級の場合、在籍生徒の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年			

（３）　先生が、自立活動の授業をされている一番多い人数の学習グループの生徒数をお教えください。

（　　）名

２　自立活動の授業で活用している副読本、語句の意味を確認するための教材、指導内容を説明するための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（１）　あなたが自立活動の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　　）聴覚口話　（　　）手話付きスピーチ　（　　）日本手話　（　　）筆談　（　　）キュードスピーチ　（　　）指文字　（　　）その他

※　コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等　→　下表の備考欄にお書きください

（２）あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　　）その他

（３）　下の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
自立活動	1	聾学校用教科書（小学部用、中学部用）				１・２・３	１・２・３・４	
	2	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆国語☆☆☆☆）				１・２・３	１・２・３・４	
	3	附則の９条本（旧１０７条本）				１・２・３	１・２・３・４	
	4	日本語指導用教材（教科書、問題集）				１・２・３	１・２・３・４	

2/6（中・自）

	5	市販のワークブック（言語事項に関するもの）				1・2・3	1・2・3・4	
	6	国語辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	漢和辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	10	ことわざ辞典（外来語辞典、ことば使い分け辞典等）				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ことば絵じてん				1・2・3	1・2・3・4	
	12	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				1・2・3	1・2・3・4	
	13	絵本（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	14	紙芝居（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	15	なぞなぞ（言葉遊び、言葉に関するゲーム本等）				1・2・3	1・2・3・4	
	16	カルタ、百人一首				1・2・3	1・2・3・4	
	17	絵カード（ことば絵カード、文絵カード）				1・2・3	1・2・3・4	
	18	写真（人物、場所、活動場面等）				1・2・3	1・2・3・4	
	19	カレンダー				1・2・3	1・2・3・4	
	20	絵日記（スケッチブックの記録等を含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	21	新聞				1・2・3	1・2・3・4	
	22	広告、チラシ、ポスター				1・2・3	1・2・3・4	
	23	雑誌				1・2・3	1・2・3・4	
	24	音素材用PCソフト、CD				1・2・3	1・2・3・4	
	25	耳の構造図（掛図、模型等）				1・2・3	1・2・3・4	
	26	補聴器、イヤモールド、チューブ				1・2・3	1・2・3・4	
	27	補聴器点検用具				1・2・3	1・2・3・4	
	28	発音・発語指導用具				1・2・3	1・2・3・4	
	29	楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）				1・2・3	1・2・3・4	
	30	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				1・2・3	1・2・3・4	
	31	手話・字幕付きＤＶＤ ※　手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				1・2・3	1・2・3・4	
	32	デジタルカメラ（撮影した写真や動画）				1・2・3	1・2・3・4	
	33	デジタルビデオカメラ（撮影した動画）				1・2・3	1・2・3・4	
	34	インターネット上のWeb情報				1・2・3	1・2・3・4	
	35	タブレットPCにおけるアプリケーション（ソフトウェア）				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 ４コマ漫画本	言語指導（文脈の把握、場に合った表現等）で使う。吹き出しの一部台詞を消した４コマ漫画をワークシートにして提示し、登場人物の発言や行動の意図を考えさせたり、どのような表現が合っているかを考えさせたりする。	① ・ 2	1 ・ ② ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

３　自立活動の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無 学校にある	教材の有無 学校にないが個人のものがある	教材の有無 ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
自立活動	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	2	発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	漢字表（カタカナ、ローマ字も含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	指文字表				1・2・3	1・2・3・4	
	5	手話表（簡単な手話表現の絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	6	電子黒板				1・2・3	1・2・3・4	
	7	ＯＨＰ				1・2・3	1・2・3・4	
	8	パソコン、プロジェクター（タブレットPCは除く）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	

	10	ＤＶＤプレーヤー				１・２・３	１・２・３・４	
	11	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				１・２・３	１・２・３・４	
	12	実物投影機				１・２・３	１・２・３・４	
	13	デジタルカメラ				１・２・３	１・２・３・４	
	14	デジタルビデオカメラ				１・２・３	１・２・３・４	
	15	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				１・２・３	１・２・３・４	
	16	放送機器				１・２・３	１・２・３・４	
	17	個人用ＦＭ等システム				１・２・３	１・２・３・４	
	18	ひらがなカード（文字、単語）				１・２・３	１・２・３・４	
	19	音声記号図、調音部位図				１・２・３	１・２・３・４	
	20	母音図（口形を表した図や絵）				１・２・３	１・２・３・４	
	21	キューサイン表（発音サインも含む）				１・２・３	１・２・３・４	
	22	カードリーダー				１・２・３	１・２・３・４	
	23	タブレットPC				１・２・３	１・２・３・４	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1　よく使う 2　時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
		１　・　２	１　・　２　・　３
		１　・　２	１　・　２　・　３
		１　・　２	１　・　２　・　３

４　自立活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

6 / 6（中・自）

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－高等部　国語科担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**高等部国語担当の先生方（本務職員の方）２名**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。

回答結果については、回答者個人や学校が特定できないよう統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

１記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（1）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）中学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）高等部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　高等部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
	高等部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担　当	（　）学級担任　（　）副担任　（　）学年所属　（　）学部所属　（　）その他

（2）　あなたが、いつも授業をされている生徒の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年	（　）第２学年	（　）第３学年	（　）重複障害学級
※ 重複障害学級の場合、在籍生徒の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年			

（3） あなたが、国語の授業をされている一番多い人数の学習グループの生徒数をお教えください。

（　　）名

（4） 中学部の国語の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程　（　）自立活動主の教育課程

これから、国語の授業や教材等について、お尋ねします。

先生が受け持っている国語の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（国語の授業で一番多い人数の学習グループの場合についてお答えください。）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程

2 国語科の授業で活用している教科書や副読本、語句の意味を確認するための教材、指導内容を説明するための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1） あなたが国語科の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話（　）手話付きスピーチ（　）日本手話（　）筆談（　）キュードスピーチ（　）指文字（　）その他

※ コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等 → 下表の備考欄にお書きください

（2）あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（３） 下の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の状況	活用の頻度	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	１ よく使う ２ 時々使う ３ 使わない	１ そのまま活用している ２ 手を加えて活用している ３ 自作したものを活用している ４ 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
国語科	1	検定教科書				１・２・３	１・２・３・４	
	2	要学校用教科書（中学部言語、小学部用）				１・２・３	１・２・３・４	
	3	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆国語☆☆☆☆）				１・２・３	１・２・３・４	
	4	附則の９条本（旧１０７条本）				１・２・３	１・２・３・４	
	5	電子教科書（検定教科書対応）				１・２・３	１・２・３・４	
	6	市販のワークブック、漢字ドリル				１・２・３	１・２・３・４	
	7	日本語指導用教材（教科書、問題集）				１・２・３	１・２・３・４	
	8	国語辞典、漢和辞典（紙媒体）				１・２・３	１・２・３・４	
	9	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）				１・２・３	１・２・３・４	
	10	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				１・２・３	１・２・３・４	
	11	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				１・２・３	１・２・３・４	
	12	写真（人物、場所、活動場面等）				１・２・３	１・２・３・４	
	13	動画（ビデオカメラで撮影したもの）				１・２・３	１・２・３・４	
	14	カレンダー				１・２・３	１・２・３・４	
	15	掛け図				１・２・３	１・２・３・４	
	16	新聞				１・２・３	１・２・３・４	
	17	広告、チラシ、ポスター				１・２・３	１・２・３・４	
	18	雑誌				１・２・３	１・２・３・４	
	19	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				１・２・３	１・２・３・４	
	20	手話・字幕付きＤＶＤ ※ 手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				１・２・３	１・２・３・４	
	21	インターネット上のWeb情報				１・２・３	１・２・３・４	
	22	タブレットPCにおけるアプリケーション（ソフトウェア）				１・２・３	１・２・３・４	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 短編小説、エッセイ、随筆等（単行本、雑誌等から）	単元の補助教材又は発展教材として取り上げる。生徒の実態から、教科書の題材が難しすぎる場合、同様の内容・程度で補助教材として平易な表現や短い題材を使用する。 或いは、教科書の題材を扱った後、発展教材として提示する。	1 ・ ②	1 ・ ② ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

3 国語科の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無 学校にある	教材の有無 学校にないが個人のものがある	教材の有無 ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
国語科	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	2	発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	3	漢字表・漢字カード（カタカナ、ローマ字も含む）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	4	指文字表・指文字カード				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	5	手話表（簡単な手話表現の絵）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	6	電子黒板				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	7	ＯＨＰ				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	
	8	パソコン、プロジェクター（タブレットPCは除く）				1 ・ 2 ・ 3	1・2・3・4	

9	地上デジタル対応テレビ				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
10	ＤＶＤプレーヤー				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
11	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
12	実物投影機				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
13	デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
14	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
15	個人用ＦＭ等システム				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
16	音声記号図、調音部位図				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
17	母音図（口形を表した図や絵）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
18	キューサイン表（発音サインも含む）				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４
19	タブレットPC				１ ・ ２ ・ ３	１・２・３・４

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 移動用ホワイトボード	板書は教室の黒板にし、教科書の文章（拡大したもの）や参考とする図や絵等をホワイトボードに掲示する。	① ・ ２	① ・ ２ ・ ３
		１ ・ ２	１ ・ ２ ・ ３
		１ ・ ２	１ ・ ２ ・ ３

４　国語科の授業の学習評価で活用している教材（単元別テスト、漢字や言語事項のテスト等）について、お尋ねします。

次の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等	教材		活用の頻度 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
国語	1	市販のテスト（単元別、漢字、言語事項）	１　・　２　・　３

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
例 自作テスト	単元のまとめのテストで使う。教科書で扱う内容を精選しているため、指導内容に合わせて設問を作成している。	１　・　②　・　３
		１　・　２　・　３
		１　・　２　・　３

５　国語科の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

7/7（高・国）

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－高等部　数学担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**高等部数学担当の先生方（本務職員の方）２名**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。

回答結果については、回答者個人や学校が特定できないよう統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

１記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（1）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）中学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）高等部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　高等部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
	高等部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（2）　あなたが、いつも授業をされている生徒の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年　（　）第２学年　（　）第３学年　（　）重複障害学級	
※ 重複障害学級の場合、在籍生徒の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年	

（3）あなたが、数学の授業をされている一番多い人数の学習グループの生徒数をお教えください。

（　　）名

（4）中学部の数学の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程　（　）自立活動主の教育課程

これから、数学の授業や教材等について、お尋ねします。

先生が受け持っている数学の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（数学の授業で一番多い人数の学習グループの場合についてお答えください。）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程

2　数学の授業で活用している教科書や副読本、語句の意味を確認するための教材、指導内容を説明するための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1）　あなたが数学の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話（　）手話付きスピーチ（　）日本手語（　）筆談（　）キュードスピーチ（　）指文字（　）その他

※　コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手語：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等　→　下表の備考欄にお書きください

（2）あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（3） 下の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
数学	1	検定教科書				1・2・3	1・2・3・4	
	2	文部科学省著作教科書（知的障害者用さんすう☆～☆☆☆数学☆☆☆☆）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	附則の９条本（旧１０７条本）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	電子教科書（検定教科書対応）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	市販の問題集				1・2・3	1・2・3・4	
	6	数学辞典・漢和辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	電子辞書（数学辞典、漢和辞典）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				1・2・3	1・2・3・4	
	10	写真（人物、場所、活動場面等）				1・2・3	1・2・3・4	
	11	動画（ビデオカメラで撮影したもの）				1・2・3	1・2・3・4	
	12	カレンダー				1・2・3	1・2・3・4	
	13	絵日記（スケッチブックの記録等を含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	14	新聞				1・2・3	1・2・3・4	
	15	広告、チラシ、ポスター				1・2・3	1・2・3・4	
	16	雑誌（幼児・生徒向け、その他）				1・2・3	1・2・3・4	
	17	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				1・2・3	1・2・3・4	
	18	手話・字幕付きＤＶＤ ※ 手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				1・2・3	1・2・3・4	
	19	インターネット上の Web 情報				1・2・3	1・2・3・4	
	20	タブレット PC におけるアプリケーション（ソフトウェア）				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 自作の絵カード又は図	問題文の提示で活用する。 日常生活や社会生活でなじみのある数学的事象を絵や図にしておく。問題文を提示する際、情景図として添え、生徒がイメージしやすくする。	1 ・ ②	1 ・ ② ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

3 数学の授業で活用する機器（発表や表示等で活用するもの、教具）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無 学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
数学	1	黒板（短冊黒板、小黒板、方眼、時計等）				1・2・3	1・2・3・4	
	2	発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	模造紙、画用紙				1・2・3	1・2・3・4	
	4	かけ算九九表				1・2・3	1・2・3・4	
	5	かずの表（幼児・低学年用）				1・2・3	1・2・3・4	
	6	指文字表（数字の表現等）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	手話表（簡単な手話表現の絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	数字カード（絵カードも含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	模型・おもちゃ（時計、お金等）				1・2・3	1・2・3・4	
	10	電子黒板				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ＯＨＰ				1・2・3	1・2・3・4	

	12	パソコン(タブレットPCは除く)				1・2・3	1・2・3・4	
	13	プロジェクター				1・2・3	1・2・3・4	
	14	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	
	15	ＤＶＤプレーヤー				1・2・3	1・2・3・4	
	16	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				1・2・3	1・2・3・4	
	17	実物投影機				1・2・3	1・2・3・4	
	18	*デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ*				1・2・3	1・2・3・4	
	19	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				1・2・3	1・2・3・4	
	20	個人用ＦＭ等システム				1・2・3	1・2・3・4	
	21	電卓（電子卓上計算機）				1・2・3	1・2・3・4	
	22	音声記号図、調音部位図				1・2・3	1・2・3・4	
	23	母音図（口形を表した図や絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	24	キューサイン表(発音サインも含む)				1・2・3	1・2・3・4	
	25	タブレットPC				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 移動用ホワイトボード	板書は教室の黒板にし、教科書の文章（拡大したもの）や参考とする図や絵等をホワイトボードに掲示する。	① ・ 2	① ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

４　数学の授業の学習評価で活用している教材（単元別テスト、計算テスト等）について、お尋ねします。

次の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等	教材		活用の状況 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
数学	1	市販のテスト（単元別、計算、文章題等）	1　・　2　・　3

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 １　いつも、活用している ２　時々、活用している ３　活用していない
例 自作テスト	単元のまとめのテストで使う。教科書で扱う内容を精選しているため、指導内容に合わせて設問を作成している。	1　・　②　・　3
		1　・　2　・　3
		1　・　2　・　3

５　数学の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－高等部　外国語担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、**高等部外国語担当の先生方（本務職員の方）２名**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。回答結果については、回答者個人や学校が特定できないよう統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

１記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（１）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）中学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）高等部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　高等部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
③	高等部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（２）　あなたが、いつも授業をされている生徒の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年	（　）第２学年	（　）第３学年	（　）重複障害学級	
※ 重複障害学級の場合、在籍生徒の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年				

（3） あなたが、外国語の授業をされている一番多い人数の学習グループの生徒数をお教えください。

（　　）名

（4）高等部の外国語の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程　（　）自立活動主の教育課程

これから、外国語の授業や教材等について、お尋ねします。

先生が受け持っている外国語の教育課程は、どのようになっていますか。当てはまるものに○をつけてください。（外国語の授業で一番多い人数の学習グループの場合についてお答えください。）

（　）準ずる教育課程　（　）下学年適応の教育課程　（　）知的代替の教育課程

2 外国語で活用している教科書や副読本、指導内容を説明するための教材、情報保障のための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1） 先生が外国語の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話（　）手話付きスピーチ（　）日本手話（　）筆談（　）キュードスピーチ（　）指文字（　）その他

※ コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等 → 下表の備考欄にお書きください

（2）あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（３） 下の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
外国語	1	検定教科書				1・2・3	1・2・3・4	
	2	教授用掛図(発音図表、英語版世界地図等)				1・2・3	1・2・3・4	
	3	市販の英語テキスト、ワークブック				1・2・3	1・2・3・4	
	4	カード教材(ピクチャーカード、フラッシュカード等)				1・2・3	1・2・3・4	
	5	語学学習用CD				1・2・3	1・2・3・4	
	6	英和辞典、和英辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	外国語辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	電子辞書（英和辞典、和英辞典）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	10	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				1・2・3	1・2・3・4	
	11	写真（人物、場所、活動場面等）				1・2・3	1・2・3・4	
	12	動画（活動場面、人物、場所等）				1・2・3	1・2・3・4	
	13	カレンダー				1・2・3	1・2・3・4	
	14	日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	15	新聞				1・2・3	1・2・3・4	
	16	広告、チラシ、ポスター				1・2・3	1・2・3・4	
	17	雑誌（幼児・生徒向け、その他）				1・2・3	1・2・3・4	
	18	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				1・2・3	1・2・3・4	
	19	手話・字幕付きＤＶＤ ※ 手話のみ、手話と字幕、字幕のみのDVDやビデオを含む				1・2・3	1・2・3・4	
	20	インターネット上のWeb情報				1・2・3	1・2・3・4	
	21	タブレットPCにおけるアプリケーション（ソフトウェア）				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 自作ＤＶＤ（会話場面） 教員が英会話の場面を演じている映像	課題の提示、文脈の理解を促す場面	①　・　2	①　・　2　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3
		1　・　2	1　・　2　・　3

3　外国語の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、お尋ねします。

下の表に挙げた教材の物と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無 学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	備考 その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
外国語	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	2	発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	指文字表（五十音、アルファベット）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	手話表（簡単な手話表現の絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	電子黒板				1・2・3	1・2・3・4	
	6	ＯＨＰ				1・2・3	1・2・3・4	
	7	パソコン（タブレットPCは除く）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	プロジェクター				1・2・3	1・2・3・4	
	9	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	
	10	ＤＶＤプレーヤー				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				1・2・3	1・2・3・4	

	12	実物投影機				1・2・3	1・2・3・4	
	13	デジタルカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	14	デジタルビデオカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	15	集団補聴器（FM、赤外線、ループ）				1・2・3	1・2・3・4	
	16	放送機器				1・2・3	1・2・3・4	
	17	FM補聴器				1・2・3	1・2・3・4	
	18	音声記号図（日本語、英語）、調音部位図				1・2・3	1・2・3・4	
	19	母音図（口形を表した図や絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	20	キューサイン表（発音サインも含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	21	タブレットPC				1・2・3	1・2・3・4	

※ その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1 よく使う 2 時々使う	活用の状況 1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している
例 移動用ホワイトボード	板書は教室の黒板にし、教科書の文章（拡大したもの）や参考とする図や絵等をホワイトボードに掲示する。	① ・ 2	① ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3
		1 ・ 2	1 ・ 2 ・ 3

4 英語の授業の学習評価で活用している教材（単元別テスト、単語テスト等）について、お尋ねします。

次の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等	教材		活用の状況 1 いつも、活用している 2 時々、活用している 3 活用していない
英語	1	市販のテスト（単元別テスト、単語テスト等）	1 ・ 2 ・ 3

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1　いつも、活用している 2　時々、活用している 3　活用していない
例 自作テスト	単元のまとめのテストで使う。教科書で扱う内容を精選しているため、指導内容に合わせて設問を作成している。	1　・　②　・　3
		1　・　2　・　3
		1　・　2　・　3

5　外国語の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

7 / 7（高・外）

調査１：特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する調査－高等部　自立活動担当者用－

学 校 名	

このアンケート調査は、高等部**自立活動担当或いは指導をしている先生方（本務職員の方）２名**に記入のご協力をお願いします。

ここでは、教科等の授業で使用する教材とその活用、コミュニケーション手段について回答いただき、特別支援学校（聴覚障害）における教材の活用状況を全国的に把握し、指導上の知見を得る基礎資料とすることを目的としています。回答結果については、回答者個人や学校が特定できないよう統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後に適切に廃棄します。

１記入者と受け持ちの学級のことについて、お尋ねします。

（１）記入者について当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

※　平成２９年５月１日現在でご記入ください。

※　現在の所属校以前に勤務されていた経験も全て含めた年数を記入してください。

例　○○特別支援学校（聴覚障害）中学部に５年、□□特別支援学校（視覚障害）に７年、現在△△特別支援学校（聴覚障害）高等部に４年勤務した場合は、

①　教職経験年数が１６年、②　特別支援学校（聴覚障害）経験年数が９年、③　高等部経験年数が４年となります。

①	教職経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
②	特別支援学校（聴覚障害）経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
	高等部経験年数	（　）０～３年未満　（　）３～６年未満　（　）６～９年未満 （　）９～１２年未満　（　）１２～１５年未満（　）１５～１８年未満 （　）１８～２１年未満（　）２１年以上
④	担　当	（　）学級担任（　）副担任（　）学年所属（　）学部所属（　）その他

（２）　あなたが、いつも授業をされている生徒の学年をお教えください。学級担任の場合は受け持ちの学年を、それ以外は主に担当している学年に○をつけてください。

（　）第１学年　（　）第２学年　（　）第３学年　（　）重複障害学級
※ 重複障害学級の場合、在籍生徒の学年をご記入ください。 例）　第１学年、第３学年

（3）あなたが、自立活動の授業をされている一番多い人数の学習グループの生徒数をお教えください。

（　　）名

2　自立活動の授業で活用している副読本、語句の意味を確認するための教材、指導内容を説明するための教材及びコミュニケーション手段について、お尋ねします。

（1）　先生が自立活動の授業でいつも使用している※コミュニケーション手段について、当てはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

（　）聴覚口話　（　）手話付きスピーチ　（　）日本手話　（　）筆談　（　）キュードスピーチ　（　）指文字　（　）その他

※　コミュニケーション手段：ここでは、授業場面を想定して、以下のように定義します。
- 聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- 手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- 日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- 筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む）
- キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- その他：絵カード、身振り、発音サイン等　→　下表の備考欄にお書きください

（2）あなたが、いつも使用しているコミュニケーション手段について、組織としてどのように決めているのか、当てはまるものに○をつけてください。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があり、担当幼児児童生徒について、そのコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針があるが、担当幼児児童生徒の実態に応じて、実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）学校や学部でコミュニケーション手段について共通した方針はなく、担当幼児児童生徒の実態に応じて、担当教師の裁量で実態に応じたコミュニケーション手段を用いている。

（　）その他

（3） 下の表に挙げた教材の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
自立活動	1	聾学校用国語教科書（小学部用、中学部用 言語）				1・2・3	1・2・3・4	
	2	文部科学省著作教科書（知的障害者用こくご☆～☆☆☆国語☆☆☆☆）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	附則の９条本（旧１０７条本）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	日本語指導用教材（教科書、問題集）				1・2・3	1・2・3・4	
	5	市販のワークブック（言語事項に関するもの）				1・2・3	1・2・3・4	
	6	国語辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	7	漢和辞典（紙媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	8	電子辞書（国語辞典、漢和辞典）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	手話辞典（紙媒体、電子媒体）				1・2・3	1・2・3・4	
	10	ことわざ辞典（外来語辞典、ことば使い分け辞典等）				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ことば絵じてん				1・2・3	1・2・3・4	
	12	図鑑（生活、生き物、乗り物等）				1・2・3	1・2・3・4	
	13	絵本（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	14	紙芝居（行事、物語、説明等）				1・2・3	1・2・3・4	
	15	なぞなぞ（言葉遊び、言葉に関するゲーム本等）				1・2・3	1・2・3・4	
	16	カルタ、百人一首				1・2・3	1・2・3・4	
	17	絵カード（ことば絵カード、文絵カード）				1・2・3	1・2・3・4	
	18	写真（人物、場所、活動場面等）				1・2・3	1・2・3・4	
	19	カレンダー				1・2・3	1・2・3・4	
	20	日記・絵日記（スケッチブックの記録等を含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	21	新聞				1・2・3	1・2・3・4	
	22	広告、チラシ、ポスター				1・2・3	1・2・3・4	
	23	雑誌（幼児・生徒向け、その他）				1・2・3	1・2・3・4	
	24	音素材用 PC ソフト、CD				1・2・3	1・2・3・4	
	25	耳の構造図（掛図、模型等）				1・2・3	1・2・3・4	
	26	補聴器、イヤモールド、チューブ				1・2・3	1・2・3・4	

27	補聴器点検用具				1・2・3	1・2・3・4
28	発音・発語指導用具				1・2・3	1・2・3・4
29	楽器（うちわ太鼓、リズム積み木等）				1・2・3	1・2・3・4
30	ＤＶＤ（テレビ番組、解説等）				1・2・3	1・2・3・4
31	手話・字幕付きＤＶＤ ※　手話のみ、手話と字幕、字幕のみのＤＶＤやビデオを含む				1・2・3	1・2・3・4
32	デジタルカメラ（撮影した写真や動画）				1・2・3	1・2・3・4
33	デジタルビデオカメラ（撮影した動画）				1・2・3	1・2・3・4
34	インターネット上のWeb情報				1・2・3	1・2・3・4
35	タブレットPCにおけるアプリケーション（ソフトウェア）				1・2・3	1・2・3・4

※ その他の教材や自作教材がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法	活用の頻度 1　いつも、活用している 2　時々、活用している 3　活用していない
例 地元聴力障害者協会が発行する機関誌	成人聴覚障害者の活躍場面や社会生活で感じていること等を知る場面。資料として、機関誌の写し又は一部の写しを自作ワークシートに添付して生徒に配布する。	1　・　②　・　3
		1　・　2　・　3
		1　・　2　・　3

３　自立活動の授業で活用する機器（発表や表示するために活用するもの）について、お尋ねします。

下の表に挙げた物の有無と活用について、当てはまるものを１つ選び、○をつけてください。

教科等		教材	教材の有無			活用の頻度	活用の状況	備考
			学校にある	学校にないが個人のものがある	ない	1 よく使う 2 時々使う 3 使わない	1 そのまま活用している 2 手を加えて活用している 3 自作したものを活用している 4 使わない	その他のコミュニケーション手段を使っている場合、お書きください
自立活動	1	黒板（短冊黒板、小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	2	発表板（各生徒が持つホワイトボードや小黒板）				1・2・3	1・2・3・4	
	3	漢字表（カタカナ、ローマ字も含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	4	指文字表				1・2・3	1・2・3・4	
	5	手話表（簡単な手話表現の絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	6	電子黒板				1・2・3	1・2・3・4	
	7	ＯＨＰ				1・2・3	1・2・3・4	
	8	パソコン、プロジェクター（タブレットPCを除く）				1・2・3	1・2・3・4	
	9	地上デジタル対応テレビ				1・2・3	1・2・3・4	
	10	ＤＶＤプレーヤー				1・2・3	1・2・3・4	
	11	ＣＤプレーヤー等オーディオ機器				1・2・3	1・2・3・4	
	12	実物投影機				1・2・3	1・2・3・4	
	13	デジタルカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	14	デジタルビデオカメラ				1・2・3	1・2・3・4	
	15	集団補聴器（ＦＭ、赤外線、ループ）				1・2・3	1・2・3・4	
	16	放送機器				1・2・3	1・2・3・4	
	17	個人用ＦＭ等システム				1・2・3	1・2・3・4	
	18	ひらがなカード（文字、単語）				1・2・3	1・2・3・4	
	19	音声記号図、調音部位図				1・2・3	1・2・3・4	
	20	母音図（口形を表した図や絵）				1・2・3	1・2・3・4	
	21	キューサイン表（発音サインも含む）				1・2・3	1・2・3・4	
	22	カードリーダー				1・2・3	1・2・3・4	
	23	タブレットPC				1・2・3	1・2・3・4	

※　その他の物や自作機器がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法

４　自立活動の授業や学習評価をするために、「このような教材があったら良い。」と思われる物がありましたら、お教えください。

教材名（品名）	場面や活用方法

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

調査２：特別支援学校（聴覚障害）における言語とコミュニケーションに関する実態調査

－幼稚部用－

この調査は、本研究所が平成 24 年度に実施した「聾学校における言語とコミュニケーションに関する実態調査」の経年調査として実施するものです。

幼稚部の主事（主任）の方にご回答をお願いします。

回答結果については、個人や学校が特定できないように統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後、適切に廃棄します。

調査内容

本調査は次の３つの調査から構成されています。

Ⅰ 基本情報

Ⅱ 調査Ａ コミュニケーションの実態に関する調査

目的 特別支援学校（聴覚障害）において、どのようにコミュニケーション手段が選択されているか、教師と幼児児童生徒、幼児児童生徒間でどのようなコミュニケーション手段が使用されているか等のコミュニケーションに関する実態を調査します。

Ⅲ 調査Ｂ 言語及びコミュニケーションの評価法に関する調査

目的 特別支援学校（聴覚障害）では、コミュニケーション、日本語、手話についてどのような評価法が使用されているのかを調査します。

学　校　名	

Ⅰ　基本情報

1　在籍者数等について、下表に当てはまる数字を記入してください。
（平成２９年５月１日現在でご記入ください。）

	第１学年（年少）	第２学年（年中）	第３学年（年長）
(1)学級数	学級	学級	学級
(2)幼児数(重複障害学級を含む各学年の人数)	名	名	名
(3)※重複障害がある幼児数	名	名	名
(4)人工内耳を装用している幼児数	名	名	名
(5)学部の教職員数	名（介助員、支援員等も含む）		
(6) 聴覚障害がある教員数	名（介助員、支援員等も含む）		
(7) 教職員に係る特記事項	例）毎年半数程度の教員が異動している。		

※　ここで言う重複障害とは、学校教育法施行令第２２条の３で規定された障害の程度に該当するもの（視覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱）を指します。

2　学部の指導目標（教育目標）をお教えください。

※　学校要覧等に記載されている目標をお書きください。

Ⅱ　調査Ａ　コミュニケーションの実態に関する調査

ここでは、学部におけるコミュニケーションに関する実態をお尋ねします。

1　コミュニケーション手段の選択や使用について、学部で共通した方針がありますか。
該当するものどちらかに○をつけてください。

（　　）① ある　⇨ それは、どのようなものですか。

（　　）② ない　⇨ どのようにしてコミュニケーション手段の選択を
していますか。

（　　） 学部内で相談をして決めている。
（　　） 担任の判断に任せている。
（　　） 特に決めていない。
（　　） その他（　　）

2　コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項を３つ選択し、
○をつけてください。

（　　）① 生育歴
（　　）② 発達の状態や重複障害の有無
（　　）③ 聴力の程度
（　　）④ 人工内耳の装用
（　　）⑤ 言語力
（　　）⑥ 聴覚障害がある保護者
（　　）⑦ 保護者の希望
（　　）⑧ 学級集団の構成
（　　）⑨ 特にない
（　　）⑩ その他（　　）

3　コミュニケーション手段の選択にかかわる課題を３つ選択し、○をつけてください。

（　　）① 補聴システムの整備
（　　）② 補聴器等の調整、聴覚活用の方法
（　　）③ 教師の手話力
（　　）④ 手話を用いた指導方法、指導内容
（　　）⑤ 重複障害がある幼児
（　　）⑥ 保護者の希望
（　　）⑦ その他（　　）

4　学部の中での※コミュニケーション手段の使用状況についてお尋ねします。

※ コミュニケーション手段：ここでは、以下のように定義します。
聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時に表現するもの
日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
筆談：書きことばによるコミュニケーション
キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
その他：絵カード、身振り、発音サイン等

（1）教師と幼児の間で用いられているコミュニケーション手段のうち、以下の項目に当てはまるもの全てに○をつけてください。また、そのうち主要なものに◎をつけてください（主要なものも複数選択可）。

（　　）① 聴覚口話
（　　）② 手話付きスピーチ
（　　）③ 日本手話
（　　）④ 筆談
（　　）⑤ キュードスピーチ
（　　）⑥ その他（　　）

（2）幼児間で用いられるコミュニケーション手段のうち、以下の項目に当てはまるもの全てに○をつけてください。また、そのうち主要なものに◎をつけてください。
（主要なものも複数選択可）

（　　）① 聴覚口話
（　　）② 手話付きスピーチ
（　　）③ 日本手話
（　　）④ 筆談
（　　）⑤ キュードスピーチ
（　　）⑥ その他（　　）

Ⅲ 調査Ｂ　言語及びコミュニケーションの評価に関する調査

ここでは、以下の３つの※評価について、お尋ねします。

１　コミュニケーションの状況を把握するための評価

２　日本語の言語力の状況を把握するための評価

３　手話の言語力の状況を把握するための評価

※　ここで言う評価とは、市販テスト（発達検査、言語力検査等）、市販されていないが流通・共有されているテストやチェックリスト、自作のテストやチェックリスト及び評価項目、聴力測定等も含みます。

1　コミュニケーションの状況を把握するための評価

コミュニケーションの状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、該当するものに○をつけてください。

例）　語音聴力検査、発音明瞭度検査　等

	1	2	3	4	5
(1) 名称等	**名称**（　）	**名称**（　）	**名称**（　）	**名称**（　）	**名称**（　）
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目　的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）
(3) 実施の範　囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 実施の周　期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(5) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）

(6) コミュニケーションの評価の必要性や課題等をお書きください。

２　日本語の言語力の状況を把握するための評価

日本語の言語力の状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、該当するものに○をつけてください。

例）　絵画語彙検査、読書力診断検査　等

	1	2	3	4	5
(1) 名称等	**名称** （　）	**名称** （　）	**名称** （　）	**名称** （　）	**名称** （　）
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目　的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）
(3) 実施の範 囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 実施の周 期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(5) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）

(6) 日本語の評価の必要性や課題等をお書きください。

３　手話力の状況を把握するための評価

手話力の状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、該当するものに○をつけてください。

例）　日本手話文法テスト（金沢大学版）　等

	1	2	3	4
(1) 名称等	名称	名称	名称	名称
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他
(3) 実施の範囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 評価の内容（複数選択可）	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他
(5) 実施の周期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(6) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由

（7）手話力評価の必要性や課題等をお書きください。

（8）教師の手話力向上のため、評価を用いている場合には、その概要をお書きください。

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp

山本　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

調査２：特別支援学校（聴覚障害）における言語とコミュニケーションに関する実態調査

－小学部用－

この調査は、本研究所が平成 24 年度に実施した「聾学校における言語とコミュニケーションに関する実態調査」の経年調査として実施するものです。

小学部の主事（主任）の方にご回答をお願いします。

回答結果については、個人や学校が特定できないように統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後、適切に廃棄します。

調査内容

本調査は次の３つの調査から構成されています。

Ⅰ 基本情報

Ⅱ 調査Ａ コミュニケーションの実態に関する調査

目的 特別支援学校（聴覚障害）において、どのようにコミュニケーション手段が選択されているか、教師と児童生徒、児童生徒間でどのようなコミュニケーション手段が使用されているか等のコミュニケーションに関する実態を調査します。

Ⅲ 調査Ｂ 言語及びコミュニケーションの評価に関する調査

目的 特別支援学校(聴覚障害）では、コミュニケーション、日本語、手話についてどのような評価が使用されているのかを調査します。

学　校　名	

Ⅰ　基本情報

1　在籍者数等について、下表に当てはまる数字を記入してください。
（平成２９年５月１日現在でご記入ください。）

	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年
(1)学級数	学級	学級	学級	学級	学級	学級
(2)児童数（重複障害学級を含む各学年の人数）	名	名	名	名	名	名
(3)※重複障害がある児童数	名	名	名	名	名	名
(4)人工内耳を装用している児童数	名	名	名	名	名	名
(5)学部の教職員数	名（介助員、支援員等も含む）					
(6) 聴覚障害がある教員数	名（介助員、支援員等も含む）					
(7) 教職員に係る特記事項	例）毎年半数程度の教員が異動している。					

※　ここで言う重複障害とは、学校教育法施行令第２２条の３で規定された障害の程度に該当するもの（視覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱）を指します。

2　学部の指導目標（教育目標）をお教えください。

※　学校要覧等に記載されている目標をお書きください。

Ⅱ　調査Ａ　コミュニケーションの実態に関する調査

ここでは、学部におけるコミュニケーションに関する実態をお尋ねします。

1　コミュニケーション手段の選択や使用について、学部で共通した方針がありますか。
当てはまるものどちらかに○をつけてください。

（　　）① ある　⇨ それは、どのようなものですか。

（　　）② ない　⇨ どのようにしてコミュニケーション手段の選択を
していますか。
（　　） 学部内で相談をして決めている。
（　　） 担任の判断に任せている。
（　　） 特に決めていない。
（　　） その他（　　）

2　コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項を3つ選択し、
○をつけてください。
（　　）① 生育歴
（　　）② 発達の状態や重複障害の有無
（　　）③ 聴力の程度
（　　）④ 人工内耳の装用
（　　）⑤ 言語力
（　　）⑥ 聴覚障害がある保護者
（　　）⑦ 保護者の希望
（　　）⑧ 学級集団の構成
（　　）⑨ 特にない
（　　）⑩ その他（　　）

3　コミュニケーション手段の選択にかかわる課題を3つ選択し、○をつけてください。
（　　）① 補聴システムの整備
（　　）② 補聴器等の調整、聴覚活用の方法
（　　）③ 教師の手話力
（　　）④ 手話を用いた指導方法、指導内容
（　　）⑤ 重複障害がある児童
（　　）⑥ 保護者の希望
（　　）⑦ その他（　　）

4　学部の中での※コミュニケーション手段の使用状況についてお尋ねします。

※ コミュニケーション手段：ここでは、以下のように定義します。
聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時に表現するもの
日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
筆談：書きことばによるコミュニケーション
キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
その他：絵カード、身振り、発音サイン等

（1）教師と児童の間で用いられているコミュニケーション手段のうち、以下の項目に当てはまるもの全てに○をつけてください。また、そのうち主要なものに◎をつけてください（主要なものも複数選択可）。

（　　）① 聴覚口話
（　　）② 手話付きスピーチ
（　　）③ 日本手話
（　　）④ 筆談
（　　）⑤ キュードスピーチ
（　　）⑥ その他（　　）

（2）児童間で用いられるコミュニケーション手段のうち、以下の項目に当てはまるもの全てに○をつけてください。また、そのうち主要なものに◎をつけてください。
（主要なものも複数選択可）

（　　）① 聴覚口話
（　　）② 手話付きスピーチ
（　　）③ 日本手話
（　　）④ 筆談
（　　）⑤ キュードスピーチ
（　　）⑥ その他（　　）

Ⅲ 調査Ｂ　言語及びコミュニケーションの評価に関する調査

ここでは、以下の３つの※評価について、お尋ねします。

１　コミュニケーションの状況を把握するための評価

２　日本語の言語力の状況を把握するための評価

３　手話の言語力の状況を把握するための評価

※　ここで言う評価とは、市販テスト（発達検査、言語力検査等）、市販されていないが流通・共有されているテストやチェックリスト、自作のテストやチェックリスト及び評価項目、聴力測定等も含みます。

1　コミュニケーションの状況を把握するための評価

コミュニケーションの状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、該当するものに○をつけてください。

例）　語音聴力検査、発音明瞭度検査　等

	1	2	3	4	5
(1) 名称等	**名称**	**名称**	**名称**	**名称**	**名称**
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目　的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他
(3) 実施の範 囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 実施の周 期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(5) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由

(6) コミュニケーションの評価の必要性や課題等をお書きください。

２　日本語の言語力の状況を把握するための評価

日本語の言語力の状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、該当するものに○をつけてください。

例）　絵画語彙検査、読書力診断検査　等

	1	2	3	4	5
(1) 名称等	**名称** （　）	**名称** （　）	**名称** （　）	**名称** （　）	**名称** （　）
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目　的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）
(3) 実施の範 囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 実施の周 期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(5) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した児童 選択の理由 （　）

(6) 日本語の評価の必要性や課題等をお書きください。

３　手話力の状況を把握するための評価

手話力の状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、当てはまるものに○をつけてください。

例）　日本手話文法テスト（金沢大学版）　等

	1	2	3	4
(1) 名称等	**名称**	**名称**	**名称**	**名称**
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他
(3) 実施の範囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 評価の内容（複数選択可）	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他
(5) 実施の周期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(6) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年 全員 (　)選択した児童 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年 全員 (　)選択した児童 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年 全員 (　)選択した児童 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年 全員 (　)選択した児童 選択の理由

(7) 手話力評価の必要性や課題等をお書きください。

(8) 教師の手話力向上のため、評価を用いている場合には、その概要をお書きください。

これで終わります。
ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）	TEL 046-839-6847	E-mail harada@nise.go.jp
定岡　孝治	TEL 046-839-6860	E-mail sadaoka@nise.go.jp
山本　　晃	TEL 046-839-6875	E-mail yamamoto@nise.go.jp
新谷　洋介	TEL 046-839-6864	E-mail araya@nise.go.jp

9 / 9 （小）

調査２：特別支援学校（聴覚障害）における言語とコミュニケーションに関する実態調査

－中学部用－

この調査は、本研究所が平成 24 年度に実施した「聾学校における言語とコミュニケーションに関する実態調査」の経年調査として実施するものです。

中学部の主事（主任）の方にご回答をお願いします。

回答結果については、個人や学校が特定できないように統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後、適切に廃棄します。

調査内容

本調査は次の３つの調査から構成されています。

Ⅰ 基本情報

Ⅱ 調査Ａ コミュニケーションの実態に関する調査

目的 特別支援学校（聴覚障害）において、どのようにコミュニケーション手段が選択されているか、教師と生徒児童生徒、生徒児童生徒間でどのようなコミュニケーション手段が使用されているか等のコミュニケーションに関する実態を調査します。

Ⅲ 調査Ｂ 言語及びコミュニケーションの評価に関する調査

目的 特別支援学校(聴覚障害）では、コミュニケーション、日本語、手話についてどのような評価が使用されているのかを調査します。

学　校　名	

Ⅰ　基本情報

1　在籍者数等について、下表に当てはまる数字を記入してください。
（平成２９年５月１日現在でご記入ください。）

	第１学年	第２学年	第３学年
(1)学級数	学級	学級	学級
(2)生徒数(重複障害学級を含む各学年の人数)	名	名	名
(3)※重複障害がある生徒数	名	名	名
(4)人工内耳を装用している生徒数	名	名	名
(5)学部の教職員数	名（介助員、支援員等も含む）		
(6) 聴覚障害がある教員数	名（介助員、支援員等も含む）		
(7) 教職員に係る特記事項	例）毎年半数程度の教員が異動するため、		

※　ここで言う重複障害とは、学校教育法施行令第２２条の３で規定された障害の程度に該当するもの（視覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱）を指します。

2　学部の指導目標（教育目標）をお教えください。

※　学校要覧等に記載されている目標をお書きください。

Ⅱ　調査Ａ　コミュニケーションの実態に関する調査

ここでは、学部におけるコミュニケーションに関する実態をお尋ねします。

1　コミュニケーション手段の選択や使用について、学部で共通した方針がありますか。
当てはまるものどちらかに○をつけてください。

（　　）① ある　⇨ それは、どのようなものですか。

（　　）② ない　⇨ どのようにしてコミュニケーション手段の選択を
していますか。

（　　） 学部内で相談をして決めている。
（　　） 担任の判断に任せている。
（　　） 特に決めていない。
（　　） その他（　　）

2　コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項を３つ選択し、
○をつけてください。

（　　）① 生育歴
（　　）② 発達の状態や重複障害の有無
（　　）③ 聴力の程度
（　　）④ 人工内耳の装用
（　　）⑤ 言語力
（　　）⑥ 聴覚障害がある保護者
（　　）⑦ 保護者の希望
（　　）⑧ 本人の希望
（　　）⑨ 学級集団の構成
（　　）⑩ 特にない
（　　）⑪ その他（　　）

3　コミュニケーション手段の選択にかかわる課題を３つ選択し、○をつけてください。

（　　）① 補聴システムの整備
（　　）② 補聴器等の調整、聴覚活用の方法
（　　）③ 教師の手話力
（　　）④ 手話を用いた指導方法、指導内容
（　　）⑤ 重複障害がある生徒
（　　）⑥ 保護者の希望
（　　）⑦ 本人の希望
（　　）⑧ その他（　　）

4　学部の中での※コミュニケーション手段の使用状況についてお尋ねします。

※ コミュニケーション手段：ここでは、以下のように定義します。
聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時に表現するもの
日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
筆談：書きことばによるコミュニケーション
キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
その他：絵カード、身振り、発音サイン等

（1）教師と生徒の間で用いられているコミュニケーション手段のうち、以下の項目に当てはまるもの全てに○をつけてください。また、そのうち主要なものに◎をつけてください（主要なものも複数選択可）。

（　　）① 聴覚口話
（　　）② 手話付きスピーチ
（　　）③ 日本手話
（　　）④ 筆談
（　　）⑤ キュードスピーチ
（　　）⑥ その他（　　）

（2）生徒間で用いられるコミュニケーション手段のうち、以下の項目に当てはまるもの全てに○をつけてください。また、そのうち主要なものに◎をつけてください。
（主要なものも複数選択可）

（　　）① 聴覚口話
（　　）② 手話付きスピーチ
（　　）③ 日本手話
（　　）④ 筆談
（　　）⑤ キュードスピーチ
（　　）⑥ その他（　　）

Ⅲ 調査Ｂ　言語及びコミュニケーションの評価に関する調査

ここでは、以下の３つの※評価について、お尋ねします。

１　コミュニケーションの状況を把握するための評価

２　日本語の言語力の状況を把握するための評価

３　手話の言語力の状況を把握するための評価

※　ここで言う評価とは、市販テスト（発達検査、言語力検査等）、市販されていないが流通・共有されているテストやチェックリスト、自作のテストやチェックリスト及び評価項目、聴力測定等も含みます。

1　コミュニケーションの状況を把握するための評価

コミュニケーションの状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、該当するものに○をつけてください。

例）　語音聴力検査、発音明瞭度検査　等

	1	2	3	4	5
(1) 名称等	**名称** （　）	**名称** （　）	**名称** （　）	**名称** （　）	**名称** （　）
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目　的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）
(3) 実施の範　囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 実施の周　期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(5) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　）

（6）コミュニケーションの評価の必要性や課題等をお書きください。

２　日本語の言語力の状況を把握するための評価

日本語の言語力の状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、該当するものに○をつけてください。

例）　絵画語彙検査、読書力診断検査　等

	1	2	3	4	5
(1) 名称等	**名称**（　　）	**名称**（　　）	**名称**（　　）	**名称**（　　）	**名称**（　　）
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目　的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　　）
(3) 実施の範 囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 実施の周 期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(5) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した幼児 選択の理由 （　　）

(6) 日本語の評価の必要性や課題等をお書きください。

３　手話力の状況を把握するための評価

手話力の状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、当てはまるものに〇をつけてください。

例）　日本手話文法テスト（金沢大学版）　等

	1	2	3	4
(1) 名称等	**名称**	**名称**	**名称**	**名称**
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他
(3) 実施の範囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 評価の内容（複数選択可）	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他
(5) 実施の周期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(6) 対象者	(　)全員 (　)決まった学年 全員 (　)選択した生徒 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年 全員 (　)選択した生徒 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年 全員 (　)選択した生徒 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年 全員 (　)選択した生徒 選択の理由

（7）手話力評価の必要性や課題等をお書きください。

（8）教師の手話力向上のため、評価を用いている場合には、その概要をお書きください。

これで終わります。
ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail　harada@nise.go.jp
定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail　sadaoka@nise.go.jp
山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail　yamamoto@nise.go.jp
新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail　araya@nise.go.jp

調査２：特別支援学校（聴覚障害）における言語とコミュニケーションに関する実態調査

－高等部用－

この調査は、本研究所が平成 24 年度に実施した「聾学校における言語とコミュニケーションに関する実態調査」の経年調査として実施するものです。

高等部の主事（主任）の方にご回答をお願いします。

回答結果については、個人や学校が特定できないように統計的な処理をします。また、回答いただいた調査票は、鍵付きロッカーに適切に管理し、研究終了後は一定の期間を経た後、適切に廃棄します。

調査内容

本調査は次の３つの調査から構成されています。

Ⅰ 基本情報

Ⅱ 調査Ａ コミュニケーションの実態に関する調査

目的 特別支援学校（聴覚障害）において、どのようにコミュニケーション手段が選択されているか、教師と生徒児童生徒、生徒児童生徒間でどのようなコミュニケーション手段が使用されているか等のコミュニケーションに関する実態を調査します。

Ⅲ 調査Ｂ 言語及びコミュニケーションの評価に関する調査

目的 特別支援学校(聴覚障害）では、コミュニケーション、日本語、手話についてどのような評価が使用されているのかを調査します。

学　校　名	

Ⅰ　基本情報

1　在籍者数等について、下表に当てはまる数字を記入してください。
（平成２９年５月１日現在でご記入ください。）

	第１学年	第２学年	第３学年
(1)学級数	学級	学級	学級
(2)生徒数(重複障害学級を含む各学年の人数)	名	名	名
(3)※重複障害がある生徒数	名	名	名
(4)人工内耳を装用している生徒数	名	名	名
(5)学部の教職員数	名（介助員、支援員等も含む）		
(6) 聴覚障害がある教員数	名（介助員、支援員等も含む）		
(7) 教職員に係る特記事項	例）毎年半数程度の教員が異動している。		

※　ここで言う重複障害とは、学校教育法施行令第２２条の３で規定された障害の程度に該当するもの（視覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱）を指します。

2　学部の指導目標（教育目標）をお教えください。

※　学校要覧等に記載されている目標をお書きください。

Ⅱ　調査Ａ　コミュニケーションの実態に関する調査

ここでは、学部におけるコミュニケーションに関する実態をお尋ねします。

1　コミュニケーション手段の選択や使用について、学部で共通した方針がありますか。
当てはまるものどちらかに○をつけてください。

（　　）① ある　⇨ それは、どのようなものですか。

（　　）② ない　⇨ どのようにしてコミュニケーション手段の選択をしていますか。

（　　） 学部内で相談をして決めている。
（　　） 担任の判断に任せている。
（　　） 特に決めていない。
（　　） その他（　　）

2　コミュニケーション手段を選択する際に、特に重視している事項を３つ選択し、○をつけてください。

（　　）① 生育歴
（　　）② 発達の状態や重複障害の有無
（　　）③ 聴力の程度
（　　）④ 人工内耳の装用
（　　）⑤ 言語力
（　　）⑥ 聴覚障害がある保護者
（　　）⑦ 保護者の希望
（　　）⑧ 本人の希望
（　　）⑨ 学級集団の構成
（　　）⑩ 特にない
（　　）⑪ その他（　　）

3　コミュニケーション手段の選択にかかわる課題を３つ選択し、○をつけてください。

（　　）① 補聴システムの整備
（　　）② 補聴器等の調整、聴覚活用の方法
（　　）③ 教師の手話力
（　　）④ 手話を用いた指導方法、指導内容
（　　）⑤ 重複障害がある生徒
（　　）⑥ 保護者の希望
（　　）⑦ 本人の希望
（　　）⑧ その他（　　）

4　学部の中での※コミュニケーション手段の使用状況についてお尋ねします。

※ コミュニケーション手段：ここでは、以下のように定義します。
聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
手話付きスピーチ：発話を主として日本語コードの手話を同時に表現するもの
日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
筆談：書きことばによるコミュニケーション
キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
その他：絵カード、身振り、発音サイン等

（1）教師と生徒の間で用いられているコミュニケーション手段のうち、以下の項目に当てはまるもの全てに○をつけてください。また、そのうち主要なものに◎をつけてください（主要なものも複数選択可）。

（　　）① 聴覚口話
（　　）② 手話付きスピーチ
（　　）③ 日本手話
（　　）④ 筆談
（　　）⑤ キュードスピーチ
（　　）⑥ その他（　　）

（2）生徒間で用いられるコミュニケーション手段のうち、以下の項目に当てはまるもの全てに○をつけてください。また、そのうち主要なものに◎をつけてください。
（主要なものも複数選択可）

（　　）① 聴覚口話
（　　）② 手話付きスピーチ
（　　）③ 日本手話
（　　）④ 筆談
（　　）⑤ キュードスピーチ
（　　）⑥ その他（　　）

Ⅲ 調査Ｂ　言語及びコミュニケーションの評価に関する調査

ここでは、以下の３つの※評価について、お尋ねします。

１　コミュニケーションの状況を把握するための評価

２　日本語の言語力の状況を把握するための評価

３　手話の言語力の状況を把握するための評価

※　ここで言う評価とは、市販テスト（発達検査、言語力検査等）、市販されていないが流通・共有されているテストやチェックリスト、自作のテストやチェックリスト及び評価項目、聴力測定等も含みます。

1　コミュニケーションの状況を把握するための評価

コミュニケーションの状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、該当するものに○をつけてください。

例）　語音聴力検査、発音明瞭度検査　等

	1	2	3	4	5
(1) 名称等	**名称**（　）	**名称**（　）	**名称**（　）	**名称**（　）	**名称**（　）
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目　的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　）
(3) 実施の範　囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 実施の周　期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(5) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由 （　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由 （　）

(6) コミュニケーションの評価の必要性や課題等をお書きください。

２　日本語の言語力の状況を把握するための評価

日本語の言語力の状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、該当するものに○をつけてください。

例）　絵画語彙検査、読書力診断検査　等

	1	2	3	4	5
(1) 名称等	名称	名称	名称	名称	名称
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目　的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他
(3) 実施の範 囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 実施の周 期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(5) 対象児	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由

(6) 日本語の評価の必要性や課題等をお書きください。

３　手話力の状況を把握するための評価

手話力の状況を把握する方法について、自由記述の欄に具体的な内容を記述し、当てはまるものに○をつけてください。

例）　日本手話文法テスト（金沢大学版）　等

	1	2	3	4
(1) 名称等	名称 （　　）	名称 （　　）	名称 （　　）	名称 （　　）
	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作	(　)市販 (　)自作
(2) 活用の目的	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　　）	(　)実態把握 (　)指導に活用 (　)その他 （　　）
(3) 実施の範囲	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施	(　)学部内で実施 (　)学部を超えて実施
(4) 評価の内容（複数選択可）	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他 （　　）	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他 （　　）	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他 （　　）	(　)理解 (　)表現 (　)語彙 (　)日本手話の文法 (　)日本語の文法 (　)その他 （　　）
(5) 実施の周期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期	(　)定期的 年に(　　)回 (　)不定期
(6) 対象者	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由 （　　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由 （　　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由 （　　）	(　)全員 (　)決まった学年全員 (　)選択した生徒 選択の理由 （　　）

(7) 手話力評価の必要性や課題等をお書きください。

(8) 教師の手話力向上のため、評価を用いている場合には、その概要をお書きください。

これで終わります。

ご協力ありがとうございました。

本件に関するご質問等については、下記のいずれかにお問い合わせください。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　聴覚障害教育研究班

原田　公人（研究代表）　TEL 046-839-6847　E-mail harada@nise.go.jp

定岡　孝治　TEL 046-839-6860　E-mail sadaoka@nise.go.jp

山本　　晃　TEL 046-839-6875　E-mail yamamoto@nise.go.jp

新谷　洋介　TEL 046-839-6864　E-mail araya@nise.go.jp

聴覚障害教育における教科指導等の充実に資する教材活用に関する調査

平成２９年度

調査報告書

著作：国立特別支援教育総合研究所

令和２年１月

発行　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
〒239-8585
神奈川県横須賀市野比 5 丁目 1 番 1 号
TEL：046-839-6803
FAX：046-839-6918
http://www.nise.go.jp